岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第525集

川目（かわめ）A遺跡第６次発掘調査報告書

一般国道106号都南川目道路事業関連遺跡発掘調査

２００９

国土交通省東北地方整備局
岩手河川国道事務所
（財）岩手県文化振興事業団

川目A遺跡第6次発掘調査報告書

一般国道106号都南川目道路事業関連遺跡発掘調査

調査区全景（上が南）

調査区全景（西から）

調査区南西部（北から）

調査区西部（北から）

調査区中央部・東部（北から）

RA003（北から※縄文早期中葉）

RA007（西から※縄文前期後葉）

RA017（北東から※縄文中期末葉）

RE002・RE003（西から※中世）

RX001（北東から※縄文中期）

RB001（西から※近世）

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことの出来ない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、一般国道106号都南川目道路工事に関連して、平成19年度に発掘調査を実施した盛岡市川目Ａ遺跡第６次調査の調査成果をまとめたものです。今回の調査では、縄文時代の竪穴住居跡や土取り穴、近世の掘立柱建物跡などが見つかり、縄文時代～近世に亘る集落跡であったことが明らかとなり、北上川中流域における縄文集落の実態を解き明かす貴重な資料を提供することができました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご援助、ご協力を賜りました国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、盛岡市教育委員会を始めとする関係各位に衷心よりの謝意を表します。

平成21年２月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　　武　田　牧　雄

例　　言

1　本書は、岩手県盛岡市川目第５地割51ほかに所在する川目Ａ遺跡第６次調査の発掘調査結果を収録したものである。

2　本遺跡の発掘調査は、一般国道106号都南川目道路工事に伴う事前の緊急発掘調査であり、岩手県教育委員会生涯学習文化課の指導と調整のもとに、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所の委託を受け、㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施したものである。

3　本遺跡の遺跡番号は、ＬＥ28－0151、遺跡略号はＹＫＡ－07－06である。

4　野外調査の期間・調査面積・担当者は、以下の通りである。

平成19年４月10日～11月29日／11,472㎡／星　雅之・菅野紀子・藤原大輔

5　室内整理期間・担当者は、以下の通りである。

平成19年５月１日～平成20年３月31日／星　雅之・菅野紀子

6　業務委託は、以下の機関・個人に委託した。

基準点設置：㈱北日本朝日航洋
航空写真：㈱東邦航空
デジタル遺構図化：㈱ラング
石器・石製品の実測図化：㈱ラング
石器・石製品の石材鑑定：花崗岩研究会
琥珀の分析：㈱元興寺文化財研究所
炭化材樹種同定：岩手県木炭協会
火山灰分析：㈱火山灰考古学研究所
放射性炭素年代測定：㈱加速器分析研究所
胎土分析：㈱パリノ・サーヴェイ
黒曜石の原材産地分析：㈱パリノ・サーヴェイ
金属製品の保存処理：㈱ＪＦＥテクノリサーチ

7　本報告書の編集・執筆は、星　雅之と菅野紀子が行なった。

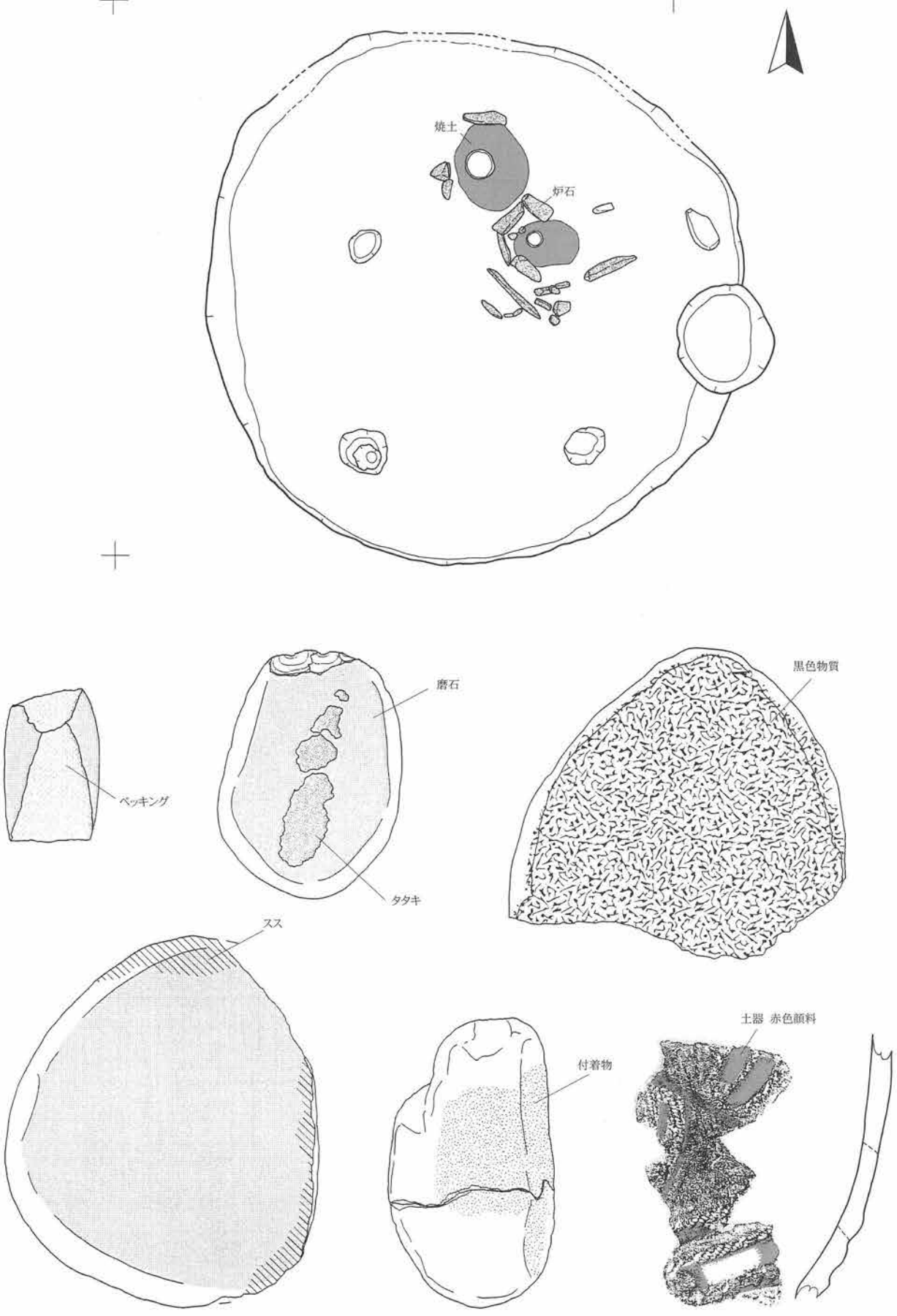
8　土層の色調は、『標準土色帳』（農林水産省農林技術会議局監修）に準拠した。

9　調査および室内整理に際しては次の方々、機関に御指導・御協力を賜った。（順不同・敬称略）
安達尊伸（田野畑村教育委員会）、井上雅孝（滝沢村埋蔵文化財センター）、鎌田裕二（宮古市教育委員会）、川向聖子（山田町教育委員会）、菅　常久（岩手県教育委員会）、菅野智則（東北大学）、神原雄一郎・室野秀文・佐々木亮二（盛岡市遺跡の学び館）、今野公顕（盛岡市教育委員会）、斎藤邦雄（岩手県教育委員会）、菅原哲文（財団法人山形県埋蔵文化財センター）、高田和徳（一戸町御所野縄文館）、茅野嘉雄（青森県埋蔵文化財センター）、盛岡市教育委員会、横山　真（株式会社ラング）

10　これまでに、調査成果の一部を現地説明会資料、調査略報、岩手考古学会研究大会で公表しているが、本書と記載事項が異なる場合はすべて本書が優先する。

11　発掘調査に伴う出土遺物および諸記録は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

凡　例



目　　次

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1

Ⅱ　遺跡の立地・環境 …… 1
1　地理的環境 …… 1
2　遺跡周辺の歴史的環境 …… 7
3　基本層序 …… 11
4　各調査区の土層堆積様相と調査で判明した旧地形について …… 13

Ⅲ　調査方法と整理方法 …… 18
1　野外調査 …… 18
2　室内整理 …… 20

Ⅳ　検出された遺構 …… 27
1　竪穴住居跡 …… 27
2　掘立柱建物跡 …… 39
3　土　　坑 …… 42
4　竪穴建物跡 …… 65
5　焼土・炉跡 …… 66
6　集石・立石 …… 68
7　埋設土器 …… 77
8　土取り穴 …… 78
9　柱穴状土坑 …… 82
10　捨て場 …… 83

Ⅴ　出土遺物 …… 157
1　縄文土器・弥生土器 …… 157
2　土製品 …… 170
3　石　　器 …… 172
4　石製品 …… 182
5　古代の土器 …… 184

6　石　　鉢 ……184
7　陶器・陶磁器 ……184
8　金　属　製　品 ……184
9　琥　　珀 ……185

Ⅵ　自然科学分析 ……285
1　川目A遺跡第６次調査出土琥珀の自然科学分析 ……286
2　川目A遺跡第６次調査出土火山灰分析鑑定 ……292
3　放射性炭素年代測定結果（AMS測定） ……299
4　川目A遺跡出土黒曜石の成分分析 ……314
5　川目A遺跡第６次調査区出土縄文土器および粘土の胎土分析 ……318
6　分析に関する調査担当者の所見（コメント） ……336

Ⅶ　総　　括 ……340
1　調査区毎の概要 ……340
2　遺　　構 ……341
3　遺　　物 ……345
4　全体のまとめ ……349
報告書抄録 ……481

図版目次

第１図　岩手県における遺跡の位置……2
第２図　遺跡位置図……3
第３図　地形分類図……5
第４図　川目Ａ遺跡第６次調査位置図……6
第５図　周辺の遺跡……8
第６図　基本土層……12
第７図　グリッド配置図……15
第８図　トレンチ位置図……16
第９図　遺構配置図……22
第10図　南西部遺構配置図……23
第11図　西部遺構配置図……24
第12図　中央部遺構配置図……25
第13図　東部遺構配置図……26
第14図　ＲＡ003竪穴住居跡 ……86
第15図　ＲＡ004竪穴住居跡 ……87
第16図　ＲＡ005竪穴住居跡 ……88
第17図　ＲＡ006竪穴住居跡 ……89
第18図　ＲＡ007竪穴住居跡 ……90
第19図　ＲＡ008竪穴住居跡 ……91
第20図　ＲＡ009竪穴住居跡（１） ……92
第21図　ＲＡ009竪穴住居跡（２） ……93
第22図　ＲＡ010竪穴住居跡（１） ……94
第23図　ＲＡ010竪穴住居跡（２） ……95
第24図　ＲＡ010竪穴住居跡（３） ……96

第25図　ＲＡ011竪穴住居跡（１）……97
第26図　ＲＡ011竪穴住居跡（２）……98
第27図　ＲＡ012竪穴住居跡……99
第28図　ＲＡ013竪穴住居跡……100
第29図　ＲＡ014～016竪穴住居跡……101
第30図　ＲＡ017竪穴住居跡（１）……102
第31図　ＲＡ017竪穴住居跡（２）……103
第32図　ＲＢ001掘立柱建物跡（１）……104
第33図　ＲＢ002掘立柱建物跡（１）……105
第34図　ＲＢ003掘立柱建物跡（１）……106
第35図　ＲＢ004掘立柱建物跡……107
第36図　ＲＢ001掘立柱建物跡（２）……108
第37図　ＲＢ002・003掘立柱建物跡（２）……109
第38図　ＲＤ103～106土坑……110
第39図　ＲＤ107～111土坑……111
第40図　ＲＤ112～118土坑……112
第41図　ＲＤ119～122土坑……113
第42図　ＲＤ123～130土坑……114
第43図　ＲＤ131～136土坑……115
第44図　ＲＤ137～139土坑……116
第45図　ＲＤ140～153土坑……117
第46図　ＲＤ140～143・148・151土坑……118
第47図　ＲＤ146・147・149・152～155土坑……119
第48図　ＲＤ156～159土坑……120
第49図　ＲＤ160～163土坑……121
第50図　ＲＥ002竪穴建物跡……122
第51図　ＲＥ003竪穴建物跡（１）……123
第52図　ＲＥ003竪穴建物跡（２）・
　　ＲＦ001～003焼土……124
第53図　ＲＦ004～010焼土・炉跡……125
第54図　ＲＨ033～036立石・集石……126
第55図　ＲＨ037～040集石……127
第56図　ＲＨ041～043集石……128
第57図　ＲＨ044～046集石……129
第58図　ＲＨ047集石……130
第59図　ＲＨ048・049集石……131
第60図　ＲＨ050・051集石……132
第61図　ＲＰ006・007埋設土器……133
第62図　ＲＸ001土取り穴……134
第63図　ＲＸ002・003土取り穴（１）……135
第64図　ＲＸ002・003土取り穴（２）……136
第65図　ＲＸ004～007土取り穴……137
第66図　ＲＸ005・007土取り穴……138
第67図　西部柱穴状土坑……139
第68図　中央部柱穴状土坑……140
第69図　東部柱穴状土坑（１）……141
第70図　東部柱穴状土坑（２）……142
第71図　東部柱穴状土坑（３）……143
第72図　中央部捨て場（１）……144
第73図　中央部捨て場（２）……145
第74図　遺構内出土土器（１）……186
第75図　遺構内出土土器（２）……187
第76図　遺構内出土土器（３）……188
第77図　遺構内出土土器（４）……189
第78図　遺構内出土土器（５）……190
第79図　遺構内出土土器（６）……191
第80図　遺構内出土土器（７）……192
第81図　遺構内出土土器（８）……193
第82図　遺構内出土土器（９）……194
第83図　遺構内出土土器（10）……195
第84図　遺構内出土土器（11）……196
第85図　遺構内出土土器（12）……197
第86図　遺構内出土土器（13）……198
第87図　遺構内出土土器（14）……199
第88図　遺構内出土土器（15）……200
第89図　中央部捨て場出土土器（１）……201
第90図　中央部捨て場出土土器（２）……202
第91図　中央部捨て場出土土器（３）……203
第92図　中央部捨て場出土土器（４）……204
第93図　中央部捨て場出土土器（５）……205
第94図　中央部捨て場出土土器（６）……206
第95図　中央部捨て場出土土器（７）・
　　遺構外出土土器（１）……207
第96図　遺構外出土土器（２）……208
第97図　遺構外出土土器（３）……209
第98図　遺構外出土土器（４）……210
第99図　遺構外出土土器（５）……211
第100図　遺構外出土土器（６）……212
第101図　遺構外出土土器（７）……213
第102図　遺構外出土土器（８）……214
第103図　遺構外出土土器（９）……215
第104図　遺構外出土土器（10）……216
第105図　遺構外出土土器（11）……217
第106図　遺構外出土土器（12）……218
第107図　土製品（１）……219
第108図　土製品（２）……220
第109図　土製品（３）……221
第110図　土師器・須恵器・陶磁器（１）……222
第111図　陶磁器（２）・金属製品（１）……223
第112図　金属製品（２）……224

第113図　遺構内出土剥片石器（１）……225
第114図　遺構内出土剥片石器（２）・
　　中央部捨て場剥片石器……226
第115図　遺構外出土剥片石器（１）……227
第116図　遺構外出土剥片石器（２）……228
第117図　遺構外出土剥片石器（３）……229
第118図　遺構内出土礫石器（１）……230
第119図　遺構内出土礫石器（２）……231
第120図　遺構内出土礫石器（３）……232
第121図　遺構内出土礫石器（４）……233
第122図　遺構内出土礫石器（５）……234
第123図　遺構内出土礫石器（６）……235
第124図　遺構内出土礫石器（７）……236
第125図　遺構内出土礫石器（８）……237
第126図　遺構内出土礫石器（９）……238
第127図　遺構内出土礫石器（10）……239
第128図　遺構内出土礫石器（11）……240
第129図　遺構内出土礫石器（12）……241
第130図　遺構内出土礫石器（13）・
　　中央部捨て場出土礫石器・
　　遺構外出土礫石器（１）……242
第131図　遺構外出土礫石器（２）……243
第132図　遺構外出土礫石器（３）……244
第133図　遺構外出土礫石器（４）……245
第134図　遺構外出土礫石器（５）……246
第135図　遺構外出土礫石器（６）……247
第136図　遺構外出土礫石器（７）……248
第137図　遺構外出土礫石器（８）……249
第138図　遺構外出土礫石器（９）……250
第139図　遺構内出土石製品（１）……251
第140図　遺構内出土石製品（２）……252
第141図　遺構内出土石製品（３）……253
第142図　遺構内出土石製品（４）・
　　中央部捨て場出土石製品・
　　遺構外出土石製品（１）……254
第143図　遺構外出土石製品（２）……255
第144図　遺構外出土石製品（３）……256
第145図　遺構外出土石製品（４）……257
第146図　胎土分析土器……258

表　目　次

第１表　周辺の遺跡一覧……９
第２表　川目Ａ遺跡遺構番号表……19
第３表　竪穴住居跡一覧表……146
第４表　土坑一覧表……146
第５表　竪穴建物跡一覧表……146
第６表　炉跡・焼土一覧表……147
第７表　立石・集石一覧表……148
第８表　土取り穴一覧表……148
第９表　柱穴状土坑一覧表……148
第10表　縄文土器観察表……259
第11表　土製品観察表……274
第12表　剥片石器観察表……275
第13表　礫石器観察表……277
第14表　石製品観察表……281
第15表　土師器・須恵器観察表……283
第16表　陶磁器観察表……283
第17表　金属製品観察表……283
第18表　年代測定試料観察表……284

写真図版目次

写真図版１　遺跡遠景 ……355
写真図版２　調査区全景（１） ……356
写真図版３　調査区全景（２） ……357
写真図版４　ＲＡ003竪穴住居跡……358
写真図版５　ＲＡ004竪穴住居跡……359
写真図版６　ＲＡ005竪穴住居跡……360
写真図版７　ＲＡ006竪穴住居跡……361
写真図版８　ＲＡ007竪穴住居跡（１）……362
写真図版９　ＲＡ007竪穴住居跡（２）……363
写真図版10　ＲＡ008竪穴住居跡……364
写真図版11　ＲＡ009竪穴住居跡……365
写真図版12　ＲＡ010竪穴住居跡（１）……366
写真図版13　ＲＡ010竪穴住居跡（２）……367
写真図版14　ＲＡ010竪穴住居跡（３）……368
写真図版15　ＲＡ011竪穴住居跡（１）……369
写真図版16　ＲＡ011竪穴住居跡（２）……370
写真図版17　ＲＡ012竪穴住居跡……371
写真図版18　ＲＡ013竪穴住居跡……372
写真図版19　ＲＡ014・015・016竪穴住居跡……373
写真図版20　ＲＡ017竪穴住居跡（１）……374
写真図版21　ＲＡ017竪穴住居跡（２）……375
写真図版22　ＲＡ017竪穴住居跡（３）……376
写真図版23　ＲＢ001・002・003掘立柱建物跡……377
写真図版24　ＲＢ001掘立柱建物跡……378
写真図版25　ＲＢ004掘立柱建物跡……379
写真図版26　ＲＤ103～106土坑 ……380
写真図版27　ＲＤ107～110土坑 ……381
写真図版28　ＲＤ111～116土坑 ……382
写真図版29　ＲＤ116・118～122土坑……383
写真図版30　ＲＤ123～126土坑 ……384
写真図版31　ＲＤ127～130土坑 ……385
写真図版32　ＲＤ117・131～133土坑……386
写真図版33　ＲＤ134～137土坑 ……387
写真図版34　ＲＤ138～143土坑 ……388
写真図版35　ＲＤ141～153土坑 ……389
写真図版36　ＲＤ144・146・148・150・151土坑…390
写真図版37　ＲＤ154～157土坑 ……391
写真図版38　ＲＤ157～159・161土坑……392
写真図版39　ＲＤ162・163土坑 ……393
写真図版40　ＲＥ002竪穴建物跡（１）……394
写真図版41　ＲＥ002竪穴建物跡（２）……395
写真図版42　ＲＥ003竪穴建物跡（１）……396
写真図版43　ＲＥ003竪穴建物跡（２）……397
写真図版44　ＲＦ001～004焼土 ……398
写真図版45　ＲＦ005～009炉跡・焼土 ……399
写真図版46　ＲＦ010焼土・ＲＨ033・034立石・集石……400
写真図版47　ＲＨ035～039集石 ……401
写真図版48　ＲＨ040～046集石 ……402
写真図版49　ＲＨ047～051集石 ……403
写真図版50　ＲＸ001土取り穴……404
写真図版51　ＲＸ002～007土取り穴 ……405
写真図版52　ＲＸ002～007土取り穴・ＲＰ006・007埋設土器 ……406
写真図版53　捨て場 ……407
写真図版54　調査区西部調査風景 ……408
写真図版55　調査区南西部調査風景 ……409
写真図版56　調査区中央部調査風景 ……410
写真図版57　調査区南西部・東部調査風景 ……411
写真図版58　調査区中央部・東部調査風景 ……412
写真図版59　教育普及活動 ……413
写真図版60　遺構内出土土器（１） ……414
写真図版61　遺構内出土土器（２） ……415
写真図版62　遺構内出土土器（３） ……416
写真図版63　遺構内出土土器（４） ……417
写真図版64　遺構内出土土器（５） ……418
写真図版65　遺構内出土土器（６） ……419
写真図版66　遺構内出土土器（７） ……420
写真図版67　遺構内出土土器（８） ……421
写真図版68　遺構内出土土器（９） ……422
写真図版69　遺構内出土土器（10） ……423
写真図版70　遺構内出土土器（11） ……424
写真図版71　遺構内出土土器（12） ……425
写真図版72　遺構内出土土器（13） ……426
写真図版73　遺構内出土土器（14） ……427
写真図版74　遺構内出土土器（15）・中央部捨て場出土土器（１） ……428
写真図版75　中央部捨て場出土土器（２） ……429
写真図版76　中央部捨て場出土土器（３） ……430
写真図版77　中央部捨て場出土土器（４） ……431
写真図版78　中央部捨て場出土土器（５） ……432
写真図版79　中央部捨て場出土土器（６） ……433

写真図版80　中央部捨て場出土土器（7）・
遺構外出土土器（1）……434
写真図版81　遺構外出土土器（2）……435
写真図版82　遺構外出土土器（3）……436
写真図版83　遺構外出土土器（4）……437
写真図版84　遺構外出土土器（5）……438
写真図版85　遺構外出土土器（6）……439
写真図版86　遺構外出土土器（7）……440
写真図版87　遺構外出土土器（8）……441
写真図版88　遺構外出土土器（9）……442
写真図版89　遺構外出土土器（10）……443
写真図版90　遺構外出土土器（11）……444
写真図版91　遺構外出土土器（12）・
土製品（1）……445
写真図版92　土製品（2）……446
写真図版93　土製品（3）……447
写真図版94　土師器・須恵器・
陶磁器・金属製品（1）……448
写真図版95　金属製品（2）……449
写真図版96　胎土分析土器……450
写真図版97　遺構内出土剥片石器（1）……451
写真図版98　遺構内出土剥片石器（2）・
遺構外出土剥片石器（1）……452
写真図版99　遺構外出土剥片石器（2）……453
写真図版100　遺構外出土剥片石器（3）……454
写真図版101　遺構外出土剥片石器（4）……455
写真図版102　遺構内出土礫石器（1）……456
写真図版103　遺構内出土礫石器（2）……457
写真図版104　遺構内出土礫石器（3）……458
写真図版105　遺構内出土礫石器（4）……459
写真図版106　遺構内出土礫石器（5）……460
写真図版107　遺構内出土礫石器（6）……461
写真図版108　遺構内出土礫石器（7）……462
写真図版109　遺構内出土礫石器（8）……463
写真図版110　遺構内出土礫石器（9）……464
写真図版111　遺構内出土礫石器（10）……465
写真図版112　遺構内出土礫石器（11）……466
写真図版113　遺構内出土礫石器（12）・
中央部捨て場出土礫石器・
遺構外出土礫石器（1）……467
写真図版114　遺構外出土礫石器（2）……468
写真図版115　遺構外出土礫石器（3）……469
写真図版116　遺構外出土礫石器（4）……470
写真図版117　遺構外出土礫石器（5）……471
写真図版118　遺構外出土礫石器（6）……472
写真図版119　遺構外出土礫石器（7）……473
写真図版120　遺構外出土礫石器（8）……474
写真図版121　遺構内出土石製品（1）……475
写真図版122　遺構内出土石製品（2）……476
写真図版123　遺構内出土石製品（3）・
中央部捨て場出土石製品……477
写真図版124　遺構外出土石製品（1）……478
写真図版125　遺構外出土石製品（2）……479
写真図版126　遺構外出土石製品（3）……480

Ⅰ　調査に至る経過

「川目Ａ遺跡第６次調査」は、都南川目道路改築工事に伴って、その事業区内域に存することから発掘調査を実施することになったものである。

地域高規格道路として位置付けられている「宮古盛岡横断道路」は、宮古市を起点に区界峠を越え、盛岡市に至る延長約100㎞の地域高規格道路であり、太平洋と日本海を結ぶ大動脈の役割を担っている路線である。また、東北縦貫自動車道及び三陸縦貫自動車道とあわせて循環型ネットワークの形成を図ると共に、岩手県総合発展計画の主要目標の「県都圏90分構想」を実現する道路である。

宮古盛岡横断道路の一部を構成する「都南川目道路」は、盛岡市手代森と同市川目第１地割の間約６㎞の区間で計画されている。線形不良による交通隘路区間の解消を図ると共に、東北縦貫自動車道（東北道）へのアクセス強化による産業・経済・文化の活性化を支援することを目的とした自動車専用道で、平成９年度に事業着手している。

「川目Ａ遺跡第６次調査」については、都南川目道路事業の区域に存する埋蔵文化財包蔵地であり、過年度において岩手県教育委員会分布調査を実施し確認され、平成18年度に試掘調査を実施している。その結果に基づいて、岩手県教育委員会と国土交通省東北整備局岩手河川国道事務所と協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

これにより、平成19年４月２日付けで岩手河川国道事務所長と岩手県文化振興事業団理事長との間で受託契約を締結し、「川目Ａ遺跡第６次調査」の発掘調査に着手した。

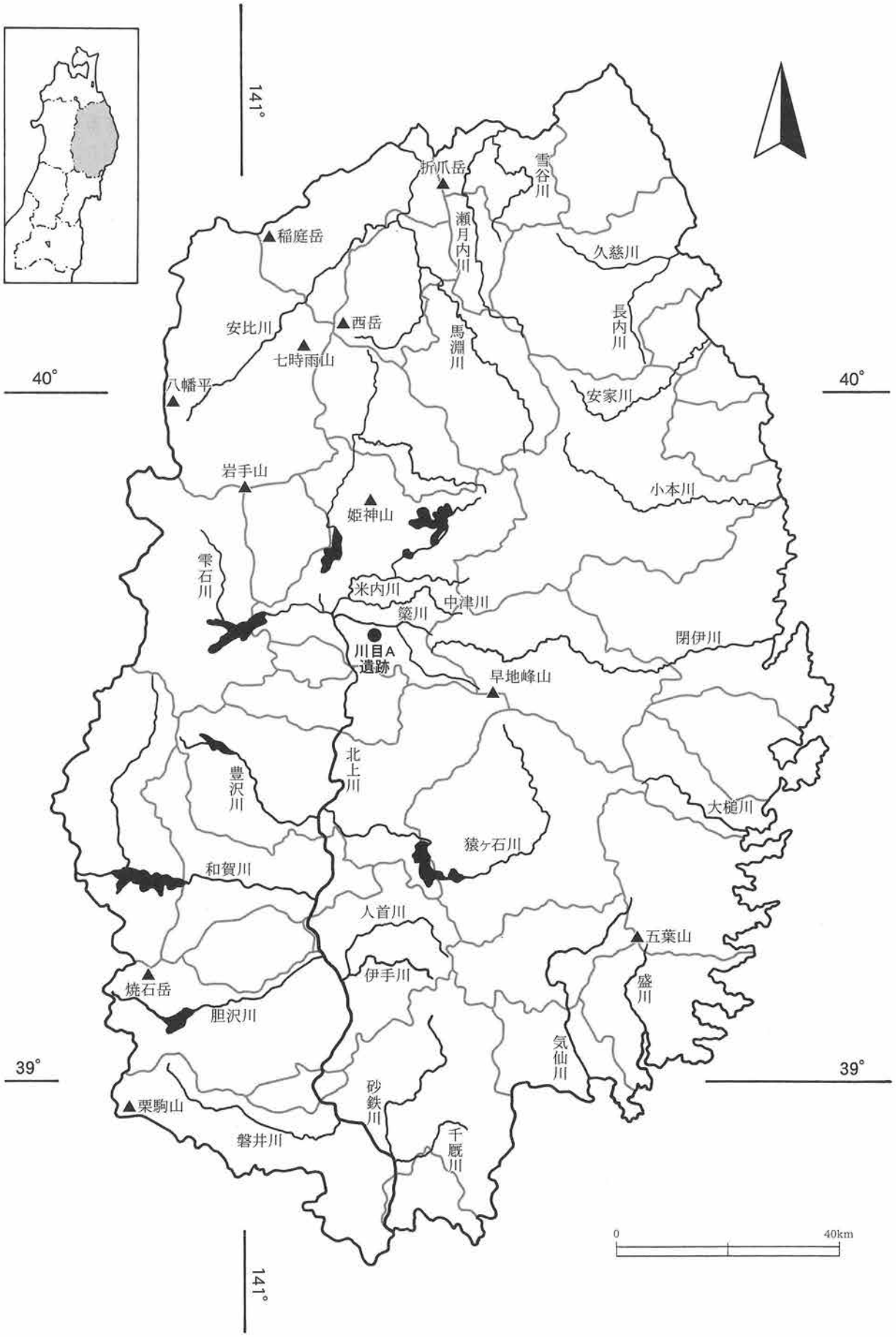
（国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所）

Ⅱ　遺跡の立地・環境

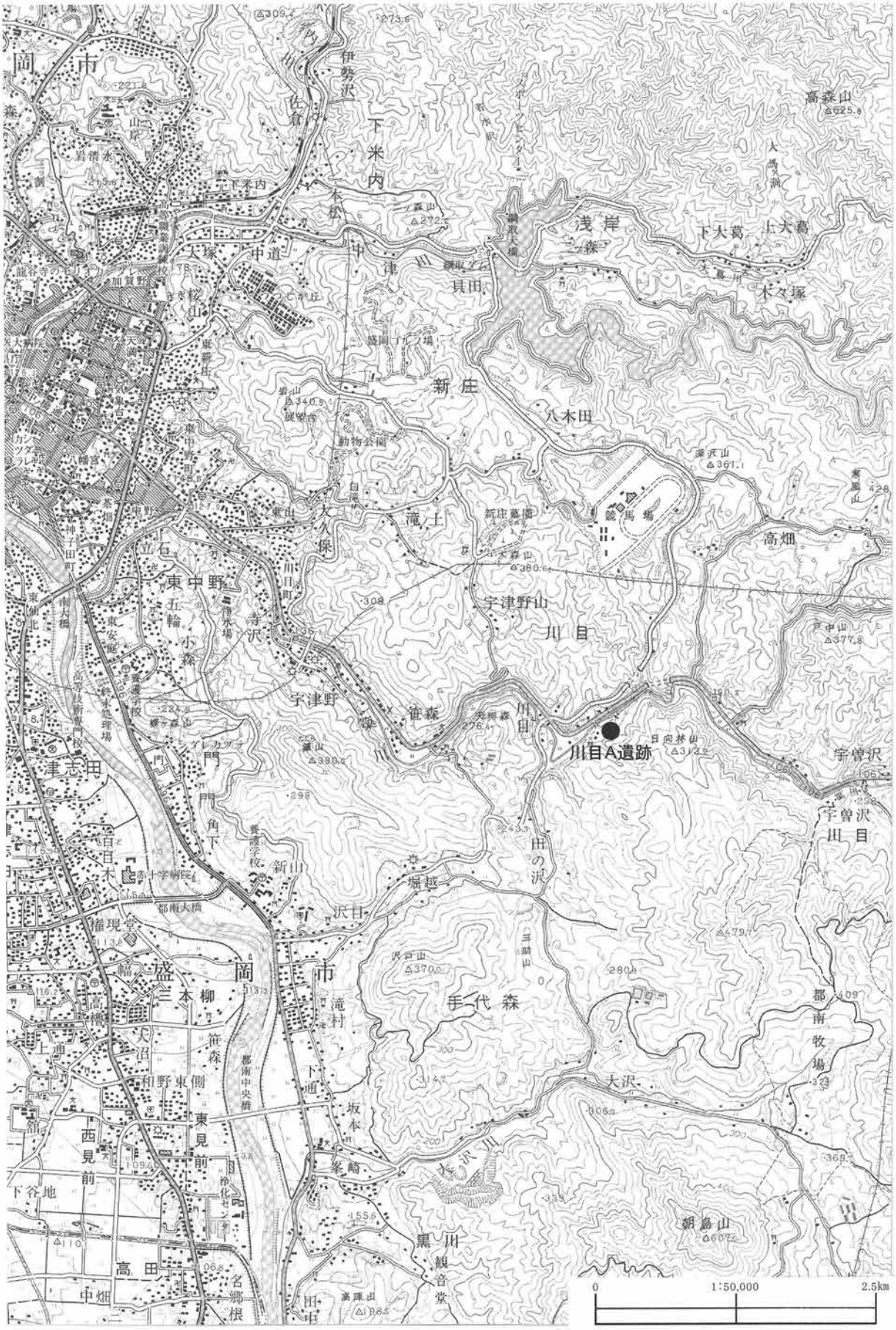
１　地理的環境

（１）遺跡の位置と立地

川目Ａ遺跡のある岩手県盛岡市は、岩手県のほぼ中央に位置し、東西約45.5㎞、南北約40㎞、総面積886.47㎢、総人口約30万人を有する。北は八幡平市、岩手郡岩手町・葛巻町、東は下閉伊郡岩泉町・川井村、南は花巻市、紫波郡紫波町・矢巾町、西は岩手郡雫石町・滝沢村の２市６町２村と接している。盛岡藩主南部重直公による盛岡城築城の1633年より経ること375年、現在は岩手県の県庁所在地である。本遺跡が所在する盛岡市川目地区は、盛岡市の東部にあり、北上山地の北西部に立地し、ＪＲ東北本線盛岡駅から南東約7.5㎞に位置する。遺跡は、北上川の支流の簗川左岸にあり、国土地理院発行の２万５千分の１地形図「盛岡」ＮＪ－54－13－14－２の図幅に含まれ、北緯39度40分10秒、東経141度13分00秒付近に位置する。本調査は、平成18年度から継続調査が行われている第５次調査区の西側や南西側を対象とし行われた。調査地の標高は177～205ｍである。調査前の現況は、水田と山林を中心に農道と水路であった。



第1図　岩手県における遺跡の位置



第２図　遺跡位置図

（2）遺跡周辺の地形と地質

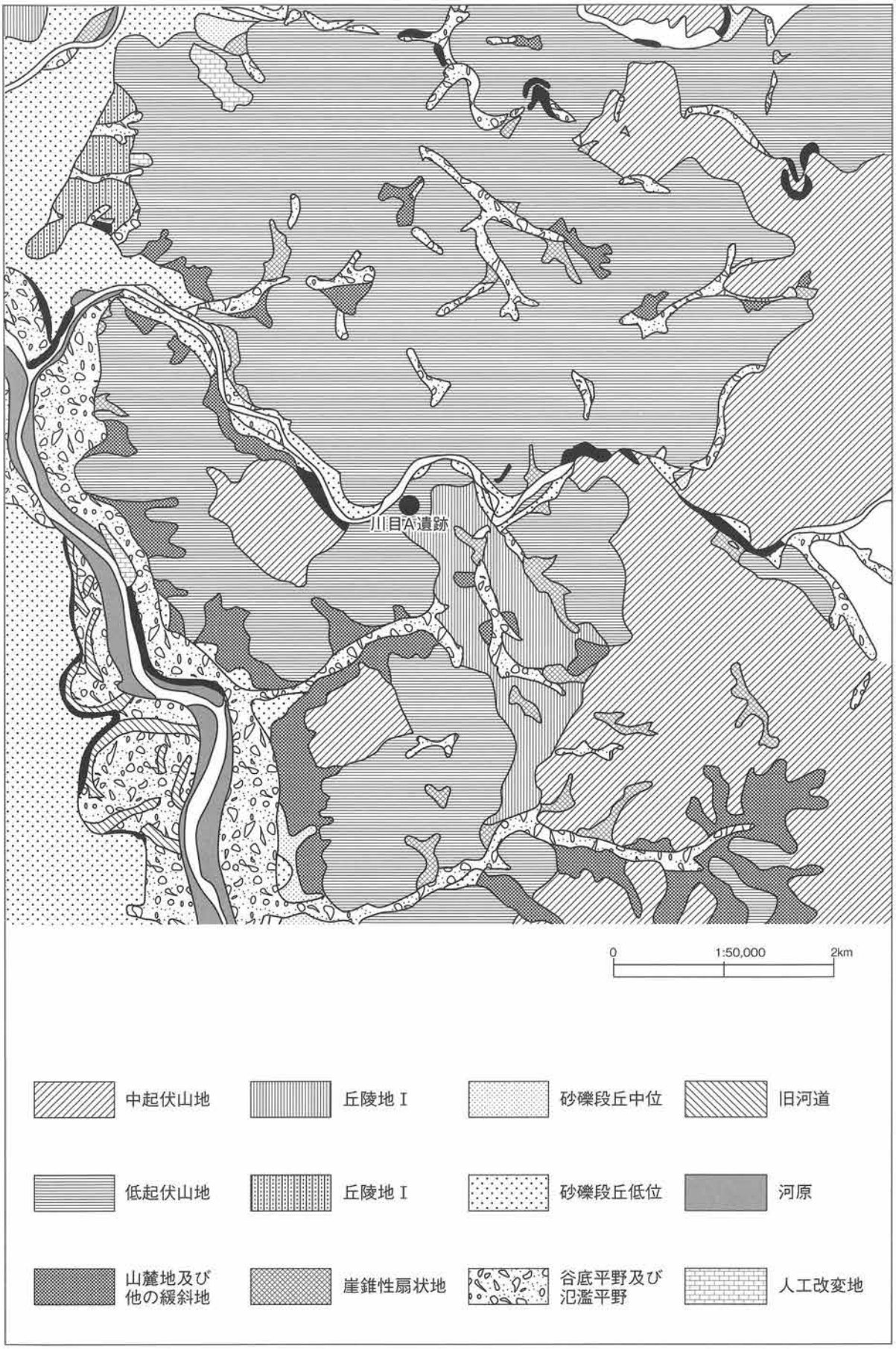
本遺跡の立地する盛岡市の地形を概観すると、盛岡市は北上盆地の北部に位置し、東に北上山地、西に奥羽山脈が連なり、盆地に広がる市域からは北西側に岩手山（標高2,038m）、北東側に姫神山（標高1,124m）、南東側に早池峰山（標高1,914m）を望むことができる。北上盆地の中央を南流する北上川は、岩手町御堂観音境内にその源を発し、延長243km、流域面積10,720km²、支流数216を数える、東北地方最大の一級河川であり、盛岡の市街地中央で西から雫石川、東から中津川や簗川が合流する。この北上川は、盛岡市北部の四十四田峡谷以北を上流域に、一関市孤禅寺峡谷付近までを中流域とし、それより石巻港までを下流域と区分される。従って、本地域は、北上川中流域の最北部に位置付けられる。北上川の左岸（東側）にある北上山地は、南北に長く連なり、地質構造上、古生代や中世代の堆積岩及び花崗岩からなり、平坦な土地は非常に少なく、山地に続く丘陵部縁辺部に小規模な段丘と沖積地がわずかに認められる。対して、北上川の右岸（西側）の奥羽山脈は、北上山地と比べると、比較的新しい新第三紀からなる非火山地域と、第四紀に形成された新規火山地域に区分される。この奥羽山脈から北上川に注ぐ多くの支流により多量の土砂を供給することで、北上川右岸に大小の段丘や扇状地、河岸平野、起伏量の小さい丘陵地等が複雑に入り組む広い平坦面を作り出している。これらの平坦面の大部分は、更新世中・後期に形成されたもので、支流によって解析され段丘化したものである。

さて、本遺跡のある北上山地について若干詳述すると、中央部の早池峰山を最高峰に剣ヶ峰岳（標高1,827m）、中岳（標高1,679m）、鶏頭山（標高1,445m）、毛無森山（標高1,427m）などとともに、東西に連なる早池峰連峰を形成し、南側には薬師岳（標高1,645m）がある。これらを除くと、比較的なだらかな中・小の起伏山地が広がる。本遺跡が所在する盛岡市川目地区周辺は、遺跡の北側を流れる簗川を挟んで北側に大森山（標高386m）、深沢山（標高361m）、寒風山（標高428m）、建石山（標高661m）、戸中山（標高378m）が、南側に天狗森（標高276m）、沢口山（標高370m※読み方は「さわぐちやま」か）、三助山（標高301m※読み方「さんすけやま」か）、日向林山（標高313m）、朝島山（標高607m）、鬼ヶ瀬山（標高724m）など中・小の起伏山地に囲まれ、これらの山間を流れる沢や河川によって解析され形成された小規模な砂礫段丘や氾濫平野が広がっている。

次に、本遺跡で出土している石器素材の供給にも関わると考えられる北上山地の地質について若干記述する。北上山地は、盛岡－早池峰連峰－釜石に至る「早池峰構造帯」を挟んで、南部北上山地・北部北上山地にわけられるが、遺跡の所在する川目地区はこの「早池峰構造帯」にのる。この地域の地質は、先シルル紀の基盤岩類（※シルル系の下位層を構成する岩石）、シルル紀～下部白亜紀系の堆積岩類（オルドビス系とする説もある）と、これらをつらぬく前期白亜紀花崗岩類から主に構成される。なお、「早池峰構造帯」の定義は、研究者間でも異なった認識があるようであるが、川目地区を含め盛岡市東方は、超塩基性を主体とする中岳蛇紋岩、超塩基性岩類・はんれい岩・ドレライト・トロニエム岩などが混在する神楽複合岩類とその相当層、おもにドレライトや玄武岩からなる小黒層などから構成され、オルドビス紀系と考えられているようである（2003：永広・鈴木）。本遺跡の南東側の地域などは、蛇紋岩や緑色の岩類系が採掘若しくは採取するのに、比較的近距離の環境化にあることを指摘でき、実際簗川支流の根田茂川では蛇紋岩などが容易に採取できる。

（3）遺跡の地形分類について

今回の調査では調査区を便宜的に調査区西部・南西部・中央部・東部の4地点に大別・呼称し、実


川目A遺跡
0
1:50,000
2km
中起伏山地
丘陵地Ⅰ
砂礫段丘中位
旧河道
低起伏山地
丘陵地Ⅰ
砂礫段丘低位
河原
山麓地及び
他の緩斜地
崖錐性扇状地
谷底平野及び
氾濫平野
人工改変地

第３図　地形分類図

第4図　川目A遺跡第6次調査位置図

際の調査・整理作業・報告書の記載に際して適宜使用している。第３図には遺跡のある盛岡市東部地域の地形分類図を示したが、本遺跡は大きくは標高の低い方から「砂礫段丘低位」、「谷底平野及び氾濫平野」、「低起伏山地」の３つに区分される。調査区東部・中央部の一部分は、簗川左岸に形成された「砂礫段丘低位」に相当し、低地が広がる。広義の扇状地的な地形にも思える。調査地の標高は177～178mで、簗川河床面との比高は３～４mである。調査区南西部と西部は、日向林山(標高313m)の南西部を水源とし南から北に流れる沢を挟み対峙する位置関係にある。調査地の標高は185～188mで、簗川との比高は10m以上を測り、調査区東部などより一段高い丘陵状にある。調査区南西部は、広義の「谷底平野」地形と捉えられ、上記した南北方向に流れる沢の右岸肩部に相当しよう。調査区西部は、南北方向に流れる沢の左岸にあり、南西から北東へ向かって張り出す丘陵の縁にのる。なお、この丘陵は、地形区分上「砂礫段丘低位」に区分されると思われるが、調査区東部などがのる段丘面より標高が10m前後高いことから、ここでは広義の河岸段丘と捉えておきたい。調査区中央部の南側は、「低起伏山地」の山麓斜面に相当し、標高180～205mを測る。傾斜角度は緩い部分で15度くらい、急な部分では30度前後を測る。

2　遺跡周辺の歴史的環境

（1）周辺の遺跡

盛岡市に所在する遺跡は、岩手県教育委員会が作成した『岩手県遺跡情報検索システム（盛岡地方振興局管内北部・盛岡地方振興局管内南部)』によると733箇所（平成17年３月現在）が登録されている。第５図には簗川流域を中心に、西は北上川東岸部、東は根田茂川流域、北は中津川流域、南は大沢川流域までの範囲に所在する遺跡を示した。ここでは、図に示した遺跡を中心に、盛岡市における各時代の主な調査遺跡について、取り上げ概述することとする。

＜旧石器時代＞旧石器時代の遺跡は第５図の図幅中に該当遺跡がない。『岩手県遺跡情報検索システム』によると、盛岡市内には４箇所が登録されており、北上川左岸の四十四田丘陵に所在する四十四田Ａ遺跡、北上川右岸の館坂遺跡、玉山区の岩洞湖畔に所在する小石川遺跡・大橋遺跡がある。

＜縄文時代＞縄文時代の遺跡は非常に多く、図幅でも70遺跡を数える。発掘調査が行われた主な遺跡を挙げると、川目Ａ遺跡、川目Ｃ遺跡、戸仲遺跡、宇曽沢遺跡、小山遺跡、砂溜遺跡、仁反田遺跡、上八木田Ⅰ～Ⅴ遺跡、薬師社脇遺跡、大葛遺跡、手代森遺跡などがあり、図幅の外やや北西に柿ノ木平遺跡などがある。川目Ｃ遺跡は、簗川を挟み川目Ａ遺跡対岸の段丘に位置する。平成６・７年に調査が行われ、竪穴住居跡298棟、土坑911基をはじめ、早期・前期・中期・晩期、弥生時代後期、中・近世に亘る膨大な遺物が出土している（※平成８年岩手考古学会発表資料ではコンテナ1,550箱とある)。本地域における縄文中期の最大級の集落跡で、併せて該期の拠点的な遺跡の一つと考えられる。戸仲遺跡と宇曽沢遺跡は、簗川右岸の河岸段丘にあり、川目Ａ遺跡より上流に位置する。戸仲遺跡は、平成18・19年に調査が行われ、また平成20年にも継続して調査が予定されている。縄文後期後葉～晩期中葉の配石遺構を中心に中期後葉～晩期末葉の遺構・遺物が出土している。宇曽沢遺跡は、平成18年に調査が行われ、陥し穴状遺構や土坑が少数と早期・前期・後期・晩期の遺物が少量出土している。小山遺跡・砂溜遺跡・仁反田遺跡は、簗川下流右岸に位置し、小山遺跡群として３遺跡を包括して捉えられてきた経過がある。平成10年段階で第24次に及ぶ調査が行われており（※最近では仁反田遺跡として平成16年に調査が実施されている)、前期末葉～中期初頭と考えられる多数の貯蔵穴や大形住居跡に伴う可能性がある柱穴列などが検出されている。なお、草間俊一氏は盛岡市史の中で、小山遺

伊勢沢
下米内
本松
中道
中津川
貝田
浅岸
下大葛
上大葛
高森山
元信
銭掛
新庄
八本山
滝上
新庄墓園
競馬場
高畑
宇津野山
川目
宇津野
笹森
川目A遺跡
宇曽沢
大升沢
級沢
新山
堀越
沢口
手代森
大沢
都南牧場
鬼ヶ瀬山
坂本
峯崎
大沢川
黒川
観音堂
朝島山
馬場
長畑
大ヶ生

第５図　周辺の遺跡

第1表　周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	時代	特記事項
1	至沢	散布地	縄文・弥生	
2	伊勢沢	散布地	縄文	縄文土器
3	大豆門	散布地	縄文	縄文土器（中・後期）
4	下米内	散布地	縄文	縄文土器（中期）
5	熊ノ沢	散布地	縄文	縄文土器（前・中期）
6	馬場野	散布地	縄文	縄文土器
7	一本松	散布地	縄文	縄文土器（早・後期）
8	一本松沢	散布地	縄文	縄文土器（中期）
9	薬師社脇	散布地	縄文・古代・中世	縄文土器（早・中期）※平成11～19年にかけて6回の調査
10	薬師山	神社跡	中近世	御堂跡，平場
11	アカトリ	散布地	縄文・古代	縄文土器（中期），土師器
12	向田	散布地	縄文・古代	縄文土器（中・後期），土師器
13	八木沢山	散布地	古代	土師器
14	栗木平	散布地	縄文・古代	縄文土器（中・後期），土師器
15	エドコ山	散布地	縄文	縄文土器（中期）
16	大馬ケ洞	散布地	縄文	縄文土器（中・後期）
17	笹ノ平	散布地	縄文	縄文土器（早～晩期）
18	大葛	散布地	縄文	縄文土器（中・後期）
19	上台	散布地	縄文	縄文土器
20	元信中	散布地	縄文・古代	縄文土器，土師器
21	向	散布地	縄文	縄文土器
22	元信	散布地	縄文	縄文土器
23	岩山南	散布地	縄文・古代	縄文土器（早～後期），土師器，土壙
24	白滝	散布地	縄文	縄文土器（中・後期）
25	和田	散布地	縄文・古代	縄文土器，土師器
26	下八木田	散布地	縄文・古代	縄文土器（早～後期），土師器
27	八木田Ⅰ	散布地	縄文・古代	縄文土器（中～後期），土師器※上八木田Ⅰ遺跡として平成2～3年調査
28	八木田Ⅱ	集落跡	縄文・古代	縄文土器（早～後期），土師器，土壙，溝跡，竪穴住居跡※上八木田Ⅱ遺跡として平成3年調査
29	八木田Ⅲ	集落跡	縄文・古代	縄文土器（後期），土師器，土壙，竪穴住居跡
30	八木田Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器
31	八木田Ⅴ	集落跡	縄文・古代	縄文土器（後期），土師器，土壙，竪穴住居跡
32	高畑A	散布地	縄文	縄文土器（中・後期）
33	高畑B	散布地	縄文	縄文土器（中・後期）
34	高畑C	散布地	縄文	縄文土器（前期）
35	高畑一里塚	一里塚	近世	塚2基
36	大倉峠一里塚	一里塚	近世	塚1基
37	上八木田	散布地	縄文	縄文土器（中期）
38	八木田一里塚	一里塚	近世	塚1基
39	滝ノ上A	散布地	縄文・古代	縄文土器，土師器
40	滝ノ上B	散布地	縄文・古代	縄文土器，土師器
41	泣坂	散布地	縄文	縄文土器（中・後期）
42	宇津野	散布地	縄文	縄文土器
43	川目寺沢	散布地	縄文	縄文土器
44	道遠	散布地	縄文・古代	縄文土器，土師器
45	ブナト	散布地	縄文	縄文土器（後期）
46	金掘沢Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器（後期）
47	金掘沢Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器
48	堀越Ⅰ	散布地	縄文・弥生	縄文土器，弥生土器，土偶，石錐
49	手代森妻の神	散布地	縄文・古代	縄文土器，土師器
50	高寺Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器（後期）
51	柳沢	散布地	縄文	縄文土器
52	手代森館	城館跡	中世	空掘，主郭，腰郭
53	高見	散布地	縄文	縄文土器（早・前・晩期），石錐，石匙
54	手代森	集落跡	縄文・古代	縄文土器（前・後・晩期），土偶，土師器須恵器，石器※昭和59年調査
55	峰崎	散布地	縄文・弥生	縄文土器（晩期），弥生土器，土師器
56	郷ケ沢	散布地	古代	土師器
57	本宮	散布地	古代	土師器
58	逢磨	散布地	縄文	縄文土器（時期不詳）
59	下道	散布地	縄文・古代	縄文土器（後期），土師器
60	高陣	散布地	縄文	縄文土器（後期）
61	田ノ沢A	散布地	縄文	縄文土器
62	田ノ沢B	散布地	縄文	縄文土器
63	田ノ沢C	散布地	縄文	縄文土器
64	川目A	散布地	縄文	縄文土器（中・晩期）※昭和28・30・31年・平成11年調査
65	川目B	散布地	縄文	縄文土器（中・晩期）
66	川目C	散布地	縄文	平成6・7年調査，竪穴住居跡298棟，土坑911基ほか
67	川目D	散布地	縄文	縄文土器
68	川目館	城館跡	中世	堀，郭
69	戸仲	散布地	縄文	縄文土器（中・後期）※平成18～20年調査
70	小屋野	散布地	縄文	縄文土器（後期）
71	宇曽沢	散布地	縄文	縄文土器※平成18年調査
72	タキノ沢	散布地	縄文	縄文土器
73	大桝沢A	散布地	縄文	縄文土器
74	大桝沢B	散布地	縄文	縄文土器
75	大桝沢C	散布地	縄文	縄文土器
76	級沢A	散布地	縄文	縄文土器
77	級沢B	散布地	縄文	縄文土器
78	級沢C	散布地	縄文	縄文土器
79	級沢D	散布地	縄文	縄文土器
80	仁反田	集落跡城館跡	縄文・古代・中世	縄文土器（中期），土坑，堀，郭，竪穴住居跡※平成16年などに調査が行われている
81	鬼ケ瀬山洞穴	洞穴	縄文	縄文土器

跡出土の中期初頭～中葉の土器を第１類～第７類に分類し、土器編年を提示しているが、中でも第１～３類とするものは円筒式土器の影響が看取される土器群との記述があり、本地域の大木式・円筒式の両土器文化の接触を考える上で、興味深い内容と思われる。次に、代表的な調査事例を幾つか取り上げてみる。早期を中心とする薬師社脇遺跡は、米内川と中津川の合流付近に位置し、宅地造成に伴い試掘調査を含め平成11年以降６次にいたる調査が行われ、県内でも稀な早期中葉の竪穴住居跡が28棟検出されている。上八木田Ⅰ遺跡は、綱取ダムの南約２kmの山間地に所在し、盛岡競馬場建設に伴い平成２・３年に調査が行われた。前期前葉～中期末葉の竪穴住居跡159棟をはじめ、多数の遺構・遺物が出土した。なお、上八木田Ⅰ遺跡をはじめ、平成２・３年に調査が実施された上八木田Ⅱ～Ⅴ遺跡は、遺跡台帳で八木田Ⅰ～Ⅴ遺跡の名称で登録されており、調査報告書とは遺跡名称が異なる。第１表には遺跡台帳の遺跡名で記載している（※発掘調査報告書ではそれぞれ「八木田」ではなく、「上八木田」となっている）。手代森遺跡は、北上川と大沢川の合流付近に位置し、晩期の竪穴住居跡８棟が検出されている。特記事項として、体長31cmの遮光器土偶の出土が挙げられる。大葛遺跡は、中津川の支流大葛川右岸の小扇状地状に所在し、後期初頭の竪穴住居跡３棟をはじめ、門前式期の土器がまとまって出土している。次に、図幅に含まれないが、本遺跡と同時期の柿ノ木平遺跡について、若干触れておく。柿ノ木平遺跡は、中津川と米内川の合流点付近の段丘上に立地し、第36次にわたる調査が実施されている。中期を中心に後期の竪穴住居跡が多数検出されている。平成10～13年に行われた第21次調査では、中期の竪穴住居跡より、土器底部に穿孔を持つ伏甕（埋甕）がまとまって検出されている。また、本遺跡と同様粘土採掘坑の検出も特筆されよう。

＜弥生時代＞弥生時代は、縄文時代と比較して遺跡数が格段に少なく、遺跡検索システムによれば盛岡市内全体では26遺跡が該当し、第５図の図幅中では堀越（ほりこし）Ⅰ遺跡、峰崎（みねざき）遺跡が該当する。ただし、時代の項に弥生時代と記載がなくても、発掘調査が実施された川目Ａ遺跡、川目Ｃ遺跡などのように、該期の遺構・遺物が発見された遺跡もある。川目Ｃ遺跡では、弥生時代後期とされる土坑36基が列に並び検出されているが、土坑の中には埋土上位に白色の粉状パミスが混じり、最下層から赤穴式系の土器片が出土しているものがある。これらの土坑の用途が陥し穴なのか墓壙かは不明とある。なお、続縄文の発見された遺跡として、永福寺山（えいふくじやま）遺跡を挙げておきたい。

＜古代＞古代は、縄文時代と複合する遺跡が多く、川目Ａ遺跡をはじめ、上八木田Ⅰ遺跡、薬師社脇遺跡などで竪穴住居跡が検出されている。何れも平安時代の遺跡である。

＜中世・近世＞中世・近世は、川目Ａ遺跡、薬師社脇遺跡、薬師山遺跡、川目館、仁反田遺跡、手代森館などが挙げられる。ここでは、図幅には含まれないが、上村屋敷（わむらやしき）遺跡を取り上げることとする。上村屋敷遺跡は、柿ノ木平遺跡の南東に近接し、７次に亘って調査が行われている。調査の結果、概ね16世紀から小規模城館が成立し、近世や幕末の19世紀に至るまで連綿として城館や屋敷が継続されていたことがわかっている。特記事項として、17世紀から19世紀と考えられる環濠屋敷の発見が挙げられる。

（２）川目Ａ遺跡のこれまでの調査

川目Ａ遺跡は、過去に第１～５次まで調査が行われている。

＜第１～３次調査＞岩手大学草間俊一教授のもと、岩手大学考古学実習生と簗川小学校（後に川目小学校）菊池常雄教諭、吉田義昭氏により第１～３次調査が行われている。第１次調査が昭和28年11月21～25日、第２次調査が昭和30年３月26日～４月１日、第３次調査が昭和31年である（※第３次調査の月日不明）。調査地点はＡ区、Ｂ区、Ｃ区にわけられ、Ａ・Ｂ区は平成18年度から実施している第

５次調査区の北側に近接した部分である。なお、Ｃ区と命名された調査地点は、筆者の情報能力ではわからなかった。『岩手大学学芸部研究年報』第７巻・第９巻によると、「川原石の群」（※配石と考えられる）、焼土をはじめ、縄文中期～晩期の遺物が出土している。特記事項としては、草間俊一教授は後期の土器群を第一類～第八類に分類し、『盛岡市史』などへの記述に際しても該期土器の編年に用いている。

＜第４次調査＞沢田沈砂池建設に伴い盛岡市教育委員会により平成12年６月９日～12月13日にかけて2,161㎡が調査されている。調査地は、調査区東部から北東へ約40ｍの地点である。検出遺構は、縄文中期竪穴住居跡１棟（※複式炉持つことから中期後半と推定される）・炉跡１基・土坑５基、縄文後期土坑55基・大形柱穴10個、晩期土坑28基・配石32基・埋設土器５基、その他に縄文中期～晩期の柱穴127個、近世の竪穴状遺構などがある。遺物は、縄文中期２箱（コンテナ）、縄文後期42箱、縄文晩期39箱出土している（盛岡市教育委員会：2000年※現地説明会資料参照）。

＜第５次調査＞一般国道106号都南川目（川目工区）工事に伴い（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターにより平成18年８月１日～11月２日と平成19年４月10日～11月29日にかけて調査が行われ、また平成20年度も継続調査が予定されている。本次調査区の東側に位置し、第１次調査地の南地続きに相当する地点である。配石遺構をはじめ多数の遺構や多量の遺物が検出されている。

３　基　本　層　序

遺跡の基本層序については、本次調査に先行して平成18年度に調査着手した第５次調査の成果を基礎データとし、それに調査開始初期に掘削した試掘トレンチの土層観察を加味して区分・設定した。

Ⅰ層…表土：縄文時代以降現代までの堆積層（水田耕作土や現代盛土含む）　層厚20～250㎝　全体的には水田造成に伴う現代盛土が主体である。中・近世の文化層については、調査区東部の柱穴群を検出した黒褐色シルト層に、その可能性は窺えるものの、明確な認知・判断はできなかった。

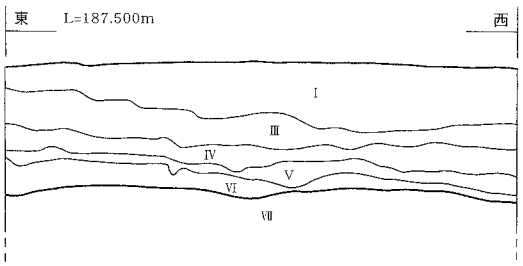
Ⅱ層…黒褐色シルト：縄文時代晩期　第５次調査で縄文時代晩期の遺物包含層とした土層である。第５次調査区と隣接する付近（第６次調査区東部）で確認される可能性を示唆し、準じて本層名を採用した経緯がある。結果として第６次調査では認知・検出できなかった。

Ⅲ層…暗褐～黒褐色シルト：縄文後期全般～晩期前半　層厚０～20㎝　今回の調査地では、広く分布が認められるものの、水田造成に伴い削平を受け局所的に残存する。

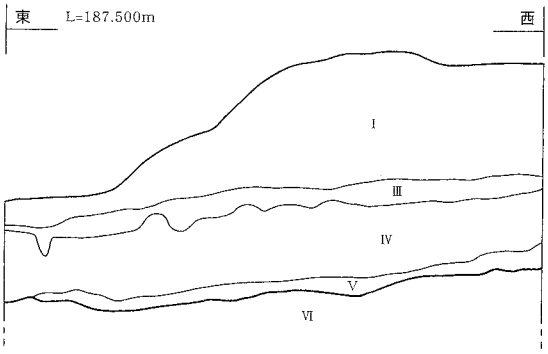
Ⅳ層…黒～黒褐色シルト：縄文前期～後期前半　層厚20～50㎝　基本的には調査区ほぼ全域にみられる。大木１・２・５・７～10式・後期前半の土器が主体的に出土した。調査区南西部においては大木５式が主体的に出土し、調査区西部は大木９・10式を主体に後期・晩期が少量出土した。調査区中央部捨て場部分は、同層より大木５式が多量に出土した。調査区東部は、後期前半（初頭～前葉）を主体に中期中葉～末葉と後期中葉が出土している。十和田中掫テフラ（※Ｔｏ－Ｃｕ　前期中頃の降下と考えられる）と推定される黄橙色～浅黄橙色の粉末状のテフラは、調査区南西部・中央部・東部で局所的に確認されたが、調査区南西部においては本層中の中位～下位でブロック状に確認される。

Ⅴ層…暗褐色シルト：縄文早期～前期初頭？　層厚０～30㎝　調査区南西部や調査区中央部捨て場など高位の面にみられ、調査区東部などの低位の面では確認できない。オレンジ色のパミス様（掘切火山灰？、早期後半～前期初頭）を局所的に含む。このオレンジパミスは、二次堆積と考えられるものの、Ｔｏ－Ｃｕを含むⅣ層よりは確実に下位にみられることから、前期中葉より古い降下テフラと判断される。縄文時代早期中葉の土器が出土している。

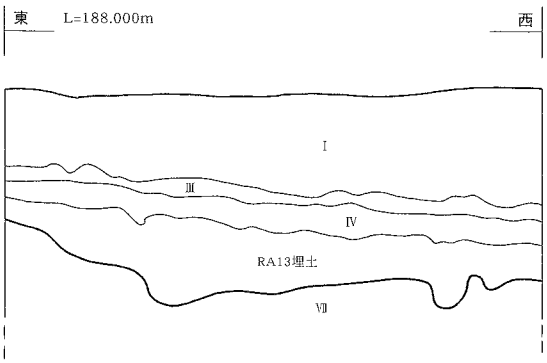
①南西部(境)



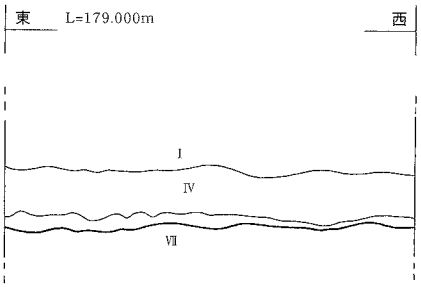
②第8トレンチ



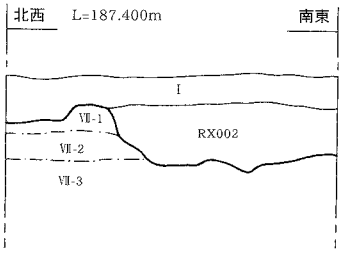
③西部



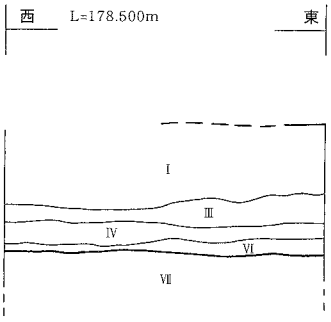
④中央部

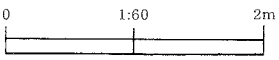


西部



東部





第6図　基本土層

Ⅵ層…褐色粘土：無遺物層　層厚０～10cm　Ⅴ層とⅦ層の漸移層と思われる。調査区南西部においては、ＲＡ003とした早期中葉の竪穴住居跡はオレンジパミスを含むⅤ層相当を埋土とし、壁はⅥ層を切り構築されている。このことから、このⅥ層とした土層は、早期中葉より古い時期に形成された層であることがわかった。
Ⅶ層…黄褐～明黄褐色粘土・褐色砂質粘土：地山　地点や深度によって顔つきに相違があり、良好な粘土層を形成する部分、砂礫の部分、砂質粘土などにより構成される部分など、その様相は様々である。傾向としては、調査区西部など標高が高い部分は比較的良好な粘土層がみられるのに対して、調査区東部など標高の低い部分では砂質帯びた粘土が主にみられる。土取り穴が検出された調査区西部については、地山上位をⅦ層－１（※地山１）、地山中位をⅦ層－２（地山２）、地山下位をⅦ層－３（地山３）と命名・細分し、胎土分析の採取に反映させている。

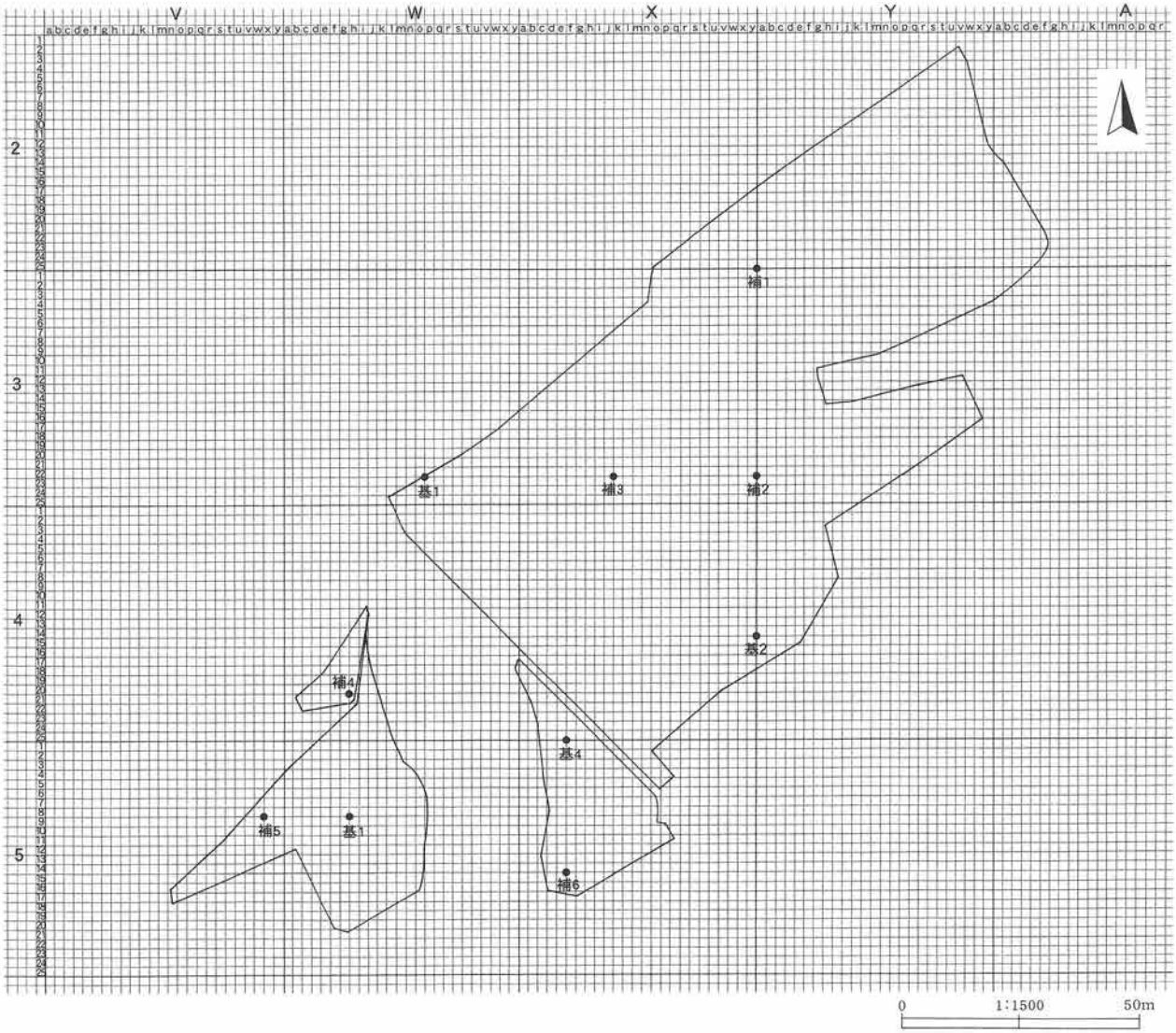
４　各調査区の土層堆積様相と調査で判明した旧地形について

遺跡の内容や基本層序把握のため、調査開始初期において調査区を網羅するように44本の試掘トレンチを設定し、掘削を行った。ここでは、それらトレンチから得られた情報をもとに、判明した旧地形や土層の堆積様相について、調査区毎に記述する。
＜調査区西部＞調査区西部の現況は、水田と農作業道であった。第１～４トレンチを設け試掘を行った。何れのトレンチ箇所においても、現代の水田耕作土が約20cm、その下位に５～10cmの水田床土（酸化鉄の集積が顕著）がみられる。さらにその下位に水田造成に伴う現代盛土が厚く堆積する（※地権者によると昭和40年代に水田として造成したらしい）。第１トレンチ付近では、水田床土を除去した段階で、黄褐色粘土による地山層が直に表れる。第２～４トレンチでは、水田床土を除去した段階で現代盛土が100～250cmの厚さで全体にみられ、その下位にⅢ層の堆積が層厚約５cmで所々に、そしてその下位でⅣ層が20～40cmで堆積する。Ⅳ層の下位にはⅤ層は認められず、Ⅵ層若しくはⅦ層（地山）となる。なお、実際の掘削作業は、第１トレンチは全て人力で行ったが、第２～４トレンチは上記のとおり現代盛土が100～250cmと非常に厚く、そして硬いため、途中からは重機を用いて行った。
調査区西部の旧地形や土層の堆積状況を総括すると、元々の旧地形は南西→北東方向に傾斜した後、微平坦化した舌状の段丘にある。水田造成に伴い平坦面の拡張化を意図して、南西側を削平し、その際に生じた排土を北東側に寄せ盛土している。従って、北東方向ほど盛土が厚い。そして遺構や遺物包含層（Ⅲ層とⅣ層）の残存状況についても、盛土が厚い北東側ほど良好にある。Ⅲ層は、全体的には削平を受けるが、第３トレンチや第４トレンチ付近でわずかに残存する。Ⅳ層は、第１トレンチなど南西側では削平が著しいものの、その他の地点では比較的良好に残存する。なお、調査区全体的にⅡ・Ⅴ層は確認されず、Ⅰ層（表土・耕作土・盛土）を除去した段階でⅢ層・Ⅳ層若しくは直に地山Ⅶ層が表れる。そして、削平されていない部分ではⅣ層直下でⅥ層（漸移層）若しくはⅦ層（地山）がみられる。また、本調査区のⅦ層黄褐色粘土層（地山）は、基本層序の項で上記したとおり、上位、中位、下位で土質に差異があり、上位からⅦ層－１→Ⅶ層－２→Ⅶ層－３と命名した。詳しくはⅣ章土取り穴の項で述べるが、Ⅶ層－２とした地山中位に、粘性の強い良好な粘土層が観られる。
＜調査区南西部＞調査区南西部の現況は水田で、調査地外南側から続く一連の棚田で、調査地はほぼ１枚の水田部分にあり現況はほぼ平坦であった。第５～10トレンチを設け試掘を行った。その結果、現代の水田造成に伴う盛土は、第５・６トレンチでは60～70cm、第８・９トレンチでは約100cm、第10トレンチでは150cmを超える。Ⅲ層は、斜面上方側となる第５～８トレンチにおいて、10～30cmの

層厚でみられ、遺物は後期・晩期が極少量含まれる。Ⅳ層は10～70cmの層厚で調査地ほぼ全面に見られ、特に第７～10トレンチでは平均50cmの層厚を測る。黄橙色粉末状のＴｏ－ＣｕテフラはⅣ層中位～下位において、ブロック状で混入がみられる。Ⅳ層からの出土土器は大部分が前期後葉で、次いで量的には中期末葉、後期前葉、前期前葉、早期中葉の順に少量含まれる。主体を占める前期後葉の土器は、Ｔｏ－Ｃｕテフラの上位で出土している。また、早期中葉の土器は、オレンジパミスの混入するＶ層からの出土が顕著であった。

調査区南西部の旧地形や土層の堆積状況を総括すると、旧地形は南東から北西方向に傾斜する緩斜面地で、調査地の中央付近は沢状に深く窪む部分もある。Ⅰ層→Ⅲ層→Ⅳ層→Ⅴ層→Ⅵ層→Ⅶ層が調査地全体的にみられ、特にⅣ層は前期後葉を中心とした遺物の包含が顕著である。また、Ⅴ層は、斜面上方側である南側で比較的良好な堆積を確認でき、また本層中には粒径５～10㎜のオレンジパミス（堀切テフラ？）の混入が顕著にみられる。遺構は、基本的にⅥ層若しくはⅦ層まで掘削した段階で検出した。

＜調査区中央部＞調査区中央部は、第11～35トレンチを設け試掘を行った。現況は、小起伏山地の急斜面部～山際の緩斜面部までは森林で、それより下位は水田・畑地・宅地である。山際や低地部分では重機と人力での掘削を併用したが、急斜面部などについては調査の安全性を優先し重機により作業道を作りながら掘削した後、人力で土層断面やトレンチ底を平に整える作業を行った。第11～14トレンチは小起伏山地の西向き斜面部に相当する部分で、Ⅰ層→Ⅳ層→Ⅵ層→Ⅶ層の順に堆積する。この地点においては、Ⅳ層は全般に薄く遺物は確認できない。また、Ⅳ・Ⅵ～Ⅶ層は崖水性の堆積物と考えられる径１cmほどの角礫を比較的多く含む傾向にある。第15～22トレンチは小起伏山地の北向き斜面部に相当する。第15～17トレンチが標高201～205m、第20～22トレンチが190m前後に相当する。この部分においても、西向き斜面と同様にⅠ層→Ⅳ層→Ⅵ層→Ⅶ層の順に堆積するが、Ⅰ・Ⅳ層が比較的厚く堆積する。遺物はⅠ層より前期後葉の磨滅した土器小片と石器・フレークが数点出土した。第23・24トレンチ付近は北西向きの斜面地に相当する。角礫を含むⅣ層相当の黒褐色シルト層が比較的厚く堆積するものの、遺物は確認できなかった。第25・26トレンチは、山際の斜面傾斜変換点に相当する。Ⅰ層・Ⅲ層・Ⅳ層・Ⅴ層が比較的良好に堆積し、Ⅲ～Ⅳ層・Ⅳ層からは縄文前期後葉が、Ⅴ層からは早期中葉の土器が出土している。これらの状況から、この第25・26トレンチ周辺に広がるⅣ層は、前期後葉の土器を密に包含する遺物包含層であることがわかり、併せて該期の捨て場と判断された。従って、遺物包含層の分布する範囲を調査区中央部捨て場（※土器の観察表上は「中央部捨て場」と簡略して表記している）と命名し、精査を行った。第27トレンチは、第25・26トレンチ部分より一段低い平坦地で、同トレンチの南側付近は、地下水が溜まる低湿地の状況にあった。調査の結果、旧水田跡であることがわかり、Ⅲ層やⅣ層の遺物包含層は認められず、Ⅰ層を除去した段階でⅦ層が直に表れる。このことから、水田造成に伴い旧地形は削平されていることがわかった。第28トレンチは、西側では第27レンチと同様に旧水田跡でⅦ層まで削平を受けるが、東側や北東側ではⅠ層中より土器小片が少量出土した。これらの状況から、調査地外北側の畑地・宅地部分では、Ⅲ層やⅣ層の遺物包含層が分布・残存することが示唆される。なお、第28トレンチより東は、現代盛土が厚く、下位は掘削が及んでいない状況でⅣ層は比較的良好に残存していた。ただし、遺物量は少量であった。第29～35トレンチは、山際に相当する。第29トレンチ及びそれより北側や北東側の周辺では、縄文晩期初頭～前葉を主体に前期後葉～晩期前葉までの遺物を含むⅢ層やⅣ層が良好に堆積する。なお、この付近の山際においては、Ⅳ層最下位にＴｏ－Ｃｕが層状に比較的広範囲で認められる（※おおよそ３Ｙ13ａ～13ｇグリッドより南側の山際で認められる。それより北側では認められない）。第30～35ト

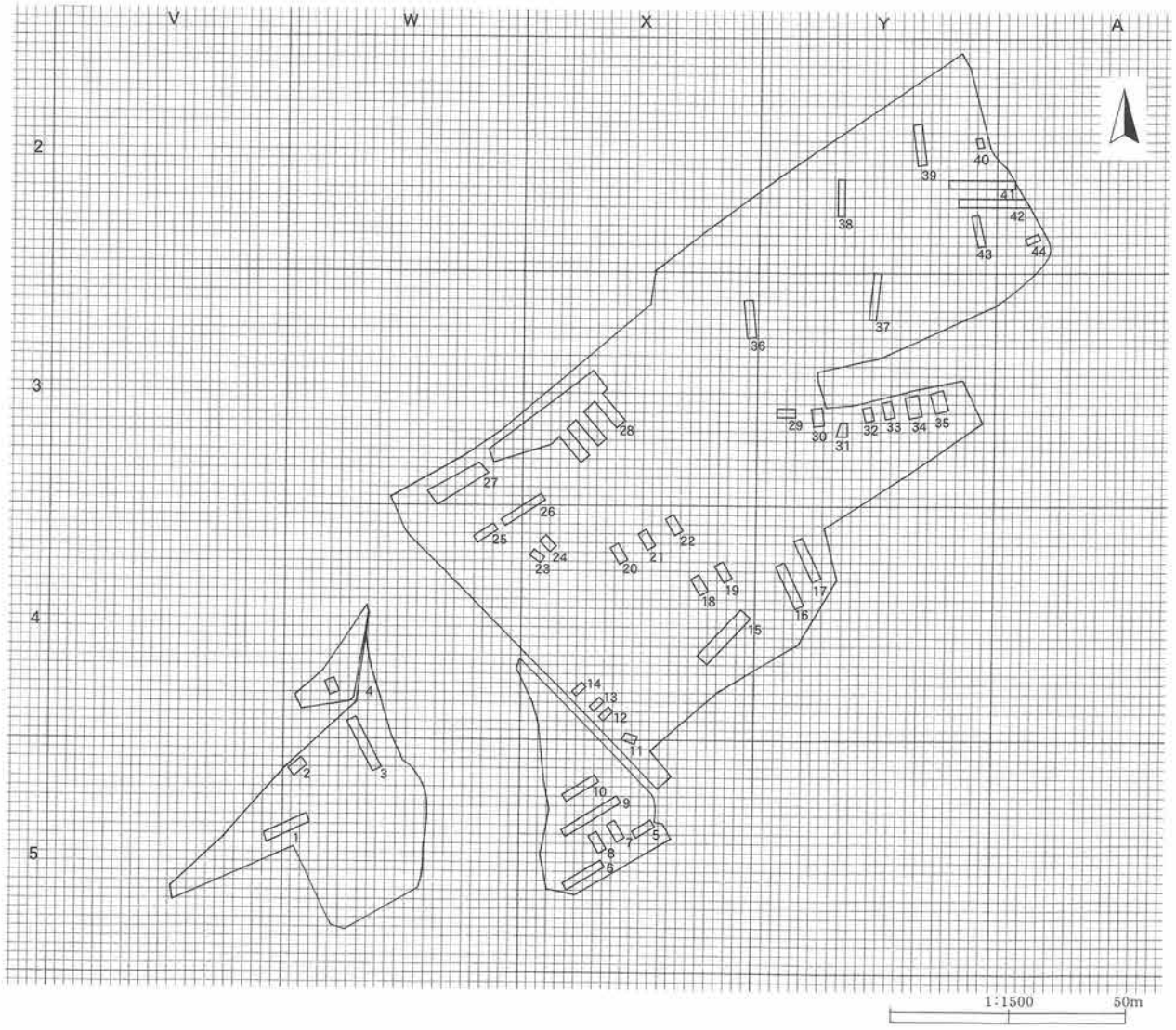


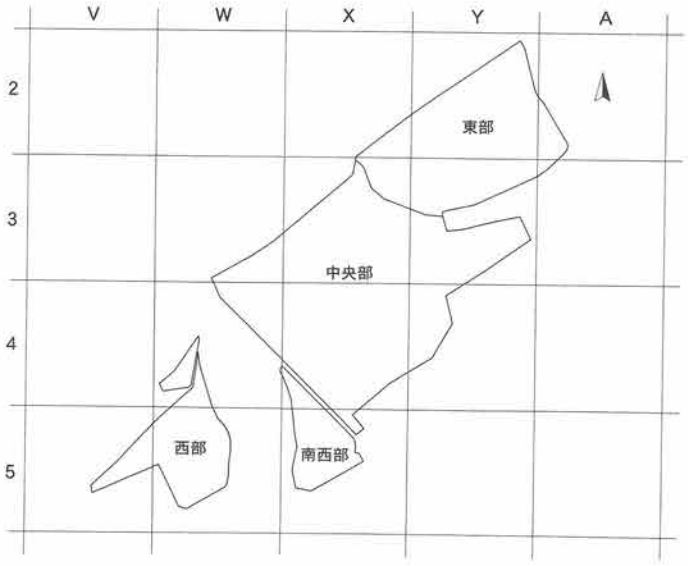
基1	X＝−36,244.000	Y＝32,830.000	H＝178.678m
基2	X＝−36,280.000	Y＝32,900.000	H＝205.155m
基3	X＝−36,316.000	Y＝32,814.000	H＝187.579m
基4	X＝−36,300.000	Y＝32,860.000	H＝184.928m
補1	X＝−36,200.000	Y＝32,900.000	H＝177.620m
補2	X＝−36,244.000	Y＝32,900.000	H＝187.546m
補3	X＝−36,244.000	Y＝32,870.000	H＝180.095m
補4	X＝−36,290.000	Y＝32,814.000	H＝185.420m
補5	X＝−36,316.000	Y＝32,796.000	H＝187.657m
補6	X＝−36,328.000	Y＝32,860.000	H＝186.256m

※上記の数値はすべて世界測地系による

第7図　グリッド配置図

4　各調査区の土層堆積様相と調査で判明した旧地形について





第8図　トレンチ位置図

レンチは、山際に相当する部分である。概ねⅠ層→Ⅳ層→Ⅶ層の順に堆積し、Ⅰ層やⅣ層は薄い。第34トレンチ掘削時に縄文後期の比較的大きな土器片が２点出土したことから周辺を掘り広げたが、遺構は確認できず、更なる遺物出土もなかった。

調査区中央部の旧地形や土層の堆積状況を総括すると、岩手県教育委員会の試掘回答から第21トレンチ付近の急斜面部分で土坑らしきプランが確認された情報を得られていたが、調査の結果からは木根撹乱と、電柱を固定させるためのワイヤを設置した旧アンカー埋設痕と判断された。急斜面地であることと、遺構・遺物ともに検出される可能性が極めて低いと判断されたことから、岩手県教育員会と協議し、山の斜面部分（概ね標高182m以上の部分）については、中央部捨て場部分を除き、全面に亘る掘削は行っていない。しかしながら、極少量ではあるものの、第18・22トレンチ付近の急斜面地部分で前期後葉の土器が確認された事実から（遺構は未検出）、斜面の上方である小起伏山地の頂上付近（尾根上）からの流れ込みの可能性がある。このことは、小起伏山地の頂上付近に該期の遺跡が存在する可能性も考えられる。遺物を包含するⅣ層は、山際で斜面傾斜変換点付近の一部で分布が認められるが、捨て場とした空間以外は、少量の出土に留まる。

＜調査区東部＞調査区東部の現況は、水田、用水路、農作業道などであった。第36～44トレンチを設け試掘を行った。第40～42トレンチ東端付近のⅢ層からは、比較的多くの縄文後期～晩期の遺物が出土しているが、第41・42トレンチ部分では水田に水を供給する水路設置に伴い現地性を保っていない。従って、人為による再堆積層と判断された。Ⅳ層は第40～44トレンチを中心に良好に堆積が確認され、特に第40トレンチ周辺では多量の遺物が出土した。第36～39トレンチでは、Ⅲ層は残存せず、またⅣ層は旧沢や風倒木痕に関連した窪み状の部分以外は全般に薄い状況にある。遺物量は地点により若干差異があるものの、全般的には多くない。また、第38トレンチと第39トレンチの間付近は、中・近世と推定される竪穴建物跡２棟と多数の柱穴を検出しているが、この付近の黒褐色土の掘削時に縄文中期・後期の土器が一定量以上出土したことから、当初Ⅳ層と捉えた経緯がある。しかしながら、この黒褐色土層下位より上記したような中・近世の遺構が検出されている状況を鑑みると、プライマリなⅣ層ではなく、後世の再堆積である部分を含む可能性が高い。

調査区東部の旧地形や土層の堆積状況を総括すると、旧地形は南東から北西方向に緩く下る微平坦地であったと推定され、旧沢に関連した浅い流路が複数条確認できる。また、各所に縄文時代晩期以降と推定される風倒木痕が点在する。草間俊一氏による昭和30年（第２次調査時）の地形図をみると、本次調査地部分は水田で、第５次調査区は畑地となっている。従って、昭和30年頃と現在では土地の利用にほとんど違いがないことを窺えるが、この内容は旧地形の違いにも関連する可能性が考えられる。Ⅲ層とした後期全般～晩期前半の遺物包含層は、水田造成に伴い削平が著しく、東端付近の一部や水田畦部分などに残るのみである。Ⅳ層は、全般的にみられるものの、第５次調査区と近接する東側ほど残りが良く遺物量も多い。対して、西側や北西側は層厚が薄く、全般的に遺物量も少ない傾向で捉えられる。なお、先にも上記したとおり、Ⅱ層に相当する文化層は、明確には認知できなかった。また、中・近世の柱穴状土坑を密に検出した中央～北にかけては、認知できなかった中・近世の文化層が分布していた可能性があり、併せてⅢ層・Ⅳ層の遺物包含層や縄文後期・晩期の配石・集石類の遺構についても、中・近世段階で破壊されていた可能性が考えられる。

Ⅲ　調査方法と整理方法

1　野　外　調　査

（1）調　査　面　積

川目Ａ遺跡第６次調査の調査面積は、当初の調査予定面積は10,900㎡であったが、６月の現地協議で調査区西部の南続き部分とそれに隣接する農道部分の、合わせて572㎡が追加となった。最終的には11,472㎡の調査を行った。

（2）調査区の区割設定

川目Ａ遺跡の区割設定は、世界測地系（平面直角座標第Ｘ系）を座標変換した調査座標を用いて、調査区全体を網羅するよう設定した。川目Ａ遺跡の調査座標原点は、第５次調査で採用したＸ＝−36,100.000、Ｙ＝32,950.000（世界測地系）を起点とした。その上で、盛岡市教育委員会の方針に準じ、ここを基点として一辺50mの大グリッドを設定し、さらにこれを一辺２mの小グリッドに区割した。グリッドの名称について、大グリッドは原点から南に算用数字の１→２→３‥と、東にアルファベットのＡ→Ｂ→Ｃ…と付し、Ａより西に向かっては50m単位でＹ→Ｘ→Ｗと定めた。従って、「４Ｗ」・「４Ｘ」・「１Ａ」・「２Ａ」のようにあらわした。小グリッドは、北から南へ算用数字の１～25、西から東へアルファベットのａ～ｙを付し、上記した大グリッドと組み合わせて「４Ｗ１ａ」・「４Ｘ１ａ」・「１Ａ１ａ」・「１Ａ１ｂ」のように表した。ただし、実際の区画設定には以下の基準点４点と補点６点を打設して、これら調査杭を設置する時分の基準として用いた。

基１	Ｘ＝−36,244.000	Ｙ＝32,830.000	Ｈ＝178.678m（世界測地系）	３Ｗ23ｐグリッド
基２	Ｘ＝−36,280.000	Ｙ＝32,900.000	Ｈ＝205.155m（世界測地系）	４Ｙ15ａグリッド
基３	Ｘ＝−36,316.000	Ｙ＝32,814.000	Ｈ＝187.579m（世界測地系）	５Ｗ９ｈグリッド
基４	Ｘ＝−36,300.000	Ｙ＝32,860.000	Ｈ＝184.928m（世界測地系）	５Ｘ１ｆグリッド
補１	Ｘ＝−36,200.000	Ｙ＝32,900.000	Ｈ＝177.620m（世界測地系）	３Ｙ１ａグリッド
補２	Ｘ＝−36,244.000	Ｙ＝32,900.000	Ｈ＝187.546m（世界測地系）	３Ｙ23ａグリッド
補３	Ｘ＝−36,244.000	Ｙ＝32,870.000	Ｈ＝180.095m（世界測地系）	３Ｘ23ｋグリッド
補４	Ｘ＝−36,290.000	Ｙ＝32,814.000	Ｈ＝185.420m（世界測地系）	４Ｗ21ｈグリッド
補５	Ｘ＝−36,316.000	Ｙ＝32,796.000	Ｈ＝187.657m（世界測地系）	５Ｖ９ｘグリッド
補６	Ｘ＝−36,328.000	Ｙ＝32,860.000	Ｈ＝186.256m（世界測地系）	５Ｘ15ｆグリッド

（3）粗掘り・遺構検出

調査開始と同時に調査区内に試掘トレンチを設定し、人力で掘削して土層の堆積状況及び遺構検出面の確認に努めた。その結果、調査区西部や南西部は水田造成時の整地に伴い盛土が施されている部分が多く、また調査区東部などは水田造成時の削平が著しいことがわかった。その後、重機（バックホー）を用いて表土（主に水田耕作土や盛土）を除去した。表土除去後、人力で鋤簾、移植ヘラを用

いて遺構の検出を行った。

（4）遺構の命名

検出された遺構は、検出順に○号住、○号土坑などと命名したが、報告書では盛岡市教育委員会の方法に準じ、以下のとおりの略称に付け直している。なお、野外調査、室内整理ともに旧遺構名で行っており、図面表記、遺物の注記などは旧遺構名である。遺構名対照表を掲げておく。柱穴状土坑は、遺構略号をつけ直さず、野外調査時に付した遺構名で掲載・編集した。なお、野外調査時は検出順に1号柱穴状土坑から512号柱穴状土坑まで番号を付したが、遺構名を命名した後に実際の精査で木根撹乱と判明したものなどは遺構登録から抹消した。従って、実際の柱穴数は404個となり、所々欠番が生じている。その内容は、第2表を参照いただきたい。

（5）精　　査

竪穴住居跡の場合はQ1～Q4に4分割したラインに沿って十字に幅25～40cm程度のトレンチをあけ、土層の堆積状況を把握した上で、上層から1層ずつ掘り下げ、埋土中および貼り床内の遺物はできるだけ層ごとに取り上げた。土坑は2分割して、原則として底面などの遺物は残して、土層記録後に、残る半分を精査する際に層ごとに取り上げた。焼土・集石・埋設土器などは、検出状態の記録を作成後に断ち割り、断面図を作成した。実測は簡易遣り方測量で行った。現場で作成した実測図は、平面図、断面図ともに基本的に1／20で作成したが、炉断面や焼土などに関しては1／10で作成している。なお、補足として、調査区東部の集石や柱穴は株式会社ラングによるデジタル測量を実施し、遺構の平面図や遺構配置図作成に活用した。写真撮影は、6×7cm判のモノクローム1台と35mm判モノクローム1台、35mm判リバーサル1台、デジタルカメラの4台で行った。原則として報告書掲載用の写真はすべてを使ったが、遺物出土状況のアップ、柱穴などに関しては6×7cm判、35mm判リバーサルを省略したものもある。デジタルカメラは、すべてのカットについて撮影したほか、メモ的な写真にも活用している。デジタルカメラの写真は、現地説明会資料、遺跡情報（財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターホームページに掲載）などにも使用している。航空写真撮影は、調査終了部分を排土置き場とするため、9月4日と11月16日の2回にわたって、セスナ機により行い、6×7cm判、35mm判リバーサルの2種類を撮影した。

第2表　川目A遺跡遺構番号表

遺構	略号	4次調査	6次調査	6次調査遺構数	6次調査備考
竪穴住居跡	RA	001～002	003～017	15棟	縄文早・前・中期
掘立柱建物跡	RB	なし	001～004	4棟	近世と推定される
柱穴列	RC	なし		なし	
土坑	RD	001～102	103～163	61基	
竪穴建物跡	RE	001	002～003	2棟	掘立柱建物跡より古い
炉・焼土	RF	なし	001～010	10基	内訳は炉跡1基・焼土9基
溝	RG	なし		なし	
配石・列石・集石・立石	RH	001～032	033～051	19基	集石18基・立石1基　※中近世の集石含む
井戸	RI	001		なし	
埋設土器	RP	001～005	006～007	2基	縄文中期末葉1基、弥生前期1基
土取り穴	RX	なし	001～007	7箇所	時期は縄文。
その他	RZ	なし		なし	
柱穴	柱穴状土坑	なし	404個	404個	縄文約80個、中近世324個。遺構名は1～517号柱穴状土坑と命名し、所々欠名がある。

（6）啓蒙普及活動関係

野外調査時において実施した普及活動は、現地説明会、発掘調査体験学習、遺跡見学会などを実施した。また、平成20年８月に実施された岩手考古学会研究大会で、粘土採掘坑に関わる内容を発表している。

2　室　内　整　理

（1）遺　構　図　面

野外調査時に作成した遺構図面（第一原図）は、平面図、断面図ともに縮尺１/20を原則とし、必要に応じて１/10、１/40、１/100で作成を行ったものもある。それらの他に、上記した株式会社ラングによるデジタル測量により作成した。整理作業において、それらを修正・合成した第二原図を作成し、トレースを行った。

（2）遺　　物

遺物は、洗浄（遺物水洗）と出土地点ごとの仕分け作業までを現場で野外調査と並行して進めた。遺物の登録・収納に際しては、個々の遺物に登録番号（仮番号）を付けた。掲載遺物については、登録番号から掲載番号に変更して、報告書に示した。なお、不掲載とした遺物は全て仮番号で収納している。

＜土器類＞土器類については、水洗後に袋単位で通し番号を付けて重量の計測と登録作業を行った。その際に、袋に付けた通し番号は、注記番号として採用した。選択基準は、①残存率の良いもの②遺構の時期推定になる層位的資料③口縁部資料④文様が明瞭な資料⑤希少な資料⑥破片が大きいなど残存状態の良好なもの、などの順に優先し1,100点を選び、仮番号１～1,100を付け登録した。掲載遺物としては、登録したものの中で、遺構の時期推定に欠かせないと判断したものなどを最優先とし、次いで遺構の埋没過程に関わると判断されるものなどを選択した。遺構外は、各時期の代表的なものを選択した。遺構内・外の立体・破片合わせて491点（掲載番号１～491）を抽出し、それに胎土分析を行なった13点（1041～1053）を合わせて、504点を掲載土器とした。なお、掲載土器は、仮番号を全て掲載番号に変更して収納しているが、登録した土器類の中で不掲載にしたものは、仮番号のままで収納している。また、その他大部分の不掲載土器は、上記した注記番号単位で収納している。掲載スケールは１/３を原則とし、器高若しくは口径が30cmを超えるものを１/４とした。

＜土製品＞179点出土した。それらは仮番号を添付し登録した後、62点（掲載番号501～563）を抽出し掲載した。選択基準としては、遺構出土と残存状態の良好なものを優先した。掲載スケールは１/２である。

＜石器＞総数で1,890点が出土した。それらは仮番号を添付し登録した。剥片石器は661点出土し、102点（掲載番号601～702）を掲載した。礫石器は1,229点出土し、195点（掲載番号703～897）を掲載した。掲載石器の選択基準は、遺構出土を最優先として、遺構外については代表的なものを掲載候補とした。ただ、遺構出土であっても、①欠損の著しいもの②未成品と推定したものについては、取捨選択を行った。掲載スケールは、剥片石器を１/２、礫石器を１/３や１/４とした。

＜石製品＞総数で249点出土した。それらは仮番号を添付し登録した後、83点を掲載した（掲載番号901～983）。選択基準は、遺構出土を最優先として、遺構外については代表的なものを掲載候補とし

た。ただ、遺構出土であっても、①欠損の著しいもの、②未成品と推定したもの、については取捨選択を行った。掲載スケールは１/２を原則とし、大きいものを１/３や１/４とした。
＜土師器・須恵器＞土師器３点、須恵器１点出土した。何れも小破片である。その内、土師器２点と須恵器１点を掲載した（掲載番号1001～1003)。掲載スケールは１/２である。
＜陶器類＞12点出土し、10点を掲載した（掲載番号1011～1020)。掲載スケールは１/２である。
＜金属製品＞総数で19点出土し､19点を掲載した(掲載番号1021～1039)。掲載スケールは１/２である。
＜胎土分析用土器＞文様などから帰属時期のわかるものの中から、各時期の土器13点を抽出し実施した（掲載番号1041～1053)。掲載スケールは１/３である。
＜琥珀＞滅菌シャーレ（動物遺存体と同じ型）で３サンプルを登録し、全て表掲載した。今回の調査では、総重量約５ｇが出土した。

（３）写真類の整理

撮影した遺構写真は、６×７㎝判モノクローム、35㎜判モノクローム、35㎜判リバーサルの種類ごとにアルバムに整理した。デジタルカメラで撮影したデータはＣＤ－Ｒに保存した。それらは、撮影カード順の写真台帳を作成した。写真図版作成に際しては、35㎜判モノクロームを主に６×７㎝判モノクロームとデジタルデータを補填的に選んで焼き付け作成している。
遺物写真は、原則として１点ごとに撮影番号を付して、デジタルカメラにより撮影した。これらを掲載縮尺に焼付け、掲載番号順に写真図版を作成した。

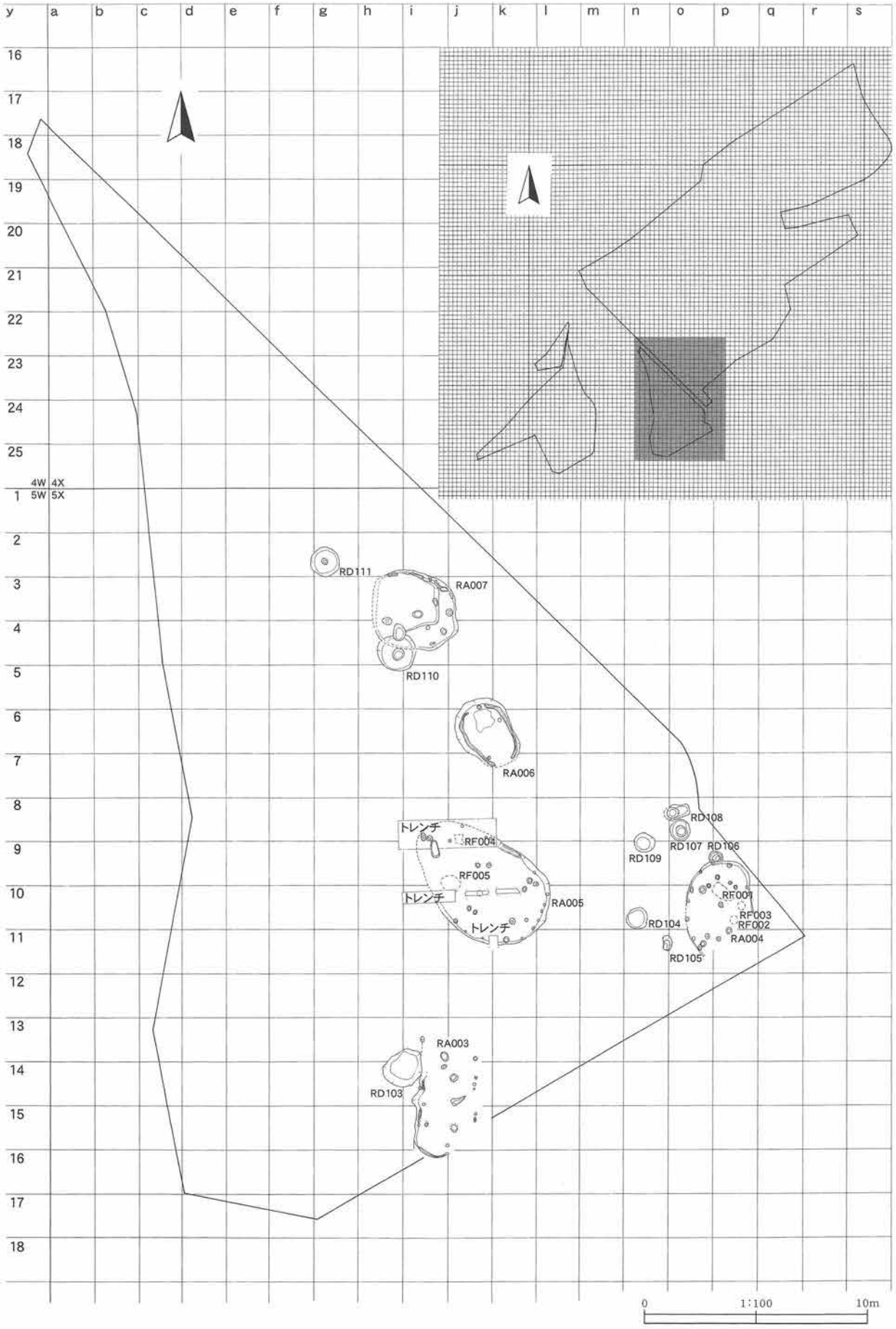
（４）報告書について

＜原稿執筆・編集＞報告書の執筆・編集は星と菅野が行った。
＜遺構の記載＞遺構の記載は、ＲＡ（竪穴住居跡)、ＲＢ（掘立柱建物跡)、ＲＤ（土坑)、ＲＥ（竪穴建物跡)、ＲＦ（炉跡・焼土)、ＲＨ（集石・立石)、ＲＰ（埋設土器)、ＲＸ（土取り穴)、柱穴状土坑、捨て場、の順に編集している。
＜遺物の掲載＞遺物掲載番号は、１～1,053を付け、遺物図版・遺物写真図版・遺物観察表とも同一の番号となっている。
＜遺構図版＞遺構図版は、１/50を基本とするが、遺構の性格に応じて適宜縮尺を変えている。但し、三角スケールで計測できる定型縮尺とし、挿図の右下にスケールを付けている。
＜遺物図版＞遺物図版は、土器を１/３を原則として突出して大きいものを１/４、土製品は１/２、石器は剥片石器１/２、礫石器１/３を原則とし突出して大きいものを１/５、石製品は１/２～１/４、で掲載した。なお、石器・石製品については、株式会社ラングに実測・編集を委託した。
＜遺構写真図版＞遺構写真図版の掲載順は、本文や遺構図版と同様である。
＜遺物写真図版＞遺物写真図版は、原則として遺物図版と同様の縮尺とした。

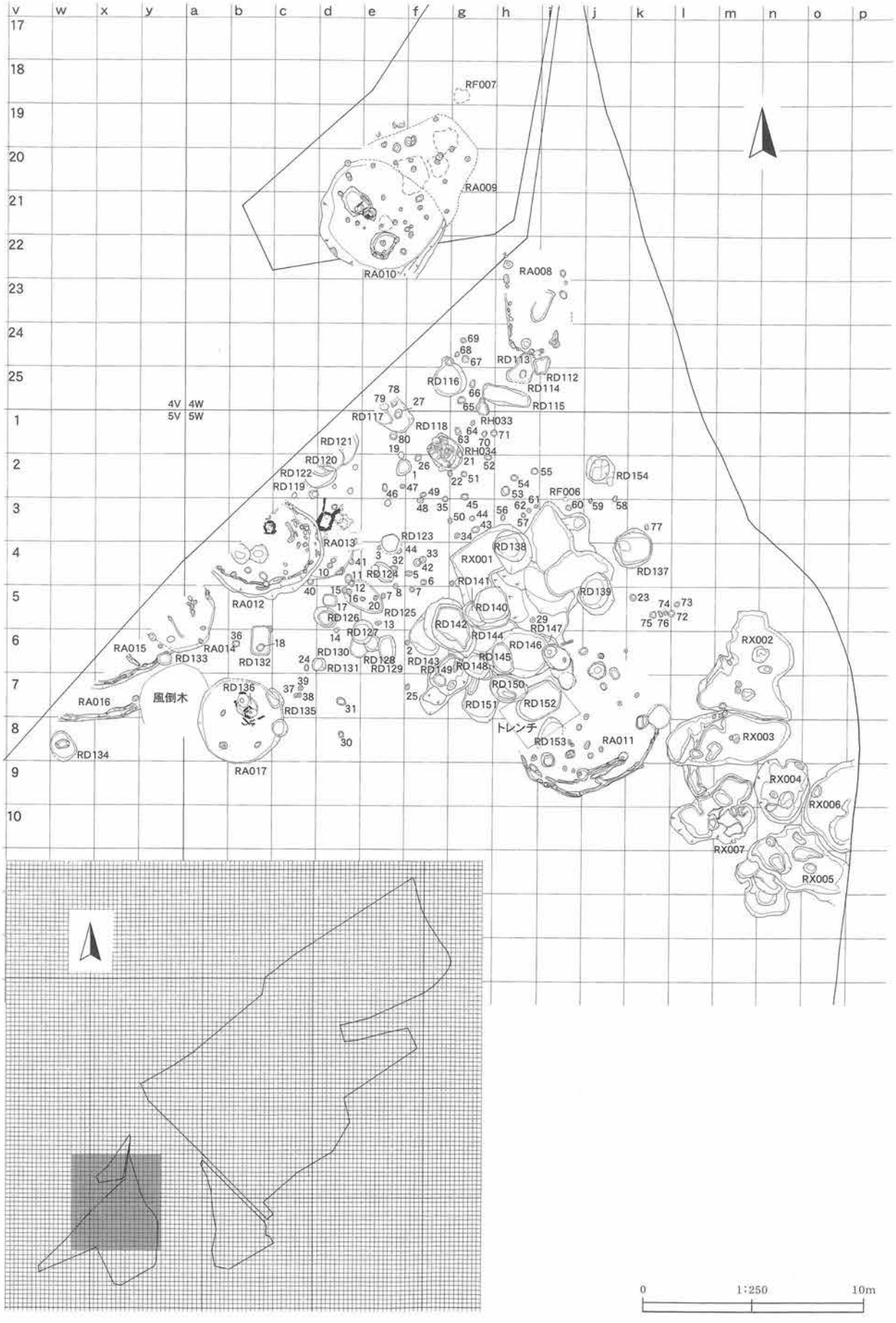
（５）観察表について

＜遺構観察表＞遺構の規模について、他の遺構や攪乱で著しく破壊を受けているものについては残存値に以上をつけて明示した。ただし、残存状況が特に悪いもの（１/３以下と捉えられるもの）については空欄としたものもある。
＜遺物観察表＞土器、土製品、石器、石製品などの法量値は、欠損する場合は残存部の数値を（　）で示した。土器破片については、口径などが推定できる場合のみ（　）で記載した。

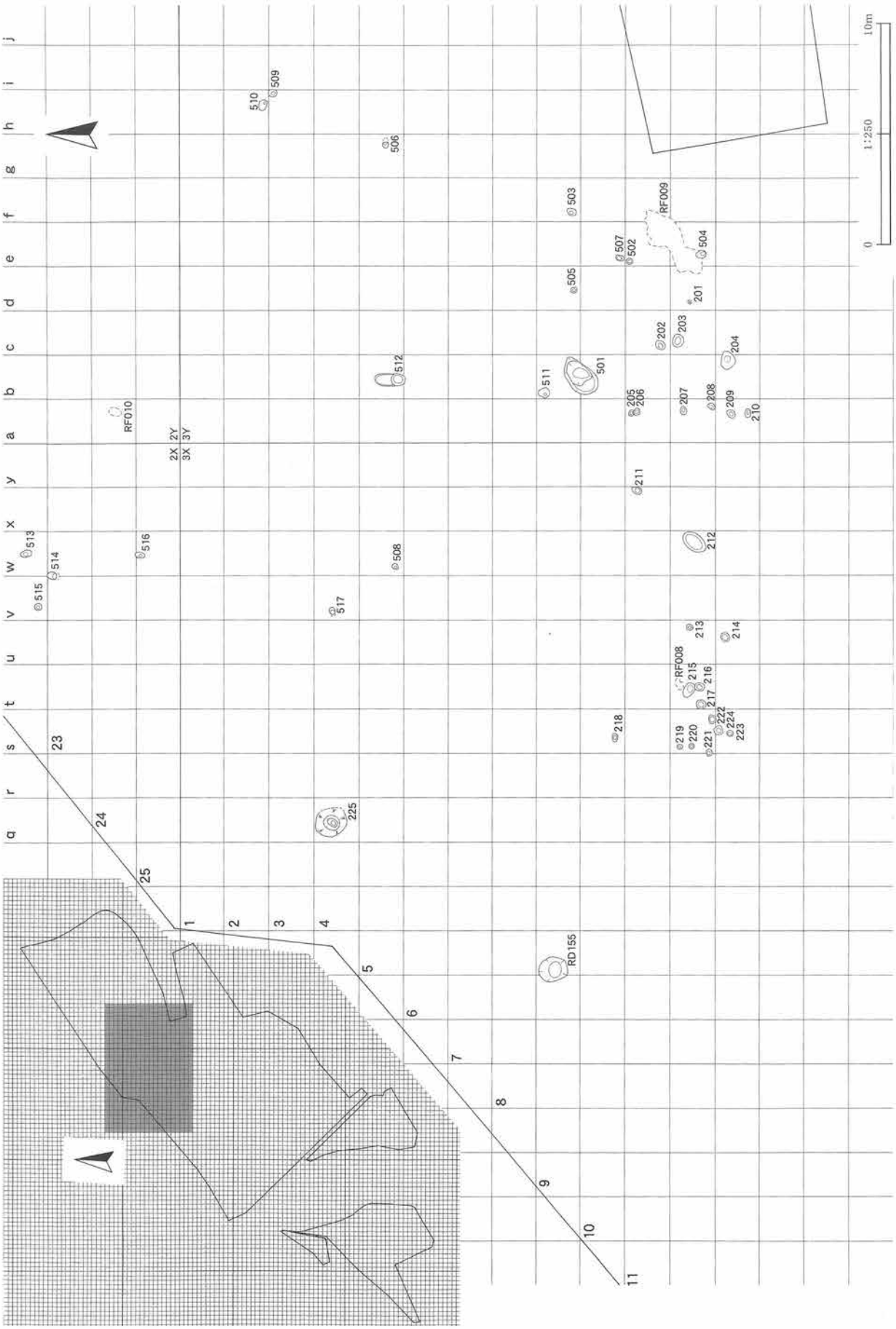
第９図　遺構配置図



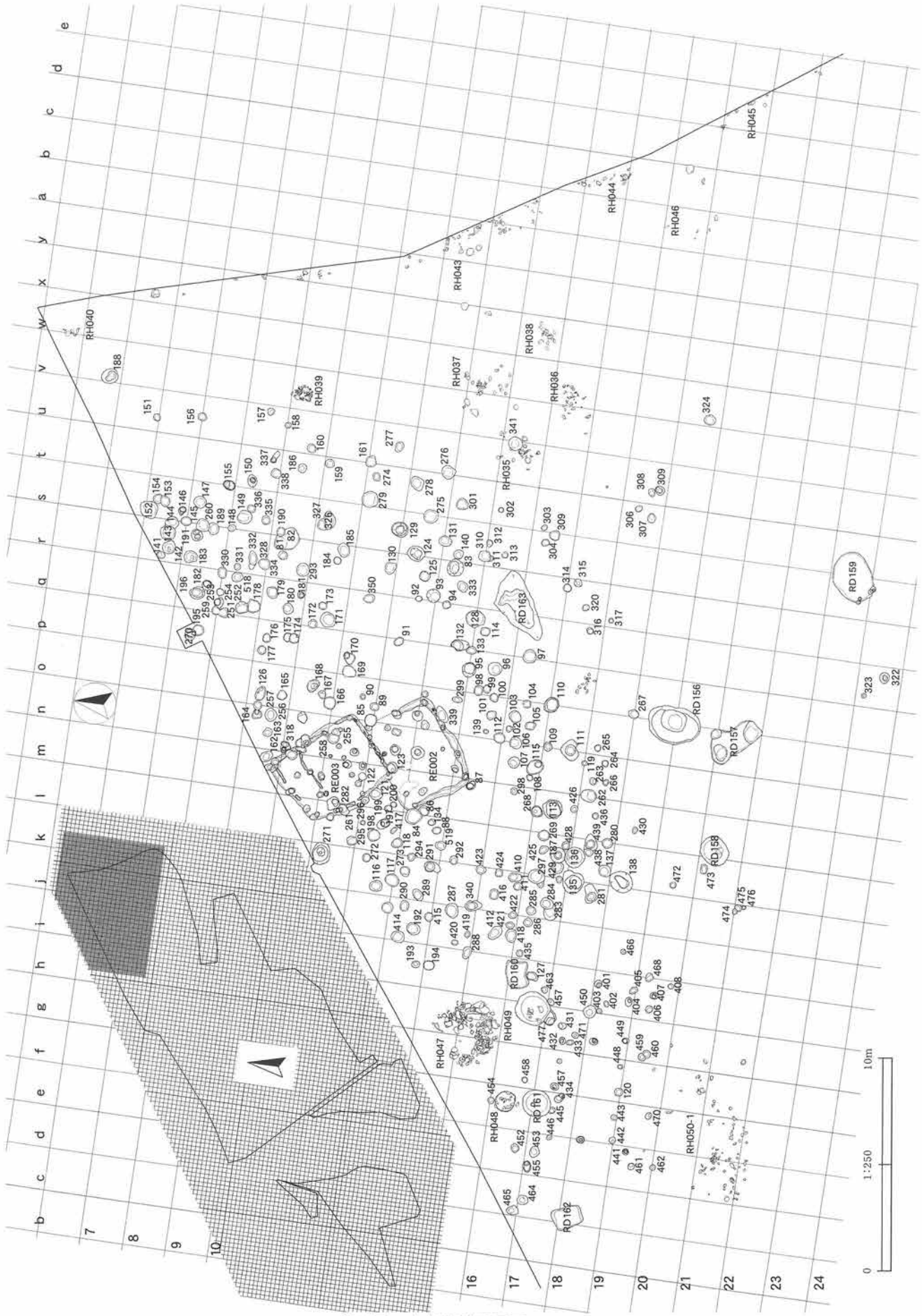
第10図　南西部遺構配置図



第11図　西部遺構配置図



第12図　中央部遺構配置図



第13図　東部遺構配置図

Ⅳ　検出された遺構

今回の調査では、竪穴住居跡15棟、掘立柱建物跡４棟、土坑60基、竪穴建物跡２棟、焼土９基、炉跡１基、集石・立石19基、土取り穴７箇所、柱穴状土坑404基、捨て場１箇所を検出した。

ここでは、遺構毎に記述する。補足として、本項における土層の記載に際しては、基本層序はⅠ～Ⅶ層のローマ数字を用い、個々の遺構埋土は１層・２層・３層・・などのアラビア数字を用いている。

1　竪穴住居跡

ＲＡ003竪穴住居跡（第14図、写真図版４）

＜位置・検出状況＞調査区南西部南端付近の５Ｘ13ｉ～15ｋグリッドに位置する。現況地形は微平坦地で、南東から北西方向にかけて緩く傾斜する。検出状況は、Ⅵ～Ⅶ層中において黒褐色シルトによる南北に長い方形の広がりとして把握した。

＜重複関係・建替え＞ＲＤ103に切られる。

＜平面形・規模・長軸方向＞平面形は、隅丸長方形と推定されるが、北壁と東壁が未検出なため明確ではない。規模も明確ではないが、長軸と捉えられる南北方向においては、南壁から北西端に位置するＰＰ４付近までで約5.3m前後を測る。短軸は、ＰＰ７・10・11・12・13など壁柱穴の可能性があるほぼ直線的に並ぶラインのやや東側が東壁と推定した場合、3.1m前後を測る。長軸方向は南－北と考えられる。

＜埋土＞１～11層に分層し、１層系は更に１ａ層・１ｂ層・１ｃ層に細分した。全体的には、黒褐色シルトを主体とし、黄褐色粘土ブロックとオレンジパミスが顕著にみられる。自然堆積と推定しておきたい。また、上記したオレンジパミスについては、秋田駒ケ岳を起源とする堀切テフラに相当する可能性がある。この堀切テフラの噴出年代としては、縄文時代早期末～前期初頭と推定されている。

＜床面・壁＞Ⅶ層地山を床面とする。貼り床や硬化面は認められない。やや凹凸があり、また南から北に向かって緩く傾斜する。壁の残存する南壁と西壁の一部分は、Ⅵ～Ⅶ層を壁とし、外傾気味に立ち上がる。壁高は、南壁や東壁付近で約28cmを測る。

＜炉＞検出されていない。

＜柱穴・付属施設＞15個検出した。状況から想定される柱配置は、ＰＰ４とＰＰ８が竪穴の中央付近に2.25mの間隔を持って位置し、東側に壁柱穴の可能性もあるＰＰ７・10・11・12・13など規模の小さい柱穴がほぼ一直線上に並ぶ。壁溝は南壁際の一部で認められる。

＜遺物＞（第74図、写真図版60）土器725ｇ、石器１点が出土した。[土器] １は略完形に復元された早期中葉明神裏Ⅲ式である。[石器] スクレイパー１点が出土した。不掲載とした。

＜時期＞出土土器から縄文時代早期中葉と推定される。また、埋土中に観られたオレンジパミスが堀切テフラであるならば、竪穴住居廃絶後の年代としては矛盾しない。

ＲＡ004竪穴住居跡（第15図、写真図版５）

＜位置・検出状況＞調査区南西部の５Ｘ９ｏグリッド付近に位置する。本遺構プランは調査地外南に延びる。検出面はⅥ～Ⅶ層中で、黒褐色シルトによる南北に長い隅丸長方形プランとして把握した。

＜重複関係・建替え＞ＲＤ106に切られる。また、本遺構の埋土上面においてＲＦ001～ＲＦ003の３

基の焼土遺構を検出している。竪穴自体の建て替えは看取できないが、柱穴同士に切り合いを持つもの（ＰＰ６がＰＰ７を切る）があることから考えて、柱の建て替えが行われている可能性が高い。
＜平面形・規模・長軸方向＞南側は調査区外へ延びることから詳細は不明であるが、平面形は隅丸長方形と推定される。調査部分で把握できた規模は、長軸4.2ｍ×短軸2.94ｍを測る。長軸方向は南－北と推定される。
＜埋土＞黒褐色シルトを主体とし、２層に分層した。自然堆積と考えられる。
＜床面・壁＞Ⅶ層地山を床面とし、ほぼ平坦である。貼り床は認められない。基本層序Ⅵ～Ⅶ層を壁とし、外傾して立ち上がる。検出面からの深さは約10cmを測る。
＜炉＞なし。
＜柱穴・付属施設＞20個検出した。柱配置は明確には掴めないが、古い段階の主柱がＰＰ１・ＰＰ12・ＰＰ15など、新しい段階の主柱がＰＰ２・ＰＰ13・ＰＰ11・ＰＰ６などに求められようか。ＰＰ７～18は壁柱穴と想定される。
＜遺物＞（第74図、写真図版60）土器81.35ｇが出土した。[土器] ２は口縁部に上面観で円形の突起を付加し、地文は単軸絡条体第１Ａ類が施文される。大木５式期に並行すると考えられる。
＜時期＞出土土器から縄文時代前期後葉と推定される。

ＲＡ005竪穴住居跡（第16図、写真図版６）
＜位置・検出状況＞調査区南西部の５Ｘ８ｉグリッド付近に位置する。検出面はⅦ層中で、黒色～黒褐色シルトによる隅丸長方形プランとして把握した。
＜重複関係・建替え＞本遺構の埋土中位においてＲＦ005を検出している。床面の嵩上げの状況から建て替えが１度行われている。規模の推移は定かではないが、縮小と判断される。
＜平面形・規模・長軸方向＞新しい段階は、平面形・規模ともに明らかにできなかった。古い段階は、平面形が卵形に近い形状で、規模は長軸6.82ｍ×短軸4.4ｍである。長軸方向は北西－南東である。
＜埋土＞１～８層に分層した。その内、１～２層とした黒褐色シルトが主堆積土で、それらは自然堆積である。２層中には局所的にＴｏ－Ｃｕの小ブロックの混入が認められる。３層は焼土層で現地性と捉えられる。４層とした土層の性格が明確にはわからなかったが、５層を含め、床面を嵩上げした貼床の可能性がある。
＜床面・壁＞床面は上下２面あると捉えた。新しい段階の床面は４層上面で、ほぼ平坦である。古い段階の床面は５・６層下の地山面で、南東から北西方向に向かってやや傾斜する。この地山層をわずかに掘り下げた段階で、浅黄橙色のテフラを検出した。層位・性状からＴｏ－Ｈ若しくはＴｏ－Ｏｆと推定される。深さは12～40cmを測る。
＜炉＞北西壁際に位置する。
＜柱穴・付属施設＞古い段階の床面より13個検出した。北西隅から土坑１基と、南東～南西壁際において壁柱穴と考えられる小穴を検出した。
＜遺物＞（第74・113・118・139図、写真図版60・97・102・121）土器2,500ｇ、石器６点、石製品１点が出土した。[土器] ３～９の７点を掲載した。３はＬＲとＲＬによる結束羽状文と横位の貼付隆線を特徴とする。４は単軸絡条体第１Ａ類木目状撚糸文、５・８・９は単軸絡条体第５類網目状撚糸文、６は０段多条ＬＲ横回転、７はＬＲ斜回転を施文する。その中で、６と７は胎土中に繊維の混入が確認できる。今回の調査で多量に出土した大木５式期の土器は、羽状縄文を施文するものがなく、また胎土中への繊維の混入も確認できない。従って、本遺構出土土器は、大木５式期より古いと判断

した。前期前葉大木２式に比定されると推定される。[石器] 石鏃１点、石匙１点、スクレイパー２点、特殊磨石１点、磨石１点が出土した。その内、601～603・703・704の５点を掲載した。[石製品] 901の石棒１点が出土し掲載した。
＜時期＞出土土器から縄文時代前期前葉と推定される。

ＲＡ006竪穴住居跡（第17図、写真図版７）
＜位置・検出状況＞調査区南西部の５Ｘ５ｊグリッド付近に位置する。検出面はⅦ層中で、黒褐色シルトによる隅丸方形プランとして把握した。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模・長軸方向＞平面形は隅丸方形、長軸3.28ｍ×短軸2.58ｍである。壁が良好に残存するのは北西壁から東壁にかけてで、長軸方向は、北西－南東である。
＜埋土＞黒色～黒褐色シルトを主体とするほぼ単層である。埋土中からは多量の土器が出土していることから、住居廃絶後に廃棄されていると捉えられるが、埋土自体は自然堆積と考えられる。
＜床面・壁＞Ⅶ層を床面とし、やや凹凸が見られる。貼り床は認められない。Ⅶ層を壁とし、外傾して立ち上がる。壁高は10～22㎝である。
＜炉＞なし。
＜柱穴・付属施設＞床面より３個検出した。壁溝は北西壁と南東壁を除いて、ほぼ全周する。また、炉とは捉え難いが、北西隅の床面において焼土・炭化物の広がりを確認した。
＜遺物＞（第75～78・118図、写真図版61～64・102）土器32,077ｇと石器１点が出土した。[土器] 10～29の20点を掲載した。全て前期後葉と推定される。地文に着眼すると、単軸絡条体第５類、単軸絡条体第１Ａ類、ＬＲ結節付（綾繰文）、単軸絡条体第１類の順に多く、特に単軸絡条体第５類・第１Ａ類に代表される。胎土中に繊維の混入は見られない。[石器] 705の磨石１点が出土し掲載した。
＜時期＞出土土器から縄文時代前期後葉と推定される。

ＲＡ007竪穴住居跡（第18図、写真図版８・９）
＜位置・検出状況＞調査区南西部の５Ｘ２ｈグリッド付近に位置する。検出面はⅦ層中で、黒褐色シルトによる方形プランとして把握した。
＜重複関係・建替え＞ＲＤ110を切る。
＜平面形・規模・長軸方向＞平面形は隅丸方形を基調とし、3.8×3.48ｍである。壁高は12～24㎝で、平均的には約15㎝を測る。主軸方向は、東－西方向である。
＜埋土＞１～５層に細分した。Ⅳ層に由来する黒褐色シルト層を主体とする。１層は自然堆積であるが、その他は人為堆積の可能性がある。なお、２層焼土層は現地性の可能性が高く、竪穴住居廃絶後に３層上面で野焼き的な行為が行われたものと判断される。
＜床面・壁＞Ⅶ層地山を床面とし、掘り炬燵状に有段を呈する特殊な構造を持つ。Ⅶ層を壁とする。外傾して立ち上がる。壁溝はほぼ全周する。
＜炉＞なし。
＜柱穴・付属施設＞４個検出した。柱配置は方形を見る。個々の柱穴間隔は3.5ｍを測る。北壁際で途切れ気味の壁溝と壁柱穴を検出した。
＜遺物＞（第78・113・139図、写真図版64・97・121）土器211ｇ、石器３点、石製品１点が出土した。[土器] 30～35と胎土分析を実施した1059の７点を掲載した。胎土中に多量の繊維が混入される35は

前期前葉、33は前期前～後葉の時期幅で捉えられるが、その他は全て前期後葉と推定される。[石器]石鏃１点、スクレイパー２点が出土した。その内、604・605の２点を掲載した。[石製品] 902の石刀１点を検出した。
＜時期＞出土土器から縄文時代前期後葉と推定される。

ＲＡ008竪穴住居跡（第19図、写真図版10）
＜位置・検出状況＞調査区西部の４W23ｈグリッド付近に位置する。検出面はⅦ層で、黒褐色シルトによる方形気味のプランとして把握した。また、中央よりやや北側には径100×70cmほどの巨礫が所在する。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模・長軸方向＞平面形・規模は、南壁と西壁の一部以外残存していないことから明確ではない。残存部の連続性からは、隅丸長方形で4.7×3.0ｍほどと考えられる。長軸方向は南－北方向に持つ。
＜埋土＞埋土は１層黒褐色シルトによるほぼ単層で、黄褐色粘土と焼土を微量含む。２層暗褐色シルトはＰＰ２に伴う埋土で、１層と同様に黄褐色粘土と焼土を微量含む。明確ではないが、１・２層ともに硬く締ることと、黄褐色粘土や焼土を含むことから、人為堆積の可能性がある。
＜床面・壁＞Ⅶ層地山を床面としほぼ平坦である。中央よりやや北側に巨礫が顕著にみられ、それらを除去したところ、床面より20cmほど深く刺さっている様相である。また、後述する地床炉と一部重なるが、巨礫の下位からは焼土は見られない。従って、この巨礫は住居廃絶後に持ち込まれたのではなく、地山に由来する現地性の礫と判断され、竪穴住居構築の際に除去されず、住居の使用時においてもこの状態であったと捉えられる。壁はⅦ層中で、外傾して立ち上がる。壁高は、南壁で約20cm、西壁で約10cmである。
＜炉＞竪穴ほぼ中央より焼土の広がりを検出し地床炉と捉えた。165×65cmの長方形気味に広がる。掘り込みは持たないことから、床面で直接火を焚いたと断定できる。
＜柱穴・付属施設＞西壁際の小柱穴を含め20個検出した。西壁際に小柱穴が巡る。
＜遺物＞（第78・118図、写真図版64・102）土器182ｇ、石器２点が出土した。[土器] 特定はできないが前期後葉と推定されるものが主体で、１点早期中葉が出土している。前期後葉？の36と、胎土分析を実施した早期中葉1060を掲載した。[石器] 磨製石斧１点、敲石１点が出土した。その内、706の磨製石斧を掲載した。
＜時期＞出土土器から縄文時代前期後葉の可能性が高いものの、明確には特定できない。

ＲＡ009竪穴住居跡（第20・21図、写真図版11）
＜位置・検出状況＞調査区西部の４W19ｅグリッド付近に位置する。本遺構の西側にＲＡ010が所在する。検出面はⅦ層中で、ＲＡ010の北東側の精査中に柱穴と炉跡と捉えられる焼土を検出し認知した。
＜重複関係・建替え＞ＲＡ010に切られる。
＜平面形・規模・長軸方向＞平面形は大半をＲＡ010に破壊されているが、残存部からは不整楕円形を呈する。規模は長軸3.3ｍ以上、短軸5.1ｍ前後を測る。長軸方向は、北東－南西方向をみる。
＜埋土＞黒褐色シルトを主体とする。２層に分層した。自然堆積と推定されるが、明確ではない。
＜床面・壁＞Ⅶ層地山を床面とする。Ⅶ層の中でもⅦ層－３とした砂礫が顕著にみられる地山層中を

掘りん込んでいる。貼り床は認められない。やや凹凸がある。壁はわずかな高低差から推定で図示したが、明確ではない。
＜炉＞不明である。床面で焼土の広がりが３箇所認められる。その内、中央付近に位置する焼土３としたものは、炉に関係した痕跡の可能性がある。
＜柱穴・付属施設＞20個検出した。規模から想定してＰＰ２・ＰＰ３・ＰＰ５・ＰＰ７は主柱の可能性があるものの、他は総じて小さく、柱配置は窺い知れない。また、ＰＰ３・ＰＰ４とＰＰ８・ＰＰ９など柱同士で切り合い関係を持つものがあり、それらは柱の建て替えが行われている可能性がある。上記のとおり床面で焼土を３箇所検出した。何れも現地性である。
＜遺物＞（第78・118図、写真図版64・102）土器92ｇ、石器２点、琥珀細片が出土した。[土器] 中期後葉～末葉と推定される小片が少量出土している。その内、37の１点掲載した。[石器] 石錘１点、磨石１点が出土した。その内、707の石錘を掲載した。[琥珀] 0.22ｇが出土した。
＜時期＞重複遺構との関係から、縄文時代中期末葉より古いことは確実である。出土土器からは詳細な時期を特定できないが、縄文時代中期と推定しておきたい。

ＲＡ010竪穴住居跡（第22～24図、写真図版12～14）
＜位置・検出状況＞調査区西部の北端４W20ｄグリッド付近に位置する。本遺構周辺の現況地形は、昭和40年代の水田造成に伴い旧地形に約３ｍの盛土が施されており、安全対策を優先して付近の盛土除去を進めた。盛土直下より炭化材や土器を沢山含む黒褐色シルトを検出し、焼失住居の埋土と想定された。ただし、掘削深度を憂慮して法面の角度を75度以下とした関係で、調査区境付近の幅約２ｍ部分は掘削を断念した。従って、遺構の平面プランの全貌は掴みきれなかった。
＜重複関係・建替え＞ＲＡ009を切る。炉を２基検出していることから、炉の作り替えが最低でも一回行われていることはわかるが、竪穴自体の建替えについては不明にある。ただし、１竪穴全体の形状、２炉の位置、３炉の長軸方向を大きく変えて作り替えが行われている、などの状況から推定して、未精査部分である北東壁から北壁にかけての部分は拡張されている可能性が考えられる。
＜平面形・規模・長軸方向＞平面形はやや歪気味ではあるが広義の多角形である。規模は5.24×4.8ｍである。長軸方向は、どの方向を長軸と捉えるか難しいが、炉１とした新しい段階の炉の方向はほぼ南－北方向をとる。
＜埋土＞１～５層に大別した。そして、１層系は１～１ｅ層に、２層系は２～２ｅ層に細分した。全て自然堆積と判断した。土器などの遺物は１層に多いが、遺物自体は投棄されたと捉えられる。なお、２層中には、黄褐色粘土ブロック・焼土ブロック・炭化材が多量に混入する。焼失に伴う当時の部材と捉えられる。これらの出土状態を詳述すると、黄褐色粘土ブロックについては、比較的大きな塊状で観られるが、塊の中や塊の下などに黒褐色シルトが含まれる傾向が看取される。また、炭化材は床面から直接出土したものは皆無で、床面よりやや上のレベルで黒褐色シルトに混ざる状況が多い。
＜床面・壁＞ほぼ平坦である。壁は、東壁では棚状に段を持つ構造（第23図Ｂ－Ｂ’Ｃ－Ｃ’断面を参照いただきたい）がみられる。南壁～西壁～北壁については、外傾気味に立ち上がる様相が観察されたが、調査区境であり、上述のとおり現況表土と調査面との比高が大きい（約３ｍ）ことから、調査の安全性を優先し法の幅を広く残したことに起因して、全貌を明らかにできなかった。壁高は東壁で45㎝である。
＜炉＞炉は２基検出した。古い段階を炉２、新しい段階を炉１と命名した。炉２とした古い段階の炉は、北西壁際より検出した。第22図ｂ－ｂ’断面３層とした地山起源の褐色シルトで貼床されている。

炉石は一部残存し、炉石の設置痕の可能性が高い掘り込みが認められる。また、前庭部との間には、仕切り石が設置されている。従って、石囲部＋石囲部＋前庭部（土坑）の３室から構成される複式炉であったと捉えられる。炉２の長軸方向はＮ－45°－Ｗをとる。対して、炉１とした新しい段階の炉は、南壁際に位置し、焼土の下位からは土坑状の掘り込みが認められる。また、ダメ押しを行った結果、炉石の設置痕と推定される掘り込みが幾つか認められることから、本来は炉石が配置された石囲部であったと推定される。そして、炉１に隣接する焼土１としたものとセット関係にあると捉えると、複式炉であった可能性が高い。長軸方向はＮ－10°－Ｅをとる。

炉２から炉１への作り替えに際しては、炉の長軸方向が大きく変化する（時計と逆周りで計算すると135°前後方向を変えている）。

＜柱穴・付属施設＞24個検出した。規模的な観点からは、ＰＰ６・ＰＰ19・ＰＰ10などに主柱の可能性があるが、炉１の西側や炉２の北東側付近に主柱を構成するような柱穴が見られないことから、柱配置は推定できない。東壁が棚的に段状を呈することから、広義のベッド状遺構（施設）と捉えられる。

＜遺物＞（第79・80・113・118・119・139・140図、写真図版65・66・97・102・103・121・122）土器22,360ｇ、石器82点、石製品16点、琥珀細片が出土した。[土器] 早期中葉・前期後葉～中期末葉まで出土し、中期後葉～末葉大木９～10式を主体とする。それ以外としては、早期中葉１点、前期後葉少量、中期初頭～中葉（大木７ａ～８ｂ式、円筒上層ｃ～ｄ式）少量出土している。その内、38～58を掲載した。[石器] 全体的には礫石器が多く、剥片石器は少ない。スクレイパー17点、石鏃７点、尖頭器３点、石匙４点、石錐１点、石篦３点、Ｕフレ１点、礫器13点、石錘９点、特殊磨石１点、磨石９点、石皿１点、凹石１点、台石４点、敲石２点、磨製石斧６点が出土した。剥片石器は606～615を、礫石器は708～716を掲載した。[石製品] 石棒８点、石剣２点、石刀３点、機種不明３点出土した。その内、903～912を掲載した。[琥珀] 3.12ｇ出土した。

＜時期＞出土土器から縄文時代中期末葉と推定される。

＜年代測定＞床面直上から出土した炭化材サンプル２点について、ＡＭＳ年代測定を委託した。Ｃ－13は4103±36ｙｒＢＰ、Ｃ－14は4145±34ｙｒＢＰの測定値を得られている。

＜その他＞調査結果を鑑みると、その状況から本遺構は焼失家屋と捉えられる。一戸町御所野縄文博物館高田和徳氏に本遺構を実見いただいたところ、本遺構は土屋根であったものが焼失した可能性が高いことをご教示いただいた。屋根が土葺きであったと推定して稿を進めると、埋土の項で上記した黄褐色粘土と黒褐色シルトの混ざり具合自体も、屋根に葺いた当時の状態を反映している可能性も考えられる。つまり、地山の粘土だけを屋根に葺いたのではなく、黒土も併用若しくは粘土に混ぜて、施されたと考えられようか。

ＲＡ011竪穴住居跡（第25・26図、写真図版15・16）

＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ６ｈ～９ｋグリッド付近に広がる。検出状況は、第25図の平面図に図示した試掘トレンチ付近から南側が当初調査対象区外であったことと、調査部分の北側においても水田造成に伴い削平が著しい部分であったことから、５Ｗ７ｉグリッド付近で焼土（本遺構の炉）と柱穴プランを検出したが、竪穴住居跡の存在を認めることができなかった経緯がある。６月１日に生涯学習文化課、岩手河川国道工事事務所、埋文センターによる現地協議の結果、調査地南側に遺構が広がる可能性が高いことから、新たに調査区として追加された部分である。追加部分の表土（水田の畦など）を除去した結果、Ⅶ層中において黒褐色シルトによる遺構プランを認知した。

＜重複関係・建替え＞ＲＤ146・147・150・152・153・ＲＸ001を切る。壁溝が３条認められることから、最低でも２回の建替えが行われている。壁溝同士の新旧関係から、外側の壁溝ほど新しいことを把握できることから、拡張されている。
＜平面形・規模・長軸方向＞平面形は、残存する南壁と東壁の一部分の連続性から、多角形と推定される。規模は推定で７ｍ前後と想定される。長軸方向は炉の長軸で推定すると北西－南東である。
＜埋土＞南壁際に壁の崩壊土が部分的にみられるが、それ以外は黒褐色シルトによるほぼ単層である。自然堆積層である。
＜床面・壁＞Ⅶ層地山を床面とする。所々礫層が露出することから、Ⅶ層の中でもより下位に相当する土層と判断される。平坦基調ではあるが、南→北方向に緩く傾斜をみる。貼床などは認められない。壁は南壁のみが残存し、直立を基調にやや内湾気味に立ち上がる部分がある。壁高は最大高で約20cmである。
＜炉＞燃焼部＋前庭部（土坑）からなる複式炉である。炉の位置する部分は、水田造成時に削平を受け、床面自体を失っていることから、本来燃焼部は石囲部であった可能性も有する。
＜柱穴・付属施設＞24個検出した。柱配置は方形を見る。個々の柱穴間隔は3.5ｍを測る。付属施設は、土坑１基と壁溝３条を検出した。土坑は、開口部径約90cm、底部径約110cm、深さ約35cmで、断面形フラスコ状を呈する。黒褐色シルトを主体に壁際に地山崩壊土がみられる。土坑埋土11・12・13・16層の黒褐色シルトは、竪穴本体の１層と同様の土層と判断され、自然堆積と推定された。従って、竪穴本体と土坑１の廃絶や埋没した時期は、同時性が高いと判断し、本住居に付属する土坑と捉えた経緯がある。壁溝は、上述のとおり、内側から外側に向かって新しい。また、一番外側の壁溝と土坑１は重複関係にあるが、埋土を見る限り新旧関係ではなく、同じ過程で埋まったと推定された。なお、内側に位置する２条の壁溝は、整地が施されている。
＜遺物＞（第80・113・114図、写真図版67・97）土器1,777ｇ、石器６点が出土している。［土器］前期後葉と中期後葉～末葉が出土している。主体は中期後葉～末葉である。59～65の７点を掲載した。［石器］石鏃１点、石匙１点、スクレイパー２点、台石２点が出土した。その内、616～619の４点掲載した。
＜時期＞出土土器から縄文時代中期末葉と推定される。

ＲＡ012竪穴住居跡（第27図、写真図版17）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ３ｂグリッド付近に位置する。本遺構プラン西～北側は調査区外に延びる。検出状況は、調査開始当初に試掘した調査区境の土層断面の観察から、竪穴住居跡の存在を認知した。検出面は、Ⅳ層とⅦ層（本遺跡の地山）の漸移層的な土層で、断定できかねるがⅥ層に相当すると捉えられる。しかしながら、このⅥ層（漸移層）中では平面的な把握が難しく、Ⅶ層相当まで掘り下げた段階で黒褐色シルトの半円状の広がりとしてプランを掴んだ。
＜重複関係・建替え＞ＲＡ013を切る。東壁付近の床面から壁溝が３条認められることから、最低でも２回の建替えが行われており、拡張されている。内側の古い段階から順に１期→２期→３期と呼称して記述する。
＜平面形・規模・長軸方向＞平面形は多角形を基調とするが、調査できた部分の連続性から北西－南東方向にやや長い形状を呈する。規模は、長辺が５ｍ前後、短辺が4.5ｍ前後を測る。長軸方向は、上述した北西－南北方向と考えられる。ただし、１期若しくは２期に伴う複式炉はほぼ南－方向をみることから、建替えに伴い竪穴の軸自体も変更されている可能性が考えられる。

＜埋土＞１～３層に大別し、１層系を１層と１ａ層に細分した。全て自然堆積と判断される。全体的には１～２層としたⅣ層に由来する黒褐色シルトを主体とし、壁際に壁の崩壊に伴う３層黄褐色粘土がみられる。
＜床面・壁＞全体的には平坦を基調とするが、炉は付近の床面よりやや下がる。また、明確にはわからなかったが、炉の上部は貼床が施されていた可能性もある。壁はⅦ層中で、全体的に緩く外傾気味に立ち上がる。不明瞭ではあるが、棚的な構造であった可能性もある。壁高は、平均的には約35cmを測る。
＜炉＞西壁際に位置する。石囲部＋石囲部からなる複式炉である。南側の石囲部をⅠ室、北側の石囲部をⅡ室と呼称して記述する。Ⅰ室は、炉石１個がみられる。本来は方形気味に炉石が配置されていた可能性が窺えるものの、炉石の掘り方などは検出できない。炉底は、床面から３～５cmの深さにあり、また、炉底からは扁平礫が検出されたが、炉底に敷かれているようにも捉えられる。ただし、炉使用当時から敷かれていたのか、廃絶時の整地などに関わるのかかわらない。Ⅱ室は、炉石を方形気味に設置し、その中央に焼土の発達が薄くみられる。炉の掘り方は浅く、方形の皿状に掘られ、炉４層などを使用し据えられている。炉底は、床面から３～７cmの深さにある。なお、Ⅱ室の南側に浅い小穴状の掘りこみが見られる。調査区境付近で全貌が明らかではないものの、複式炉にセットになる施設（Ⅲ室で前庭部）の可能性もある。この複式炉は、Ⅰ室・Ⅱ室ともに貼床（炉１層）に覆われていたことから、古い段階である１・２期何れかに帰属する炉（炉跡）と判断される。従って、一番新しい３期の炉は、調査区外の北側に所在する可能性が高い。
＜柱穴・付属施設＞柱穴は７個検出した。壁溝は３条、土坑２基を検出した。壁溝は、一番アウトコースに位置する最も新しい段階はほぼ全周する。その内側の２条の壁溝は、東壁に近い床面付近でのみ認められる。土坑１・２は、近接して検出された。暗褐色シルトの貼床で覆われていることから、複式炉と同様に１期若しくは２期に伴うと捉えられる。土坑１は、円形を呈し、開口部径約80cm、床面からの深さ約20cmである。対して土坑２は、やや不整気味の楕円形を呈し、開口部径90×75cm、床面からの深さ約９cmである。この２つの土坑の接する付近には、両者を仕切るような位置に礫が設置されている。平面形、規模、深さ、仕切り石の存在などから、古い段階（１期若しくは２期）の複式炉跡若しくはそれの掘り方が整地されたものと考えられる。
＜遺物＞（第81・114・119・140図、写真図版67・98・103・122）土器8,728ｇ、石器22点、石製品４点が出土した。[土器] 早期中葉・前期後葉・中期中葉～末葉・後期初頭が出土している。主体は中期後葉～末葉大木９～10式である。埋土上位の１層からは、大木９式、大木10式、門前式期の順に多い。また、早期１点と大木８ｂ式１点も１層出土である。対して、埋土下位から床面直上の２層からは、大木10式を主体に大木９式が出土している。また、床面から検出された土坑２からは大木10式が、炉の構築土からは大木９式が出土している。66～88の23点を掲載した。[石器] スクレイパー７点、コア１点、砥石１点、磨石６点、敲石２点、石皿１点、台石１点、礫器３点が出土した。その内、620・621・717・718の４点を掲載した。[石製品] 913の１点を掲載した。
＜時期＞床面で検出した土坑２からの出土土器は大木10式である。また、炉の構築土からは大木９式が出土している。総括的に判断すると縄文時代中期末葉と推定される。
＜年代測定＞77の土器内面付着煤を採取し、サンプル名Ｃ－２として、ＡＭＳ年代測定を実施した。その結果、4375±35ｙｒＢＰの測定値を得られた。
＜その他＞ここでは、竪穴の規模やその変遷について、所見を付記する。土坑１・２としたものが旧炉と仮定した場合、最も古い１期の複式炉であった可能性がある。従って、２期に伴うのが現存し検

出した複式炉で、最も新しい３期の炉は調査地外の北側５Ｗ３ｂグリッドの空間に所在する可能性が高い。上述の内容を踏まえ竪穴の規模について推定すると、以下のようなことが考察される。
１期は、土坑1･2をセットの複式炉が伴うと捉えると、その軸方向はほぼ東西方向となる。そして、これら土坑1・2から南壁までは約1.6m、東側の１期壁溝まで約1.2mである。従って、北壁までの距離が南壁までの距離とほぼ同じと仮定すると、１期の竪穴規模は直径4.0m前後と推定される。仮に土坑１の西側にもう一室複式炉を構成する前庭的な施設が存在した場合でも、4.5mは超えないと考えられる。
２期は、現存した複式炉が伴うと仮定すると、長軸方向はほぼ南－北をみる。複式炉から２期の壁溝まで１ｍ弱であるが、南壁までは約2.5mを測る。状況からは、南北にやや細長い形状である可能性もあるが、多角形基調と想定すれば１期と大差ない規模であったと考えられる。
３期は、竪穴の形状からは長軸方向の捉え方が難しい。推測の域はでないが、北西－南東と東－西の２方向が想定されるが、前者と考えたい。規模は一辺５ｍ前後の可能性が高い。
　総括すると、１期から２期への建替えに際しては、炉の位置・軸方向が大幅に変更されている。ただし、竪穴の規模自体は大差ない可能性がある。２期から３期へは、炉の位置・軸方向の変化は不明であるものの、竪穴の規模・形状が大幅に変更されている可能性が高い。

ＲＡ013竪穴住居跡（第28図、写真図版18）
＜位置・検出状況＞５Ｗ３ｃグリッド付近に位置する。本遺構北側は調査区外に延びる。重複するＲＡ012の東壁中で別遺構の存在を認知し、５Ｗ３ｄ～４ｄグリッド付近を掘り下げて検出した。精査結果から、地山土を使用して埋め戻されており、本遺構からＲＡ012に建て直しされた際に、整地されたものと捉えられる。検出面は、精査結果からはⅦ層中となるが、竪穴上部は既に破壊されているため、当時の構築面はさらに上位としか推定できない
＜重複関係・建替え＞ＲＡ012に切られる。また、ＲＤ119～122とも重複するが、平面的には新旧関係を把握できなかった。調査区境の土層断面を観察した結果、本遺構がそれら土坑群より古いと判断した。竪穴本体の建替えの有無は明確には不明にあるものの、炉は作り替えが行われている。炉の作り替えに際して、古い炉から新しい炉へその長軸方向が大きく変更されている。従って、南壁と旧炉の位置関係から考えて、竪穴自体も建替えが行われていると捉えられる。
＜平面形・規模・長軸方向＞平面形・規模ともに不明である。残存する南壁の連続性から、平面形は多角形若しくは円形で、規模は一辺４～５ｍと推定される。長軸方向についても厳密には不明にあるが、新段階の炉は南－北に近い方向を示す。
＜埋土＞第28図Ａ－Ａ´断面付近では１層褐色シルトによるほぼ単層である。人為堆積と考えられ、ＲＡ012を構築する際に整地行為が行われた可能性が示唆される。なお、北側の調査区境付近では、黒褐色シルトが主体的にみられるが（※第41図51層）、これらは自然堆積層の可能性が高い。
＜床面・壁＞ほぼ平坦である。旧炉の掘り方部分は埋め戻され覆われているが、全体的には貼床や硬化面は看取できない。壁は、南壁の一部を検出したにとどまる。竪穴上部は破壊されているが、わずかに残存する南壁の深さは最大で12cmを測る。
＜炉＞新旧２基の複式炉を検出した。新炉と旧炉と命名して記述する。
　新炉は、石囲部＋石囲部＋石囲部の３室から構成され、南西側からⅠ～Ⅲ室と呼ぶこととする。Ⅰ室は、炉石の残存はないが炉石の抜き取り痕から石囲部と判断した。炉石抜き取り痕からは、径50cm程の範囲で円形気味に囲われていたと推定される。掘り方は、炉石設置部分のみ確認できる。Ⅱ室は

80×70cmの方形に炉石が囲われており、囲内の北隅に小土坑らしきプランがある。推定の域を出ない内容であるが、この小土坑には土器が埋設されていた可能性もある。炉の掘り方は、床面から約10cmの深さで100×85cm程の楕円形気味に掘られ、炉底は炉２層で暗褐色砂質シルトにより整地された後、炉石個々の設置痕が掘られている。Ⅲ室は「ハの字」状に炉石が配置されており、前庭部と考えられる。全体的な掘り方は持たず、炉石の設置部分のみ深く掘り込まれている。この新炉は、Ⅰ～Ⅲ室まで焼土は認められない。また、新炉の構築方法は、Ⅰ・Ⅲ室は炉石の設置分部に炉石の形状・規模に即して掘られているのに対して、Ⅱ室は楕円形の土坑状に掘られ、炉２層で整地された後に個々の炉石穴が設けられている。この構築方法は、ＲＡ012と同様の状況が窺える。このことは、主たる燃焼部と想定されるⅡ室のみ、しっかりした掘り方を持ち、炉底も整地が施される傾向を指摘できようか。ただ、今回の調査で検出された複式炉全体を概観すると、その内容は様々であり、遺跡全体的な特徴とはできない。

旧炉は、全て炉石が抜き取られているが、炉石の抜き取り痕がⅠ・Ⅱ室は比較的明瞭に把握できる。ただし、前庭部らしき痕跡は認められない。焼土は、Ⅰ・Ⅱ室共に確認できない。

＜柱穴・付属施設＞６個検出した。柱穴の埋土は褐色シルトを主体とする。

＜遺物＞（第82図、写真図版68）土器1,100ｇ、石器３点が出土している。[土器] 中期後葉～末葉大木９式・大木10式が出土している。89～92の４点を掲載した。[石器] 礫器１点と磨石２点が出土している。全て不掲載とした。

＜時期＞出土土器は大木９式と大木10式が出土している。遺構の重複関係からは、ＲＡ012（中期末葉）より確実に古い。総括的な判断として縄文時代中期後葉～末葉と時期幅を広く捉えておきたい。

＜年代測定＞90の土器内面付着煤を採取し、サンプル名Ｃ－３として、ＡＭＳ年代測定を実施した。その結果、4102±38ｙｒＢＰの測定値を得られた。

ＲＡ014竪穴住居跡（第29図、写真図版19）

＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｖ５ｙグリッド付近に位置する。調査区境に入れたサブトレンチの断面で、複数棟の竪穴住居跡の存在が認められた。平面的には、Ⅵ層相当面で黒褐色シルトの不明瞭な広がりとして、ＲＡ015と共に認知した。

＜重複関係・建替え＞ＲＡ015を切る。

＜平面形・規模・長軸方向＞平面形は多角形若しくは円形と考えられるが、竪穴プランの半分程は調査地外北側に延びるため、厳密には不明にある。規模も不明にあるが、残存する南～東壁と、推定で図示した西壁の連続性から判断して、３ｍ強と推定される。長軸方向は判断できない。

＜埋土＞１・２層の黒褐色シルトを主体とし、南壁際に３層とした壁の崩壊土（褐色粘土※地山土）がみられる。全て自然堆積層と捉えられる。なお、１・２層中には、テフラ起源の可能性がある径２～５㎜のオレンジ色を呈する鉱物が含まれる。この鉱物は、調査区南西部で顕著に確認された堀切テフラと推定されるものに類似する（※ただし、堀切テフラは早期末～前期初頭の降下テフラであることから、遺構の帰属時期より古く、そして年代差が大きい。従って再堆積物と考えたい）。

＜床面・壁＞Ⅶ層中を床面とする。平坦である。貼床や硬化面は認められない。重複するＲＡ015の床面とは、ほぼ同じ標高値にある。南壁～東壁はⅦ層中である。西壁は、ＲＡ015の埋土を壁とするが、黒土で埋土と区分ができず明確には掴めなかった。南壁や東壁は外反して立ち上がり、壁高は18～20cmを測る。

＜炉＞検出されていない。調査地外の北側に所在する可能性が高い。

＜柱穴・付属施設＞10個検出した。
＜遺物＞（第82・119・140図、写真図版68・103・122）土器473ｇ、石器１点、石製品１点が出土した。[土器] 前期後葉？・中期後葉・中期末葉が出土している。主体は中期末葉である。93～95の３点を掲載した。[石器] 719の礫器が出土し掲載した。[石製品] 914の石刀が出土し掲載した。
＜時期＞出土土器から縄文時代中期末葉と推定される。

ＲＡ015竪穴住居跡（第29図、写真図版19）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｖ６ｘグリッド付近に位置する。調査区境に入れたサブトレンチの断面で、複数棟の竪穴住居跡の存在が認められた。平面的には、Ⅵ層で黒褐色シルトの不明瞭な広がりとして、ＲＡ014やＲＡ016と共に認知した。
＜重複関係・建替え＞ＲＡ014に切られ、ＲＡ016を切る。また、南側に所在する風倒木痕より本遺構が新しいと捉えた。
＜平面形・規模・長軸方向＞竪穴プランの大部分が調査地外北側に延びるため、平面形・規模ともに不明にある。調査した部分からは、楕円形若しくは長楕円形の可能性が窺え、規模は長軸４ｍ以上である。長軸方向についても厳密には不明であるが、調査部分からは北東－南西方向の可能性がある。
＜埋土＞第29図Ｃ－Ｃ’断面１層の黒褐色シルトによるほぼ単層である。自然堆積層と捉えられる。
＜床面・壁＞Ⅶ層中を床面とする。平坦である。貼床や硬化面は認められない。重複するＲＡ014の床面とはほぼ同じ標高値にあるが、ＲＡ016とは約25㎝本遺構が低い。南壁はⅦ層地山を壁とする。西壁はＲＡ016の埋土を壁とするが、実際の精査では明確に把握できなかった。明瞭にわかった南壁は、外傾して立ち上がり、壁高は20～35㎝を測る。
＜炉＞検出されていない。調査地外北側部分に所在する可能性が高い。
＜柱穴・付属施設＞柱穴は１個検出した。壁溝が巡るが、壁溝内には小穴が各所にみられる。
＜遺物＞（第82・114・119・140図、写真図版68・98・103）土器1,039ｇ、石器11点、石製品４点出土した。[土器] 前期後葉？・中期前葉・中期末葉？・後期？が出土している。何れも摩滅した小破片で詳細な時期の特定ができない。96～100の４点を掲載した。[石器] 尖頭器１点、スクレイパー１点、石錘２点、磨石３点、礫器４点が出土した。622と720の２点を掲載した。[石製品] 石刀２点、円盤状石製品１点、軽石製石製品１点が出土した。その内、915の軽石製石製品を掲載した。
＜時期＞出土土器から縄文時代前～中期と推定されるが、特定はできない。ＲＡ014との重複関係から縄文時代中期末葉より古いことはわかる。中期前葉の可能性もあるが、状況からは中期末葉と推定しておきたい。

ＲＡ016竪穴住居跡（第29図、写真図版19）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｖ７ｗグリッド付近に位置する。調査区境に入れたサブトレンチの断面で、複数棟の竪穴住居跡の存在が認められた。平面的には、Ⅵ層で黒褐色シルトの不明瞭な広がりとして、ＲＡ014やＲＡ015と共に認知した。
＜重複関係・建替え＞ＲＡ015に切られる。また、風倒木痕に東側を破壊されている。
＜平面形・規模・長軸方向＞竪穴プランの大部分が調査地外北側に延びることと、本遺構東側は風倒木痕に破壊されていることから、平面形・規模ともに不明にある。調査した部分からは、楕円形若しくは長楕円形の可能性が窺える。長軸方向についても厳密は不明であるが、調査部分からは北東－南西方向の可能性があり、規模は５ｍ以上である。

＜埋土＞第29図Ｃ－Ｃ’断面３～５層が本遺構の埋土である。黒褐色シルトを主体とする。堆積様相は自然なのか人為によるのか判断できなかった。なお、２層は風倒木痕に伴う土層である。
＜床面・壁＞基本層序Ⅶ層地山を床面とするが、所々角礫が露出することから、Ⅶ層の中でもより下位に相当する土層（本報告書中でⅦ層－３と命名した土層）と判断される。平坦基調ではあるが、所々角礫が露出する地山面なことから、各所に凹凸が認められる。南壁はⅦ層を壁とする。直立気味に立ち上がり、壁高は15cm前後を測る。
＜炉＞検出されていない。
＜柱穴・付属施設＞柱穴は１個検出した。壁溝が巡る。風倒木痕と接する付近は溝が二重に巡るようにも受け取れる。
＜遺物＞（第119図、写真図版103）土器209ｇ、石器１点が出土している。［土器］出土した土器は、摩滅した小破片で縄文時代前期～中期の時期幅で捉えられるが、詳細な時期の特定はできない。［石器］721の礫器を掲載した。
＜時期＞出土土器からは縄文時代前～中期と推定される。詳細な時期は特定できないが、本遺構と重複関係にあるＲＡ015と風倒木痕の新旧関係から推定すると、古い順に本遺構（ＲＡ016）→風倒木痕→ＲＡ015となる。また本遺構の南東側に位置する大木10式期のＲＡ017は、この風倒木痕に伴う黒土を南壁としている。従って、風倒木痕より古い本遺構（ＲＡ016）は、ＲＡ015やＲＡ017とある程度の時期差を有する可能性が高い。遺構の平面形態からは、中期後半の複式炉隆盛時期よりは古いと判断される。

ＲＡ017竪穴住居跡（第30・31図、写真図版20～22）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ７ａグリッド付近に位置する。検出面はⅦ層で、黒褐色シルトによる方形プランとして把握した。
＜重複関係・建替え＞ＲＤ135・136を切る。また、南壁などは、風倒木痕に伴う堆積層を壁とすることから、本遺構が風倒木痕より新しい。また、精査では認知できなかったが、北側床面は貼床が施され嵩上げされていた可能性もある。また、炉は２回作り替えられているが、古い段階から新しい段階へ炉Ⅲ期→炉Ⅱ期→炉Ⅰ期と呼称して記述すると、一番古い段階である炉Ⅲ期から炉Ⅱ期への作り替えに際しては、長軸方向が大幅に変更されている。このことは、竪穴本体が南側に拡張されていることに関連して、炉の長軸方向が変更されたものと推察される。
＜平面形・規模・長軸方向＞平面形は多角形を呈する。規模は3.9×3.8ｍである。長軸方向は、一番新しい炉Ⅰ期の段階は北東－南西方向である（Ｎ－55°－Ｅ）。
＜埋土＞黒褐色シルトを主体とし、ほぼ単層である。自然堆積と判断される。
＜床面・壁＞Ⅶ層地山を床面とし、炉Ⅰを中心に南側床面が北側床面より５～10cm高くなる部分も看取できる。床面の状況をやや詳述すると、南側床面部分の地山は自然礫が露出することから、Ⅶ層の中でも下位に相当する（本報告でⅦ層－３と命名した土層）。対して、炉Ⅰより北側は、シルトと粘土の漸移層的な土質で、明確には捉え切れなかったが、貼床（整地土）であった可能性が高い。つまり、炉Ⅰの北側床面直上付近は、建替えの項でも記述したとおり、貼床をし床面が嵩上げされ、南側床面とは比高や段差がなかった可能性もある。壁はⅦ層中で、外傾して立ち上がる。壁高は約15cmである。
＜炉＞炉は２回作り替えられており、３時期の複式炉を検出した。建替えの項で記述したとおり、古い炉から炉Ⅲ期→炉Ⅱ期→炉Ⅰ期と呼称し、第31図に炉の変遷を示した。一番新しい段階である炉Ⅰ

期は、石囲部＋石囲部＋整地土範囲（※前庭部と考えられる）から構成され、西壁際に位置する。構築状況としては、前庭部と考えられる整地土範囲の南東側に掲載番号724の扁平な台石が置かれていた。複式炉前庭部脇に台石が置かれていた事例としては、岩手県山田町新道貝塚（川向：2008）がある。本竪穴住居についても、使用当時から意図的に置かれていたと推定される。次の炉Ⅱ期は、石囲埋設土器部＋整地土範囲により構成される。石囲埋設土器部は、炉石は極一部のみ残存し、埋設土器１（掲載番号101）とした大木10式が埋設されていた。埋設土器１は、口縁部と底部は欠損する状態のものが埋設されていた。炉Ⅲ期は、石囲埋設土器部＋前庭部から構成される。石囲埋設土器部は、炉石は一部のみ残存し、埋設土器２（掲載番号102）とした大木10式が埋設されていた。埋設土器２は、胴部中位より下部が欠落する状態で埋設されていた。なお、前庭部は、浅い土坑状を呈するが、整地が施されており、使用当時の状態が判らない。

補足として、炉Ⅱ期に伴う埋設土器１は、炉Ⅰ期の床面から７㎝程下位にあり、炉３ｃ層により整地されていた（※床面では露出していない）。対して、炉Ⅲ期に伴う埋設土器２は、炉Ⅰ期の床面から露出している状態で検出した。従って、埋設土器２が一番新しい段階か若しくは２番目に新しい段階の炉に伴うと考えられた。しかしながら、複数個所で炉の断ち割りを行い（第31図ａ－ａ’・ｂ－ｂ’・ｃ－ｃ’・ｄ－ｄ’）、土層観察を行った結果から、上記したような変遷が明らかとなった。

＜柱穴・付属施設＞３個検出した。柱配置は方形を見る。個々の柱穴間隔は3.5ｍを測る。付属施設は土坑１基を検出した。

＜遺物＞（第82・119・120・140図、写真図版68・103・104・122）土器3,546ｇ、石器12点、石製品１点が出土した。[土器]中期後葉～末葉と後期が出土している。101～105の５点を掲載した。[石器]尖頭器１点、スクレイパー１点、磨製石斧（未成品）１点、石錘４点、磨石１点、台石２点、礫器２点が出土した。その内、722～724の３点を掲載した。[石製品] 916の石刀を掲載した。

＜時期＞炉の項で上記したとおり、炉内に埋設されていた土器は２基ともに大木10式である。従って、炉Ⅲ期（一番古い段階）と炉Ⅱ期（次に古い段階）の構築時期は中期末葉大木10式期である。最も新しい炉Ⅰ期は、埋設土器を持たないが、状況からは同様に大木10式期と捉えられる。従って、構築時期・廃絶時期共に縄文時代中期末葉と判断される。

＜年代測定＞炉内埋設土器２の102の内面付着煤を採取し、サンプル名Ｃ－４として、ＡＭＳ年代測定を実施した。その結果、3973±36ｙｒＢＰの測定値を得られた。補足として、炉内埋設土器１より採取した内面煤は、炭素量不足で測定不可能の結果であった。

＜その他＞本遺構の炉Ⅰ・Ⅱの直下でＲＤ135を、炉Ⅲの直下でＲＤ136を検出している。炉の直下で土坑が検出されている類例の中で、岩手県宮古市牛沢遺跡では、竪穴住居を構築する際にあえて廃坑のあった地点を選地しているような意図が窺える旨の内容が考察されている（2008：長谷川）。

２　掘立柱建物跡

ＲＢ001掘立柱建物跡（第32・36図、写真図版23・24）

＜位置・検出状況＞調査区東部の２Ｙ14ｉグリッド付近に位置する。Ⅳ層及びⅥ～Ⅶ層中で本遺構を構成する柱穴状土坑を検出した。

＜重複関係・建替え＞ＲＢ002・003・ＲＥ002・003を切る。

＜柱穴＞43個の柱穴を使用した。(82・83・84・85・96・97・103・110・111・113・115・117・123・128・136・138・168・169・171・174・185・192・194・198・255・262・275・276・278・279・280・

281・283・287・288・291・293・297・301・310・326・416・418号柱穴状土坑）
＜埋土＞柱穴の埋土は、黒褐色シルトを主体とする単層のものが多い。96・115・128・168号柱穴状土坑では柱痕跡を確認した。また、113・169・171・192号柱穴状土坑の埋土は人為堆積によるものと考えられる。
＜建物方位＞桁行の軸方位はＮ－59°－Ｅである。
＜平面形式＞掘立柱建物である。規模は、桁行2116cm（69.8尺）、梁間960cm（31.7尺）である。４面に庇もしくは下屋を持つ構造と考えられる。
＜柱間寸法＞桁行の柱間寸法は236cm（7.8尺）～252cm（8.5尺）であり、基準寸法は８尺と推定される。138号・280号間は198cm（6.5尺）、301号・276号間は124cm（4.1尺）である。梁間の柱間寸法は205cm（6.8尺）～224cm（7.4尺）で、基準寸法は７尺と推定される。194号・288号間は189cm（6.2尺）、166号・138号間は166cm（5.5尺）である。
＜出土遺物＞（第88・110・111・112・114・130図、写真図版74・94・95・98・113）115号柱穴状土坑から不明鉄製品１点（1027）、198号柱穴状土坑から17世紀前半代の瀬戸・美濃産の皿１点（1012）、281号柱穴状土坑から17世紀前半代の瀬戸・美濃産の皿１点（1013）・永樂通寶１点（1028）が出土した。このほかに、37個の柱穴状土坑から縄文時代前期中葉・中期後葉～後期後葉の土器7950.97ｇが出土し、そのうち１点を掲載した（210）。石器は27点（石鏃２点、石錐１点、石匙１点、スクレイパー２点、ピエス・エスキーユ１点、磨石４点、敲石１点、石錘１点、磨製石斧３点、礫器９点、軽石製２点）が出土し、そのうち４点を掲載した（632・793・794・797）。円盤状土製品６点、石製品４点（石棒３点、石刀１点）も出土したが、すべて不掲載とした。
＜時期＞198号柱穴状土坑から出土した瀬戸・美濃産の皿の年代などから、17世紀前半と考えられる。

ＲＢ002掘立柱建物跡（第33・36・37図、写真図版23）
＜位置・検出状況＞調査区東部の２Ｙ13ｉグリッド付近に位置する。Ⅳ層及びⅥ～Ⅶ層中で本遺構を構成する柱穴状土坑を検出した。
＜重複関係・建替え＞ＲＢ001に切られる。また、ＲＥ002・003を切る。
＜柱穴＞34個の柱穴を使用した。（95・101・104・107・109・116・122・125・129・135・137・165・168・175・177・179・184・187・193・197・252・258・268・273・275・282・295・327・330・332・414・415・422・429号柱穴状土坑）
＜埋土＞柱穴の埋土は、黒褐色シルトを主体とする単層のものが多い。168・193号柱穴状土坑では柱痕跡を確認した。125・129・197号柱穴状土坑の埋土は人為堆積によるものと考えられる。
＜建物方位＞桁行の軸方位はＮ－56°－Ｅである。
＜平面形式＞掘立柱建物である。規模は、桁行2048cm（67.6尺）、梁間987cm（32.6尺）である。北西側・南東側・北東側の３面に、庇もしくは下屋を持つ構造と考えられる。
＜柱間寸法＞桁行の柱間寸法は217cm（7.2尺）～248cm（8.7尺）であり、基準寸法は7.5尺と８尺と推定される。193号・414号間は154cm（5.1尺）、252号・330号間は185cm（6.1尺）である。
＜出土遺物＞（第84・130・142図、写真図版79・113・123）22個の柱穴状土坑から縄文土器3143.24ｇが出土し、そのうち１点を掲載した（213）。213は、縄文時代後期後葉のものと考えられる注口土器の胴部破片である。このほか、不掲載としたが、円盤状土製品が３点出土している。石器は８点（磨石４点、礫器３点、軽石製１点）が出土し、そのうち２点を掲載した（795・796）。石製品（石刀）も１点出土している（934）。

＜時期＞縄文土器・縄文時代の土製品・石器・石製品以外の出土遺物はなかったが、ＲＢ001を構成する柱穴状土坑の形状や埋土の様相が類似していることから、17世紀前半と考えられる。

ＲＢ003掘立柱建物跡（第34・37図、写真図版23）

＜位置・検出状況＞調査区東部の２Ｙ12ｊグリッド付近に位置する。Ⅳ層及びⅥ～Ⅶ層中で本遺構を構成する柱穴状土坑を検出した。

＜重複関係・建替え＞ＲＢ001に切られる。また、ＲＥ002・003を切る。

＜柱穴＞29個の柱穴を使用した。(93・98・105・112・114・118・121・124・131・132・147・149・155・161・166・180・189・255・258・261・269・272・277・289・328・333・413・423・429号柱穴状土坑)

＜埋土＞柱穴の埋土は、黒褐色シルトを主体とする単層のものが多い。93・121・124・149号柱穴状土坑では柱痕跡を確認した。

＜建物方位＞桁行の軸方位はＮ－56°－Ｅである。

＜平面形式＞掘立柱建物である。規模は、桁行1948cm（64.3尺）、梁間950cm（31.4尺）であり、北西側と南東側の２面に庇もしくは下屋を持つ構造と考えられる。429号柱穴状土坑より北西側と155号柱穴状土坑より南東側では、これに続く柱穴を検出することができなかったが、さらに柱穴が続いていたと考えられる。その場合、桁行は2264cm(74.7尺)となり、４面に庇もしくは下屋を持つ構造であったと考えられる。

＜柱間寸法＞桁行の柱間寸法は232cm（7.7尺）～247cm（8.2尺）で、基準寸法は８尺と考えられる。429号・269号間は154cm（5.1尺）である。梁間の柱間寸法は289号・423号間は315cm（10.4尺）、423号・269号間は335cm（11.1尺）である。また、413号・289号間は150cm（5.0尺）である。

＜出土遺物＞（第142図、写真図版123）23個の柱穴状土坑から縄文土器が3195.74ｇ、円盤状土製品１点が出土した。石器は５点（スクレイパー１点、Ｕフレ１点、礫器３点）、石製品は石棒１点が出土している（935）。

＜時期＞縄文土器・縄文時代の土製品・石器・石製品以外の出土遺物はなかったが、ＲＢ001を構成する柱穴状土坑の形状や埋土の様相が類似していることから、17世紀前半と考えられる。

ＲＢ004掘立柱建物跡（第35図、写真図版25）

＜位置・検出状況＞調査区東部の２Ｙ17ｅグリッド付近に位置する。Ⅳ層及びⅥ～Ⅶ層中で本遺構を構成する柱穴状土坑を検出した。

＜重複関係・建替え＞なし。

＜柱穴＞12個の柱穴を使用した（120・432・440・442・443・444・445・446・448・449・451・457号柱穴状土坑)。

＜埋土＞440・445号柱穴状土坑では柱痕跡を確認した。

＜建物方位＞桁行の軸方位はＮ－92°－Ｗである。

＜平面形式＞掘立柱建物である。規模は、桁行480cm（15.8尺)、梁間300cm（9.9尺）である。

＜柱間寸法＞桁行の柱間寸法は113cm（3.7尺）～124cm（4.1尺）で、基準寸法は４尺と考えられる。梁間の柱間寸法は、449号・444号間は150cm（5.0尺)、444号・442号間は147cm（4.9尺）であり、基準寸法は５尺と考えられる。

＜出土遺物＞すべて不掲載としたが、８個の柱穴状土坑から縄文時代中期末葉～後期前葉の土器が

403.06ｇ、スクレイパー２点が出土している。
＜時期＞縄文時代の石器以外出土遺物はなかったが、近接するＲＤ162やＲＢ001～003の帰属時期から、本遺構は中～近世と考えられる。

3　土　　坑

ＲＤ103土坑（第38図、写真図版26）
＜位置・検出状況＞調査区南西部の５Ｘ13ｈグリッド付近に位置する。Ⅳ層上面で、黒色～黒褐色の円形の広がりとして検出した。
＜重複関係・建替え＞ＲＡ003を切る。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は不整円形を呈する。開口部径は180×144cmを測る。主軸方向はＮ－53°－Ｅである。
＜埋土＞１～３層に分層した。全体的には黒色～黒褐色シルトを主体とする。２層には極少量のオレンジパミスを含む。自然堆積と考えられる。
＜底面・壁＞底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。検出面からの深さは約70cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞縄文土器が１～３層より201.25ｇ、石器が埋土下位より５点（磨製石斧？１点・礫器４点）、フレークが埋土下位より9.93ｇ出土したが、すべて不掲載とした。
＜時期＞ＲＡ003より新しいが、詳細な時期は不明である。検出面や埋土の様相などから縄文時代前期～後期と考えられる。

ＲＤ104土坑（第38図、写真図版26）
＜位置・検出状況＞調査区南西部の５Ｘ10ｎグリッド付近に位置する。Ⅶ層中で、黒褐色の円形の広がりとして検出した。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は円形を呈する。開口部径は96×90cmを測る。主軸方向はＮ－13°－Ｅである。
＜埋土＞黒褐色シルトを主体とし、少量の褐色シルト、極少量のオレンジパミスを含む。自然堆積か人為堆積かの言及は難しいものの、人為堆積と捉えておきたい。
＜底面・壁＞底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。深さは約18cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞なし。
＜時期＞詳細な時期は不明である。埋土の様相から縄文時代と考えられる。

ＲＤ105土坑（第38図、写真図版26）
＜位置・検出状況＞調査区南西部の５Ｘ11ｎグリッド付近に位置する。Ⅶ層中で、黒褐色～暗褐色の楕円形の広がりとして検出した。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は不整楕円形を呈する。開口部径は70×40cmを測る。主軸方向はＮ－９°－Ｗである。

＜埋土＞１～３層に分層した。１・２層は黒褐色シルトを主体とし、褐色シルトを少量含む。３層は暗褐色シルトを主体とする。堆積様相から人為堆積と考えられる。
＜底面・壁＞底面は緩いＵ字状を呈する。北～東壁は外傾、南～西壁はほぼ直立して立ち上がる。深さは約34cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞なし。
＜時期＞詳細な時期は不明である。埋土の様相から縄文時代と考えられる。

ＲＤ106土坑（第38図、写真図版26）
＜位置・検出状況＞調査区南西部の５Ｘ９ｏグリッド付近に位置する。Ⅵ～Ⅶ層中で、黒褐色の楕円形の広がりとして検出した。
＜重複関係・建替え＞ＲＡ004を切る。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は楕円形を呈する。開口部径は68×62cmを測る。主軸方向はＮ－47°－Ｗである。
＜埋土＞１～３層に分層した。１・２層は黒褐色シルトを主体とし、黄褐色粘土ブロックを少量含む。堆積様相から人為堆積と考えられる。
＜底面・壁＞底面は平坦で、壁は外反して立ち上がる。深さは約38cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞なし。
＜時期＞詳細な時期は特定できないが、埋土の様相からＲＡ004と同様縄文時代前期後葉の可能性が考えられる。

ＲＤ107土坑（第39図、写真図版27）
＜位置・検出状況＞調査区南西部の５Ｘ８ｏグリッド付近に位置する。ＲＤ108に隣接する。Ⅵ～Ⅶ層中で、黒褐色の楕円形の広がりとして検出した。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は楕円形を呈し、開口部径は92×86cmを測る。中央部に径52×42cmのピット状の掘り込みがある。主軸方向はＮ－18°－Ｗである。
＜埋土＞１～６層に分層した。全体的には黒褐色シルトを主体とし、褐色シルトブロックを少量含む。また、埋土上位にみられる黒褐色シルト１層には、極少量のオレンジパミス（堀切テフラ？）を含む。オレンジパミスが、堀切テフラと仮定した場合、その混入具合からプライマリではなく、降下より後世に黒褐色シルトに混入した可能性で捉えられる。堆積様相から自然堆積ではないかと考えられる。
＜底面・壁＞底面は北東側にやや傾斜する。壁は外傾して立ち上がり、深さは約54cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞なし。
＜時期＞埋土に含まれるオレンジパミスは二次堆積と考えられことから、同テフラ降下時期よりは新しい可能性が高い。ただし、出土遺物や重複遺構がないため、詳細な時期は特定できない。縄文時代前期初頭以降と考えられる。

ＲＤ108土坑（第39図、写真図版27）
＜位置・検出状況＞調査区南西部の５Ｘ８ｎグリッドに位置する。ＲＤ107に隣接する。Ⅵ～Ⅶ層中で、黒褐色シルトの楕円形の広がりとして検出した。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は楕円形を呈し、開口部径は116×62cmを測る。南西隅に径52×48cmのピット状の掘り込みがある。主軸方向はＮ－76°－Ｅである。
＜埋土＞１～５層に分層した。全体的には黒褐色シルトを主体とする。堆積様相から自然堆積と考えられる。
＜底面・壁＞底面は東側が浅く、西側が突出して深い。壁は外傾して立ち上がる。検出面からの深さは最大で約42cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞なし。
＜時期＞詳細な時期は不明である。埋土の様相から縄文時代と考えられる。
＜性格＞断面形の様相を見る限り、本来は西側の深い部分がアタリで東側を中心とする浅い部分が柱の掘り方である柱穴状土坑である可能性もある。

ＲＤ109土坑（第39図、写真図版27）
＜位置・検出状況＞調査区南西部の５Ｘ８ｎグリッド付近に位置する。Ⅵ～Ⅶ層中で、黒褐色～暗褐色の円形の広がりとして検出した。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は円形を呈する。開口部径は96×82cmを測る。主軸方向はＮ－63°－Ｗである。
＜埋土＞１・２層に分層した。埋土上位にみられる１層は黒褐色シルトを主体とし、オレンジパミスを少量含む。このオレンジパミスは、二次的に混入したと捉えられ、降下期より新しい可能性が高い。２層は暗褐色シルトを主体とする。堆積様相から自然堆積ではないかと考えられる。
＜底面・壁＞底面はほぼ平坦で、壁は内湾気味に立ち上がる。検出面からの深さは約42cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞なし。
＜時期＞詳細な時期は不明である。埋土の様相から縄文時代前期初頭より新しいと考えられる。

ＲＤ110土坑（第39図、写真図版27）
＜位置・検出状況＞調査区南西部の５Ｘ４ｈグリッド付近に位置する。Ⅶ層中で、黒褐色シルトの円形の広がりとして検出した。土坑上部は既に削平されていると考えられる。
＜重複関係・建替え＞ＲＡ007に切られる。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は円形を呈する。開口部径は166×166cmを測る。主軸方向はＮ－15°－Ｅである。
＜埋土＞全体的に黒褐色シルトを主体とする。混入物の差異で１～６層に細分した。堆積様相から自然堆積と考えられる。
＜底面・壁＞床面はほぼ平坦で、壁はやや外反しながら立ち上がる。検出面から深さ約56cmである。
＜付属施設＞底面の中央部に副穴１基を伴う。

＜遺物＞縄文土器が埋土より262.19ｇ、フレークが埋土より8.97ｇ出土したが、不掲載とした。土器は小片のみで詳細な時期を特定できないが、前期と考えられる。
＜時期＞ＲＡ007に切られることから、縄文時代前期後葉より古いが、詳細な時期は特定できない。埋土の主体が基本層序Ⅳ層に由来する黒褐色シルトであることから、縄文時代前期初頭～後葉の時期幅で捉えられ、状況から前葉と推定しておきたい。

ＲＤ111土坑（第39図、写真図版28）
＜位置・検出状況＞調査区南西部の５Ｘ２ｆグリッド付近に位置する。Ⅶ層中で、黒褐色の円形の広がりとして検出した。土坑上部は既に削平されていると考えられる。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は円形を呈する。開口部径は132×124㎝を測る。主軸方向はＮ－３°－Ｅである。
＜埋土＞１～３層に分層した。埋土の主体を占める１層黒褐色シルトには、Ｔｏ－Ｃｕと推定される褐色砂状テフラがブロック状に少量含まれる。自然堆積と考えられる。
＜底面・壁＞底面は中央に向かってやや傾斜する。壁は外傾しながら立ち上がる。検出面からの深さは約44㎝である。
＜付属施設＞底面の中央部に副穴１基を伴う。
＜遺物＞縄文土器が１層より124.16ｇ出土したが、小片のため不掲載とした。前期と考えられる。
＜時期＞１層中にＴｏ－Ｃｕと推定される砂状テフラが含まれることから、Ｔｏ－Ｃｕの降下期よりは古い構築・廃絶時期と考えられる。また、形状や規模が近接するＲＤ110と類似していることから、縄文時代前期後葉より古い可能性が高い。従って、縄文時代前期前葉若しくはそれ以前と推定される。

ＲＤ112土坑（第40図、写真図版28）
＜位置・検出状況＞調査区西部４Ｗ24ｇグリッド付近に位置する。Ⅶ層中で、暗褐色シルトの不整形の広がりで検出した。
＜重複関係・建替え＞ＲＤ113を切る。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は不整形を呈する。開口部径は96×70㎝を測る。主軸方向はＮ－33°－Ｅである。
＜埋土＞暗褐色シルトを主体の単層で混入物はない。自然堆積か人為堆積か判断できなかった。
＜底面・壁＞底面は凹凸があり、壁は外反しながら立ち上がる。検出面からの深さは約18㎝である。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞縄文土器が70.03ｇ出土したが、小片のため不掲載とした。時期は縄文時代中～後期と推定される。
＜時期＞出土遺物から縄文時代中～後期と考えられるが、詳細な時期は不明である。

ＲＤ113土坑（第40図、写真図版28）
＜位置・検出状況＞調査区西部４Ｗ24ｈグリッド付近に位置する。Ⅶ層中で、暗褐色の不整形の広がりとして検出した。
＜重複関係・建替え＞ＲＤ112・114に切られる。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は不整形を呈する。開口部径は156×92㎝を測る。主軸方向はＮ

－42°－Ｅである。
＜埋土＞暗褐色シルトを主体とし、明黄褐色粘土ブロックを少量含む。粘土ブロックの混入具合から人為堆積の可能性が考えられる。
＜底面・壁＞底面は平坦で、壁は外反して立ち上がる。検出面からの深さは約14cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞なし。
＜時期＞詳細な時期は不明であるが、埋土の様相から縄文時代中～後期と考えられる。

ＲＤ114土坑（第40図、写真図版28）
＜位置・検出状況＞調査区西部の４Ｗ25ｈグリッド付近に位置する。ＲＤ112・113の土層断面の観察中に、重複関係とともに本遺構を確認した。
＜重複関係・建替え＞ＲＤ113を切る。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は楕円形を呈する。開口部径は36×28cmを測る。主軸方向はＮ－７°－Ｅである。
＜埋土＞黒褐色シルトを主体とし、明黄褐色粘土ブロックを少量含む。粘土ブロックの混入具合から人為堆積の可能性が考えられる。
＜底面・壁＞底面はほぼ平坦で、壁は外反しながら立ち上がる。検出面からの深さは約18cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞埋土より石器１点（磨石１点）が出土したが、不掲載とした。
＜時期＞詳細な時期は不明であるが、埋土の様相や出土遺物から縄文時代と考えられる。

ＲＤ115土坑（第40図、写真図版28）
＜位置・検出状況＞調査区西部の４Ｗ25ｇグリッド付近に位置する。Ⅶ層中で、暗褐色の長楕円形の広がりとして検出した。Ｎ－73°－Ｅである。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は長楕円形を呈する。開口部径は224×86cmを測る。主軸方向はＮ－73°－Ｅである。
＜埋土＞暗褐色シルトを主体とする。１・２層に細分した。自然堆積か人為堆積か判断できなかった。
＜底面・壁＞底面は凹凸があり、壁は外傾しながら立ち上がる。検出面からの深さは約12cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞縄文土器が埋土より10.61ｇ出土したが、小片のため不掲載とした。
＜時期＞出土遺物から縄文時代と考えられるが、詳細な時期は不明である。

ＲＤ116土坑（第40図、写真図版28・29）
＜位置・検出状況＞調査区西部の４Ｗ24ｆグリッド付近に位置する。Ⅶ層中で、黒褐色シルトの円形気味の広がりとして検出した。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は円形を呈し、開口部径は152×148cmを測る。主軸方向はＮ－12°－Ｗである。
＜埋土＞１～４層に細分した。各層何れにも黄褐色粘土ブロックと炭化物が少量混入する。また、２

層には焼土ブロックが含まれる。全て人為が介在した土層で、併せて人為堆積層である。北西隅のピット状の掘りこみ部分では、地山粘土層が比熱を受け、焼土化した層がみられる。
＜底面・壁＞底面は緩い凹凸がある。壁は内湾気味に立ち上がる。検出面からの深さは約24cmを測る。
＜付属施設＞北西隅に径40×32cmの柱穴状の掘り込みがある。
＜遺物＞（第83・120図、写真図版69・104）土器数点、石器１点、石製品４点出土した。［土器］中期末葉？・後期前葉が出土している。106～108の３点を掲載した。［石器］725の磨石１点が出土した。
＜時期＞中期末葉～後期前葉の土器が出土している状況から、後期前葉の可能性が高い。

ＲＤ117土坑（第40図、写真図版32）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ１ｅグリッドに位置し、北西側は調査区外へ延びる。ＲＤ118の底面において、黒褐色シルトの楕円形の広がりとして検出した。
＜重複関係・建替え＞ＲＤ118に切られる。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は楕円形を呈すると考えられる。調査区内においての開口部径は62×66cmである。主軸方向はＮ－45°－Ｗと推定される。
＜埋土＞黒褐色シルトを主体とし、黄褐色粘土を少量・炭化物を極少量含む。堆積様相から人為堆積の可能性が考えられる。
＜底面・壁＞底面や壁は地山の礫が露出している部分がある。底面は緩い凹凸があり、壁は外反しながら立ち上がる。検出面からの深さは約20cmを測る。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞なし。
＜時期＞出土遺物がないため、詳細な時期は不明である。埋土の様相から縄文時代と考えられる。

ＲＤ118土坑（第40図、写真図版29）
＜位置・検出状況＞調査区西部の４Ｗ25ｅグリッド付近に位置し、北西側は調査区外へ延びる。Ⅶ層中で暗褐色の楕円形の広がりとして検出した。
＜重複関係・建替え＞ＲＤ117を切る。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は楕円形を呈すると考えられる。調査区内においての開口部径は132×148cmを測る。主軸方向はＮ－48°－Ｗと推定される。
＜埋土＞暗褐色シルトを主体とし、２層に細分される。埋土の様相から人為堆積と考えられる。
＜底面・壁＞底面や壁は地山の礫が露出している部分がある。そのため、底面は凹凸がある。壁は内湾気味に立ち上がる。検出面からの深さは約36cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞縄文土器が１層より95.16ｇ出土している。小片のため不掲載とした。
＜時期＞出土遺物から縄文時代中期末葉の可能性が考えられる。

ＲＤ119土坑（第41図、写真図版29）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ２ｃグリッド付近に位置する。北西側は調査区外へ延びる。調査区境に入れたサブトレンチの掘削時に、調査区壁の土層断面において、ＲＤ120・122と重複するプランを確認した。
＜重複関係・建替え＞ＲＡ013・ＲＤ120・122を切る。

＜平面形・規模・主軸方向＞北西側が調査区外へ延びるため、平面形・主軸方向は不明である。調査区内においての開口部径は148×72cmを測る。
＜埋土＞第41図Ａ－Ａ´断面１～７層が本遺構に伴う。埋土最上位は１層暗褐色シルトと２層黒褐色シルトが、埋土中位は３層黒褐色シルト・４層褐色シルト質粘土・４ａ層黄褐色粘土質シルト（地山土※Ⅶ層－１）が、埋土下位は５層・５ａ層暗褐色シルトと６・７層明黄褐色粘土により構成される。なお、３ａ層は木根撹乱と捉えられる。埋土最上位の１層は自然堆積の可能性が高いものの、その他は全て人為堆積と判断される。
＜底面・壁＞底面は緩い凹凸がある。壁は断面形フラスコ状を呈する。検出面からの深さは約72cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞縄文土器が埋土より95.16ｇ出土した。小片のため不掲載としたが、縄文時代中期末葉と考えられるものが主体を占める。
＜時期＞重複遺構（ＲＡ013）との関係から縄文時代中期後葉～末葉より新しい。出土土器からは、中期末葉と考えられる。併せて、重複関係にあるＲＤ120～122とは、短い時間幅の中で、同一の占地内において土坑の作り替えが繰り返されたことが窺える。

ＲＤ120土坑（第41図、写真図版29）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ１ｄグリッド付近に位置する。北西側は調査区外へ延びる。調査区端に入れたサブトレンチの掘削時に、調査区壁の土層断面において、ＲＤ119・121・122との重複関係とともに確認した。
＜重複関係・建替え＞ＲＤ119に切られ、ＲＡ013・ＲＤ121・122を切る。
＜平面形・規模・主軸方向＞残存部が少ないことや北西側が調査区外へ延びるため、平面形・主軸方向は不明である。調査区内においての開口部径は110×66cmを測る。
＜埋土＞第41図Ａ－Ａ´断面11～23層が本遺構に伴う埋土と判断される。大別すると、埋土上位～下位まで11～22層とした黒褐色シルトと暗褐色シルトが混在した状態で堆積し、最下位に23層黄褐色粘土質シルトが堆積する。全て人為堆積と判断される。
＜底面・壁＞底面は平坦である。壁は断面形フラスコ状を呈すると推定される。深さは約66cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞なし。
＜時期＞重複遺構との関係から縄文時代中期末葉と考えられる。

ＲＤ121土坑（第41図、写真図版29）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ１ｄグリッド付近に位置する。北西側は調査区外へ延びる。調査区端に入れたサブトレンチの掘削時に、調査区壁の土層断面において、ＲＤ120との重複関係とともに確認した。
＜重複関係・建替え＞ＲＤ120に切られ、ＲＡ013、ＲＤ122を切る。
＜平面形・規模・主軸方向＞ＲＤ120に切られることや北西側が調査区外へ延びるため、平面形・規模・主軸方向は不明である。
＜埋土＞第41図Ａ－Ａ´断面31～36層が本遺構に伴う埋土と判断される。31層黒褐色シルトが埋土の大半を占める。人為堆積と判断される。

＜底面・壁＞底面は緩い凹凸がある。壁は、底部から胴部中位にかけては外傾しながら立ち上がり、胴部中位から開口部まではほぼ直立に立ち上がる。検出面からの深さは約66cmを測る。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞なし。
＜時期＞重複遺構との関係から縄文時代中期末葉と考えられる。

ＲＤ122土坑（第41図、写真図版29）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ２ｃグリッド付近に位置する。北西側は調査区外へ延びると推定される。調査区端に入れたサブトレンチの掘削時に、調査区壁の土層断面において、ＲＤ119・120との重複関係とともに確認した。
＜重複関係・建替え＞ＲＤ119・120に切られる。ＲＡ013とも平面的には重複するが、新旧関係は把握できない。
＜平面形・規模・主軸方向＞ＲＤ119・120に切られること、調査区外へ延びる部分が大半であることから、平面形・規模・主軸方向は不明である。
＜埋土＞第41図Ａ－Ａ′断面41層が本遺構に伴う埋土と判断される。この41層は暗褐色シルトを主体に黄褐色粘土が10％程混じる。人為堆積層と考えられるが、明確には判断できない。
＜底面・壁・付属施設＞不明である。
＜遺物＞なし。
＜時期＞重複遺構との関係から縄文時代中期後葉～末葉より新しいと考えられる。

ＲＤ123土坑（第42図、写真図版30）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ３ｅグリッド付近に位置する。Ⅶ層中で、褐色シルトの円形の広がりとして検出した。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は不整円形を呈する。開口部径は82×76cmを測る。主軸方向はＮ－１°－Ｗである。
＜埋土＞１～６ｃ層に細分した。暗褐色シルト、褐色シルト質粘土、黄褐色粘土に大別され、人為堆積である。
＜底面・壁＞底面は平坦である。壁は、北側では直立気味に内傾しながら立ち上がり、その他の部分ではオーバーハングする。断面形の在りかたからフラスコピットと呼ばれるものに相当しよう。深さは約54cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞（第120図、写真図版104）石器４点が出土した。そのうち、床面直上から出土した磨石２点（726・727）を掲載した。ほかに、埋土下位より石錘１点・礫器１点が出土した。
＜時期＞詳細な時期は不明であるが、周辺の状況から縄文時代中期後半と考えられる。

ＲＤ124土坑（第42図、写真図版30）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ４ｅグリッドに位置する。Ⅶ層中で、褐色シルトの楕円形の広がりとして検出した。
＜重複関係・建替え＞ＲＰ006に切られる。

＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は楕円形を呈する。開口部径は104×72cmを測る。主軸方向はＮ－53°－Ｗである。
＜埋土＞４層に細分される。埋土上位に１層褐色シルトと２層にぶい黄褐色シルト、中位に３層黄褐色粘土、下位に４層褐色シルトが堆積する。人為堆積である。なお、ＲＰ006とした埋設土器遺構は１層中を掘り込み構築されている。
＜底面・壁＞底面は緩い凹凸がある。壁は外傾して立ち上がる。検出面からの深さは約56cmを測る。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞なし。
＜時期＞ＲＰ006に切られることから、縄文時代中期末葉より古い。出土遺物がないため詳細な時期は特定できないが、中期末葉若しくはそれより古い。

ＲＤ125土坑（第42図、写真図版30）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ４ｄグリッド付近に位置する。Ⅶ層中で、黒褐色シルトの不整な楕円形の広がりとして検出した。
＜重複関係・建替え＞11・12・15・16号柱穴状土坑に切られる。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は不整楕円形を呈する。開口部径は194×122cmを測る。主軸方向はＮ－55°－Ｗである。
＜埋土＞黒褐色シルトを主体とし、３層に細分される。自然堆積によるものと考えられる。
＜底面・壁＞底面は平坦である。北西側の壁は柱穴状土坑に切られ残存しないが、南東側では、検出面からの深さは約10cmを測る。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞（第83図、写真図版69）１層より109の縄文土器が１点出土した。中期のものと考えられる口縁部破片である。
＜時期＞出土土器から縄文時代中期と考えられる。

ＲＤ126土坑（第42図、写真図版30）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ５ｃグリッド付近に位置する。Ⅶ層中で、黒褐色シルトの楕円形の広がりとして検出した。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は楕円形を呈する。開口部径は114×86cmである。主軸方向はＮ－62°－Ｗである。
＜埋土＞６層に細分される。暗褐色シルトを中心に、明黄褐色や黄褐色の粘土が混じる。４層は壁の崩壊土であるが、その他は人為堆積層と考えられる。
＜底面・壁＞底面は平坦で、壁はやや外傾しながら立ち上がる断面形がビーカー状の土坑である。検出面からの深さは約70cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞なし。
＜時期＞出土遺物がないため詳細は不明であるが、埋土の様相から縄文時代と考えられる。

ＲＤ127土坑（第42図、写真図版31）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ５ｄグリッド付近に位置する。Ⅶ層中で、黒褐色シルトの楕円形の広がりとして検出した。
＜重複関係・建替え＞ＲＤ128・130を切る。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は楕円形を呈する。開口部径は110×92cmを測る。主軸方向はＮ－21°－Ｅである。
＜埋土＞５層に細分される。黒褐色シルトや暗褐色シルトを主体とする。人為堆積である。
＜底面・壁＞底面はほぼ平坦である。壁はやや外傾しながら立ち上がり、南東壁では内湾気味に立ち上がる。検出面からの深さは約84cmである。
＜遺物＞埋土より、縄文土器が141.21ｇ、フレークが3.91ｇ出土した。土器は縄文時代中期と推定されるが、小片のため不掲載とした。
＜時期＞出土遺物から縄文時代中期と考えられるが、詳細な時期は不明である。

ＲＤ128土坑（第42図、写真図版31）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ６ｅグリッド付近に位置する。Ⅶ層中で黒褐色シルトの広がりを検出し、土層断面において、ＲＤ129・130との重複関係とともに確認した。
＜重複関係・建替え＞ＲＤ127・129に切られ、ＲＤ130を切る。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は円形と考えられる。残存部の開口部径は72×76cmである。主軸方向はＮ－35°－Ｗと推定される。
＜埋土＞４層黒褐色シルト、５層暗褐色シルト、６層にぶい黄褐色粘土質シルトの３つに細分される。明確ではないが人為堆積と考えられる。
＜底面・壁＞底面はほぼ平坦で、壁は外傾しながら立ち上がる。検出面からの深さは約44cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞縄文土器が埋土より51.13ｇ出土した。小片のため不掲載としたが縄文時代中期～後期と推定される。
＜時期＞出土遺物から縄文時代中期～後期と考えられるが、詳細な時期は不明である。

ＲＤ129土坑（第42図、写真図版31）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ６ｄグリッドに位置する。Ⅶ層中で黒褐色シルトの広がりを検出し、土層断面において、ＲＤ128・130との重複関係とともに確認した。
＜重複関係・建替え＞ＲＤ128を切る。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は楕円形を呈する。開口部径は126×80cmを測る。主軸方向はＮ－３°－Ｗである。
＜埋土＞３層に細分される。１層黒褐色シルトと３層暗褐色シルトにより構成される。２層は木根撹乱層である。明確ではないが人為堆積と考えられる。
＜底面・壁＞底面はほぼ平坦で、壁は外傾しながら立ち上がる。検出面からの深さは約24cmをである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞なし。
＜時期＞重複遺構や埋土の様相から縄文時代と考えられる。重複遺構との関係から縄文時代中期若しくはそれより古いと考えられるが、詳細な時期は不明である。

ＲＤ130土坑（第42図、写真図版31）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ６ｃグリッド付近に位置する。Ⅶ層中で黒褐色シルトの広がりを検出し、土層断面において、ＲＤ128との重複関係とともに確認した。
＜重複関係・建替え＞ＲＤ127・128に切られる。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は楕円形を呈すると考えられる。残存部の開口部径は86×78cmである。主軸方向はＮ－14°－Ｅと推定される。
＜埋土＞黒褐色シルトを主体とする。堆積様相からは自然堆積と考えられるが明確ではない。
＜底面・壁＞地山の礫が露出しているため、底面は凹凸がある。壁は外傾しながら立ち上がる。検出面からの深さは約20cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞なし。
＜時期＞重複遺構や埋土の様相から縄文時代中期～後期、若しくはそれよりやや古いと考えられるが、詳細な時期は不明である。

ＲＤ131土坑（第43図、写真図版32）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ６ｃグリッドに位置する。Ⅶ層中で、土器を含む黒褐色シルトの不整円形の広がりとして検出した。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は不整円形を呈する。開口部径は66×62cmである。主軸方向はＮ－33°－Ｅである。
＜埋土＞埋土上位が黒褐色シルト、中～下位に暗褐色シルトが堆積する。人為堆積の可能性が高い。
＜底面・壁＞底面は緩いＵ字状を呈する。壁は外傾しながら立ち上がる。深さは約30cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞（第83図、写真図版69）縄文土器が699.10ｇ、石鏃１点、フレーク75.92ｇが出土している。［土器］２点を掲載した（110・111）。110は大木７ｂ式、111は中期末葉の深鉢である。
＜時期＞出土遺物から縄文時代中期末葉と考えられる。

ＲＤ132土坑（第43図、写真図版32）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ５ｂグリッド付近に位置する。Ⅶ層中で、暗褐色シルトの隅丸長方形の広がりとして検出した。併せて、土坑プランの中央より北東側で、人頭大の礫が埋土に刺さるような状況でみられたことを付け加えておく。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は隅丸長方形を呈する。開口部径は130×84cmを測る。主軸方向はＮ－０°－Ｗである。
＜埋土＞暗褐色シルトを主体とし、２層に細分される。人為堆積と考えられる。
＜底面・壁＞底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がる。検出面からの深さは約16cmである。
＜付属施設＞北東隅に小ピット状の掘りこみが張り出す。
＜遺物＞（第83図、写真図版69）１層より縄文土器154.92ｇ、スクレイパー２点、フレーク6.31ｇが出土している。［土器］112の深鉢１点を掲載した。中期末葉と推定される。
＜時期＞出土土器は中期末葉と推定されるが、土坑の形状や埋土の様相からは、それより新しい時期

と捉えられる。中・近世の墓壙の可能性も考えられるが遺物がなく、時期不明としておく。

ＲＤ133土坑（第43図、写真図版32）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｖ６ｙグリッドに位置する。調査区端に入れたサブトレンチの掘削時に、古銭を含む黒褐色シルトの広がりを検出した後、土層断面において確認した。
＜重複関係・建替え＞ＲＡ015を切る。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は不整円形を呈する。開口部径は68×56cmを測る。主軸方向はＮ－74°－Ｅである。
＜埋土＞２層に細分される。埋土上位が１層黒褐色シルト、埋土下位が２層黒色シルトからなる。遺物の出土状況から人為堆積の可能性が考えられる。
＜底面・壁＞底面は緩いＵ字状を呈する。壁は外傾して立ち上がる。深さは約36cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞（第111図、写真図版102）埋土中位より北宋銭が２点出土し掲載した（1021・1022）。
＜時期＞出土遺物から、中～近世と考えられる。

ＲＤ134土坑（第43図、写真図版33）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｖ８ｖグリッドに位置する。Ⅶ層中で、黒色シルトの不整楕円形の広がりとして検出した。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は不整楕円形を呈する。開口部径は134×106cmを測る。主軸方向はＮ－33°－Ｗである。
＜埋土＞１層黒色シルトを主体とし、壁際に黄褐色粘土ブロックの混入が顕著な２層黒褐色シルトがみられる。自然堆積と考えられるが明確には判断できない。
＜底面・壁＞底面は凹凸があり、中央部がやや窪む。壁は外傾しながら立ち上がる。検出面からの深さは約36cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞埋土上～中位より縄文土器が108.05ｇ、磨石２点、フレーク7.39ｇが出土している。土器は中期を中心とする。
＜時期＞出土遺物から縄文時代中期の可能性があるものの、時期の特定はできない。
＜性格・機能＞底面の凹凸の状況や埋土の様相が、本遺跡で検出された土取り穴に類似していることから、本遺構も粘土採掘を意図した小規模な土取り穴ではないかと考えられる。

ＲＤ135土坑（第43図）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ７ｂグリッド付近に位置する。ＲＡ017の炉前庭部直下において、暗褐色シルトの楕円形の広がりとして検出した。
＜重複関係・建替え＞ＲＡ017に切られる。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は楕円形を呈する。開口部径は92×64cmを測る。主軸方向はＮ－28°－Ｗである。
＜埋土＞黄褐色粘土を含む暗褐色シルトと褐色粘土が互層気味に堆積する。１～６層に細分される。各所に黄褐色粘土が混じる土層の様相からは人為堆積と考えられる。

＜底面・壁＞底面は平坦で、壁は底部から胴部中位にかけては内湾、胴部中位から開口部にかけては外反しながら立ち上がる。検出面からの深さは約48cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞埋土より礫器が２点出土している。
＜時期＞ＲＡ017に切られることから、縄文時代中期末葉より古いと考えられるが、出土土器がないため詳細な時期は不明である。状況からＲＡ017と大差ない時期と推定される。

ＲＤ136土坑（第43図、写真図版33）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ７ｂグリッドに位置する。ＲＡ017の炉の直下で検出した。
＜重複関係・建替え＞ＲＡ017に切られる。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は不整楕円形を呈する。開口部径は100×45cmを測る。主軸方向はＮ－38°－Ｗである。
＜埋土＞２層に細分される。埋土上位に１層黒褐色シルト、埋土下位に２層暗褐色粘土質シルトが堆積する。自然堆積なのか人為堆積なのか判断が難しいが、後者と考えたい。
＜底面・壁＞底面は平坦で、壁は外傾しながら立ち上がる。検出面からの深さは約58cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞（第83図、写真図版69）１～２層より縄文土器が65．74ｇ、埋土下位より磨石１点が出土している。[土器] 113・114は、２層より出土した前期初頭上川名２式に比定される土器である。胎土中には多量の繊維が含まれる。
＜時期＞出土遺物は縄文時代前期初頭である。重複遺構との関係からは中期末葉より古い。出土遺物を憂慮すると前期初頭の可能性が高い。しかしながら、中期末葉の竪穴住居跡炉の直下から検出されている状況を鑑みると、竪穴住居跡の構築に際して、何らかの指標となった土坑である可能性もあり、中期末葉の可能性も考えられる。

ＲＤ137土坑（第44図、写真図版33）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ３ｊグリッド付近に位置する。Ⅶ層中で、黒褐色～暗褐色シルトの不整円形の広がりとして検出した。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は不整円形を呈する。開口部径は176×176cmを測る。主軸方向はＮ－６°－Ｗである。
＜埋土＞黒褐色シルトと暗褐色シルトを主体に構成され、黄褐色粘土が混じる。17層に細分した。人為堆積である。
＜底面・壁＞底面は緩い凹凸がある。壁は外傾～外反しながら立ち上がる。深さは約48cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞(第83図、写真図版69)埋土より縄文土器が923.22ｇ、スクレイパー１点、磨石１点、フレーク43.39ｇが出土した。このうち、縄文土器１点を掲載した（115)。115は、前期後葉に比定される。
＜時期＞出土遺物からは前期後葉前後に廃絶された土坑と考えられる。
＜性格・機能＞底面の凹凸の状況や埋土の様相が、本遺跡で検出された土取り穴に類似していることから、本遺構も粘土採掘を意図した小規模な土取り穴ではないかと考えられる。

ＲＤ138土坑（第44図、写真図版34）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ３ｈグリッド付近に位置する。ＲＸ001の北側の底面で、黒褐色～暗褐色シルトの不整形の広がりとして検出した。
＜重複関係・建替え＞ＲＸ001を切る。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は不整形を呈する。開口部径は184×168cmを測る。主軸方向はＮ－53°－Ｗである。
＜埋土＞４層に細分される。埋土上～中位に暗褐色シルト、黒褐色シルト、黄褐色粘土がみられ、埋土下位に暗褐色シルト質粘土が堆積する。人為堆積である。
＜底面・壁＞底面や壁には凹凸がある。壁は外反しながら立ち上がる。検出面からの深さは約58cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞（第121図、写真図版104）埋土より縄文土器が217.84ｇ出土している。埋土下位（底面直上）より出土した磨製石斧１点を掲載した（729）。
＜時期＞出土遺物と重複遺構から、縄文時代と考えられる。
＜その他＞埋土下位（底面直上）で完形の磨製石斧１点が出土している。出土状況からは、意図的に埋置されていると捉えられる。何らかの儀礼的な事象が想起される。

ＲＤ139土坑（第44図、写真図版34）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ４ｉグリッド付近に位置する。Ⅶ層中で、黒褐色シルトの円形の広がりとして検出した。
＜重複関係・建替え＞ＲＸ001を切る。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は不整円形を呈する。開口部径は168×164cmを測る。主軸方向はＮ－26°－Ｅである。
＜埋土＞１～４層に分層した。さらに、１層系は１層・１ａ層・１ｂ層に、２層系は２層と２ａ層に細分した。人為堆積である。
＜底面・壁＞底面や壁には凹凸がある。壁は内湾気味に立ち上がる。検出面から深さ約64cmを測る。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞埋土より縄文土器が386.77ｇ、Ｕフレ１点、フレーク6.77ｇが出土している。
＜時期＞出土遺物と重複遺構から、縄文時代と考えられる。
＜性格・機能＞底面の凹凸の状況や埋土の様相が、本遺跡で検出された土取り穴に類似していることから、本遺構も粘土採掘を意図した小規模な土取り穴ではないかと考えられる。

ＲＤ140土坑（第45・46図、写真図版34）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ５ｇグリッド付近に位置する。ＲＸ001の精査時に土層断面において、重複関係とともに確認した。
＜重複関係・建替え＞ＲＤ141、ＲＸ001を切る。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は不整円形を呈する。開口部径は156×156cmを測る。Ｎ－12°－Ｗである。
＜埋土＞第46図Ｂ－Ｂ´断面の１～７層が本遺構の埋土である。その内、１～４層系は更に細分される。黒褐色シルトと暗褐色シルトを主体に黄褐色粘土が各層に10～30％の割合で混入する。人為堆積

と考えられる。
＜底面・壁＞底面は緩い凹凸がある。壁は直立～外傾しながら立ち上がる。断面形はビーカーに近い形状を呈する。検出面からの深さは約74cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞（第83図、写真図版69）埋土上～下位から縄文土器が922.55ｇ、石器８点（スクレイパー１点・Ｕフレ１点・磨製石斧の未成品１点・礫器５点）が出土した。このうち、116・117の２点の縄文土器を掲載した。117は埋土上位から出土したもので大木10式である。118は埋土中位から出土した大洞Ａ式？である。
＜時期＞重複遺構との関係からは、中期後半より新しいと考えられる。出土土器からは、縄文時代中期末葉～晩期後葉の時期幅で捉えられるが、埋土上位より中位出土を憂慮すると、晩期後葉の可能性もある。
＜性格・機能＞底面の凹凸の状況や埋土の様相が、本遺跡で検出された土取り穴に類似していることから、本遺構も粘土採掘を意図した小規模な土取り穴ではないかと考えられる。

ＲＤ141土坑（第45・46図、写真図版35）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ５ｇグリッド付近に位置する。Ⅶ層中で黒褐色シルトの不整楕円形の広がりを検出した後、土層断面において重複遺構とともに確認した。
＜重複関係・建替え＞ＲＸ001、ＲＤ144を切る。ＲＤ140・142に切られる。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は不整楕円形を呈すると考えられる。残存部の開口部径は216×140cmを測る。主軸方向はＮ－75°－Ｗと推定される。
＜埋土＞第46図Ｂ－Ｂ´断面の11～18層が本遺構の埋土である。埋土上位～中位の１～17層は、黒褐色シルトと暗褐色シルトを主体に黄褐色粘土が各層に７～10％の割合で混入する。この１～17層は人為堆積層である。埋土下位の18層は黄褐色粘土を主体に黒褐色シルトが少量含まれる。この18層は、地山の可能性も考えられるが明確には判断できなかった。
＜底面・壁＞底面は緩い凹凸がある。壁は、ＲＤ140などに破壊されているが、残存する部分では直立気味に立ち上がる。残存部の検出面からの深さは約50cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞埋土より縄文土器が134ｇ出土している。
＜時期＞出土遺物と重複遺構から、縄文時代中期と考えられる。
＜性格・機能＞底面の凹凸の状況や埋土の様相が、本遺跡で検出された土取り穴に類似していることから、本遺構も粘土採掘を意図した小規模な土取り穴ではないかと考えられる。

ＲＤ142土坑（第45・46図、写真図版35）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ５ｆグリッド付近に位置する。Ⅶ層中で黒褐色シルトの不整楕円形の広がりを検出した後、土層断面において重複遺構とともに確認した。
＜重複関係・建替え＞ＲＤ141・143・148を切る。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は不整楕円形を呈する。開口部径は288×196cmを測る。主軸方向はＮ－30°－Ｗである。
＜埋土＞第46図Ｂ－Ｂ´断面の21～30層が本遺構の埋土である。黒色シルト、黒褐色シルト、黄褐色粘土などで構成される。人為堆積である。

＜底面・壁＞底面は凹凸がある。壁は外傾しながら立ち上がる。検出面からの深さは約50cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞(第114図、写真図版98)埋土上～下位より縄文土器が389ｇ、埋土中位より石器１点、フレーク1.41ｇが出土した。このうち、石鏃１点を掲載した（623)。
＜時期＞出土遺物と重複遺構から、縄文時代中期と考えられる。
＜性格・機能＞底面の凹凸の状況や埋土の様相が、本遺跡で検出された土取り穴に類似していることから、本遺構も粘土採掘を意図した小規模な土取り穴ではないかと考えられる。

ＲＤ143土坑（第45・46図、写真図版35）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ５ｆグリッド付近に位置する。Ⅶ層中で黒褐色シルトの不整楕円形の広がりを検出した後、土層断面において重複遺構とともに確認した。
＜重複関係・建替え＞ＲＤ142に切られる。
＜平面形・規模・主軸方向＞ＲＤ142に切られるため、平面形・規模・主軸方向は不明である。
＜埋土＞第46図Ｂ－Ｂ´断面の31～36層が本遺構の埋土である。黒褐色シルト、暗褐色シルトを主体に黄褐色粘土が２～５％混入する。人為堆積である。
＜底面・壁＞底面は凹凸がある。壁は外傾しながら立ち上がる。検出面からの深さは約22cmである。
＜遺物＞（第83図、写真図版69）埋土中～下位より縄文土器710ｇ、石鏃２点・フレーク19.11ｇが出土した。このうち、縄文土器２点を掲載した（119・120)。119は大木９式に比定される土器である。120は晩期後～末葉のものと考えられる土器である。
＜時期＞出土遺物と重複遺構から、縄文時代中期～晩期と考えられる。
＜性格・機能＞底面の凹凸の状況や埋土の様相が、本遺跡で検出された土取り穴に類似していることから、本遺構も粘土採掘を意図した小規模な土取り穴ではないかと考えられる。

ＲＤ144土坑（第45図、写真図版35・36）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ５ｇグリッド付近に位置する。Ⅶ層中で黒褐色シルトの不整楕円形の広がりを検出した後、土層断面において重複遺構とともに確認した。
＜重複関係・建替え＞ＲＤ148を切り、ＲＤ141・142・146に切られる。
＜平面形・規模・主軸方向＞上記の遺構との重複のため、不明である。
＜埋土＞第45図Ａ－Ａ´断面の１・２層が本遺構の埋土である。埋土上～中位は、黄褐色粘土ブロック・炭化物・焼土が含まれる１層黒褐色シルトが堆積する。埋土中～下位は、黄褐色粘土ブロックを15％程含む２層暗褐色シルトが堆積する。人為堆積である。
＜底面・壁＞底面はほぼ平坦である。壁は、南壁の一部のみ残存する。緩く外傾した後、上部付近で直立して立ち上がる。検出面からの深さは約32cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞（第121図、写真図版105）埋土より縄文土器が161ｇ、石器１点・フレーク19.11ｇが出土した。このうち、凹石？１点（731）を掲載した。
＜時期＞出土遺物と重複遺構から、縄文時代中期と考えられる。
＜性格・機能＞底面の凹凸の状況や埋土の様相が、本遺跡で検出された土取り穴に類似していることから、本遺構も粘土採掘を意図した小規模な土取り穴ではないかと考えられる。

ＲＤ145土坑（第45図、写真図版35）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ６ｈグリッド付近に位置する。Ⅶ層中で黒褐色シルトの楕円形の広がりを検出した後、土層断面において重複遺構とともに確認した。
＜重複関係・建替え＞ＲＤ146を切る。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は楕円形を呈する。開口部径は148×116cmを測る。主軸方向はＮ－10°－Ｗである。
＜埋土＞第45図Ａ－Ａ´断面の11～16層が本遺構の埋土である。各層とも概ね黒褐色シルトを主体とし、黄褐色粘土ブロックが顕著に含まれる。人為堆積である。
＜底面・壁＞底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。検出面からの深さは約26cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞すべて不掲載としたが、埋土より縄文土器99ｇ、スクレイパー１点が出土した。
＜時期＞出土遺物と重複遺構から、縄文時代と考えられる。
＜性格・機能＞底面の凹凸の状況や埋土の様相が、本遺跡で検出された土取り穴に類似していることから、本遺構も粘土採掘を意図した小規模な土取り穴ではないかと考えられる。

ＲＤ146土坑（第45・47図、写真図版35・36）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ６ｈグリッド付近に位置する。Ⅶ層中で黒～黒褐色シルトの楕円形の広がりを検出した後、土層断面において重複遺構とともに確認した。
＜重複関係・建替え＞ＲＤ144・147・148を切り、ＲＡ011、ＲＤ145に切られる。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は不整楕円形を呈する。開口部径は284×228cmを測る。主軸方向はＮ－81°－Ｅである。
＜埋土＞第47図Ｄ－Ｄ´断面の１～５層が本遺構の埋土である。埋土最上位に堆積する１層黒色シルトは、炭化物や焼土の混入がみられる人為層である。２～５層は、黄褐色粘土ブロックを含む黒褐色シルト・暗褐色シルトで構成される。全て人為堆積と考えられる。
＜底面・壁＞底面は凹凸がある。壁は外傾して立ち上がる。検出面からの深さは約60cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞不掲載としたが、埋土上～下位より縄文土器が487ｇ、埋土上位より石器２点（磨製石斧の未成品？１点・磨石１点）・フレーク33.16ｇが出土した。また、４層より琥珀0.41ｇが出土した。
＜時期＞出土遺物と重複遺構から、縄文時代と考えられる。
＜性格・機能＞底面の凹凸の状況や埋土の様相が、本遺跡で検出された土取り穴に類似していることから、本遺構も粘土採掘を意図した小規模な土取り穴ではないかと考えられる。

ＲＤ147土坑（第45・47図、写真図版35）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ６ｈグリッド付近に位置する。Ⅶ層中で黒褐色シルトの楕円形の広がりを検出した後、土層断面において重複遺構とともに確認した。
＜重複関係・建替え＞ＲＡ011、ＲＤ146に切られる。
＜平面形・規模・主軸方向＞上記の遺構と重複するため、不明である。
＜埋土＞第47図Ｄ－Ｄ´断面の11～13層が本遺構の埋土である。埋土上位に堆積する１層黒褐色シルトは、混入物などが含まれない状況から自然堆積層と判断される。埋土中～下位の２・３層は人為堆積と判断される。埋土中位の２層黒褐色シルトは、黄褐色粘土ブロック・炭化物・焼土が含まれる。

埋土下位の３層暗褐色シルトは、黄褐色粘土ブロック・炭化物が含まれる。
＜底面・壁＞底面・壁ともに極一部が残存する。底面はほぼ平坦である。壁は外傾しながら立ち上がる。検出面からの深さは約60cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞（第83図、写真図版69）埋土上～下位より縄文土器が687ｇ、石器５点（スクレイパー１点・石錘２点・磨石？１点・礫器１点）が出土した。このうち、縄文土器２点を掲載した（120・121）。121は、埋土下位より出土した中期前～中葉のものと考えられる土器である。
＜時期＞出土遺物と重複遺構から、縄文時代中期前～後葉と考えられる。
＜性格・機能＞底面や壁の状況からは判断が難しいが、埋土の様相などは、本遺跡で検出された土取り穴に類似している。本遺構も粘土採掘を意図した小規模な土取り穴ではないかと考えられる。

ＲＤ148土坑（第45・46図、写真図版35・36）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ６ｇグリッド付近に位置する。Ⅶ層中で黒褐～暗褐色シルトの楕円形の広がりを検出した後、土層断面において重複遺構とともに確認した。
＜重複関係・建替え＞ＲＤ149・150を切り、ＲＤ142・144・146に切られる。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は不整楕円形を呈する。開口部径は128×104cmを測る。主軸方向はＮ－53°－Ｗである。
＜埋土＞第46図Ｃ－Ｃ´断面の１～５層が本遺構の埋土である。黒褐色シルト・暗褐色シルト・黄褐色粘土によるブロック層が細かく堆積する。埋土上位の１・２層は自然堆積、埋土中～下位の３～５層は人為堆積と考えられる。
＜底面・壁＞底面は平坦で、壁は外傾しながら立ち上がる。検出面からの深さは約28cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞（第83図、写真図版69）１層より縄文土器が59ｇ出土した。122の中期後葉１点を掲載した。
＜時期＞出土遺物と重複遺構から、縄文時代と考えられる。
＜性格・機能＞底面や壁の状況からは判断が難しいが、埋土の様相などは、本遺跡で検出された土取り穴に類似している。本遺構も粘土採掘を意図した小規模な土取り穴ではないかと考えられる。

ＲＤ149土坑（第45・47図、写真図版35）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ６ｆグリッド付近に位置する。Ⅶ層中で黒褐色シルトの不整形の広がりを検出した後、土層断面において重複遺構とともに確認した。
＜重複関係・建替え＞ＲＤ151を切り、ＲＤ148に切られる。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は不整形を呈する。開口部径は272×164cmを測る。主軸方向はＮ－45°－Ｅである。
＜埋土＞第47図Ｅ－Ｅ´断面の１～５層が本遺構の埋土である。埋土上～中位の主体を占める１層黒褐色シルトは混入物がなく、自然堆積と考えられる。埋土下位や壁際に堆積する２～５層は、黄褐色粘土やにぶい黄褐色シルトなど地山起源の土を多く含む様相から人為堆積と考えられる。
＜底面・壁＞底面は凹凸がある。壁は外傾しながら立ち上がる。検出面からの深さは約40cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞（第83図、写真図版69・105）埋土より縄文土器が975ｇ、石器４点、フレーク5.61ｇが出土した。

〔土器〕123は大木８ａ式に比定される土器である。〔石器〕特殊磨石１点（733）・凹石１点（734）・石錘１点（735）を掲載した。
＜時期＞出土土器と重複遺構から、縄文時代中期中葉と考えられる。
＜性格・機能＞底面の凹凸の状況や埋土の様相が、本遺跡で検出された土取り穴に類似していることから、本遺構も粘土採掘を意図した小規模な土取り穴ではないかと考えられる。

ＲＤ150土坑（第45図、写真図版35・36）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ７ｇグリッド付近に位置する。Ⅶ層中で黒褐色シルトの不整形の広がりを検出した後、土層断面において重複遺構とともに確認した。
＜重複関係・建替え＞ＲＤ151・152を切る。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は楕円形を呈する。開口部径は168×116cmである。主軸方向はＮ－74°－Ｗである。
＜埋土＞第45図Ａ－Ａ´断面の21～23ａ層が本遺構の埋土である。各層とも黄褐色粘土や炭化物を含む様相から、人為堆積と考えられ。
＜底面・壁＞底面には凹凸があり、壁は外傾しながら立ち上がる。検出面からの深さは約56cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞（第83図、写真図版69）埋土上～下位より縄文土器が1464ｇ、石器２点（スクレイパー１点・磨石１点）、フレーク6.95ｇが出土した。〔土器〕124は中～後期のものと考えられる土器である。
＜時期＞出土土器と重複遺構から、縄文時代中～後期と考えられる。
＜性格・機能＞底面の凹凸の状況や埋土の様相が、本遺跡で検出された土取り穴に類似していることから、本遺構も粘土採掘を意図した小規模な土取り穴ではないかと考えられる。

ＲＤ151土坑（第45・46図、写真図版35・36）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ６ｇグリッド付近に位置する。Ⅶ層中で黒褐色シルトの楕円形の広がりを検出した後、土層断面において重複遺構とともに確認した。
＜重複関係・建替え＞ＲＡ011・ＲＤ148・149・150に切られる。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は楕円形を呈する。開口部径は残存部で224×156cmを測る。主軸方向はＮ－25°－Ｅと推定される。
＜埋土＞第46図Ｃ－Ｃ´断面の21～25層が本遺構の埋土である。全体の堆積様相からは自然堆積の可能性も窺えるものの、各層全般に黄褐色粘土ブロックが１～10％含まれることから、人為堆積と考えたい。
＜底面・壁＞底面はほぼ平坦で、壁は外傾しながら立ち上がる。検出面からの深さは約28cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞（第83図、写真図版69）埋土上～下位より縄文土器が288ｇ、石器１点（石匙１点）が出土した。〔土器〕掲載した２点（125・126）は縄文時代中期末葉のものと考えられる土器である。
＜時期＞出土土器と重複遺構から、縄文時代中期と考えられる。
＜性格・機能＞底面や壁の状況からは判断が難しいが、埋土の様相などは、本遺跡で検出された土取り穴に類似している。本遺構も粘土採掘を意図した小規模な土取り穴ではないかと考えられる。

ＲＤ152土坑（第45・47図、写真図版35）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ７ｈグリッド付近に位置する。Ⅶ層中で黒色シルトの楕円形の広がりを検出した後、土層断面において重複遺構とともに確認した。
＜重複関係・建替え＞ＲＡ011、ＲＤ150に切られる。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は楕円形を呈する。開口部径は224×148cmを測る。主軸方向はＮ－60°－Ｅである。
＜埋土＞第47図Ｅ－Ｅ’の11～12層が本遺構の埋土である。黒褐色シルトに黄褐色粘土が含まれる。人為堆積と判断される。
＜底面・壁＞底面は緩い凹凸がある。壁は外反しながら立ち上がる。深さは約24cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞すべて不掲載としたが、埋土下位より縄文土器３ｇ、１層よりスクレイパー１点が出土した。
＜時期＞出土遺物と重複遺構から、縄文時代と考えられる。
＜性格・機能＞底面の凹凸の状況や埋土の様相が、本遺跡で検出された土取り穴に類似していることから、本遺構も粘土採掘を意図した小規模な土取り穴ではないかと考えられる。

ＲＤ153土坑（第45・47図、写真図版35）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ７ｈグリッド付近に位置する。試掘トレンチの壁の土層断面において、壁際の部分のみを確認した。
＜重複関係・建替え＞ＲＡ011に切られる。
＜平面形・規模・主軸方向＞試掘トレンチに切られた部分が大半であるため、不明である。
＜埋土＞オレンジパミスが少量混入する黄褐色粘土を主体とする。人為堆積と考えられるが断定はできない。
＜底面・壁＞底面は凹凸がある。壁の立ち上がりは不明である。検出面からの深さは約36cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞なし。
＜時期＞出土遺物がないため詳細な時期は不明であるが、縄文時代と考えられる。
＜性格・機能＞底面の凹凸の状況や埋土の様相が、本遺跡で検出された土取り穴に類似していることから、本遺構も粘土採掘を意図した小規模な土取り穴ではないかと考えられる。

ＲＤ154土坑（第47図、写真図版37）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ２ｊグリッドに位置する。Ⅶ層中で、黒褐色シルトの不整円形の広がりとして検出した。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は不整円形を呈する。開口部径は134×108cmを測る。主軸方向はＮ－16°－Ｗである。開口部付近は細かい撹乱が顕著に看取される。
＜埋土＞黒褐色シルトを主体に南壁際に暗褐色シルトが堆積する。人為堆積と考えられるが、明確には判断できない。
＜底面・壁＞底面は凹凸があり、壁は内湾気味に立ち上がる。検出面からの深さは約30cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞不掲載としたが、埋土より縄文土器が62ｇ出土した。

＜時期＞出土遺物や重複遺構がないため、詳細な時期は不明であるが、縄文時代と考えられる。

ＲＤ155土坑（第47図、写真図版37）
＜位置・検出状況＞調査区中央部の３Ｘ９ｍグリッド付近に位置する。Ⅶ層中で、黒褐色シルトの楕円形の広がりとして検出した。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は楕円形を呈する。開口部径は122×122cmを測る。主軸方向はＮ－１°－Ｅである。
＜埋土＞黒褐色シルトによる単層である。自然堆積と考えられる。
＜底面・壁＞底面は中央部が緩く凹む。壁は外反しながら立ち上がる。検出面からの深さは約60cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞１層より縄文土器が120ｇ出土したが、小片のため不掲載とした。
＜時期＞出土遺物から、縄文時代と考えられる。

ＲＤ156土坑（第48図、写真図版37）
＜位置・検出状況＞調査区東部の２Ｙ18ｏグリッドに付近に位置する。Ⅶ層中で、黒色シルトの楕円形の広がりとして検出した。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は楕円形を呈する。開口部径は250×88cmを測る。主軸方向はＮ－14°－Ｅである。
＜埋土＞３層に細分される。埋土の主体を占める１層黒褐色シルトは自然堆積層と判断される。２層と３層は壁の地山崩壊土と判断される。
＜底面・壁＞底面には凹凸がある。壁は外反しながら立ち上がる。検出面からの深さは約48cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞（第84・107・114図、写真図版70・91・98）埋土より縄文土器5318ｇ、石器12点、フレーク14.3ｇ、土製品１点が出土した。〔土器〕縄文時代後期初頭～晩期中葉の土器が出土し、このうち、４点の土器を掲載した（127～130）。127は門前式に比定される深鉢である。128・129は大洞ＢＣ式、130は大洞Ｃ１式？である。〔土製品〕土偶１点（502）が出土した。〔石器〕石鏃１点（624）を掲載した。
＜時期＞出土遺物から縄文時代後～晩期と考えられる。
＜性格＞埋土の様相や形状から風倒木と考えられる。

ＲＤ157土坑（第48図、写真図版37）
＜位置・検出状況＞調査区東部の２Ｙ19ｏグリッドに付近に位置する。Ⅶ層中で、黒色シルトの不整形の広がりとして検出した。。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は不整形を呈する。開口部径は252×128cmを測る。主軸方向はＮ－45°－Ｗである。
＜埋土＞１層・２層に分層される。１層黒色シルト中には１ａ層とした明黄褐色粉末状のＴｏ－Ｃｕ

ブロックが混入する。２層は暗褐色砂質シルトで、壁の地山崩壊土である。自然堆積である。
＜底面・壁＞底面にはかなり凹凸がある。壁は外傾しながら立ち上がる。検出面からの深さは約42cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞埋土上位より縄文時代中期末葉～後期中葉の土器が165ｇ出土した。また、埋土上位より石鏃１点、フレーク1.64ｇが出土した。
＜時期＞出土遺物はＴｏ－Ｃｕブロックより上位で出土していることから、後世の流れ込みの可能性がある。Ｔｏ－Ｃｕの堆積状況から、縄文時代前期前葉以前と考えられる。
＜性格＞底面の状況から人為により掘削された土坑とは考え難く、自然現象の窪地の可能性もある。

ＲＤ158土坑（第48図、写真図版38）
＜位置・検出状況＞調査区東部の２Ｙ20ｉグリッドに付近に位置する。Ⅶ層中で、黒褐色シルトの楕円形の広がりとして検出した。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は楕円形を呈する。開口部径は138×116cmを測る。主軸方向はＮ－42°－Ｅである。
＜埋土＞黒褐色を主体とする。判断が難しいが自然堆積と考えられる。
＜底面・壁＞底面は平坦で、壁は外傾しながら立ち上がる。検出面からの深さは約50cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞（第84図、写真図版70）１層より359ｇの縄文土器、石器２点が出土した。〔土器〕131は後期前葉のⅢと考えられる。
＜時期＞出土遺物から、縄文時代後期と考えられる。

ＲＤ159土坑（第48図、写真図版38）
＜位置・検出状況＞調査区東部の２Ｙ22ｓグリッドに付近に位置する。Ⅶ層中で、黒褐色シルトの楕円形の広がりとして検出した。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は楕円形を呈する。開口部径は236×180cmを測る。主軸方向はＮ－54°－Ｅである。
＜埋土＞黒褐色シルトによる単層である。自然堆積と考えられる。
＜底面・壁＞底面は平坦で、壁は外傾しながら立ち上がる。検出面からの深さは約24cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞１層より縄文時代中期末葉～晩期中葉の土器208ｇが出土した。
＜時期＞出土遺物から、縄文時代中期末葉～晩期と考えられる。

ＲＤ160土坑（第49図）
＜位置・検出状況＞調査区東部の２Ｙ15ｉグリッドに付近に位置し、127号柱穴状土坑と近接する。Ⅶ層中で、土器を含む黒褐色シルトの不整形の広がりとして検出した。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は不整形を呈する。開口部径は124×102cmを測る。主軸方向はＮ

－83°－Eである。
＜埋土＞黒褐色シルトを主体とする。遺構上部は大きく削平を受けていると捉えられ、埋土の堆積様相からは、自然堆積なのか人為堆積か判断できない。
＜底面・壁＞底面はほぼ平坦で、壁は外傾しながら立ち上がる。検出面からの深さは約10cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞（第84図、写真図版70）１層より縄文中期後葉～晩期後葉の土器が386ｇ、ミニチュア土器１点、石器３点、フレーク24.6ｇが出土した。〔土器〕出土土器は縄文時代後期前葉～中葉のものが多い。このうち、２点掲載した（132・133）。
＜時期＞出土土器から、縄文時代後期前葉～中葉と考えられる。

ＲＤ161土坑（第49図、写真図版38）
＜位置・検出状況＞調査区東部の２Ｙ16ｆグリッドに付近に位置し、ＲＨ048に近接する。Ⅶ層中で、黒褐色シルトの円形の広がりとして検出した。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は円形を呈する。開口部径は132×124cmを測る。主軸方向はＮ－36°－Ｅである。
＜埋土＞黒褐色シルトと暗褐色シルトにより構成され、３層に細分される。自然堆積の可能性が高い。
＜底面・壁＞底面は緩い凹凸がある。壁は外反しながら立ち上がる。検出面からの深さは約30cmである。
＜付属施設＞底面の北側に小穴１基を伴う。
＜遺物＞（第84図、写真図版70）１～３層より縄文土器1172ｇ、石器５点、フレーク70.8ｇが出土した。〔土器〕出土土器は後期前葉のものが多い。このうち、２点を掲載した（134・135）
＜時期＞出土土器から、縄文時代後期前葉と考えられる。

ＲＤ162土坑（第49図、写真図版39）
＜位置・検出状況＞調査区東部の２Ｙ17ｃグリッドに付近に位置する。Ⅶ層中で、褐色粘土ブロックを含む黒褐色シルトの隅丸長方形の広がりとして検出した。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は隅丸長方形を呈する。開口部径は136×96cmを測る。主軸方向はＮ－52°－Ｗである。
＜埋土＞３層に細分される。主体を占める１層黒褐色シルトには、地山起源の褐色粘土ブロックが混入する。壁際には、地山起源の２層褐色シルト質砂質土や３層褐色粘土質砂質土が堆積する。人為堆積である。
＜底面・壁＞底面は平坦で、壁は内湾しながら立ち上がる。検出面からの深さは約30cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞（第110図、写真図版95）埋土下位より北宋銭が３点出土した。すべて掲載した（1023～1025）。また、磨製石斧１点が出土している。
＜時期＞出土古銭は古代11世紀のものである。ただし、状況から中世～近世の可能性が高い。
＜用途・性格＞遺構の平面形態と古銭が出土している状況から、中世～近世の墓壙と判断される。

ＲＤ163土坑（第49図、写真図版39）
＜位置・検出状況＞調査区東部の２Ｙ14ｑグリッドに付近に位置する。Ⅶ層中で、黒褐色シルトの不整形の広がりとして検出した。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は不整形を呈する。開口部径は340×166cmを測る。主軸方向はＮ－52°－Ｅである。
＜埋土＞３層に細分される。黒褐色シルトを主体とする。自然堆積である。
＜底面・壁＞底面は凹凸があり、北東側に向かって傾斜する。壁は外反しながら立ち上がる。検出面からの深さは約96cmである。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞（第84・107・140図、写真図版70・91）埋土より縄文土器8148ｇ、土製品３点、石器１点、フレーク29.76ｇが出土した。〔土器〕中期～晩期の土器が出土しているが、後期初頭～前葉のものが多い。そのうち、７点を掲載した（136～142）。〔土製品〕ミニチュア土器１点（503）、粘土塊１点（504）を掲載した。
〔石製品〕石棒１点（917）を掲載した。
＜時期＞出土土器から、縄文時代後期初頭～前葉より以前に廃絶されたと考えられる。
＜性格＞埋土の様相や形状から風倒木痕の可能性も考えられる。

4　竪穴建物跡

ＲＥ002竪穴建物跡（第50図、写真図版40・41）
＜位置・検出状況＞調査区東部の２Ｙ12mグリッド付近に位置する。表土除去後、Ⅶ層中で黒褐色シルトによる長方形の広がりとして検出した。
＜重複関係・建替え＞ＲＥ003に切られる。また、ＲＢ001～003に切られる。
＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は長方形を呈する。規模は長軸4.50×短軸3.64ｍである。主軸方向はＮ－53°－Ｅである。
＜埋土＞５層に細分される。主体を占める１層黒褐色シルトは、自然堆積とも受け取れるが、同様の遺構であるＲＥ003に建て直しされている状況から人為堆積の可能性が高い。２層・３層・５層は、床などの整地層と判断される。４層は壁の地山崩壊土である。
＜床面・壁＞床面には緩い凹凸がある。北西側の床面の２箇所で炭化物集中範囲が確認された。壁は外傾して立ち上がる。検出面からの深さは６～10cmである。
＜柱穴・付属施設＞18個検出した。南西・南東・北東壁において、壁溝が検出された。
＜遺物＞（第107図、写真図版91）縄文時代の土製品が出土した。［土製品］耳飾り１点（505）、鐸型土製品１点（506）を掲載した。
＜時期＞出土遺物は縄文時代後期であるが、遺構の形態や重複遺構との関係から中世と考えられる。

ＲＥ003竪穴建物跡（第51・52図、写真図版42・43）
＜位置・検出状況＞調査区東部の２Ｙ10ｌグリッド付近に位置する。表土除去後、Ⅶ層中で黒褐色シルトによる長方形の広がりとして把握した。
＜重複関係・建替え＞ＲＥ002を切る。ＲＢ001～ＲＢ003に切られる。

＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は長方形を呈する。規模は長軸4.76m×短軸4.08mである。主軸方向は、N－41°－Wである。
＜埋土＞1～3層に大別され、2層系と3層系は細分される。1層黒褐色シルトは焼土粒を含むことから、人為の介在を受ける層ではあるが、自然堆積の可能性が高い。2層・2a層黒褐色シルトも自然堆積と考えたい。3層・3a層褐色シルトは、壁の地山崩壊土と考えられる。
＜床面・壁＞床面は平坦である。壁は外傾して立ち上がる。検出面からの深さは8～20cmである。
＜柱穴・付属施設＞35個検出した。南西壁・南東壁・北東壁において壁溝が検出された。
＜遺物＞（第107・111図、写真図版91・94）縄文土器、土製品1点、古銭1点が出土した。[土製品]機種不明の土製品1点（507）を掲載した。[古銭] 1層より洪武通寶が1点出土した（1026）。
＜時期＞出土遺物・重複遺構との関係・遺構の形態などから、中世と考えられる。

5　焼土・炉跡

RF001焼土（第52図、写真図版44）
＜位置・検出状況＞調査区南西部の5X10oグリッドに位置する。表土除去後、Ⅳ層中で検出した。
＜重複関係・建替え＞RA004より新しい。
＜平面形・規模＞平面形は北西から南西に細長く不整な形状で広がる。焼土範囲は104×54cmで、厚さは4cmである。
＜焼土の様相＞赤褐色焼土を主体とし、炭化物が少量混じる。現地性焼土で焼成状態は良好である。
＜出土遺物＞なし。
＜時期＞重複遺構との関係から縄文時代前期後葉より新しい。ただし、住居廃絶と大差ない時期の可能性も考えられる。

RF002焼土（第52図、写真図版44）
＜位置・検出状況＞調査区南西部の5X10pグリッドに位置する。表土除去後、Ⅳ層中で検出した。
＜重複関係・建替え＞RA004より新しい。
＜平面形・規模＞南北に細長く楕円形状に広がる。焼土範囲は38×30cmで、厚さは8cmである。
＜焼土の様相＞赤褐色焼土を主体とし、炭化物が少量混じる。現地性焼土で焼成状態は良好である。
＜出土遺物＞なし。
＜時期＞重複遺構との関係から縄文時代前期後葉より新しい。ただし、住居廃絶と大差ない時期の可能性も考えられる。

RF003焼土（第52図、写真図版44）
＜位置・検出状況＞調査区南西部の5X10pグリッドに位置する。表土除去後、Ⅳ層中で検出した。
＜重複関係・建替え＞RA004より新しい。
＜平面形・規模＞北西から南西に楕円形状に広がる。焼土範囲は42×32cmで、厚さは4cmである。
＜焼土の様相＞赤褐色焼土を主体とし、炭化物が少量混じる。現地性焼土で焼成状態は良好である。
＜出土遺物＞なし。
＜時期＞重複遺構との関係から縄文時代前期後葉より新しい。ただし、住居廃絶と大差ない時期の可能性も考えられる。

ＲＦ004焼土（第53図、写真図版44）
＜位置・検出状況＞調査区南西部の５Ｘ８ｊグリッドに位置する。表土除去後、Ⅳ層中で検出した。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模＞北西から南西方向にやや長く、広がりは不整な形状である。焼土範囲は60×46cmである。厚さは12cmである。
＜焼土の様相＞赤褐色焼土ブロックが黒褐色シルト層中に混在する。二次堆積の焼土で、焼成状態はやや不良にある。
＜出土遺物＞なし。
＜時期＞詳細な時期は不明であるが、縄文時代前期後葉の可能性が考えられる。

ＲＦ005焼土（第53図、写真図版45）
＜位置・検出状況＞調査区南西部の５Ｘ９ｉグリッドに位置する。ＲＡ005の精査中に確認した。
＜重複関係・建替え＞ＲＡ005に伴う可能性がある。
＜平面形・規模＞東西方向に不整な楕円形状に広がる。焼土範囲は94×70cmで、厚さは８cmである。
＜焼土の様相＞赤褐色焼土を主体とし、炭化物が少量混じる。現地性焼土で焼成状態は良好である。
＜出土遺物＞なし。
＜時期＞詳細な時期は不明であるが、重複遺構との関係から縄文時代前期前葉と考えられる。

ＲＦ006炉跡（第53図、写真図版45）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ２ｉグリッドに位置する。Ⅶ層中で、炉石の抜き取り痕と考えられるプランとともに確認した。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模＞焼土範囲は20×18cmである。厚さは２cmである。
＜焼土の様相＞赤褐色焼土を主体とする。現地性焼土で焼成状態は良好である。
＜出土遺物＞なし。
＜時期＞詳細な時期は不明であるが、石囲炉を持つ遺構の形態から縄文時代中期と考えられる。

ＲＦ007焼土（第53図、写真図版45）
＜位置・検出状況＞調査区西部の４Ｗ18ｇグリッドに位置し、ＲＡ009に近接する。Ⅶ層中で検出した。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模＞楕円形で、長軸長40cm、短軸長20cm、深さ５cmである。
＜焼土の様相＞赤褐色焼土を主体とする。現地性焼土で焼成状態は良好である。
＜出土遺物＞なし。
＜時期＞詳細な時期は不明であるが、重複遺構との関係から縄文時代中期と考えられる。

ＲＦ008焼土（第53図、写真図版45）
＜位置・検出状況＞調査区中央部の３Ｘ12ｔグリッドに位置する。表土除去後、Ⅳ層中で検出した。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模＞北東から南西に長く、不整な形状で広がる。焼土範囲は50×34cmで、厚さは６cmで

ある。
＜焼土の様相＞赤褐色焼土を主体とする。現地性焼土で焼成状態は良好である。
＜出土遺物＞なし。
＜時期＞詳細な時期は不明であるが、現代の可能性が高い。

ＲＦ009焼土（第53図、写真図版45）
＜位置・検出状況＞調査区東部の３Ｙ11ｅグリッドに位置する。Ⅶ層中で検出した。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模＞焼土範囲は364×148cmの不整楕円形に広がる。厚さは８cmである。
＜焼土の様相＞赤褐色焼土を主体とし、炭化物が少量混じる。現地性焼土と考えられるが明確ではない。焼成状態は不良である。
＜出土遺物＞なし。
＜時期＞詳細な時期は不明である。

ＲＦ010焼土（第53図、写真図版46）
＜位置・検出状況＞調査区東部の２Ｙ24ａグリッドに位置する。Ⅶ層中で検出した。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模＞焼土範囲は58×36cmの楕円形に広がる。厚さは14cmである。
＜焼土の様相＞赤褐色焼土を主体とする。現地性焼土と考えられるが明確には判断できない。焼成状態は良好である。
＜出土遺物＞なし。
＜時期＞詳細な時期は不明であるが、中・近世の可能性が考えられる。

6　集石・立石

ＲＨ033立石（第54図、写真図版46）
＜位置・検出状況＞調査区西部４W25ｇグリッド付近に位置する。Ⅳ層を掘り下げている段階で、扁平気味の礫を検出し、立石遺構である可能性で捉え精査を進めた。ただし、Ⅳ層中では地山から露出している自然礫なのか、人為的に設置された礫なのか、明確には判断できなかったため、周辺を掘り広げた。Ⅵ層～Ⅶ層で礫が設置されている円形気味の土坑プランを検出し、下部土坑を持つ立石と認知した。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模＞礫は60×30cm程で、頂部はほぼ平坦な四角柱状を呈する。
＜下部構造＞礫の下位より下部土坑を確認した。下部土坑は、平面形は楕円形で、規模は長軸75cm×短軸55cm、検出面からの深さ44cmを測る。断面形はロート状で、壁上位～中位は粘土層（※本報告書でⅦ－２層と命名した地山層）、壁の中位～底面は礫層（Ⅶ－３層）である。
＜埋土＞下部土坑の埋土は上下２層に大別される。上位が黒褐色シルト、中～下位は黄褐色粘土が混じる暗褐色シルトで、全て人為堆積と考えられる。礫は１層中に据えられている。
＜出土遺物＞（第85図、写真図版71）土坑内からは縄文土器35.02ｇと石器１点が出土した。[土器]143・144の２点掲載した。何れも後期初頭と推定される。[石器] 礫器１点が出土した。不掲載とし

た。
＜時期＞下部土坑の出土土器から縄文時代後期初頭と推定される。

ＲＨ034集石（第54図、写真図版46）
＜位置・検出状況＞調査区西部５Ｗ６ｇグリッド付近に位置する。Ⅶ層上面で礫がまとまりのある状態で出土し、周辺をわずかに掘り下げたところ楕円形気味の土坑プランを検出し、集石と認知した。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模＞土坑の埋土上位～中位にかけて、径15～40cmの礫が100×100cm程の範囲で集石されている。
＜下部構造＞上記のとおり、礫は土坑中に集められている。土坑の規模は、長軸170cm×短軸35cm、深さ42cmである。壁は、西壁が直立気味で、その他部分は緩く外傾する。
＜埋土＞２層に大別される。上位が１層黒褐色シルト、中～下位は２層暗褐色シルトで、全般に黄褐色粘土ブロックを含む。人為堆積と考えられる。礫は１層中に埋められている様相で捉えられる。
＜出土遺物＞（第85・123図、写真図版71・106）検出面付近と土坑出土を合わせて、土器845.12ｇ、石器３点が出土した。[土器] 検出面付近では縄文中期・後期・晩期が、土坑埋土１・２層からは中期後葉～末葉が出土している。145～147の３点掲載した。[石器] 743の磨石と744の台石を掲載し、礫器１点は不掲載とした。
＜時期＞土坑埋土２層からは中期後葉～末葉が出土しており、状況から中期末葉と推定される。

ＲＨ035集石（第54図、写真図版47）
＜位置・検出状況＞調査区東部２Ｙ14ｕグリッド付近に位置する。表土除去後、Ⅳ層中で礫のまとまりを検出した。礫は全体的には丸み帯びるが、所々角ばるものもあり、河原石なのか判別が難しい。これらの礫は、自然堆積による集まりなのか、人為により意図的に集められた集石なのか、明確にはわからない。ただし、遺跡内に持ち込まれた礫である可能性は高いと調査判断し、拳大以上の礫を集石遺構として登録・認知することとした。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模＞径10～30cmの礫が、３×２ｍ程の範囲に分布する。礫はⅣ層中にみられ、礫の下部はⅦ層地山まで達していない。設置痕についても認められない。人為的な集石であるならば、当時の地表面に置き集められたものと捉えられようか。
＜下部構造＞なし。
＜埋土＞上記のとおり、Ⅳ層黒褐色シルト中に集められている。
＜出土遺物＞（第85・123・140図、写真図版71・106・122）集石を構成する礫１点と、集石の検出面付近から出土した遺物を本遺構出土として登録した。土器1759.04ｇ、石器11点、石製品１点が出土した。[土器] 出土土器は縄文時代後期中葉を主体とする。148～150の３点を掲載した。[石器] 敲石１点、石皿１点、磨石５点、礫器４点が出土した。その内、745の敲石と746の石皿１点を掲載した。なお、746の石皿は集石を構成する礫に含まれていたものである。[石製品] 集石を構成する礫に含まれていた918の石棒１点を掲載した。
＜時期＞出土遺物から縄文時代後期中葉と考えられる。

ＲＨ036集石（第54図、写真図版47）
＜位置・検出状況＞調査区東部２Ｙ15ｖグリッド付近に位置する。表土除去後、Ⅳ層中で礫のまとまりを検出した。礫は全体的に所々角ばる部分もあり河原石とは判断できない。従って、自然礫の集まりの可能性も考えられる。ただし、多数の配石遺構を検出している第５次調査と近接した地点であることから、拳大以上の礫を集石遺構として登録・認知することとした。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模＞径10～20cmの礫が、２×２ｍ程の範囲に分布する。礫はⅣ層中にみられ、礫の下部はⅦ層地山まで達していない。設置痕などはなく、人為的と捉えれば置き集めた可能性がある。
＜下部構造＞なし。
＜埋土＞Ⅳ層系の黒褐色シルト中に集められている。
＜出土遺物＞（第85・123・140図、写真図版71・107・122）集石を構成する礫に含まれていた石器７点、石製品１点と、集石の検出面付近から出土した土器974.99ｇを、合わせて本遺構出土として登録した。[土器] 出土土器は縄文時代後期前葉を主体とする。151の１点を掲載した。[石器] 集石を構成する礫には石器７点が含まれていた。内訳は、磨製石斧１点、台石１点、磨石１点、礫器４点である。その中で、747の磨製石斧１点を掲載した。[石製品] 集石を構成する礫に含まれていた919の石棒１点を掲載した。
＜時期＞出土土器から縄文時代後期前葉と考えられる。

ＲＨ037集石（第55図、写真図版47）
＜位置・検出状況＞調査区東部２Ｙ12ｖグリッド付近に位置する。表土除去後、Ⅳ層中で礫のまとまりを検出した。礫は、全体的には丸み帯びる河原石、所々角ばる礫、扁平気味の礫など様々である。明らかに河原石と判断される礫は少なく、自然堆積による集まりなのか、人為により意図的に集められた集石なのか、明確には判断できない。ただし、遺跡内に持ち込まれたと思われる礫も混在することから、集石遺構として登録・認知することとした。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模＞径７～50cmの礫が、３×２ｍ程の範囲に分布する。礫はⅣ層中にみられ、礫の下部はⅦ層地山まで達していない。設置痕などもない。人為的な集石であるならば、当時の地表面に置き集められたものと捉えられようか。
＜下部構造＞なし。
＜埋土＞Ⅳ層系の黒褐色シルト中に集められている。
＜出土遺物＞（第85・123・124・140・141図、写真図版71・98・107・122）本遺構周辺から出土した土器1567.56ｇ、石器４点、石製品２点を登録した。[土器]　出土土器は縄文時代後期初頭を主体とする。152・153の２点を掲載した。[石器] 627の尖頭器、748の磨石、749・750の石皿を掲載した。その内、集石を構成する礫に含まれていたのが、748と750である。[石製品] 920の円盤状石製品と921の石棒を掲載した。
＜時期＞出土土器から縄文時代後期初頭と考えられる。

ＲＨ038集石（第55図、写真図版47）
＜位置・検出状況＞調査区東部２Ｙ14ｘグリッド付近に位置する。表土除去後、Ⅳ層中で礫のまとまりを検出した。礫は全体的に所々角ばる部分もあり河原石とは判断できない。従って、自然堆積によ

る集まりである可能性も考えられる。ただし、配石遺構を多数検出した第５次調査と近接した地点であることから、拳大以上の礫を集石遺構として登録・認知することとした。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模＞径10～20cmの礫が、２×１ｍ程の範囲に分布する。礫はⅣ層中にみられ、礫の下部はⅦ層地山まで達していない。設置痕などもない。人為的な集石であるならば、当時の地表面に置き集められたものと捉えられようか。
＜下部構造＞なし。
＜埋土＞Ⅳ層系の黒褐色シルト中に集められている。
＜出土遺物＞（第141図、写真図版122）集石を構成する礫に含まれていた石器１点、石製品１点と、遺構の検出面や礫の下位から出土した土器1475.81ｇ、石器７点、石製品１点を遺構出土として登録した。[土器] 時期は、後期前葉を中心に、中期末葉～後期後葉まで出土している。小片が多く、また時期の幅が広いことから異時期の混在が多いと判断された。従って、遺構の帰属時期の推定資料とするには弱いと判断し、不掲載とした。[石器] ８点出土した。内訳は、磨製石斧１点、敲石１点、石錘１点、礫器４点である。全て不掲載とした。なお、上記の中で、礫器１点が集石を構成する礫に含まれていた。[石製品] 集石を構成する礫に含まれていた922の石棒と遺構周辺から出土した923の石刀を掲載した。
＜時期＞出土遺物から縄文時代後期前葉前後の可能性が考えられる。

ＲＨ039集石（第55図、写真図版47）
＜位置・検出状況＞調査区東部２Ｙ８ｖグリッド付近に位置する。表土除去後、Ⅳ層中で礫のまとまりを検出した。下部土坑を持つことから人為により意図的に集められた集石と判断し認知した。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模＞径10～40cmの礫が、Ⅳ層黒褐色シルト面から下部土坑内にかけて集められている。
＜下部構造＞礫の下部で土坑を検出した。壁・底面ともにⅦ層であることから、掘り込み面はⅣ層より下位であることがわかった。下部土坑の規模は、110×100cmのほぼ円形で、深さは15cmである。
＜埋土＞１層が基本層序Ⅳ層、２層が下部土坑の埋土である。２層と命名した下部土坑の埋土は、基本層序Ⅳ層に由来するが、１層と比較してやや明るい色調を示す。
＜出土遺物＞（第85・124・141図、写真図版71・107・122）集石を構成する礫に含まれていた石器17点、石製品１点と、遺構の検出面や礫の下位出土と下部土坑出土と合わせて土器2357.11ｇ、石器13点を遺構出土として登録した。[土器] 時期は、後期初頭を中心に、中期末葉～後期中葉まで出土している。下部土坑からは２点出土しており、中期末葉と後期初頭の小片である。154・155の２点を掲載した。[石器] 総数で30点出土した。内訳は、敲石１点、台石１点、磨石13点、礫器15点である。その内、751～754の４点を掲載した。[石製品] 集石を構成する礫に含まれていた924の石棒１点を掲載した。
＜時期＞出土遺物から縄文時代後期初頭前後と考えられる。

ＲＨ040集石（第55図、写真図版48）
＜位置・検出状況＞調査区東部２Ｙ３ｖグリッド付近に位置する。表土除去後、Ⅳ層中で礫のまとまりを検出した。下部土坑を持つことから人為により意図的に集められた集石と判断し認知した。
＜重複関係・建替え＞なし。

＜平面形・規模＞径10～20cmの礫が、直径１ｍほどの範囲で円形気味にみられる。これらの礫は、Ⅳ層黒褐色シルト面から下部土坑内にかけて集められている。
＜下部構造＞礫の下部で土坑を検出した。壁・底面ともにⅦ層であることから、掘り込み面はⅣ層より下位であることがわかった。下部土坑の規模は、120×90cmの長楕円形で、深さは15cmである。
＜埋土＞下部土坑の埋土は、基本層序Ⅳ層に由来するが、２層は１層と比較して黒味が強い。
＜出土遺物＞（第141図、写真図版123）集石を構成する礫に含まれていた石器１点、石製品１点と、遺構の検出面や礫の下位出土と下部土坑出土と合わせて土器338.14ｇ、石器１点を遺構出土として登録した。[土器] 時期は、後期初頭を中心に、中期末葉・晩期前葉である。なお、下部土坑からは、後期初頭の小片１点が出土したが、磨滅も激しいことから不掲載とした。[石器] 台石１点、礫器１点が出土した。何れも不掲載とした。なお、上記の内、台石が集石を構成する礫に混じって出土している。[石製品] 集石を構成する礫に含まれていた925の石棒１点を掲載した。
＜時期＞出土遺物から縄文時代後期初頭前後と考えられる。

ＲＨ041集石（第56図、写真図版48）
＜位置・検出状況＞調査区東部２Ｙ５ｘグリッド付近に位置する。表土除去後、Ⅳ層中で径40cm程礫を検出したことから、集石を想定しその周辺の礫を残して掘り広げた。礫は河原石もあるが、全体的に所々角ばるものもあり、基盤礫若しくは崖水性のものが混じる。従って、自然堆積による集まりである可能性も考えられる。ただし、多数の配石遺構を検出した第５次調査と近接した地点であることから、拳大以上の礫を集石遺構として登録・認知することとした。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模＞径10～40cmの礫が４ｍ程の範囲に散在する。礫はⅣ層中にみられ、礫の下部はⅦ層地山まで達していない。設置痕などもない。人為的な集石であるならば、当時の地表面に置き集められたものと捉えられようか。
＜下部構造＞なし。
＜埋土＞Ⅳ層系の黒褐色シルト中に集められている。
＜出土遺物＞本遺構の位置する２Ｙ５ｘグリッドからは出土遺物はない。
＜時期＞出土遺物がないため詳細な時期は不明であるが、縄文時代後期と考えられる。

ＲＨ042集石（第56図、写真図版48）
＜位置・検出状況＞調査区東部２Ｙ７ｘグリッド付近に位置する。表土除去後、Ⅳ層中で径10～20cm程礫を検出したことから、集石を想定しその周辺の礫を残して掘り広げた。礫は河原石もあるが、全体的に所々角ばるものもあり、基盤礫若しくは崖水性のもが混じる。従って、自然礫の集まりである可能性も考えられる。ただし、多数の配石遺構を検出した第５次調査と近接した地点であることから、拳大以上の礫を集石遺構として登録・認知することとした。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模＞径10～20cmの礫が４ｍ程の範囲に散在する。礫はⅣ層中にみられ、礫の下部はⅦ層地山まで達していない。設置痕などもない。人為的な集石であるならば、当時の地表面に置き集められたものと捉えられようか。
＜下部構造＞なし。
＜埋土＞Ⅳ層系の黒褐色シルト中に集められている。

＜出土遺物＞（第85・114・124・141図、写真図版98・108・123）集石を構成する礫に含まれていた石器３点、石製品１点と、遺構の検出面や礫の下位出土と下部土坑出土と合わせて土器1171.42ｇ、石器３点を遺構出土として登録した。[土器] 時期は、後期初頭～前葉である。なお、下部土坑からは、後期初頭の小片１点が出土したが、磨滅も激しいことから不掲載とした。[石器] 628のスクレイパー１点と755・756の台石を掲載した。[石製品] 集石を構成する礫に含まれていた926の板状石製品１点を掲載した。
＜時期＞出土遺物から縄文時代後期初頭前後と考えられる。

ＲＨ043集石（第56図、写真図版48）
＜位置・検出状況＞調査区東部２Ｙ11ｙグリッド付近に位置する。表土除去後、表土除去後、Ⅳ層中で径10～30㎝程礫を検出したことから、集石を想定しその周辺の礫を残して掘り広げた。礫は河原石もあるが、全体的に所々角ばるものもあり、基盤礫若しくは崖水性のもが混じる。従って、自然礫の集まりである可能性も考えられる。ただし、多数の配石遺構を検出した第５次調査と近接した地点であることから、拳大以上の礫を集石遺構として登録・認知することとした。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模＞径10～20㎝の礫が4.4ｍ程の範囲に散在する。礫はⅣ層中にみられ、礫の下部はⅦ層地山まで達していない。設置痕などもない。人為的な集石であるならば、当時の地表面に置き集められたものと捉えられようか。
＜下部構造＞なし。
＜埋土＞Ⅳ層系の黒褐色シルト中に集められている。
＜出土遺物＞集石を構成する礫の中に、石器４点が含まれていた。なお、集石の検出面付近や礫の下位では土器が出土しなかったが、２Ｙ11ｙグリッドⅣ層からは後期初頭～中葉と晩期前葉が出土しており、後期中葉を主体とする。[石器] ４点出土した。内訳は、台石１点、礫器２点、器種不明１点で、全て不掲載とした。
＜時期＞出土遺物がないため詳細な時期は不明であるが、縄文時代後期初頭～中葉と考えられる。

ＲＨ044集石（第57図、写真図版48）
＜位置・検出状況＞調査区東部２Ａ14ｃグリッド付近に位置する。表土除去後、表土除去後、Ⅳ層中で径10～30㎝程礫を検出したことから、集石を想定しその周辺の礫を残して掘り広げた。礫は河原石もあるが、全体的に所々角ばるものもあり、基盤礫若しくは崖水性のものが混じる。従って、自然礫の集まりである可能性も考えられる。ただし、多数の配石遺構を検出した第５次調査と近接した地点であることから、拳大以上の礫を集石遺構として登録・認知することとした。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模＞径10～20㎝の礫が2.5ｍ程の範囲に散在する。礫はⅣ層中にみられ、礫の下部はⅦ層地山まで達していない。設置痕などもない。人為的な集石であるならば、当時の地表面に置き集められたものと捉えられようか。
＜下部構造＞なし。
＜埋土＞Ⅳ層系の黒褐色シルト中に集められている。
＜出土遺物＞集石を構成する礫に石器２点が含まれていた。[石器] 磨石１点と礫器１点である。２点とも不掲載とした。

＜時期＞出土遺物がないため詳細な時期は不明であるが、縄文時代後期と考えられる。

ＲＨ045集石（第57図、写真図版48）
＜位置・検出状況＞調査区東部２Ａ17ｄグリッド付近に位置する。表土除去後、表土除去後、Ⅳ層中で径10～20cm程礫を検出したことから、集石を想定しその周辺の礫を残して掘り広げた。礫は、全体的に所々角ばるものがほとんどで、基盤礫若しくは崖水性のものと思われる。従って、自然礫の集まりである可能性も考えられる。ただし、多数の配石遺構を検出した第５次調査と近接した地点であることから、拳大以上の礫を集石遺構として登録・認知することとした。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模＞径10～20cmの礫が2.5m程の範囲に散在する。礫はⅣ層中にみられ、礫の下部はⅦ層地山まで達していない。設置痕などもない。人為的な集石であるならば、当時の地表面に置き集められたものと捉えられようか。
＜下部構造＞なし。
＜埋土＞Ⅳ層系の黒褐色シルト中に集められている。
＜出土遺物＞（第125図、写真図版108）集石を構成する礫に含まれていた石器３点と、遺構の検出面や礫の下位から出土した土器509.1ｇを遺構出土として登録した。[土器] 時期は、後期中葉を主体に晩期前葉が混じる。何れも磨滅気味の小破片であることから、不掲載とした。[石器] 礫器３点が出土した。その内、757を掲載した。
＜時期＞出土土器から縄文時代後期中葉前後と考えられる。

ＲＨ046集石（第57図、写真図版48）
＜位置・検出状況＞調査区東部２Ａ16ｂグリッド付近に位置する。表土除去後、Ⅳ層中で径30cm程礫を検出したことから、集石を想定しその周辺の礫を残して掘り広げた。礫は河原石もあるが、全体的に所々角ばる小さいものであり、基盤礫若しくは崖水性のもが混じる。従って、自然礫の集まりである可能性も考えられる。ただし、多数の配石遺構を検出した第５次調査と近接した地点であることから、集石遺構として登録・認知することとした。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模＞径５～30cmの礫が３ｍ程の範囲に散在する。礫はⅣ層中にみられ、礫の下部はⅦ層地山まで達していない。設置痕などもない。人為的な集石であるならば、当時の地表面に置き集められたものと捉えられようか。
＜下部構造＞なし。
＜埋土＞Ⅳ層系の黒褐色シルト中に集められている。
＜出土遺物＞（第125図、写真図版108）758の台石１点が出した。
＜時期＞出土遺物がないため詳細な時期は不明である。本遺構の所在する２Ａ16ｂグリッドからは、縄文時代後期中葉が出土している。

ＲＨ047集石（第58図、写真図版49）
＜位置・検出状況＞調査区東部２Ｙ14ｇグリッド付近に位置する。水田土を除去後、礫の馬蹄形状のまとまりを検出した。石器も多く含まれることから人為的に集められたと判断される。
＜重複関係・建替え＞なし。

＜平面形・規模＞径５～60cmの礫が2.5m程の馬蹄形に集散する。礫は黒褐色土中にみられ、礫の下部はⅦ層地山まで達していない。設置痕などもない。また、石鉢の破片・磨石・礫器も相当数混じる状況から、廃棄を目的に人為的に集められたものと判断される。
＜下部構造＞なし。
＜埋土＞黒褐色シルト中に集められている。
＜出土遺物＞（第110・125～127・141図、写真図版94・109・110）集石を構成する礫に含まれていた石器24点、石製品４点と、遺構の検出面や礫の下位から出土した土器802.91ｇ、石器12点を遺構出土として登録した。[土器] 時期は、後期前葉を主体とする。ただし、集石を構成する中に石鉢の破片が４片含まれることから、これら後期前葉は異時期と判断し全て不掲載とした。[石器] 総数で35点出土した。内訳は、磨製石斧２点、台石５点、磨石14点、礫器12点、軽石製２点である。その内、759～767の９点を掲載した。[石製品] 集石を構成する礫に含まれていた927～930の４点を掲載した。[陶磁器類] 陶磁器ではないが、中世もしくは近世と推定される石製の石鉢片が４片出土し、接合した。観察表は、陶磁器の表に載せ、掲載番号1011を付した。
＜時期＞出土遺物から中世若しくは近世と考えられる。
＜その他＞状況から推定して、中世若しくは近世の礫集中廃棄場的意味合いの遺構と考えられる。

ＲＨ048集石（第59図、写真図版49）
＜位置・検出状況＞調査区東部２Ｙ16ｆグリッド付近に位置する。水田土を除去後、礫のまとまりを検出した。人為的に集められたと判断される。
表土除去後、Ⅳ層中で検出した。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模＞径５～30cmの礫が1.5m程の範囲に集散する。礫は黒褐色土中にみられ、礫の下部はⅦ層地山まで達していない。設置痕などもない。人為的な集石であるならば、当時の地表面に置き集められたものと捉えられようか。
＜下部構造＞土坑を検出した。黒褐色シルト中から掘り込まれている。土坑の規模は、直径90cmの円形で、深さ20cmを測る。
＜埋土＞Ⅳ層系の黒褐色シルトを主体とする。自然堆積なのか人為堆積なのか明確ではないが、前者と思われる。
＜出土遺物＞（第127図、写真図版110）集石を構成する礫に石器３点が含まれていた。検出面付近や礫の下位では、土器などの遺物は出土していない。本遺構の位置する２Ｙ16ｆグリッドⅣ層では、後期前葉の土器が少量出土している。[石器] 台石３点が出土した。その内、768の１点を掲載した。
＜時期＞詳細な時期は不明であるが、縄文時代後期前葉前後と考えられる。

ＲＨ049集石（第59図、写真図版49）
＜位置・検出状況＞調査区東部２Ｙ16ｈグリッド付近に位置する。水田土を除去後、礫の弧状のまとまりを検出した。人為的に集められたと判断される。
表土除去後、Ⅳ層中で検出した。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模＞径５～30cmの礫が1.2m程の範囲に集散する。礫は黒褐色土中にみられ、礫の下部はⅦ層地山まで達していない。設置痕などもない。人為的な集石であるならば、当時の地表面に置き

集められたものと捉えられようか。
＜下部構造＞土坑を検出した。黒褐色シルト中から掘り込まれている。土坑の規模は、直径1.6mの円形で、深さ50cmを測る。
＜埋土＞Ⅳ層系の黒褐色シルトを主体とし、黄褐色粘土ブロックが混じる。人為堆積と推定される。
＜出土遺物＞(第85・127図、写真図版71・110)土器は、本遺構の検出面や礫の下位から出土した215.58ｇと下部土坑出土の1377.46ｇと合わせて、1593.04ｇを本遺構出土として登録した。石器は、集石を構成する礫の中に４点含まれる。[土器] 下部土坑から出土している土器は、縄文後期初頭と後期中葉である。160の１点を掲載した。[石器] 磨石２点、台石？１点、礫器１点が出土した。769の磨石と770の台石？を掲載した。
＜時期＞出土遺物から縄文時代後期と考えられる。

ＲＨ050集石（第60図、写真図版49）
＜位置・検出状況＞調査区東部２Ｙ21ｅグリッド付近に位置する。表土除去後、Ⅳ層中で径３～30cmの礫を検出したことから、集石を想定しその周辺の礫を残して掘り広げた。礫は河原石もあるが、全体的に所々角ばる小さいものであり、基盤礫若しくは崖水性のもが混じる。また、この周辺は旧沢の流路に相当する部分でもあり、自然堆積による集まりである可能性も考えられる。ただし、集石の中には石器も相当数含まれることから、集石遺構として登録・認知することとした。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模＞径10～20cmの礫が３ｍ程の範囲に集散する。礫はⅣ層中にみられ、礫の下部はⅦ層地山まで達していない。設置痕などもない。人為的な集石であるならば、当時の地表面に置き集められたものと捉えられようか。
＜下部構造＞なし。
＜埋土＞Ⅳ層系の黒褐色シルト中に集められている。
＜出土遺物＞（第127図、写真図版111）集石を構成する礫に含まれていた石器８点と集石検出面付近で出土した石器８点を合わせて、16点を登録した。[石器] 磨製石斧１点、凹石１点、磨石８点、礫器６点が出土した。その内、771の磨石１点を掲載した。
＜時期＞出土土器がないため詳細な時期は不明である。本遺構の所在する２Ｙ21ｅグリッドからは、縄文時代後期初頭～前葉の土器が出土している。明確ではないが、縄文時代後期初頭～前葉と考えられる。

ＲＨ051集石（第60図、写真図版49）
＜位置・検出状況＞調査区東部２Ｙ21ｇグリッド付近に位置する。表土除去後、Ⅳ層中で径３～30cmの礫を検出したことから、集石を想定しその周辺の礫を残して掘り広げた。礫は河原石もあるが、全体的に所々角ばる小さいものであり、基盤礫若しくは崖水性のもが混じる。また、この周辺は旧沢の流路に相当する部分でもあり、自然礫の集まりである可能性も考えられる。ただし、集石の中には石器も相当数含まれることから、集石遺構として登録・認知することとした。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜平面形・規模＞径10～40cmの礫が４ｍ程の範囲に集散する。礫はⅣ層中にみられ、礫の下部はⅦ層地山まで達していない。設置痕などもない。人為的な集石であるならば、当時の地表面に置き集められたものと捉えられようか。

＜下部構造＞なし。
＜埋土＞Ⅳ層系の黒褐色シルト中に集められている。
＜出土遺物＞（第128図、写真図版111）集石を構成する礫に含まれていた石器３点と集石検出面付近で出土した石器２点、合わせて５点が出土した。[石器] 磨製石斧１点、磨石１点、台石？１点、礫器２点が出土している。その内772の台石？１点を掲載した。
＜時期＞出土土器がないため詳細な時期は不明である。本遺構の所在する２Ｙ21ｇグリッドからは、縄文時代後期初頭～前葉の土器が出土している。明確ではないが、縄文時代後期初頭～前葉と考えられる。

7　埋　設　土　器

ＲＰ006埋設土器（第61図、写真図版52）
＜位置・検出状況＞調査西部の５Ｗ４ｅグリッドに位置する。検出状況は、上記グリッド周辺のⅥ～Ⅶ層中において、20cm程の埋設土器と土坑と想定される１ｍ程の黒褐色シルトプランを認知したことによる。なお、埋設土器周辺には、炉石の３個分の抜き取り痕と推定される暗褐色シルトのシミが認められる。従って、単独の埋設土器遺構ではなく、本来は竪穴住居跡に伴う石囲炉内に埋設されていた土器と捉えられる。ただし、周辺からは竪穴住居が想定されるような柱穴は認められない。おそらくは、水田造成以前に床面まで破壊するような掘削行為があったものと考えられる。
＜重複関係・建替え＞ＲＤ124を切る。
＜埋設状況＞土器は胴中位より上が欠落（※切断されている可能性あり）し、胴下半～底部が正立で埋設されている。掘り方は、北壁・西壁・南壁はＲＤ124埋土中を、東壁はⅦ層黄褐色ローム中を円形の土坑状に掘られている。上端はやや広めであるが、中～下端にかけては埋設土器の形状・規模に即したぎりぎりの大きさに掘られている。据え方は、地山起源の暗褐色シルト質粘土が使用されている。
＜出土遺物＞（第86図、写真図版71）埋設されていた土器内や据え方土からは遺物は出土していない。埋設されていた162の土器は、地文のみであるが中期末葉である。
＜時期＞出土土器から中期末葉である。

ＲＰ007埋設土器（第61図、写真図版52）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｗ５ｄグリッドに位置する。検出状況は、Ⅶ層上面付近の検出作業中において、地山土と見分けがつかない褐色砂質シルト土を削った際に、土器のまとまりを検出したことによる。
＜重複関係・建替え＞なし。
＜埋設状況＞土器は、直径35cm程の円形の土坑を掘り、その中に２個体分の土器片が埋められていた。１点は浅鉢である。他方は台付鉢と推定される。なお、土器の埋め方は正立や倒立など設置された痕跡はない。また、土器自体も完形土器ではなく、特に台付鉢と推定される土器は、台部の半分程の残存である。
＜出土遺物＞（第86図、写真図版71）埋置設されていた土器以外の遺物はない。埋置されていたのは、163と164で弥生時代前期の青木畑式相当である。
＜時期＞埋められていた土器から、弥生時代前期である。

＜その他＞接合作業の結果、２個体の土器の存在が明らかとなった。何れも完形個体にはならないが、状況から土坑状の穴を掘り、土器片を埋置した類の遺構である。

8　土　取　り　穴

調査区西部において、粘土層を狙い、ランダムに掘り広げられた粘土採掘坑と考えられる土坑を、土取り穴と呼ぶこととした。土取り穴は７箇所あり、また当初単独の土坑として遺構登録したものが16基ある。大きく捉えれば、２地点に土取り穴が広がる。土取り穴の認定基準としては、底面の激しい凹凸具合と、規格性の弱い平面形や壁形の様相から、該期の土坑（貯蔵穴？）とは違う性格・目的と判断したものである。

土取り穴の壁を構成する地山層を細分すると、壁上部から壁下部にかけて３つの様相に大別される。上部からⅦ層－１（地山１）→Ⅶ層－２（地山２）→Ⅶ層－３（地山３）と命名した。以下のような内容である。

Ⅶ層－１は、地山粘土層の中では最上位に堆積する土層で、土取り穴の検出面から０～20cmの層厚でみられる。土質は、黄褐色粘土質シルト（粘土とシルトの中間的な土質）で、粘性はやや弱い。観察所見としては、良好な粘土層とは思われない。

Ⅶ層－２は、Ⅶ層－１とⅦ層－３の中間にみられる粘土層で、Ⅶ層－１の下位において10～30cmの層厚でみられる。土質は、明黄褐～黄褐色粘土で、粘性は強く、硬く締まる。観察所見としては、Ⅶ層－１とした粘土層よりやや黄色味が強い良好な粘土層である。このⅦ層－２とした土層が、最も‘粘土らしい粘土’であり、採掘の対象となった粘土層ではないかと考えられる。

Ⅶ層－３は、Ⅶ層－２の下位にみられる礫を多く含む粘土層である。土取り穴の検出面から概ね50～60cm下位でみられる。本層をさらに掘り下げると、砂礫層が表れ、巨礫が認められる地点もあり、本層と砂礫層とは区分できない部分もある。土取り穴の底面は、このⅦ層－３や砂礫層であることが多く、本層は採取の対象外の土層と判断される。

上記した中では、Ⅶ層－２とした地山層部分に良好な粘土層が形成されている。土取り穴の掘削深度などから、このⅦ層－２の粘土層が主たる対象と現場時は想定された。これらの土層は、一部サンプリングを行い、胎土分析を実施している。

ＲＸ001土取り穴（第62図、写真図版50）

＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｘ３ｆグリッドに位置する。第62図の平面図には、重複関係にある土坑についても、併せて図化している。Ⅶ層中で検出した。現況は、水田造成に伴う現代盛土層（基本層序Ⅰ層に含めた）が層厚70～150cmでみられる（斜面上方である南側は整地層がやや薄く、斜面下方になる北側ほど厚い）。それを除去した段階で、Ⅶ層黄褐色粘土質シルト層が直に表れ、同層中で黒褐色シルトの不整形の広がりを確認したことにより認知した。Ⅲ～Ⅵ層及びⅦ層－１上部は水田造成時に削平されている。

補足として、本遺構及びその周辺は、検出当初竪穴住居跡や土坑など複数遺構が重複するプランと想定された。従って、プランに複数の土層観察ベルトを設定した上で、プラン中心部分を３号住と命名して精査を進めた経緯がある。精査途中から１号土取り穴及び個々の土坑に改名した。従って、現場時の調査記録である写真の撮影カードや遺構図面は、３号住として登録・記載していたが、調査途中で全て訂正したことを付記しておく。

＜重複関係・建替え＞ＲＡ011、ＲＤ138～152が本遺構を切り所在する。その中で、ＲＤ139・142・144・148・149などは、単独の土坑として遺構名を付け登録したが、本来的には本遺構と合せ一連の土取り穴に関係する可能性もある。
＜平面形・規模・方向＞平面形は、南北方向にやや長い不整形である。所々、円形や方形の張り出気味に見受けられる部分もある。規模は、南北方向で９～10m、東西方向で７～８ｍに広がる。深さは最深部で約60cmである。
＜埋土＞黒褐色シルトを主体に黄褐色粘土がブロックで混入する。全体的に人為堆積であるが、埋土上位を中心にして各所に自然堆積された部分がみられる。
＜底面・壁＞底面は、概ねⅦ層－２～Ⅶ層－３中で、全体的には凹凸があり、またマウンド状に地山が掘り残されている部分も複数個所ある。壁は、上部がⅦ層－１、中～下位がⅦ層－２である。壁形は、直立・外傾・外反・内湾様々である。
＜遺物＞（第86・128・142図、写真図版72・111・123）土器7,015ｇ、石器16点（剥片石器２点、礫石器14点）、石製品３点が出土した。[土器] 縄文時代中期～晩期まで多岐に亘る。文様などから土器型式がある程度特定できるものとしては、大木７ｂ式、大木８ａ式、大木９式、大木10式、晩期大洞Ｂ式・大洞ＢＣ式などがある。その内、165～179までの15点を掲載した。[石器] スクレイパー２点、磨製石斧未製品１点、石錘３点、磨石３点、礫器７点が出土した。その内、773～779の７点を掲載した。[石製品] 有孔石製品１点、石刀１点が出土し、931の１点掲載した。
＜時期＞重複遺構の中で、ＲＡ011より古いことから、中期末葉より古い。しかしながら、重複関係にある土坑の多くは時期特定が難しいため、本遺構の時期特定は難しい。出土土器の主体時期は、縄文時代中期後葉～末葉であり、本遺構の廃絶時期についてもＲＡ011の構築時期と大差ない時期と考えられる。

ＲＸ002土取り穴（第63・64図、写真図版51・52）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｘ５ｍグリッドに位置する。Ⅵ～Ⅶ層で検出した。現況は農作業道で、それを除去した段階で、黒褐色シルトの不整形の広がりを確認したことにより認知した。
＜重複関係・建替え＞ＲＸ003と重複する。本遺構が新く図化したが、新旧関係を持つ異なる遺構ではなく、一連の土取り穴であると判断される。
＜平面形・規模・方向＞平面形は、全体的には南北方向にやや長い不整形である。所々、円形や方形の張り出気味に見受けられる部分もある。規模は、南北方向で約4.8m、東西方向で4.5mに広がる。深さは最深部で約60cmである。
＜埋土＞黒褐色シルトを主体に黄褐色粘土がブロックで混入する。全体的に自然堆積であるが、各所に人為による投棄ブロック層がみられる。
＜底面・壁＞底面は、概ねⅦ層－２～Ⅶ層－３中で、全体的には凹凸があり、またマウンド状に地山が掘り残されている部分もある。壁は、上部がⅦ層－１、中～下位がⅦ層－２である。壁形は、直立・外傾を呈する部分が主体的である。
＜遺物＞（第87・114・129図、写真図版72・98・112）土器5,745ｇ、石器13点（剥片石器７点、礫石器６点）が出土した。[土器] 縄文時代前期～晩期まで多岐に亘る。ある程度時期が特定できるものとしては、縄文時代前期前葉、前期後葉、中期初頭、中期後葉、中期末葉、晩期初頭などがある。主体は中期後葉～末葉大木９～10式である。その内、180～187までの８点を掲載した。[石器] 石鏃１点、スクレイパー６点、磨石３点、礫器３点が出土した。その内、629、780、781の３点を掲載した。

＜時期＞断定はできないが、縄文時代中期後半の廃絶期と考えられる。

ＲＸ003土取り穴（第63・64図、写真図版51・52）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｘ８１グリッドに位置する。Ⅵ～Ⅶ層で検出した。現況は農作業道で、それを除去した段階で、黒褐色シルトの不整形の広がりを確認したことにより認知した。
＜重複関係・建替え＞ＲＸ002・004・007と重複する。本遺構がそれらより古く図化したが、新旧関係を持つ異なる遺構ではなく、一連の土取り穴であると判断される。
＜平面形・規模・方向＞平面形は、東西方向に最大長を持つ長楕円形である。規模は、東西方向で約5.6m、南北方向で約2.5mを測る。深さは最深部で約40cmである。
＜埋土＞黒褐色シルトを主体に黄褐色粘土がブロックで混入する。全体的に自然堆積であるが、遺構東側を中心に各所に、人為による投棄ブロック層がみられる。
＜底面・壁＞底面は、深い部分はⅦ層－３中で、西側など若干高い部分はⅦ層－２中である。全体的には凹凸があり、またベッド状に地山が掘り残されている部分も東側中心にみられる。壁は、上部がⅦ層－１、中位がⅦ層－２、下位がⅦ層－３主体である。壁形は、直立・外傾を呈する部分が主体的である。
＜遺物＞（第87・114・129・142図、写真図版73・98・112・123）土器8,936ｇ、石器19点、石製品２点が出土した。[土器] 縄文時代前期～晩期まで多岐に亘る。ある程度時期が特定できるものとしては、縄文時代前期後葉、中期初頭、中期中葉、中期後葉、中期末葉、後期初頭、晩期前葉などがある。主体は中期後葉～末葉大木９～10式である。その内、188～194までの７点を掲載した。[石器] 石鏃１点、スクレイパー２点、Ｕフレ１点、コア１点、磨製石斧２点、石錘２点、磨石３点、敲石１点、礫器６点が出土した。その内、630、782～786の６点を掲載した。[石製品] 石刀２点が出土し、932の１点掲載した。
＜時期＞断定はできないが、縄文時代中期後半の廃絶期と考えられる。

ＲＸ004土取り穴（第65図、写真図版51・52）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｘ９ｎグリッドに位置する。Ⅵ～Ⅶ層で検出した。現況は農作業道で、それを除去した段階で、黒褐色シルトの不整形の広がりを確認したことにより認知した。
＜重複関係・建替え＞ＲＸ003・007と重複する。本遺構がそれらより新しく図化したが、新旧関係を持つ異なる遺構ではなく、一連の土取り穴であると判断される。
＜平面形・規模・方向＞平面形は、南北にやや細長い楕円形（林檎の形状に似る）である。規模は、南北方向で約2.8m、東西方向で約2.3mを測る。深さは最深部で約45cmである。
＜埋土＞黒褐色シルトを主体に黄褐色粘土がブロックで混入する。全体的に自然堆積であるが、各所に人為による投棄ブロック層がみられる。
＜底面・壁＞底面は、概ねⅦ層－２～Ⅶ層－３中で、全体的には凹凸があり、また比較的大きな窪み状の部分もある。壁は、Ⅶ層－２～Ⅶ層－３中である。壁形は、直立・外傾を呈する部分が主体的である。
＜遺物＞（第88・114・129・142図、写真図版73・98・112・123）土器3,800ｇ、石器10点、石製品２点が出土した。[土器] 縄文時代前期後葉～後期前葉まで多岐に亘る。ある程度時期が特定できるものとしては、縄文時代前期後葉、中期初頭、後期初頭、後期前葉などがある。主体は後期初頭～前葉である。その内、195～199までの５点を掲載した。[石器] 石匙１点、スクレイパー４点、石錘２点、

磨石１点、台石１点、礫器１点が出土した。その内、631、787～789の４点を掲載した。[石製品] 石刀２点が出土し、933の１点掲載した。
＜時期＞断定はできないが、縄文時代後期前半の廃絶期と考えられる。

ＲＸ005土取り穴（第65・66図、写真図版51・52）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｘ10ｎグリッドに位置する。Ⅵ～Ⅶ層で検出した。現況は農作業道で、それを除去した段階で、黒褐色シルトの不整形の広がりを確認したことにより認知した。
＜重複関係・建替え＞重複する遺構はない。ただし、ＲＸ002～004・006・007と一連の土取り穴であると判断される。
＜平面形・規模・方向＞平面形は、全体的には東西方向に長い不整形である。所々、円形や方形の張り出気味に見受けられる部分もある。規模は、東西方向で約5.1m、南北方向で4.0mを測る。深さは最深部で約40cmである。
＜埋土＞黒褐色シルトを主体に黄褐色粘土がブロックで混入する。全体的に自然堆積である。
＜底面・壁＞底面は、Ⅶ層－３中の部分が多く、東側の一部分がⅦ層－２中である。南から北に向かって傾斜する。また、全体的に凹凸が激しく、またマウンド状に地山が掘り残されている部分も複数個所ある。そして地山起源の礫（径10～60cm）が露出する部分も顕著にみられる。壁は、全体的にはⅦ層－３である。壁形は、直立・外傾・外反を呈する。
＜遺物＞(第88・129図、写真図版73・112)土器5,068ｇ、石器４点、石製品１点が出土した。[土器] 縄文時代前期前葉～後葉と後期初頭が出土している。主体は前期後葉である。200～204の５点を掲載した。[石器] 磨石３点、礫器１点が出土した。その内、790・791の２点を掲載した。[石製品] 石刀１点が出土している。不掲載とした。
＜時期＞断定はできないが、縄文時代中期後半～後期初頭の廃絶期と考えられる。

ＲＸ006土取り穴（第65図、写真図版51・52）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｘ９ｏグリッドに位置する。Ⅵ～Ⅶ層で検出した。現況は農作業道で、それを除去した段階で、黒褐色シルトの不整形の広がりを確認したことにより認知した。
＜重複関係・建替え＞重複する遺構はない。ただし、ＲＸ002～004・005・007と一連の土取り穴であると判断される。
＜平面形・規模・方向＞平面形は、半円形を呈する。調査区外東側は、急傾を呈した後約７ｍ低い水田に到ることから、本来の平面形も大差ない形状と判断される。規模は、南北方向で4.2m、東西方向で２ｍを測る。深さは最深部で約40cmである。
＜埋土＞黒褐色シルトを主体に黄褐色粘土がブロックで混入する。全体的に埋土下位は人為堆積であるが、埋土上位は自然堆積と判断される部分が多くみられる。
＜底面・壁＞底面は、概ねⅦ層－２～Ⅶ層－３中で、凹凸が激しく、また全体的には擂鉢状を呈する。壁は、Ⅶ層－２～Ⅶ層－３中で、壁形は直立・外傾を呈する。
＜遺物＞（第129図、写真図版112）土器1,051ｇ、石器１点が出土した。[土器] 縄文時代前期～後期まで出土している。全て摩滅した小片であることから、不掲載とした。[石器] 792の石錘１点が出土した。
＜時期＞断定はできないが、縄文時代中期後半の廃絶期と考えられる。

ＲＸ007土取り穴（第65・66図、写真図版51・52）
＜位置・検出状況＞調査区西部の５Ｘ９１グリッドに位置する。Ⅵ～Ⅶ層で検出した。現況は農作業道で、それを除去した段階で、黒褐色シルトの不整形の広がりを確認したことにより認知した。
＜重複関係・建替え＞ＲＸ003と重複する。ただし、新旧関係を持つ異なる遺構ではなく、一連の土取り穴であると判断される。
＜平面形・規模・方向＞平面形は、全体的には南西－北東北方向にやや長い不整形である。北側にカマドの煙道部状に細長く張り出す部分があり、また円形や方形の張り出気味に見受けられる部分もある。規模は、東西方向で3.8m、南北方向で3.7mを測る。深さは最深部で約35cmである。
＜埋土＞黒褐色シルトを主体に黄褐色粘土がブロックで混入する。全体的に自然堆積であるが、各所に人為堆積される部分がみられる。
＜底面・壁＞底面は、概ねⅦ層－２～Ⅶ層－３中で、全体的には凹凸があり、また窪み状に掘り下げられている部分も複数個所ある。壁は、上部がⅦ層－１、中～下位がⅦ層－２である。壁形は、直立・外傾を呈する。
＜遺物＞（第88図、写真図版74）土器3,202ｇ、石器２点が出土した。[土器] 縄文時代前期前葉～後葉が出土している。主体は前期前葉である。その内、205～207までの３点を掲載した。[石器] スクレイパー１点、礫器１点が出土した。２点とも不掲載とした。
＜時期＞出土土器は縄文時代前期後葉であるが、重複する土取り穴などの状況から、中期後半の廃絶期と考えられる。

9　柱穴状土坑

調査区西部柱穴群（第67図）
＜位置・検出状況＞調査区西部の中央付近に位置する。Ⅶ層中で、80個の柱穴状土坑を検出した。
＜重複関係・規模＞各柱穴状土坑の重複関係・規模については、表10に示した。
＜埋土＞黒褐色シルト・暗褐色シルトを主体とし、単層のものが多い。36号・53号・54号柱穴状土坑では、柱痕跡と判断されるアタリを確認した。
＜柱穴配置＞調査区西部で検出された柱穴状土坑については、配置に明確に規則性を見出せなかったが、本来はその多くが竪穴住居に伴う柱穴であったと考えられる。
＜出土遺物＞（第88図、写真図版74）16個の柱穴状土坑から縄文土器406.73ｇが出土し、そのうち２点を掲載した（208・209）。208は、12号柱穴状土坑から出土した晩期末葉のものと考えられる深鉢の口縁部破片である。209は、17号柱穴状土坑から出土した中期末葉のものと考えられる深鉢の口縁部破片である。また、不掲載としたが、13号柱穴状土坑から礫器が１点出土した。
＜時期＞詳細な時期は不明であるが、出土遺物や、周辺の遺構と埋土の様相が類似することから、縄文時代中期後半と考えられる。

調査区中央部柱穴群（第68図）
＜位置・検出状況＞調査区中央部に位置する。Ⅶ層中で、25個の柱穴状土坑を検出した。
＜重複関係・規模＞各柱穴状土坑の重複関係・規模については、第10表に示した。
＜埋土＞黒褐色シルトを主体とする単層である。
＜柱穴配置＞調査区中央部で検出された柱穴状土坑については、配置に規則性を見出すことができな

かった。
＜出土遺物＞すべて不掲載としたが、８個の柱穴状土坑から縄文土器が229.08ｇ、223号柱穴状土坑から石皿が１点出土した。
＜時期＞詳細な時期は不明であるが、出土遺物や埋土の様相から縄文時代後半と考えられる。

調査区東部柱穴群（第69～71図）

調査区東部で検出した柱穴状土坑には、81～200号・250～350号・401～519号柱穴状土坑を付したが、所々欠番があり、検出した柱穴状土坑は300個である。これらの柱穴状土坑から把握できた掘立柱建物跡は先に述べた４棟、使用した柱穴状土坑は114個である。したがって、ここで述べる調査区東部柱穴群とした柱穴状土坑は、184個である。
＜位置・検出状況＞調査区東部の北西～西側に位置する。表土除去後、Ⅳ層、及びⅦ層中で検出した。
＜重複関係・規模＞各柱穴状土坑の重複関係・規模については、第10表に示した。
＜埋土＞黒褐色シルトを主体とする単層のものが多い。14個の柱穴状土坑（87・91・94・150・157・181・186・188・199・270・315・441・450・455号柱穴状土坑）で柱痕跡と判断されるアタリを確認した。また、170号柱穴状土坑は人為堆積によるものと考えられる。
＜柱穴配置＞先に述べた４棟の掘立柱建物跡のほかに、配置に規則性を見出すことはできなかった。ただし、調査区中央付近に位置する304・314・316・269号柱穴状土坑は列状に並ぶことが看取される。269号・316号間は440cm（14.5尺）、316号・314号間は232cm（7.6尺）、314号・304号間は238cm（7.9尺）であることから、これらの柱穴状土坑は柱穴列を構成していた可能性が考えられる。
＜出土遺物＞（第88図、写真図版74）78個の柱穴状土坑から4616.81ｇの縄文土器、３個の柱穴状土坑から土製品３点（円盤状土製品２点、粘土塊１点）が出土した。また、20個の柱穴状土坑から20点の石器（石錐１点、磨石７点、敲石１点、石皿１点、礫器６点、軽石製４点）、４個の柱穴状土坑から４点の石製品（石棒２点、石刀１点、板状石製品１点）が出土した。
＜時期＞縄文土器、縄文時代の土製品、石器、石製品以外の遺物は出土しなかったが、掘立柱建物跡を構成する柱穴状土坑と、形状や埋土の様相が類似することから、中～近世と考えられる。

10　捨　て　場

一定の空間内に多量の遺物廃棄を確認した場をいわゆる捨て場として認知する。今回の調査では捨て場と認知した空間は１箇所で、調査区中央部捨て場と命名した。

調査区中央部捨て場（第72・73図、写真図版53）
＜位置・検出状況＞調査区中央部の４Ｗ６ｘグリッド付近に遺物包含層の広がりを認知した。現況地形の標高は180～183ｍで、南東から北西方向に向かって下る斜面地である。検出状況は、調査開始当初に設定・掘削した第25・26トレンチにおいて、Ⅳ層黒褐色シルトから多量の土器が出土したことから、これらⅣ層は遺物包含層と判断された。この遺物包含層の分布する空間は、比較的広範囲にみられることから、調査区中央部捨て場と呼称し、精査を進めた。
＜形状・規模＞上記のとおり現況地形は南東～北西に向かって傾斜する。詳述すると、斜面上方側（４Ｘ12ａグリッドなど）は急崖地状で、斜面下方側に向かって幾分傾斜角度が緩くなる。平面的な広がりは約304㎡である。

＜堆積土＞遺物包含層の厚さは15～150cmで、斜面下方側に相当する西側ほど厚く堆積する。上位に堆積する黒色～黒褐色土系の土層は、上から下に１～５層に分層・命名した。なお、５層の下位は黄褐色粘土の地山となる。全て南東方向から流入した自然堆積層である。遺物を主に包含するのは２層で、１層は中量、３層は少量、４層は微量である。５層からは遺物出土がない。遺物の出土状況を平面的に見ると、４Ｘ12ｄグリッド付近（同グリッドの２層）から最も多く出土している。下記に各層の状況を詳述する。

［１層］：１層は基本層序Ⅲ層相当の黒褐色シルト層である。層厚は８～30cmである。前期後葉～晩期前葉までの土器が出土している。主体は、前期後葉で、次いで中期後葉～末葉、後期初頭、晩期前葉である。遺物量は本層の下位に堆積する２層と比べて少ない。本層には、崖水性と考えられる角礫が多量に含まれる状況から推定して、土砂流出などの影響が激しかった土層と考えられる。従って、本層出土の前期後葉などの遺物は、本来的には下位の２層（Ⅳ層）に含まれていたものが混ざり、流れ込んだものと想定される。また、第25・26トレンチ掘削時は、下位のⅣ層と分層せず遺物を取り上げた。従って、Ⅲ～Ⅳ層と幅を持たせた層名で遺物観察表には記載してある。

［２層］：最も遺物量の多かった２層は、基本層序のⅣ層に相当する黒～黒褐色を呈するシルト層である。本層の上位に堆積する１層と比較して、やや黒色が強い色調である。また、角礫の含有率も１層と比較して、本層を含め下位の３～５層は極端に低い。このことから、土砂流出などの影響が比較的少ない土層と判断される。層厚は０～35cmで、平均的には20cm前後である。本層の細分はできなかったことから、遺物の取り上げはⅣ層として一括した。前期後葉が圧倒的な主体にあり、早期中葉や前期前葉が微量出土している。補足として、調査区南西部のⅣ層中位～下位においてはＴｏ－Ｃｕが顕著に確認されたが、本捨て場内のⅣ層からＴｏ－Ｃｕは認められなかった。従って、Ｔｏ－Ｃｕが流されるなど、テフラが溜まり難い地形・地質環境にあるとも捉えられるが、主体を占める前期後葉土器とＴｏ－Ｃｕが異時期（Ｔｏ－Ｃｕ降下期が古い）にあることを示す可能性もある。

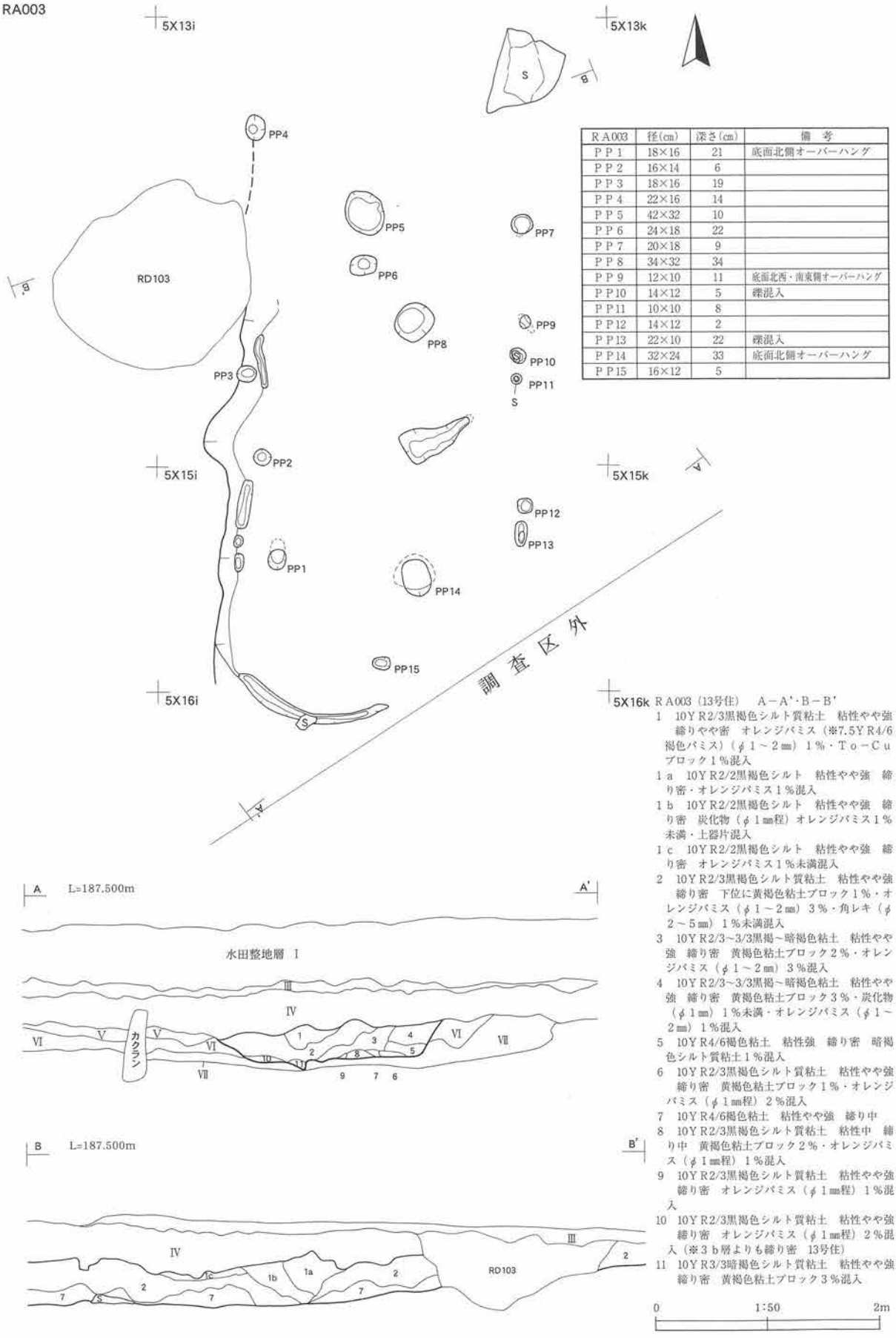
［３層］：３層は堀切テフラと考えられるオレンジパミスの混入する黒褐～暗褐色のシルト質粘土層である。上位の３層より黒味が弱い色調である（土色が明るい）。層厚は０～30cmで、平均的には20cm前後である。早期中葉の土器が少量出土した。基本層序Ⅴ層に相当しよう。

［４層］：４層は、３層と５層の漸移層で、Ⅵ層相当と考えられる暗褐色シルト質粘土層である。層厚は、５～25cmである。遺物は出土していない。

［５層］：５層は、褐色を呈する粘土層で、Ⅶ層（地山）相当である。遺物は出土していない。

＜出土遺物＞（第89～96・107・114・130・142・146図、写真図版74～80・91・98・113・123・）縄文土器104,554.18ｇ、土製品４点、石器24点、石製品２点が出土している。[土器] 縄文早期中葉～晩期前葉までが出土している。前期後葉が圧倒に主体を占める。214～269・1063を掲載した。主体を占める前期後葉は、単軸絡条体第１Ａ類と単軸絡条体第５類を施文するものが圧倒的に多い。また、頸部に横位貼り付け隆線が巡るものや口縁部に弁状突起を持つものが比較的散見できる。特記事項として、245は口縁部に環状突起（ドーナツ状）を持つ特徴から、大木５式の中では古い段階の可能性がある。また、249は唯一出土した円筒下層ｂ式土器である。また、大木６式は出土していない。このことから、本捨て場出土土器は、大木５式の中では古い段階を主体とする可能性があり、併せて円筒下層ｂ式が併行関係にある可能性が窺える。[土製品] 513・514の斧状土製品と、515・516の円盤状土製品を掲載した。[石器] 石鏃２点、石匙４点、スクレイパー11点、Ｕフレ１点、、磨石４点、敲石１点、礫器１点が出土している。その内、634～637と798を掲載した。[石製品] 936・937の石棒を掲載した。

＜時期＞出土している土器は縄文時代早期中葉～晩期前葉である。遺物の出土量などから縄文時代前期後葉において、捨て場として盛んに使用された空間と判断される。



RA003	径(cm)	深さ(cm)	備　考
PP1	18×16	21	底面北側オーバーハング
PP2	16×14	6	
PP3	18×16	19	
PP4	22×16	14	
PP5	42×32	10	
PP6	24×18	22	
PP7	20×18	9	
PP8	34×32	34	
PP9	12×10	11	底面北西・南東側オーバーハング
PP10	14×12	5	礫混入
PP11	10×10	8	
PP12	14×12	2	
PP13	22×10	22	礫混入
PP14	32×24	33	底面北側オーバーハング
PP15	16×12	5	

RA003（13号住）　A－A'・B－B'

1　10YR2/3黒褐色シルト質粘土　粘性やや強　締りやや密　オレンジパミス（※7.5YR4/6褐色パミス）（φ1～2㎜）1％・To－Cuブロック1％混入

1a　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り密・オレンジパミス1％混入

1b　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り密　炭化物（φ1㎜程）オレンジパミス1％未満・土器片混入

1c　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り密　オレンジパミス1％未満混入

2　10YR2/3黒褐色シルト質粘土　粘性やや強　締り密　下位に黄褐色粘土ブロック1％・オレンジパミス（φ1～2㎜）3％・角レキ（φ2～5㎜）1％未満混入

3　10YR2/3～3/3黒褐～暗褐色粘土　粘性やや強　締り密　黄褐色粘土ブロック2％・オレンジパミス（φ1～2㎜）3％混入

4　10YR2/3～3/3黒褐～暗褐色粘土　粘性やや強　締り密　黄褐色粘土ブロック3％・炭化物（φ1㎜）1％未満・オレンジパミス（φ1～2㎜）1％混入

5　10YR4/6褐色粘土　粘性強　締り密　暗褐色シルト質粘土1％混入

6　10YR2/3黒褐色シルト質粘土　粘性やや強　締り密　黄褐色粘土ブロック1％・オレンジパミス（φ1㎜程）2％混入

7　10YR4/6褐色粘土　粘性やや強　締り中

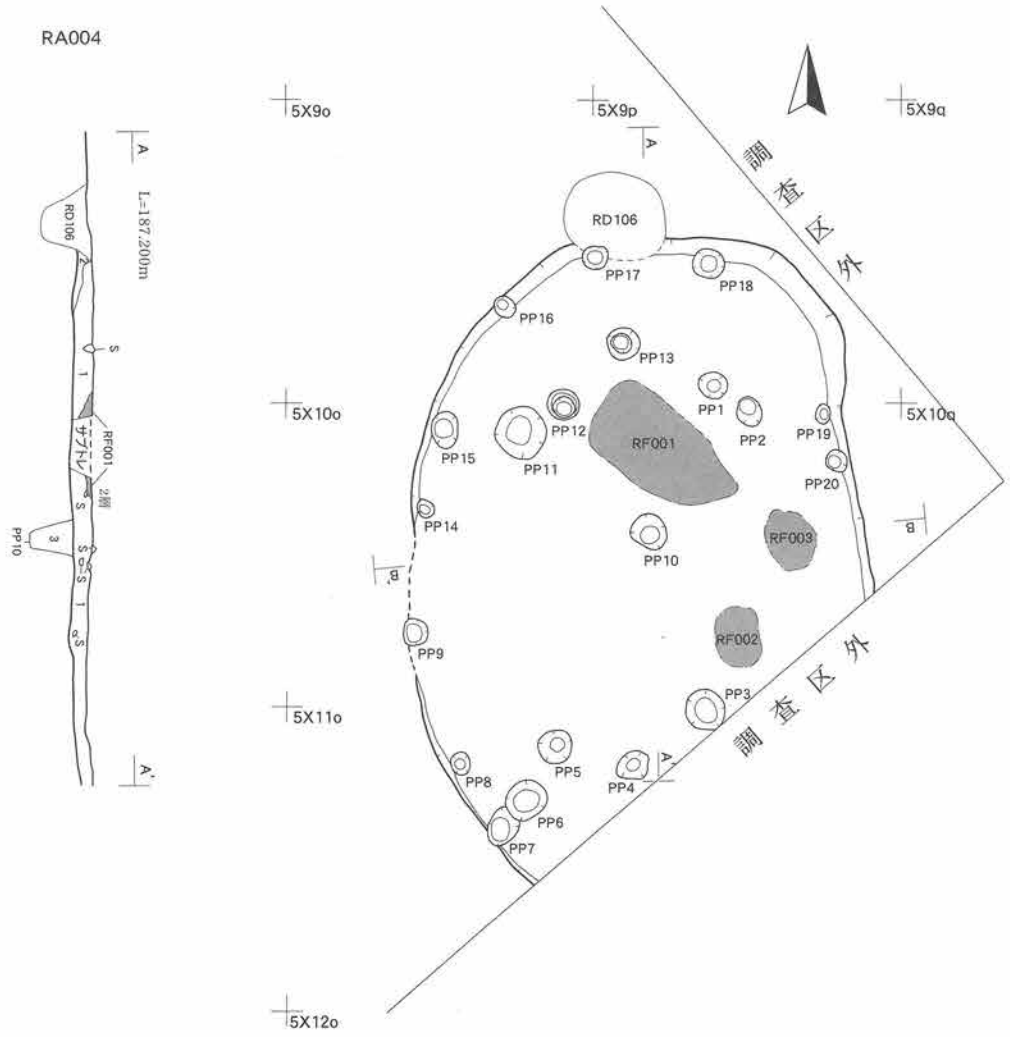
8　10YR2/3黒褐色シルト質粘土　粘性中　締り中　黄褐色粘土ブロック2％・オレンジパミス（φ1㎜程）1％混入

9　10YR2/3黒褐色シルト質粘土　粘性やや強　締り密　オレンジパミス（φ1㎜程）1％混入

10　10YR2/3黒褐色シルト質粘土　粘性やや強　締り密　オレンジパミス（φ1㎜程）2％混入（※3b層よりも締り密　13号住）

11　10YR3/3暗褐色シルト質粘土　粘性やや強　締り密　黄褐色粘土ブロック3％混入

第14図　RA003 竪穴住居跡

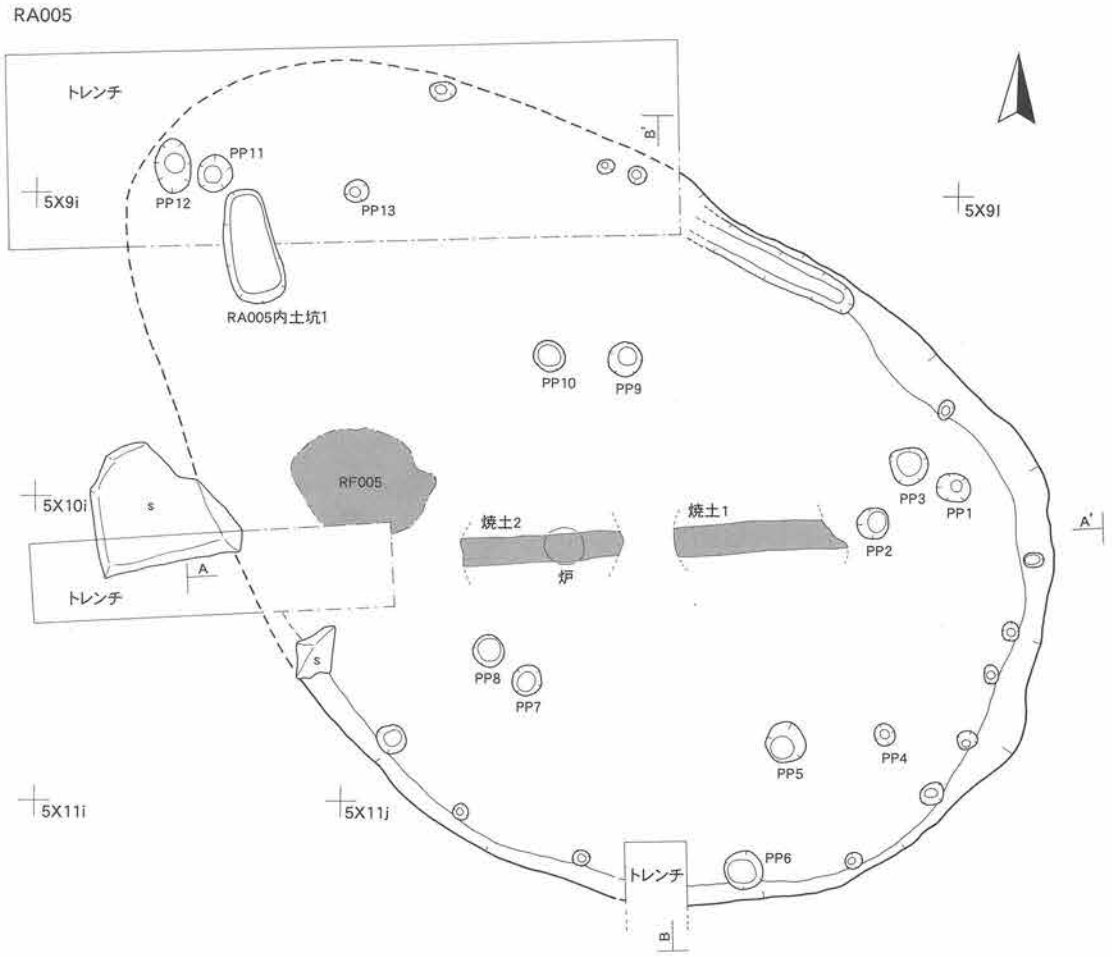


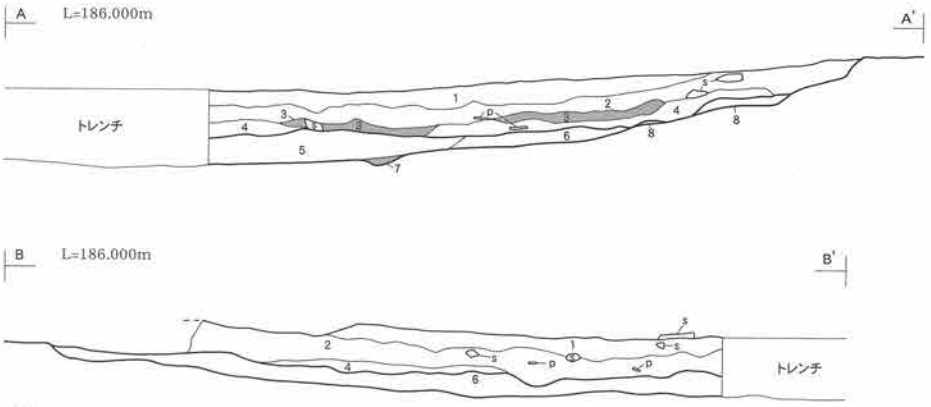
RA004（8号住）　A－A'・B－B'
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性中　締りやや密　黄褐色粘土ブロック3％・焼土（φ1㎜程）1％・炭化物（φ1㎜程）1％混入
2　10YR2/3黒褐色シルト　粘性中　締りやや密～密　黄褐色粘土ブロック5％混入
3　10YR2/2黒褐色シルト　粘性中　締りやや密　黄褐色粘土ブロック3％混入・炭化物（φ1㎜程）1％混入（※PP10　1層）

RA004	径(cm)	深さ(cm)	備　考
PP1	20×18	28	
PP2	20×16	96	
PP3	30×24	20	
PP4	22×18	29	
PP5	22×22	37	
PP6	28×24	36	PP7を切る
PP7	■×20	12	PP6に切られる
PP8	14×12	14	
PP9	20×18	17	
PP10	24×20	25	
PP11	34×34	31	
PP12	20×20	35	
PP13	20×20	12	
PP14	14×12	9	
PP15	24×18	9	
PP16	14×14	7	
PP17	16×16	7	
PP18	20×18	7	
PP19	12×10	7	
PP20	14×14	5	

0　1:50　2m

第15図　ＲＡ004 竪穴住居跡



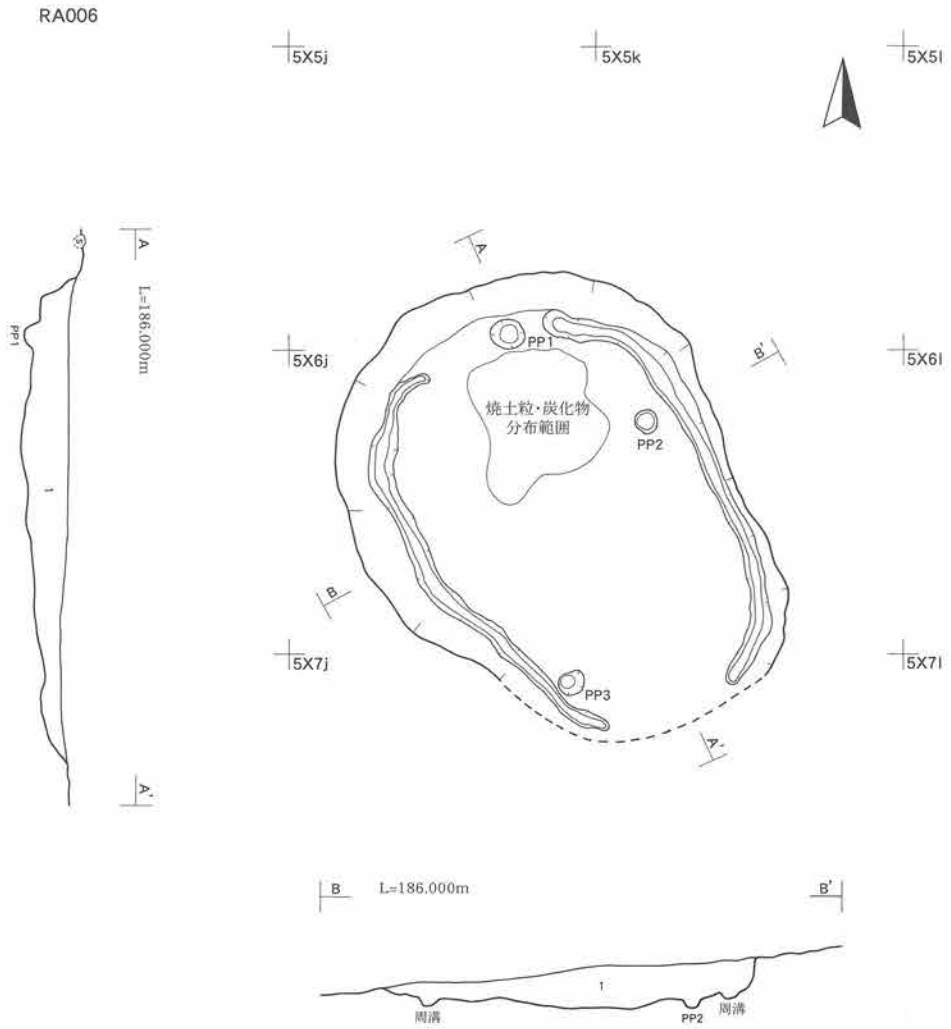


RA005（9号住）　A－A'・B－B'
1　10YR2/1黒色シルト　粘性やや弱　締りやや強　オレンジパミス（φ1㎜程）1％混入
2　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　焼土1％・炭化物2％・オレンジパミス（φ1㎜程）1％混入
3　5YR4/6赤褐色焼土　粘性中　締り密
4　10YR2/2黒褐色シルト　粘性中　締りやや密　黄褐色粘土ブロック3％・焼土1％・炭化物1％・オレンジパミス（φ1㎜程）1％混入
5　10YR2/3黒褐色シルト　粘性中　締りやや密　オレンジパミス（φ1～2㎜）2％混入
6　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　オレンジパミス（φ1～2㎜）2％混入
7　10YR2/3～3/3黒褐～暗褐色シルト　粘性強　締りやや密　焼土（φ1㎜粒）・炭化物（φ1～2㎝）1％未満混入（※炉埋土）
8　10YR4/6褐色粘土　粘性やや強　締りやや密（地山※掘り過ぎ）

RA005	径(cm)	深さ(cm)	備　考
PP1	22×16	30	
PP2	22×20	24	
PP3	24×24	10	
PP4	16×14	33	
PP5	26×26	43	
PP6	24×24	27	
PP7	20×18	24	
PP8	22×20	20	
PP9	22×20	34	
PP10	22×20	45	
PP11	26×22	24	
PP12	36×22	28	
PP13	14×14	6	

0　1:50　2m

第16図　RA005 竪穴住居跡

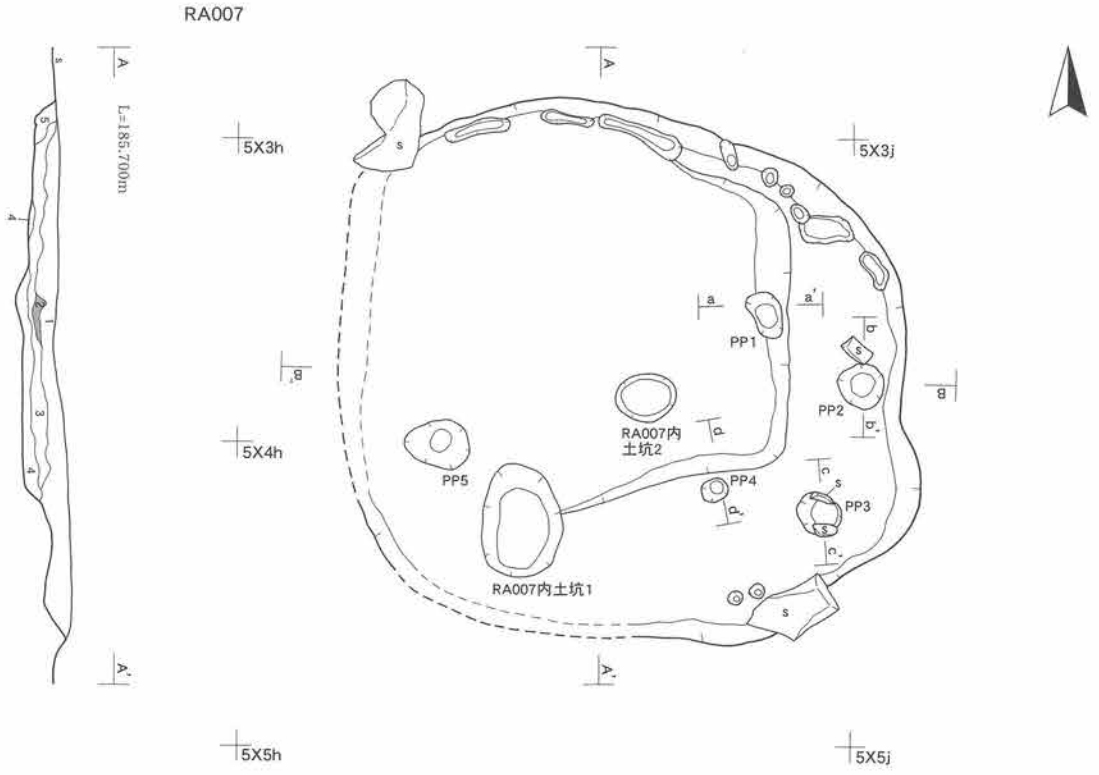


RA006（12号住）　A－A'・B－B'
1　10YR2/1～2/2黒色～黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック1％・角礫（φ2cm～5cm程）2％・炭化物3％混入

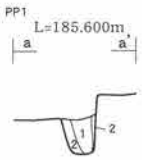
RA006	径(cm)	深さ(cm)	備　考
PP1	22×20	7	
PP2	16×14	7	
PP3	18×14	18	

0　1:50　2m

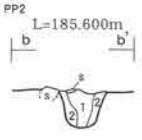
第17図　RA006 竪穴住居跡



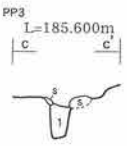
RA007（7号住）　A－A'・B－B'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性中～やや弱　締りやや弱
2　5YR3/6暗赤褐色焼土　粘性やや弱　締り強
2a　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　焼土ブロック1%混入
3　10yr2/1～2/2黒～黒褐色シルト　粘性中　締りやや疎　黄褐色粘土ブロック3%・黄褐色粘土ブロック3%・炭化物1%混入
4　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック7%混入
5　10YR2/2黒褐色シルト　粘性中　締りやや密　黄褐色粘土ブロック10%混入



RA007（7号住）　pp1　a－a'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック3%混入
2　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密～密　黄褐色粘土ブロック5%混入

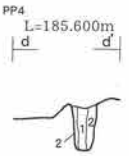


RA007（7号住）　pp2　b－b'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック2%混入
2　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック5%混入

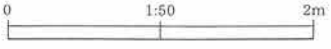


RA007（7号住）　pp3　c－c'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや疎　黄褐色粘土ブロック3%混入

RA007	径(cm)	深さ(cm)	備　考
PP1	32×22	22	
PP2	30×28	36	
PP3	30×26	25	礫混入
PP4	18×14	27	
PP5	42×30	32	

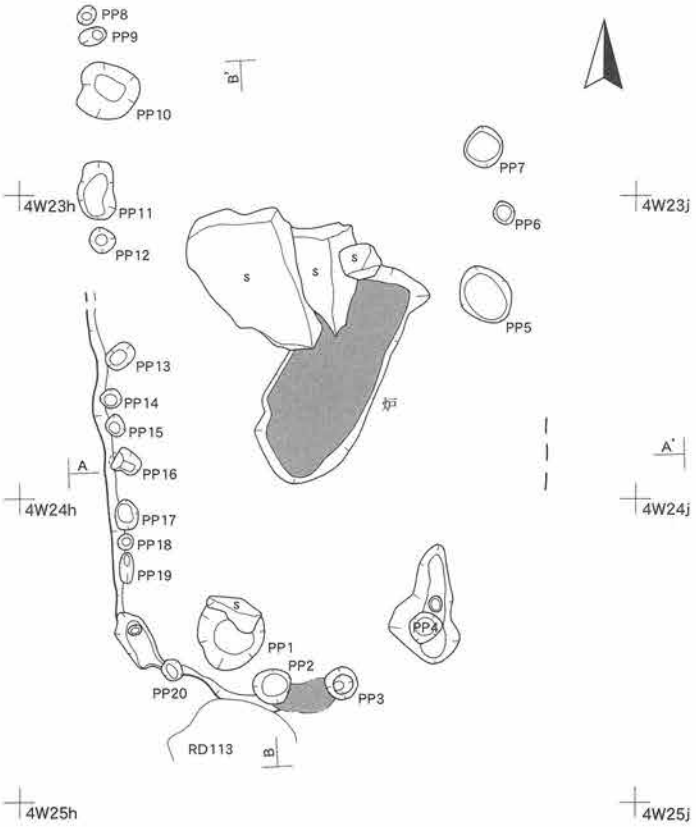


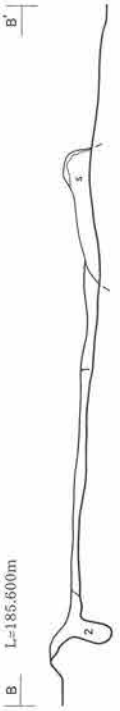
RA007（7号住）　pp4　d－d'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中　黄褐色粘土ブロック2%混入
2　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック5%混入



第18図　RA007 竪穴住居跡

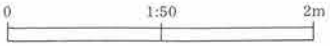
RA008



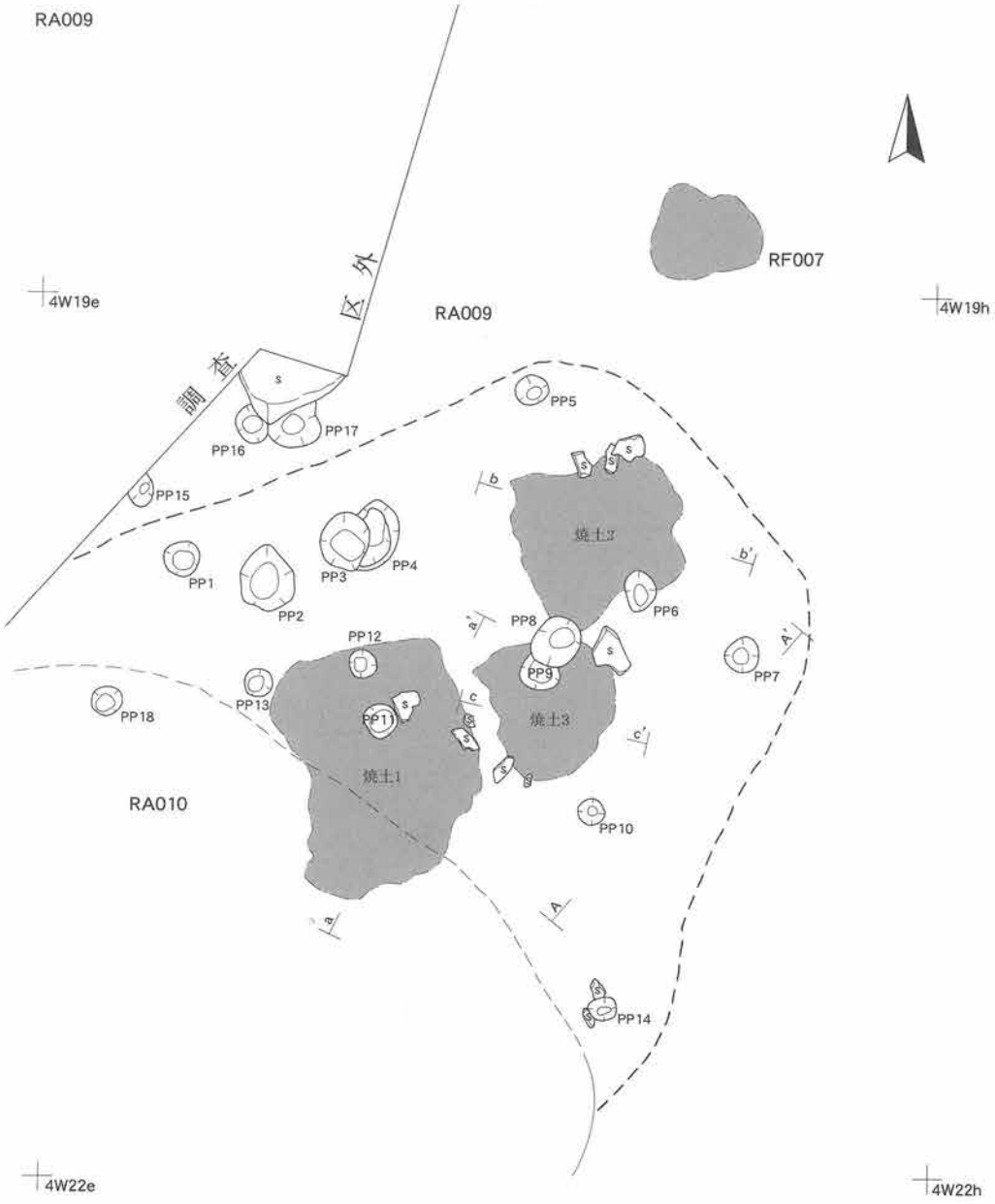


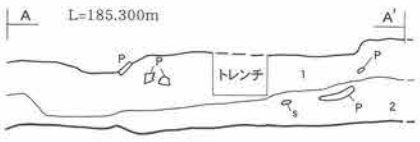
ＲＡ008（16号住）　Ａ－Ａ'・Ｂ－Ｂ'
1　10ＹＲ2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土３％・焼土２％混入
2　10ＹＲ3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土２％・焼土５％混入

ＲＡ008	径(cm)	深さ(cm)	備　考
ＰＰ１	44×44	38	
ＰＰ２	24×22	28	
ＰＰ３	20×20	16	
ＰＰ４	22×20	12	
ＰＰ５	40×32	12	
ＰＰ６	16×14	17	
ＰＰ７	16×14	18	
ＰＰ８	12×12	7	
ＰＰ９	18×10	7	
ＰＰ10	38×36	13	
ＰＰ11	38×24	17	
ＰＰ12	16×16	16	
ＰＰ13	20×14	6	
ＰＰ14	14×12	12	
ＰＰ15	14×12	17	
ＰＰ16	18×14	5	
ＰＰ17	20×16	5	
ＰＰ18	10×10	2	
ＰＰ19	20× 8	7	
ＰＰ20	14×12	20	



第19図　ＲＡ008 竪穴住居跡



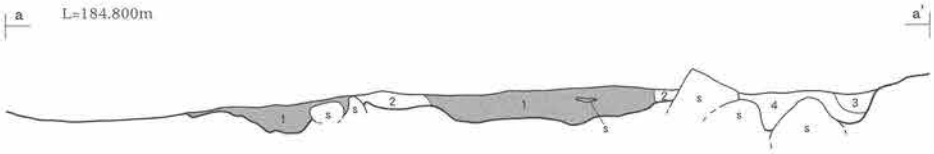


RA009（15号住）　A－A'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中　土器混入
2　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締り中

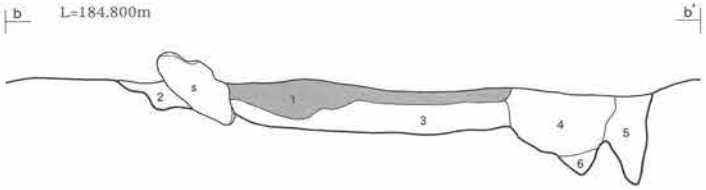
RA009	径(cm)	深さ(cm)	備　考
PP1	24×24	16	
PP2	44×36	20	
PP3	36×32	37	PP4を切る
PP4	48×32	20	PP3に切られる
PP5	22×20	16	
PP6	28×22	13	
PP7	24×22	17	
PP8	36×30	47	PP9を切る
PP9	28×■	10	PP8に切られる
PP10	18×18	10	
PP11	22×22	9	
PP12	20×18	13	
PP13	18×18	13	
PP14	18×16	17	
PP15	18×■	26	
PP16	26×20	20	PP17を切る
PP17	34×■	32	PP16に切られる
PP18	20×20	－	

0　1:50　2m

第20図　RA009 竪穴住居跡（1）

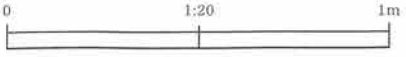


RA009（15号住）焼土1　a－a'
1　5YR4/8赤褐色焼土　粘性中　締りやや密（※現地性）
2　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや疎
3　10YR2/3黒褐色シルト　粘性中　締りやや密　黄褐色粘土ブロック20%混入
4　10YR2/2黒褐色シルト　粘性中　締り中

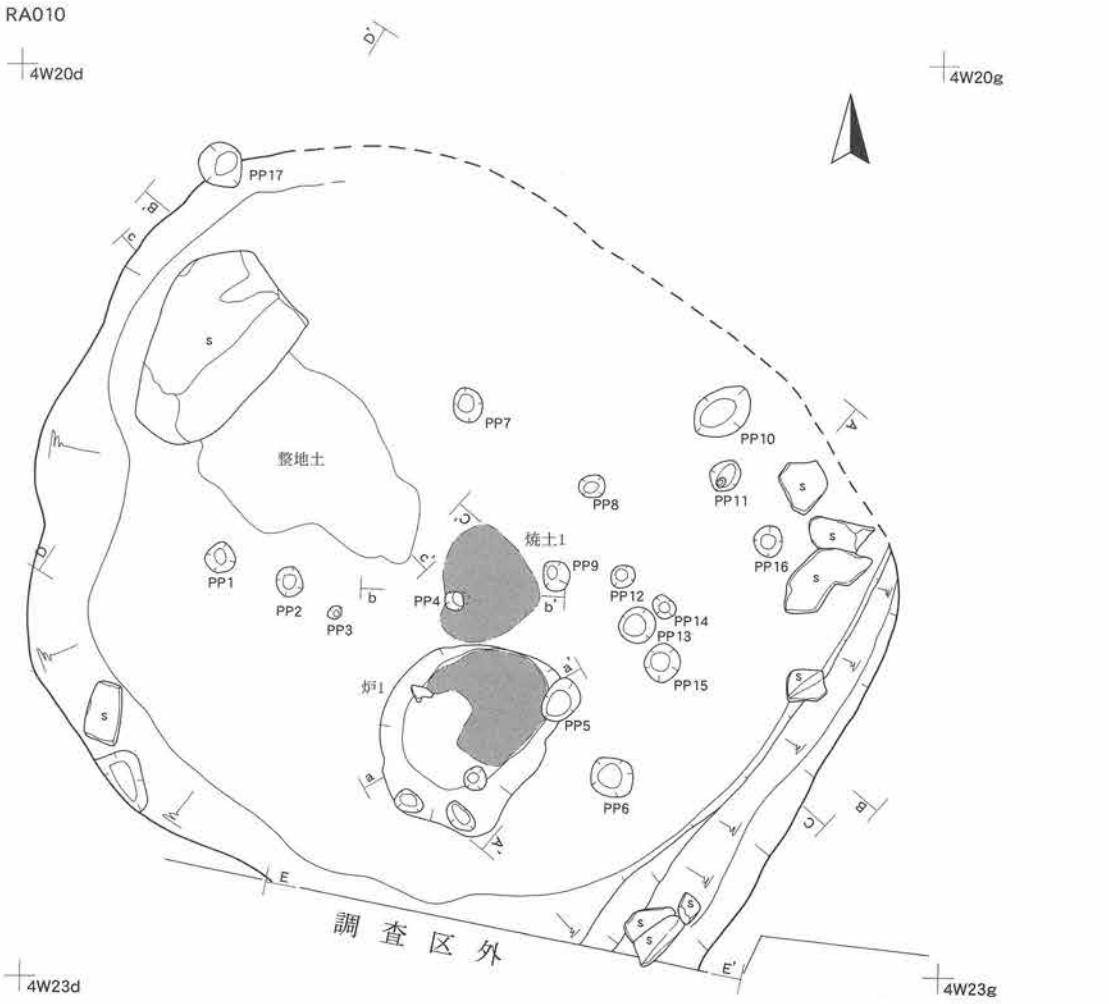


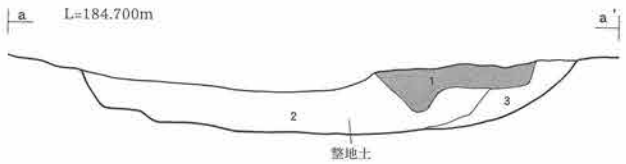
RA009（15号住）焼土2　b－b'
1　5YR4/8赤褐色焼土　粘性中　締り中（※現地性）
2　10YR2/3暗褐色シルト　粘性中　締り中
3　10YR4/4褐色粘土質シルト　粘性やや強　締りやや密
4　10YR2/1黒色シルト　粘性やや強　締りやや疎
5　10YR3/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中
6　10YR2/1黒色シルト　粘性やや強　締りやや疎

RA009（15号住）焼土3　c－c'
1　5YR4/6赤褐色焼土　粘性中　締りやや密（※現地性焼成良）

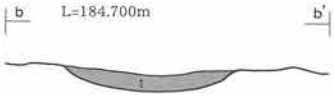


第21図　RA009 竪穴住居跡（2）

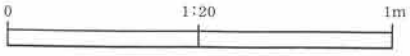




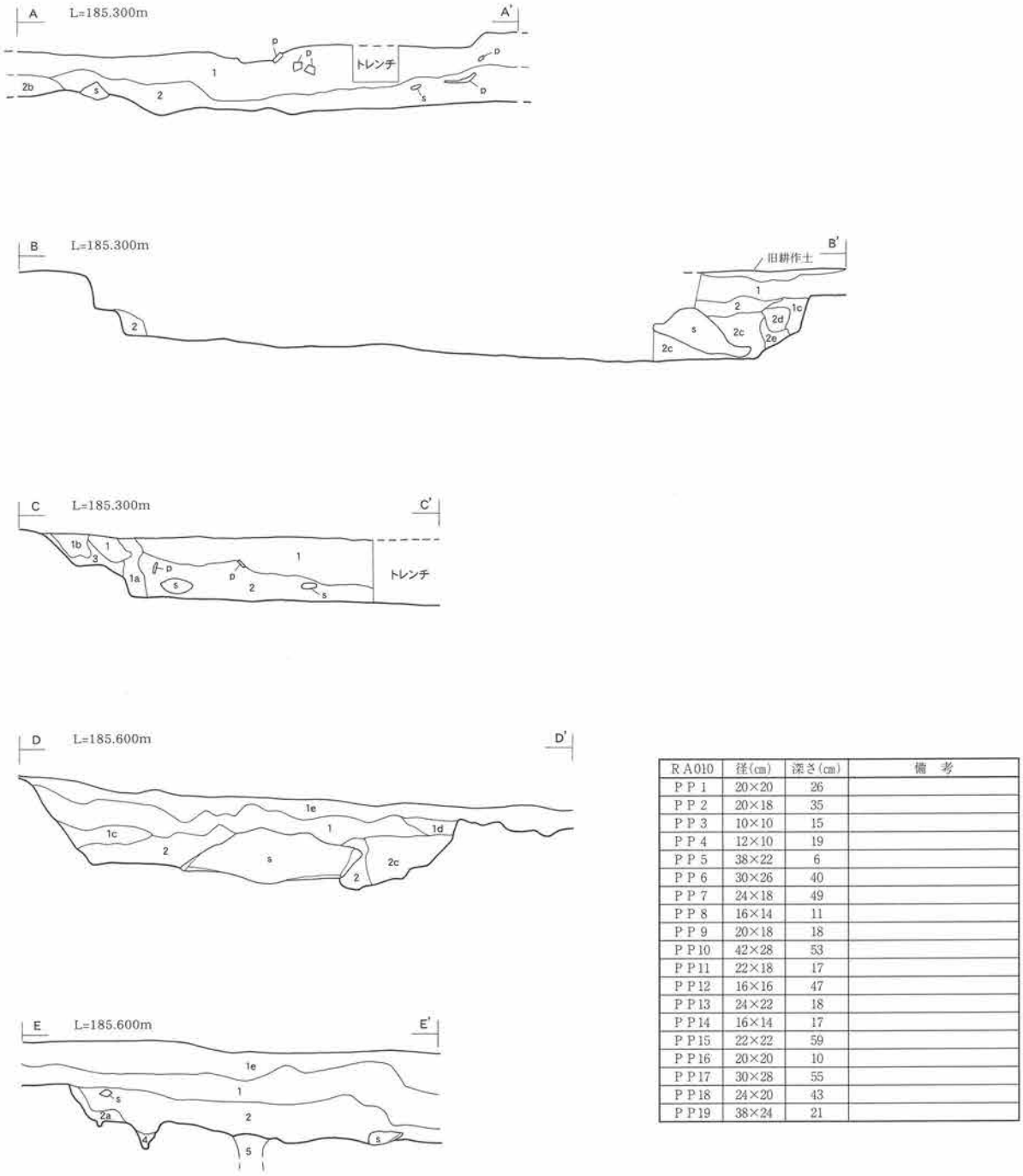
RA010（6号住）　炉1　a－a'
1　5YR4/8赤褐色焼土　粘性中　締り中（※現地性焼土）
2　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締り中　礫（φ3～10㎜）10%混入（※炉構築土）
3　10YR4/6褐色シルト　粘性中　締り中　砂礫土30%混入（※地山？）



RA010（6号住）焼土1　b－b'
1　5YR4/8赤褐色焼土　粘性中　締り中



第22図　RA010 竪穴住居跡（1）

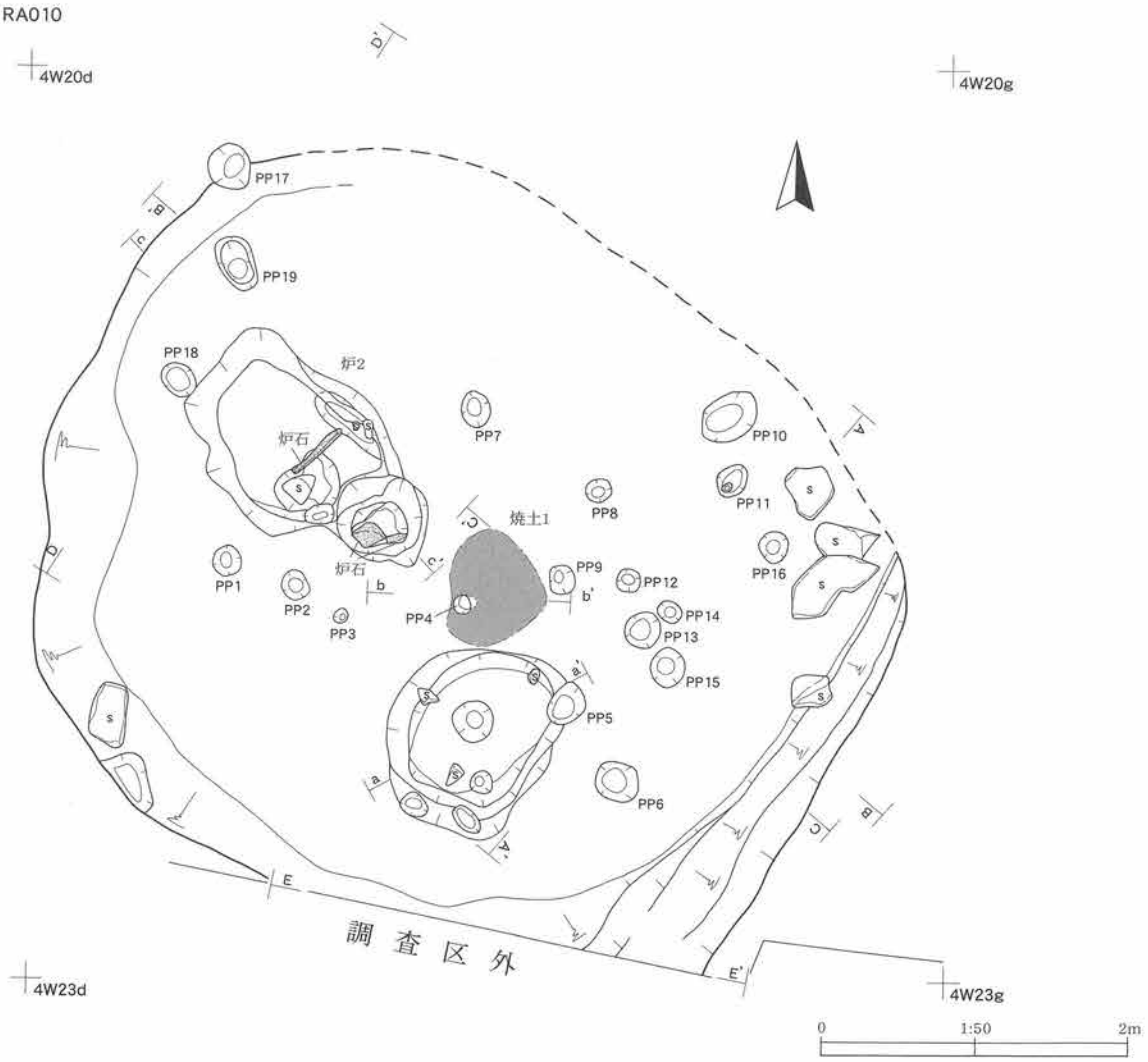


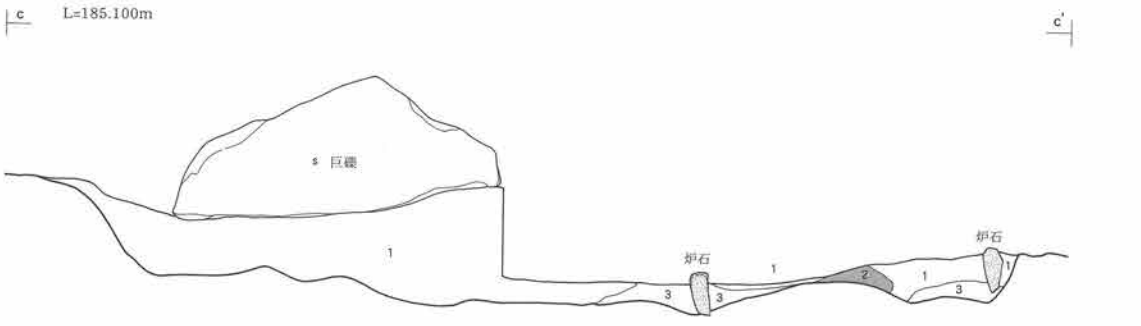
RA010	径(cm)	深さ(cm)	備　考
PP1	20×20	26	
PP2	20×18	35	
PP3	10×10	15	
PP4	12×10	19	
PP5	38×22	6	
PP6	30×26	40	
PP7	24×18	49	
PP8	16×14	11	
PP9	20×18	18	
PP10	42×28	53	
PP11	22×18	17	
PP12	16×16	47	
PP13	24×22	18	
PP14	16×14	17	
PP15	22×22	59	
PP16	20×20	10	
PP17	30×28	55	
PP18	24×20	43	
PP19	38×24	21	

RA010（6号住）　A－A'・B－B'・C－C'・D－D'・E－E'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中　土器混入（※大木9～10式主体）
1a　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや疎（※柱もしくは杭が土壌化した部分と推定される）
1b　10YR4/3にぶい黄褐色シルト　粘性中　締りやや疎　黒褐色シルト40%混入（※混土）
1c　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中
1d　10YR2/3黒褐色シルト　粘性中　締りやや密
1e　10YR2/2黒褐色シルト　粘性中　締りやや密
2　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや疎　黄褐色粘土ブロック・焼土ブロック・炭化材各所に散在（※多量に混入）
2a　10YR4/6褐色粘土質土　粘性やや強　締りやや密　黒褐色シルト10%混入（※壁の崩壊土）
2b　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締り中
2c　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや弱　締りやや疎　黄褐色粘土ブロック（φ3～10mm）3%混入
2d　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密
2e　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや疎　黄褐色粘土ブロック20%混入
3　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや強　締り中
4　10YR4/4褐色粘土質土　粘性やや強　締りやや密（※壁溝埋土）
5　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中（※柱穴埋土）

0　1:50　2m

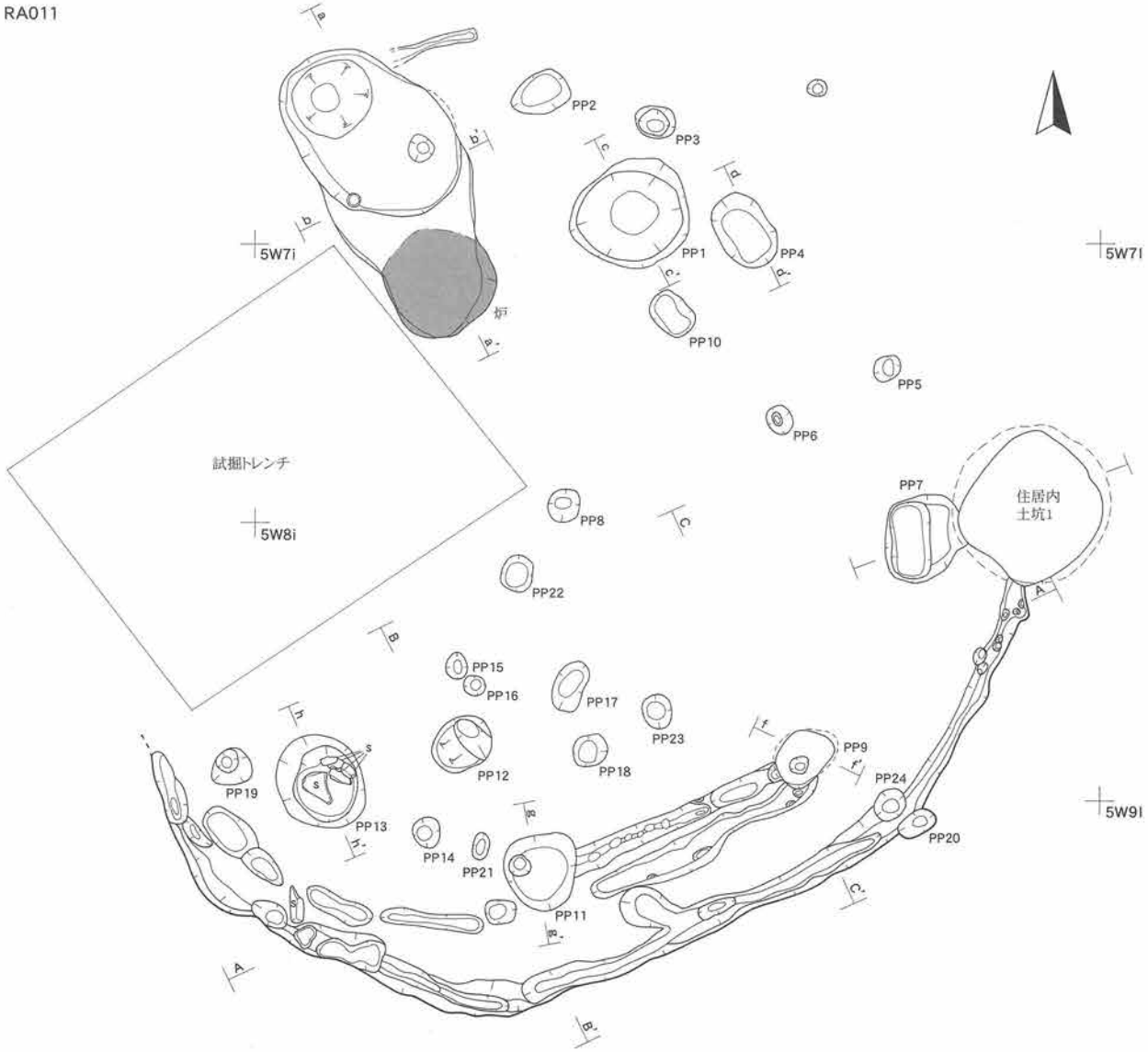
第23図　RA010 竪穴住居跡（2）

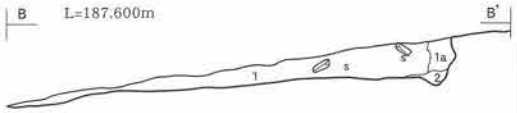


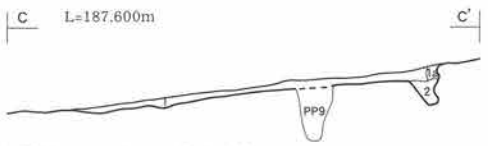


RA010（6号住）　炉2　c－c'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　炭化物（φ5㎜）5％混入
2　5YR4/8赤褐色焼土　粘性やや強　締り密（※地山が焼土化した土層）
3　10YR4/6褐色シルト　粘性中　締り中　砂礫土20％混入（※地山起源の土）

第24図　RA010 竪穴住居跡（3）







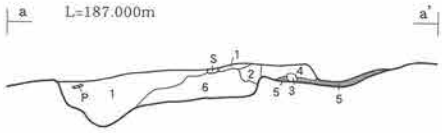
RA010	径(cm)	深さ(cm)	備　考
PP1	84×76	13	
PP2	40×28	22	
PP3	28×22	26	
PP4	56×36	38	
PP5	20×16	21	
PP6	22×18	34	
PP7	62×52	71	
PP8	24×24	11	
PP9	44×32	37	
PP10	34×24	18	
PP11	52×52	30	
PP12	44×38	11	

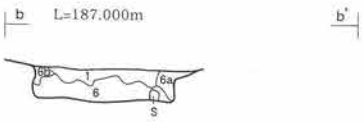
RA010	径(cm)	深さ(cm)	備　考
PP13	90×62	60	
PP14	22×20	26	
PP15	20×16	21	
PP16	16×14	5	
PP17	38×20	21	
PP18	26×22	5	
PP19	30×26	16	
PP20	30×18	39	
PP21	20×12	6	
PP22	26×22	8	
PP23	24×22	13	
PP24	24×22	37	

RA011（10号住）　A－A'・B－B'・C－C'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック２%・焼土１%・炭化物１%混入
1a　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック５%混入（※壁の崩壊土）
2　10YR3/2黒褐色シルト　粘性強　締りやや密～密　黄褐色粘土ブロック３%・焼土１%未満混入（※周溝の埋土）

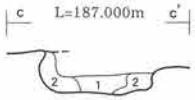
0　1:50　2m

第25図　ＲＡ011 竪穴住居跡（１）

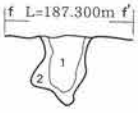




RA011（10号住）　炉　a－a'・b－b'
1　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや弱　締りやや密　黄褐色粘土ブロック1％・炭化物（φ1～2㎜）1％・焼土（φ1㎜）1％未満混入
2　10YR3/2暗褐色シルト　粘性やや弱　締りやや密　黄褐色粘土ブロック1％・炭化物（φ1～2㎜）1％・焼土（φ1㎜）1％未満混入（※1層と同じ可能性あり）
3　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締り密　黄褐色粘土ブロック5％・焼土（φ1～2㎜）2％混入
4　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや弱　締りやや密　黄褐色粘土ブロック7％・焼土2％混入
5　5YR4/6赤褐色焼土　粘性やや弱　締り密
6　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締り密　黄褐色粘土ブロック10％・炭化物（φ1～2㎜）1％未満混入（※人為堆積か）

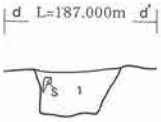


RA011（10号住）　pp1　c－c'
1　10YR3/4暗褐色シルト質粘土　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック20％混入（※アタリ）
2　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや疎

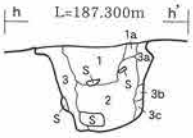


RA011（10号住）　pp9　f－f'
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック2％・焼土（φ1～2㎜）1％・炭化物（φ1～2㎜）混入
2　10YR5/8黄褐色粘土　粘性強　締り密　黒褐色シルト3％混入

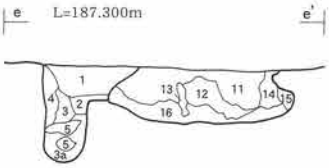
RA011（10号住）　pp11　g－g'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性強　締り中　黄褐色粘土ブロック2％・焼土（φ1㎜程）1％未満・炭化物（φ1～2㎜程）混入



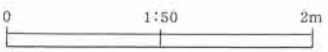
RA011（10号住）　pp4　d－d'
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや疎



RA011（10号住）　pp13　h－h'
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性中　締りやや密　黄褐色粘土ブロック2％・炭化物（φ1～2㎜）1％混入
1a　10YR2/3黒褐色シルト　粘性中　締りやや密　黄褐色粘土ブロック3％・炭化物（φ1～2㎜）1％混入
2　10YR3/3暗褐色シルト　粘性強　締り密　黄褐色粘土ブロック7％・焼土（φ1mm）1％・炭化物（φ1mm）1％混入（※人為堆積？）
3　10YR3/3暗褐色シルト　粘性強　締り密　黄褐色粘土ブロック5％・焼土（φ5mm）1％未満・炭化物（φ1mm）1％混入（※掘り方土？）
3a　10YR3/3暗褐色シルト　粘性強　締り密　黄褐色粘土ブロック5％・焼土（φ5mm）1％未満・炭化物（φ1mm）1％混入（※掘り方土？）
3b　10YR3/3暗褐色シルト　粘性強　締り密　黄褐色粘土ブロック7％・焼土（φ1mm）1％・炭化物（φ1mm）1％混入（※掘り方土？）
3c　10YR3/3暗褐色シルト　粘性強　締り密　黄褐色粘土ブロック7％・焼土（φ1mm）1％未満・炭化物（φ1mm）1％未満混入（※掘り方土？）

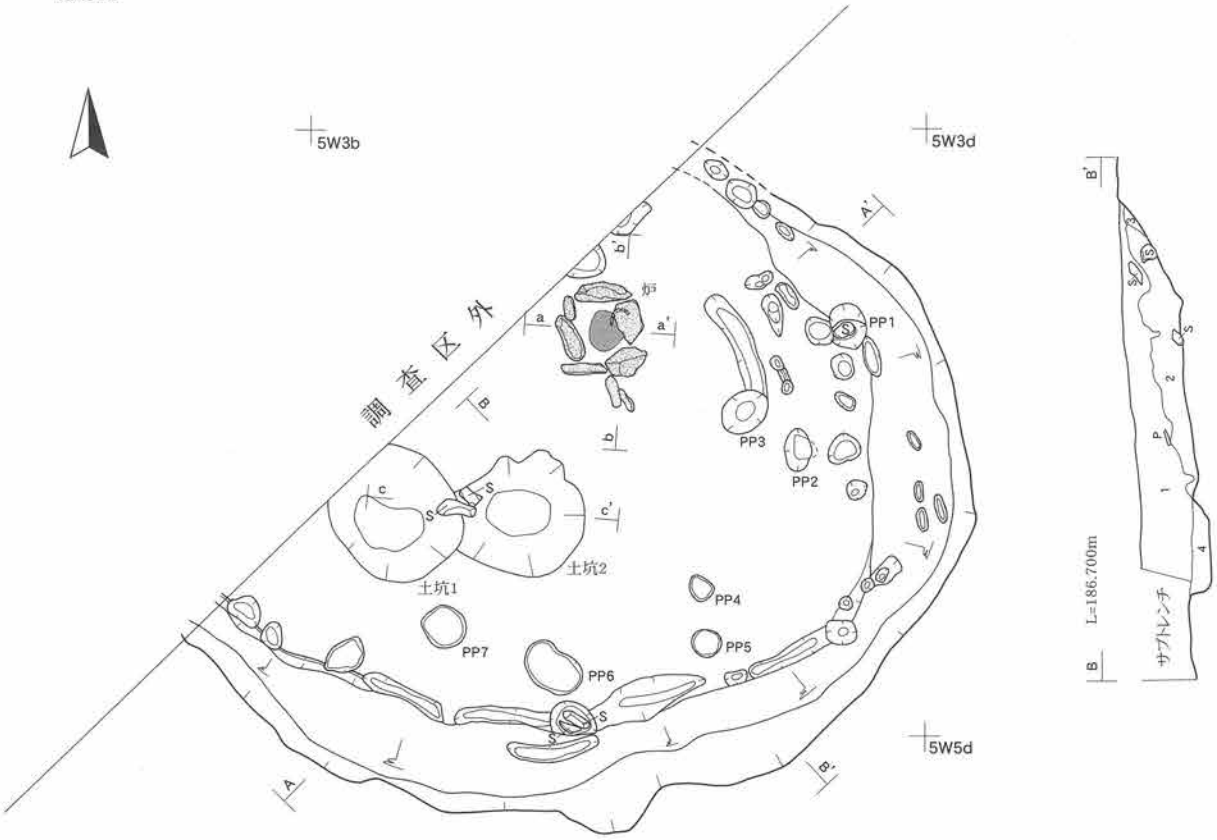


RA011（10号住）　pp7・土坑1　e－e'
1　10YR3/3暗褐色シルト　粘性中　締りやや密　黄褐色粘土ブロック1％・焼土（φ1㎜）1％未満・炭化物（φ1㎜）1％混入（※pp1）
2　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締り密　黄褐色粘土ブロック1％混入（※pp1）
3　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック2％・炭化物（φ1㎜）1％未満混入（※pp1）
3a　10YR3/3～10YR2/3暗褐～黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　明黄褐色（10YR5／8）粘土ブロック（φ10～20㎜）を含む・焼土（φ1～10㎜程）1％・炭化物（φ1㎜程）1％混入（※pp1）
4　10YR3/3暗褐色シルト　粘性強　締り中　黄褐色粘土ブロック5％混入（掘り方土？）（※pp1）
5　10YR5/8明黄褐色粘土　粘性やや強　締り密　（※pp1）
11　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締りやや密　黄褐色粘土ブロック2％・焼土（φ1～2㎜）1％・炭化物（φ1～2㎜）1％混入（※土坑1）
12　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック7％・焼土（φ2㎜）1％未満・炭化物（φ1㎜）1％混入（※土坑1）
13　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック1％・炭化物（φ1㎜）1％未満混入（※土坑1）
14　10YR3/3暗褐色シルト　粘性中　締りやや密　黄褐色粘土ブロック3％・炭化物（φ1㎜）1％混入（※壁の崩壊土）（※土坑1）
15　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック10％混入（※壁の崩壊土、土坑1）
16　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締り密　黄褐色粘土ブロック5％・炭化物（φ1㎜）1％混入（※自然堆積？、土坑1）



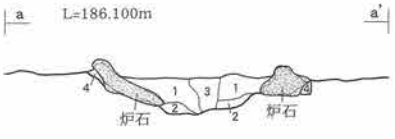
第26図　RA011 竪穴住居跡（2）

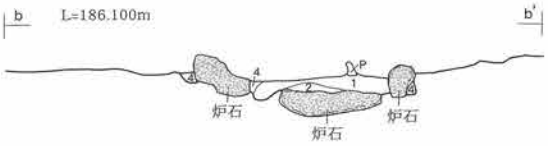
RA012



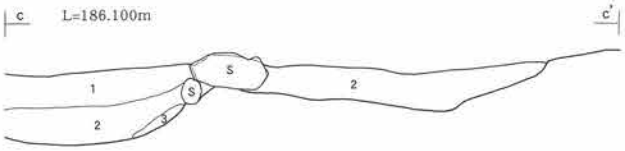
RA012（2号住）　A－A'・B－B'
1　10YR2/1黒色シルト　粘性やや強　締りやや疎　黄橙色粘土ブロック2％混入（※自然堆積層・遺物少量）
1a　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや疎
2　10YR2/3～3/3黒褐～暗褐色シルト　粘性やや強　締り中　（※自然堆積層・遺物は1層より多い）
3　10YR5/6黄褐色粘土　粘性やや強　締り中　（※地山の壁崩壊土）
4　10YR3/3暗褐色シルト　粘性強　締り密　黄褐色粘土ブロック7％・炭化物（φ1㎜）2％未満混入（※貼り床）

0　1:50　2m





RA012（2号住）炉　a－a'・b－b'
1　10YR3/4暗褐色シルト　粘性中　締りやや密
2　5YR4/8赤褐色焼土　粘性やや強　締りやや密
3　10YR7/8黄橙色粘土　粘性やや強　締り密
4　10YR2/3黒褐色シルト　粘性中　締りやや密

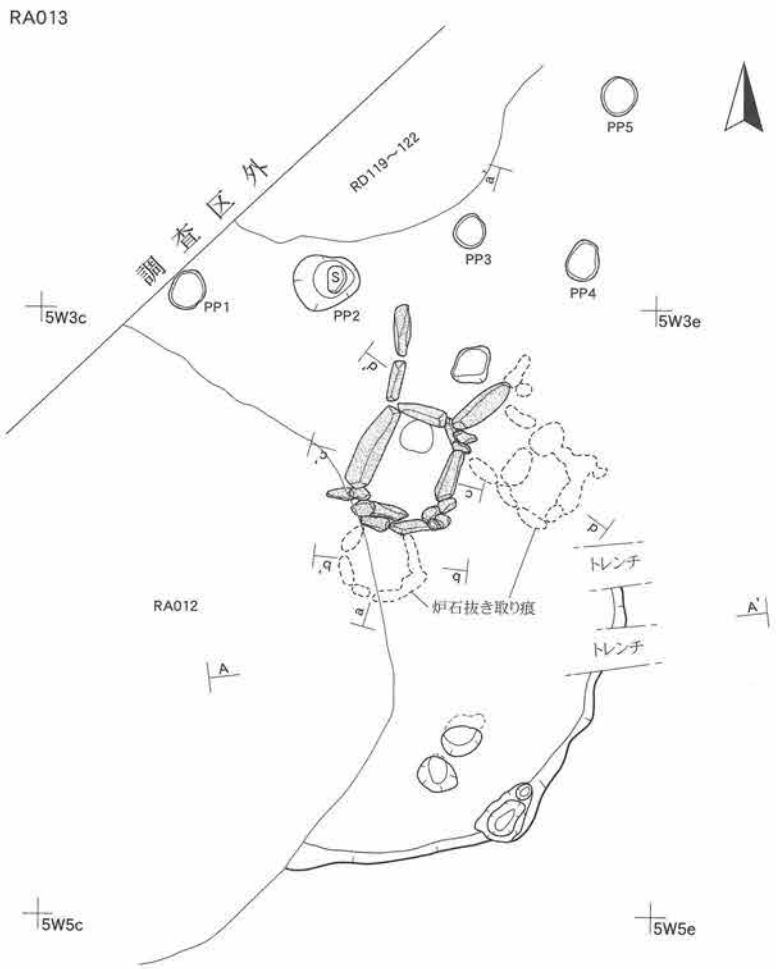


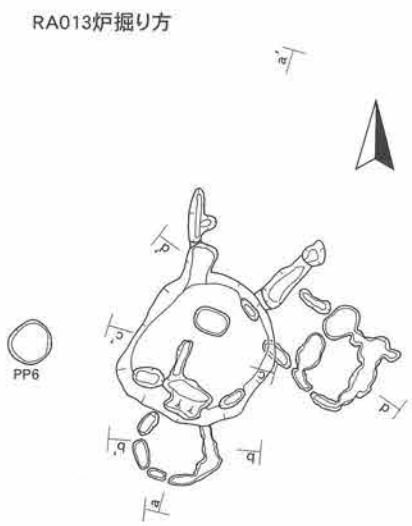
RA012土坑1・2（2号住土坑1・2）　c－c'
1　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締り中（※貼り床）
2　10YR4/4褐色シルト質粘土　粘性やや強　締りやや密　暗褐色シルト5％混入（※整地層）
3　10YR4/4褐色粘土　粘性やや強　締りやや密

RA012	径(cm)	深さ(cm)	備　考
PP1	30×22	－	
PP2	28×18	36	
PP3	34×26	－	
PP4	18×14	－	
PP5	18×18	－	
PP6	42×26	－	
PP7	28×26	－	

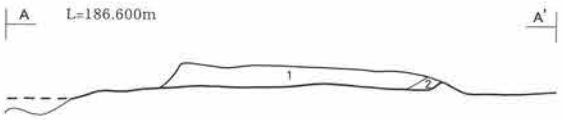
0　1:20　1m

第27図　RA012 竪穴住居跡

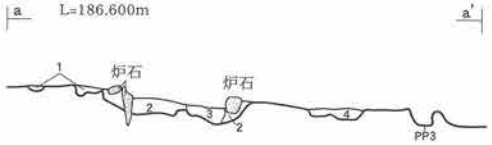


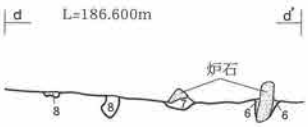


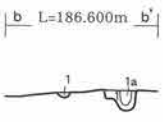
RA013	径(cm)	深さ(cm)	備　考
PP1	24×22	23	
PP2	42×36	13	
PP3	22×20	22	
PP4	26×20	9	
PP5	24×22	11	
PP6	30×28	27	

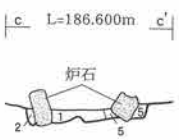


RA013（14号住）　A－A'
1　10YR4/4褐色シルト　粘性やや強　締り中
2　10YR3/8黄褐色粘土　粘性中　締り中　暗褐色シルト10%混入

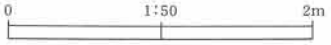








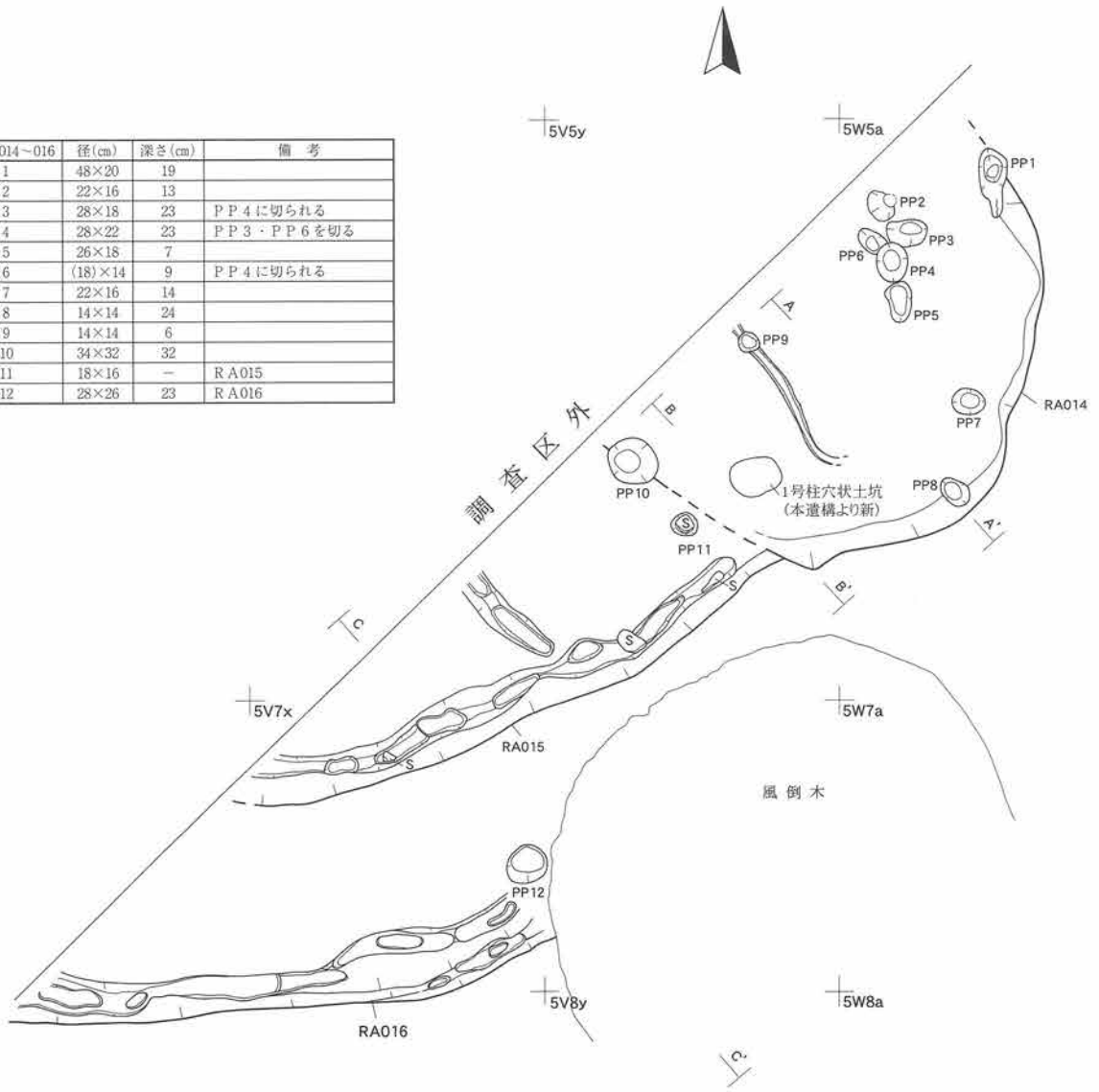
RA013（14号住）　炉　a－a'・b－b'・c－c'・d－d'
1　10YR4/4褐色粘土質シルト　粘性やや強　締りやや疎
1a　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや疎
2　10YR3/4暗褐色シルト質粘土　粘性やや強　締り中（※炉構築土）
3　10YR2/1黒色シルト　粘性やや強　締りやや疎
4　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや強　締り中　黄褐色粘土10%混入
5　10YR5/6黄褐色粘土　粘性中　締り中
6　10YR2/3暗褐色シルト　粘性中　締りやや疎
7　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや疎
8　10YR4/4褐色シルト質粘土　粘性やや強　締りやや疎

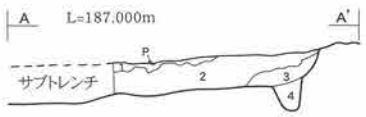


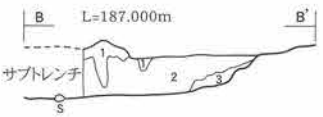
第28図　RA013 竪穴住居跡

RA014・015・016

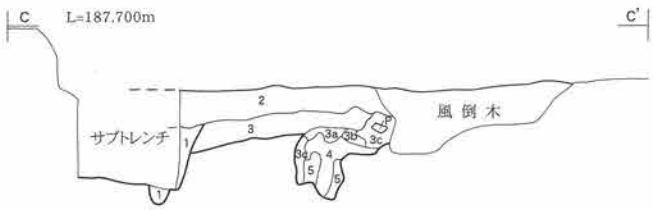
RA014～016	径(cm)	深さ(cm)	備　考
PP1	48×20	19	
PP2	22×16	13	
PP3	28×18	23	PP4に切られる
PP4	28×22	23	PP3・PP6を切る
PP5	26×18	7	
PP6	(18)×14	9	PP4に切られる
PP7	22×16	14	
PP8	14×14	24	
PP9	14×14	6	
PP10	34×32	32	
PP11	18×16	－	RA015
PP12	28×26	23	RA016







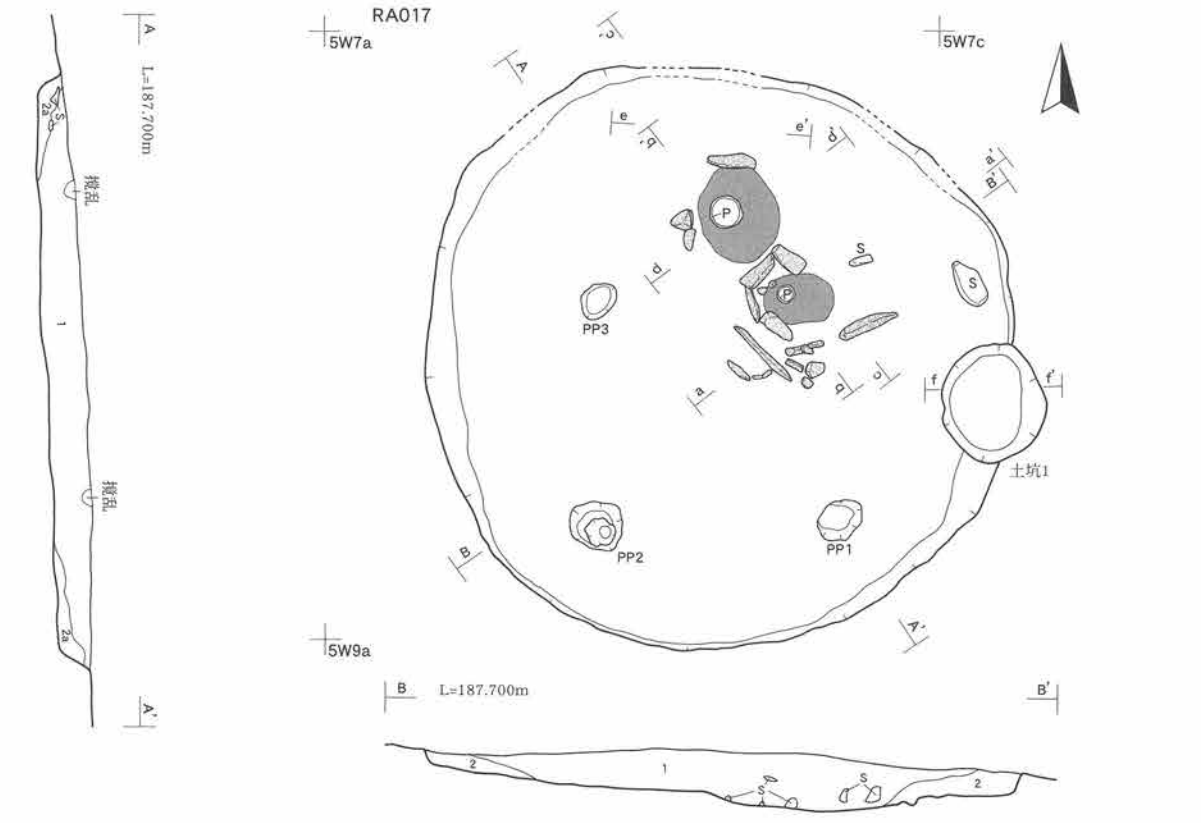
RA014（4号住）A－A'・B－B'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　φ1㎜の炭化物1％未満・オレンジ鉱物？（φ1㎜）1％未満混入
2　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　炭化物（φ1㎜～2㎜）1％・オレンジ鉱物？（φ1㎜～2㎜）1％・黄褐色粘土ブロック2％混入
3　10YR4/6褐色粘土　粘性強　締りやや密～密　暗褐色シルト5～9％混入(※地山起源の粘土ブロック層、壁際全般に見られることから、何らかの人為層と推定される。)
4　10YR4/6褐色粘土　粘性強　締りやや密　黒褐色シルト15%混入



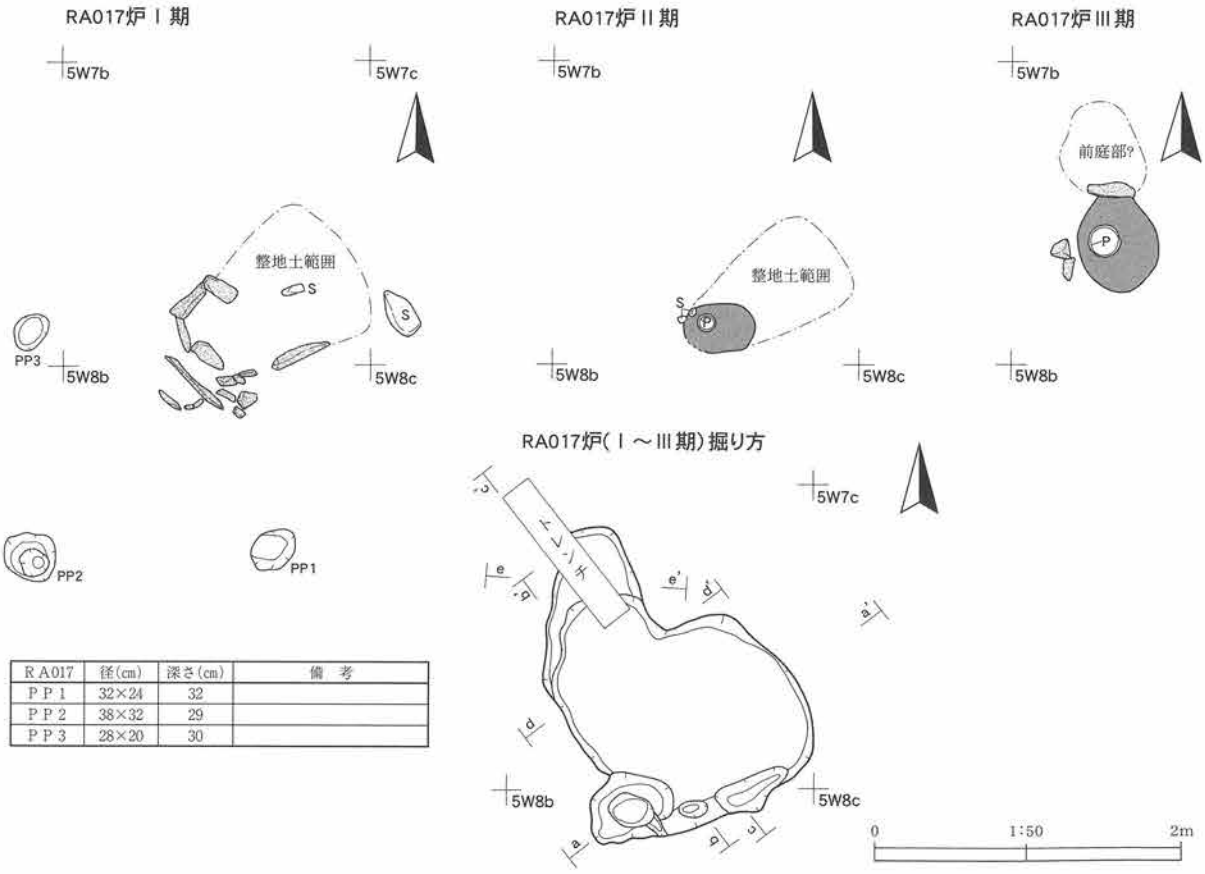
RA015（5号住）・RA016（11号住）　C－C'
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性中　締り中　(※RA015)
2　10YR1.7/1黒色シルト　粘性中　締りやや疎　(※風倒木)
3　10YR2/3黒褐色シルト　粘性中　締りやや疎　土器片少量混入　(※RA016)
3a　10YR2/3黒褐色シルト　粘性中　締りやや密　(※RA016)
3b　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中　(※RA016)
3c　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締り中　黄褐色粘土7％混入　(※RA016)
4　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや強　締り中　(※RA016)
5　10YR5/6黄褐色粘土　粘性中　締りやや密　(※RA016)

0　1:50　2m

第29図　RA014～016 竪穴住居跡

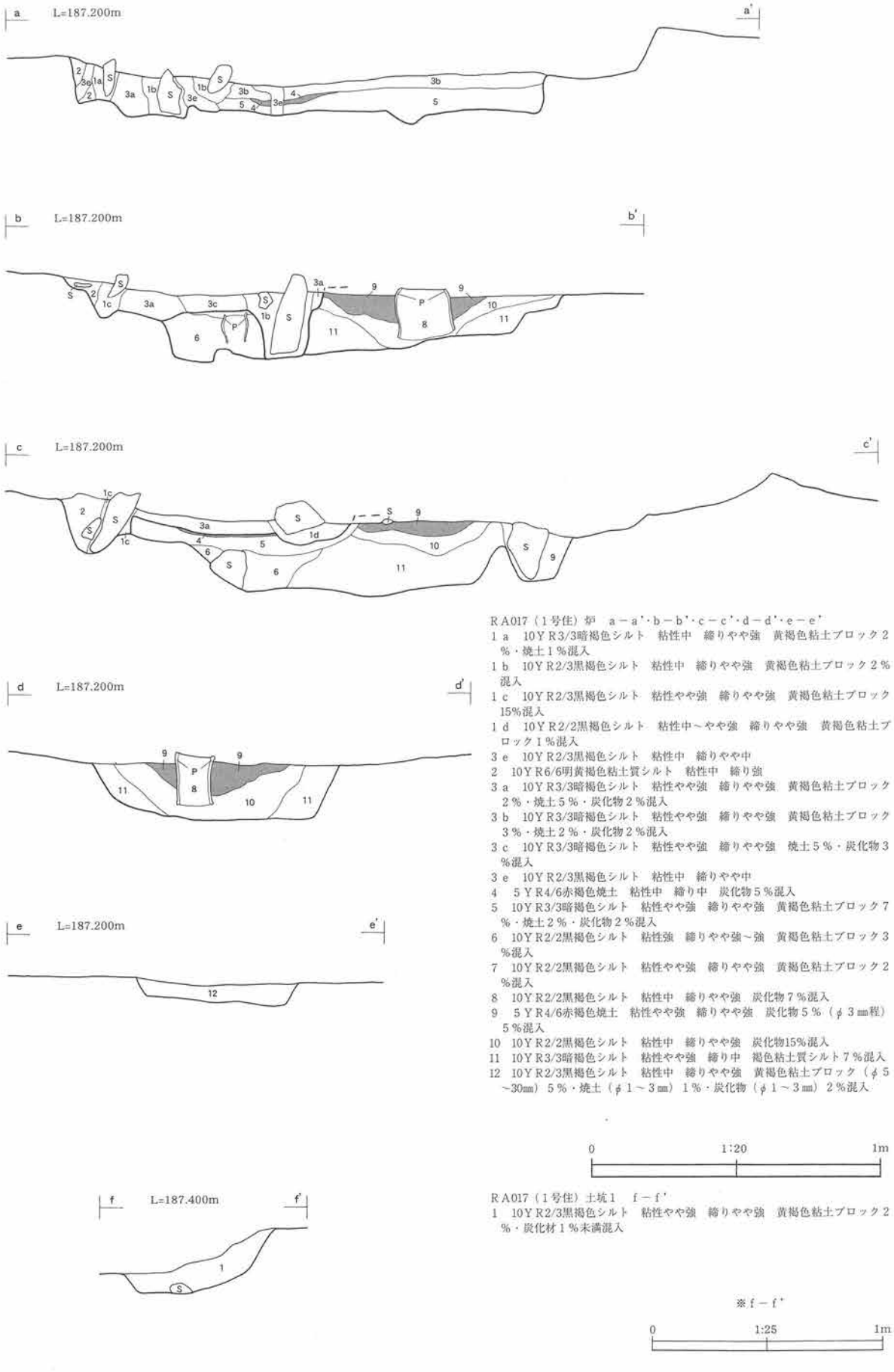


RA017（1号住）　A－A'・B－B'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　明黄褐色粘土ブロック3％混入
2　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　明黄褐色粘土ブロック3％・黒褐色シルト3％混入
2a　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　明黄褐色粘土ブロック7％・焼土粒1％混入



RA017	径(cm)	深さ(cm)	備　考
PP1	32×24	32	
PP2	38×32	29	
PP3	28×20	30	

第30図　RA017 竪穴住居跡（1）



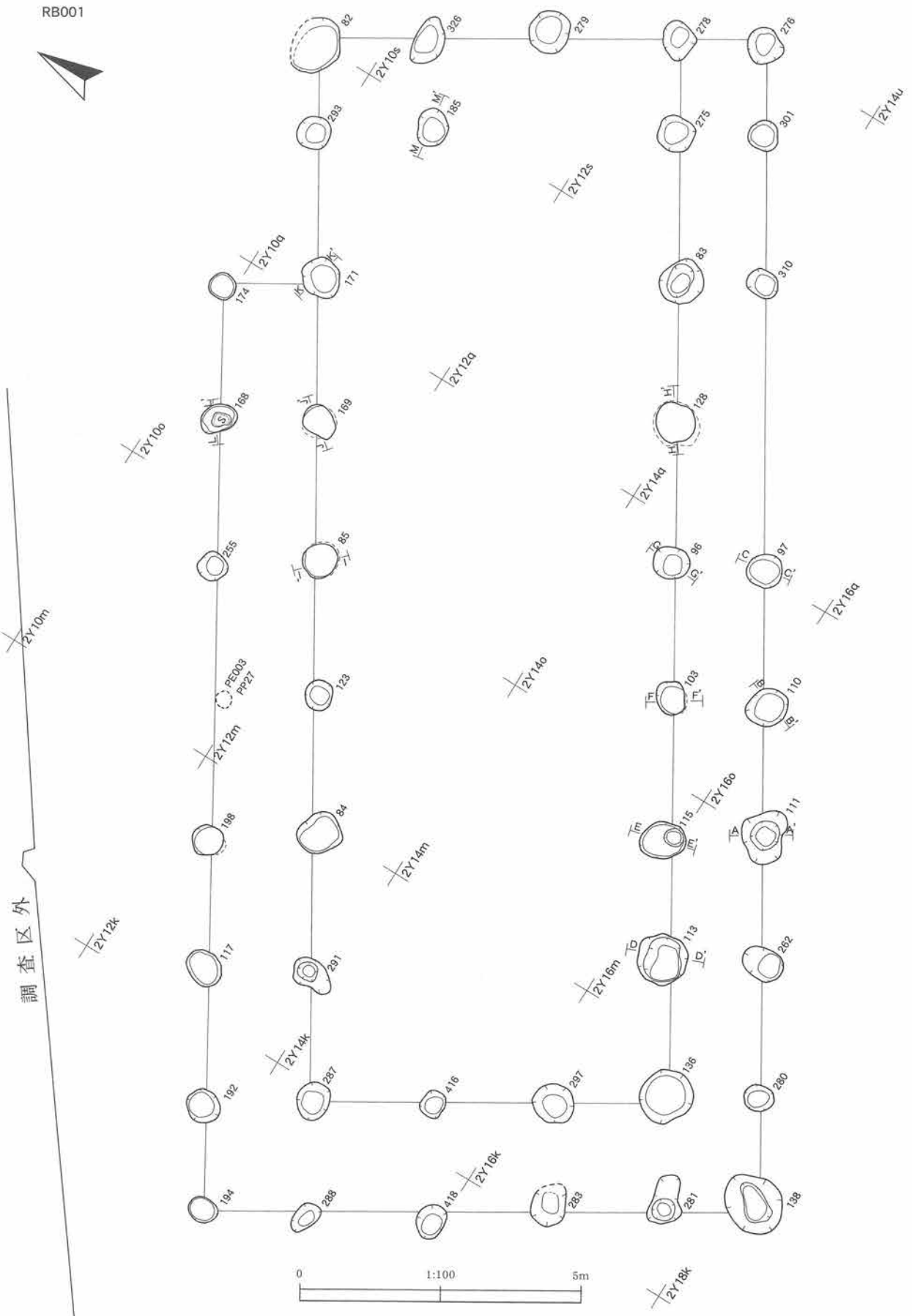
RA017（1号住）炉　a－a'・b－b'・c－c'・d－d'・e－e'
1a　10YR3/3暗褐色シルト　粘性中　締りやや強　黄褐色粘土ブロック2％・焼土1％混入
1b　10YR2/3黒褐色シルト　粘性中　締りやや強　黄褐色粘土ブロック2％混入
1c　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや強　黄褐色粘土ブロック15%混入
1d　10YR2/2黒褐色シルト　粘性中～やや強　締りやや強　黄褐色粘土ブロック1％混入
3e　10YR2/3黒褐色シルト　粘性中　締りやや中
2　10YR6/6明黄褐色粘土質シルト　粘性中　締り強
3a　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや強　黄褐色粘土ブロック2％・焼土5％・炭化物2％混入
3b　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや強　黄褐色粘土ブロック3％・焼土2％・炭化物2％混入
3c　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや強　焼土5％・炭化物3％混入
3e　10YR2/3黒褐色シルト　粘性中　締りやや中
4　5YR4/6赤褐色焼土　粘性中　締り中　炭化物5％混入
5　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや強　黄褐色粘土ブロック7％・焼土2％・炭化物2％混入
6　10YR2/2黒褐色シルト　粘性強　締りやや強～強　黄褐色粘土ブロック3％混入
7　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや強　黄褐色粘土ブロック2％混入
8　10YR2/2黒褐色シルト　粘性中　締りやや強　炭化物7％混入
9　5YR4/6赤褐色焼土　粘性やや強　締りやや強　炭化物5％（φ3㎜程）5％混入
10　10YR2/2黒褐色シルト　粘性中　締りやや強　炭化物15%混入
11　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締り中　褐色粘土質シルト7％混入
12　10YR2/3黒褐色シルト　粘性中　締りやや強　黄褐色粘土ブロック（φ5～30㎜）5％・焼土（φ1～3㎜）1％・炭化物（φ1～3㎜）2％混入

0　1:20　1m

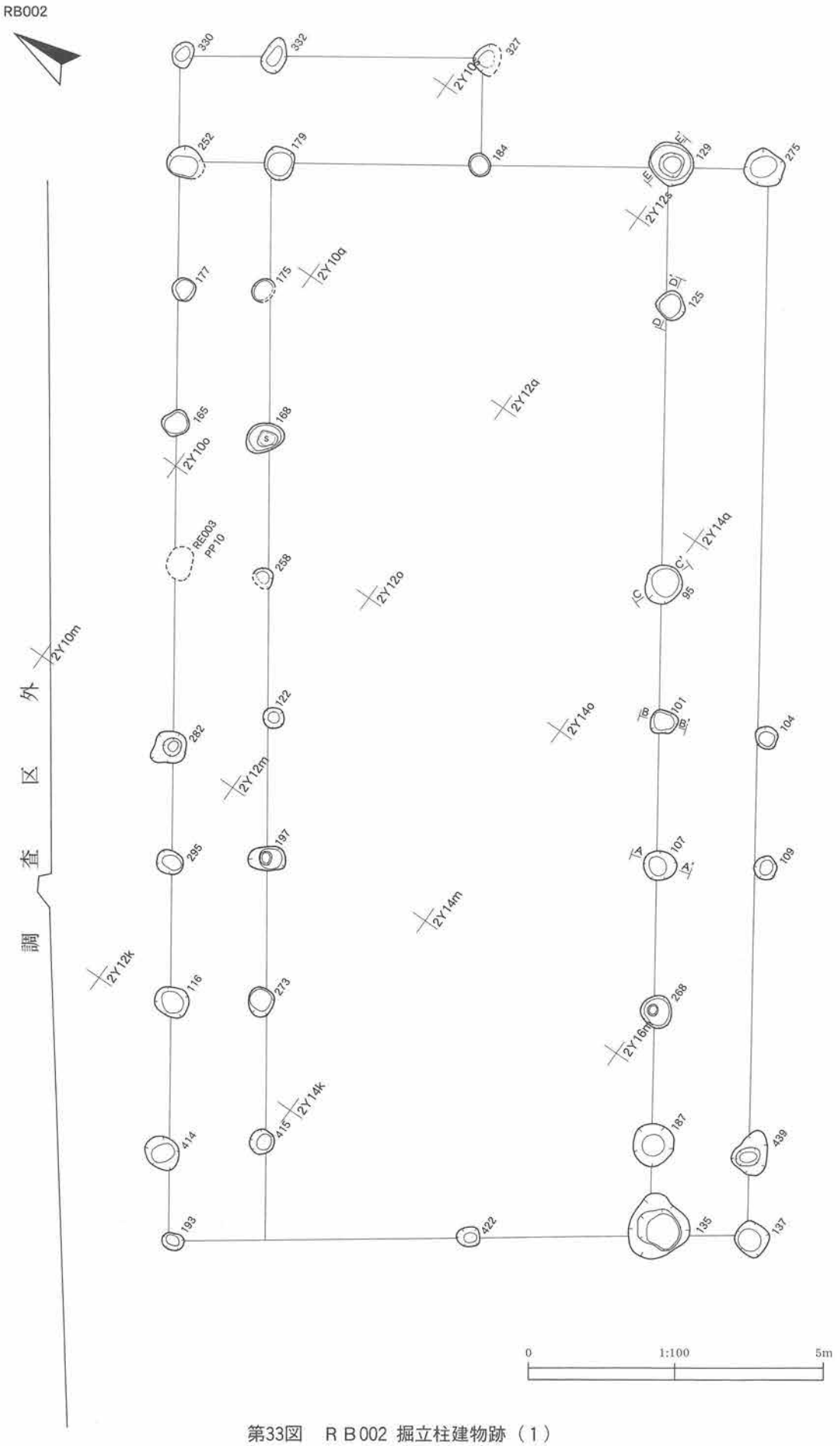
RA017（1号住）土坑1　f－f'
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや強　黄褐色粘土ブロック2％・炭化材1％未満混入

※f－f'
0　1:25　1m

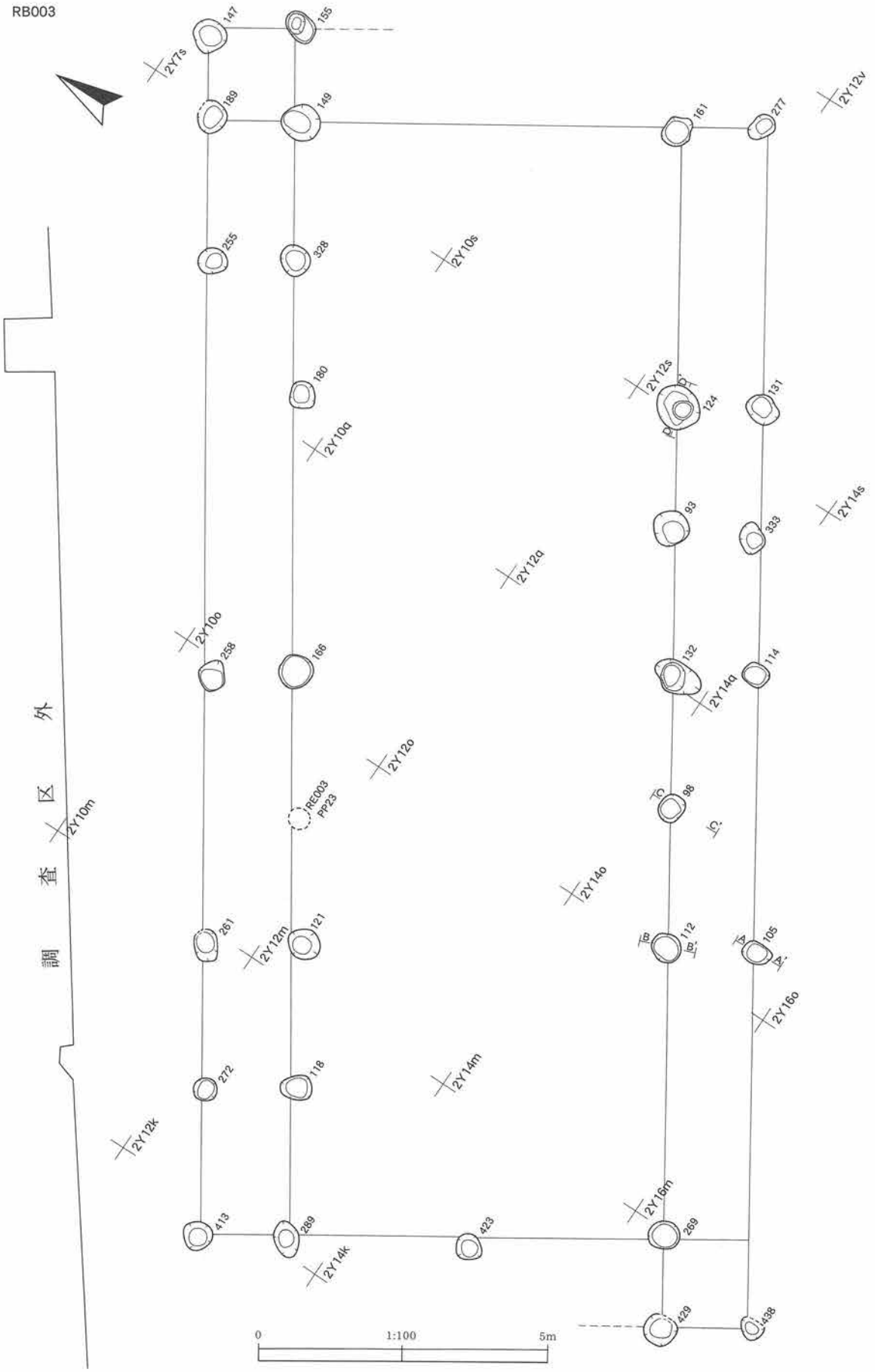
第31図　RA017 竪穴住居跡（2）



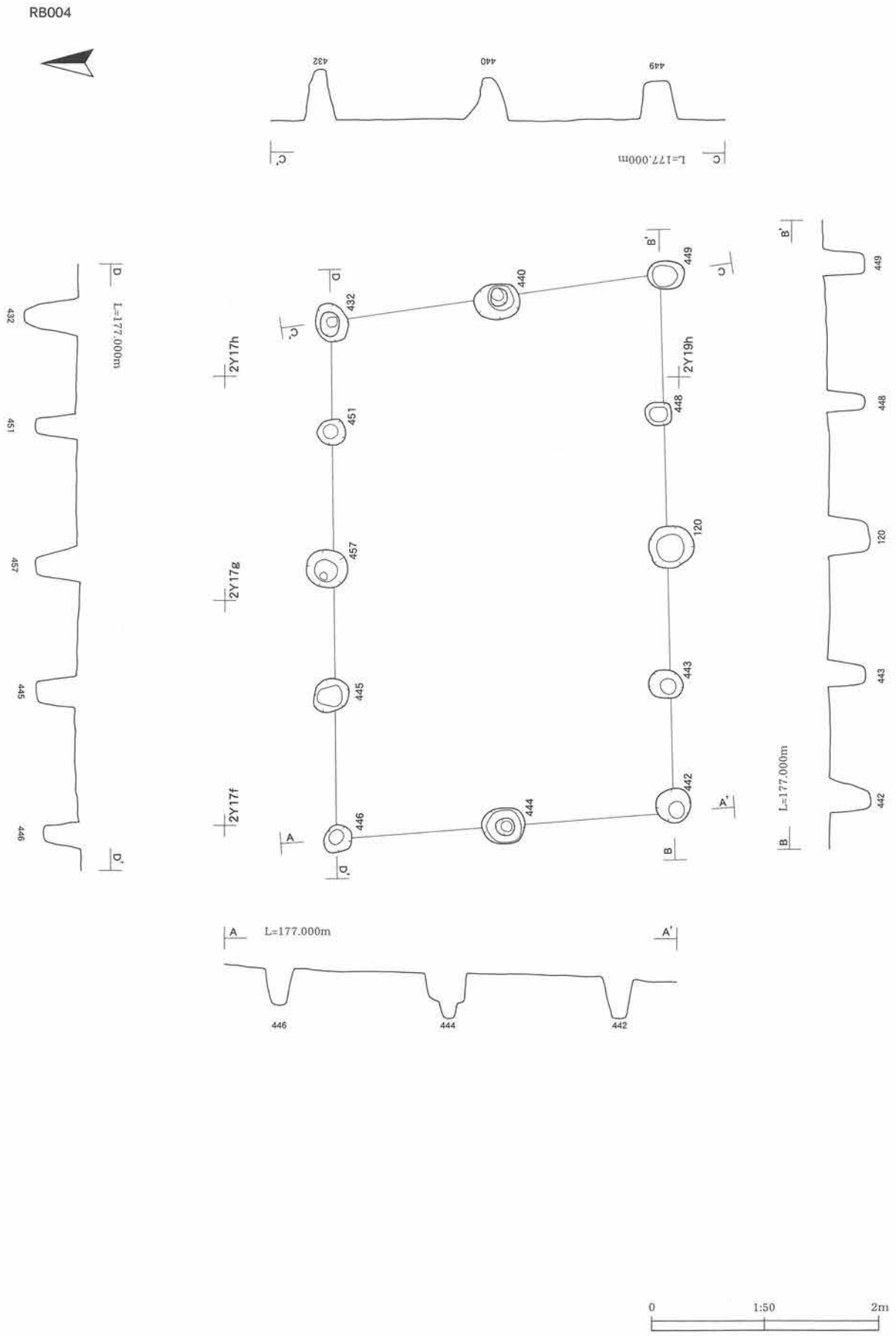
第32図　ＲＢ001 掘立柱建物跡（１）



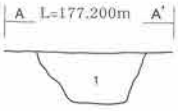
第33図　ＲＢ002 掘立柱建物跡（１）



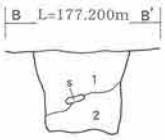
第34図　ＲＢ003 掘立柱建物跡（１）



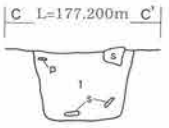
第35図　ＲＢ004 掘立柱建物跡



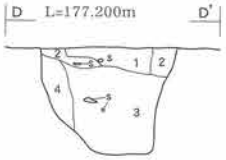
RB001　111号柱穴状土坑　A－A'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中
　黄褐色粘土ブロック10%混入



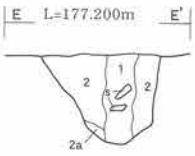
RB001　110号柱穴状土坑　B－B'
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締り中
　黄褐色粘土ブロック７%混入
2　10YR3/3暗褐色砂礫土　粘性やや弱　締りやや疎



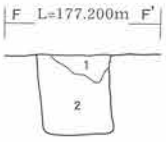
RB001　97号柱穴状土坑　C－C'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中
　褐色シルト５%混入



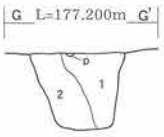
RB001　113号柱穴状土坑　D－D'
1　10YR5/6黄褐色粘土質砂質土　粘性中　締り密
　暗褐色シルト10%混入（※人為堆積層）
2　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締りやや密
　黄褐色粘土20%混入（※掘え方土）
3　10YR２／１黒色シルト　粘性やや強　締りやや密
　黄褐色粘土ブロック７%混入
4　10YR４／４褐色砂質土　粘性中　締りやや密



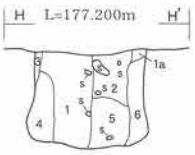
RB001　115号柱穴状土坑　E－E'
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密
　褐色シルト５～７%・焼土（φ１㎜）１%・
　炭化物（φ１㎜）１%混入（※柱痕跡か）
2　10YR4/4褐色シルト　粘性やや弱　締り密
　（※掘え方土か）
2a　10YR4/6褐色シルト　粘性やや弱　締り密



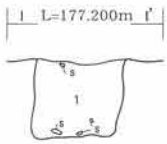
RB001　103号柱穴状土坑　F－F'
1　10YR2/1黒褐色シルト　粘性中　締り中
　褐色粘土質土ブロック７%混入
2　10YR2/2黒褐色シルト　粘性中　締り中
　褐色粘土質土20%混入



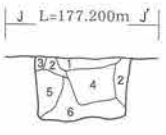
RB001　96号柱穴状土坑　G－G'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密
　褐色シルト３%（※柱痕跡か？）
2　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り密
　褐色シルト10%混入



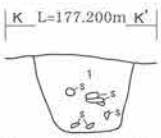
RB001　128号柱穴状土坑　H－H'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中（※柱痕跡）
1a　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中
2　10YR5/6黄褐色粘土　粘性やや強　締りやや密
　礫多量混入（※掘え方土）
3　10YR4/4褐色粘土質砂質土　粘性やや強　締り中（※地山土）
4　10YR5/6黄褐色粘土　粘性やや強　締りやや密
　礫多量混入（※掘え方土）
5　10YR2/1黒色シルト質砂質土　粘性やや強　締りやや疎
6　10YR4/4褐色粘土質砂質土　粘性中　締り中（※地山土）



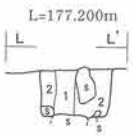
RB001　85号柱穴状土坑　I－I'
1　10YR3/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中
　黄褐色粘土ブロック（１㎝）７%混入



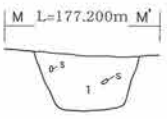
RB001　169号柱穴状土坑　J－J'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性中　締りやや疎
2　10YR2/3黒褐色シルト　粘性中　締りやや疎
3　10YR5/6黄褐色粘土　粘性強　締り中
4　10YR4/4褐色砂質土　粘性やや弱　締りやや疎
　礫（φ３～５㎝）中量混入
5　10YR4/6褐色粘土質砂質土　粘性中　締り中
6　10YR2/2黒褐色シルト質砂質土　粘性中　締りやや疎



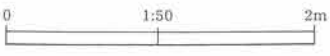
RB001　171号柱穴状土坑　K－K'
1　10YR3/4暗褐色粘土質シルト　粘性やや強　締り中
　黒褐色シルト20%混入（※暗褐と黒褐の混土）



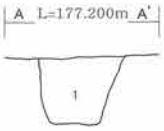
RB001　168号柱穴状土坑　L－L'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性中　締りやや疎
　（※柱痕跡）
2　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締り中
　黄褐色粘土ブロック７%混入



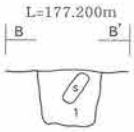
RB001　185号柱穴状土坑　M－M'
1　10YR黒褐色シルト　粘性やや強　締り中
　黄褐色粘土７%混入



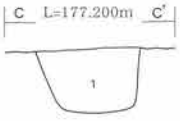
第36図　RB001 掘立柱建物跡（２）



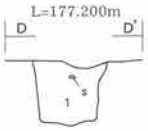
RB002　107号柱穴状土坑　A－A'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中
　黄褐色粘土ブロック５%混入



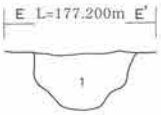
RB002　101号柱穴状土坑　B－B'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性強　締り中
　黄褐色粘土ブロック７%混入



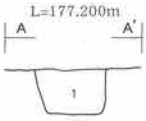
RB002　95号柱穴状土坑　C－C'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性中　締りやや密
　褐色シルト７%混入（※下部に多く混入する）



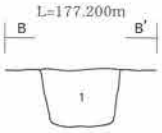
RB002　125号柱穴状土坑　D－D'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや疎
　黄褐色粘土５%混入



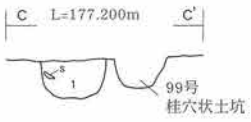
RB002　129号柱穴状土坑　E－E'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中
　黄褐色粘土10%混入



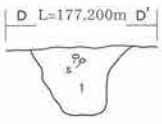
RB003　105号柱穴状土坑　A－A'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中
　黄褐色粘土ブロック15%混入



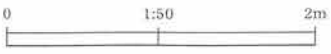
RB003　112号柱穴状土坑　B－B'
1　10YR2/1黒色シルト　粘性やや強　締りやや疎
　黄褐色砂質土５%混入



RB003　98号柱穴状土坑　C－C'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中
　褐色シルト10%混入

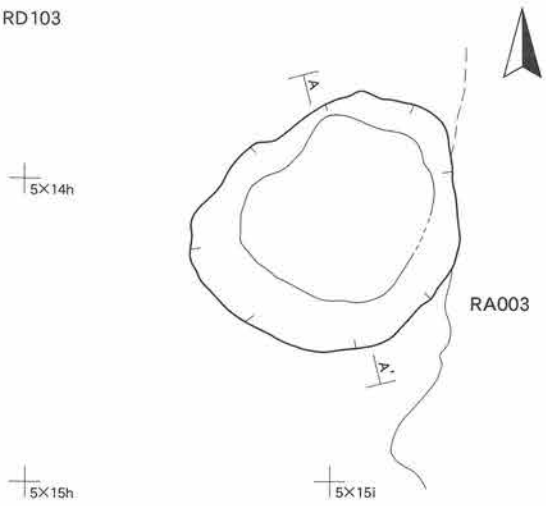


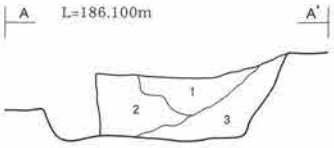
RB003　124号柱穴状土坑　D－D'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中
　黄褐色粘土10%混入（※129号の埋土と類似する）



第37図　RB002・003 掘立柱建物跡（２）

RD103

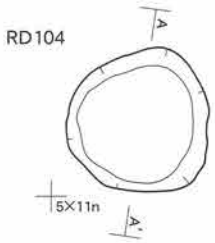


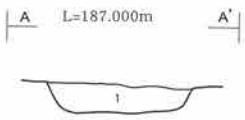


RD103（30号土坑）　A－A'
1　10YR2/1～2/2黒～黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや疎　角レキ（φ5㎜～1㎝）1％・黄褐色粘土ブロック1％混入
2　10YR2/2黒褐色シルト　粘性中　締りやや疎　オレンジパミス（φ1㎜粒）1％・角レキ（φ3㎜～10㎝）1％混入
3　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締り中　黄褐色粘土ブロック5％・炭化物（φ1㎜）1％混入

RD104・105

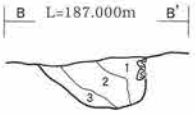
RD104





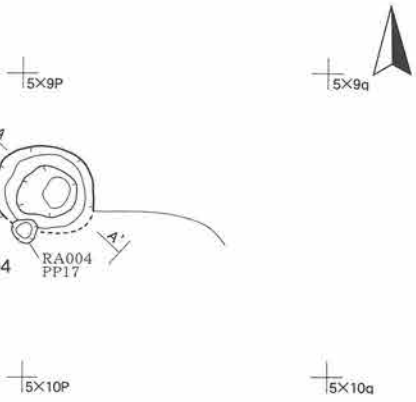
RD104（26号土坑）　A－A'
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性中　締り中　褐色シルトブロック（φ1㎝）3％・オレンジパミス1％混入

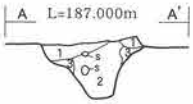
RD105



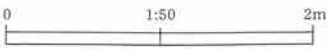
RD105（27号土坑）　B－B'
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性弱　締り疎　褐色シルトブロック（φ2～3㎝）7％混入
2　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや弱　締り疎　褐色シルトブロック（φ2㎝）1％混入
3　10YR3/4暗褐色シルト　粘性弱　締り疎　褐色シルト粒7％混入

RD106



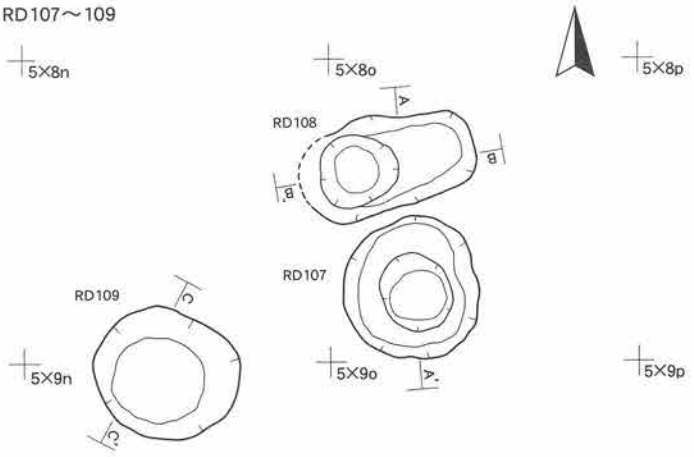


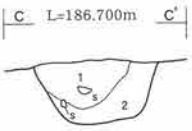
RD106（28号土坑）　A－A'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中　黄褐色粘土ブロック5％・オレンジパミス（φ1㎜）1％未満混入
2　10YR2/3黒褐色シルト　粘性強　締りやや強　黄褐色粘土ブロック7％・炭化物1％未満混入
3　10YR4/6褐色粘土（地山）



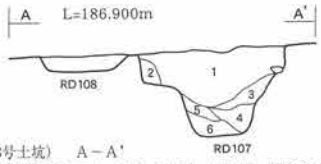
第38図　RD103～106 土坑

RD107～109

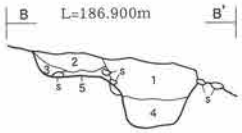




RD109（25号土坑）　C－C'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　レキ（φ2～7cm）・オレンジパミス3％混入（※Ⅳ層系）
2　10YR3/4暗褐色シルト　粘性強　締り疎　褐色シルトとの混土・レキ（φ5cm）混入

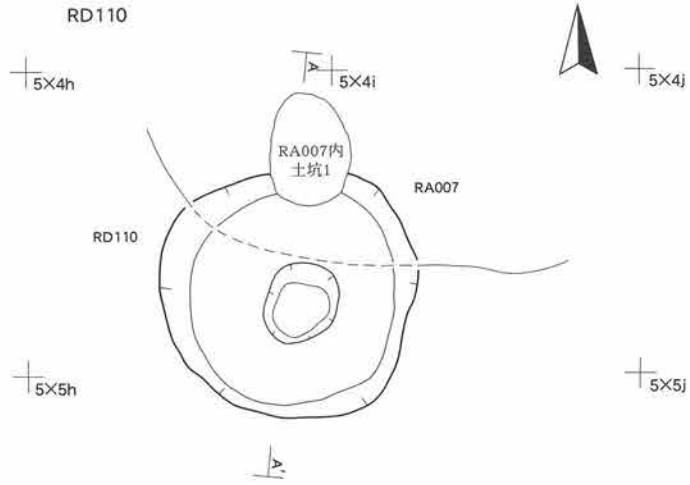


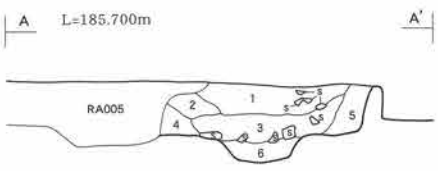
RD107（23号土坑）　A－A'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや弱　締り中　褐色シルトブロック（φ3㎜）1％・オレンジパミス1％混入（※Ⅳ層系）
2　10YR2/3黒褐色シルト　粘性中　締り中　褐色シルトブロック（φ3㎜）混入
3　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや疎　褐色シルト粒3％混入
4　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや疎　褐色シルトブロック（φ1cm）1％混入
5　10YR4/6褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黒色シルトブロック（φ1cm）3％混入
6　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り疎　褐色シルト粒3％混入



RD108（24号土坑）　B－B'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中　褐色シルトブロック（φ1～2cm）1％・小レキ（φ2～5㎜）1％混入
2　10YR2/2黒褐色シルト　粘性中　締りやや疎　褐色シルト粒（φ5㎜）3％混入
3　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締り中　小レキ（φ7㎜）1％混入
4　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや弱　締りやや疎　褐色シルトブロック（φ2～3cm）3％混入
5　10YR4/6褐色粘土

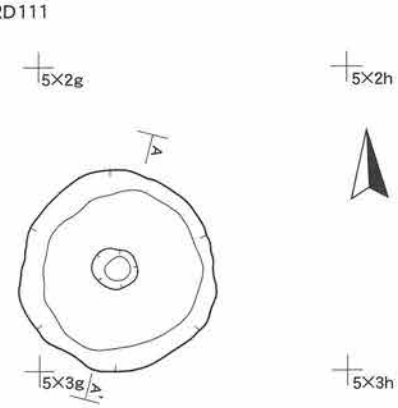
RD110

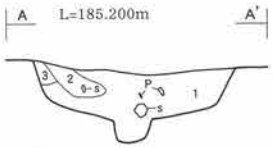




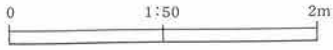
RD110（12号土坑）　A－A'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性中　締り中　オレンジパミス（φ1㎜）1％・レキ（φ2㎜～6cm程）5％混入
2　10YR2/2黒褐色シルト　粘性中　締りやや疎　レキ（φ2～5㎜程）3％混入
3　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　レキ（φ2㎜～10cm程）混入
4　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック5％混入
5　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密～密　黄褐色粘土ブロック10％混入
6　10YR2/3黒褐色シルト　粘性中　締りやや密　黄褐色粘土ブロック2％混入（※pit1）

RD111



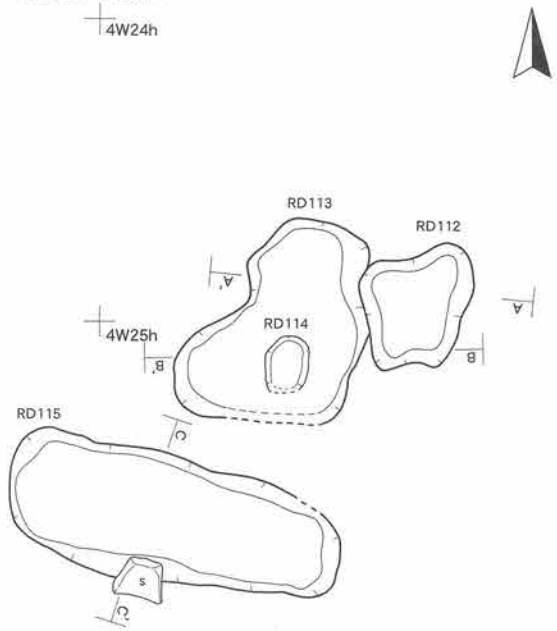


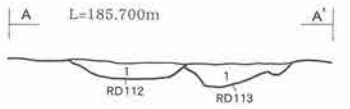
RD111（29号土坑）　A－A'
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締り中　砂状テフラ？（To－Cuか？）小ブロック5％混入
2　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや強　締り中
3　10YR4/4褐色シルト　粘性強　締りやや密　黒褐色シルト20％混入

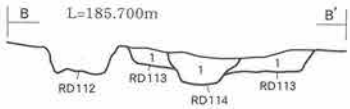


第39図　RD107～111 土坑

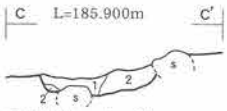
RD112～RD115





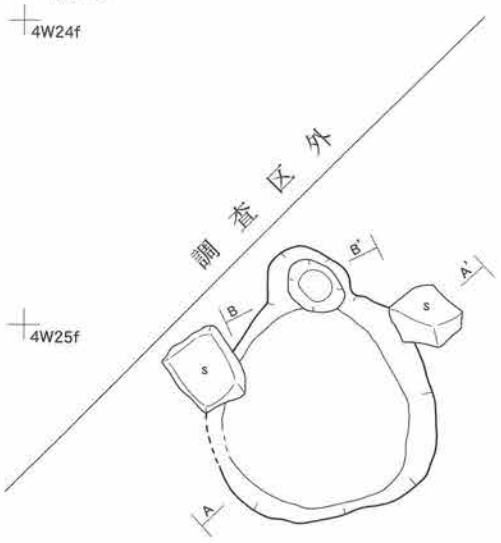


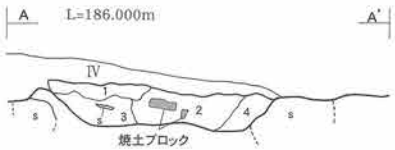
RD112・113・114（54・55・56号土坑）　A－A'・B－B'
1　10YR3/3暗褐色シルト質粘土　粘性やや強　締りやや密（※RD112）
1　10YR3/3暗褐色シルト質粘土　粘性やや強　締りやや密　明黄褐色粘土小ブロック7％混入（※RD113）
1　10YR2/3黒褐色シルト質粘土　粘性やや強　締りやや密　明黄褐色粘土小ブロック3％混入（※RD114）

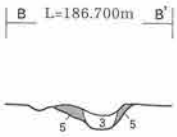


RD115（57号土坑）　C－C'
1　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締り中
2　10YR4/4褐色シルト質粘土　粘性やや強　締りやや密

RD116

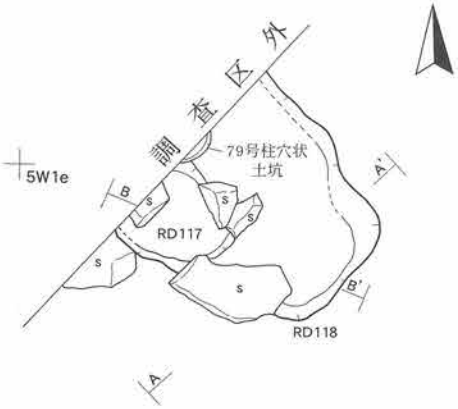


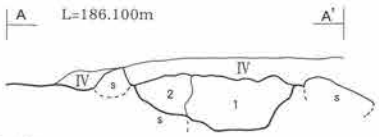




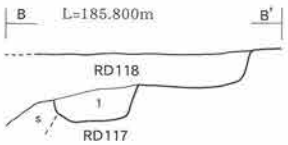
RD116（48号土坑）　A－A'・B－B'
1　10YR2/1黒色シルト　粘性やや強　締り密　黄褐色粘土3％・焼土（φ1～2㎜）1％・炭化物（φ1～2㎜）2％混入
2　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中　黄褐色粘土3％・焼土25％・炭化物（φ2～3㎜）3％混入
3　10YR2/2黒褐色シルト　粘性強　締り密　黄褐色粘土5％・焼土（φ1～2㎜）1％未満・炭化物（φ2～3㎜）2％混入
4　10YR2/2黒褐色シルト　粘性中　締り密　黄褐色粘土3％・炭化物（φ1～2㎜）1％混入
5　5YR5/8赤褐色焼土　粘性やや強　締り密（※地山粘土が被熱により焼土化したものか）

RD117・118

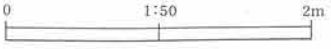




RD118（49号土坑）　A－A'
1　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土5％混入（※人為堆積か）
2　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや弱　締りやや密　黄褐色粘土10％混入（※人為堆積か）

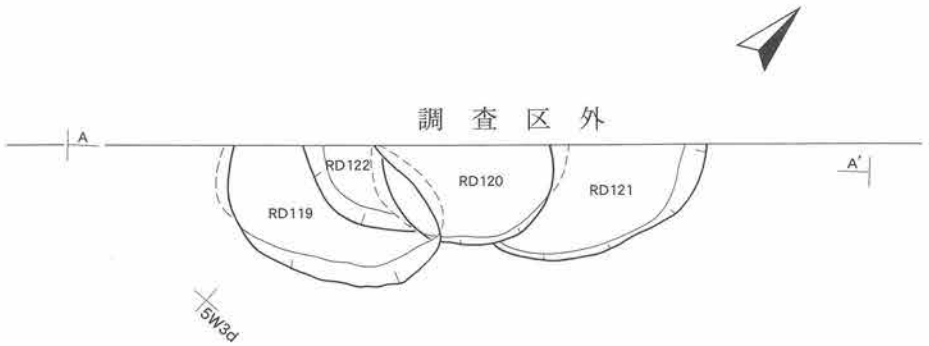


RD117（51号土坑）　B－B'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中　黄褐色粘土15％・炭化物（φ1㎜）1％混入

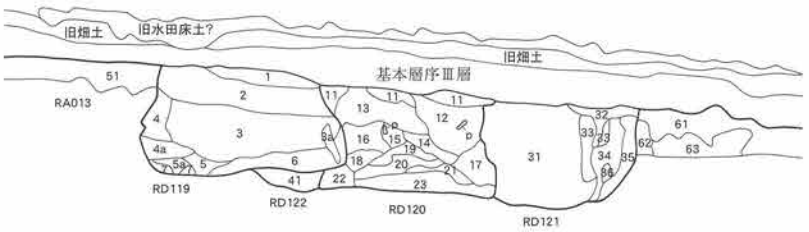


第40図　RD112～118 土坑

RD119～122

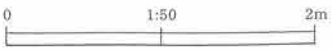


新水田造成時の盛土

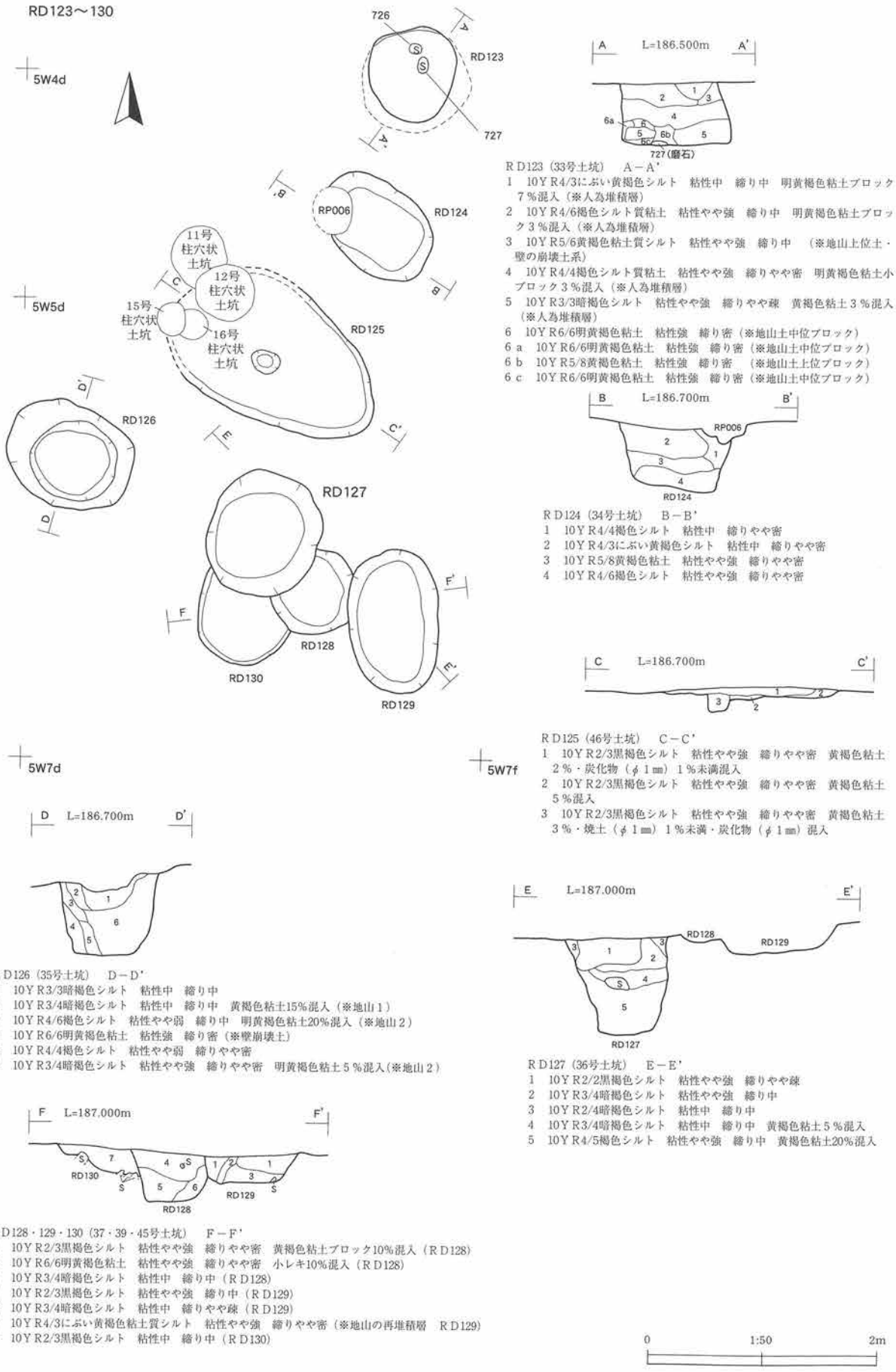


RD119・120・121・122（7・8・9・10号土坑）　A－A'

1　10YR3/3暗褐色シルト　粘性中　締り中（※RD119）
2　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締り中（※RD119）
3　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中　褐色シルト3％・土器片少量混入（※RD119）
3a　10YR2/1黒色シルト　粘性やや強　締り疎（※RD119）
4　10YR4/4褐色シルト質粘土　粘性やや強　締り中（※壁の地山崩壊土　RD119）
4a　10YR5/6黄褐色粘土質シルト　粘性やや強　締り中（※RD119）
5　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや強　締り密　黄褐色粘土10%混入（※RD119）
5a　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや強　締り中（※RD119）
6　10YR6/8明黄褐色粘土　粘性強　締りやや密　暗褐色シルト20%混入（※RD119）
7　10YR6/8明黄褐色粘土　粘性強　締りやや密　暗褐色シルト3％混入（※RD119）
11　10YR2/2黒褐色シルト　粘性中　締りやや疎（※RD120）
12　10YR2/1黒色シルト　粘性中　締りやや疎（※RD120）
13　10YR2/2黒褐色シルト　粘性中　締りやや疎（※RD120）
14　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中（※RD120）
15　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中　土器片・円レキ混入（※RD120）
16　10YR2/2黒褐色シルト　粘性中　締り中　褐色シルト10%混入（※RD120）
17　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密（※RD120）
18　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや強　締り中（※RD120）
19　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや強　締り中（※RD120）
20　10YR2/2黒褐色シルト　粘性中　締り中（※RD120）
21　10YR2/2黒褐色シルト　粘性中　締り中（※RD120）
22　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締り中（※RD120）
23　10YR5/6黄褐色粘土質シルト　粘性やや強　締りやや密　黒褐色シルト5％混入（※RD120）
31　10YR2/2黒褐色シルト　粘性中　締り中（※RD121）
32　10YR2/2黒褐色シルト　粘性中　締りやや密（※RD121）
33　10YR2/3黒褐色シルト　粘性中　締り疎　黄褐色粘土3％混入（※RD121）
34　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締り中　黄褐色粘土ブロック20%混入（※RD121）
35　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや疎（※RD121）
36　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや疎　黄褐色粘土10%混入（※RD121）
41　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土10%混入（※RD122）
51　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密（※RA013）
61　10YR2/2黒褐色シルト　粘性中　締りやや密（※基本層序Ⅳ層系）
62　10YR3/4暗褐色シルト　粘性中　締り中　黄褐色粘土ブロック10%混入（※基本層序Ⅳ層系）
63　10YR2/2黒褐色シルト　粘性中　締り中（※基本層序Ⅳ層系）



第41図　RD119～122 土坑



RD123（33号土坑）　A－A'
1　10YR4/3にぶい黄褐色シルト　粘性中　締り中　明黄褐色粘土ブロック7％混入（※人為堆積層）
2　10YR4/6褐色シルト質粘土　粘性やや強　締り中　明黄褐色粘土ブロック3％混入（※人為堆積層）
3　10YR5/6黄褐色粘土質シルト　粘性やや強　締り中　（※地山上位土・壁の崩壊土系）
4　10YR4/4褐色シルト質粘土　粘性やや強　締りやや密　明黄褐色粘土小ブロック3％混入（※人為堆積層）
5　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや疎　黄褐色粘土3％混入（※人為堆積層）
6　10YR6/6明黄褐色粘土　粘性強　締り密（※地山土中位ブロック）
6a　10YR6/6明黄褐色粘土　粘性強　締り密（※地山土中位ブロック）
6b　10YR5/8黄褐色粘土　粘性強　締り密　（※地山土上位ブロック）
6c　10YR6/6明黄褐色粘土　粘性強　締り密（※地山土中位ブロック）

RD124（34号土坑）　B－B'
1　10YR4/4褐色シルト　粘性中　締りやや密
2　10YR4/3にぶい黄褐色シルト　粘性中　締りやや密
3　10YR5/8黄褐色粘土　粘性やや強　締りやや密
4　10YR4/6褐色シルト　粘性やや強　締りやや密

RD125（46号土坑）　C－C'
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土2％・炭化物（φ1㎜）1％未満混入
2　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土5％混入
3　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土3％・焼土（φ1㎜）1％未満・炭化物（φ1㎜）混入

RD126（35号土坑）　D－D'
1　10YR3/3暗褐色シルト　粘性中　締り中
2　10YR3/4暗褐色シルト　粘性中　締り中　黄褐色粘土15％混入（※地山1）
3　10YR4/6褐色シルト　粘性やや弱　締り中　明黄褐色粘土20％混入（※地山2）
4　10YR6/6明黄褐色粘土　粘性強　締り密（※壁崩壊土）
5　10YR4/4褐色シルト　粘性やや弱　締りやや密
6　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　明黄褐色粘土5％混入（※地山2）

RD127（36号土坑）　E－E'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや疎
2　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや強　締り中
3　10YR2/4暗褐色シルト　粘性中　締り中
4　10YR3/4暗褐色シルト　粘性中　締り中　黄褐色粘土5％混入
5　10YR4/5褐色シルト　粘性やや強　締り中　黄褐色粘土20％混入

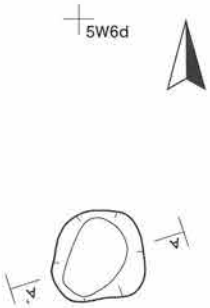
RD128・129・130（37・39・45号土坑）　F－F'
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック10％混入（RD128）
2　10YR6/6明黄褐色粘土　粘性やや強　締りやや密　小レキ10％混入（RD128）
3　10YR3/4暗褐色シルト　粘性中　締り中（RD128）
4　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締り中（RD129）
5　10YR3/4暗褐色シルト　粘性中　締りやや疎（RD129）
6　10YR4/3にぶい黄褐色粘土質シルト　粘性やや強　締りやや密（※地山の再堆積層　RD129）
7　10YR2/3黒褐色シルト　粘性中　締り中（RD130）

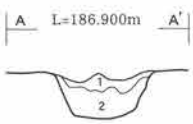
0　1:50　2m

第42図　RD123～130 土坑

RD131～136

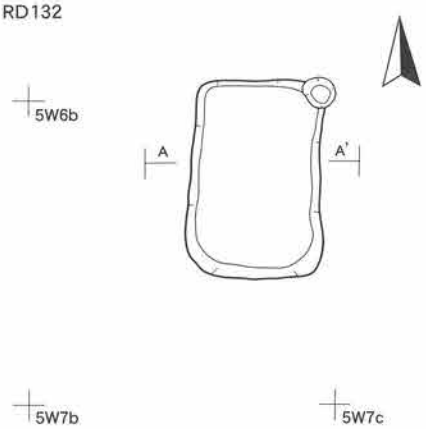
RD131

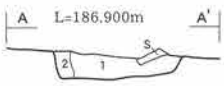




RD131（51号土坑）　A－A'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性強　締りやや疎
2　10YR3/3暗褐色シルト質粘土　粘性やや強　締りやや密

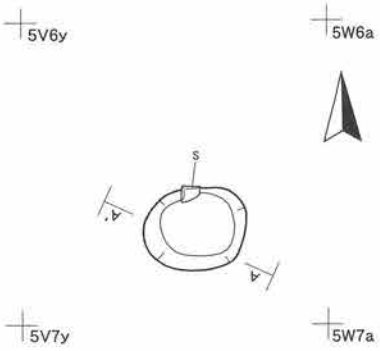
RD132

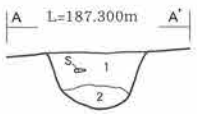




RD132（52号土坑）　A－A'
1　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック2％混入
2　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック5％混入

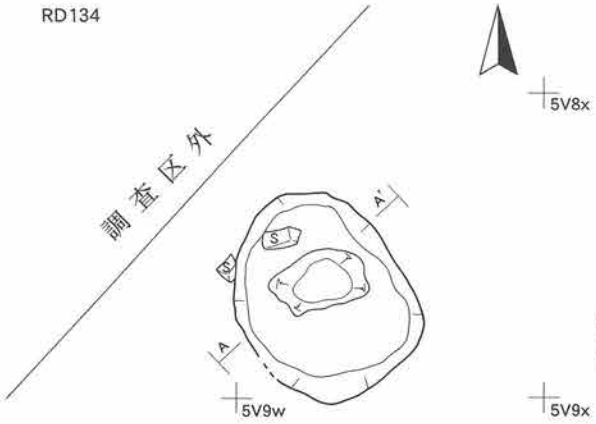
RD133

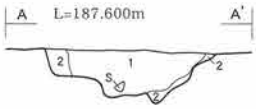




RD133（5号土坑）　A－A'
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性中　締りやや密　黄褐色粘土ブロック2％混入
2　10YR2/1黒色シルト　粘性やや強　締り中　黄褐色粘土ブロック5％混入

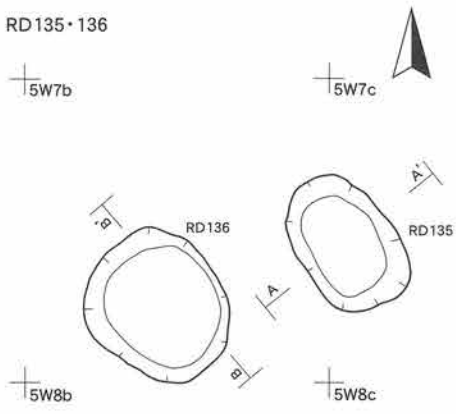
RD134

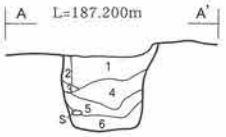




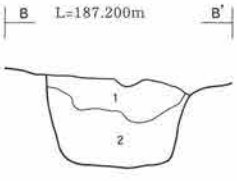
RD134（1号土坑）　A－A'
1　10YR2/1黒色シルト　粘性やや強　締りやや密　明黄褐色粘土ブロック（φ5～10mm）1％混入
2　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強～強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック（φ3～10mm）3％・暗褐色シルトブロック（φ5～20mm）1％混入

RD135・136

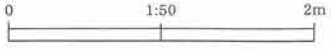




RD135（11号土坑）　A－A'
1　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック3％・炭化物1％未満混入
2　10YR4/6褐色粘土　粘性やや強　締りやや密　暗褐色シルト2％混入
3　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック5％混入
4　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック3％・炭化物1％混入
5　10YR4/4褐色粘土　粘性やや強　締りやや密　炭化物1％混入
6　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック3％混入



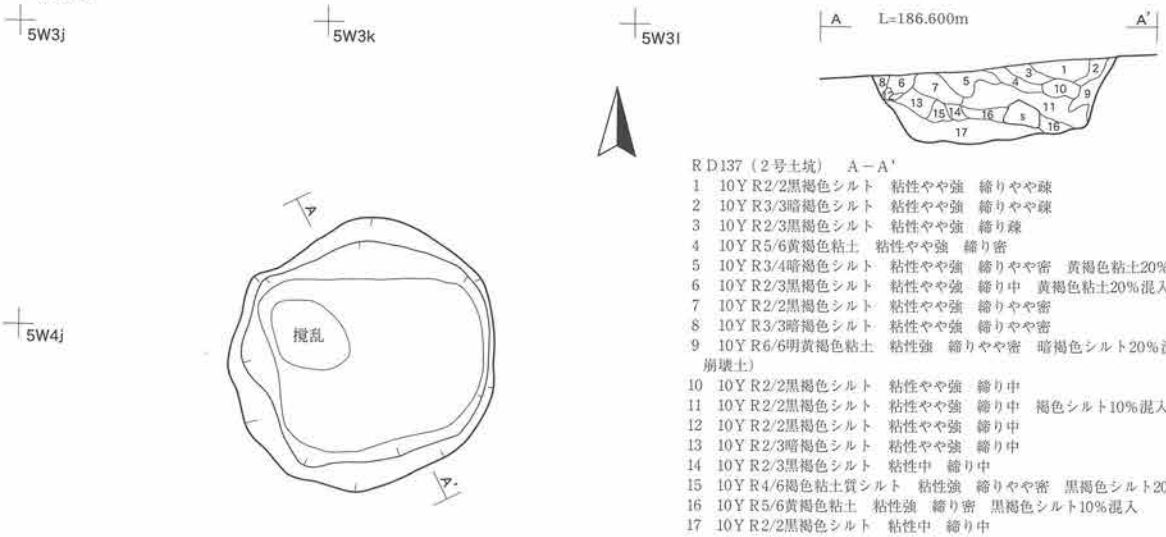
RD136（47号土坑）　B－B'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中
2　10YR4/6褐色粘土質シルト　粘性やや強　締りやや密



第43図　RD131～136 土坑

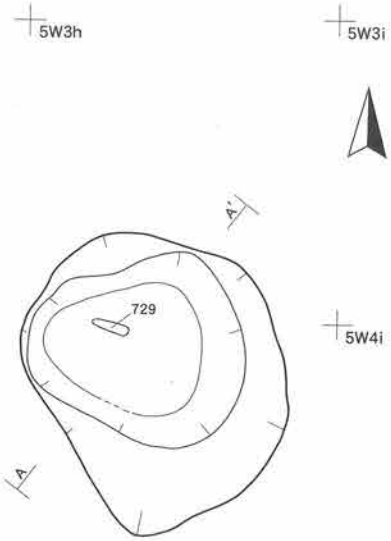
RD137～139

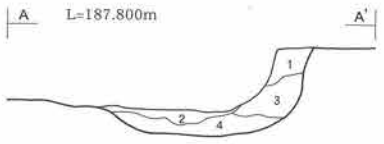
RD137



RD137（2号土坑）　A－A'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや疎
2　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや疎
3　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締り疎
4　10YR5/6黄褐色粘土　粘性やや強　締り密
5　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土20%混入
6　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締り中　黄褐色粘土20%混入
7　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密
8　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや密
9　10YR6/6明黄褐色粘土　粘性強　締りやや密　暗褐色シルト20%混入（※壁崩壊土）
10　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中
11　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中　褐色シルト10%混入
12　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中
13　10YR2/3暗褐色シルト　粘性やや強　締り中
14　10YR2/3黒褐色シルト　粘性中　締り中
15　10YR4/6褐色粘土質シルト　粘性強　締りやや密　黒褐色シルト20%混入
16　10YR5/6黄褐色粘土　粘性強　締り密　黒褐色シルト10%混入
17　10YR2/2黒褐色シルト　粘性中　締り中

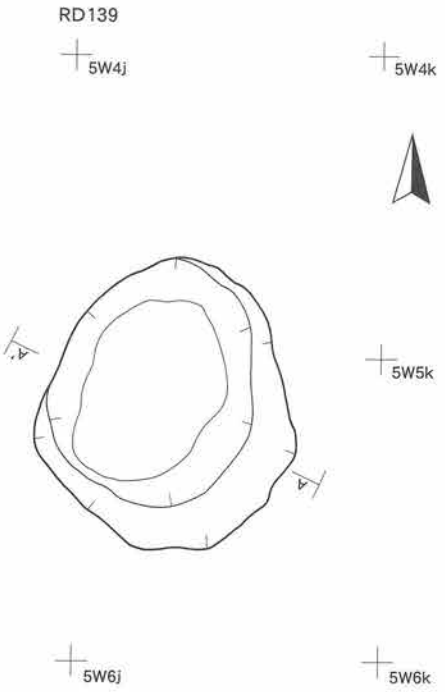
RD138

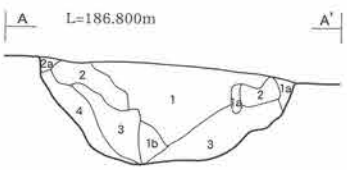




RD138（22号土坑）　A－A'
1　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック20%混入
2　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや疎
3　10YR5/8黄褐色粘土　粘性やや強　締りやや密　暗褐色シルト30%混入
4　10YR2/4暗褐色シルト質粘土　粘性やや強　締り中

RD139

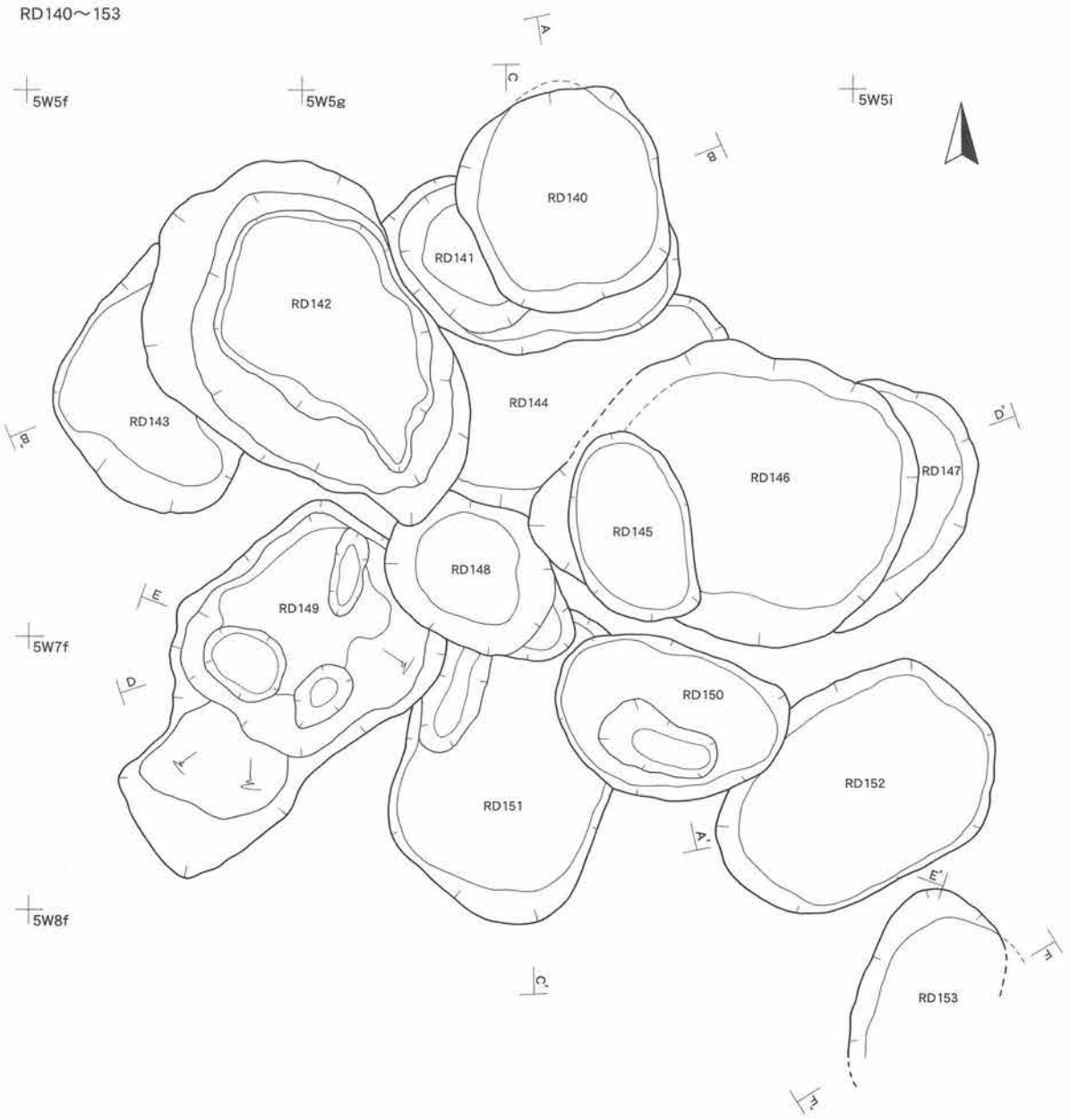




RD139（13号土坑）　A－A'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中
1a　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや弱　締りやや疎　黄褐色粘土5%混入（※木根撹乱）
1b　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや疎　褐色シルト30%混入
2　10YR3/4暗褐色シルト　粘性中　締り中　黄褐色粘土ブロック3%混入
2a　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締り中
3　10YR4/6褐色シルト　粘性やや弱　締りやや疎
4　10YR5/6黄褐色粘土　粘性中　締りやや密

0　1:50　2m

第44図　RD137～139 土坑



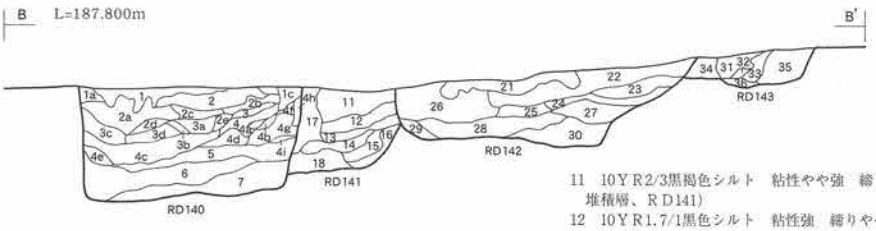
RD144・145・150（41・31・44号土坑）　A－A'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性中　締りやや密　黄褐色粘土ブロック５％・炭化物（φ１㎜）２％・焼土（φ１㎜）１％混入（※人為堆積と考えられる、RD144）
2　10YR3/3暗褐色シルト　粘性中　締りやや密　黄褐色粘土ブロック15%混入（※RD144）

11　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック３％・焼土（φ１㎜程）１％・炭化物（φ１㎜程）１％混入（※RD145）
12　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック１％・焼土（φ１㎜程）１％未満・炭化物（φ１㎜程）１％混入（※RD145）
13　10YR2/2黒褐色シルト　粘性強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック１％未満混入（※RD145）
14　10YR2/3黒褐色シルト　粘性強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック15%・焼土（φ１㎜程）１％未満・炭化物（φ１㎜程）１％混入（※RD145）
14a　10YR2/3黒褐色シルト　粘性強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック15%混入（※RD145）
15　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック３％混入（※RD145）
16　10YR2/3黒褐色シルト　粘性強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック１％混入（※RD145）

21　10YR2/1黒色シルト　粘性中　締り中　黄褐色粘土ブロック３％・炭化物（φ１㎜）１％混入（※人為堆積？、RD150）
22　10YR3/2暗褐色シルト　粘性やや強　締り密　黄褐色粘土ブロック20%・炭化物（φ１㎜）１％混入（※人為堆積？、RD150）
23　10YR3/3暗褐色シルト　粘性強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック５％混入（※人為堆積？、RD150）
23a　10YR3/3暗褐色シルト　粘性強　締り密　黄褐色粘土ブロック７％混入（※人為堆積？、RD150）

0　1:50　2m

第45図　RD140～153 土坑

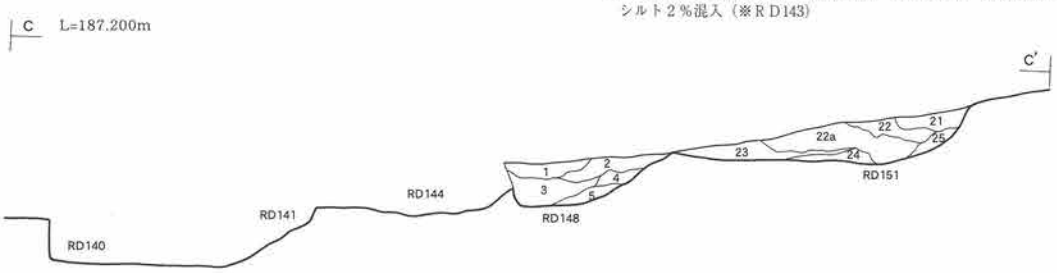


RD140・141・142・143（6・19・20・21号土坑）　B－B'

1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中（※RD140）
1a　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密（※RD140）
1b　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密（※RD140）
1c　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　暗褐色シルト30%混入（※RD140）
2　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締り中（※RD140）
2a　10YR2/3黒褐色シルト　粘性中　締りやや疎（※RD140）
2b　10YR3/4暗褐色シルト　粘性中　締りやや密　黄褐色粘土ブロック5%混入（※RD140）
2c　10YR3/3暗褐色シルト　粘性中　締りやや密　黄褐色粘土ブロック3%混入（※RD140）
2d　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック3%混入（※RD140）
2e　10YR3/3暗褐色シルト　粘性中　締りやや密（※RD140）
3　10YR4/6褐色シルト質粘土　粘性やや強　締りやや疎（※RD140）
3a　10YR6/8明黄褐色粘土　粘性やや強　締り中　黒褐色シルト30%混入（※RD140）
3b　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや密（※RD140）
3c　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締り中（※RD140）
3d　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締り中　黄褐色粘土ブロック15%混入（※RD140）
4　10YR3/3暗褐色シルト　粘性中　締りやや疎（※RD140）
4a　10YR3/4暗褐色シルト　粘性中　締り中　黄褐色粘土10%混入（※RD140）
4b　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや密（※RD140）
4c　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締り中（※RD140）
4d　10YR3/3黒褐色シルト　粘性やや強　締り中　黄褐色粘土15%混入（※RD140）
4e　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密（※RD140）
4f　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密（※RD140）
4g　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　褐色シルト20%混入（※RD140）
4h　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや密（※RD140）
4i　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中（※RD140）
5　10YR黒褐色シルト　粘性中　締りやや密　明黄褐色粘土ブロック（φ10～15㎜）7%混入（※RD140）
6　10YR6/8明黄褐色粘土　粘性やや強　締りやや密　黒色シルト20%混入（※RD140）
7　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締り中（※RD140）
11　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締り中　黄褐色粘土7%混入（※人為堆積層、RD141）
12　10YR1.7/1黒色シルト　粘性強　締りやや疎（※人為堆積層、RD141）
13　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土20%混入（※人為堆積層、RD141）
14　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中　褐色シルト7%混入（※人為堆積層、RD141）
15　10YR4/4褐色シルト　粘性やや強　締り中　黄褐色粘土10%混入（※人為堆積層、RD141）
16　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや疎　暗褐色シルト10%混入（※人為堆積層、RD141）
17　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締り中（※RD141）
18　10YR5/6黄褐色粘土　粘性やや強　締りやや密　黒褐色シルト7%混入（※RD141）

21　10YR2/1黒色シルト　粘性やや強　締りやや疎（※RD142）
22　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや疎　黄褐色粘土5%混入（※RD142）
23　10YR2/1黒色シルト　粘性やや強　締り中　黄褐色粘土小ブロック10%混入（※RD142）
24　10YR5/6黄褐色粘土　粘性やや強　締りやや密　黒褐色シルト7%混入（※主体は地山上位の土、土取りの対象土の上の粘土層、RD142）
25　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中（※RD142）
26　10YR2/2黒褐色シルト　粘性中　締り中（※RD142）
27　10YR3/4暗褐色シルト質粘土　粘性やや強　締りやや密　黒褐色シルト5%混入（※RD142）
28　10YR2/1黒色シルト　粘性中　締り中　黄褐色粘土小ブロック5%混入（※RD142）
29　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締り中（※RD142）
30　10YR5/8黄褐色粘土質シルト　粘性やや強　締りやや密（※RD142）

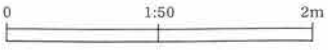
31　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土2%混入（※RD143）
32　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土5%混入（※RD143）
33　10YR2/3黒褐色シルト　粘性中　締りやや密（※土器片を含む）（※RD143）
34　10YR2/2黒褐色シルト　粘性中　締りやや密　黄褐色粘土3%混入（※RD143）
35　10YR3/4暗褐色シルト　粘性中　締りやや密　黒褐色シルト2%混入（※RD143）
36　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土3%・黒褐色シルト2%混入（※RD143）



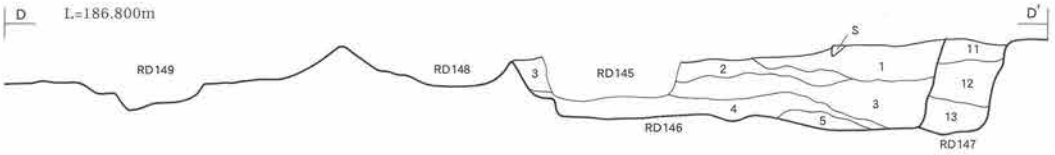
RD148・151（40・42号土坑）　C－C'

1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中　黄褐色粘土ブロック3%混入（※自然堆積？、RD148）
2　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　焼土（φ1㎜）1%・黄褐色粘土ブロック2%混入（※自然堆積？、RD148）
3　10YR5/6黄褐色粘土　粘性やや強　締りやや密　暗褐色シルト10%・焼土（φ1㎜）1%・炭化物（φ1㎜）1%混入（※人為堆積？、RD148）
4　10YR3/3暗褐色粘土　粘性強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック5%混入（※人為堆積？、RD148）
5　10YR5/6黄褐色粘土　粘性強　締り密　暗褐色シルト5%混入（※人為堆積？、RD148）

21　10YR2/2黒褐色シルト　粘性中　締りやや密　黄褐色粘土ブロック1%・焼土（φ1㎜）1%混入（※人為堆積か？、RD151）
22　10YR2/3黒褐色シルト　粘性中　締りやや密　黄褐色粘土ブロック5%（※人為堆積か？、RD151）
22a　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック7%・焼土（φ1～5㎜）1%・炭化物（φ1㎜）1%混入（※人為堆積か？、RD151）
23　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック10%・炭化物（φ1～2㎜）1%混入（※人為堆積か？、RD151）
24　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締り密　黄褐色粘土ブロック5%・炭化物（φ1～2㎜）1%未満・焼土（φ1㎜）1%未満混入（※人為堆積か？、RD151）
25　10YR5/6黄褐色粘土　粘性やや強　締り密　暗褐色シルト7%混入（※人為堆積か？、RD151）

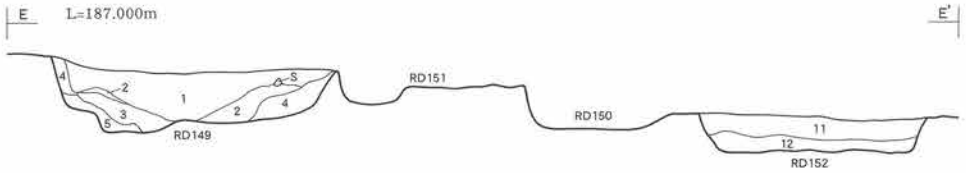


第46図　RD140～143・148・151 土坑



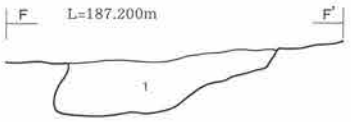
RD146・147（43・32号土坑）　D－D'
1　10YR2/1黒色シルト　粘性やや強　締り中　炭化物（φ1～2㎜）1％・焼土（φ1㎜）1％混入（※RD146）
2　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック2％混入（※RD146）
3　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締り中　黄褐色粘土ブロック3％混入（※人為堆積？、RD146）
4　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック20％混入（※人為堆積？、RD143）
5　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック2％・炭化物（φ1㎜）・焼土（φ1㎜）1％未満混入（※RD146）

11　10YR2/3黒褐色シルト　粘性中　締りやや強（※RD147）
12　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締りやや密　黄褐色粘土ブロック1％・炭化物（φ1㎜）1％未満・焼土（φ1㎜）1％未満混入（※RD147）
13　10YR3/3暗褐色シルト　粘性中　締り中　黄褐色粘土ブロック15％・炭化物（φ1㎜）1％未満混入（※RD147）

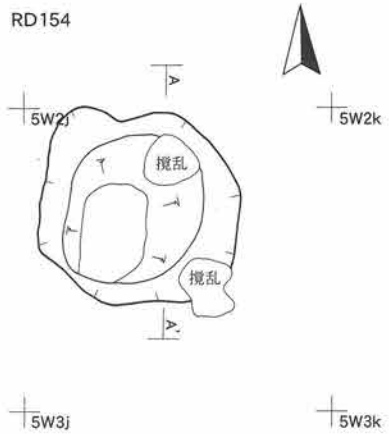


RD149・152（14・50号土坑）　E－E'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや疎（※RD149）
2　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや疎　明黄褐色粘土ブロック3％混入（※RD149）
3　10YR5/6黄褐色粘土　粘性やや強　締り中（※RD149）
4　10YR4/3にぶい黄褐色シルト　粘性やや強　締り中（※RD149）
5　10YR6/6明黄褐色粘土　粘性やや強　締りやや密（※RD149）

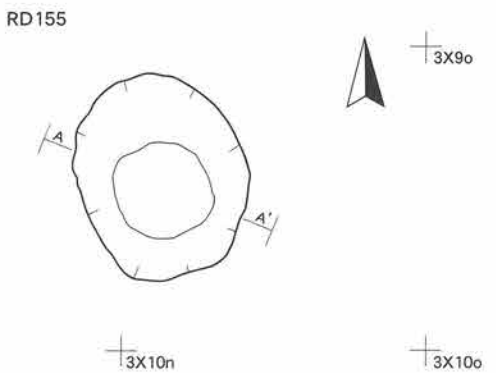
11　10YR2/1黒色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土3％混入（※RD152）
12　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土3％混入（※RD152）

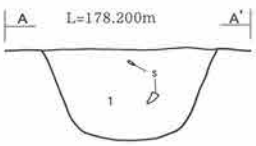


RD153（4号土坑）　F－F'
1　10YR5/6黄褐色粘土　粘性やや強　締り密　オレンジ鉱物？（φ1～2㎜程）1％（※壁の地山崩壊土か、上部に10YR3/3暗褐色シルトが混じる）

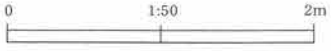


RD154（3号土坑）　A－A'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中
2　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや密



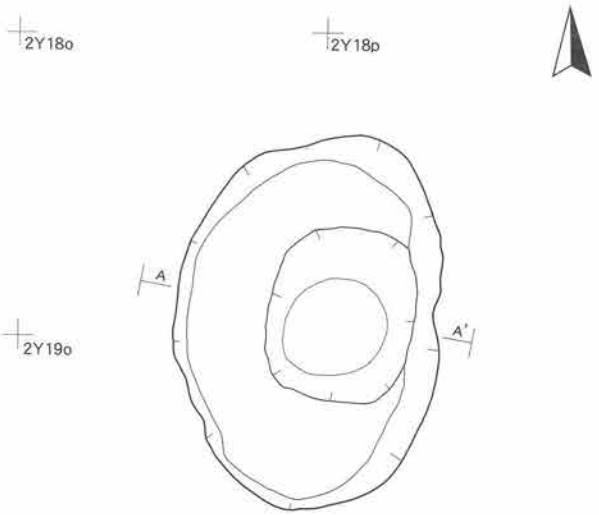


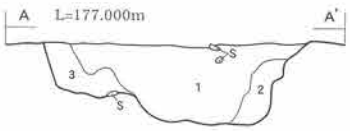
RD155（59号土坑）　A－A'
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　角礫（φ5㎜～5㎝程）3％混入



第47図　RD146・147・149・152～155 土坑

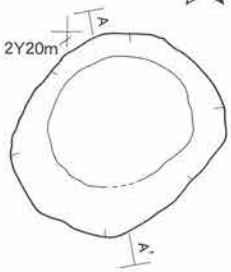
RD156

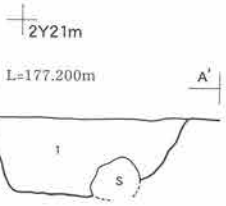




RD156（62号土坑）　A－A'
1　10YR2/1黒色シルト　粘性やや強　締り中　黄褐色粘土ブロック2％混入
2　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや密（※地山土、壁の崩壊土）
3　10YR4/6褐色砂質粘土　粘性やや強　締り中

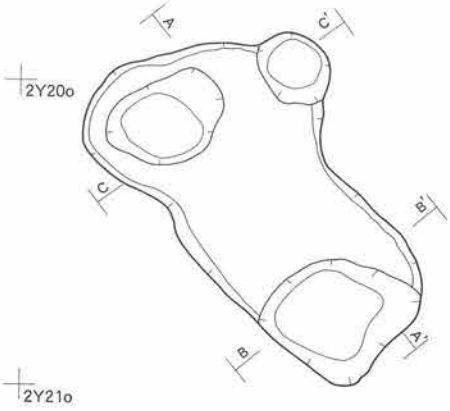
RD158

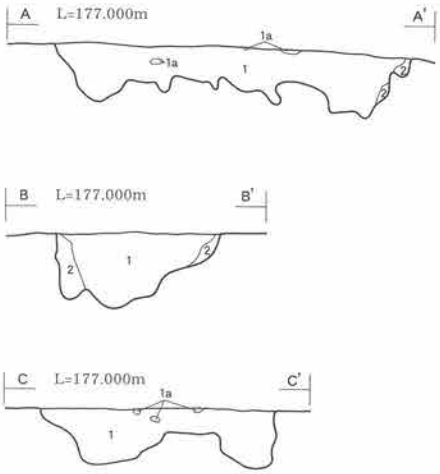




RD158（60号土坑）　A－A'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　褐色シルト3％・炭化物（φ1～2mm）2％混入（※壁際に主に混入）

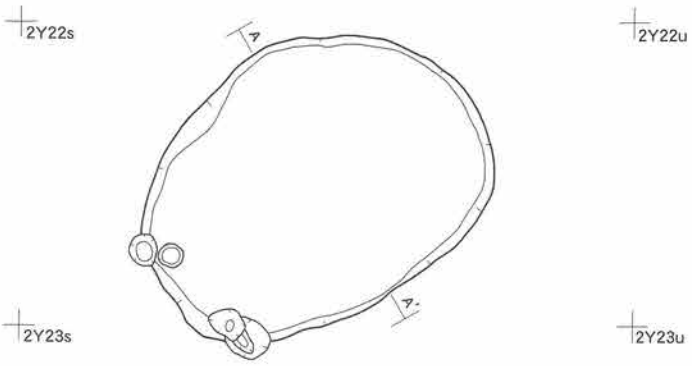
RD157

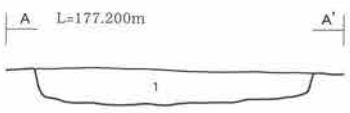




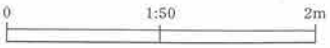
RD157（63号土坑）　A－A'・B－B'・C－C'
1　10YR2/1黒色シルト　粘性やや強　締り中　砂質土2％混入
1a　10YR7/6明黄褐色テフラ　粘性中　締りやや疎（※To－cuブロック）
2　10YR3/4暗褐色粘土質シルト　粘性やや強　締り中

RD159





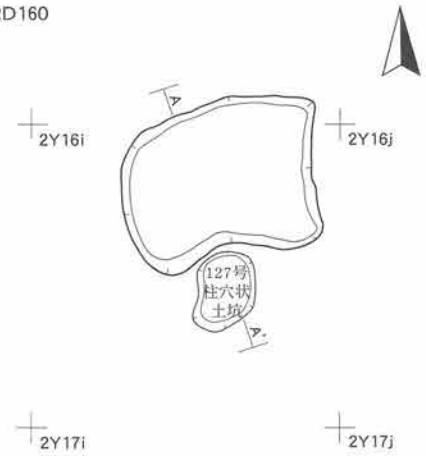
RD159（65号土坑）　A－A'
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締り中



第48図　RD156～159 土坑

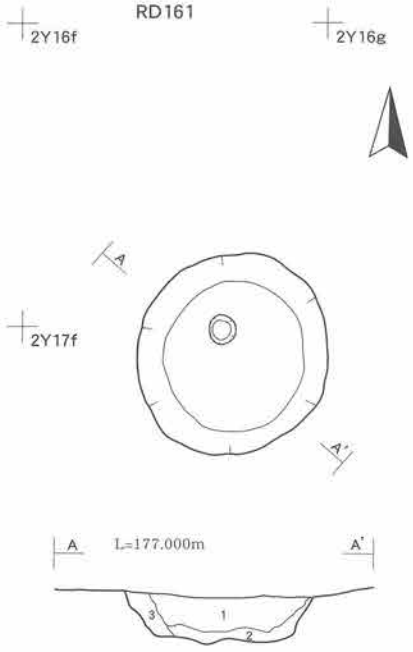
RD160～163

RD160



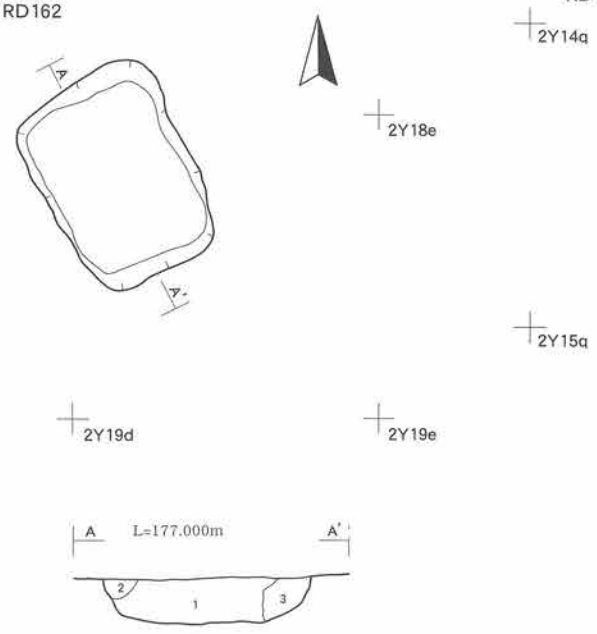
RD160（61号土坑）・127号柱穴状土坑　A－A'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中　褐色シルト3％・焼土（φ1㎜）1％・炭化物（φ2～5㎜）2％混入（※RD160）
11　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　褐色シルト2％混入（※127号柱穴状土坑）

RD161



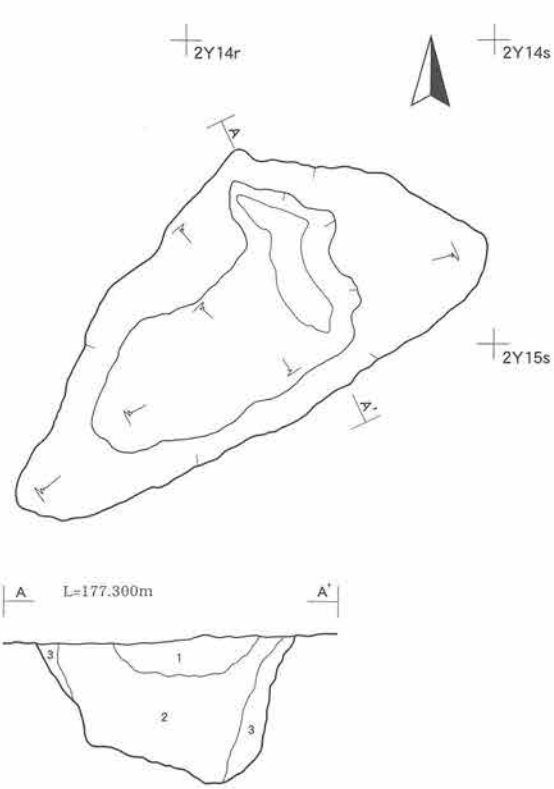
RD161（64号土坑）　A－A'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　褐色粘土ブロック2％・焼土（φ1㎜）1％・炭化物（φ1～2㎜）1％混入
2　10YR3/3暗褐色シルト　粘性強　締り密　褐色粘土ブロック10％混入
3　10YR3/3暗褐色シルト　粘性強　締り密　褐色粘土ブロック20％混入

RD162



RD162（66号土坑）　A－A'
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締り中　褐色粘土ブロック（径2～3㎝）10％混入
2　10YR4/4褐色シルト質砂質土　粘性中　締り中　黒褐色シルト5％混入
3　10YR4/6褐色粘土質砂質土　粘性中　締り中　黒褐色シルト5％混入

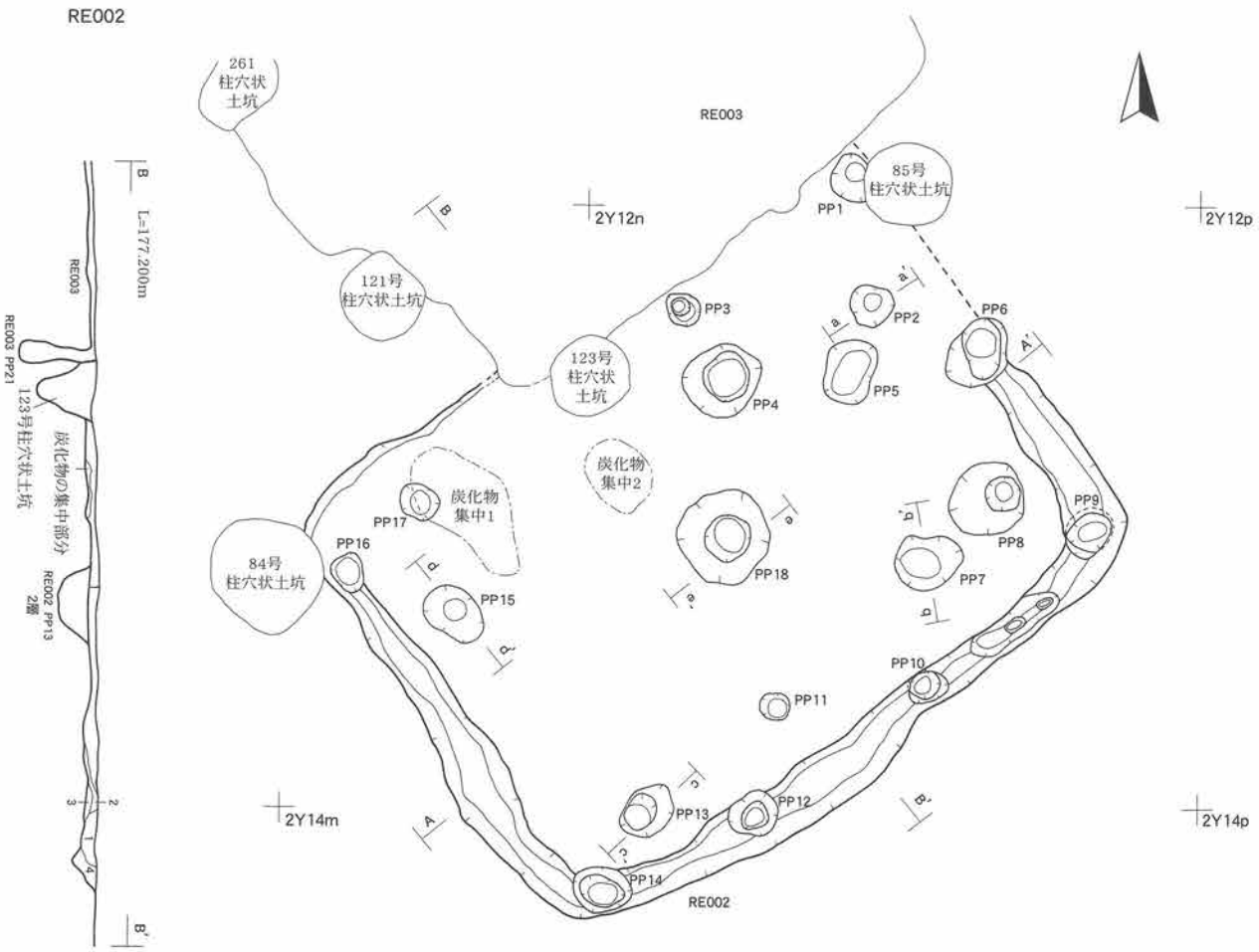
RD163

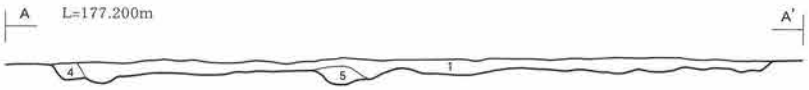


RD163（58号土坑）　A－A'
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性中　締りやや疎
2　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや疎
3　10YR1/3暗褐色シルト　粘性やや弱　締りやや疎　褐色砂質土シルト20％混入（※壁の崩壊土）

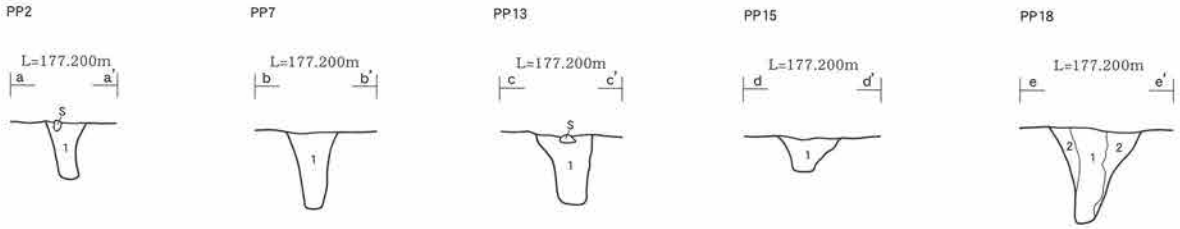
0　1:50　2m

第49図　RD160～163 土坑





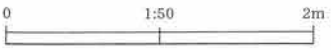
RE002（17号住）　A－A'・B－B'
1　10YR2/2　黒褐色シルト　粘性中　締り中　褐色砂質粘土（地山土）ブロックで5％混入（※所々に炭化物混入）
2　10YR4/4褐色粘土質砂質土　粘性中　締り中（※整地層？）
3　10YR4/6褐色粘土質砂質土　粘性やや強　締り密（※整地層？）
4　10YR3/4暗褐色砂質粘土　粘性中　締り中（※壁の崩落土系）
5　10YR4/4褐色砂質粘土　粘性やや弱　締りやや密（※整地層と推定される）



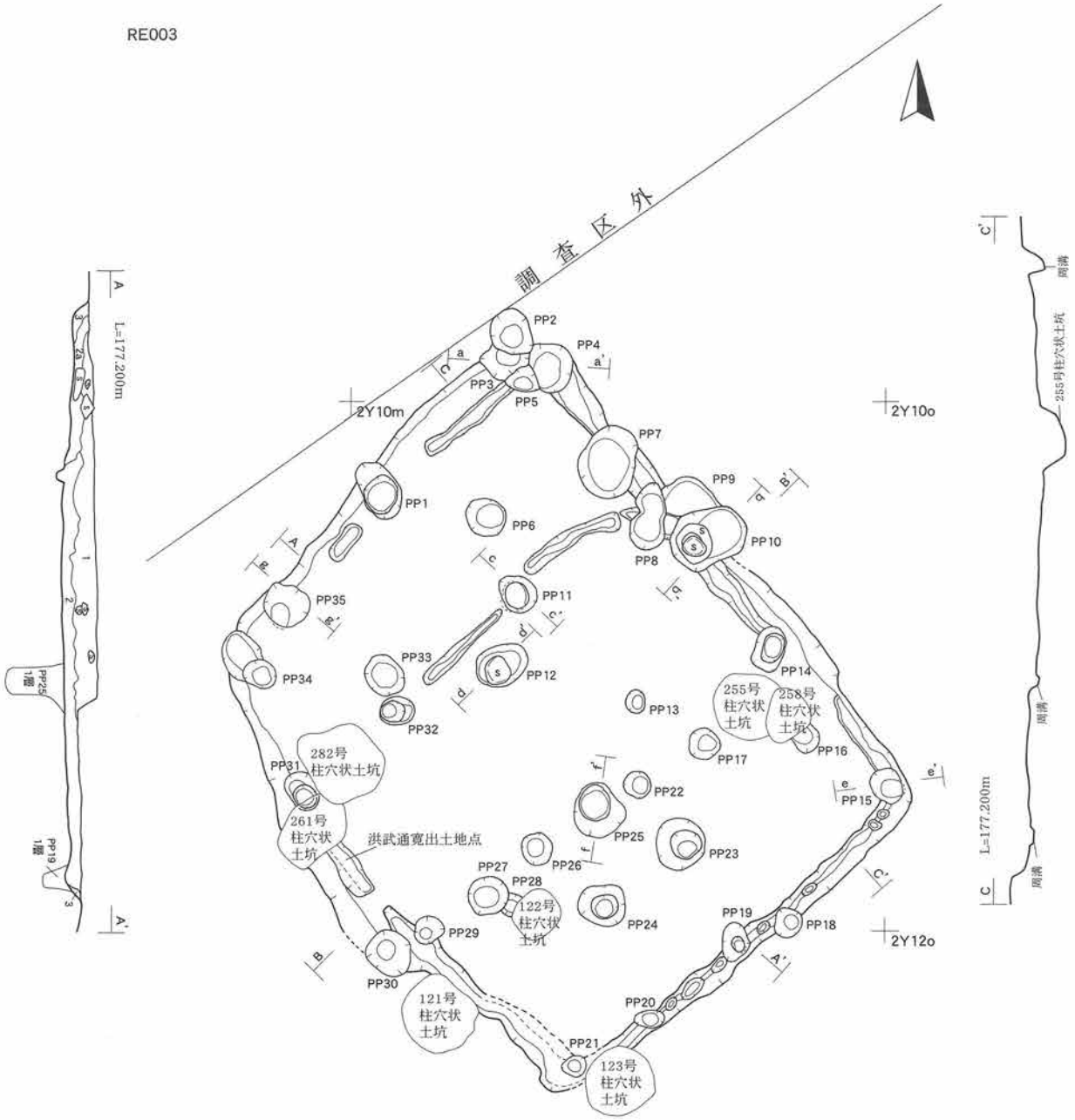
RE002（17号住）　pp2・7・13・15・18　a－a'・b－b'・c－c'・d－d'・e－e'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや疎　褐色砂質土5～10%混入
2　10YR4/4褐色砂質土　粘性中　締りやや疎　黒褐色シルト5％混入

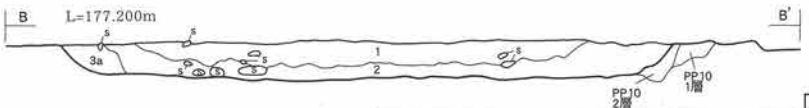
RE002	径(cm)	深さ(cm)	備　考
PP1	32×28	47	
PP2	28×28	36	
PP3	26×22	20	
PP4	48×44	33	
PP5	42×30	22	
PP6	48×38	61	
PP7	44×36	50	
PP8	48×48	15	
PP9	32×24	46	底面北東側オーバーハング

RE002	径(cm)	深さ(cm)	備　考
PP10	26×20	41	
PP11	20×18	49	
PP12	34×28	59	
PP13	38×30	45	
PP14	38×38	45	
PP15	42×36	22	
PP16	26×20	46	
PP17	58×58	16	炭化物集中1を切る
PP18	60×58	62	



第50図　RE002 竪穴建物跡





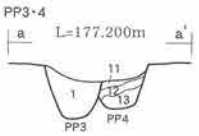
RE003（18号住）　A－A'・B－B'　・C－C'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性中　締りやや密　褐色（10YR4/6）シルト２％・焼土（φ１㎜）１％未満混
2　10YR2/2黒褐色シルト　粘性中　締りやや密　褐色（10YR4/6）シルト５％混入
2a　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや弱　締り密　褐色（10YR4/6）シルト７％混入
3　10YR4/6褐色シルト　粘性やや弱　締り密　黒褐色シルト７％混入（※壁の崩壊土か？）
3a　10YR4/6褐色シルト　粘性やや弱　締り密　黒褐色シルト10％混入

RE003	径(cm)	深さ(cm)	備　考
PP1	46×24	44	
PP2	38×30	34	PP3・PP4を切る
PP3	(34)×38	24	PP5を切り、PP2に切られる
PP4	36×(32)	20	PP2・PP3・PP5に切られる
PP5	(24)×(20)	30	PP4を切り、PP3に切られる
PP6	30×30	30	
PP7	56×42	14	
PP8	50×26	46	PP9を切る
PP9	(40)×(34)	28	PP8・PP10に切られる
PP10	58×42	45	PP9を切る
PP11	32×26	48	
PP12	40×32	14	
PP13	18×14	30	
PP14	34×22	47	
PP15	26×22	50	
PP16	(18)×20	10	258号柱穴状土坑に切られる
PP17	24×22	39	

RE003	径(cm)	深さ(cm)	備　考
PP18	22×18	14	
PP19	28×20	45	
PP20	22×14	18	
PP21	18×16	47	
PP22	20×20	21	
PP23	40×36	21	
PP24	34×32	51	
PP25	42×38	62	
PP26	24×24	29	
PP27	30×28	25	PP28を切る
PP28	18×(8)	30	PP27、122号柱穴状土坑に切られる
PP29	22×20	45	
PP30	34×32	58	
PP31	30×20	37	261・282号柱穴状土坑に切られる
PP32	26×22	30	
PP33	32×26	21	
PP34	50×30	40	
PP35	34×30	60	

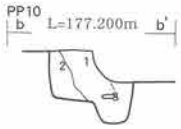
0　1:50　2m

第51図　RE003 竪穴建物跡（１）

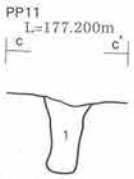


ＲＥ003（18号住）　ｐｐ３・４　ａ－ａ'
1　10ＹＲ2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　褐色（10ＹＲ4/6）シルト７％混入（※人為堆積か？ｐｐ３）

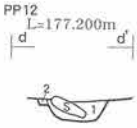
11　10ＹＲ２/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　褐色シルト５％・焼土（φ１㎜）１％混入（※人為堆積か？ｐｐ４）
12　110Ｙ R4/6褐色シルト　粘性やや強　締り密　黒褐色シルト３％混入（※人為堆積か？ｐｐ４）
13　10ＹＲ2/2黒褐色シルト　粘性強　締り密　褐色シルト５％混入（※人為堆積か？ｐｐ４）



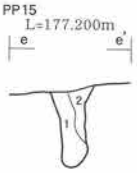
ＲＥ003（18号住）　ｐｐ10　ｂ－ｂ'
1　10ＹＲ2/3黒褐色シルト　粘性中　締りやや密　褐色シルト10％・炭化物（φ１㎜）１％混入・直径15ｃｍ程の石（磨石？）を含む
2　10ＹＲ2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　褐色シルト２％混入



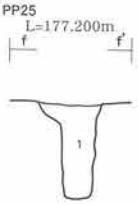
ＲＥ003（18号住）　ｐｐ11　ｃ－ｃ'
1　10ＹＲ2/2黒褐色シルト　粘性中　締り中　褐色シルト７％混入



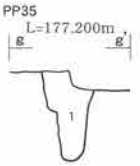
ＲＥ003（18号住）　ｐｐ12　ｄ－ｄ'
1　10ＹＲ2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　褐色シルト５％混入
2　10ＹＲ4/6褐色シルト　粘性中　締り密



ＲＥ003（18号住）　ｐｐ15　ｅ－ｅ'
1　10ＹＲ2/2黒褐色シルト　粘性中　締りやや密　褐色シルト７％混入
2　10ＹＲ4/6褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黒褐色シルト３％混入

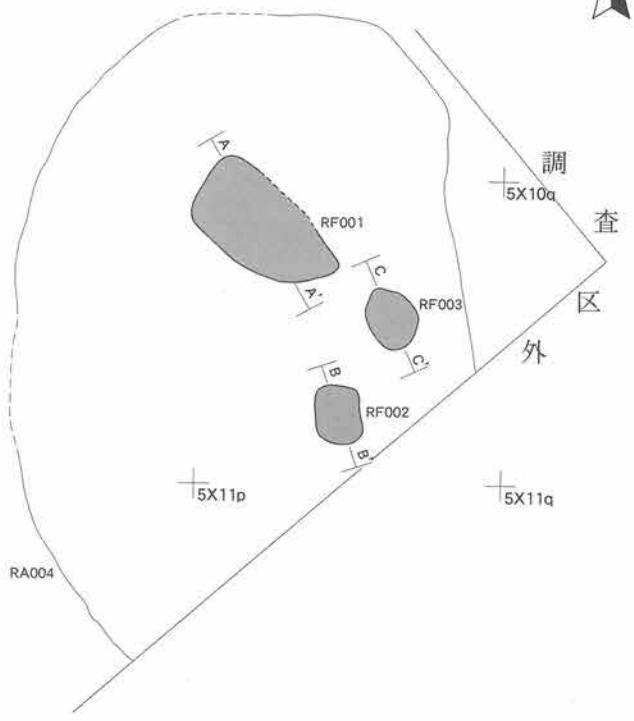


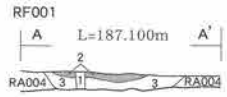
ＲＥ003（18号住）　ｐｐ25　ｆ－ｆ'
1　10ＹＲ2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　褐色シルト５％・炭化物（φ１㎜）１％混入



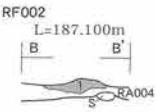
ＲＥ003（18号住）　ｐｐ35　ｇ－ｇ'
1　10ＹＲ2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　褐色シルト10％混入

RF001～003

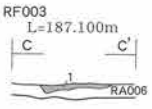




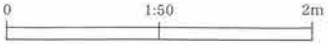
ＲＦ001（１号焼土）　Ａ－Ａ'
1　10ＹＲ2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締り疎（※木根撹乱と推定される）
2　2.5Ｙ R4/6赤褐色焼土　粘性中　締りやや密（※現地性と判断される）
3　10ＹＲ2/2黒褐色シルト　粘性中　締り密　焼土ブロック20％混入



ＲＦ002（２号焼土）　Ｂ－Ｂ'
1　10ＹＲ2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締り中　焼土ブロック10％混入（※焼土は二次堆積の可能性大）

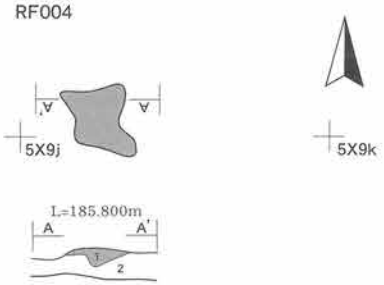


ＲＦ003（３号焼土）　Ｃ－Ｃ'
1　3.5Ｙ R4/4褐色焼土　粘性やや強　締り中（※現地性　発達は悪い）



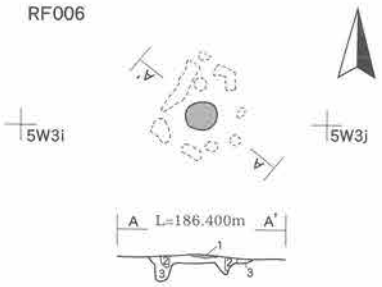
第52図　ＲＥ003 竪穴建物跡（２）・RF001～003 焼土

RF004



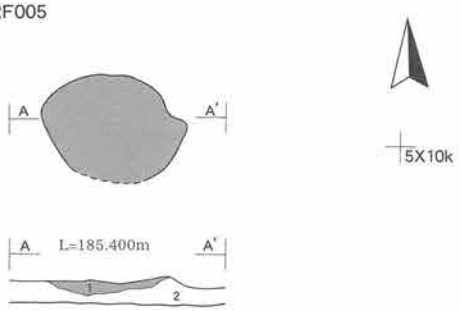
ＲＦ004（４号焼土）　Ａ－Ａ'
1　10ＹＲ2/2黒褐色シルト　粘性やや弱　締り中　焼土ブロック15%混入（※焼土は二次堆積の可能性）
2　10ＹＲ2/1黒色シルト　粘性やや弱　締り中～やや密

RF006



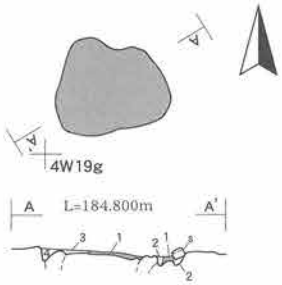
ＲＦ006（１号炉跡）　Ａ－Ａ'
1　５ＹＲ5/8明赤褐色焼土　粘性やや強　締り密
2　10ＹＲ2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締り密　黄褐色粘土ブロック３%混入（※炉石の抜き取り痕か）
3　10ＹＲ5/8黄褐色粘土　粘性やや強　締り密（※地山）

RF005



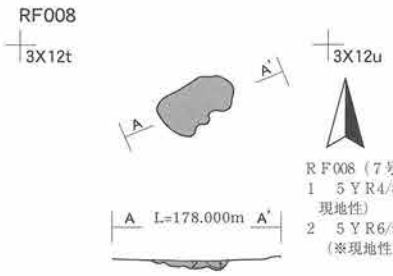
ＲＦ005（５号焼土）　Ａ－Ａ'
1　５ＹＲ4/8赤褐色焼土　粘性弱　締り密
2　10ＹＲ3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締り密　炭化物（φ１㎜）５%未満・オレンジパミス（φ１～２㎜）２%混入

RF007



ＲＦ007（６号焼土）Ａ－Ａ'
1　５ＹＲ3/6暗赤褐色焼土　粘性やや強　締りやや密（※現地性）
2　10ＹＲ3/4暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや疎
3　10ＹＲ3/4暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや密
4　10ＹＲ3/4暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土30%混入

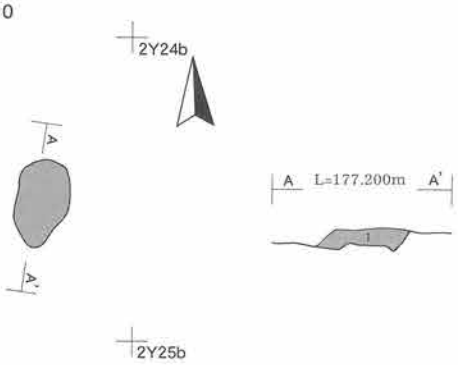
RF008



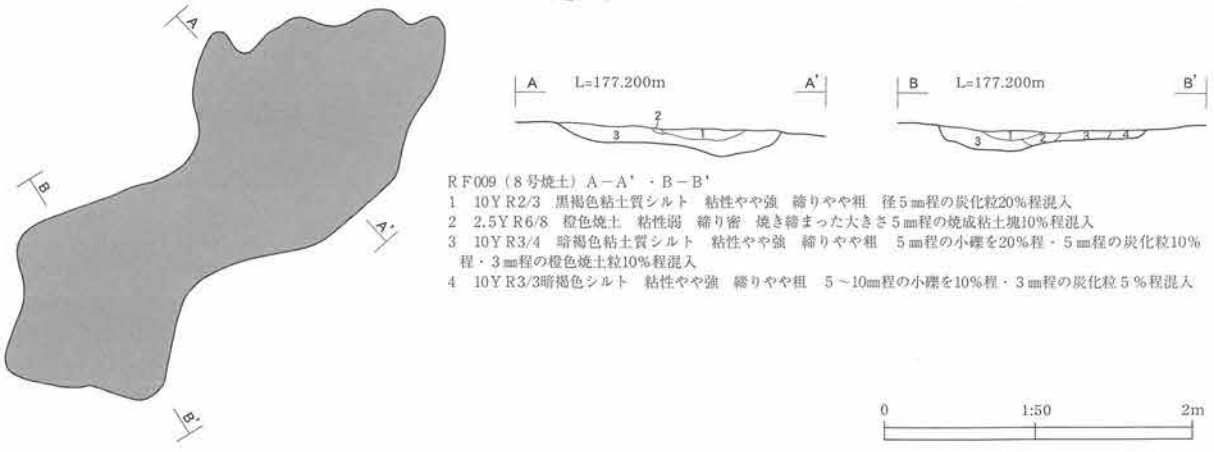
ＲＦ008（７号焼土）　Ａ－Ａ'
1　５ＹＲ4/8赤褐色焼土　粘性中　締りやや密（※現地性）
2　５ＹＲ6/5暗赤褐色焼土　粘性中　締りやや密（※現地性）

RF009

RF010



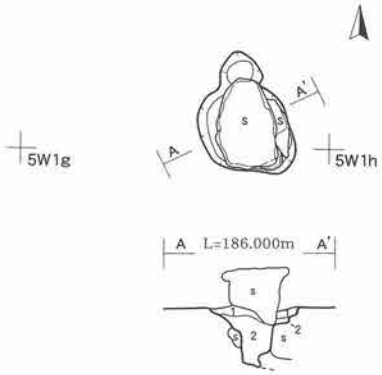
ＲＦ010（９号焼土）　Ａ－Ａ'
1　５ＹＲ4/8赤褐色焼土　粘性やや強　締りやや密（※暗褐色シルト質粘土に焼性の良い焼土が大ブロック状に入る　中近世？）



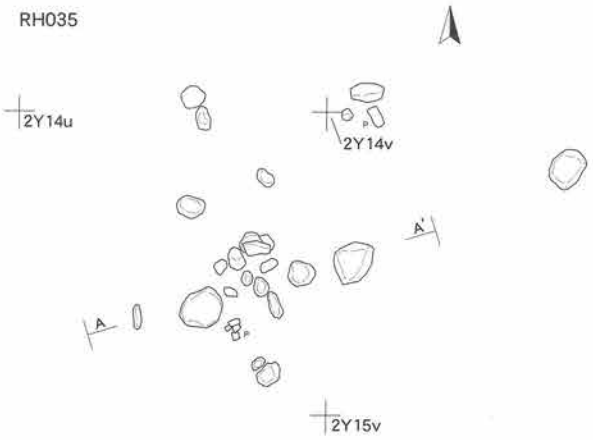
ＲＦ009（８号焼土）Ａ－Ａ'・Ｂ－Ｂ'
1　10ＹＲ2/3　黒褐色粘土質シルト　粘性やや強　締りやや粗　径５㎜程の炭化粒20%程混入
2　2.5ＹＲ6/8　橙色焼土　粘性弱　締り密　焼き締まった大きさ５㎜程の焼成粘土塊10%程混入
3　10ＹＲ3/4　暗褐色粘土質シルト　粘性やや強　締りやや粗　５㎜程の小礫を20%程・５㎜程の炭化粒10%程・３㎜程の橙色焼土粒10%程混入
4　10ＹＲ3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや粗　５～10㎜程の小礫を10%程・３㎜程の炭化粒５%程混入

第53図　ＲＦ004～010 焼土・炉跡

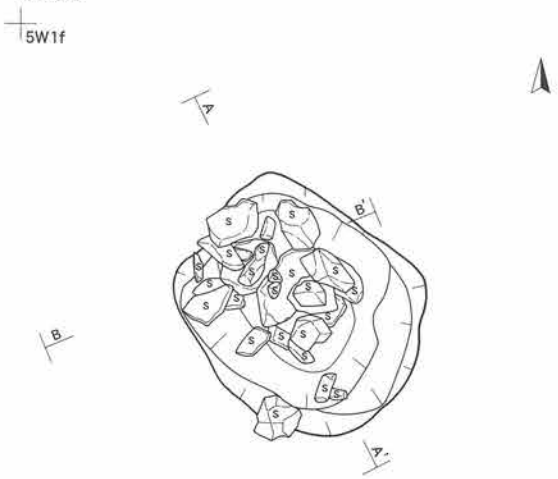
RH033



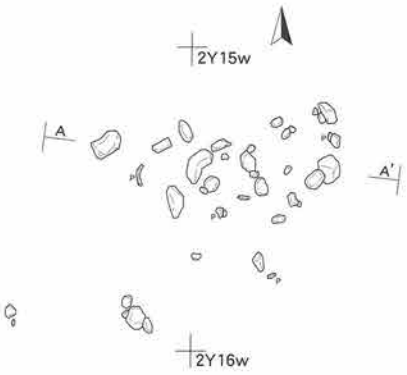
RH035

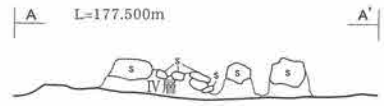


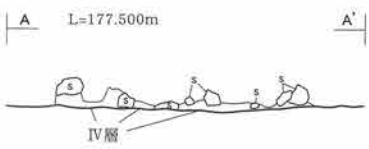
RH034



RH036







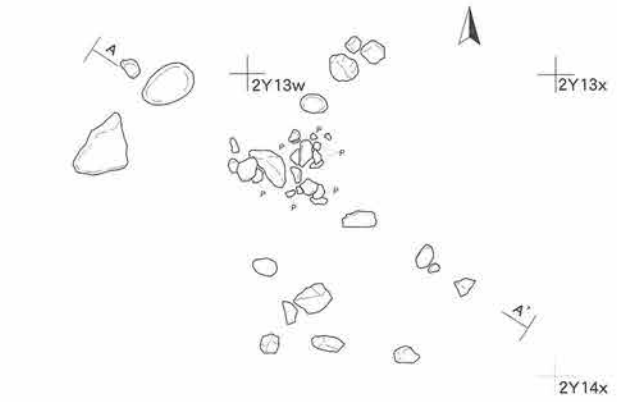
RH033（1号立石）　A－A'
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性中　締りやや疎
2　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや強　締り密　黄褐色粘土20%混入

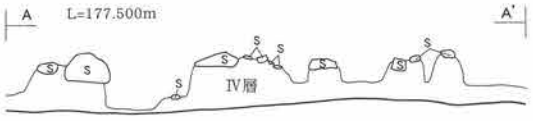
RH034（1号集石）　A－A'・B－B'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック3%・炭化物（φ1～3㎜）1%未満混入（人為堆積か）
2　10YR3/2暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック10～15%・炭化物（φ1～3㎜）1%混入（※人為堆積か）

0　1:50　2m

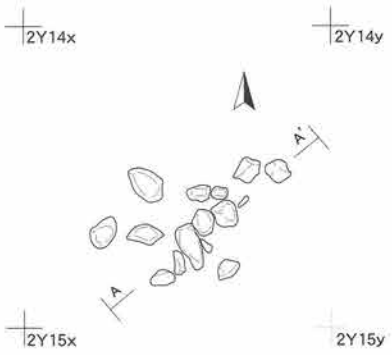
第54図　RH033～036 立石・集石

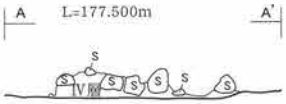
RH037



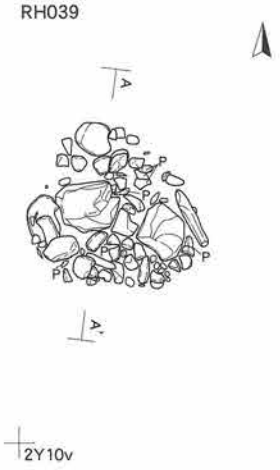


RH038

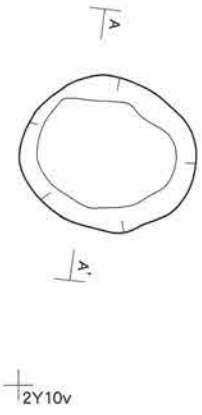


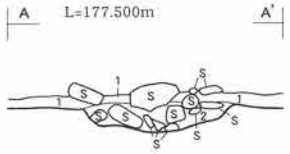


RH039



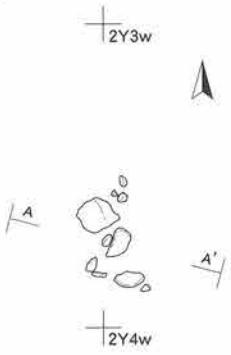
RH039 下部土坑



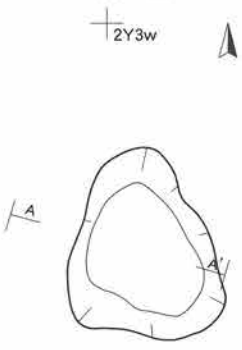


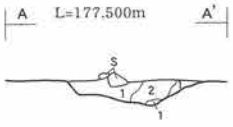
RH039（6号集石）下部土坑　A－A'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや緻（※基本層序Ⅳ層系）
2　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締り中（※下部土坑）

RH040

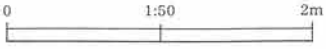


RH040 下部土坑

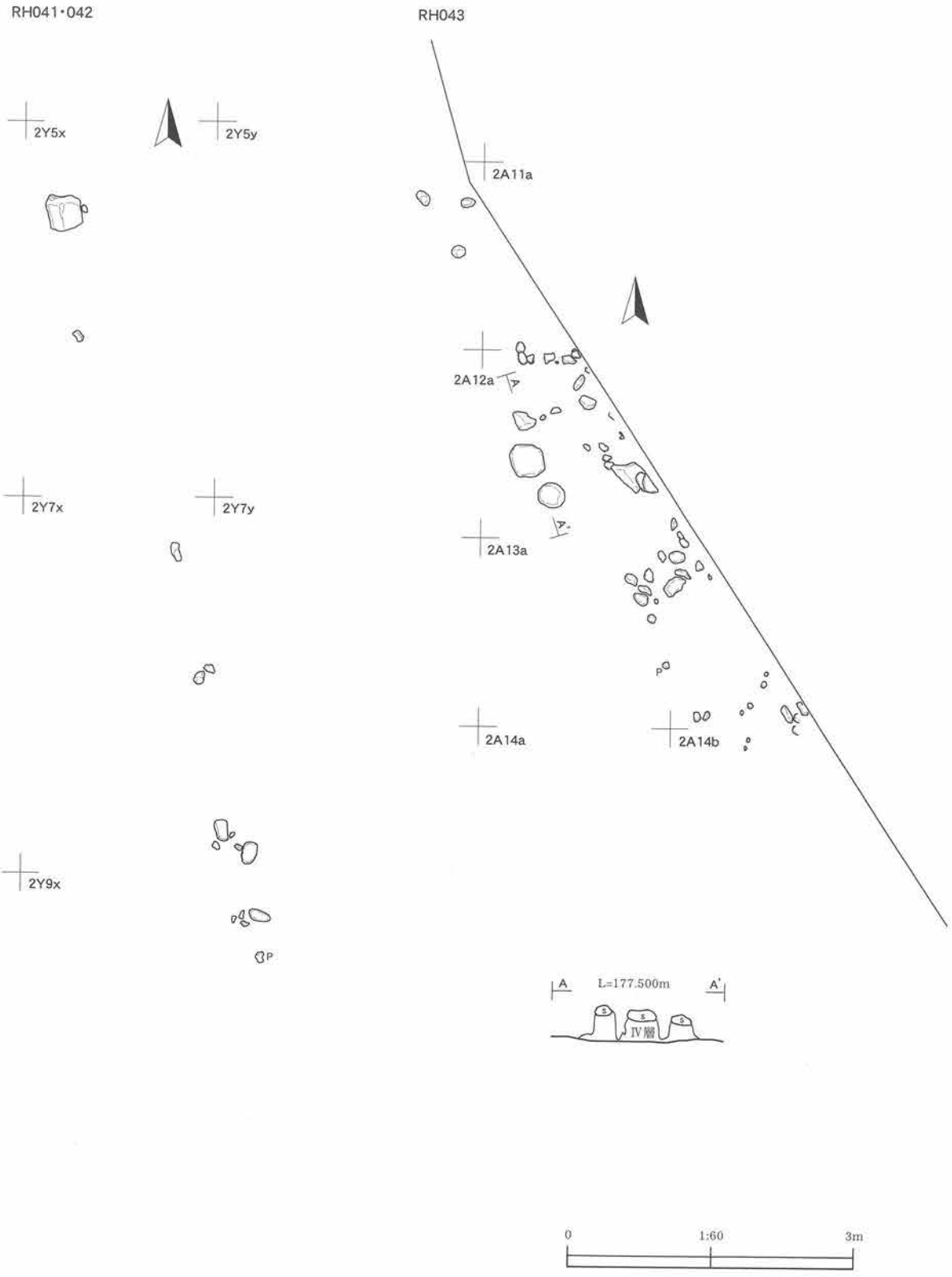




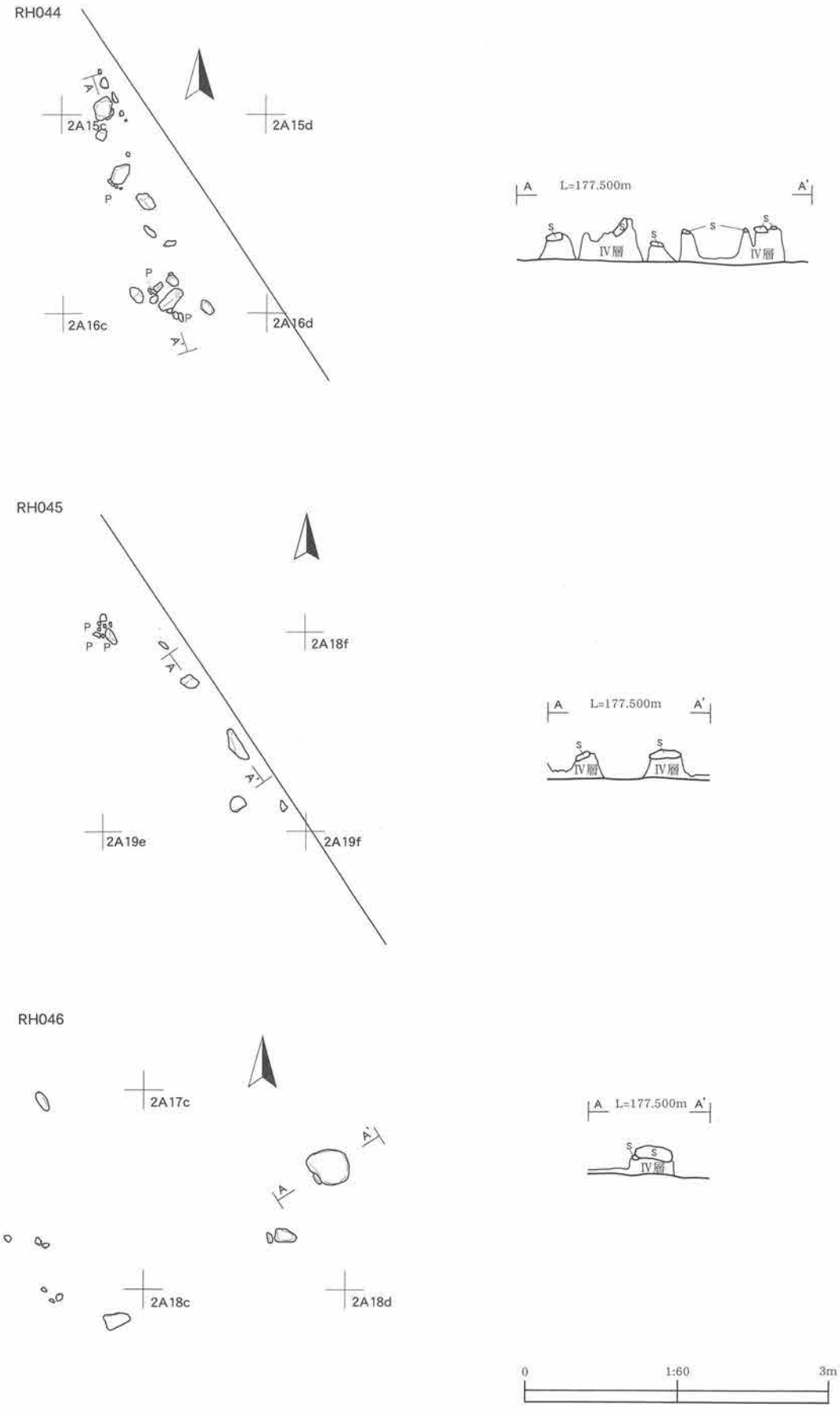
RH040（8号集石）下部土坑　A－A'
1　10YR2/2黒褐色粘土　粘性やや強　締りやや密
2　10YR2/1黒色シルト　粘性やや強　締りやや密



第55図　RH037～040 集石

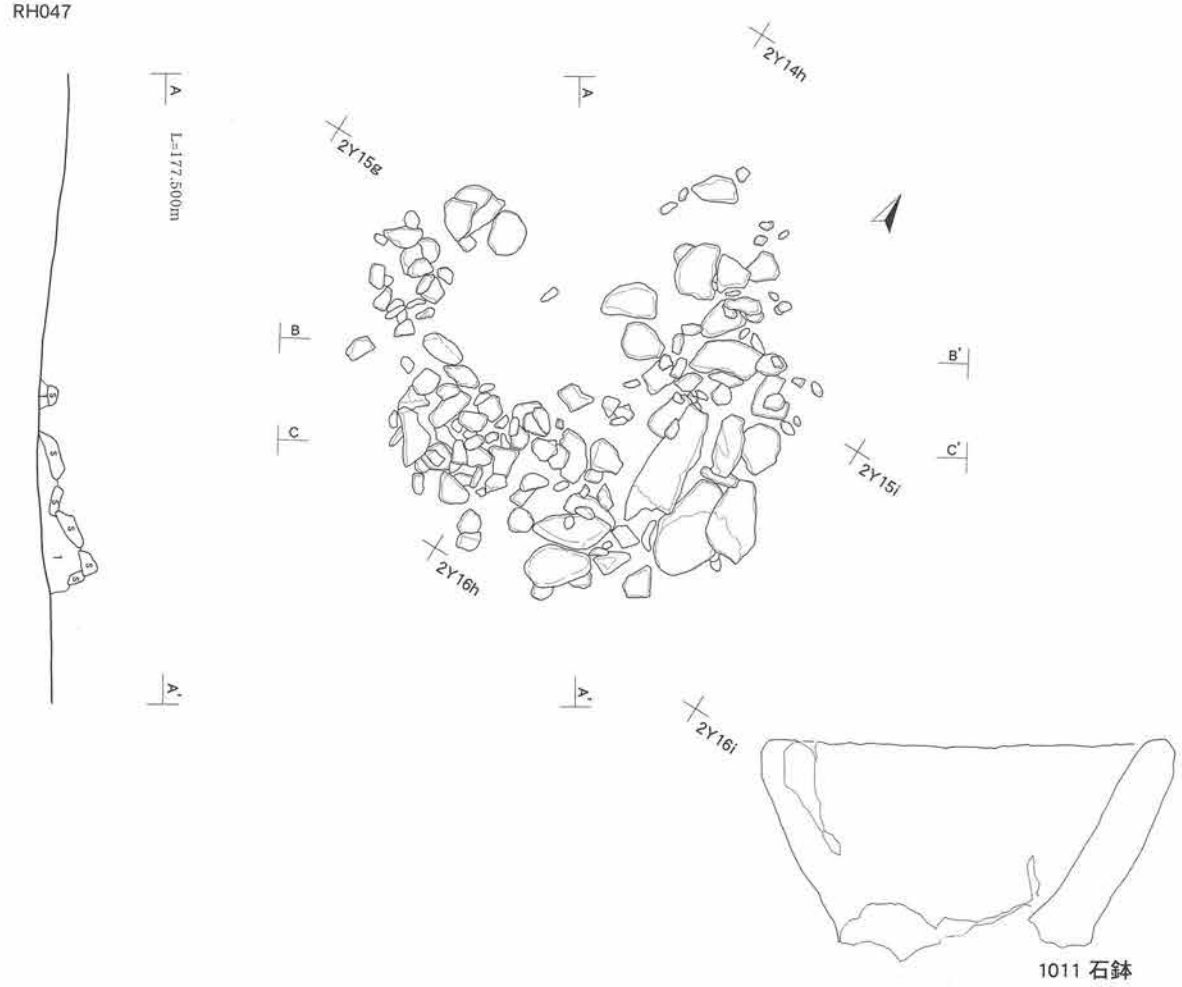


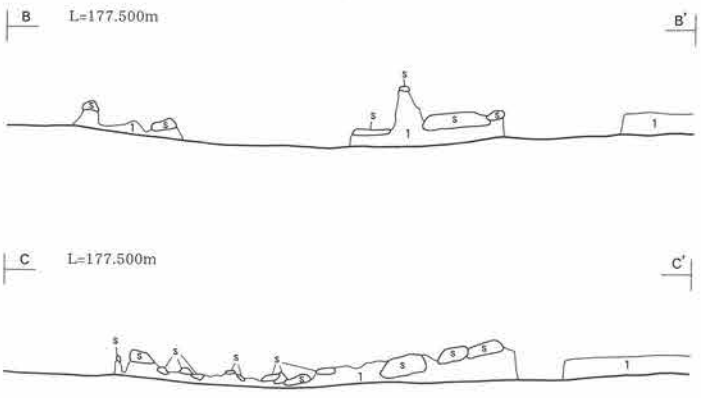
第56図　ＲＨ041～043 集石



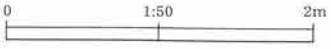
第57図　ＲＨ044～046 集石

RH047



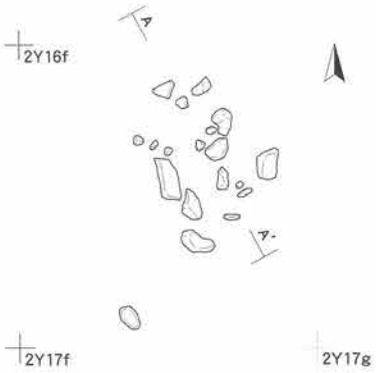


RH047（7号集石）　A－A'
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締り疎（※基本層序Ⅳ層系）

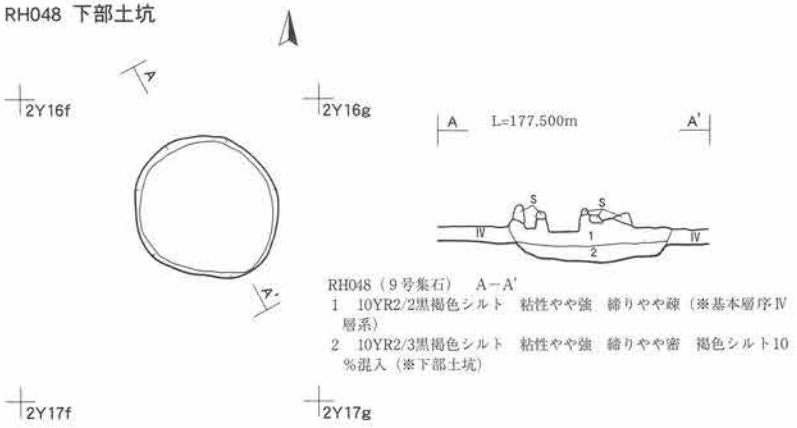


第58図　RH047 集石

RH048

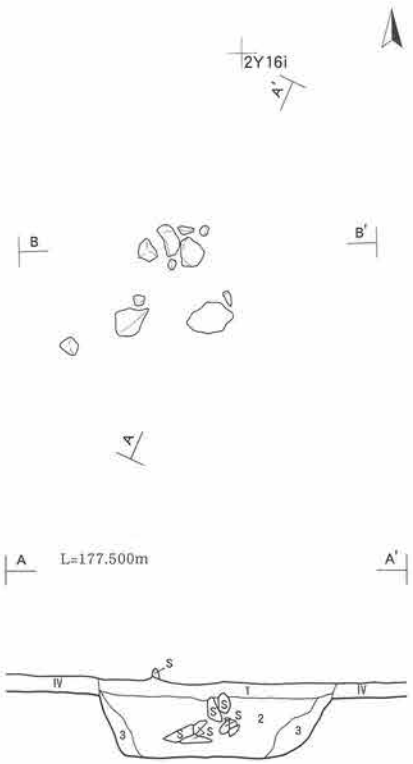


RH048 下部土坑

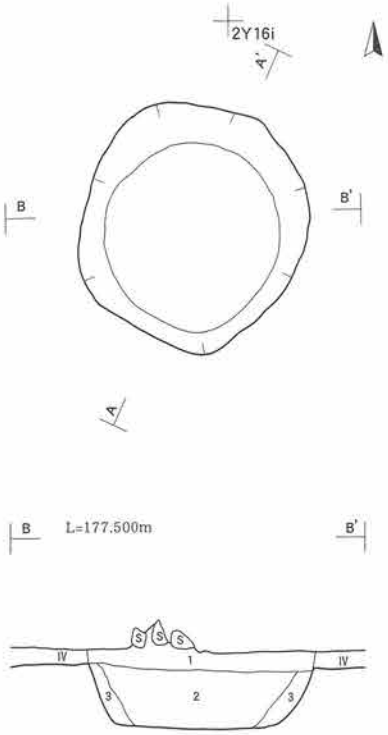


RH048（9号集石）　A－A'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや疎（※基本層序Ⅳ層系）
2　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　褐色シルト10％混入（※下部土坑）

RH049

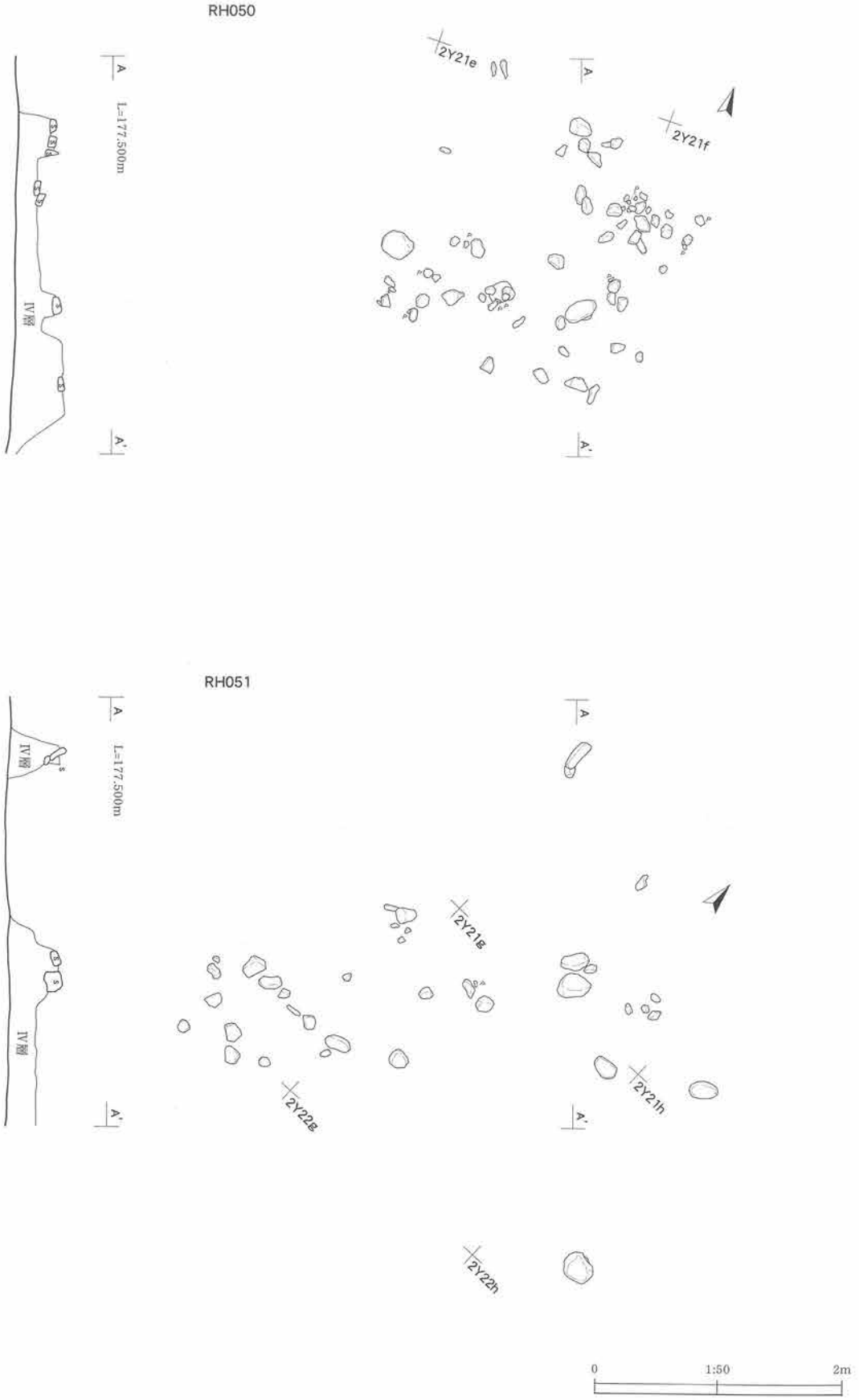


RH049 下部土坑



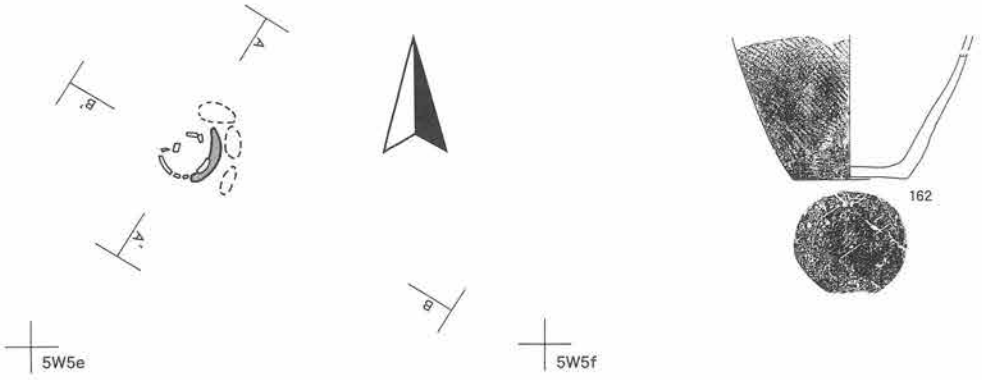
RH049（10号集石）　A－A'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや疎（※基本層序Ⅳ層系）
2　10YR2/2黒褐色シルト　粘性強　締りやや密　黄褐色粘土ブロック3～10％混入（※下部土坑）
3　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締り密　黄褐色粘土ブロック15％混入（※下部土坑）

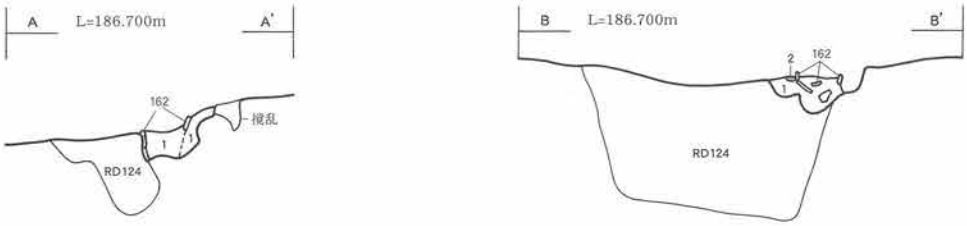
第59図　RH048・049 集石



第60図　ＲＨ050・051 集石

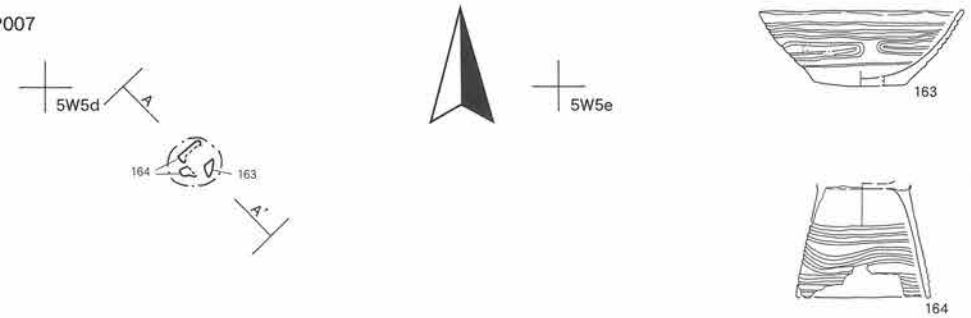
RP006

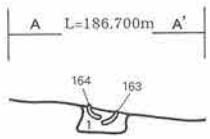




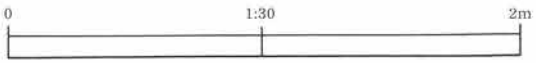
ＲＰ006（１号埋設土器）　Ａ－Ａ'・Ｂ－Ｂ'
1　10ＹＲ3/4暗褐色シルト質粘土　粘性やや強　締り中
2　2.5ＹＲ5/8明赤褐色焼土　粘性やや弱　締り中

RP007

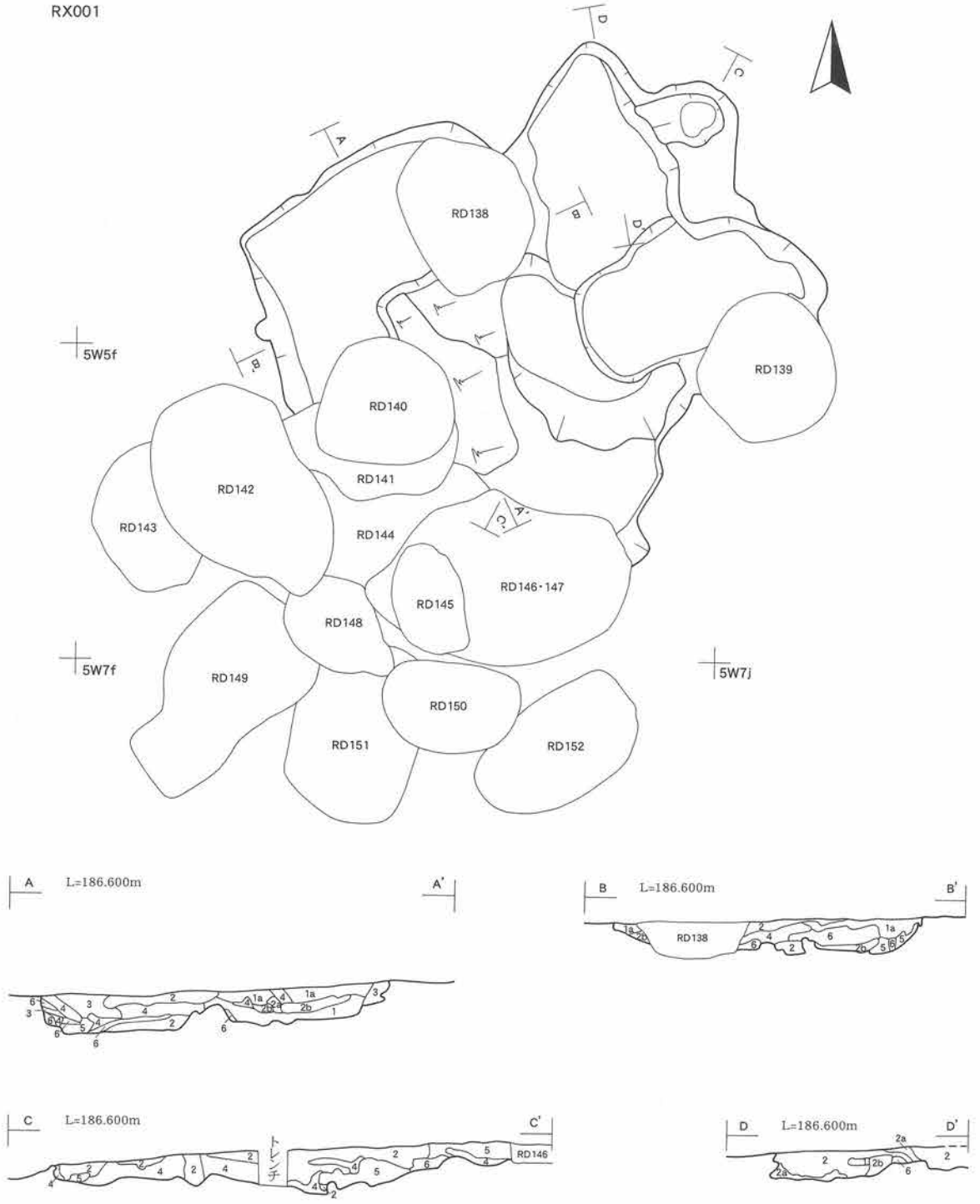




ＲＰ007（２号埋設土器）　Ａ－Ａ'
1　10ＹＲ4/6褐色砂質シルト　粘性やや弱　締り中（※埋設土器掘りかた）



第61図　ＲＰ006・007 埋設土器

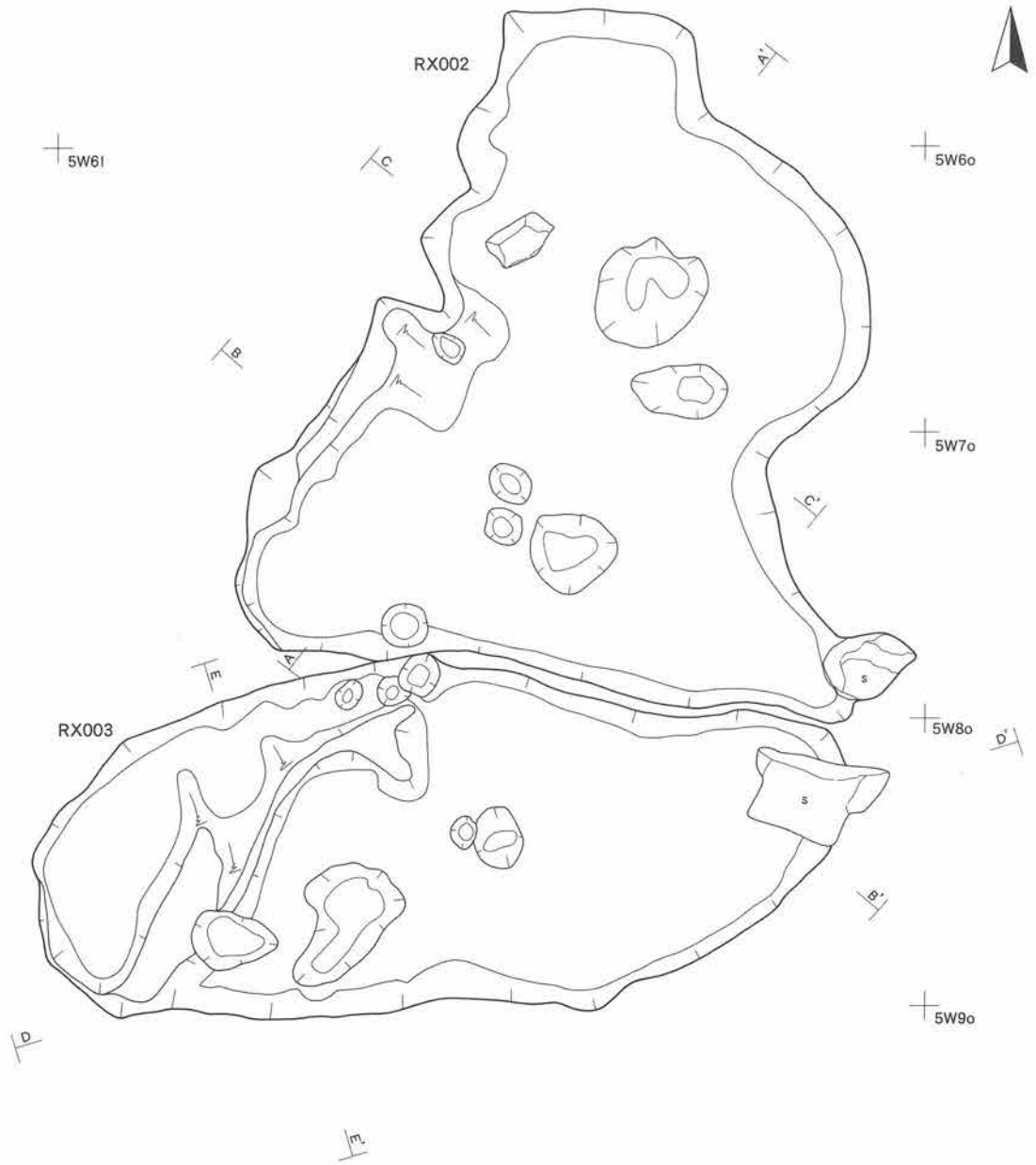


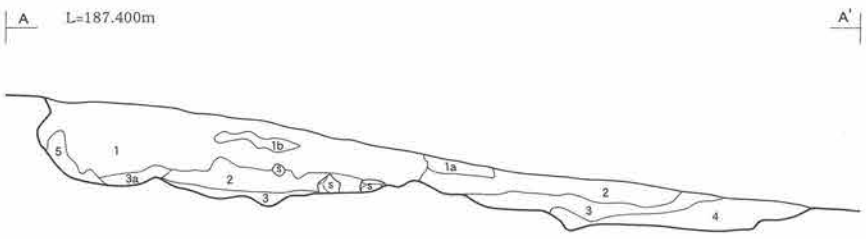
RX001（3号住）　A－A'・B－B'・C－C'・D－D'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性中　締り中
1a　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締り中
2　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締り中　黄褐色粘土2～5%・炭化物1%混入
2a　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや疎　黄褐色粘土10%混入
2b　10YR2/3黒褐色シルト　粘性中　締り中　明黄褐色粘土20～30%混入
3　10YR2/1黒色シルト　粘性やや弱　締りやや密　オレンジパミス（粒径1㎜程・生出パミス？）2%混入
4　10YR3/3暗褐色シルト　粘性中　締り中　黄褐色粘土15%混入
5　10YR4/6褐色シルト質粘土　粘性中　締りやや疎　黄褐色粘土5～10%混入
6　10YR5/8黄褐色粘土　粘性やや強　締りやや密　黒褐～暗褐色シルト10～20%混入

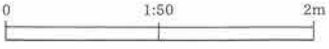
0　1:80　4m

第62図　RX001 土取り穴

RX002・003

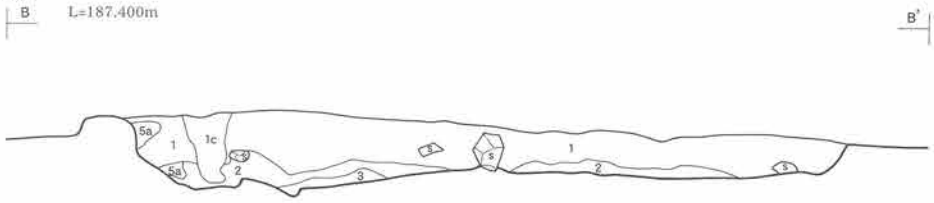


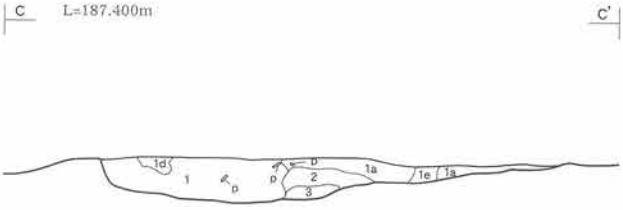




第63図　ＲX002・003 土取り穴（１）

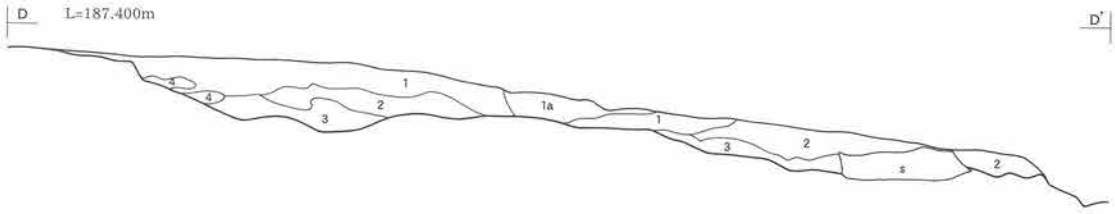
RX002

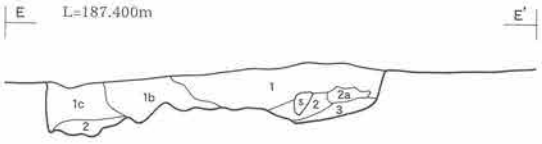




RX002（2号土取り穴）　A－A'・B－B'・C－C'
1　10YR2/1黒色シルト　粘性やや強　締りやや疎
1a　10YR2/1黒色シルト　粘性やや強　締り中
1b　10YR4/3にぶい暗褐色粘土　粘性やや強　締りやや密
1c　10YR2/1黒色シルト　粘性やや強　締りやや疎
1d　10YR5/6黄褐色粘土　粘性やや強　締り中　黒褐色シルト10%混入（※地山の再堆積土）
1e　10YR5/6黄褐色粘土　粘性やや強　締りやや密　黒褐色シルト10%混入
2　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中
3　10YR3/3暗褐色粘土質シルト　粘性強　締りやや密
3a　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土20%混入
4　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや強　締り中　黄褐色粘土7%混入
5　10YR5/8黄褐色粘土　粘性強　締り密　黒褐色シルト5%混入（※地山の再堆積土）
5a　10YR5/4にぶい黄褐色粘土　粘性やや強　締りやや密　黒褐色シルト10%混入

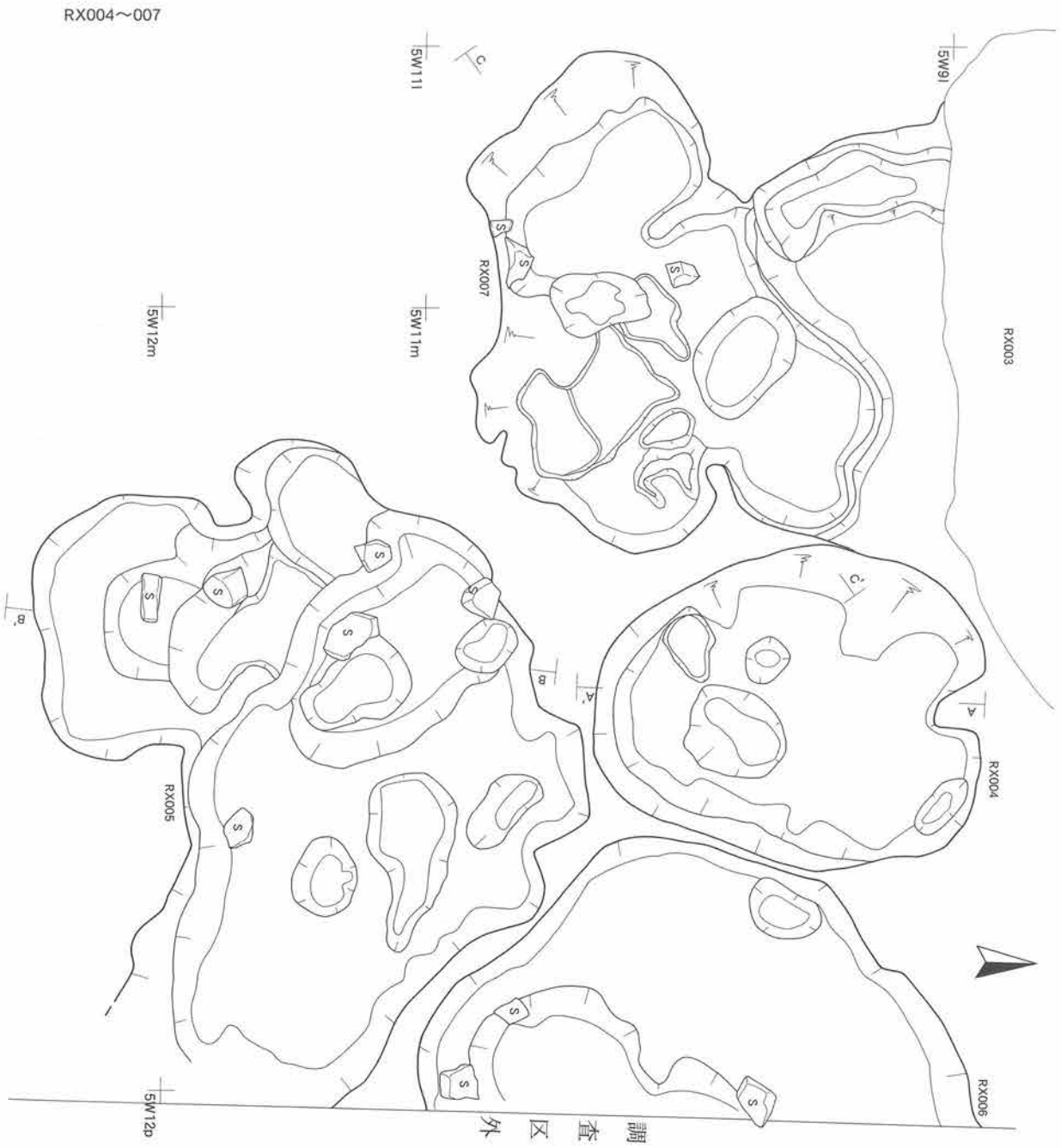
RX003





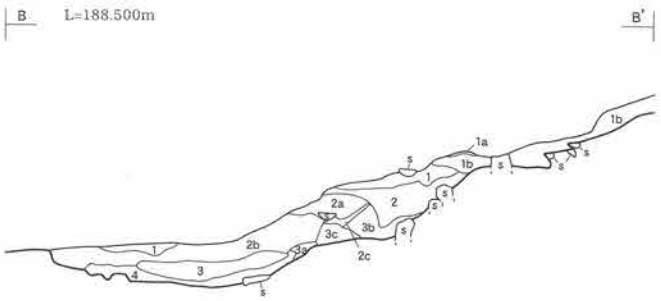
RX003（3号土取り穴）　D－D'・E－E'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中　黄褐色粘土3%混入
1a　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土10%混入
1b　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締り中　黒褐色粘土ブロック7%混入
1c　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中
2　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締り中　黄褐色粘土ブロック10%混入
2a　10YR3/4暗褐色シルト　粘性強　締りやや密　黄褐色粘土15%混入
3　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締り中
4　10YR6/6明黄褐色粘土　粘性強　締り密（※地山の再堆積土）

第64図　RX002・003 土取り穴（2）



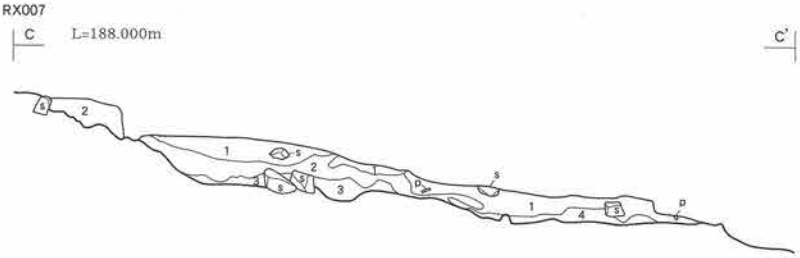
第65図　RX004～007 土取り穴

RX005

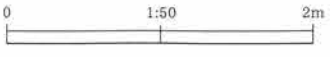


ＲＸ005（５号土取り穴）　Ｂ－Ｂ'
1　10ＹＲ2/1黒色シルト　粘性やや強　締りやや疎
1ａ　10ＹＲ5/6黄褐色粘土　粘性強　締り中
1ｂ　10ＹＲ4/3にぶい黄褐色粘土　粘性やや強　締りやや密
1ｃ　10ＹＲ3/4暗褐色粘土　粘性やや強　締りやや密
2　10ＹＲ3/3暗褐色シルト　粘性強　締りやや密　黄褐色粘土７％混入
2ａ　10ＹＲ2/1黒色シルト　粘性やや強　締り中　黄褐色粘土小ブロック（φ２㎜）５％・オレンジパミス？（径１㎜　生出？）１％混入
2ｂ　10ＹＲ2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土10％混入
2ｃ　10ＹＲ3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　黄褐色粘土７％混入
3　10ＹＲ2/3黒褐色シルト　粘性やや強　締り中　黄褐色粘土７％混入
3ａ　10ＹＲ6/6明黄褐色粘土　粘性やや強　締りやや密　褐色シルト20％混入
3ｂ　10ＹＲ3/3暗褐色シルト　粘性中　締りやや密　黄褐色粘土７％混入
3ｃ　10ＹＲ6/6明黄褐色粘土　粘性やや強　締り密　暗褐色シルト30％混入
4　10ＹＲ2/2黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや疎
5　10ＹＲ6/6黄褐色粘土　粘性やや強　締り密（※地山粘土層）

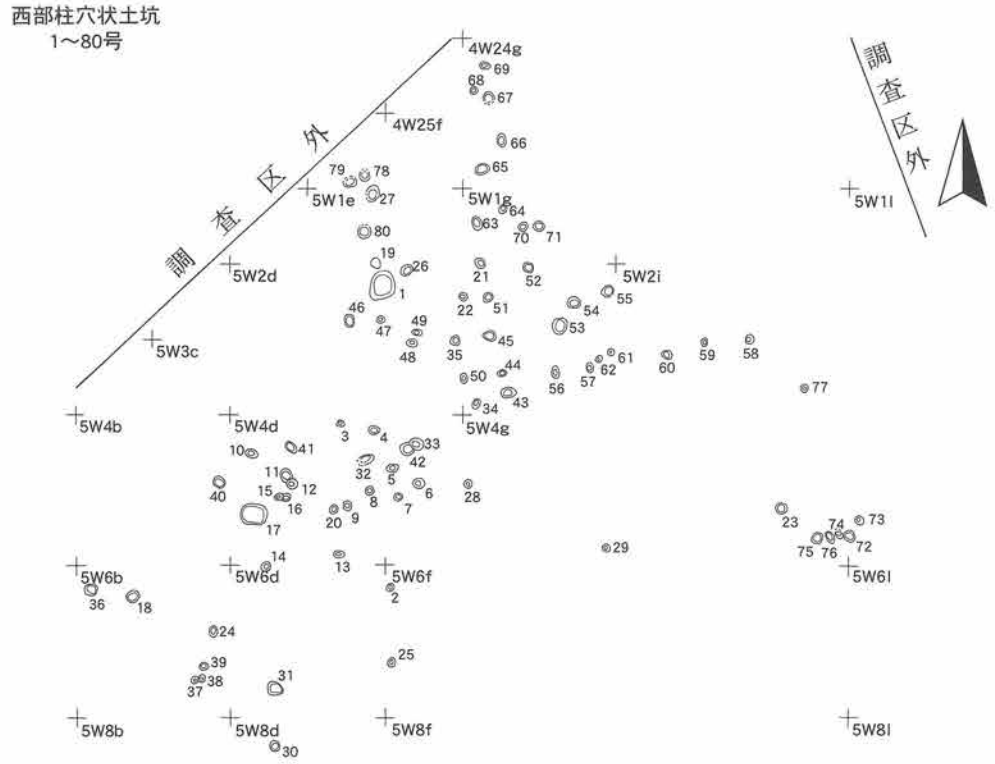
RX007

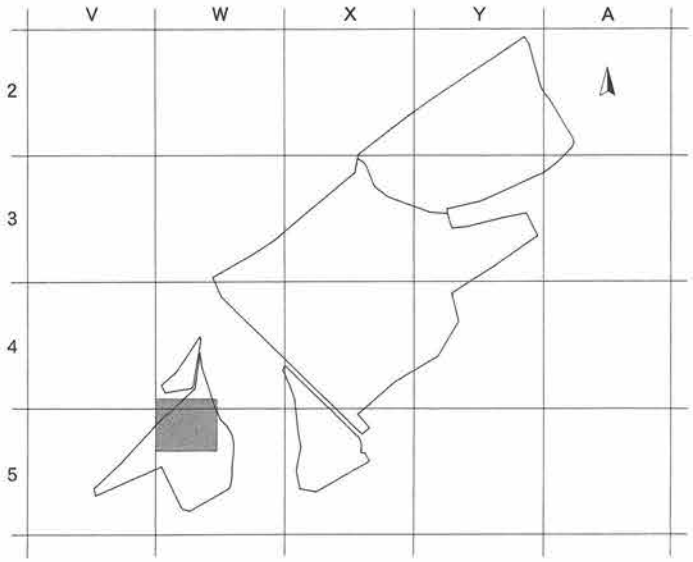


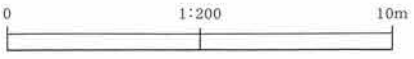
ＲＸ007（７号土取り穴）　Ｃ－Ｃ'
1　10ＹＲ2/3黒褐色シルト　粘性中　締りやや疎　明黄褐色粘土７％混入
2　10ＹＲ3/3暗褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　明黄褐色粘土ブロック20％混入
3　10ＹＲ4/4褐色粘土質シルト　粘性やや強　締りやや密　明黄褐色粘土30％混入（※褐色と黄褐色が混ざる）
4　10ＹＲ2/3黒褐色粘土質シルト　粘性やや強　締り中　明黄褐色粘土10％混入



第66図　ＲＸ005・007 土取り穴

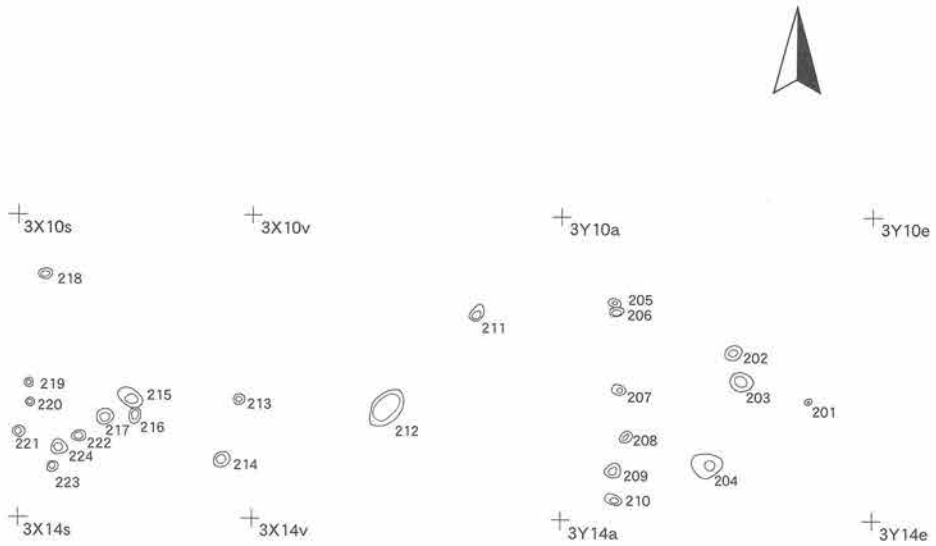


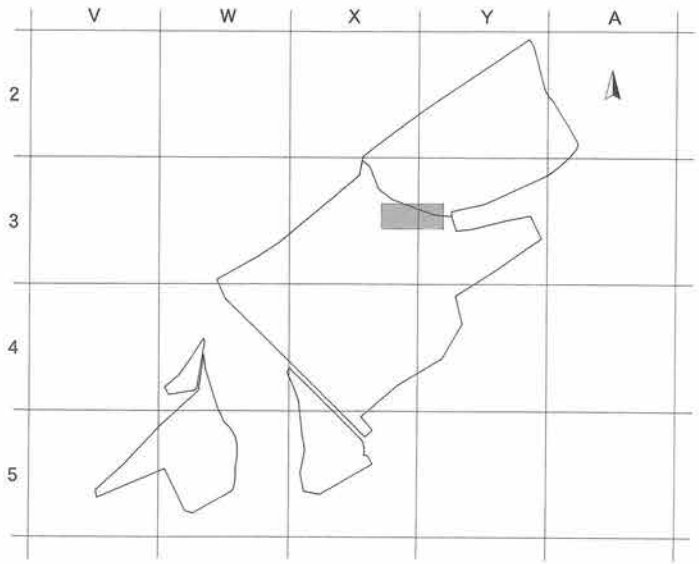


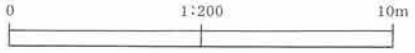


第67図　西部柱穴状土坑

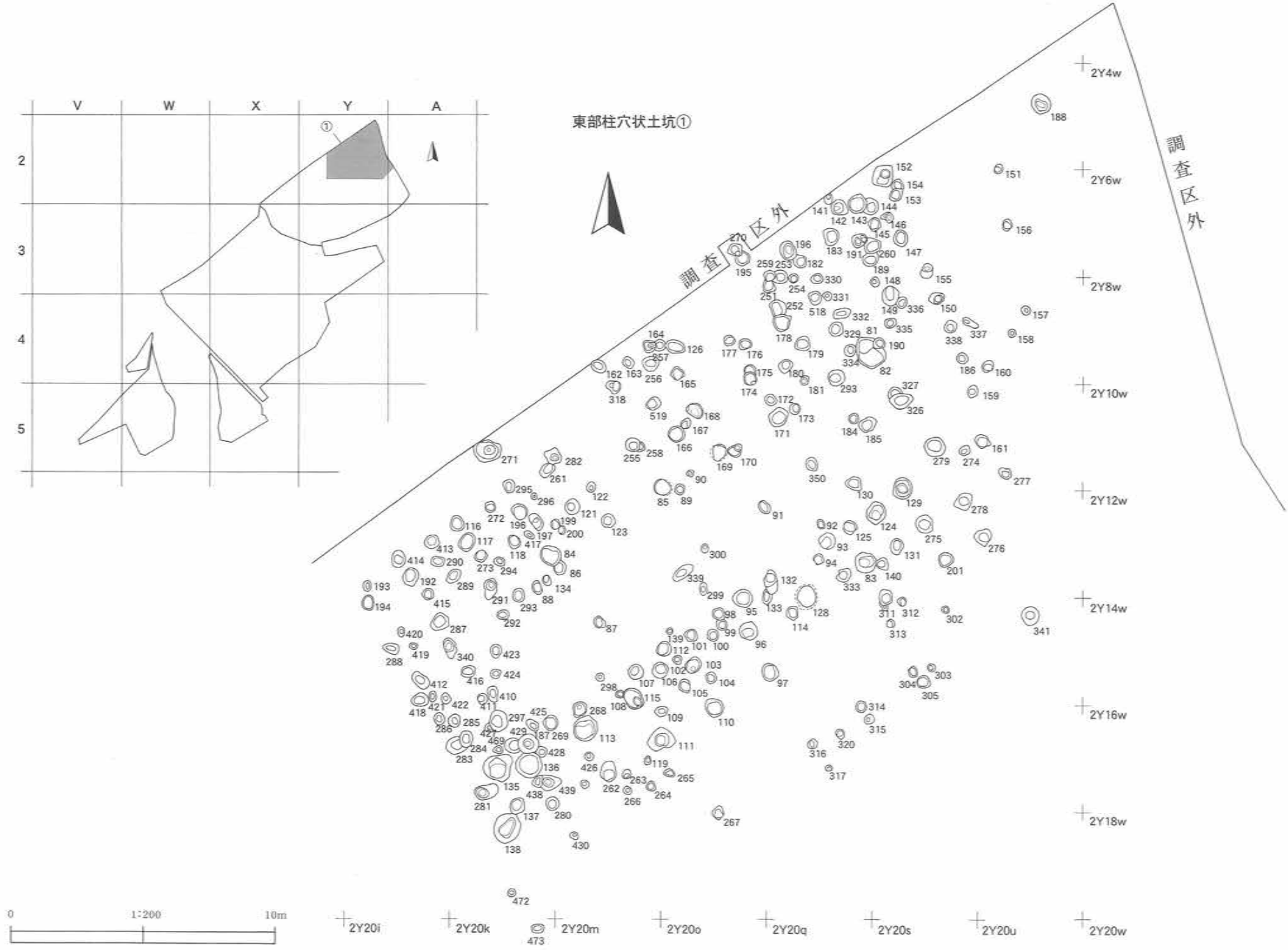
中央部柱穴状土杭
201～224号





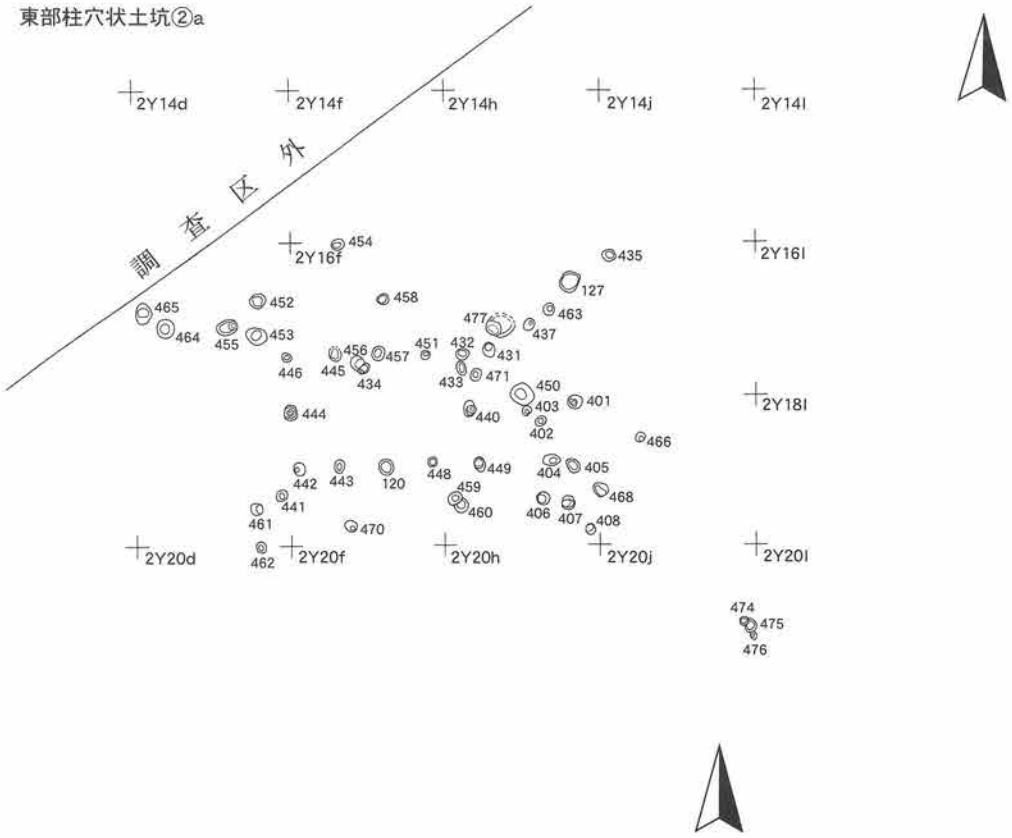


第68図　中央部柱穴状土坑

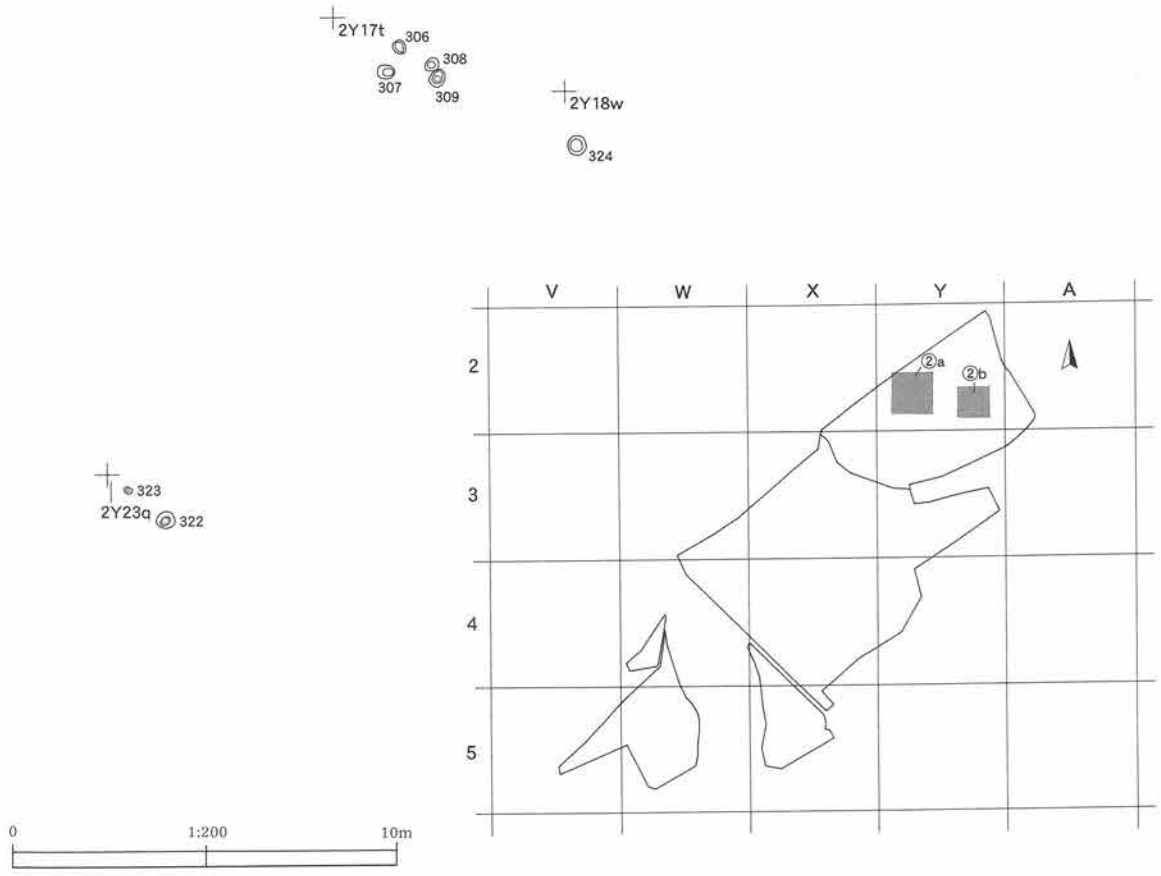


第69図　東部柱穴状土坑（1）

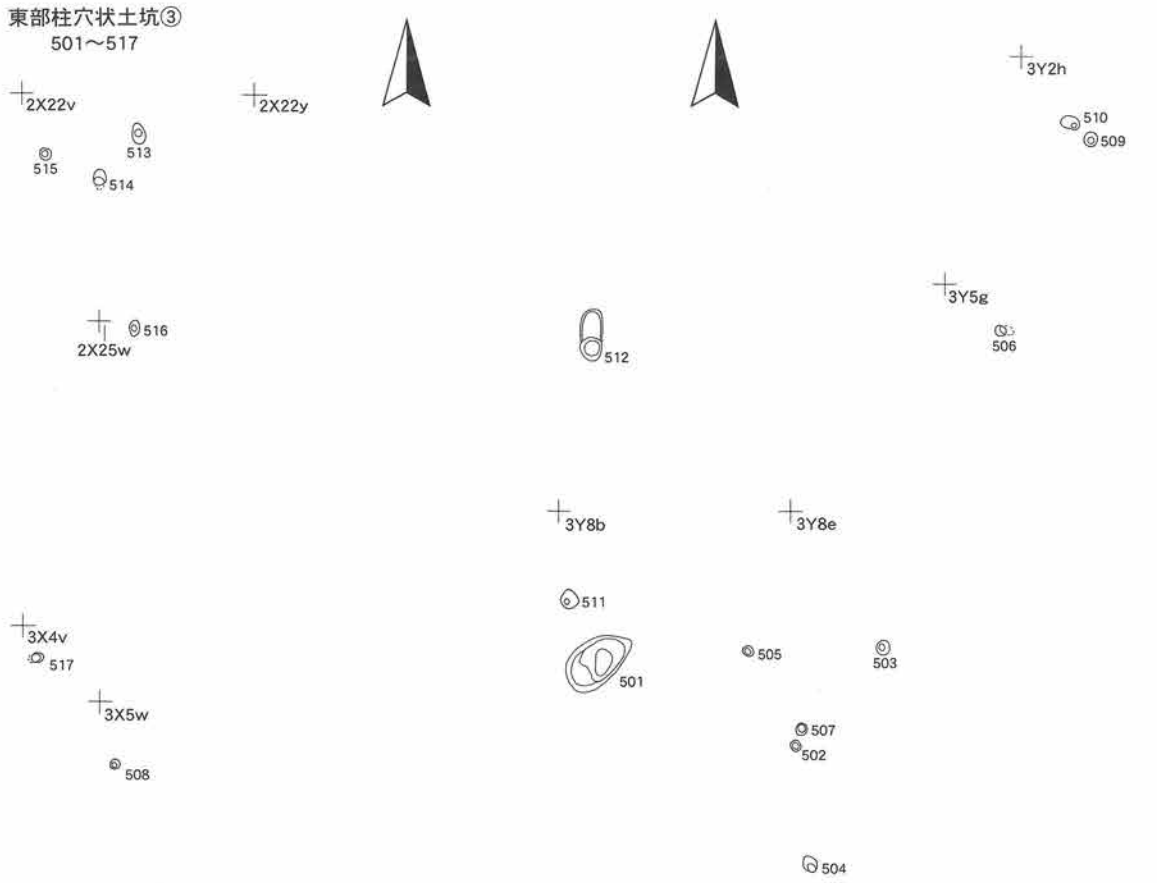
東部柱穴状土坑②a

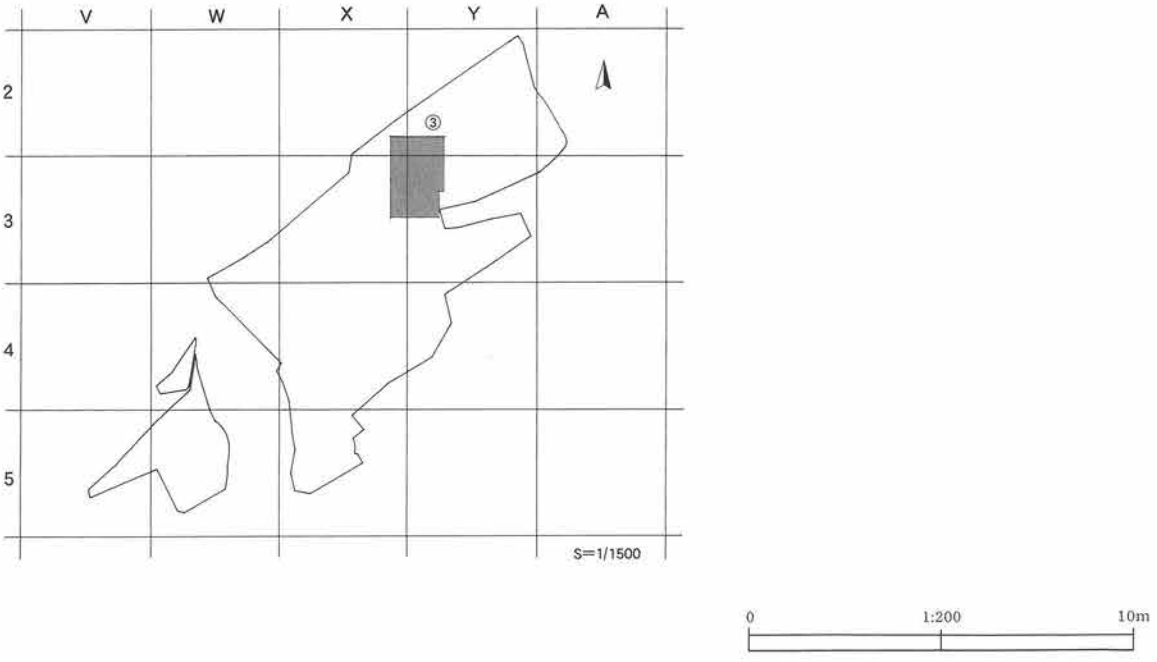


東部柱穴状土坑②b

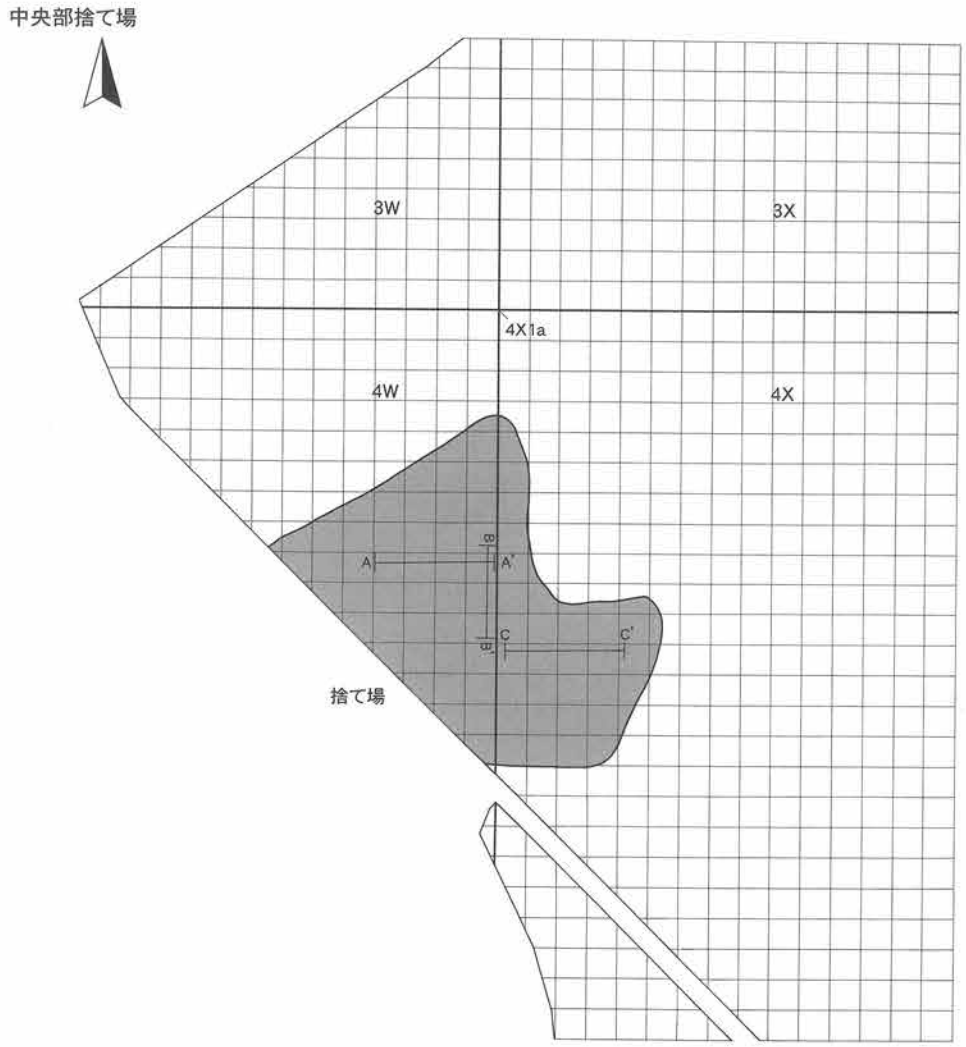


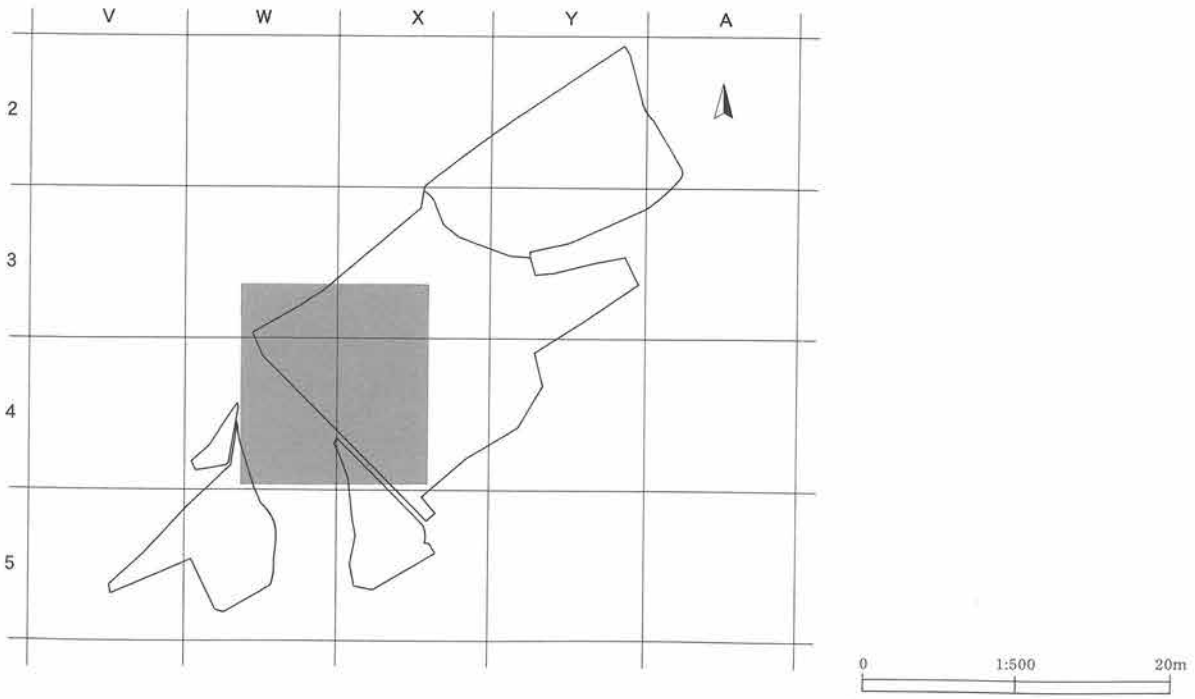
第70図　東部柱穴状土坑（2）



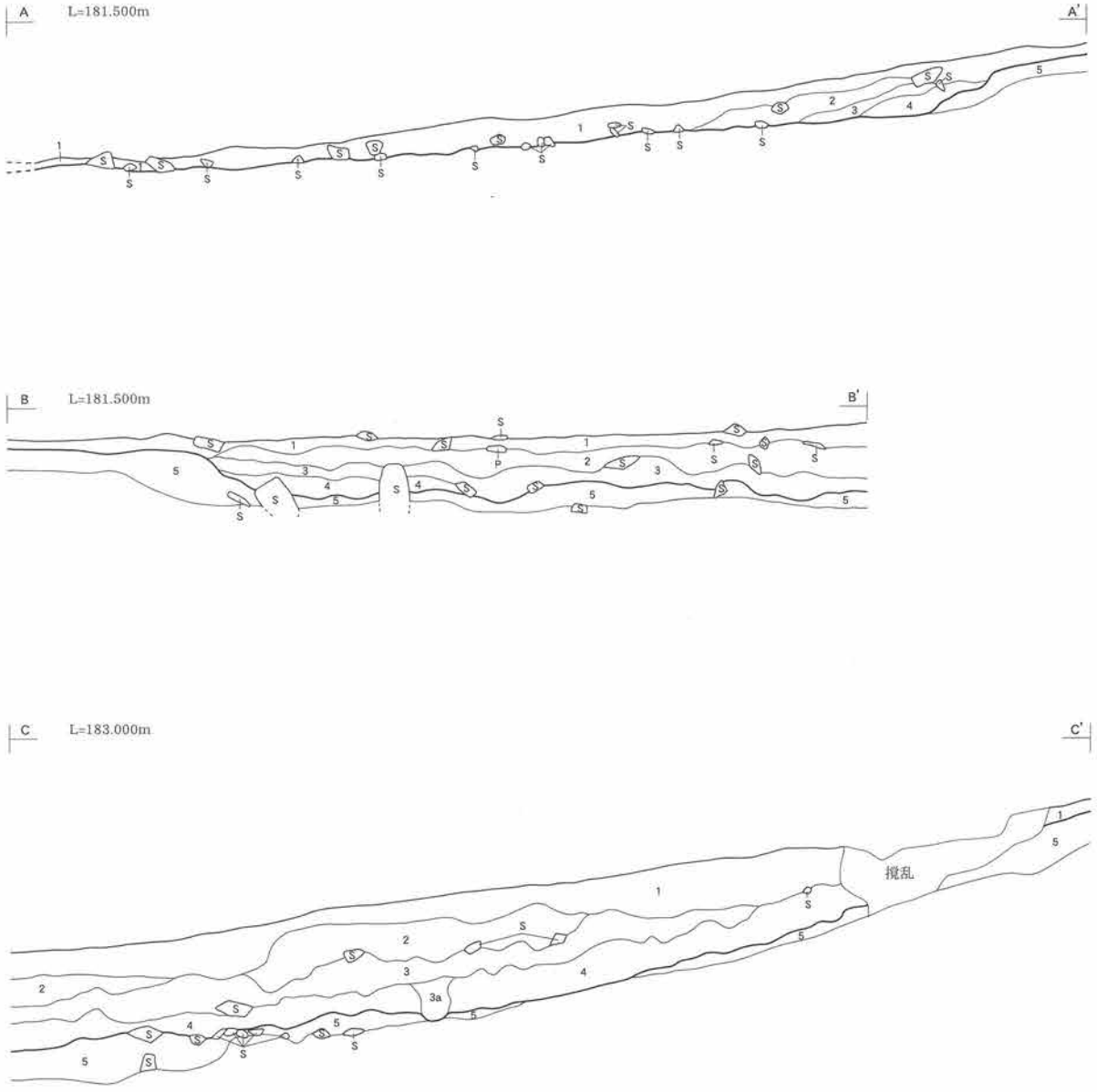


第71図　東部柱穴状土坑（３）





第72図　中央部捨て場（1）



調査区中央部捨て場　A－A'・B－B'・C－C'
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや弱　締りやや疎　角礫（φ3㎜～30cm程）3～15%混入
2　10YR2/1～2/2黒～黒褐色シルト　粘性やや強　締りやや密　角礫（φ1～10cm程）2%混入
3　10YR2/3～3/3黒褐～暗褐色シルト質粘土　粘性やや強　締りやや密　オレンジ（7.5YR5/6明褐色）パミス（φ1～2㎜程）1%・角礫（φ2～10㎜）2%混入（※早期の土器片含む）
3a　10YR2/3黒褐色シルト質粘土　粘性やや強　締りやや密　オレンジパミス（φ1㎜程）1%・角礫（φ2～20㎜程）1%混入
4　10YR3/4暗褐色シルト質粘土　粘性やや強　締りやや密　オレンジ（7.5YR5/6明褐色）パミス（φ1～2㎜程）2%・角礫（φ2～20㎜程）2～3%混入
5　10YR4/6褐色粘土　粘性やや強　締り密　角礫（φ2㎜～30cm程）3%混入（※地山）

0　1:50　2m

第73図　中央部捨て場（2）

第３表　竪穴住居跡一覧表

遺構名	旧遺構名	調査区	時期	位置	長軸方向	平面形	規模				炉	柱穴(個)	付属施設	備考
							長(m)	短(m)	壁高(cm)	床面積(㎡)				
ＲＡ003	13号住	南西部	早期中葉(明神裏Ⅲ式)	５Ｘ13ｉ	南－北	隅丸長方形	(5.30)	(3.10)	28		なし	15	壁柱穴、壁溝	
ＲＡ004	８号住	南西部	前期後葉(大木5式)	５Ｘ９ｏ	南－北	隅丸長方形	(4.20)	(2.94)	10		なし	20	壁柱穴	埋土上にＲＦ001・002・003
ＲＡ005	９号住	南西部	前期前葉(大木2式)	５Ｘ８ｊ	北西－南東	卵形	(6.82)	4.40	12～40		地床炉１、焼土２	13	土坑１、壁柱穴	埋土上にＲＦ005、１回以上の建て替えあり
ＲＡ006	12号住	南西部	前期後葉(大木5式)	５Ｘ５ｊ	北西－南東	隅丸方形	(3.28)	2.58	10～22		なし	3	壁溝	床面に焼土、炭化材の広がりあり
ＲＡ007	７号住	南西部	前期後葉(大木5式)	５Ｘ２ｈ	東－西	隅丸方形	(3.80)	3.48	12～24		地床炉１	4	床面有段、土坑1、壁柱穴、壁溝	
ＲＡ008	16号住	西部	前期後葉？	４Ｗ23ｈ	南－北	隅丸長方形	(4.70)	(3.30)	南20 西10		地床炉１	20		
ＲＡ009	15号住	西部	中期	４Ｗ19ｅ	北東－南西	不整楕円形	3.3以上	5.1前後	—		焼土３	20		
ＲＡ010	６号住	西部	中期末葉(大木10式)	４Ｗ20ｄ	南－北	多角形	5.24	(4.80)	東45		複式炉２、焼土１	24	棚状施設	焼失住居、土屋根
ＲＡ011	10号住	西部	中期末葉	５Ｗ６ｈ	北西－南東	多角形	(6.94)	(6.24)	20		複式炉１	4	土坑１、壁溝２	２回以上の建て替えあり
ＲＡ012	２号住	西部	中期末葉	５Ｗ３ｂ	北西－南東	多角形	(5.00)	(4.50)	35		複式炉１	7	土坑2、壁溝3、棚状施設	２回以上の建て替えあり
ＲＡ013	14号住	西部	中期後～末葉	５Ｗ３ｃ	北東－南西	不明	4～5		12		複式炉２	6		炉の作り替えあり
ＲＡ014	４号住	西部	中期末葉	５Ｖ５ｙ	—	不明	3前後		18～20		なし	10		
ＲＡ015	５号住	西部	中期末葉	５Ｖ６ｘ	—	不明	4以上		20～35		なし	1	壁溝	
ＲＡ016	11号住	西部	中期？	５Ｖ７ｗ	—	不明	5以上		15		なし	1	壁溝	
ＲＡ017	１号住	西部	中期末葉	５Ｗ７ａ	北東－南西	多角形	3.90	3.80	15		複式炉	3	土坑１	炉は２回作り替えあり

第４表　土坑一覧表

遺構名	旧遺構名	調査区	位置	主軸方向	平面形	開口部径（m）	深さ（m）	断面形	付属施設	備考
ＲＤ103	30号土坑	南西部	５Ｘ13ｈ	Ｎ－53°－Ｅ	不整円形	180×144	70	Ａ－３	なし	
ＲＤ104	26号土坑	南西部	５Ｘ10ｎ	Ｎ－13°－Ｅ	円形	96×90	18	Ａ－３	なし	
ＲＤ105	27号土坑	南西部	５Ｘ11ｎ	Ｎ－９°－Ｗ	不整楕円形	70×40	34	Ｃ	なし	
ＲＤ106	28号土坑	南西部	５Ｘ９ｏ	Ｎ－47°－Ｗ	楕円形	68×62	38	Ｃ	なし	
ＲＤ107	23号土坑	南西部	５Ｘ８ｏ	Ｎ－18°－Ｗ	楕円形	92×86	54	Ａ－１	なし	
ＲＤ108	24号土坑	南西部	５Ｘ８ｎ	Ｎ－76°－Ｅ	楕円形	(116)×62	42	Ｃ	なし	
ＲＤ109	25号土坑	南西部	５Ｘ８ｎ	Ｎ－63°－Ｗ	円形	96×82	42	Ａ－２	なし	
ＲＤ110	12号土坑	南西部	５Ｘ４ｈ	Ｎ－15°－Ｅ	円形	166×166	56	Ａ－３	副穴１	
ＲＤ111	29号土坑	南西部	５Ｘ２ｆ	Ｎ－３°－Ｅ	円形	132×124	44	Ａ－３	副穴１	
ＲＤ112	54号土坑	西部	４Ｗ24ｇ	Ｎ－33°－Ｅ	不整形	96×70	18	Ｄ	なし	
ＲＤ113	55号土坑	西部	４Ｗ24ｈ	Ｎ－42°－Ｅ	不整形	(156)×92	14	Ｄ	なし	
ＲＤ114	56号土坑	西部	４Ｗ25ｈ	Ｎ－７°－Ｅ	楕円形	(36)×28	18	Ｃ	なし	
ＲＤ115	57号土坑	西部	４Ｗ25ｇ	Ｎ－73°－Ｅ	長楕円形	224×86	12	Ｄ	なし	
ＲＤ116	48号土坑	西部	４Ｗ24ｆ	Ｎ－12°－Ｗ	円形	152×148	24	Ａ－３	小穴１	
ＲＤ117	53号土坑	西部	５Ｗ１ｅ	Ｎ－45°－Ｗ	楕円形	(62)×66	20	Ｃ	なし	
ＲＤ118	49号土坑	西部	４Ｗ25ｅ	Ｎ－48°－Ｗ	楕円形	(132)×148	36	Ｄ	なし	
ＲＤ119	９号土坑	西部	５Ｗ２ｃ	不明	不明	(148)×72	72	Ｂ	なし	
ＲＤ120	８号土坑	西部	５Ｗ１ｄ	不明	不明	(110)×(66)	66	Ｂ	なし	
ＲＤ121	７号土坑	西部	５Ｗ１ｄ	不明	不明	不明	66	Ｂ	なし	
ＲＤ122	10号土坑	西部	５Ｗ２ｃ	不明	不明	不明	不明	Ｂ	不明	
ＲＤ123	33号土坑	西部	５Ｗ３ｅ	Ｎ－１°－Ｗ	不整円形	82×76	54	Ｂ	なし	
ＲＤ124	34号土坑	西部	５Ｗ４ｅ	Ｎ－53°－Ｗ	不整楕円形	104×72	56	Ｄ	なし	

遺構名	旧遺構名	調査区	位置	主軸方向	平面形	開口部径（m）	深さ（m）	断面形	付属施設	備考
RD125	46号土坑	西部	5W4d	N－55°－W	不整楕円形	(194) ×122	10	D	小穴1	
RD126	35号土坑	西部	5W5c	N－62°－W	楕円形	114×86	70	A－1	なし	
RD127	36号土坑	西部	5W5d	N－21°－E	楕円形	110×92	84	A－1	なし	
RD128	37号土坑	西部	5W6e	N－35°－W	円形	(72) ×76	44	A－1	なし	
RD129	39号土坑	西部	5W6d	N－3°－W	楕円形	126×80	24	A－3	なし	
RD130	45号土坑	西部	5W6c	N－14°－E	楕円形	(86) ×(78)	20	A－3	なし	
RD131	51号土坑	西部	5W6c	N－33°－E	不整円形	66×62	30	C	なし	
RD132	52号土坑	西部	5W5b	N－0°（真北）	隅丸長方形	130×84	16		小ピット状の掘り込み	
RD133	5号土坑	西部	5V6y	N－74°－E	不整円形	68×56	36		なし	
RD134	1号土坑	西部	5V8v	N－33°－W	不整楕円形	134×106	36	E	なし	
RD135	11号土坑	西部	5W7b	N－28°－W	楕円形	92×64	48	D	なし	
RD136	47号土坑	西部	5W7b	N－38°－W	不整楕円形	100×45	58	A－2	なし	
RD137	2号土坑	西部	5W3j	N－6°－W	不整円形	176×176	48	E	なし	
RD138	22号土坑	西部	5W3h	N－53°－W	不整形	184×168	58	A－2	なし	
RD139	13号土坑	西部	5W4i	N－26°－E	不整円形	168×164	64	E	なし	
RD140	6号土坑	西部	5W5g	N－12°－W	不整形	156×156	74	E	なし	
RD141	19号土坑	西部	5W5g	N－75°－W	不整楕円形	216×(140)	50	E	なし	
RD142	20号土坑	西部	5W5f	N－30°－W	不整楕円形	288×196	50	E	なし	
RD143	21号土坑	西部	5W5f	不明	不明	不明	22	E	なし	
RD144	41号土坑	西部	5W5g	不明	不明	不明	32	E	なし	
RD145	31号土坑	西部	5W6h	N－10°－W	楕円形	148×116	26	D	なし	
RD146	43号土坑	西部	5W6h	N－81°－E	不整楕円形	284×228	60	E	なし	
RD147	32号土坑	西部	5W6h	不明	不明	不明	60	E	なし	
RD148	40号土坑	西部	5W6g	N－53°－W	不整楕円形	128×104	28	E	なし	
RD149	14号土坑	西部	5W6f	N－45°－E	不整形	272×164	40	E	なし	
RD150	44号土坑	西部	5W7g	N－74°－W	楕円形	168×116	56	E	なし	
RD151	42号土坑	西部	5W6g	N－25°－E	楕円形	224×156	28	E	なし	
RD152	50号土坑	西部	5W7h	N－60°－E	楕円形	224×148	24	E	なし	
RD153	4号土坑	西部	5W7h	不明	不明	不明	36	E	なし	
RD154	3号土坑	西部	5W2j	N－16°－W	不整円形	134×108	30	A－3	なし	
RD155	59号土坑	中央部	3X9m	N－1°－E	楕円形	122×122	60	A－2	なし	
RD156	62号土坑	東部	2Y18o	N－14°－E	楕円形	250×88	48	F	なし	
RD157	63号土坑	東部	2Y19o	N－45°－W	不整形	252×128	42	F	なし	
RD158	60号土坑	東部	2Y20l	N－42°－E	楕円形	138×116	50	A－2	なし	
RD159	65号土坑	東部	2Y22s	N－54°－E	楕円形	236×180	24	A－3	なし	
RD160	61号土坑	東部	2Y15i	N－83°－E	不整形	124×102	10	D	なし	
RD161	64号土坑	東部	2Y16f	N－36°－E	円形	132×124	30	A－3	小穴1	
RD162	66号土坑	東部	2Y17c	N－24°－W	長方形	136×96	30		なし	
RD163	58号土坑	東部	2Y14q	N－52°－E	不整形	340×166	96	F	なし	

第5表　竪穴建物跡一覧表

遺構名	旧遺構名	調査区	時期	位置	主軸方向	平面形	規模				柱穴	付属施設	備考
							長(m)	短(m)	壁高(cm)	床面積(㎡)			
RE002	17号住	東部	中近世	2Y12m	N－53°－E	長方形	4.50	3.64	6～10		18	炭化物集中範囲2箇所、壁溝	
RE003	18号住	東部	中近世	2Y10l	N－41°－W	長方形	4.76	4.08	8～20		35	壁溝	建替えの可能性あり

第6表　炉跡・焼土一覧表

遺構名	旧遺構名	調査区	位置	形状	焼土範囲（cm）	厚さ（cm）	焼土の様相	時期	備考
RF001	1号焼土	南西部	5X10o	不整形	104×54	4	現地性、焼成良	縄文前期後葉？	RA004より新しい
RF002	2号焼土	南西部	5X10p	楕円形	38×30	8	現地性、焼成良	縄文前期後葉？	RA004より新しい
RF003	3号焼土	南西部	5X10p	楕円形	42×32	4	現地性、焼成良	縄文前期後葉？	RA004より新しい
RF004	4号焼土	南西部	5X8j	不整形	60×46	12	二次堆積、焼成やや不良	縄文前期後葉？	
RF005	5号焼土	南西部	5X9i	不整楕円形	94×70	8	現地性、焼成良	縄文前期前葉	
RF006	1号炉跡	西部	5W2i		20×18	2	現地性、焼成良	縄文中期？	

遺構名	旧遺構名	調査区	位置	形状	焼土範囲（cm）	厚さ（cm）	焼土の様相	時期	備考
RF007	6号焼土	西部	4W18g	楕円形	40×20	5	現地性、焼成良	縄文中期？	
RF008	7号焼土	中央部	3X12t	不整形	50×34	6	現地性、焼成良	現代？	
RF009	8号焼土	東部	3Y11e	不整楕円形	364×148	8	現地性？、焼成不良	不明	
RF010	9号焼土	東部	2Y24a	楕円形	58×36	14	現地性？、焼成良	中・近世？	

第7表　立石・集石一覧表

遺構名	旧遺構名	調査区	時期	位置	規模		備考
					長（m）	短（m）	
RH033	1号立石	西部	後期初頭	5W5g	−	−	下部土坑あり
RH034	1号集石	西部	中期末葉	5W6g	100	100	下部土坑あり
RH035	2号集石	東部	後期中葉	2Y14u	3	2	
RH036	3号集石	東部	後期前葉	2Y15v	2	2	
RH037	4号集石	東部	後期初頭	2Y12v	3	2	
RH038	5号集石	東部	後期前葉	2Y14x	2	1	
RH039	6号集石	東部	後期初頭	2Y8v	110	100	下部土坑あり
RH040	8号集石	東部	後期初頭	2Y3v	1	1	下部土坑あり
RH041	11号集石	東部	後期	2Y5x	4		
RH042	12号集石	東部	後期初頭	2Y7x	4		
RH043	13号集石	東部	後期初頭～中葉	2Y11y	4.4		
RH044	14号集石	東部	後期	2A14c	2.5		
RH045	15号集石	東部	後期中葉	2A17d	2.5		
RH046	16号集石	東部	不明	2A16b	3		
RH047	7号集石	東部	中近世	2Y14g	2.5		
RH048	9号集石	東部	後期前葉	2Y16f	1.5		
RH049	10号集石	東部	後期	2Y16h	1.2		
RH050	17号集石	東部	後期初頭～前葉	2Y21e	3		
RH051	18号集石	東部	後期初頭～前葉	2Y21g	4		

第8表　土取り穴一覧表

遺構名	旧遺構名	調査区	位置	平面形	規模（m）	深さ（cm）	時期	備考
RX001	1号土取り穴	西部	5X3f	不整形	9～10×7～8	60	中期後葉～末葉	
RX002	2号土取り穴	西部	5X5m	不整形	4.8×4.5	60	中期後半	
RX003	3号土取り穴	西部	5X8l	長楕円形	5.6×2.5	40	中期後半	
RX004	4号土取り穴	西部	5X9m	やや細長い楕円形	2.8×2.3	45	後期前半	
RX005	5号土取り穴	西部	5X10n	不整形	5.1×4.0	40	中期後半～後期初頭	
RX006	6号土取り穴	西部	5X9o	半円形	4.2×2.0	40	中期後半	
RX007	7号土取り穴	西部	5X9l	不整形	3.8×3.7	35	中期後半	

第9表　柱穴状土坑一覧表

遺構名	出土区	位置	重複関係	開口部径（m）	深さ（cm）	備考
1号柱穴状土坑	西部	5W2e	なし	36×30	9.9	
2号柱穴状土坑	西部	5W6f	なし	20×20	−	
3号柱穴状土坑	西部	5W4e	なし	20×20	12.5	
4号柱穴状土坑	西部	5W4e	なし	30×25	−	
5号柱穴状土坑	西部	5W4f	なし	35×25	36.6	
6号柱穴状土坑	西部	5W4f	なし	30×25	26.3	
7号柱穴状土坑	西部	5W5f	なし	25×20	56.3	
8号柱穴状土坑	西部	5W4e	なし	25×20	33.9	
9号柱穴状土坑	西部	5W5e	なし	26×25	7.8	
10号柱穴状土坑	西部	5W4d	なし	30×22	36.2	
11号柱穴状土坑	西部	5W4d	12号に切られる	33×−	26.4	
12号柱穴状土坑	西部	5W4d	11号を切る	30×28	−	208出土
13号柱穴状土坑	西部	5W5e	なし	28×20	23.9	
14号柱穴状土坑	西部	5W5d	なし	25×25	10.1	

遺構名	出土区	位置	重複関係	開口部径（m）	深さ（cm）	備考
15号柱穴状土坑	西部	5W5d	16号を切る	28×23	39.5	
16号柱穴状土坑	西部	5W5d	15号に切られる	－×25	41.9	
17号柱穴状土坑	西部	5W5d	なし	70×60	22.0	209出土
18号柱穴状土坑	西部	5W6b	なし	32×30	31.0	
19号柱穴状土坑	西部					
20号柱穴状土坑	西部	5W5e	RD125を切る	25×25	－	
21号柱穴状土坑	西部	5W1g	なし	33×25	28.0	
22号柱穴状土坑	西部	5W2f	なし	22×18	12.0	
23号柱穴状土坑	西部	5W5k	なし	29×28	75.5	
24号柱穴状土坑	西部	5W6c	なし	30×23	12.0	
25号柱穴状土坑	西部	5W7f	なし	25×23	10.0	
26号柱穴状土坑	西部	5W2f	なし	35×30	26.0	
27号柱穴状土坑	西部	4W25e	RD118に切られる	50×36	26.8	
28号柱穴状土坑	西部	5W4g	RX001を切る	25×23	36.0	
29号柱穴状土坑	西部	5W5h	RX001を切る	25×23	24.0	
30号柱穴状土坑	西部	5W8d	なし	26×22	11.7	
31号柱穴状土坑	西部	5W7d	なし	41×34	17.2	
32号柱穴状土坑	西部	5W4e	RD124に切られる	－×24	12.9	
33号柱穴状土坑	西部	5W4f	42号を切る	33×30	68.3	
34号柱穴状土坑	西部	5W3g	なし	23×19	29.1	
35号柱穴状土坑	西部	5W2f	なし	23×21	23.7	
36号柱穴状土坑	西部	5W6b	なし	35×32	26.1	アタリあり
37号柱穴状土坑	西部	5W7c	38号に切られる	20×16	22.0	
38号柱穴状土坑	西部	5W7c	37号を切る	19×16	16.3	
39号柱穴状土坑	西部	5W7c	なし	22×18	16.4	
40号柱穴状土坑	西部	5W4c	なし	29×25	24.4	
41号柱穴状土坑	西部	5W4d	なし	30×26	26.4	
42号柱穴状土坑	西部	5W4f	33号に切られる	33×－	16.1	
43号柱穴状土坑	西部	5W3g	なし	36×26	47.1	
44号柱穴状土坑	西部	5W3g	なし	20×19	37.2	
45号柱穴状土坑	西部	5W2g	なし	29×28	37.9	
46号柱穴状土坑	西部	5W2e	なし	30×28	14.3	
47号柱穴状土坑	西部	5W2e	なし	22×22	10.2	
48号柱穴状土坑	西部	5W3f	なし	24×24	23.6	
49号柱穴状土坑	西部	5W2f	なし	21×19	15.7	
50号柱穴状土坑	西部	5W3f	なし	21×19	12.0	
51号柱穴状土坑	西部	5W2g	なし	30×24	37.1	
52号柱穴状土坑	西部	5W1g	なし	32×26	35.0	
53号柱穴状土坑	西部	5W2h	なし	43×37	43.4	アタリあり
54号柱穴状土坑	西部	5W2h	なし	34×30	29.5	アタリあり
55号柱穴状土坑	西部	5W2h	なし	31×28	41.2	
56号柱穴状土坑	西部	5W3h	なし	28×22	32.0	
57号柱穴状土坑	西部	5W3h	なし	23×22	33.4	
58号柱穴状土坑	西部	5W2j	なし	25×23	12.1	
59号柱穴状土坑	西部	5W3j	なし	21×18	30.7	
60号柱穴状土坑	西部	5W3i	なし	23×22	38.4	
61号柱穴状土坑	西部	5W3h	なし	19×16	28.2	
62号柱穴状土坑	西部	5W3h	なし	19×18	32.7	
63号柱穴状土坑	西部	5W1g	なし	36×25	17.8	
64号柱穴状土坑	西部	5W1g	なし	22×22	19.8	
65号柱穴状土坑	西部	4W25g	なし	36×26	7.1	
66号柱穴状土坑	西部	4W25g	なし	32×26	35.4	
67号柱穴状土坑	西部	4W24g	なし	－×－	－	
68号柱穴状土坑	西部	4W24g	なし	19×18	34.8	
69号柱穴状土坑	西部	4W24g	なし	24×20	18.2	

遺構名	出土区	位置	重複関係	開口部径（m）	深さ（cm）	備考
70号柱穴状土坑	西部	5Wlg	なし	26×26	13.4	
71号柱穴状土坑	西部	5Wlg	なし	30×28	21.6	
72号柱穴状土坑	西部	5W5k	なし	29×26	24.3	
73号柱穴状土坑	西部	5W5l	なし	23×22	59.0	
74号柱穴状土坑	西部	5W5k	なし	22×16	34.9	
75号柱穴状土坑	西部	5W5k	なし	29×28	17.7	
76号柱穴状土坑	西部	5W5k	なし	16×16	20.2	
77号柱穴状土坑	西部	5W3k	なし	19×18	24.9	
78号柱穴状土坑	西部	4W25e	なし	－×－	－	
79号柱穴状土坑	西部	4W25e	なし	－×－	－	
80号柱穴状土坑	西部	5Wle	なし	34×－	56.1	
81号柱穴状土坑	東部	2Y9r	82号を切る、190号に切られる	72×53	16.0	
82号柱穴状土坑	東部	2Y9r	82・190号に切られる	108×－	19.4	RB001
83号柱穴状土坑	東部	2Y13r	なし	62×54	52.3	RB001
84号柱穴状土坑	東部	2Y13l	86号を切る	80×73	40.2	RB001
85号柱穴状土坑	東部	2Y11n	RE002を切る	69×62	58.1	RB001
86号柱穴状土坑	東部	2Y13m	84号に切られる	46×44	20.5	
87号柱穴状土坑	東部	2Y14m	なし	45×38	33.5	アタリ？あり
88号柱穴状土坑	東部	2Y13l	なし	41×32	23.5	
89号柱穴状土坑	東部	2Y11o	なし	42×38	17.9	
90号柱穴状土坑	東部	2Y11o	なし	33×30	12.9	
91号柱穴状土坑	東部	2Y12p	なし	39×36	19.7	アタリ？あり
92号柱穴状土坑	東部	2Y12q	なし	32×26	14.0	
93号柱穴状土坑	東部	2Y12r	なし	64×59	32.3	アタリ？あり、RB003
94号柱穴状土坑	東部	2Y13q	なし	38×36	25.2	アタリ？あり
95号柱穴状土坑	東部	2Y13p	なし	64×63	40.7	RB002
96号柱穴状土坑	東部	2Y14p	なし	64×62	44.2	アタリ？あり、RB001
97号柱穴状土坑	東部	2Y15q	なし	64×61	47.8	RB001
98号柱穴状土坑	東部	2Y14p	なし	48×41	33.3	RB003
99号柱穴状土坑	東部	2Y14p	なし	41×34	21.0	
100号柱穴状土坑	東部	2Y14o	なし	42×38	19.3	
101号柱穴状土坑	東部	2Y14o	なし	44×38	40.9	RB002
102号柱穴状土坑	東部	2Y15o	なし	32×28	18.5	
103号柱穴状土坑	東部	2Y15o	なし	60×50	46.9	RB001
104号柱穴状土坑	東部	2Y15o	なし	36×35	23.1	RB002
105号柱穴状土坑	東部	2Y15o	なし	53×38	29.9	RB003
106号柱穴状土坑	東部	2Y15o	なし	56×56	29.9	
107号柱穴状土坑	東部	2Y15n	なし	53×52	46.7	RB002、934出土
108号柱穴状土坑	東部	2Y15n	なし	32×28	12.8	
109号柱穴状土坑	東部	2Y16o	なし	41×34	31.8	RB002
110号柱穴状土坑	東部	2Y16o	なし	69×55	54.4	RB001
111号柱穴状土坑	東部	2Y16n	なし	100×77	33.1	RB001
112号柱穴状土坑	東部	2Y14o	なし	52×49	37.1	RB003
113号柱穴状土坑	東部	2Y16m	なし	105×100	63.0	人為堆積、RB001
114号柱穴状土坑	東部	2Y14q	なし	44×41	23.1	RB003
115号柱穴状土坑	東部	2Y15n	なし	76×71	51.5	アタリあり、RB001、1027出土
116号柱穴状土坑	東部	2Y12k	なし	56×50	37.9	RB002
117号柱穴状土坑	東部	2Y12k	なし	64×60	32.2	RB001
118号柱穴状土坑	東部	2Y12l	なし	47×45	30.0	RB003
119号柱穴状土坑	東部	2Y16n	なし	28×22	17.5	
120号柱穴状土坑	東部	2Y18g	なし	40×38	38.7	RB004
121号柱穴状土坑	東部	2Y12m	RE003を切る	60×54	51.3	アタリ？あり、RB003
122号柱穴状土坑	東部	2Y11m	RE003を切る	36×32	31.2	RB002
123号柱穴状土坑	東部	2Y12m	RE002・003を切る	37×30	50.0	RB001、№210出土
124号柱穴状土坑	東部	2Y12s	なし	79×72	43.5	人為堆積？、RB003

遺構名	出土区	位置	重複関係	開口部径（m）	深さ（ｃｍ）	備考
125号柱穴状土坑	東部	２Ｙ12ｒ	なし	51×48	42.7	人為堆積？、ＲＢ002
126号柱穴状土坑	東部	２Ｙ９ｏ	なし	66×46	32.3	
127号柱穴状土坑	東部	２Ｙ16ｉ	なし	50×38	16.1	
128号柱穴状土坑	東部	２Ｙ13ｑ	なし	93×80	71.0	アタリあり、ＲＢ001
129号柱穴状土坑	東部	２Ｙ11ｓ	なし	73×72	34.7	人為堆積？、ＲＢ002
130号柱穴状土坑	東部	２Ｙ11ｒ	なし	60×54	22.4	
131号柱穴状土坑	東部	２Ｙ12ｓ	なし	60×48	24.8	ＲＢ003
132号柱穴状土坑	東部	２Ｙ13ｑ	133号を切る	84×52	33.1	ＲＢ003
133号柱穴状土坑	東部	２Ｙ13ｐ	132号に切られる	45×36	24.7	
134号柱穴状土坑	東部	２Ｙ13ｌ	なし	34×26	23.5	
135号柱穴状土坑	東部	２Ｙ17ｋ	なし	114×101	43.6	ＲＢ002
136号柱穴状土坑	東部	２Ｙ17ｌ	なし	75×66	58.2	ＲＢ001
137号柱穴状土坑	東部	２Ｙ17ｌ	なし	58×54	40.4	ＲＢ002
138号柱穴状土坑	東部	２Ｙ18ｌ	なし	112×96	34.5	ＲＢ001
139号柱穴状土坑	東部	２Ｙ14ｏ	なし	25×22	20.2	
140号柱穴状土坑	東部	２Ｙ13ｓ	なし	54×39	21.8	
141号柱穴状土坑	東部	２Ｙ６ｒ	なし	38×33	27.1	
142号柱穴状土坑	東部	２Ｙ６ｒ	なし	64×58	29.0	
143号柱穴状土坑	東部	２Ｙ６ｒ	144号を切る	73×68	45.4	
144号柱穴状土坑	東部	２Ｙ６ｒ	143号に切られる	63×58	29.7	
145号柱穴状土坑	東部	２Ｙ６ｒ	なし	51×44	21.8	
146号柱穴状土坑	東部	２Ｙ６ｓ	なし	46×35	28.2	
147号柱穴状土坑	東部	２Ｙ７ｓ	なし	58×57	19.7	ＲＢ003
148号柱穴状土坑	東部	２Ｙ８ｓ	なし	36×32	58.5	
149号柱穴状土坑	東部	２Ｙ８ｓ	なし	72×64	24.0	アタリ？あり、ＲＢ003
150号柱穴状土坑	東部	２Ｙ８ｔ	なし	62×46	65.6	アタリ？あり
151号柱穴状土坑	東部	２Ｙ５ｕ	なし	34×33	20.7	
152号柱穴状土坑	東部	２Ｙ６ｓ	なし	84×84	35.3	
153号柱穴状土坑	東部	２Ｙ６ｓ	154号を切る	40×25	21.2	
154号柱穴状土坑	東部	２Ｙ６ｓ	153号に切られる	38×36	20.4	
155号柱穴状土坑	東部	２Ｙ７ｓ	なし	55×45	25.2	ＲＢ003、№935出土
156号柱穴状土坑	東部	２Ｙ６ｕ	なし	42×39	17.9	
157号柱穴状土坑	東部	２Ｙ８ｕ	なし	32×31	46.3	アタリあり
158号柱穴状土坑	東部	２Ｙ９ｕ	なし	28×25	12.1	
159号柱穴状土坑	東部	２Ｙ10ｔ	なし	39×38	45.1	№211出土
160号柱穴状土坑	東部	２Ｙ９ｕ	なし	40×38	14.4	
161号柱穴状土坑	東部	２Ｙ11ｕ	なし	56×50	20.6	ＲＢ003
162号柱穴状土坑	東部	２Ｙ９ｍ	なし	52×47	21.1	
163号柱穴状土坑	東部	２Ｙ９ｎ	なし	46×36	15.9	
164号柱穴状土坑	東部	２Ｙ９ｎ	257号を切る	48×47	37.9	
165号柱穴状土坑	東部	２Ｙ９ｏ	なし	57×49	21.7	ＲＢ002
166号柱穴状土坑	東部	２Ｙ10ｏ	なし	62×58	7.6	ＲＢ003
167号柱穴状土坑	東部	２Ｙ10ｏ	なし	40×36	18.6	
168号柱穴状土坑	東部	２Ｙ10ｏ	なし	66×46	36.3	アタリあり、ＲＢ001、ＲＢ002
169号柱穴状土坑	東部	２Ｙ11ｐ	なし	66×58	54.0	人為堆積、ＲＢ001
170号柱穴状土坑	東部	２Ｙ11ｐ	なし	57×52	24.5	人為堆積
171号柱穴状土坑	東部	２Ｙ10ｑ	なし	76×67	53.4	人為堆積、ＲＢ001
172号柱穴状土坑	東部	２Ｙ10ｑ	なし	43×42	14.6	
173号柱穴状土坑	東部	２Ｙ10ｑ	なし	40×36	9.6	
174号柱穴状土坑	東部	２Ｙ９ｐ	175号を切る	48×45	23.9	ＲＢ001
175号柱穴状土坑	東部	２Ｙ９ｐ	174号に切られる	47×40	15.8	ＲＢ002
176号柱穴状土坑	東部	２Ｙ９ｐ	なし	42×42	15.1	
177号柱穴状土坑	東部	２Ｙ９ｐ	なし	40×39	18.7	ＲＢ002
178号柱穴状土坑	東部	２Ｙ８ｑ	252号を切る	61×59	41.4	
179号柱穴状土坑	東部	２Ｙ９ｑ	なし	54×48	34.0	ＲＢ002

遺構名	出土区	位置	重複関係	開口部径（m）	深さ（cm）	備考
180号柱穴状土坑	東部	2Y9q	なし	50×48	24.9	RB003
181号柱穴状土坑	東部	2Y9q	なし	32×30	33.5	アタリ？あり
182号柱穴状土坑	東部	2Y7q	196号に切られる	50×49	19.3	
183号柱穴状土坑	東部	2Y7r	なし	61×53	17.8	
184号柱穴状土坑	東部	2Y10r	なし	35×34	9.6	RB002
185号柱穴状土坑	東部	2Y10r	なし	68×56	38.6	RB001
186号柱穴状土坑	東部	2Y9t	なし	43×41	58.7	アタリ？あり
187号柱穴状土坑	東部	2Y16l	429号を切る	60×56	49.3	RB002
188号柱穴状土坑	東部	2Y4v	なし	74×74	43.0	アタリ？あり、212出土
189号柱穴状土坑	東部	2Y7r	260号に切られる	57×－	25.7	RB003
190号柱穴状土坑	東部	2Y9s	81・82号を切る	39×32	33.1	
191号柱穴状土坑	東部	2Y7r	260号を切る	40×36	48.9	
192号柱穴状土坑	東部	2Y13j	なし	67×52	47.1	人為堆積？、RB001
193号柱穴状土坑	東部	2Y13i	なし	34×32	63.2	アタリあり、RB002
194号柱穴状土坑	東部	2Y14i	なし	46×44	25.6	RB001、632出土
195号柱穴状土坑	東部	2Y7p	270号に切られる	49×－	47.4	
196号柱穴状土坑	東部	2Y7q	182号に切られる	71×64	49.7	
197号柱穴状土坑	東部	2Y12l	なし	60×46	57.8	人為堆積、RB002
198号柱穴状土坑	東部	2Y12l	なし	56×53	41.3	RB001、1012出土
199号柱穴状土坑	東部	2Y12m	なし	36×32	31.9	
200号柱穴状土坑	東部	2Y12m	なし	30×28	21.5	
201号柱穴状土坑	中央部	3Y12d	なし	20×18	54.1	
202号柱穴状土坑	中央部	3Y11c	なし	45×39	26.0	
203号柱穴状土坑	中央部	3Y12c	なし	58×51	21.9	
204号柱穴状土坑	中央部	3Y13b	なし	83×69	31.2	
205号柱穴状土坑	中央部	3Y11a	206号に切られる	35×25	21.5	
206号柱穴状土坑	中央部	3Y11a	205号を切る	38×－	38.7	
207号柱穴状土坑	中央部	3Y12a	なし	38×31	17.4	
208号柱穴状土坑	中央部	3Y12a	なし	35×29	26.0	
209号柱穴状土坑	中央部	3Y13a	なし	45×40	16.5	
210号柱穴状土坑	中央部	3Y13a	なし	44×28	27.0	
211号柱穴状土坑	中央部	3X11x	なし	48×35	47.0	
212号柱穴状土坑	中央部	3X12w	なし	114×73	11.5	
213号柱穴状土坑	中央部	3X12u	なし	31×30	45.7	
214号柱穴状土坑	中央部	3X13u	なし	44×43	18.5	
215号柱穴状土坑	中央部	3X12t	なし	73×47	26.0	
216号柱穴状土坑	中央部	3X12t	なし	45×36	22.6	
217号柱穴状土坑	中央部	3X12t	なし	46×42	27.3	
218号柱穴状土坑	中央部	3X10s	なし	37×27	21.0	
219号柱穴状土坑	中央部	3X12s	なし	26×24	32.9	
220号柱穴状土坑	中央部	3X12s	なし	25×24	20.1	
221号柱穴状土坑	中央部	3X12r	なし	31×30	30.0	
222号柱穴状土坑	中央部	3X12s	なし	35×30	14.6	
223号柱穴状土坑	中央部	3X13s	なし	30×28	36.0	
224号柱穴状土坑	中央部	3X13s	なし	40×40	28.8	
225号柱穴状土坑	中央部	3X4q	なし	150×125	94.6	
251号柱穴状土坑	東部	2Y8q	259号に切られる	52×46	30.5	
252号柱穴状土坑	東部	2Y8q	178号に切られる	61×56	28.4	RB002
253号柱穴状土坑	東部	2Y7q	なし	48×42	25.8	
254号柱穴状土坑	東部	2Y7q	なし	36×35	19.4	
255号柱穴状土坑	東部	2Y11n	258号を切る	52×44	17.9	RB001、RB003
256号柱穴状土坑	東部	2Y9n	なし	66×50	40.0	
257号柱穴状土坑	東部	2Y9o	164号に切られる	43×38	22.4	
258号柱穴状土坑	東部	2Y11n	255号に切られる	54×46	43.4	RB002、RB003、213出土
259号柱穴状土坑	東部	2Y7q	251号を切る	45×40	31.8	

遺構名	出土区	位置	重複関係	開口部径（m）	深さ（ｃｍ）	備考
260号柱穴状土坑	東部	2Ｙ7ｒ～7ｓ	189号を切り、191号に切られる	64×56	27.2	
261号柱穴状土坑	東部	2Ｙ11ｌ	ＲＥ003を切る	60×40	40.7	ＲＢ003
262号柱穴状土坑	東部	2Ｙ17ｎ	なし	74×58	43.0	ＲＢ001
263号柱穴状土坑	東部	2Ｙ17ｎ	なし	34×32	17.0	
264号柱穴状土坑	東部	2Ｙ17ｎ	なし	32×28	30.9	
265号柱穴状土坑	東部	2Ｙ17ｏ	なし	34×30	21.5	
266号柱穴状土坑	東部	2Ｙ17ｎ	なし	31×27	16.7	
267号柱穴状土坑	東部	2Ｙ17ｐ		60×36	－	
268号柱穴状土坑	東部	2Ｙ16ｍ	なし	52×47	38.4	ＲＢ002、795出土
269号柱穴状土坑	東部	2Ｙ16ｌ	なし	54×44	35.8	ＲＢ003
270号柱穴状土坑	東部	2Ｙ17ｐ	196号を切る	54×48	33.5	アタリ？あり、512出土
271号柱穴状土坑	東部	2Ｙ11ｋ	なし	104×84	50.5	
272号柱穴状土坑	東部	2Ｙ12ｋ	なし	40×38	32.9	ＲＢ003
273号柱穴状土坑	東部	2Ｙ13ｋ	なし	44×42	27.3	ＲＢ002
274号柱穴状土坑	東部	2Ｙ11ｔ	なし	30×20	18.9	
275号柱穴状土坑	東部	2Ｙ12ｓ	なし	72×70	－	ＲＢ001、ＲＢ002
276号柱穴状土坑	東部	2Ｙ12ｕ	なし	65×61	23.1	ＲＢ001
277号柱穴状土坑	東部	2Ｙ11ｕ	なし	52×40	24.8	ＲＢ003
278号柱穴状土坑	東部	2Ｙ12ｔ	なし	68×65	23.8	ＲＢ001
279号柱穴状土坑	東部	2Ｙ11ｔ	なし	83×79	28.4	ＲＢ001
280号柱穴状土坑	東部	2Ｙ17ｌ	なし	50×46	－	ＲＢ001
281号柱穴状土坑	東部	2Ｙ17ｋ	なし	86×61	－	ＲＢ001、1013・1028出土
282号柱穴状土坑	東部	2Ｙ11ｌ	ＲＥ003を切る	62×－	45.4	ＲＢ002
283号柱穴状土坑	東部	2Ｙ16ｋ	284号に切られる	－×62	－	ＲＢ001
284号柱穴状土坑	東部	2Ｙ16ｋ	283号を切る	62×55	－	
285号柱穴状土坑	東部	2Ｙ16ｋ	なし	50×42	－	
286号柱穴状土坑	東部	2Ｙ16ｊ	なし	48×41	－	633出土
287号柱穴状土坑	東部	2Ｙ14ｊ	なし	70×64	－	ＲＢ001
288号柱穴状土坑	東部	2Ｙ14ｉ	なし	66×42	－	ＲＢ001
289号柱穴状土坑	東部	2Ｙ13ｋ	なし	66×45	－	ＲＢ003
290号柱穴状土坑	東部	2Ｙ13ｊ	なし	53×42	－	
291号柱穴状土坑	東部	2Ｙ13ｋ	なし	82×56	－	ＲＢ001
292号柱穴状土坑	東部	2Ｙ14ｌ	なし	44×39	－	
293号柱穴状土坑	東部	2Ｙ9ｒ	なし	53×43	－	ＲＢ001
294号柱穴状土坑	東部	2Ｙ13ｋ	なし	41×36	－	
295号柱穴状土坑	東部	2Ｙ11ｌ	なし	52×45	－	ＲＢ002
296号柱穴状土坑	東部	2Ｙ12ｌ	なし	26×25	－	
297号柱穴状土坑	東部	2Ｙ16ｋ	427号を切る	81×72	－	ＲＢ001
298号柱穴状土坑	東部	2Ｙ15ｍ	なし	39×36	－	
299号柱穴状土坑	東部	2Ｙ13ｏ	なし	51×29	－	
300号柱穴状土坑	東部	2Ｙ13ｏ	ＲＥ002を切る	32×32	－	
301号柱穴状土坑	東部	2Ｙ13ｔ	なし	56×48	15.3	ＲＢ001
302号柱穴状土坑	東部	2Ｙ14ｔ	なし	22×22	8.7	
303号柱穴状土坑	東部	2Ｙ15ｔ	なし	30×26	12.0	
304号柱穴状土坑	東部	2Ｙ15ｓ	なし	34×31	16.5	
305号柱穴状土坑	東部	2Ｙ15ｓ	なし	46×44	18.3	
306号柱穴状土坑	東部	2Ｙ17ｔ	なし	32×29	16.4	
307号柱穴状土坑	東部	2Ｙ17ｔ	なし	42×36	25.4	
308号柱穴状土坑	東部	2Ｙ17ｕ	なし	41×35	12.9	
309号柱穴状土坑	東部	2Ｙ17ｕ	なし	46×40	37.3	
310号柱穴状土坑	東部	2Ｙ13ｓ	311号を切る	56×50	35.5	ＲＢ001
311号柱穴状土坑	東部	2Ｙ14ｓ	310号に切られる	－×－	15.1	
312号柱穴状土坑	東部	2Ｙ14ｓ	なし	32×26	23.2	
313号柱穴状土坑	東部	2Ｙ14ｓ	なし	27×27	17.5	
314号柱穴状土坑	東部	2Ｙ15ｒ	なし	40×38	13.8	

遺構名	出土区	位置	重複関係	開口部径（m）	深さ（ｃｍ）	備考
315号柱穴状土坑	東部	2Y16r	なし	36×35	23.8	アタリ？あり
316号柱穴状土坑	東部	2Y16q	なし	30×29	11.8	
317号柱穴状土坑	東部	2Y17r	なし	22×21	8.6	
318号柱穴状土坑	東部	2Y10n	なし	40×28	32.2	
320号柱穴状土坑	東部	2Y16r	なし	32×27	17.9	
322号柱穴状土坑	東部	2Y23q	なし	50×44	38.3	
323号柱穴状土坑	東部	2Y23q	なし	22×18	16.5	
324号柱穴状土坑	東部	2Y18w	なし	52×48	38.5	
326号柱穴状土坑	東部	2Y10s	327号に切られる	90×－	－	RB001
327号柱穴状土坑	東部	2Y10s	326号を切る	56×42	－	RB002
328号柱穴状土坑	東部	2Y8r	なし	60×55	－	RB003
330号柱穴状土坑	東部	2Y7q	なし	50×40	－	RB002
331号柱穴状土坑	東部	2Y8r	なし	35×33	－	
332号柱穴状土坑	東部	2Y8r	なし	64×41	－	RB002
333号柱穴状土坑	東部	2Y13r	なし	61×50	－	RB003
334号柱穴状土坑	東部	2Y9r	なし	50×42	－	
335号柱穴状土坑	東部	2Y8s	なし	49×41	－	
336号柱穴状土坑	東部	2Y8s	なし	42×36	－	
337号柱穴状土坑	東部	2Y8t	なし	63×31	21.8	
338号柱穴状土坑	東部	2Y8t	なし	51×47	60.5	
339号柱穴状土坑	東部	2Y13o	RE002を切る	88×46	－	
340号柱穴状土坑	東部	2Y14k	なし	82×52	－	
341号柱穴状土坑	東部	2Y14u	なし	68×65	16.4	
350号柱穴状土坑	東部	2Y11q	なし	51×40	－	
401号柱穴状土坑	東部	2Y18i	なし	38×37	28.9	
402号柱穴状土坑	東部	2Y18i	なし	26×24	12.0	
403号柱穴状土坑	東部	2Y18i	なし	28×24	18.4	
404号柱穴状土坑	東部	2Y18i	なし	44×34	26.9	
405号柱穴状土坑	東部	2Y18i	なし	42×30	12.6	
406号柱穴状土坑	東部	2Y19i	なし	34×32	49.2	
407号柱穴状土坑	東部	2Y19i	なし	36×33	55.2	
408号柱穴状土坑	東部	2Y19i	なし	26×25	19.9	
410号柱穴状土坑	東部	2Y15k	なし	66×43	－	
411号柱穴状土坑	東部	2Y15k	なし	45×42	－	
412号柱穴状土坑	東部	2Y15j	なし	72×40	－	
413号柱穴状土坑	東部	2Y12j	なし	52×52	－	RB003
414号柱穴状土坑	東部	2Y13j	なし	62×60	－	RB002
415号柱穴状土坑	東部	2Y13j	なし	49×46	－	RB002
416号柱穴状土坑	東部	2Y15k	なし	52×44	－	RB001
417号柱穴状土坑	東部	2Y12l	なし	40×24	－	
418号柱穴状土坑	東部	2Y15j	なし	69×53	－	RB001
419号柱穴状土坑	東部	2Y14j	なし	33×30	－	
420号柱穴状土坑	東部	2Y14j	なし	36×30	－	
421号柱穴状土坑	東部	2Y15j	なし	45×36	－	
422号柱穴状土坑	東部	2Y15j	なし	42×36	－	RB002
423号柱穴状土坑	東部	2Y14k	なし	52×43	－	RB003
424号柱穴状土坑	東部	2Y15k	なし	41×39	－	
425号柱穴状土坑	東部	2Y16l	なし	52×40	－	
426号柱穴状土坑	東部	2Y16m	なし	39×37	－	
427号柱穴状土坑	東部	2Y16k	297号に切られる	－×－	－	
428号柱穴状土坑	東部	2Y16l	なし	42×40	－	
429号柱穴状土坑	東部	2Y16l	187号に切られる	61×60	－	RB003
430号柱穴状土坑	東部	2Y18m	なし	35×30	－	
431号柱穴状土坑	東部	2Y17h	なし	38×32	36.6	
432号柱穴状土坑	東部	2Y17h	なし	36×30	47.8	RB004

遺構名	出土区	位置	重複関係	開口部径（m）	深さ（ｃｍ）	備考
433号柱穴状土坑	東部	2Y17h	なし	36×26	13.9	
434号柱穴状土坑	東部	2Y17f	456号に切られる	30×－	23.7	
435号柱穴状土坑	東部	2Y16j	なし	34×30	16.3	
436号柱穴状土坑	東部	2Y17m	なし	33×32	－	
437号柱穴状土坑	東部	2Y17i	なし	36×26	52.8	
438号柱穴状土坑	東部	2Y17l	439号を切る	48×37	－	
439号柱穴状土坑	東部	2Y17l	438号に切られる	－×67	－	ＲＢ002
440号柱穴状土坑	東部	2Y18h	なし	40×32	37.0	底面にアタリの痕跡あり、ＲＢ004
441号柱穴状土坑	東部	2Y19e	なし	30×29	43.7	底面にアタリの痕跡あり
442号柱穴状土坑	東部	2Y18f	なし	31×30	34.4	ＲＢ004
443号柱穴状土坑	東部	2Y18f	なし	30×26	33.1	ＲＢ004
444号柱穴状土坑	東部	2Y18e	なし	38×32	39.1	ＲＢ004
445号柱穴状土坑	東部	2Y17f	ＲＤ161を切る	34×28	34.5	底面にアタリの痕跡あり、ＲＢ004
446号柱穴状土坑	東部	2Y17e	なし	26×24	32.8	ＲＢ004
448号柱穴状土坑	東部	2Y18g	なし	24×22	32.6	ＲＢ004
449号柱穴状土坑	東部	2Y18h	なし	37×30	－	ＲＢ004
450号柱穴状土坑	東部	2Y17h	なし	60×57	13.1	底面にアタリの痕跡あり
451号柱穴状土坑	東部	2Y17g	なし	24×24	36.5	ＲＢ004
452号柱穴状土坑	東部	2Y16e	なし	42×36	36.4	
453号柱穴状土坑	東部	2Y17e	なし	54×44	29.7	
454号柱穴状土坑	東部	2Y16f	なし	32×30	29.4	
455号柱穴状土坑	東部	2Y17e	なし	54×38	41.1	底面にアタリの痕跡あり
456号柱穴状土坑	東部	2Y17f	434号を切る	40×34	19.2	
457号柱穴状土坑	東部	2Y17g	なし	38×34	37.9	ＲＢ004
458号柱穴状土坑	東部	2Y16g	なし	28×28	11.5	
459号柱穴状土坑	東部	2Y19h	460号を切る	36×－	38.7	
460号柱穴状土坑	東部	2Y19h	459号に切られる	38×－	34.5	
461号柱穴状土坑	東部	2Y19e	なし	32×30	70.8	
462号柱穴状土坑	東部	2Y20e	なし	27×27	28.8	
463号柱穴状土坑	東部	2Y16i	なし	28×28	32.8	
464号柱穴状土坑	東部	2Y17d	なし	49×48	26.8	
465号柱穴状土坑	東部	2Y16d	なし	42×41	32.4	
466号柱穴状土坑	東部	2Y18j	なし	26×26	25.0	
468号柱穴状土坑	東部	2Y19i	なし	42×36	42.6	
469号柱穴状土坑	東部	2Y16k	なし	38×32	－	
470号柱穴状土坑	東部	2Y19f	なし	33×26	30.7	
471号柱穴状土坑	東部	2Y17h	なし	32×28	23.3	
472号柱穴状土坑	東部	2Y19l	なし	32×32	－	
473号柱穴状土坑	東部	2Y20l	なし	49×35	－	
474号柱穴状土坑	東部	2Y21k	475号を切る	22×22	－	
475号柱穴状土坑	東部	2Y21k	474号に切られ、476号を切る	35×31	－	
476号柱穴状土坑	東部	2Y21k	475号に切られる	25×21	－	
477号柱穴状土坑	東部	2Y17h	なし	46×36	29.1	
501号柱穴状土坑	東部	3Y9b	なし	189×119	52.9	
502号柱穴状土坑	東部	3Y11e	なし	28×24	14.2	
503号柱穴状土坑	東部	3Y9f	なし	40×33	19.9	
504号柱穴状土坑	東部	3Y12e	なし	42×37	19.9	
505号柱穴状土坑	東部	3Y9d	なし	30×28	18.2	
506号柱穴状土坑	東部	3Y5g	なし	33×25	70.3	
507号柱穴状土坑	東部	3Y10e	なし	27×27	20.2	
508号柱穴状土坑	東部	3X5w	なし	28×26	28.6	
509号柱穴状土坑	東部	3Y3h	なし	36×33	18.3	
510号柱穴状土坑	東部	3Y2h	なし	67×36	41.9	
511号柱穴状土坑	東部	3Y9b	なし	50×48	47.0	
513号柱穴状土坑	東部	2X22w	なし	52×35	83.5	

遺構名	出土区	位置	重複関係	開口部径（m）	深さ（ｃｍ）	備考
514号柱穴状土坑	東部	２Ｘ23ｖ	なし	42×32	43.0	
515号柱穴状土坑	東部	２Ｘ22ｖ	なし	32×32	30.1	
516号柱穴状土坑	東部	２Ｘ25ｗ	なし	35×28	26.8	
517号柱穴状土坑	東部	３Ｘ４ｖ	なし	30×24	38.8	
518号柱穴状土坑	東部	２Ｙ８ｑ	なし	50×45	－	
519号柱穴状土坑	東部	２Ｙ10ｎ	なし	55×50	－	

V 出 土 遺 物

遺物は、縄文土器92箱分（42×32×30ｃｍのコンテナで換算）、弥生土器４点、土製品168点、石器1,920点、石製品386点、土師器３点、須恵器１点、陶器・陶磁器12点、金属製品19点、チップ・フレーク約10箱分、琥珀約3.75ｇが出土した。

ここでは、遺構内出土と遺構外出土を合せて扱うこととし、観察から得られた内容を記述する。

1 縄文土器・弥生土器

縄文土器は遺跡全体の総量で92箱分、弥生土器は４点出土している。縄文土器は、早期中葉～晩期末葉までが出土している。時期別の出土量は、縄文時代後期初頭～中葉が最も多く、次いで前期後葉、中期末葉、晩期初頭～前葉、前期前葉の順となる。弥生土器は前期が微量出土している。

先に、本文で記述する項目と観察表への記載に際して、若干説明を補足する。

［時期］：文様や特徴から周知の土器型式に比定させた分類を行った。観察表の時期の項には、土器型式への比定ができなかったものや型式名の提示が困難なものは、把握できる範囲内での帰属時期または？マークを添付して記載した。

［出土地・出土量］：本文への記述に際しては、主な出土地と、全体の出土量からみた多少の傾向について記載した。遺構内出土については、異時期の遺構出土と推定される場合についても、ここでは取り上げることとする。

［器種・器形・底部］：器種・器形について記述するが、今回の調査では完形個体が少ないことから、詳細はわからないものが多い。なお、ミニチュア土器と判断されるものは、基本的に土製品に含めた。観察表の部位の項目には、残存率で完形、ほぼ完形、３／４完形、２／３完形、１／２完形と明記した。破片は部位を記述した。なお、口唇部が欠損するものであっても、口縁部と判断できる場合はその旨記述した。

［口縁形状・口唇部］：口縁の形状（平縁、波状口縁など）、突起の有無（種類や単位数）、手法（折り返しや貼り付けなど）、口唇部の状況内容（例：刻目・縄文施文など）を記述する。

［文様・特徴］：文様や地文の種類などを記載した。以下の①～④には観察表の記載方法について記述する。

① 残存率の良いものは部位毎に記載した。例としては、口縁部は「口：」、頸部は「頸：」、胴部は「胴：」底部
は「底：」と略称した。

② 縄文原体の回転方向について、観察表では縦回転を縦、横回転を横、斜回転を斜と簡略して表記した。

③ 原体の側面などを押し付ける押圧縄文は、観察表では「側圧」と表記した。

④ 粘土紐を貼り付けたものは、基本的に「隆線」と言う用語を用いた。頸部に横帯するものは、本来的に「隆帯」の用語を使用するべきかもしれないが、用語の併用を避ける目的で使用していない。

［底部］：底部の状況を記述する。今回の調査では早期を除き、そのほとんどが平底である。極少数上げ底状がある。底面に何らかの痕跡が確認できるものは、網代痕８点、木葉痕３点ある。

［内面］：内面の調整が把握できるものについて記載した。例としてミガキ、ナデ、ケズリなどがあ

る。未調整と思われるものや摩滅などにより調整が解りかねるものは記載していない。
［胎土］：胎土の様相について、焼きの具合や、特徴的な混入物などが含まれている場合に記述した。
［特記事項］：上記以外の特記事項を明記する。

（1）縄文時代早期

縄文時代早期と推定される土器群を集め、ここで一括して記述する。1・5・84・250・251・252・270～279・1060が該当する。なお、中葉以外の時期は今回の調査では未確認である。
［出土地・出土量］：調査区南西部・西部・中央部の山際緩斜面で出土しており、標高180m以上の高位面で出土し、標高180m以下である調査区東部や中央部の一部などの低位面では出土していない。今回の調査全体の出土量は30点程である。層位的に良好と捉えられるのが、ＲＡ003出土の1と遺構外出土の251・274・275で、何れも堀切テフラと推定されるオレンジパミスを含む土層（基本層序Ⅴ層相当）中より出土している。なお、堀切テフラの降下年代は、早期末葉～前期初頭とされている。
［器種・器形・底部］：全て深鉢である。全体の器形を窺い知れる資料としては明神裏Ⅲ式と考えられる1が挙げられる。底部が砲弾状の尖底で、底部から胴部まで穏やかに立ち上がり、胴部上半～頸部がやや窄み、頸部から口縁部にかけてキャリパー状を呈する。なお、底部片のみのが3点あり、何れも尖底である。
［口縁形状・口唇部］：口縁部が確認できるのは5点ある。平縁が4点、小波状が1点である。
［文様・特徴］：貝殻腹縁文や沈線による文様モチーフが描かれる。また、押し引き状沈線により文様が施文される土器も幾つか散見される。1をみると、①口縁部の文様帯（押し引き沈線による横位の幾何学文と貝殻腹縁文）→②頸部～胴部上半に無文帯→③胴部中位に文様帯（押し引き沈線による横位平行線）→④胴部中位～胴部下位文様帯（押し引き沈線・沈線による山形文と幾何学文を合わせた文様と貝殻腹縁文）→⑤胴部下位～底部無文帯の、大きくは5つに文様帯が分かれる様相を示す。また、1と同様に270～274は、幾何学文や山形文が横方向に展開する。58や84は、沈線により縦・横に格子目状にモチーフされる。
［内面］：内面の調整はミガキが施される。
［胎土］：他時期の土器と比較して、器厚がやや薄いものが主体で、堅密な良好な焼きのものが多い。また、胎土中に雲母の混入が顕著なものもある。
［特記事項］：土器型式への比定について、84は白浜式、58は白浜～寺の沢式、250が寺の沢式、1・270～274明神裏Ⅲ式、275・276物見台式と推定しておきたい。

（2）縄文時代前期

縄文時代前期と推定される土器を集めた。初頭・前葉・前葉～中葉・後葉が確認された。末葉は未確認である。また、55～57・188・260・261は、時期を特定できず前期～中期と幅を広げて捉えた。胎土中に繊維が混入するのは初頭と前葉で、前期後葉は249の円筒下層ｂ式以外は認められない。ここでは、初頭、前葉、前葉～中葉、後葉に分けて記述する。

前期初頭

前期初頭と推定されるものを集めた。長七谷Ⅲ群や上川名2式、表館Ⅹ～ⅩⅢ群に比定・併行すると推定される。113・114・253・280・281が該当する。
［出土地・出土量］：遺構内出土としては、ＲＤ136より113が、調査区中央部捨て場より253が出土

している。他は遺構外出土で、調査区西部・東部のⅣ層から出土している。この出土状況を見る限り、高位面・低位面の標高の差異に関わらず出土していることを指摘でき、早期中葉などの出土状況とは相違する。調査全体では４点の出土で、全て掲載した。

［器種・器形・底部］：全て深鉢である。底部資料としては253・280の２点が得られており、尖底である。

［口縁形状・口唇部］：口縁部を窺える資料は得られていない。何れも小片のため全体の器形を窺い知れるものはない。

［文様・特徴］：縄文原体による側圧（ループ文含む）、斜位の短沈線、０段多条による節の幅が太い原体を用いた非結束羽状縄文の施文などがみられる。

［内面］：281は内面にＬＲが施文される。

［胎土］：胎土中には多量の繊維が含まれる。

前期前葉

前期前葉大木１～２ａ式若しくはそれに併行すると推定されるものを集めた。メルクマールとなる特徴に乏しいものについては、繊維の混入具合などを目安にここに位置付けた。３～９・35・63・180・200・205・206・254～259・282～302・1058が該当する。

［出土地・出土量］：遺構内出土は、ＲＡ005・007・011、ＲＸ002・005・007、調査区中央部捨て場から出土している。ただし、ＲＡ005以外は異時期の遺構から出土している。遺構外としては、標高的に高位面にある調査区南西部・西部が主体を占め、302が唯一調査区中央部の低位面から出土している。調査区南西部においては、Ⅳ層よりＴｏ－Ｃｕが各所で確認されたが、Ｔｏ－Ｃｕ下位から出土していると捉えられる。出土量は、一定量あるものの、そのほとんどが小破片である。

［器種・器形・底部］：全て深鉢である。全体の器形を窺い知れるものはない。底部は、299と300が該期と推定されるが、２点ともに平底で、299は網代痕、300は木葉痕がみられる。

［口縁形状・口唇部］：口縁形状が窺える資料は18点あり、16点が平縁、２点が小波状口縁である。口唇部の形状は面取りされ平坦に角張るものが多く、丸み帯びるものが少数ある。297・298は、口唇部に刺突列が施される。

［文様・特徴］：横位に貼り付け隆線を持つ３・９や、口縁部に横回転による不整撚糸文を持ち胴部にＲＬ縦回転を施文する283・284など以外、口縁部文様帯を形成するものはない。従って口縁部と胴部の分離を意識していると捉えられるものは非常に少なく、器面全体に地文のみを施文するものが主体である。地文は、斜行縄文、単軸絡条体、不整撚糸文、組縄縄文などがみられる。縄文は、ＬＲ、ＲＬ、ＬＲＬ、ＲＬＲの順に多い。なお、０段多条によるものが６・35・200・256・257・282・293・1058に認められるが、それらは全てＬＲ横回転で、繊維を多量に含む傾向が看取される。羽状縄文は、３と259にみられ、何れもＬＲとＲＬによる結束第１種である。組縄縄文は255の１点のみ認められる。単軸絡条体は、第１類・第１Ａ類、第４類？、第５類がみられる。単軸絡条体第５類を施文するものの内、３・５・９は胎土中に繊維の混入が認められないが、出土遺構の帰属時期を憂慮しここに含めた。ただし、前期後葉である可能性もある。不整撚糸文と呼ぶものについては、単軸絡条体第３類である可能性があるものの、明確には判別できなかった。

［胎土中］：胎土中への繊維の混入が顕著に看取される。

［特記事項］：土器型式への比定に関して、281は大木１式？、1058は大木１～２ａ式、302は大木２式、254・283・284は大木２ａ式？にそれぞれ推定される。それ以外のものは、土器型式への比定は

できなかった。

前期前葉～中葉

白座式と推定される小破片が２点出土した。前期前葉～中葉と時期幅を持って捉えることとする。210と303が該当する。

［出土地・出土量］：123号柱穴状土坑、５Ｘ７ｈグリッドⅣ層で出土した。出土量は２点で全て掲載した。

［器種・器形・底部］：深鉢である。２点とも口縁部片で、直立気味に立ち上がる。底部資料はない。

［口縁形状・口唇部］：平縁で、波状口縁は確認していない。口唇部は、面取りされ平坦である。303は円形の細かい刺突列が施されている。

［文様・特徴］：210は口端に刻みが施され、単軸絡条体第１Ａ類が横回転で施文される。303はやや条間の空いたＬＲを横回転される。

［胎土中］：胎土は、硬質で良好な焼きである。胎土への繊維の混入はみられない。

前期後葉

前期後葉と推定される土器を集めた。今回の調査では最も多くの復元個体を得られた。大木５式並行期の土器群と推定される。

大木５式

［出土地・出土量］：遺構内としては、ＲＡ004・006・007・008・010・014・015、ＲＤ015、ＲＸ001～005、調査区中央部捨て場などから出土している。遺構外としては、調査地全体から出土しているが、調査区南西部が圧倒的に多い。出土量は、非常に多く（大コンテナ約15箱分）、今回の調査における時期別の出土量は後期初頭に次いで多い。特に、ＲＡ006と中央部捨て場では接合率が高く、復元個体も多数得られた。

［器種・器形・底部］：全て深鉢である。底部から口縁部にかけて外傾して立ち上がる器形を基調とする。また、底部から胴部中位にかけて内湾気味（やや丸み帯びる）に立ち上がり、胴部中位付近から口縁部にかけて直立気味となるものが少量含まれる。

［口縁形状・口唇部］：平縁と、波状・小波状口縁がある。台形状の突起が付くものは、平縁・波状に関わらずみられる。突起の頂部には指頭圧痕文や刺突文が３～４個施文される。また、今回の調査出土で唯一環状突起が245に認められる。

［文様・特徴］：全体的には口縁部～胴部下半まで、地文のみを施文するものが圧倒的に多い。口縁部～頸部に横位の隆線(横帯)が巡るものとしては、12・195・201・214・221・223・234・236・237・238・247・305など一定量みられ、隆線上に指頭圧痕文若しくは刺突文が顕著に施文される。粘土紐貼り付けにより文様がモチーフされるものに、12・214・228・234・236・237があり、それらの大部分は横位隆線に連結して円形・Ｖ字状・連続Ｓ字状などの文様がみられる。口縁部に沈線による文様が描かれるものは、230・231・232・233・239など少数である。地文は、単軸絡条体第１Ａ類、単軸絡条体第５類が圧倒的に多く、多軸絡条体と原体の片方の末端を縛ったＬＲ（縦位綾繰文）が少数、ＬＲとＬが各１点みられる。本遺跡の該期土器は、地文には単軸絡条体が主体的に用いられていることが指摘され、単節などの縄文は極少数である。また、原体の回転方向は、単軸絡条体・単節の差異に関わらず、ほとんどが縦回転であることが指摘されよう。

［底部］：底部を窺える資料は10点で、何れも平坦である。それらは、ナデが施されるものが顕著で

ある。
［内面］：ナデ調整が主体で、粗いケズリが施されるものが少量みられる。
［胎土］：砂粒の混入が顕著である。繊維は基本的に含まれない。

円筒下層ｂ式
［出土地・出土量］：中央部捨て場において、円筒下層ｂ式と判断される249の１点が出土した。
［器種・器形・底部］：深鉢である。底部から胴部下半にかけてやや外傾し、口縁部にかけては直立に立ち上がる。底部は平坦基調のやや上げ底である。底面はナデが施される。
［口縁形状・口唇部］：口唇部が欠損することから、平縁か波状口縁なのかはわからない。
［文様・特徴］：口縁部に結節回転文、頸部に横位隆線、胴部上半にＬＲ・ＲＬ非結束羽状縄文、胴部下半にＲＲＬを施文後に結節回転を施文する。頸部の横位隆線上とその上下には、刻み目が連続して施文される。［内面］：粗いケズリに見えるが、剥落が著しく不明瞭にある。
［胎土］：胎土中には多量の繊維が含まれる。

（３）縄文時代中期

縄文時代中期と推定される土器を集めた。初頭～末葉までが認められ、特に後葉や末葉が多い。

中期初頭
中期初頭大木７ａ式に相当するもの若しくは推定されるものを集めた。182・196・308の３点を掲載した。
［出土地・出土量］：ＲＸ002・004及び調査区南西部などで出土している。何れも破片資料で、出土量は極少量である。
［器種・器形・底部］：深鉢以外の器種は認知していない。182と196は、何れも胴部上半～口縁部にかけてやや内湾気味に立ち上がり、口縁部が肥厚する。308は、頸部～口縁部にかけてやや内傾した後、口縁部が直立して立ち上がる。底部を窺える資料はない。
［口縁形状・口唇部］：口縁形状は全て平縁である。182は三角形状の突起を持つ。口唇部は面取りされ磨かれている。
［文様・特徴］：182と196は、口縁部に斜位方向に集合沈線、頸部に横位の平行沈線→沈線間に刺突列が施文される。308は、口縁部に「逆ノ字状」の沈線が引かれ、粘土紐による縦の貼り付けが施される。そして、頸部に横位の平行沈線が引かれる。
［内面］：内面調整はナデ、ミガキ、ケズリの３種がみられ、何れも横方向に調整が施される。
［胎土］：繊維の混入は確認できない。砂粒や粗礫を多く含むもの比較的が多い。182と196は良好な焼きのものである。
［特記事項］：掲載した３点の共通点として、何れも頸部に横位の平行沈線が引かれることで、口縁部と頸部を分離する行為が看取される。

中期前葉
中期前葉大木７ｂ式若しくはそれに相当すると思われるものを集めた。52・99・100・110・121・177・178が該当する。その内、51・100・121は、大木７ｂ式～８ａ式の時期幅で捉えられようか。
［出土地・出土量］：ＲＡ010・015、ＲＤ131・147、ＲＸ001などで出土している。何れも調査区西

部の遺構であるが、それらの帰属時期は何れも中期後葉～末葉と推定されることから、出土状況は異時期の流れ込みと判断される。出土量は少量である。

［器種・器形・底部］：全て深鉢である。52は口縁部破片で、ミニチュアとする規模のものである。胴部下半～口縁部までが窺える110は、胴部下半～頸部にかけてやや丸み帯び、頸部～口縁部にかけて外傾して立ち上がる。底部を窺える資料はない。

［口縁形状・口唇部］：口縁部の残存するものをみると、平縁と波状の両者がほぼ同様の割合にある。また、折り返し口縁を呈するものも顕著にみられる。

［文様・特徴］：貼り付け隆線の側縁にＬやＬＲの原体による押圧縄文（※以後「側圧」と呼ぶこととする）が施されるものが多い。若干異質なのものとして、沈線による細長い区画の中に刺突列が施される100が挙げられる。胴部の地文は、ＬＲの横回転が主体的にみられる。

［内面］：ミガキを主体とし、特に横ミガキが多い。

［胎土］：良好な硬質の焼きが多い。繊維の混入は認められない。

中期中葉

中期中葉を集めた。大木８ａ式と大木８ｂ式に相当する。円筒式は、円筒上層ｃ式～ｄ式の過渡期と推定されるものが１点ある。

大木８ａ式

大木８ａ式に相当するものを一括する。掲載した中では、123・166・169・170・179・262・309が該当する。

［出土地・出土量］：遺構内出土としてはＲＤ149、ＲＸ001、調査区中央部捨て場が、遺構外出土は４Ｗ23ｈ～23ｉグリッドⅢ～Ⅳ層で出土している。出土量は少量である。

［器種・器形・底部］：全て深鉢である。完形や略完形はなく、全体の器形を窺い知れるものはない。口縁部の形状については、123・169・170・262・309のように口縁部が内湾するキャリパー形の器形を呈するものと、179のようにわずかに外反するものがあり、前者が多い。底部を窺える資料はない。

［口縁形状・口唇部］：平縁、波状口縁がある。また、170のように口縁に上面観「耳状」を呈する突起が付くものもある。

［文様・特徴］：口縁部文様に着眼すると、沈線や貼り付け隆線により文様がモチーフされるものが基本形である。その際、166と262は、下地にＬＲやＲＬなど単節の横回転を施文する。また、頸部が窺い知れるものは、横位の貼り付け隆線が施文され、166などは隆線上に縦位の短沈線が引かれる。胴部は262を見る限り口縁部と同じ原体（※262の場合ＲＬ）を用いて、縦回転が施される。

［内面］：内面の調整は、横ミガキが主体に用いられる。

［胎土］：焼成状況が良好なものが多い。

［特記事項］：本遺跡資料は、大木８ａ式の中では古い段階と思われる資料が主体を占める。その中で262は唯一新しい段階と推定される。

大木８ｂ式

大木８ｂ式に相当するものを一括する。50・189・263・264・310～313が該当する。

［出土地・出土量］：遺構内出土としては、ＲＡ010、ＲＸ003、調査区中央部捨て場などが、遺構外は調査区東部を中心に出土している。遺構内出土は、遺構の帰属時期とは異時期である。出土量は少ない。

［器種・器形・底部］：全て深鉢である。全体の形状を知り得る完形資料として、313が挙げられる。

器形は、口縁部が内湾するものが主体である。底部を窺える資料は313の１点で平底である。底面は剥落が多い。

［口縁形状・口唇部］：口縁が残存する311と313は、何れも波状口縁である。313は４単位である。

［文様・特徴］：今回出土した資料からは、胴部まで広く文様が展開するものが多く、口縁部と胴部が分離されるものはない。地文を施文後に、隆沈線（貼り付けによる隆線の側縁に沈線が沿うもの）により縦方向に展開し、起点に渦巻き文が描かれるものが基本形である。その際に施文される地文の回転方向は、全て縦回転である。地文の種類はＲＬＲが圧倒的に多く、次いでＬＲである。このことは、０段の段階が左撚りを基本とすることが窺える。また、複節の割合が他の時期と比較して格段に高い。

［内面］：内面の調整は、横ミガキが主体に用いられる。

［胎土］：焼成状況が良好なものが多い。

［特記事項］：今回出土した資料は、大木８ｂ式の中では新しい段階が主体で、313などに代表されるように大木９式への漸移段階と捉えられる。

円筒上層ｃ～ｄ式

51の１点が出土した。円筒上層ｃ～ｄ式と幅を持って捉えた。従って、中期前葉の可能性もある。

［出土地・出土量］：調査区西部のＲＡ010から出土している。ＲＡ010の帰属時期は、中期末葉であることから、異時期の流れ込みと思われる。

［器種・器形・底部］：深鉢である。器形は口縁部が外反する。

［口縁形状・口唇部］：波状口縁である。

［文様・特徴］：口縁端部にＬＲ側圧、口縁部に貼り付け隆線により楕円形気味の文様が描かれる。貼り付け隆線の上には刻み目が連続して施される。

［内面］：内面の調整は、横ミガキである。

［胎土］：焼成状況は良好である。

［特記事項］：今回の出土状態からは、大木式との共伴関係は不明にある。

中期後葉

中期後葉大木９式に相当を一括する。37・39・40・41・47・48・59・62・67・68・77・78・88～90・104・105・118・120・122・132・145・168・176・183・184・190～192・314～318・1052～1055が該当する。

［出土地・出土量］：ＲＡ009～013・ＲＡ107、ＲＤ143・147・148・160、ＲＨ034、ＲＸ001～003などの遺構から出土している。何れも調査区西部で検出された遺構であるが、次の中期末葉と捉えられる遺構から出土しているものが多い。遺構外は、調査区西部を中心に調査区ほぼ全域から出土している。

［器種・器形・底部］：132の台付き鉢？を除き、深鉢である。全体の器形を窺える資料は、39・176・315の３点である。39は底部から胴部中位にかけて曲線的に立ち上がり、胴部中位から胴部上半にかけて直立した後、口縁部が強く外反する。176は、胴部中位に膨らみを持ち、胴部中位から胴部上半にかけて外反した後、口縁部は直立して立ち上がる。315は底部から胴部上半にかけて外反気味に立ち上がり、口縁部が外反する。次に、口縁部付近についてその傾向を探ると、①口縁部が外反するもの、②口縁部が直立するもの、③口縁部が内湾するものの、概ね３種類が看取される。①は39・192・315など、②は104・168・176・19など、③は184・316・318などである。底部を窺える資料は４点で、

全て平底でミガキが施される。
［口縁形状・口唇部］：平縁、波状口縁（小波状口縁含む）がほぼ同じ割合でみられる。波状口縁の176は4単位である。突起を付加するものは確認していない。口唇部は、角状や丸気味がみられる。
［文様・特徴］：縄文原体の縦回転を施文後に沈線による区画文様が描かれ、区画外を磨消した後（磨消縄文）、再度沈線を引き直しされるものが多い。例外的なものとして、59は先に沈線が引かれ、充填縄文が施される。この59は胴部小破片で文様の連続性が掴み難いことから、大木10式の可能性も残る。沈線による区画文様は、懸垂文、逆U字状文、楕円形文、長楕円形文などがあり、何れも縦方向に文様が展開する。192や318の口縁部には、早蕨状の沈線文様がみられる。地文は、ＬＲが大半を占め、次いでＲＬＲである。ＲＬ、ｌＲＬは非常に少ない。従って、0段最初の撚り方向は、左撚り（Ｌ）が圧倒的に多い。0段多条によるＬＲが315の1点確認された。
［内面］：内面の調整はミガキを主体にナデも多用される。
［胎土］：良好な焼成状況のものが多く、併せて砂粒が少量含まれるものが多い。

中期末葉
中期末葉大木10式に相当するものを一括する。38・42～46・49・60・61・64～66・69～76・79・87・91～94・96・101・102・106・111・112・116・125・126・146・162・167・172・185・186・193・209・319～325・1051・1056・1061が該当する。
［出土地・出土量］：調査区西部の竪穴住居跡、土坑、土取り穴などから主体的に出土している。主な遺構として、ＲＡ010～012・017を挙げておく。遺構外は、調査区西部を中心に調査区ほぼ全域から出土している。出土量は非常に多い。
［器種・器形・底部］：深鉢と鉢がある。鉢は42と38の小型鉢の2点のみである。38は共伴関係から中期末葉と推定したが、明確には時期を特定できない。全体の器形を窺える資料は少ないが、49・101・185などから胴部中位に最大幅を持つものが一定量みられる。また、101のように底径が口径と比較して小さく、直立させるのにバランスの悪いと思われるものもある。異質な器形として、45は頸部に屈曲を持ち、口縁部が直立する。口縁部は緩く外反若しくは外傾するものが主体的である。底部を窺える資料は4点で、平底3点、やや上げ底のものが1点である。網代痕や木葉痕などの痕跡は確認できない。
［口縁形状・口唇部］：平縁が圧倒的に多く、波状口縁（小波状含む）は少数である。また、324のように中空突起を持つものもある。口唇部は丸気味を主体とする。
［文様・特徴］：①地文を施文後に、沈線による区画的文様が描かれ、磨消縄文手法が用いられるもの（磨消後に再度沈線が引き直される場合もある）と、②沈線区画（文様を施文）後に、地文を充填し、沈線で引き直しされるもの（刺突文を伴う場合は沈線引き直し後に多い）に二分される。磨消縄文と充填縄文はほぼ同じ割合で見られる。沈線による区画文様は、「Ｃ字状」若しくは「逆Ｃ字状」が多い。地文はＬＲ、ＲＬＲ、ＲＬ、単軸絡条体第1類の順に多い。単軸絡条体第5類は、322以外大木10式と特定できる文様を併せ持つものがなく、共伴性や胎土の様子から中期末葉と推定したものがほとんどである。ただし、上記した322は、後期初頭の可能性も捨てきれないことを補足しておく。特殊なものとして、口縁部に2段の刺突列を持ち、異条異節と推定される原体を施文する46を挙げておきたい。
［内面］：内面の調整は、ミガキを主体にナデも多く用いられる。
［胎土］：精製と粗製では胎土に相違があり、粗製ほど砂粒や小礫が含まれる割合が高い。

（4）縄文時代後期

後期と推定される土器を集めた。初頭～中葉が多く、後葉や末葉は少ない傾向で捉えられる。補足として、本地域の後期土器は、南北両地域の要素を併せ持つと思われるものもあり、該期土器の研究動向として、土器型式は確立していないように思われる。従って、観察表へは積極的に土器型式での記載を行っていない。

後期初頭・初頭～前葉

後期初頭と推定されるものを集めた。また、後期初頭～前葉と時期幅を広げて捉えたものもここで一括することとし、明らかに後期前葉と判断されるものとは別に扱い記述することとする。80～83・85・86・127・136～138・140～144・152～155・157・194・197・204・211・212・265・326～363・1057が該当する。

［出土地・出土量］：遺構内出土としては、ＲＡ012、ＲＤ156・163、ＲＨ033・037・039・042、ＲＸ003～005などがある。異時期と考えられる遺構から出土しているものも多い。遺構外出土としては、調査区東部から広範囲で出土している。今回の調査では時期別の出土量で最も多い。

［器種・器形・底部］：深鉢を主体とする。壺？が339・340・353に認められる。また、器種不明としたものに157がある。腕輪の可能性もある。完形個体が無く、全体の器形を窺える資料はない。口縁部～胴部下半までの器形が窺える資料としては、127・142・204・326が挙げられる。127は、胴部下半～口縁部にかけて外傾し、口縁部がやや内湾する。142・204・326は、胴部上半若しくは頸部付近に最大幅を持ち(膨らみ)、口縁部にかけて内傾気味に屈曲して立ち上がる。上記以外に328・345・360・362などのように口縁部がやや外反して立ち上がるものもある。ただ、360・362は若干新しい段階と思われる。底部は、該期と推定される155は平底で網代痕が認められる。

［口縁形状・口唇部］：波状口縁（小波状や微波状を含む）の割合が平縁よりやや多い。何らかの突起を持つものの割合は非常に少ない。また、折り返し口縁を呈するものが、平縁のものに一定量みられる。口唇部の形状は端部が磨かれ丸み帯びるものが多い。

［文様・特徴］：文様のモチーフ、文様の手法などはバラエティーに富む。貼り付け隆線を施文し、隆線上に刺突文を伴うもの、沈線により文様モチーフされるものが顕著にみられる。大別すると、①127や326のようにボタン状貼り付け文や蛇行文を持ち、胴部下半にまで広く文様が展開するものと、②85・142・204・211などのように口縁部にのみ文様が割り付けられ、頸部になんらかの区画文様を持ち、胴部は地文のみのもの、が特徴的にみられる。今回の調査では層位や一括性に乏しく、これらの違いを時期や地域の差異に関連付けることはできない。ただ、①の土器群は、門前Ⅰｃ式若しくは門前Ⅱ式・宮戸Ⅰｂ式などに類似性が高いと思われる。②の土器群は、土器型式への比定が難しいが、①より若干新しい土器群である可能性も視野に入れ考える必要があろう。地文は、ＬＲが圧倒的に多く、ＲＬは少ない。複節は、ＲＬＲが極少数含まれるが、ＬＲＬは認められない。単軸絡条体は第１類と第５類が少数含まれる。地文の回転方向は縦回転が主体で、斜回転は縦回転との併用で見られる。また、横回転のものは、初頭～前葉と時期幅を広くして提示したものに多い様相である。

［内面］：内面の調整は、ミガキを主体にナデも多く用いられる。

［胎土］：砂粒や小礫が含まれる。焼成の状況はやや良のものが多い。

後期前葉

後期前葉と推定されるものを集めた。東北地方北部の十腰内１式、本県南部では新山権現社１式などに類似・相当すると思われる。107・108・131・134・135・151・156・173・198・199・266～268・364～387が該当する。

［出土地・出土量］：ＲＤ116・158・161、ＲＨ036・042、ＲＸ004・調査区中央部捨て場などの他、調査区東部から出土している。全般的には調査区東部東端付近のⅣ層出土が多い。全体の出土量は多いものの、小破片がほとんどの状況にある。

［器種・器形・底部］：深鉢を主体に、壺、鉢、台付き鉢が少数含まれる。ほとんどが破片資料で全体の器形を窺えるものはない156以外無い。198・369は底部を欠くが、胴部上半にやや膨らみを持ち、頸部が括れ、口縁部が外反する器形が看取される。また、唯一の完形に近い個体として156の壺がある。底部を窺える資料は３点である。156の壺はやや上げ底状で、底面にＬＲ・ＲＬの２種類が施文されている。386・387は、台付き鉢の台部で、387は穿孔部がある。

［口縁形状・口唇部］：６対４ほどの割合で波状口縁が平縁よりやや多い。369や382のような台状の突起が付くものもある。口唇部は、先鋭気味を主体とする。

［文様・特徴］：地文を施文後に、平行沈線による曲線的文様が描かれ、部分的に磨消縄文が施され、また文様の起点などに刺突文がみられる。地文はほとんどが単節ＬＲが多く、複節は認められない。地文の回転方向は、横回転が主体で、縦回転は少数である（掲載した中では横回転80％以上、縦回転16％）。また、櫛状の工具による流水文を施文するものが266～268に認められる。流水文を施文するものは、共伴性から前葉に含めたが、該期に特定できるものではない。

［内面］：内面の調整は、ミガキを主体にナデも多く用いられる。

［胎土］：良好な焼成状態のものが多い。

後期中葉

東北地方北部の十腰内２式、十腰内３式などに類似・相当すると思われるものを、後期中葉として集めた。133・148～150・160・161・388～418・1062が該当する。なお、417・418は、中葉～後葉と時期幅を広く捉えたものであるが、時期の特定はできない。

［出土地・出土量］：ＲＤ160、ＲＨ035・049・050などの他、調査区東部のⅣ層から主体的に出土している。出土量は多い。

［器種・器形・底部］：深鉢を中心に、壺、浅鉢、注口土器、台付き鉢の順に多い。全体の器形を窺える資料としては、398の深鉢と390・395・397の浅鉢などが挙げられる。胴部下半の状況から底径が口径と比較して小さいと思われるものが多い。底部を窺える資料は６点で、388・390・395・397・402が平底、592がやや上げ底状を呈する。網代痕や木葉痕は確認できない。

［口縁形状・口唇部］：平縁と波状口縁がほぼ同じ割合でみられる。口唇部は、面取りされた角状気味が多い。

［文様・特徴］：388・391・392・などのように口縁部に一定幅の無文帯を持ち、単節の横回転を施文後に、横方向に５～６条の平行沈線が引かれ、それを縦に「連続Ｓ字状文」で区切るような文様モチーフされるものが顕著にみられる。それらは十腰内２式に類似する。また、401・402・405・413・414などのように、磨消縄文手法による幅広の入り組み文が施文されるものや、402・414・416などのように刻み目列を持つものなどが、十腰内３式の段階に並行すると捉えておきたい。また、若干異質なものとして150・409のように地文に平行沈線による直線的な文様がモチーフされ、沈線間に磨消縄

文を伴う土器がある。該期と捉えたが、時期的な位置づけには検討の余地があろう。
［内面］：内面の調整は、横ミガキを主体とする。
［胎土］：硬質で良好な焼きのものが多い。

後期後葉
　後期後葉と推定されるものを集めた。東北地方北部の十腰内４式や十腰内５式、東北地方南部の新地式などに類似する。213・420～436が該当する。
［出土地・出土量］：近世に帰属する258号柱穴状土坑の埋土から１点出土している以外は、全て調査区東部遺構外から出土している。出土量は一定量あるが、前時期である後期中葉などと比べた場合は少ない。
［器種・器形・底部］：深鉢を主体に、壺と注口土器が出土している。全体の器形を窺える資料としては425・427・429などが挙げられる。なお、425は筆者の観察眼からは該期と捉えたが、若干新しい時期である可能性もあることを補足しておく。底部を窺える資料は３点で、425・427・429である。何れもやや上げ底状を呈する。
［口縁形状・口唇部］：口縁部の残存する資料を見る限り、平縁が多く、波状口縁は非常に少ない。口唇部は、丸気味を主体とするが、内削ぎ状のものも含まれる。
［文様・特徴］：帯縄文による入り組み文が主要文様である。帯縄文は、地文を施文後に磨消縄文を施しするものと、沈線による文様施文後に充填縄文が施されるものの、２種類ある。ほぼ同様の割合にある。地文の種類は全てＬＲで、０段多条によるものがわずかに含まれる。また、羽状縄文が425の粗製深鉢１点に認められる。瘤が付加されるものとして、423・428・431の３点ある。また、新地式類似の213と432に隆起線文が認められる。この２点は小片であるが、屈曲する器形の在り方から、何れも注口土器と推定される。
［内面］：内面の調整は、横ミガキを主体とする。
［胎土］：良好な焼きのものが多い。

後期末葉
　後期末葉と推定されるものを集めた。437～441が該期と推定したが、440と441晩期初頭の可能性もある。
［出土地・出土量］：調査区西部と東部の遺構外として出土している。遺構からの出土はない。出土数は非常に少なく８点であり、今回の調査で筆者が該期と推定したものは全て掲載した。
［器種・器形・底部］：８点全て破片資料であるが深鉢以外の器種はない。全体の器形を窺える資料はない。底部を窺える資料はない。
［口縁形状・口唇部］：口縁部の残存するものは全て平縁である。口唇部は、角状気味を主体とする。
［文様・特徴］：平行沈線が横方向に引かれ、沈線間に刺突列を施すものが434・435・437・439にみられる。また、沈線による文様区画内に短沈線が連続して施文されるものが、440と441にみられる。この２点は晩期初頭に比定される可能性もある。地文は、434と439にＬＲが施文される。補足として、磨消縄文とヒレ状の突起を持つ438は、該期と推定したが、古い時期の可能性も否定できない。
［内面］：内面の調整は、ナデを主体とする。
［胎土］：胎土に相違があり、粗いものと良好な焼きのものがある。

（5）縄文時代晩期

晩期と推定される土器を集めた。初頭～中葉・末葉が出土している。初頭～前葉が主体である。

晩期初頭

大洞B式に比定されるものである。基本的に三叉文をメルクマールとした。187・455～471が該当する。

［出土地・出土量］：RX002から187の1点が出土（異時期の流れ込みと考えたい）しているが、他は全て遺構外出土である。調査区東部を中心に、調査地ほぼ全域から出土した。

［器種・器形・底部］：深鉢、鉢、壺、注口土器がある。深鉢と注口土器が顕著である。468～471は、同一の個体であるが接点がなく、4片に分けて掲載番号を付した。香炉の可能性がある。全体の器形を窺える完形資料はない。深鉢は、455・459・461などのように、胴部から口縁部に緩く外傾し、口縁部がやや内湾する器形を基本形とする。注口土器は、464・465・466・467などから胴部は強く屈曲する器形が基本形と推定される。また、これら4点の注口土器に共通して口縁部は欠損することから、壊れやすい形状の可能性が窺え、あるいは463のような口縁部が付く可能性もある。底部を窺える資料は467の1点で平底である。

［口縁形状・口唇部］：平縁と小波状があり、平縁を主体とする。B突起が付く資料が少数ある。

［文様・特徴］：①三叉文をメルクマールとした。浮彫り状の精巧な作りのものが多い。また、磨消縄文手法が用いられているものが187と458に認められる。

［内面］：内面の調整は、ミガキを主体にナデが用いられる。注口土器や鉢は非常に鍛錬な調整が施される。

［胎土］：深鉢とその他では胎土に相違があり、深鉢ほど砂粒や小礫が含まれる割合が高い。

晩期前葉

大洞BC式に比定されるものである。羊歯状文をメルクマールとした。472～482・1063が該当する。これらの中には三叉文を合わせ持つものもあり、それら判断の難解なものは晩期前葉に含めたことを補足しておく。

［出土地・出土量］：調査区東部を中心に、調査地ほぼ全域から出土した。RD156以外はほとんどが遺構外若しくは異時期の流れ込みと考えられる。出土量は一定量ある。所見を述べれば、前時期の大洞B式とはほぼ同量が出土しえいると捉えられる。

［器種・器形・底部］：鉢を主体に、深鉢、注口土器、壺、台付鉢がみられる。大洞B式と比較して、深鉢の割合が低く、鉢の割合が高いように思われる。全体の器形を窺える資料はない。底部を窺える477の台付き鉢1点である。

［口縁形状・口唇部］：平縁が圧倒的に多い。B突起が付加されるものが顕著にみられ、また副突起が付くものもある。口唇部は、丸気味を主体とする。

［文様・特徴］：羊歯状文をメルクマールとした。横方向に咬合するようなモチーフのものが多く、また複数段に文様が割り付けられるものもある。

［内面］：内面の調整は、横ミガキが主体的にみられる。

［胎土］：良好で硬質な焼きのものが多い。

晩期中葉

大洞Ｃ１式と大洞Ｃ２式に分かれる。前時期である晩期前葉と比較すると、その出土量は極端に減少する。

大洞Ｃ１式

胸骨文的な文様のありかたから、大洞Ｃ１式に比定されるものである。483・484が該当する。

［出土地・出土量］：ＲＤ156から１点出土している以外は、全て調査区東部からの遺構外出土である。出土量は非常に少ない。

［器種・器形・底部］：130が皿、483と484は鉢と推定される。何れも小破片である。底部を窺える資料はない。

［口縁形状・口唇部］：口縁部が残存する484は小波状口縁で、口唇部に沈線が引かれる。口唇部の断面形は丸気味を呈する。

［文様・特徴］：ＬＲ横回転を施文後、沈線→磨消縄文手法による胸骨文がモチーフされる。

［内面］：内面の調整はミガキとナデが認められる。

［胎土］：良好で硬質な焼きが多い。

大洞Ｃ２式

大洞Ｃ２式に比定されるものである。485・486が該当する。

［出土地・出土量］：全て調査区東部の遺構外出土である。出土量は非常に少ない。

［器種・器形・底部］：皿と浅鉢が認められる。底部が窺える485は、ほぼ平底で、底面に沈線による円形文が施文される。

［口縁形状・口唇部］：486は平縁である。口唇部の断面形は丸気味を主体とする。486の内面には沈線による文様がモチーフされている。

［文様・特徴］：ＬＲ横回転を施文後に、沈線→磨消縄文手法による雲形文がモチーフされる。

［内面］：内面の調整はミガキが認められる。

［胎土］：良好で硬質な焼きが多い。

晩期後葉～末葉

大洞Ａ式～Ａ´式に相当するものを集めた。117・119・175・208が該当する。

［出土地・出土量］：調査区西部の遺構内から出土している。ＲＤ140、ＲＤ143、ＲＸ001、などである。全て異時期の遺構出土と考えられる。推定を含め４点の出土で、出土量は非常に少ない。

［器種・器形・底部］：深鉢と台付き鉢がある。全体の器形を窺える資料はない。底部もない。

［口縁形状・口唇部］：口縁部が残存する119と208は平縁である。119は小突起が付き、口唇部に沈線が引かれる。

［文様・特徴］：沈線による文様がモチーフされる。117はＬＲ横回転を地文とする。

［内面］：内面の調整はミガキとナデが認められる。

［胎土］：良好な焼きで、砂粒が少量含まれる。

（６）弥　生　時　代

弥生時代と推定されるものを集めた。163・164・490・491が該当する。前葉の青木畑式に相当すると考えられる。

［出土地・出土量］：ＲＰ007埋設土器遺構と、調査区西部遺構外から出土している。推定を含め４

点の出土で、出土量は非常に少ない。全て掲載した。
［器種・器形・底部］：深鉢、浅鉢、壺、高台付鉢がある。163は１／２程の残存率の浅鉢である。164は高台の部位のみである。490・491は口縁部の小破片で、490は深鉢、491は壺と推定した。163は平底である。
［口縁形状・口唇部］：平縁である。口縁部の裏側に複数条の沈線が横走する。
［文様・特徴］：163・490・491は、沈線による文様モチーフが横方向に展開する。163の鉢は、口縁部～胴部下半に広い文様帯を持つ。なお、今回の調査では縄文を施文するものは認められない。
［内面］：内面の調整はミガキが施される。
［胎土］：良好で硬質な焼きが多い。

2　土　製　品

土製品は総数168点出土した。内訳は、ミニチュア土器21点、土偶27点、動物形土製品（クマ形土製品）１点、土製耳飾７点、鐸形土製品２点、円盤状土製品104点、斧状土製品２点、粘土隗２点、不明土製品２点である。

（１）ミニチュア土器

21点出土し９点を掲載した（501・503・510・517・518・519・520・521・522）。517の単軸絡条体第１Ａ類を施文するものを除くと、他は全て無文である。その内、501・520・522は外面が未調整の素面である。特徴的文様を持たないことから詳細な時期は特定できないが、出土地・層位・伴出土器などから判断し推定すると、517は前期後葉、501は中期末葉～後期初頭、519は後期後葉？、他は後期とそれぞれ推定される。

（２）土　　偶

27点出土し、20点掲載した（502・508・523～540）。525は晩期初頭～前葉と推定される。それ以外は後期と推定される。完形品は無く、全て欠損品である。細かい刺突が施されるもの、乳房を持つもの、足の屈曲具合などから、後期中葉に帰属するものが多いと思われる。以下に残りの良いものを取り上げ文章記載する。
508・530・540は腹部に瘤状の貼り付けを持つ。妊婦とするよりへそを表出しているように思われる。502・526・531・535・539は、肩部や胴部中軸線上などに径１～２㎜程の刺突文が施文される。その中で、535は、首・足と胴部の接着部がソケット状を呈する特殊なものである。また、539は首を持たないが乳房と捉えられる２つの貼り付け突起を持つことから土偶と捉えたものである。

（３）動物形土製品

１点出土し、掲載した（541）。胴部上半部と前足の途中までの残存であるが、クマ若しくはムササビを模していると考えられる。長さ3.2cm以上、幅3.0cm以上、厚さ1.4cm、重さ8.47ｇ以上である。

（４）土　製　耳　飾

７点出土し、７点掲載した（505・542～547）。輪型を呈するのは544の１点で、沈線による渦巻き状の文様がモチーフされ、長さ3.95cm、幅4.1cm、厚さ0.95cm、重さ19.28ｇである。他は滑車型で、

547を除き中軸線状に貫通孔を持つ。長さ1.4～3.55cm、幅1.4～2.55cm、重さ1.09～13.61ｇ、孔の径は２～10㎜である。

（５）鐸形土製品

２点出土し、２点掲載した（506・548）。506は摘み部を持たないが、形状や厚みから鐸と判断した。長さ2.55cm、幅2.6cm、重さ10.69ｇである。出土地は中・近世と推定されるＲＥ002竪穴建物跡の埋土中から出土している。ただし、同遺構の埋土や柱穴からは、縄文時代後期前半の遺物が出土している状況から、本製品についても後期前半の産物と推定される。548は、摘み部と鐸身部上半が残存するもので、摘みの短軸方向に穿孔を持つ。穿孔部径は約0.4cmである。不明瞭ではあるが、沈線文様を持つことから、後期初頭～前葉と推定される。

（６）円盤状土製品

104点出土し、17点掲載した（509・511・515・516・549～561）。土器片を再利用し、周縁に打ち欠きや研磨を施し円形に整形したもの、及びこれに類するものである。規模は、長さ（長径）2.6～5.4cm、厚さ0.55～1.15cm、重さ4.77～30.22ｇである。出土地は、調査区東部からの遺構外出土が全体の約80％を占める。遺構内出土は非常に少なく、また遺構出土についても異時期の遺構と思われる。帰属時期は、556と561は沈線文様から後期前葉と推定される。他は地文のみで時期の特定は難しいが、胎土の様相から中期～後期と考えられる。上記したとおり、調査区東部の遺構外出土が多い状況からは、縄文時代後期が、その帰属時期の主体と考えられる。

（７）斧状土製品

２点出土し、２点掲載した（513・514）。扁平気味の板状を呈する土製品で、斧状土製品と判断した。２点ともに調査区中央部捨て場から出土したもので、何れも欠損品である。513は、全面（表裏面及び両側面に亘り）にＬＲが施文される。両端が欠損するため、長さは不明にあるが、幅3.4cm、厚さ1.６cmを測る。514は、ＲＬＲが表裏面及び両側面に施文され、表裏面に沈線文様（逆Ｕ字状）がモチーフされ、身部中軸線上に穿孔を持つものである。片方の端部が欠損するため長さは不明にあるが、幅3.9cm、厚さ2.1cmを測る。513と比較すると、全体の形状はやや丸く厚みがある。斧状土製品の事例として岩手町秋浦Ⅰ遺跡から７点出土しているが、その内５点が欠損品である。また、秋浦Ⅰ遺跡では穿孔を持つものが３点あるが、基部側に近い部分に穿たれているように思われる。従って、514についても基部側に相当する可能性が考えられる。

（８）不明土製品

本来の形態が不明で上記の各器種に分類できなかったものを一括した。２点出土し、２点掲載した（507・562）。507は、板状で、両端部が「ハの字状」に開く形態を呈する。長さ4.2cm、幅2.4cm、厚さ1.1cm、穿孔部径0.2cmである。上端～下端に穿孔が施される。文様は表面とした器面に刺突と沈線が、裏面とした器面に刺突文がみられる。ＲＥ003とした中世の可能性がある竪穴建物跡の柱穴から出土しているが、刺突文のあり方からは後期の産物と考えられる。562は、舌状の素地に粘土紐が這うように付けられた穿孔を持つ土製品である。貼り付けの縁辺には刻み目が施される。長さ2.85cm、幅2.3cm、厚さ2.65cm、穿孔部径0.3cmである。穿孔部のあり方からは、糸を通すことが考えられることから、用途は何らかの装身具と推定しておきたい。

（9）粘　土　塊

2点出土し、2点掲載した（504・512）。団子状に丸く整形され、いずれも火熱によって焼成を受けている。2点とも穿孔は持たない。504は、外面に調整が施されない粘土塊状のもので、直径2.3～2.7cm、重さ13.87ｇである。縄文時代後期前半ＲＤ163から出土している。512は、外面が磨かれているもので、直径2.8～3.3cm、重さ27ｇである。出土地は中・近世と推定される柱穴状土坑の埋土中から出土している。

3　石　　器

石器は総数で1,892点出土した。

剥片石器は660点である。内訳は石鏃182点、尖頭器15点、石錐13点、石篦４点、石匙43点、スクレイパー320点、Ｕフレ46点、ピエス・エスキーユ６点、多面体石器１点、コア30点である。

礫石器は1226点である。内訳は磨製石斧145点、半円状扁平打製石器１点、抉入扁平磨製石器１点、磨石396点、特殊磨石５点、敲石53点、凹石15点、砥石５点、石皿31点、台石45点、石錘63点、礫器417点、軽石49点である。これらのほか、チップ・フレーク16,949ｇ、礫片20箱分などが出土している。

（1）石　　鏃

扁平で鋭利な左右対称の尖頭部が作出された小形の剥片石器で、矢の先端に用いられたと推定されるものである。182点出土し、42点掲載した。補足として、182点中、未製品と推定されるものが14点ある。基部形態の違いから以下のＡ～Ｇ群に細分した。

Ａ　群：無茎で基部に抉りを有するもの。607・621・625・644・646・653・659が該当する。長さ1.5～2.8cm、幅1.15～1.85cm、厚さ0.3cm前後、重さ0.31～0.81ｇである。石材は北上山地産の頁岩を主体とし、659の１点黒曜石製がある。竪穴住居跡出土の607．621から縄文時代中期末葉が制作時期の中心と推定される。ただし、黒曜石製の659は後期初頭の土器と共伴して出土している。

Ｂ　群：無茎で基部がわずかな抉りを有するもの。606・630・635・636・648・649・657が該当する。長さ1.8～4.45cm、幅0.8～2.0cm、厚さ0.2～0.5cm、重さ0.6～2.8ｇである。石材は北上山地産の頁岩を主体とし、649の１点黒曜石製がある。出土地・層位から、縄文時代前期後葉から後期初頭の時期幅で捉えられるが特定はできない。

Ｃ　群：無茎で基部が丸みを持ち、平面形が涙滴形を呈するもの。627・647・664が該当する。長さ2.2～2.9cm、幅1.75～2.05cm、厚さ0.4～0.85cm、重さ1.04～4.35ｇである。石材は北上山地産の頁岩、赤色頁岩と黒曜石である。出土地・層位から、縄文時代後期初頭前後の可能性があるものの特定はできない。

Ｄ　群：無茎で基部が直線的（平坦）なもの。601・604・608・616・629・639・662が該当する。長さ3.0～3.9cm、幅1.45～2.00cm、厚さ0.3～0.5cm、重さ1.63～2.81ｇである。石材は北上山地産の頁岩を主体とする。竪穴住居跡出土の608・616から中期末葉が制作時期の中心と推定される。

Ｅ　群：全体に長菱形を呈し、最大幅をほぼ中央部にもつもの。609・654が該当する。長さ1.35～2.3cm、幅0.85～1.65cm、厚さ0.25～0.3cm前後、重さ0.24～0.52ｇである。石材は北上山地産の頁岩である。出土地・層位から、縄文時代後期初頭～晩期前葉の時期幅で捉えられるが特定はできない。

F　群：明瞭な茎部を有するもの。624・638・640・641・642・643・645・650・651・652・655・656・658・660・661が該当する。長さ1.9～2.9cm以上、幅0.95～1.95cm、厚さ0.2～0.55cm、重さ0.27～1.51ｇである。石材は北上山地産の頁岩を主体とし、次いで奥羽山脈産のメノウ、北上山地産の赤色頁岩である。出土地・層位から、縄文時代後期初頭～晩期前葉の時期幅で捉えられるが特定はできない。

G　群：全体の形状が棒状を呈するもの。663・690が該当する。長さ2.4cm以上、幅0.8～0.95cm、厚さ0.15～0.45cm、重さ0.41～1.19ｇである。石材は、掲載した２点ともに奥羽山脈産のメノウである。出土地・層位から縄文時代後期初頭～晩期前葉の時期幅で捉えられるが特定はできない。

（２）尖　頭　器

扁平な尖頭部をもち槍先等の刺突具とみられるものを尖頭器とした。15点出土したが、そのほとんどが欠損品であるため、620の１点を掲載した。長さ5.4cm、幅2.54cm、厚さ1.02cm、重さ8.31ｇである。620の石材は奥羽山脈産の凝灰岩であるが、不掲載としたもののほとんどが北上山地産の頁岩である。不掲載としたものを含めても、柳葉形に類する形態のものは少なく、先端が尖り全体の形状が卵形に類するものが多い。また、石鏃との区分に際しては、長さ４cm以上、重さ４ｇ以上の厚みのあるもの（凡そ0.5cm以上）を尖頭器とした。例外として、635は長さ4.45cmを測るが大型の石鏃と捉えた。また、厚さが0.5cmを超える627・647は、石鏃未成品と捉え、尖頭器には含めていない。竪穴住居跡出土の620から中期末葉が制作時期の中心と推定される。

（３）石　　錐

剥片の端部に横断面形が菱形を呈する尖鋭な刃部を有し、主に対象物に穿孔を施すことを目的に用いられたと思われる石器である。13点出土し、５点掲載した。形態から以下の各群に分類した。

A　群：全体形状が棒状を呈するもの。666が該当する。長さ4.0cm、幅1.0cm、厚さ0.75cm、重さ2.77ｇである。石材は北上山地産の頁岩である。出土地・層位からは、縄文時代中期～後期の可能性があるものの特定はできない。

B　群：棒状の長い刃部をもち一端に整形されたつまみ部を有するもの。665・667・668が該当する。長さ4.15～4.4cm、幅1.4～2.1cm、厚さ0.35～0.4cm、重さ0.88～1.53ｇである。掲載した３点を見る限り、長さや厚さからは規格性が高いことを指摘できる。石材は北上山地産の頁岩である。出土地・層位からは縄文時代中期～後期の可能性があるものの特定はできない。

C　群：刃部が先端から基部側に向かって次第に広がり、摘み部との境界が不明瞭なもの。633が該当する。長さ2.75cm、幅1.65cm、厚さ0.6cm、重さ2.04ｇである。石材は北上山地産の頁岩である。出土地・層位からは縄文時代中期～後期の可能性があるものの特定はできない。

（４）石　　篦

扁平な剥片を素材とし、周縁加工によってヘラ状に整形され、下端に主要刃部が設けられているものである。４点出土し、614・615の２点掲載した。今回の調査では、側縁がほぼ平行し、平面形が短冊形に近い形状を呈するものが出土している。長さ6.65～7.15cm、幅2.8～2.9cm、厚さ1.0～1.1cm、重さ25.50～28.21ｇである。614は、主要な刃部と思われる下端は両面に加工が施される。対して、615は、片方の剥離面にのみ押圧剥離が施される。上記のことから、掲載した２点は、両面加工と片面加工の相違はあるものの、規模的な観点からは規格性が高い。石材は何れも北上山地産の頁岩であ

る。２点共にＲＡ010竪穴住居跡出土で、縄文時代中期末葉が制作時期の中心と推定される。

（５）石　　匙

一端に摘み状の突起を持ち、側縁の一部に刃部を有するもののうち、石錐を除いたものを一括した。43点出土し、21点掲載した。摘みの付き方で、縦形をＡ群、横形をＢ群、斜形をＣ群の３つに分群した。その中で身部の平面形の違いでさらに分類を行った。

Ａ　群：摘み部を上にした場合、身部が縦長になるものをＡ群とした。

Ａ群１類：縦形の中で、両側縁がほぼ平行する縦長剥片を素材とし、両側縁と先端部に刃部加工が施されるもの。626・671・676が該当する。長さ4.1～8.55cm、幅1.45～3.95cm、厚さ0.5～1.5cm、重さ3.08～43.3ｇである。石材は、何れも北上山地産で、626は赤色頁岩、671・676は頁岩である。出土地・層位からは縄文時代中期～後期の可能性があるものの特定はできない。

Ａ群２類：縦形の中で一側縁が直線的、他方が弧状を呈するもの。611・617・634・672・675が該当する。長さ4.3～7.4cm、幅1.9～4.05cm、厚さ0.6～1.2cm、重さ7.12～27.7ｇである。石材は、何れも北上山地産の頁岩である。611・617は縄文時代中期末葉のＲＡ010竪穴住居跡出土である。他の出土地をみると、調査区西部・南西部であることから、縄文時代前期後葉～中期末葉が制作時期の中心と推定される。

Ａ群３類：縦形の中で、比較的幅広で楕円形を呈するもの。631・670・673が該当する。長さ5.0～5.7cm、幅3.1～6.1cm、厚さ0.6～1.2cm、重さ9.93～25.20ｇである。石材は、何れも北上山地産の頁岩である。出土地をみると調査区西部を主体とすることから、縄文時代中期が制作時期の中心と推定される。

Ａ群４類：縦形の中で、形状が特殊なもの。677・678・680が該当する。今回の調査では調査区東部で出土している。長さ6.5～9.1cm、幅2.6～4.4cm、厚さ0.8～1.25cm、重さ11.39～44.07ｇである。石材は、何れも北上山地産の頁岩である。出土地をみると調査区東部を主体とすることから、縄文時代後期～晩期が制作時期の中心と推定される。

Ｂ　群：摘み部を上にした場合、身部が横長になるものをＢ群とした。

Ｂ群１類：横形の中で、全体の形状が楕円形若しくは四角形に近いもの。610・679が該当する。長さ4.25～5.55cm、幅6.3cm、厚さ0.55～0.8cm、重さ13.29～15.76ｇである。石材は、何れも北上山地産の頁岩である。610は縄文時代中期末葉のＲＡ010竪穴住居跡出土である。他の出土地をみると、調査区東部であることから、縄文時代中期～晩期の時期幅で考えられよう。

Ｂ群２類：横形の中で、柳葉状に細身で、両端が尖頭状を呈するもの。637・669が該当する。長さ4.3～6.4cm、幅4.35～6.25cm、厚さ1.35～1.4cm、重さ20.01～28.19ｇである。石材は、何れも北上山地産の頁岩である。出土地・層位から、縄文時代前期～中期の可能性がある。

Ｃ　群：摘み部を上にした場合、身部が斜めになるものをＣ群とした。

Ｃ群１類：斜形の中で、楕円形若しくは四角形に近いもの。612・674が該当する。長さ4.9～5.62cm、幅2.4～5.35cm、厚さ0.7～1.43cm、重さ6.83～31.94ｇである。石材は、何れも北上山地産の頁岩である。612は縄文時代中期末葉のＲＡ010竪穴住居跡出土である。674は調査区南西部の風倒木出土で、縄文時代前期の可能性がある。

Ｃ群２類：斜形の中で、三角形に近いもの。602が該当する。長さ5.4cm、幅5.7cm、厚さ1.25cm、重さ23.85ｇである。石材は、何れも北上山地産の頁岩である。602は縄文時代前期前葉のＲＡ005竪穴住居跡出土である。

（6）スクレイパー

石鏃、石槍・尖頭器、石錐、石篦、石匙などには該当しないものの中で、意図した刃部を作出されていると考えられるものを一括した。320点出土し、27点掲載した。

ここでは素材に用いられている剥片の形状で「群」を設定した。

A群：両側縁がほぼ平行する縦長の剥片を素材とするもの。

B群：全体の形状が横長の剥片を素材とするもの。

C群：平面形が円形～楕円形・卵形を呈する剥片を素材とするもの。

これに加え、主要な刃部として機能する部位の面数の違いで「類」を設定した。

1類：1側縁に刃部が形成されるもの。

2類：2側縁に刃部が形成されているもの。

3類：3側縁以上に刃部が形成されているもの。

さらに、刃部加工の方法によって以下の「種」を設定した。

a種：片面にのみ刃部加工を施されたもの（片刃）。

b種：両面に刃部加工を施されたもの（両刃）。

c種：方刃と両刃の両者を持つもの。

A　群：縦長の剥片を用いるものは以下の5種類が認められる。

A群1類a種：605・618・619・681・682が該当する。長さ6.48～9.5cm、幅3.05～4.6cm、厚さ0.8～1.65cm、重さ12.66以上～65.15gである。石材は、何れも北上山地産の頁岩である。帰属時期について、605は縄文時代前期後葉のRA007竪穴住居跡、618・619は縄文時代中期末葉のRA011出土である。

A群1類b種：692が該当する。長さ6.25cm、幅3.5cm、厚さ0.65cm、重さ16.19gである。石材は、何れも北上山地産の頁岩である。調査区東部遺構外Ⅳ層で出土していることから、縄文時代中期～後期と推定される。

A群2類a種：603・622・699が該当する。長さ4.9～8.66cm、幅1.65～4.55cm、厚さ0.7～1.34cm、重さ5.03～49.32gである。石材は、何れも北上山地産の頁岩である。603は縄文時代前期前葉のRA005竪穴住居跡、622は中期末葉のRA015出土である。

A群3類a種：613・623・683・687が該当する。長さ2.3以上～8.64cm、幅2.0～3.95cm、厚さ0.3～1.33cm、重さ0.95以上～40.38gである。石材は、何れも北上山地産の頁岩である。613は縄文時代中期末葉のRA010竪穴住居跡出土である。

A群3類b種：691・696が該当する。長さ5.25～5.3cm、幅3.4～3.8cm、厚さ0.6～1.0cm、重さ23.85～32.99gである。石材は、何れも北上山地産の頁岩である。出土地・層位から縄文時代中期～後期の可能性がある。

B　群：横長の剥片を用いるものは以下の3種類が認められる。

B群1類a種：684・688・697・698が該当する。長さ3.05～6.1以上cm、幅6.5～8.7cm、厚さ0.9～1.6cm、重さ12.23～68.23gである。石材は、684・688・697が北上山地産の頁岩、698が奥羽山脈産の珪質頁岩である。出土地・層位から縄文時代中期～後期の可能性がある。

B群3類a種：694が該当する。長さ4.25cm、幅4.5cm、厚さ0.9cm、重さ14.21gである。石材は北上山地産の頁岩である。調査区東部遺構外Ⅳ層で出土していることから、縄文時代中期～後期と推定

される。

B群3類c種：685が該当する。長さ5.9cm、幅12.9cm、厚さ2.1cm、重さ94.09gである。石材は北上山地産の頁岩である。調査区東部遺構外Ⅳ層で出土していることから、縄文時代中期～後期と推定される。

C　群：平面形が円形～楕円形・卵形を呈する剥片を用いるものは以下の4種類が認められる。

C群1類a種：686・689が該当する。長さ5.2～5.9cm、幅2.98～3.3cm、厚さ0.86～1.5cm、重さ13.54～16.39gである。石材は、何れも北上山地産の頁岩である。出土地・層位から縄文時代中期～後期の可能性がある。

C群1類b種：628が該当する。長さ3.0cm、幅2.5cm、厚さ1.1cm、重さ7.3gである。石材は、北上山地産の頁岩である。調査区東部遺構外Ⅳ層で出土していることから、縄文時代中期～後期と推定される。

C群2類a種：695が該当する。長さ4.98cm、幅5.37cm、厚さ1.26cm、重さ15.17gである。石材は北上山地産の頁岩である。調査区東部遺構外Ⅳ層で出土していることから、縄文時代中期～後期と推定される。

C群2類c種：693が該当する。長さ3.05cm、幅2.35cm、厚さ0.85cm、重さ7.20gである。石材は北上山地産の頁岩である。調査区東部遺構外Ⅳ層で出土していることから、縄文時代中期～後期と推定される。

（7）ユーティライズ・ドフレーク

剥片自体には意図的な加工などが看取できないが、縁辺に何らかの使用によると判断される微細剥離が観察されるものをユーティライズ・ドフレーク（※観察表などへの記載に際しては「Uフレ」と簡略して呼ぶ）とした。46点出土し、701の黒曜石製1点を掲載した。701は剥片の右辺や左辺に微細剥離が認められる。剥片の断面形からは、掻器的な用途の可能性がある。また、不掲載としたものを見ると、石材は奥羽山脈産の頁岩2点と北上山地産の赤色頁岩1点を除き、北上山地産の頁岩である。46点中42点が調査区東部Ⅳ層から出土していることから、縄文時代中期～晩期の可能性がある。

（8）ピエス・エスキーユ

上下端部に階段状剥離痕跡をもつ一群である。対辺で一対をなす階段状剥離痕跡が認められるものが基本だが、同様の剥離が一端にのみみられる個体も一部含んでいる。6点出土し、632・700の2点を掲載した。長さ1.8～2.75cm、幅2.15～2.3cm、厚さ0.65～0.85cm、重さ2.03～5.88gである。石材は、北上山地産の頁岩である。不掲載を含め全て調査区東部から出土していることから、縄文時代中期～晩期の可能性がある。

（9）多面体石器

複数面に剥離が施され、広く自然面が残るものである。何らかの未成品の可能性も考えられようか。702の1点出土し掲載した。長さ2.55cm、幅2.75cm、厚さ2.05cm、重さ121.32gである。石材は北上山地産の頁岩である。調査区東部遺構外Ⅳ層で出土していることから、縄文時代中期～後期と推定される。

(10) コ　　ア

剥片剥離作業中の残核と思われるものや、剥片剥離後の残核と思われるもの、原石の一端に打撃が加えられたもの含めて、コアと定義した。30点出土した（全て不掲載とした）。石材は、北上山地産の頁岩を主体とし、奥羽山脈産のメノウ（２点）・凝灰岩（１点）、産地不明の黒曜石（２点）がある。最も多い北上山地産は10～384ｇ、奥羽山脈産のメノウは24～48ｇ前後、黒曜石は２点ともに2.5ｇである。

(11) 磨　製　石　斧

研磨が施された斧状の形態の石器である。未成品を含め145点出土し、43点掲載した。なお、打ち欠きや敲打調整（ペッキング）等により、全体の形状が斧形に仕上げられているものは、研磨される前段階未成品と捉え磨製石斧とした。未成品は、磨製石斧として登録した中では約28％に上る。ただし、磨製石斧と認知しなかった原石の中には、極一部に剥離が施された礫があり、本来は磨製石斧の制作を意図し制作途上で放棄された可能性が考えられるものもある。従って、実際の割合はさらに高いものと思われる。

平面形について、完形品は非常に少ないが、残存部の連続性から推定すると、概ね撥形と短冊形があり、またそれらのミニチュア的な小型品も一定数みられる。ここでは平面形状の違いで撥形と短冊形に二分し、通常サイズと小型の区分を長さ８cm若しくは幅４cmを目安として、撥形をＡⅠ群、小型の撥形をＡⅡ群、短冊形をＢⅠ群、小型の短冊形をＢⅡ群と分群した。また、未成品はＣ群、再加工途中と思われるものをＤ群として分群した。なお、通常サイズと小型の区分に用いた長さ８cmの基準は、何らかの研究成果を基に設定したものではなく、今回の出土品の観察所見と経験則から筆者が設定した数値である。ただし、欠損品の多い状況を鑑みて幅４cmの基準を加味させた。ただし、短冊形としたものは、今回の調査で幅が2.1cm以下の細身（スマート）なものしかないことから、撥形に限り幅４cmの数値を加味することとした。

ＡⅠ群：撥形の中で、長さ８cm以上、若しくは幅４cm以上を本群とした。706・709・729・747・799・803・804・807～810・812・815・820が該当する。完形品は706・729・799・812の４点のみである。706は、長さ8.3cm、幅3.0cm、厚さ1.5cm、重さ65.23ｇである。729は、長さ8.7cm、幅4.1cm、厚さ1.2cm、重さ66.33ｇである。799は長さ8.0cm、幅2.5cm、厚さ0.8cm、重さ26.0ｇである。812は、長さ22.5cm、幅7.25cm、厚さ3.65cm、重さ930.96ｇである。他は全て身部が欠損するものであることから長さは不明にあるが、幅3.9～5.0cm、厚さ1.4～2.6cmを測る。欠損品が多く、積極的に規模の観点から傾向を見出すことは難しいが、ＡⅠ群とした通常サイズの撥形の中でも706・799は幅の数値からは小形、729はやや小形と捉えられる。812は、突出して大きく、大形に相当すると考えられる。石材は、北上山地産の蛇紋岩と頁岩から構成される。ＲＡ010出土の709は縄文時代中期末葉の可能性があるものの、他は出土地・層位からは縄文時代中期～晩期の幅で可能性があり、詳細な時期を特定できない。

ＡⅡ群：小型撥形である。長さ８cm未満、若しくは幅４cm未満を本群とした。706・708・782・801・806・819が該当する。完形品は782・806の２点のみである。782は、長さ4.75cm、幅2.4cm、厚さ1.0cm、重さ20.73ｇである。806は、長さ4.0cm、幅1.3cm、厚さ0.4cm、重さ3.35ｇである。他は全て身部が欠損するものであることから長さは不明にあるが、幅2.3～2.5cm、厚さ0.7～1.4cmを測る。石材は、北上山地産の蛇紋岩を主体に頁岩・滑石から構成される。ＲＡ010出土の708は中期末葉の可能性があるものの、他は出土地・層位からは縄文時代中期～晩期の幅で可能性があり、詳細な時期を特定

できない。

ＢⅠ群：短冊形である。長さ８cm以上を本群とした。800が該当する。800は刃部が欠損する資料である。長さ9.05cm以上、幅1.8cm、厚さ1.0cm、重さ35.74ｇである。石材は、北上山地産の頁岩である。出土地・層位からは縄文時代中期の可能性が高いものの、詳細な時期を特定できない。

ＢⅡ群：小型短冊形である。長さ８cm未満を本群とした。783・817が該当する。783はほぼ完形、817は基部が欠損する。783は、長さ7.3cm、幅2.1cm、厚さ1.05cm、重さ32.9ｇである。806は、長さ4.3cm以上、幅1.0cm、厚さ0.5cm、重さ4.56ｇである。石材は、北上山地産の頁岩と滑石である。出土地・層位からは縄文時代中期～後期の可能性が高いものの、詳細な時期を特定できない

Ｃ　群：未成品と推定されるものを一括する。平面形状や法量値からは、今回未成品と判断したものは、全てＡⅠ群とした撥形の制作を意図したものであると考えられる。

磨製石斧の製作工程を「剥離調整段階」→「敲打調整段階」→「研磨調整段段階」と考え、各段階をそれぞれ１～３類に充て、以下に分類・記述する。

Ｃ群１類：剥離調整段階と捉えられるものである。736・753・802・814・816・821・822・824～826・876・884・886などが該当すると考えた。

その中で剥離調整の初期段階と思われるのが、原石そのものの一部に剥離がみられる736・753・822などの個体である。長さ14.1～19.5cm、幅7.2～9.5cm、厚さ2.3～3.85cm、重さ449.12～698.64ｇである。

ある程度剥離作業がすすんだ段階に位置づけられるのが816・876・886などで、表面などに自然面を残しながらも周縁に剥離が施されている。816は、長さ12.7cm以上、幅7.75cm、厚さ3.85cm、重さ401.37ｇである。

本段階の終盤には、平面形が石斧のそれに近い802・814・821・824～826・884などのようにほぼ全面に剥離が施されたものが該当すると考えられる。上記したとおり、平面形状から、何れもＡⅠ群とした撥形の未成品と捉えられる。長さ7.3cm～12.05cm、幅4.8cm～5.55cm、厚さ1.5～3.0cm、重さ112.73ｇ以上～250.47ｇである。825とＡⅠ群の完形品である729の法量値を比較すると、長さ1.3cm、幅が1.0cm、厚さが0.1cm、重量約50ｇの差異がある。Ｃ群１類にみられる石材は、北上山地産の輝緑凝灰岩を主体に同産の蛇紋岩・頁岩・閃緑岩である。出土地・層位からは縄文時代中期～晩期の幅で可能性があり、詳細な時期を特定できない。

Ｃ群２類：敲打調整段階と捉えられるものである。773・813・823・886・892などが該当すると考えた。

敲打調整の初期段階と思われるのが、823・892である。892は、平面形状は石斧状ではなく、刃部の作出もされていないものの、側面に打ち欠き痕を切り敲打調整が密にみられることから、ここに含めた資料である。他器種である可能性もあることを補足しておく。長さ10.6cm以上、幅6.15～7.3cm、厚さ1.9～4.3cm、重さ169.56～574.81ｇである。ある程度敲打作業がすすんだ段階に位置づけられるのが773で、左側面に剥離、右側面に磨面を残しながらも周縁に全体的に敲打が施されている。右側面に形成されている磨面について、本報告でＣ群３類段階とした研磨調整段階のものとするには、773は厚みが有り過ぎる。なお、磨製石斧未成品において、この一側面に磨面を形成するものは、筆者の知見では普代村力持遺跡の剥離調整段階の初期のものに一定量みられたことから、本報告でＣ群１類とした剥離調整の中でもより前段階に行われた作業と考えたい。この773は、長さ6.95cm、幅6.5cm、厚さ3.75cm、重さ275.733ｇである。本段階の終盤には、平面形が石斧状の813のようなほぼ全面に敲打が施されたものが該当すると考えられる。この813は敲打調整中に破損して制作放棄されたと考え

られるもので、長さ8.8cm以上、幅6.6cm、厚さ3.5cm、重さ256.92ｇである。幅の数値を見る限り、大形品の制作を意図した可能性も窺える。Ｃ群２類にみられる石材は、北上山地産の閃緑岩・はんれい岩・カンラン岩・頁岩である。出土地・層位からは縄文時代中期～晩期の幅で可能性がある。

Ｃ群３類：研磨調整段階と捉えられるものを本類とする。掲載した中では811と818が該当するが、不掲載を含めても非常に少ない。811は、側面や裏面の加工途中のものと捉えたが、刃部は両面とも研磨が施されており、成品である可能性もある。長さ6.05cm以上、幅4.0cm、厚さ1.85cm、重さ64.12ｇである。818は、全面に敲打調整が施され、表面の一部分に研磨痕がみられる。この818は、基部は折れ面の状態にあるが、欠損と捉えるかこの後に加工が施されるものなのか難しい状況にある。また、敲打調整と研磨痕の在り方から最終段階と捉え本類に位置付けたが、厚みがあり刃部の作出が弱いように思われる点で、Ｃ群２類段階の域を出ない資料にも受け取れる。長さ9.1cm以上、幅7.0cm、厚さ3.35cm、重さ421.68ｇである。石材は、北上山地産の蛇紋岩・はんれい岩である。出土地・層位からは縄文時代中期～晩期の幅で可能性がある。

Ｄ　群：再加工途中と思われるものである。掲載した中では805が該当する。805は、刃部の再加工途中と考えられる。長さ7.45cm、幅4.5cm、厚さ2.6cm、重さ137.74ｇである。石材は、北上山地産の閃緑岩である。出土地・層位からは縄文時代中期～後期の幅で可能性があり、詳細な時期を特定できない。

（12）半円状扁平打製石器

外縁を全周打ち欠き、一側縁が直線状、反対側縁が弧状の半円形に仕上げているもので、半円状扁平打製石器とした。858の１点出土し掲載した。弦にあたる右側面に幅約1.2cmの磨面を形成し、孤にあたる左側面やその縁辺には敲打が施されている。なお、この磨面は縁辺に打ち欠きされた痕跡がある（※磨滅しているが剥離と捉えられる）。長さ16.8cm、幅9.2cm、厚さ2.5cm、重さ613.18ｇである。石材は、北上山地産の輝緑凝灰岩である。出土地・層位からは縄文時代中期の可能性があるものの特定できない。

（13）抉入扁平打製石器

外縁を打ち欠き、一側縁が直線状、反対側縁が弧状の半円形で抉りが施されたものを、抉入扁平打製石器とした。859の１点出土し掲載した。平面形状は半円状扁平打製石器に類似するが、孤にあたる部分に抉りが施されることで、分けて捉えた。弦にあたる部分の側面には、磨面の形成はみられない。長さ15.5cm、幅7.4cm、厚さ1.55cm、重さ246.52ｇである。石材は、奥羽山脈産の頁岩である。出土地・層位からは縄文時代中期の可能性があるものの特定できない。

（14）磨　　石

研磨痕跡の観察される礫石器である。本器種の認定に際しては、敲石・石棒・自然礫などとの区別が困難な個体も多かった。以下の基準で他器種と区別を行った。①磨面が他の使用加工痕を截っているもの。②磨面の広がりが顕著（他の痕跡に比して優勢）と判断したもの。③自然摩耗か意図的な擦痕か区分が難しいものの、出土状況等から意図的に遺跡内に持ち込まれたと思われるもの。①～③の基準を満たすものは396点出土し、その内43点掲載した。703・705・712～714・718・725～728・730・739～741・743・748・751・752・759・769・771・780・789～791・828～845が該当する。長さ3.8～29.0cm、幅3.2～15.1cm、厚さ3.3～8.3cm、重さ54.27～5000.00ｇである。所見として、725・741・

748・771など重さ1000ｇを超えるものについては、手に持ち動作するには適さないように思われることから、台石的に置いた状態で磨るような行為が行われた可能性もあろう。ＲＡ005出土の703は縄文時代前期前葉、ＲＡ006出土の705は縄文時代前期後葉、ＲＡ010・012出土の712～714・718は縄文時代中期末葉の可能性が高い。他は縄文時代前期～晩期・中・近世までの可能性があり、時期の特定はできない。

留意点として、本報告で磨石とした中には、敲石や磨製石斧の未成品と考えられるものもあり、本報告で示した器種定義から逸脱するものが含まれている可能性もあることを補足しておきたい。

（15）特　殊　磨　石

扁平気味の礫を用い、１側面にのみ磨面が形成されているものを特殊磨石と呼び、通常の磨石とは区分して器種登録した。５点出土し、４点掲載した。704・711・733・827が該当する。長さ7.4～14.5cm、幅6.8～8.65cm、厚さ2.3～4.25cm、重さ218.60～624.19ｇである。磨面の幅は、704が約1.8cm、711が約1.4cm、733が約2.2cm、827が約1.0cmである。石材は、北上山地産の花崗閃緑岩・チャート・閃緑岩と奥羽山脈産のデイサイトである。出土地・層位からは縄文時代前期～中期の時期幅で可能性がある。

留意点として、磨石とした中には類似品が相当数含まれるが、１側面以外の部分に磨面や敲打痕などが認められるものについては本品に含めていない。また、これらはいわゆる半円状扁平打製石器とは平面形状などが相違することから便宜的に区分した。ただし、704や733を見る限り磨面が形成されている側面において、半円状扁平打製石器と同様に磨面を切る剥離が施されていることと、磨面幅が近い数値を示すことでは共通する要素と思われ、同じ用途に用いられている可能性も考えられる。

（16）敲　　石

敲打痕が観察される礫石器である。他の使用痕等が複合する場合、敲打痕がもっとも新しい痕跡であると判断されたものをここに含めた。53点出土し、10点掲載した。738・745・794・798・846～851が該当する。長さ4.9cm以上～13.7cm、幅4.4～9.7cm、厚さ3.1～5.7cm、重さ109.28～554.32ｇである。石材は、北上山地産の頁岩・はんれい岩・砂岩・閃緑岩・蛇紋岩、奥羽山脈産の安山岩である。特殊なものとしては、上下の端部何れかに敲打痕を有するものや、複数面若しくは多面的に敲打痕を有するものがある。798は調査区中央部捨て場から出土しており縄文時代前期後葉の可能性が高い。他は出土地・層位からは縄文時代前期～中期及び中・近世の時期幅で可能性がある。

（17）凹　　石

明瞭な凹部を確認できるものを凹石とした。15点出土し、６点掲載した。731・734・854～857が該当する。石器の中心軸線上で石器中央部よりやや上に凹部が形成されているものが多い。長さ7.2cm以上～17.6cm、幅6.2～8.6cm、厚さ3.1～4.2cm、重さ224.24～672.63ｇである。凹部の深さは２～５㎜である。普代村力持遺跡の調査で実施された凹石の使用痕分析結果を参考とすると、オニグルミ殻の先端を敲き飛ばす道具である可能性が高い。石材は、北上山地産の輝緑凝灰岩・デイサイト、奥羽山脈産の砂岩である。出土地・層位からは縄文時代中期～後期の可能性があるものの特定できない。

（18）石　　皿

主に大形の扁平礫を素材とし、周縁に高まりが巡らされ、その内部の形成された使用面に研磨痕・

敲打痕・磨耗痕などが観察される礫石器である。31点出土し、11点掲載した。715・746・749・750・860～866が該当する。長さ7.8ｃｍ以上～17.55cm、幅6.5cm以上～16.3cm、厚さ1.9～6.2ｃｍ、重さ182.37～1158.67ｇである。石材は、奥羽山脈産の安山岩が顕著に用いられている。それに奥羽山脈産の砂岩、北上山地産の花崗岩である。ＲＡ010出土の715は縄文時代中期末葉の可能性があるものの、他は出土地・層位からは縄文時代中期～晩期の幅で可能性があり、詳細な時期を特定できない。

（19）砥　　石

溝砥痕など、研磨に使用したと思われる痕跡を有する石器である。５点出土し、２点掲載した。717・852が該当する。717は、複数面に溝砥痕がみられ、形状も三角錐に近い。長さ7.2cm、幅7.4cm、厚さ4.7cm、重さ98.00ｇである。石材は、奥羽山脈産の安山岩である。852は、扁平な形状で４面にわたり砥痕がみられる。長さ11.65cm、幅4.4cm、厚さ3.3cm、重さ265.69ｇである。石材は、奥羽山脈産の頁岩である。ＲＡ012出土の717は縄文時代中期末葉の可能性がある。852は出土地・層位からは縄文時代中期～後期及び中・近世のまでの幅で可能性があるものの、砥痕のあり方などからは古代以降の産物と推定しておきたい。

（20）台　　石

作業台的な使用が想定される扁平な礫である。45点出土し、14点掲載した。724・744・755・756・758・760～763・768・770・772・867・868が該当する。大半が自然礫そのままの形状であり、素材の選択の段階で、扁平な礫が選ばれていると考えられる。作業面に磨痕が確認できるものも含まれるが、石皿としたものと比べると磨耗の発達具合が弱い。長さ12.6cm以上～28.8cm、幅9.6～33.2cm、厚さ2.85～10.1cm、重さ662.87～11604.00ｇである。ＲＡ017出土の724は縄文時代中期末葉と捉えられる。ＲＨ047出土の759～763は中世の可能性が高い。他は出土地・層位からは縄文時代中期～後期及び中・近世までの幅で可能性があるものの、時期の特定はできない。

（21）石　　錘

側面に施された抉りの状況から石錘と推定されるものを一括する。61点出土し、16点掲載した。707・710・720・722・723・735・737・774～776・784・787・788・792・853・869が該当する。長さ5.9～9.2cm、幅5.6～9.9cm、厚さ1.1～2.5cm、重さ65.74～278.30ｇである。平均的には長さ７～８cm、幅5.5～6.5cm、厚さ1.5～2.0cm、重さ120ｇ前後が多い。抉りの深さは、２～８㎜である。石材は、北上山地産の輝緑凝灰岩・頁岩・砂岩、奥羽山脈産の頁岩・安山岩である。主体は北上山地産の輝緑凝灰岩である。竪穴住居跡出土の710・720・722・723は縄文時代中期末葉の可能性が高い。他は出土地・層位からは縄文時代中期が制作時期の主体と思われるが、詳細な時期を特定できない。

（22）礫　　器

礫石器の中で、上記の（11）～（21）の各器種に帰属できなかった礫石器、あるいは石器の可能性を有するが形態的な特徴や各種使用痕が明瞭に確認できなかったものなどをここに一括した。417点出土し、34点掲載した。716・719・721・754・757・764～767・777～779・781・785・795・870～875・877～883・885・888～891が該当する。長さ5.15～22.6cm、幅4.2～10.5cm、厚さ0.8～3.3cm、重さ45.67～598.47ｇである。平面形状・規模・特徴など様々で、あるいは何らかの未成品である可能性を有するものも多い。代表的なものを取り上げ以下に文章記載する。

716は、右側面に剥離が施されるもので、特殊磨石の未成品の可能性もある。719・721・766・871・890は、半円状扁平打製石器の未成品の可能性も想定される形状である。754・778・779は下端や側面に刃部を作出したような剥離が施されるものである。これを刃部と捉えた場合、鋭利な刃部を必要としない用途の成品（石鍬？）とも推定されるが、平面形状からは磨製石斧の未成品の可能性もあろうか。757は、上下端に剥離が施される。764・765は、下端などに剥離・左右の側面や上端などに敲打痕が施されるものである。磨製石斧の未成品若しくは754などと同様の用途の可能性が窺える。785・786は、鍬状の平面形状であるが、下端には刃部が作出されていない。土掘りに使用する類の用途であろうか。870は、上下端に敲打痕が見られる。敲石の可能性もあるものの、平面形状的には磨製石斧の未成品の可能性もある。872～874・887～880・882・883は、平面形円形の礫の下端に剥離が施される特徴を有するものである。

石材は、北上山地産の頁岩と同産の輝緑凝灰岩が主体で、これら２種類で約80％を占める。出土地・層位からは縄文時代中期～後期の幅で可能性があるものの、時期の特定はできない。

(23) 軽　石　製

軟質な安山岩製の石器を軽石製と呼称し、一括して扱う。49点出土し、10点掲載した。不掲載の多くは小破片である。732・742・793・796・797・893～897が該当する。長さ5.4～11.1cm、幅4.4cm以上～8.5ｃｍ、厚さ1.4～6.45cm、重さ17.24～477.91ｇである。石材は、奥羽山脈産の安山岩である。同じ安山岩でも、石錘や磨石に用いられるものは新生代第三紀で、本機種や石皿などに用いられるものは新生代第四紀のものである。大半は出土地・層位からは縄文時代中期～後期の可能性がある。ただし、中には中・近世の柱穴状土坑から出土したものもあり、時期の特定はできない。

4　石　製　品

石製品は249点出土した。内訳は石棒102点、石刀類68点、石剣17点、円盤状石製品31点、有孔石製品３点、板状石製品16点、不明石製品10点、軽石製石製品２点である。その内、83点を掲載した。

（1）石　　棒

全体の形状が棒状を呈する礫の中で、断面形が円形に近いものである。本器種には、自然礫あるいは磨石・敲石との区別が難しく、本来これらに帰属させるべき個体が混入している可能性があることをお断りしておく。102点出土し、39点掲載した。901・903～908・913・917～919・921・922・924・925・927～929・935～955が該当する。長さ6.3～43.6cm、幅1.5～12.6cm、厚さ0.8～8.5cm、重さ12.2～8400.00ｇである。石材は、北上山地産の頁岩・輝緑凝灰岩・粘板岩、奥羽山脈産のデイサイト、北上山地産の砂岩の順に多い。ＲＡ010出土の903～908とＲＡ012出土の913は縄文時代中期末葉の可能性が高い。940は、柄の部分に印刻された三叉文から晩期初頭と捉えられる。その他については、縄文時代前期～晩期の時期幅で考えられる。

（2）石 刀 ・ 石 剣

全体の形状が棒状を呈するもののうち、断面形が円形のもの以外を一括した（断面形円形のものは石棒類に登録している）。自然礫との区別が難しく、人為による製作品以外の個体が含まれた可能性は高い。85点出土し、18点掲載した。923・932～934・956～963が該当する。断面形が楕円片刃のも

のと断面形が楕円両刃のものの両者がみられる。また、902と958は、基部側の身部に穿孔を持ち、孔は表裏両側から穿たれている。長さ4.8cm以上～20.8cm以上、幅1.6～6.7cm、厚さ0.5～3.5cm、重さ3.8～457.83ｇである。石材は、北上山地産の頁岩・輝緑凝灰岩・粘板岩、奥羽山脈産のデイサイト・頁岩がある。ＲＡ007出土の902は縄文時代前期後葉、ＲＡ010出土の909～911とＲＡ017出土の916は縄文時代中期末葉と捉えられる。958は出土地・層位から、前期前葉若しくは前期後葉の可能性がある。その他は縄文時代前期～晩期の時期幅で考えられる。

（3）円盤状石製品

縁辺を打ち欠く、または研磨することによって円盤状に整形されているものである。31点出土し、12点掲載した。920・964～974が該当する。磨くなどして薄手の楕円形に仕上げられているものと、礫片の縁辺を打ち欠いて円形に仕上げているものがある。長さ4.0～10.9cm、幅3.8～9.6cm、厚さ0.6～1.6cm、重さ13.60～211.57ｇである。石材は、北上山地産の頁岩と奥羽山脈産の頁岩を主体とする。出土地・層位から縄文時代後期を中心に前期～晩期の時期幅で考えられる。

（4）有孔石製品

穿孔が施された石製品のうち他器種に属さないものをまとめたものである。３点出土し、３点掲載した。931・980・981が該当する。孔は両側から穿たれている。孔の位置は、中心より右辺に近く、やや上に寄った位置にある。長さ2.1～3.9cm、幅2.0～3.05cm、厚さ0.5～1.0cm、重さ3.28～13.16ｇである。石材は、奥羽山脈産の頁岩と北上山地産の赤色頁岩がある。出土地・層位から縄文時代中期～晩期の時期幅で考えられる。

（5）板状石製品

16点登録し、７点掲載する。926・930・975～979が該当する。長さ6.6cm以上～17.4cm、幅4.3～8.0cm、厚さ1.1～1.5cm、重さ74.06～358.18ｇである。石材は、全て奥羽山脈産の頁岩である。出土地・層位から縄文時代中期～晩期の時期幅で考えられる。

（6）不明石製品

人工品と思われるものの、名称の付け難いものを一括した。９点登録し、３点掲載する。912・982・983が該当する。912は、長さ5.6cm、幅3.0cm、厚さ1.35cm、重さ12.80ｇで、奥羽山脈産の凝灰岩である。全面が磨かれている。982は、長さ8.1cm、幅3.6cm、厚さ2.9cm、重さ49.31ｇで、奥羽山脈産の安山岩である。全体の形状は石棒状で、横方向に剥離がみられる。983は、長さ5.1cm、幅5.8cm、厚さ0.9cm、重さ33.95ｇで、奥羽山脈産のデイサイトである。上端に剥離、縁辺に敲打痕が見られる。

（7）軽石製石製品

遺跡内に持ち込まれている奥羽山脈産の新生代第四紀の安山岩（軽石）製の中で、非実用品と思われた２点を軽石製石製品と呼称し、その内915の１点を掲載した。なお、人為的な加工が施されていない軽石片は礫石器の項に含んでいる。長さ4.2cm以上、幅5.8cm、厚さ2.0cm、重さ42.41ｇである。左側面に磨面を持ち、裏面には溝砥痕に類似する痕跡がある。

5　古代の土器

須恵器片１点と土師器片３点が出土した。その内、須恵器片（1001）と土師器片２点（1002・1003）を掲載した。出土地は、何れも調査区東部Ⅳ層で、単発的に出土している。帰属時期は平安時代である。

6　石　　鉢

1011の１点出土した。ＲＨ047の集石を構成していた４片が接合したものである。口縁部～胴部が残存するものの、底部を欠く。帰属時期は特定できないが、中世のＲＥ002・003や、近世のＲＢ001～003と近接した位置関係にあることから、中・近世と推定される。

7　陶器・陶磁器

11点出土し、その内近代より古いと捉えられる1012～1020の９点を掲載した。1012・1013・1018は、瀬戸・美濃産の皿で、年代は17世紀前半登Ⅰと考えられる。1014は、大堀相馬産の腰さびの碗で、18世紀代と考えられる。1015は、肥前産の碗で18世紀代と考えられる。1016・1017・1019は産地・時期不明で、1016が小鉢、1017・1019が碗である。1020は産地不明のすり鉢で、中世の可能性がある。

8　金属製品

（1）古　　銭

今回の調査では、13枚出土し、全て掲載した。1021～1026・1028～1033・1039である。識別できたものは、北宋銭と明銭に分かれる。北宋銭としては、嘉祐通寶（かゆうつうほう1056年）、熙寧元寶（きねいげんぽう1068年）、元豊通寶（げんぽうつうほう1078年）の３種類が、明銭は洪武通寶（こうぶつうほう1368年）、永樂通寶（えいらくつうほう1408年）の２種類が出土している。鋳造年の古い順に記述する。

1023は嘉祐通寶で、ＲＤ162の埋土下位より出土した。このＲＤ162は、平面形が方形を呈し、埋土は人為堆積で、中・近世の墓壙と考えられる。長径2.45cm、短径2.50cm、穿孔部0.75cmである。1022の熙寧元寶と1025の元豊通寶は、種不明の1021と伴にＲＤ133より出土した。1022は、長径2.35cm、短径2.35cm、穿孔部0.70cmである。1025は、長径2.35cm、短径2.45cm、穿孔部0.70cmである。1021は、長径2.30cm、短径2.30cm、穿孔部0.65cmである。1026の洪武通寶は、ＲＥ003竪穴建物跡の埋土下位より出土した。このＲＥ003は、近世の掘立柱建物跡であるＲＢ001～003に切られる関係にあり、中世と推定される。長径2.25cm、短径2.20cm、穿孔部0.65cmである。永樂通寶は、1028・1029・1039の３枚出土した。1028の永樂通寶は、1013の瀬戸・美濃産の皿と伴に281号柱穴状土坑から、1029と1039は遺構外より出土した。この281号柱穴状土坑は、ＲＢ001～003に近接することから近世と考えられる。長径2.45～2.55cm、短径2.45～2.50cm、穿孔部0.60～0.65cmである。

（2）鉄　製　品

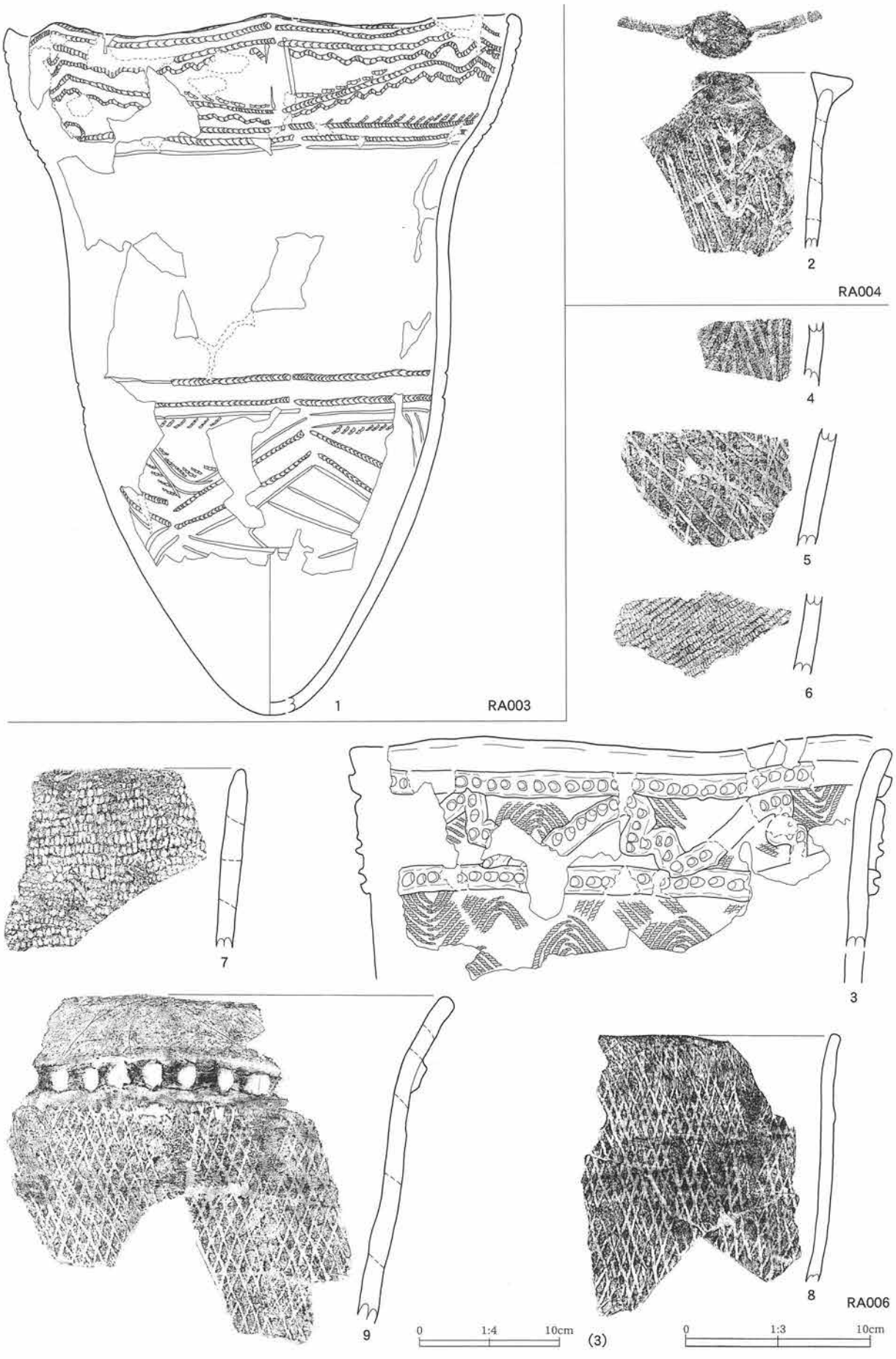
1027・1034～1038の6点出土した。1027は棒状を呈する破片で、ＲＢ001を構成する115号柱穴状土坑より出土した。1034～1038は、調査区東部の遺構外出土で、出土層位は1034・1035がⅠ層、1038がⅢ～Ⅳ層、1036・1037がⅣ層である。1038は刀子で、長径5.8cm、短径1.15cmを測る。その他は器種不明にあるが、1034はパイプの煙管？、1035は釘？の可能性がある。

9　琥　　珀

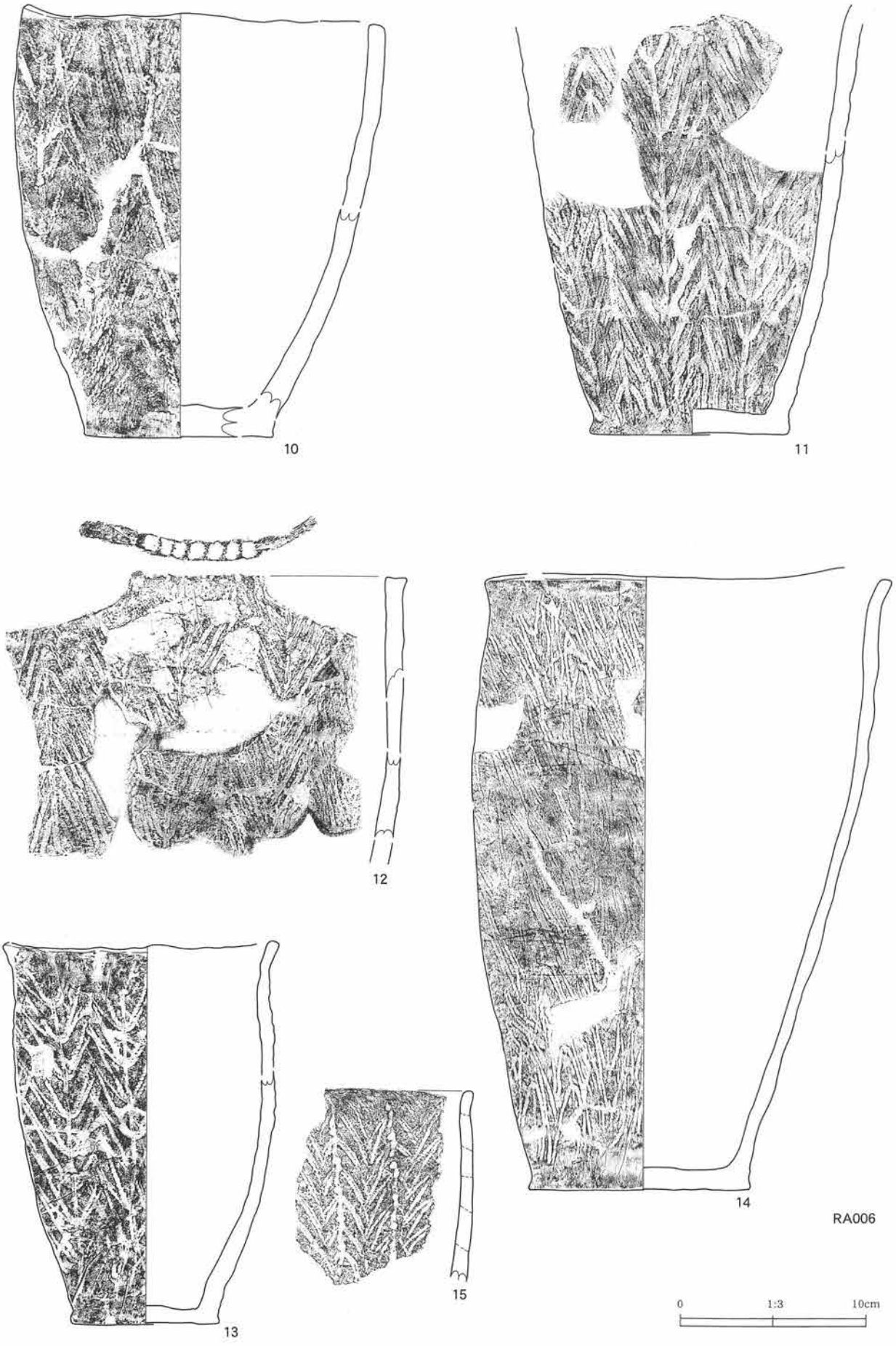
今回の調査では3地点より、3.75ｇの琥珀が出土した。垂飾品や玉類などの加工されたものは無く、全て2～5㎜（約0.1ｇ）の細片である。全般的な傾向として脆いという特徴が看取される。出土地は、ＲＡ009の床面直上層、ＲＡ010埋土下位、ＲＤ146埋土4層から出土した。個々の遺構からの出土状況は、特殊性は窺えず、むしろ土器や石器と一緒に廃棄された様相で捉えられた。

＜産地＞（財）元興寺文化財研究所による熱分析で琥珀の成分の違いを検討した。その結果、全て同一産地ではない可能性が示唆された。ただし、遺跡の性格および地理的な条件を考慮すると、久慈市産の琥珀である可能性はかなり高いと考えられた。

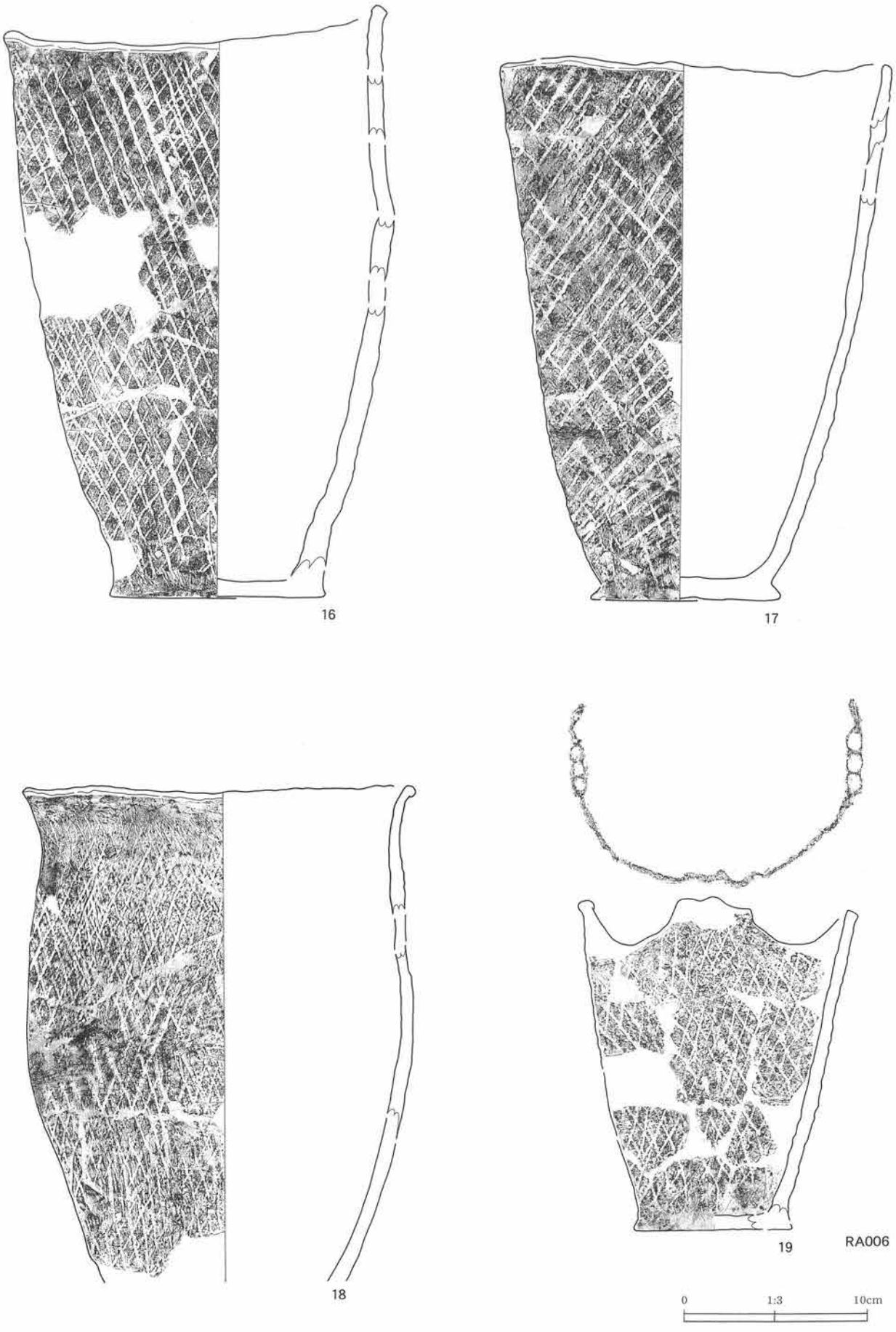
＜時期＞琥珀の時期は、出土遺構の時期や共伴遺物などから、縄文時代中期期末葉中心と考えられる。



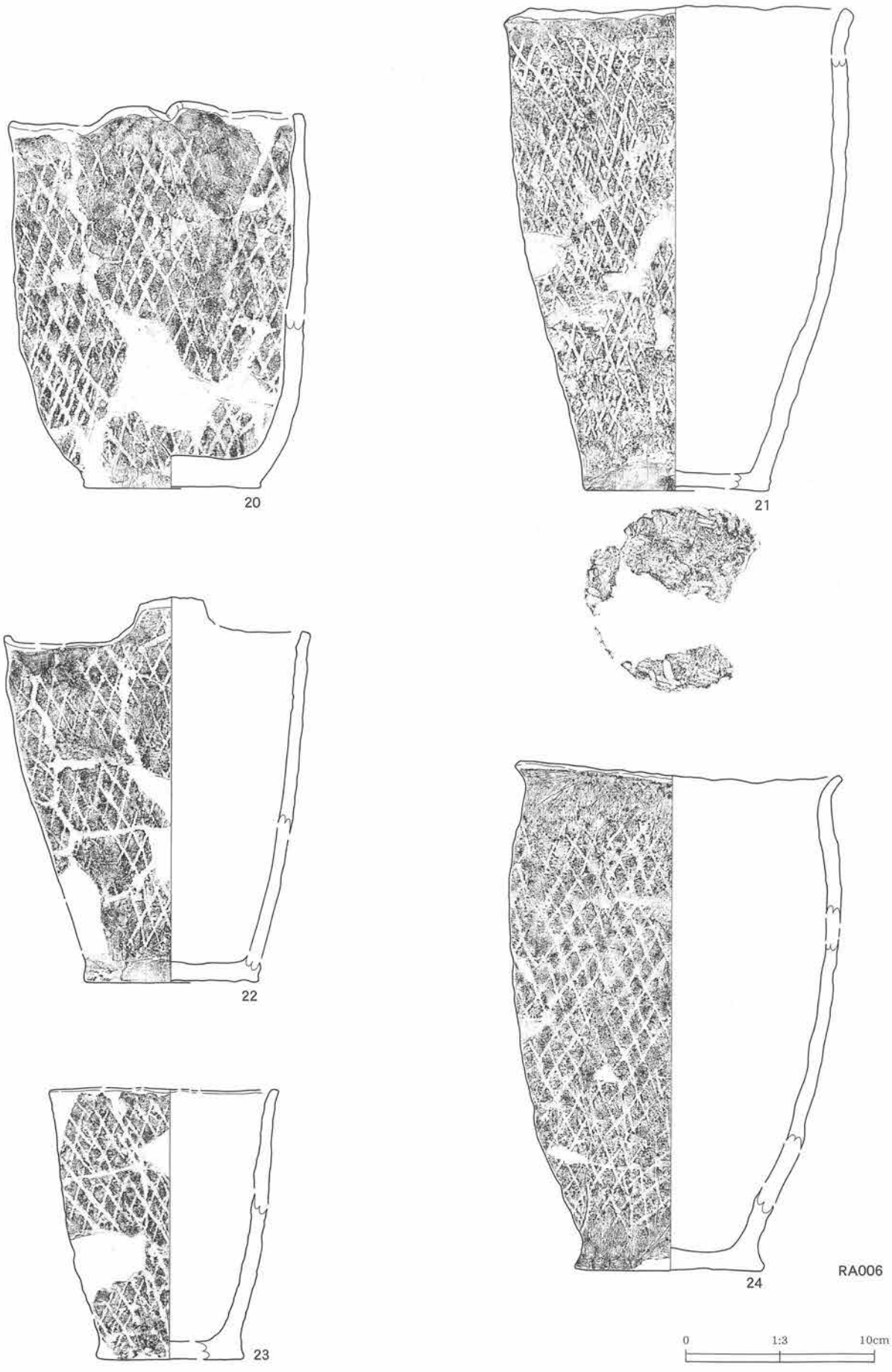
第74図　遺構内出土土器（1）



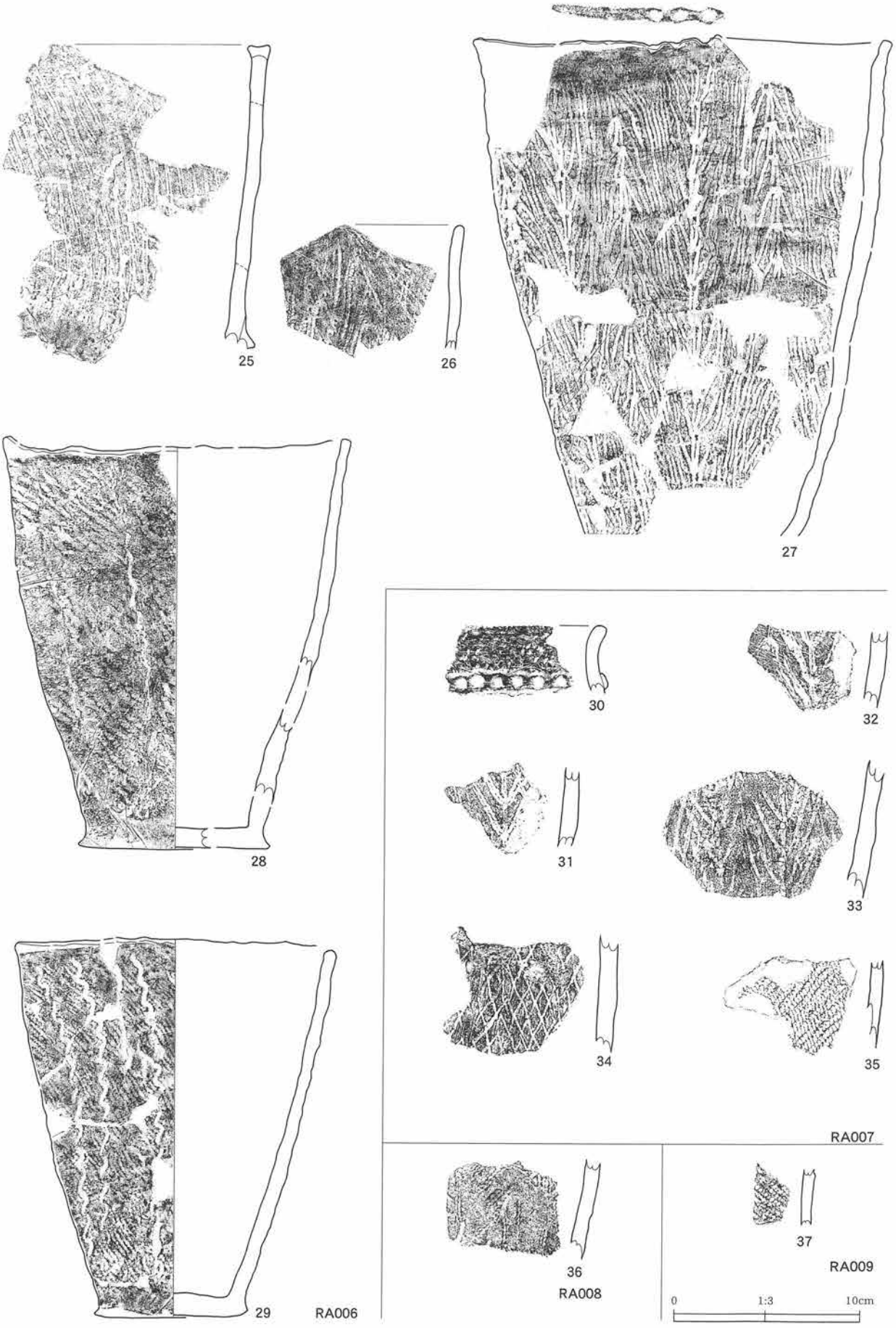
第75図　遺構内出土土器（２）



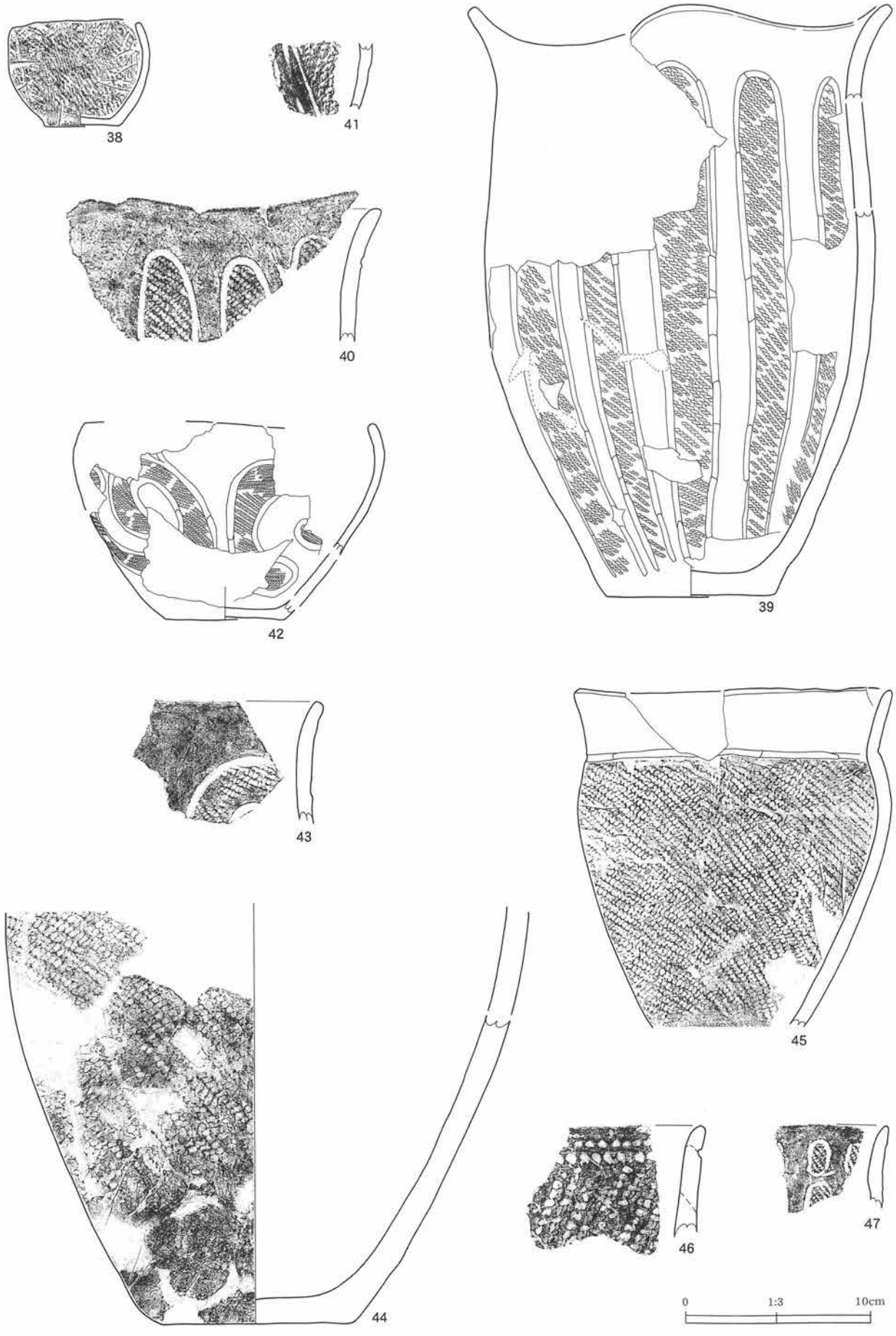
第76図　遺構内出土土器（３）



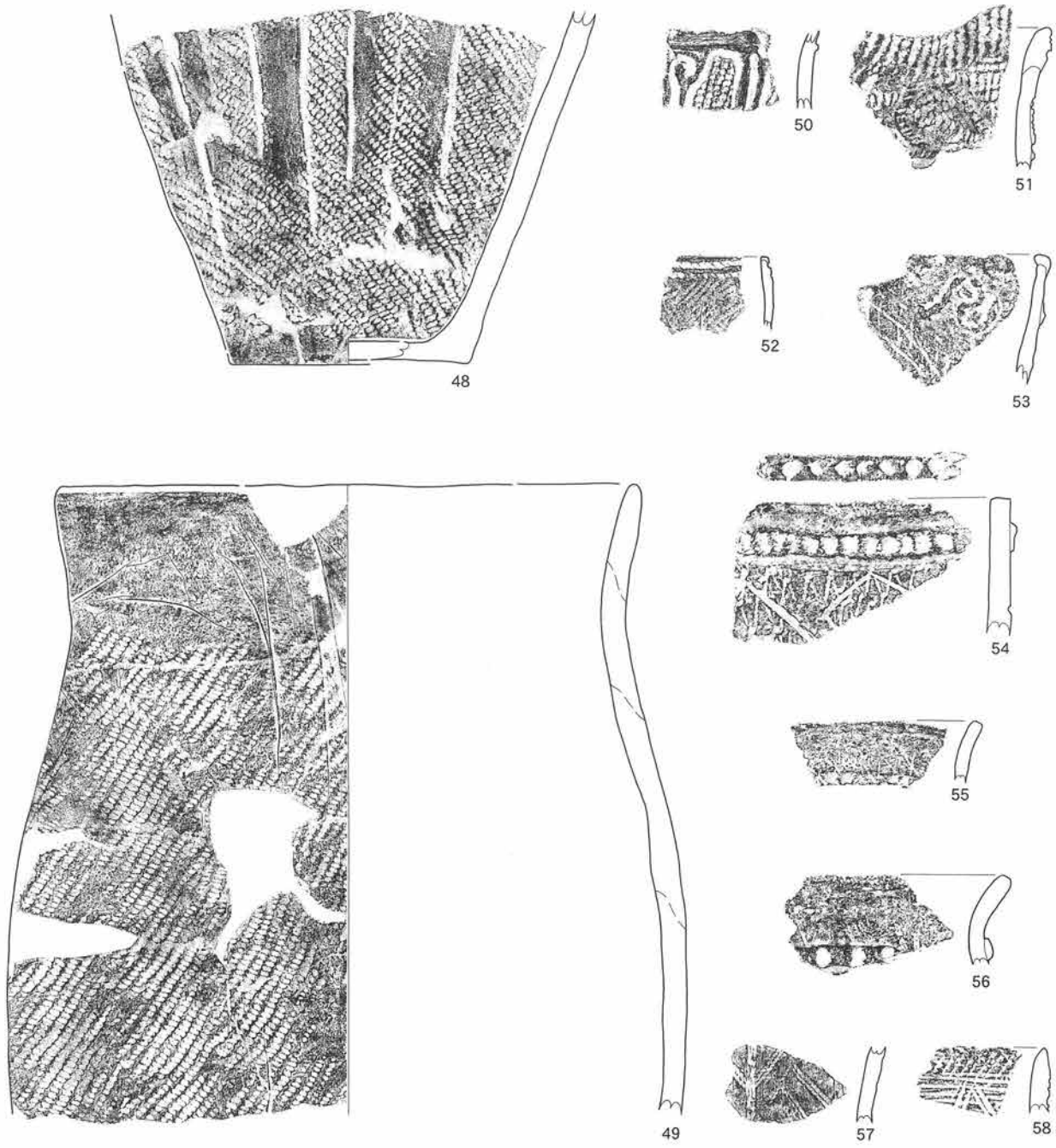
第77図　遺構内出土土器（４）



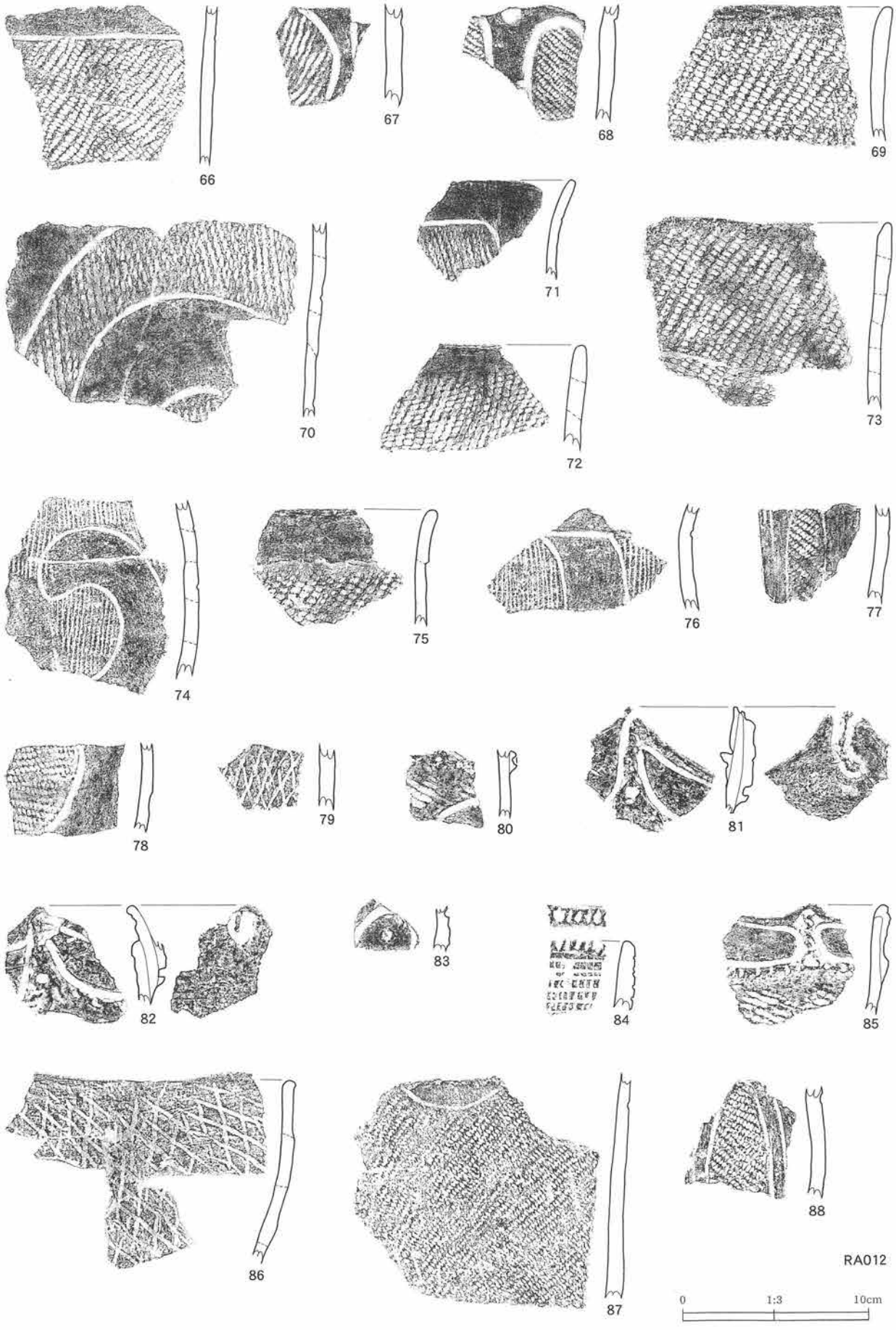
第78図　遺構内出土土器（5）



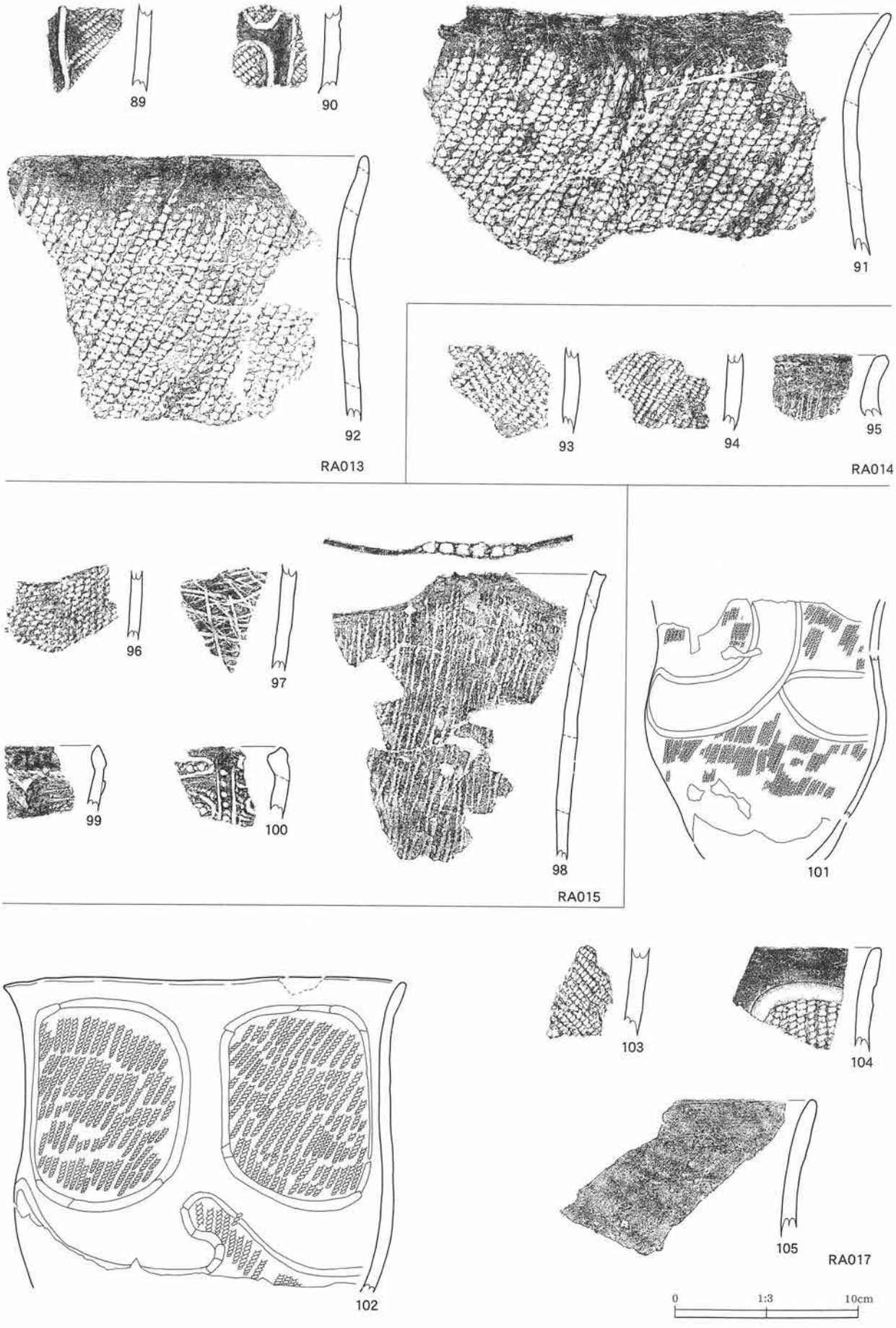
第79図　遺構内出土土器（6）



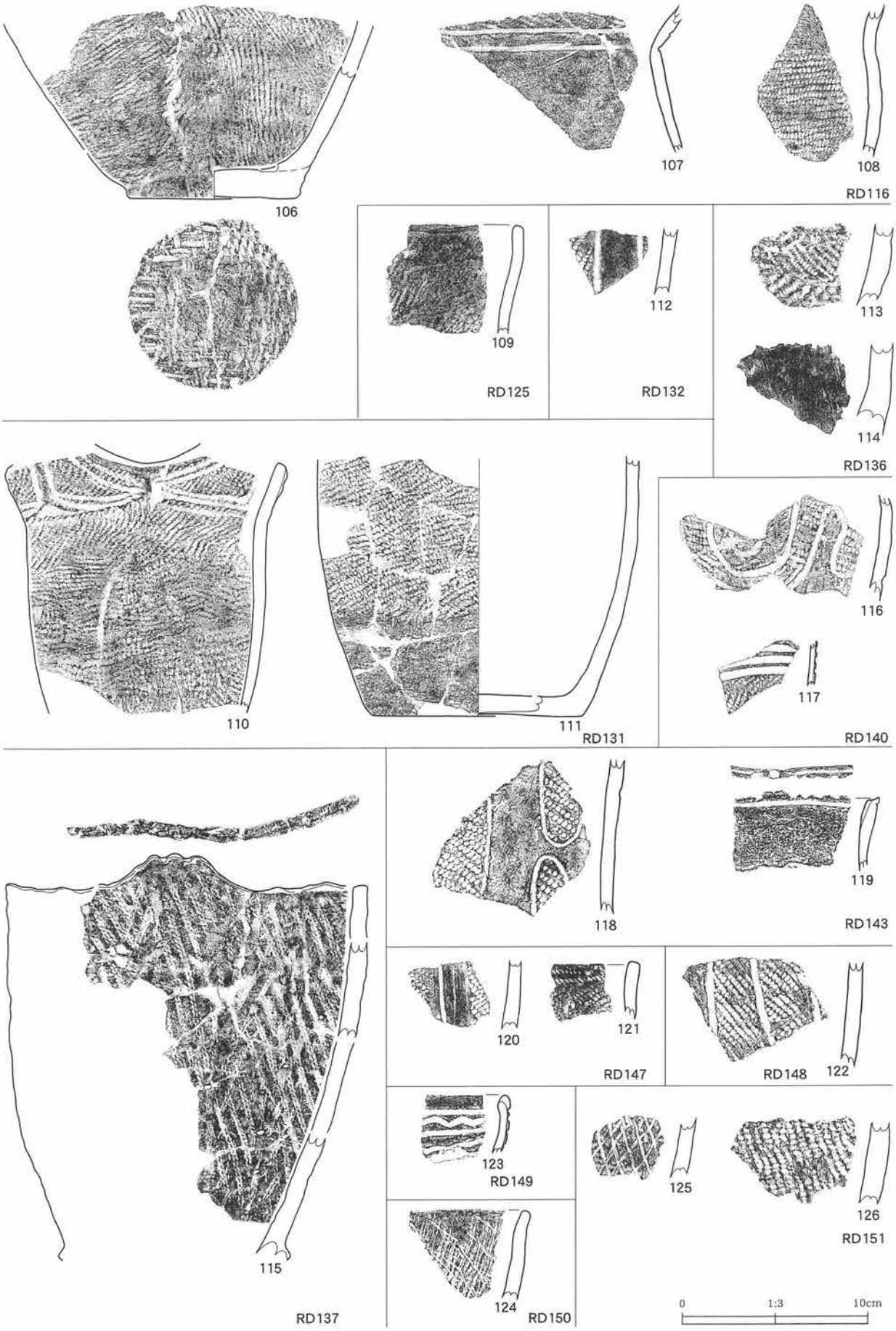
第80図　遺構内出土土器（7）



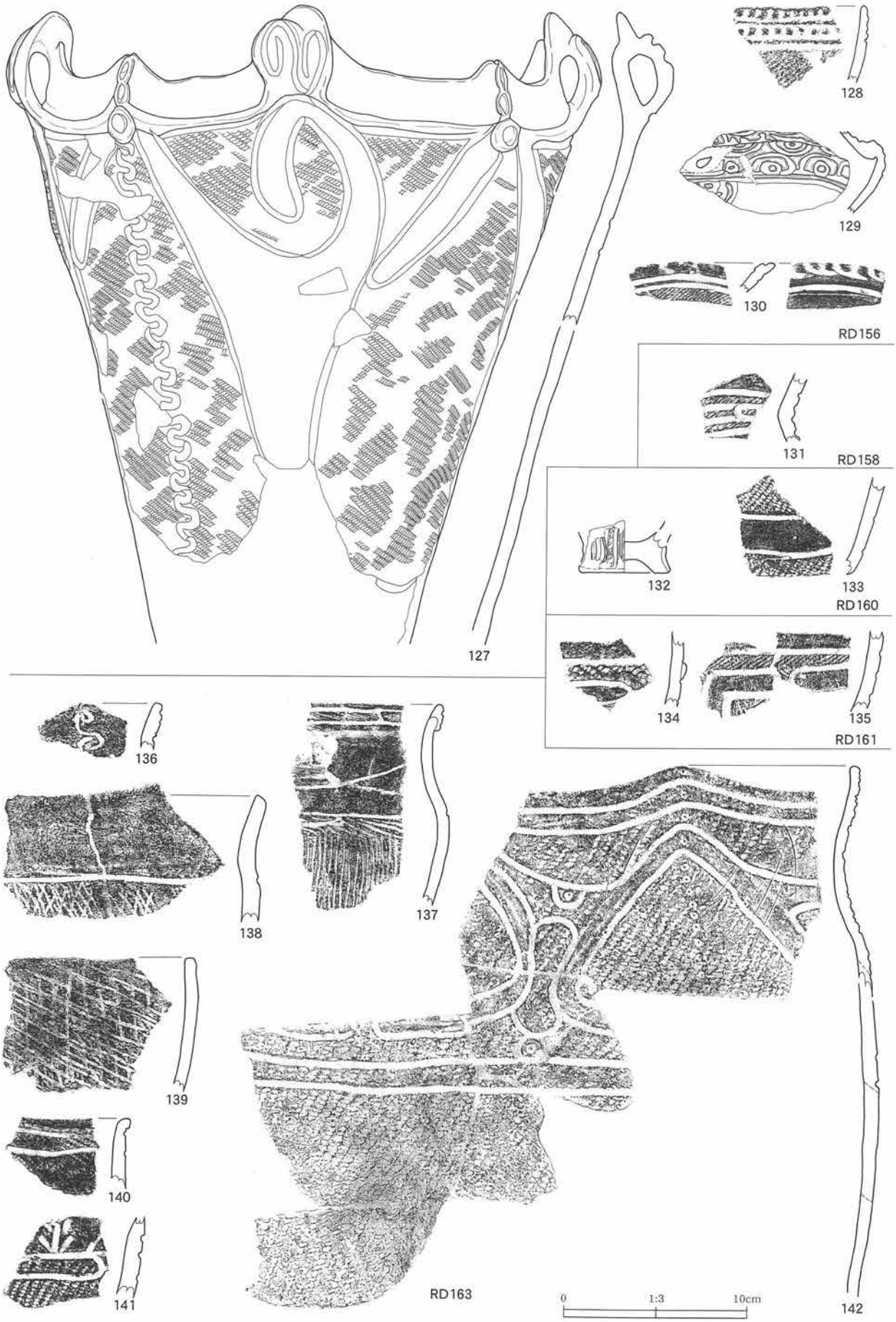
第81図　遺構内出土土器（8）



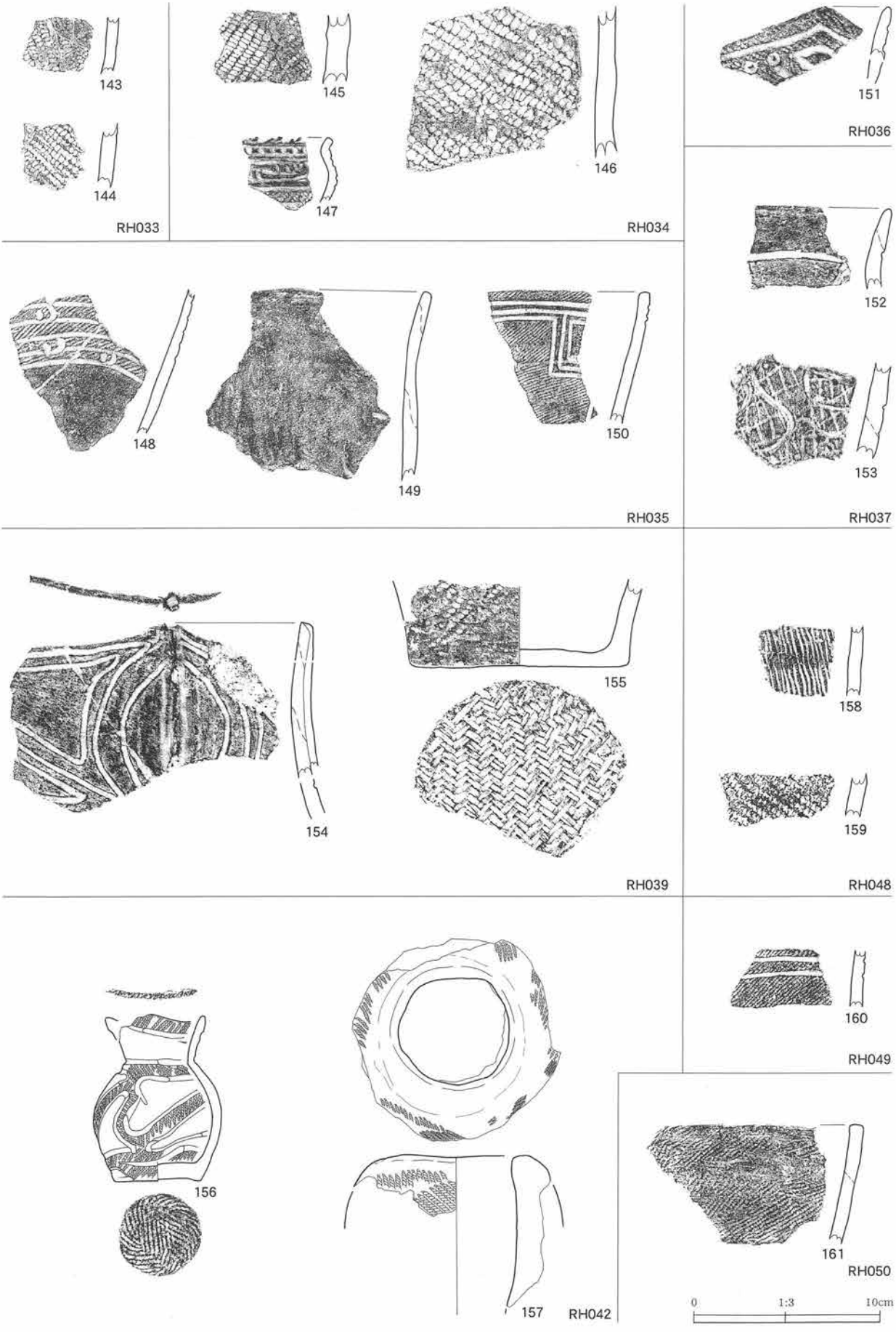
第82図　遺構内出土土器（9）



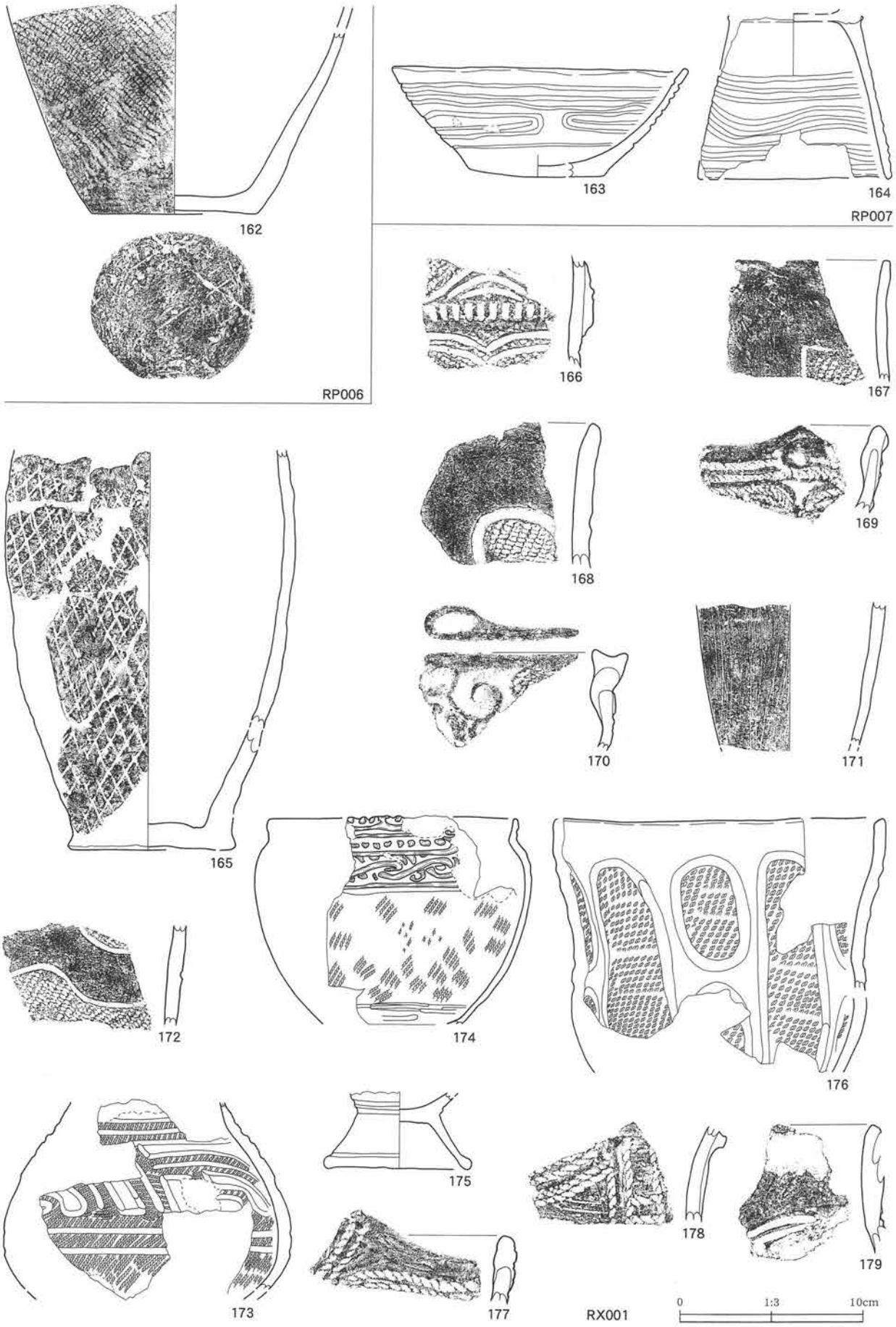
第83図　遺構内出土土器（10）



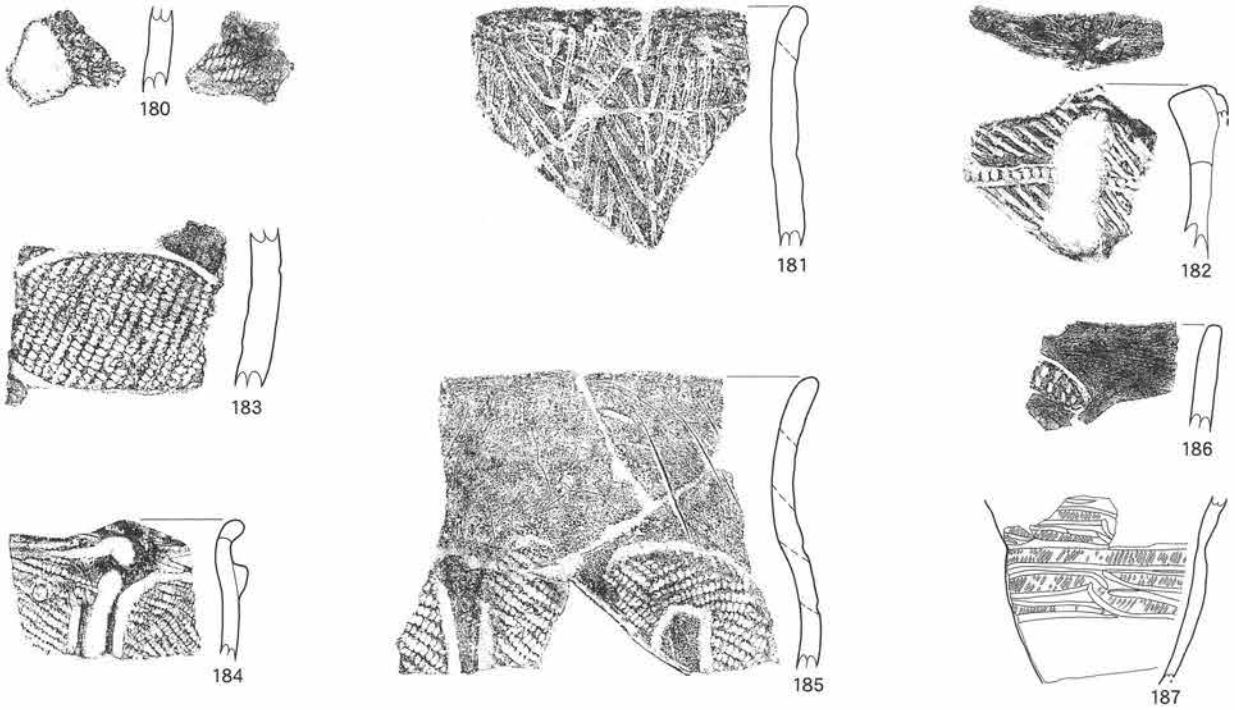
第84図　遺構内出土土器（11）

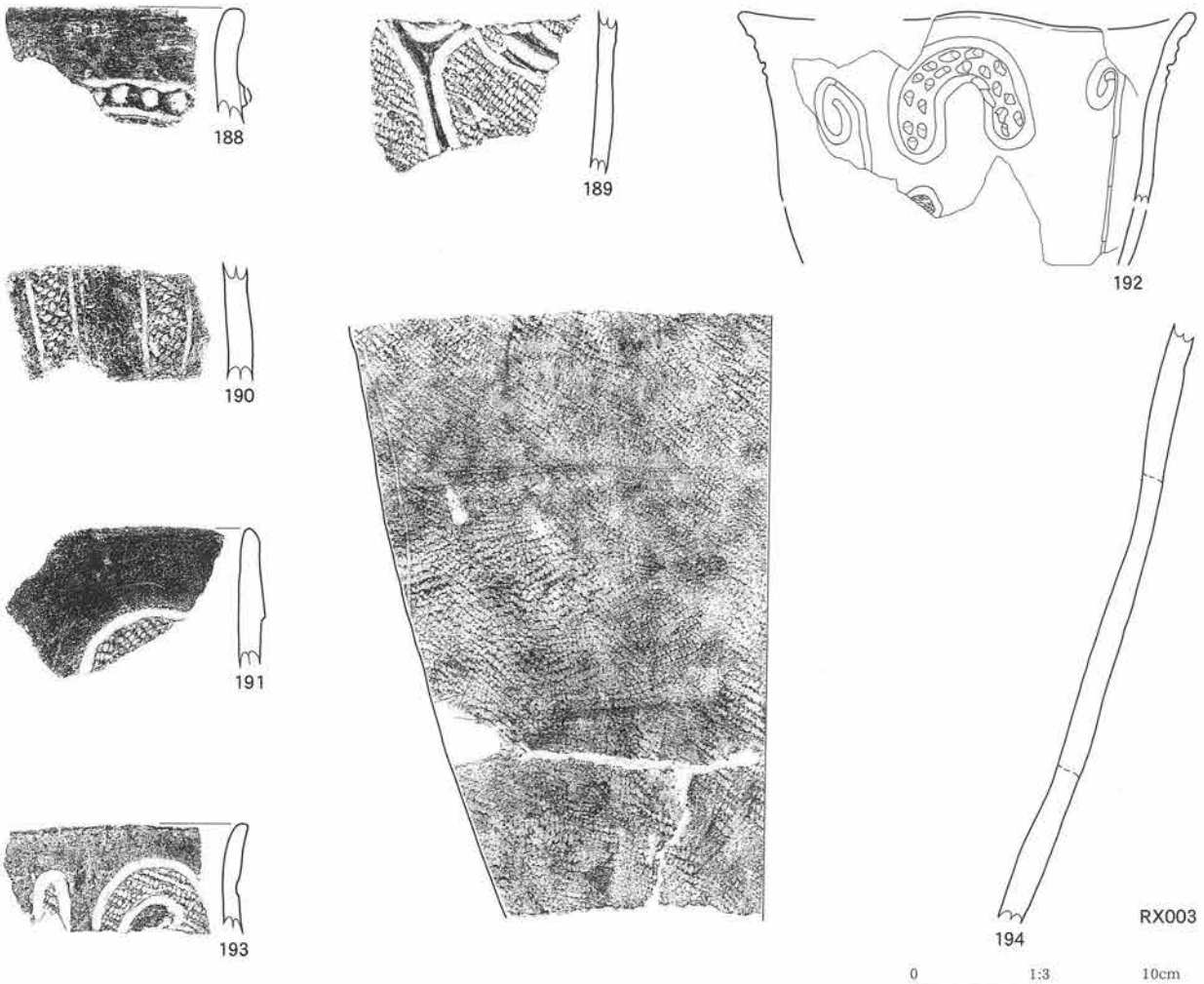


第85図　遺構内出土土器（12）

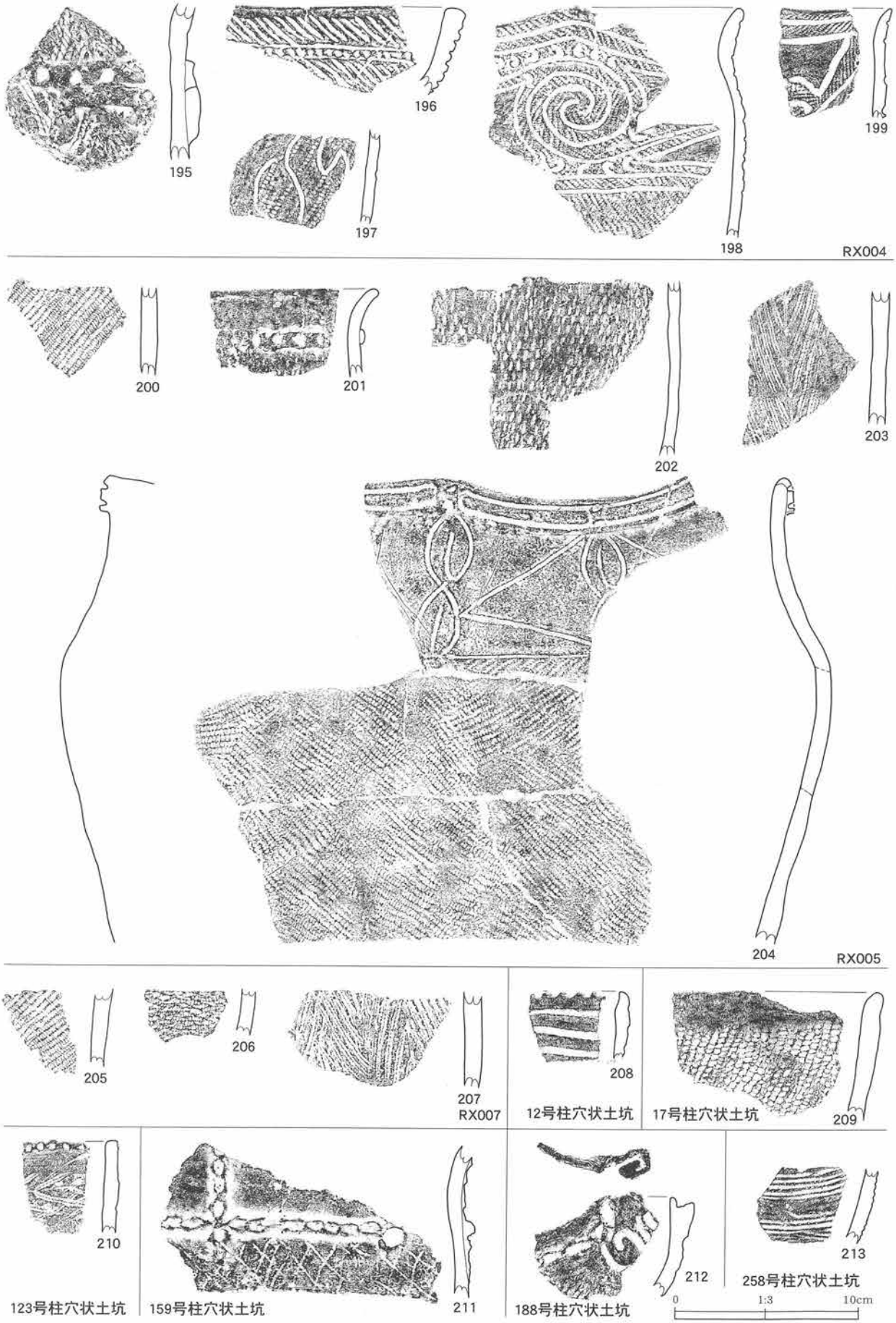


第86図　遺構内出土土器（13）

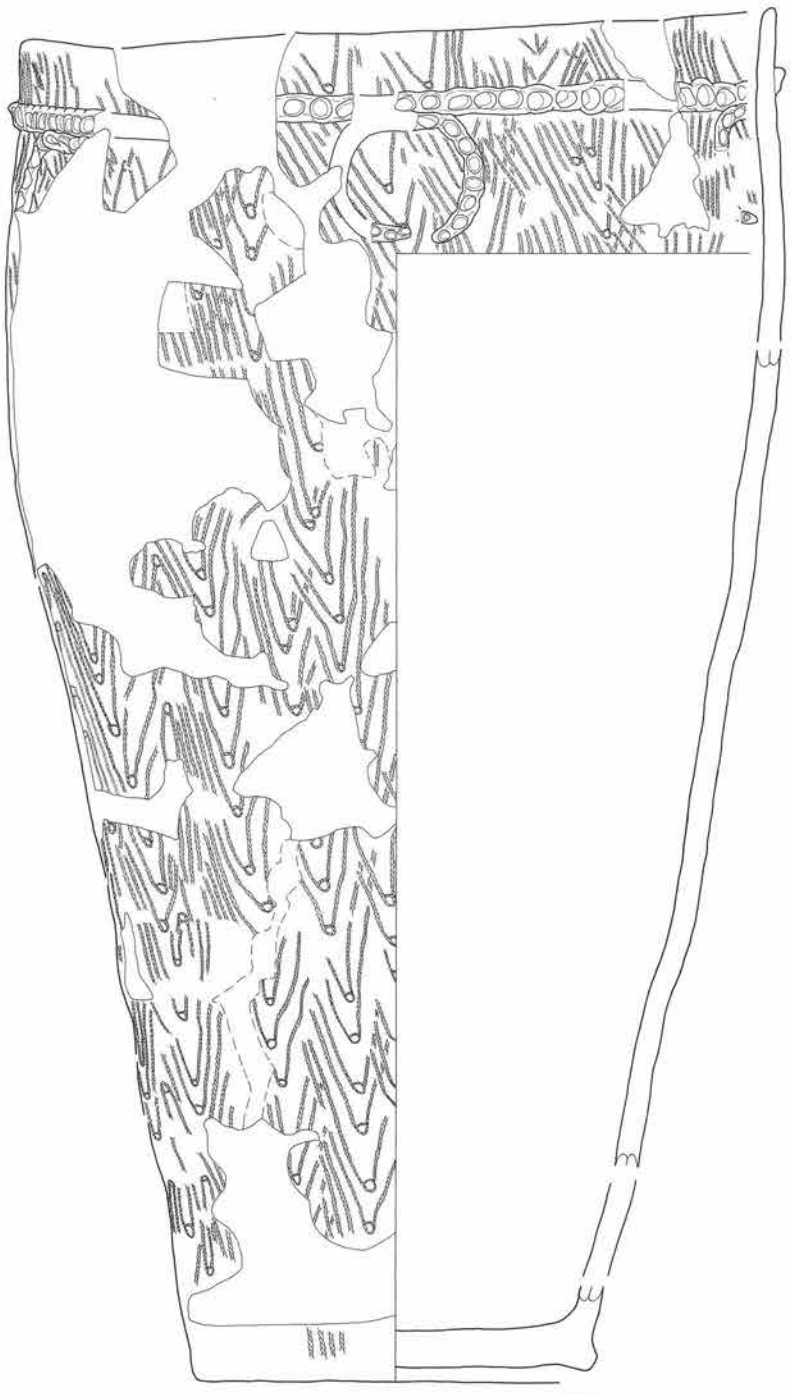




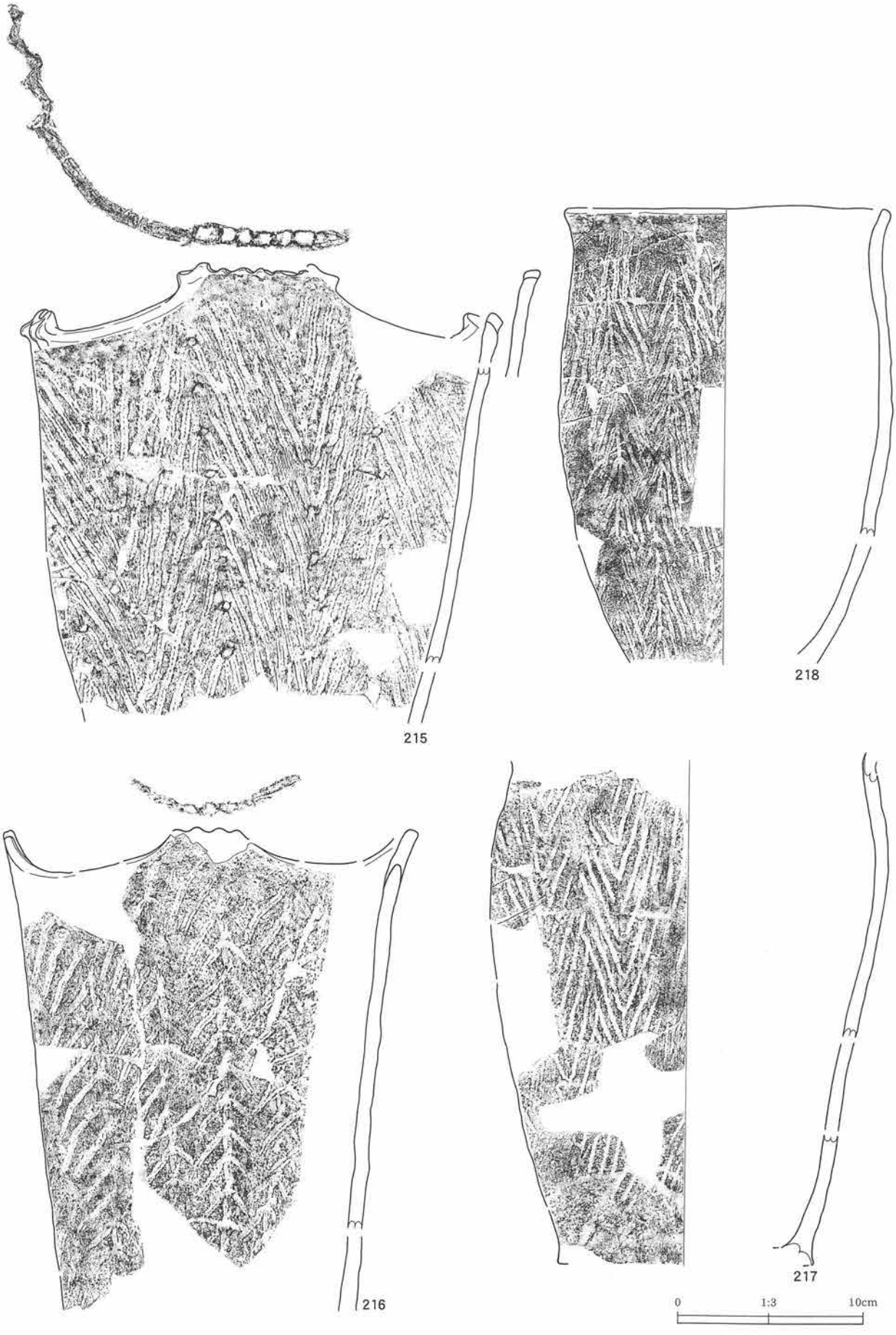
第87図　遺構内出土土器（14）



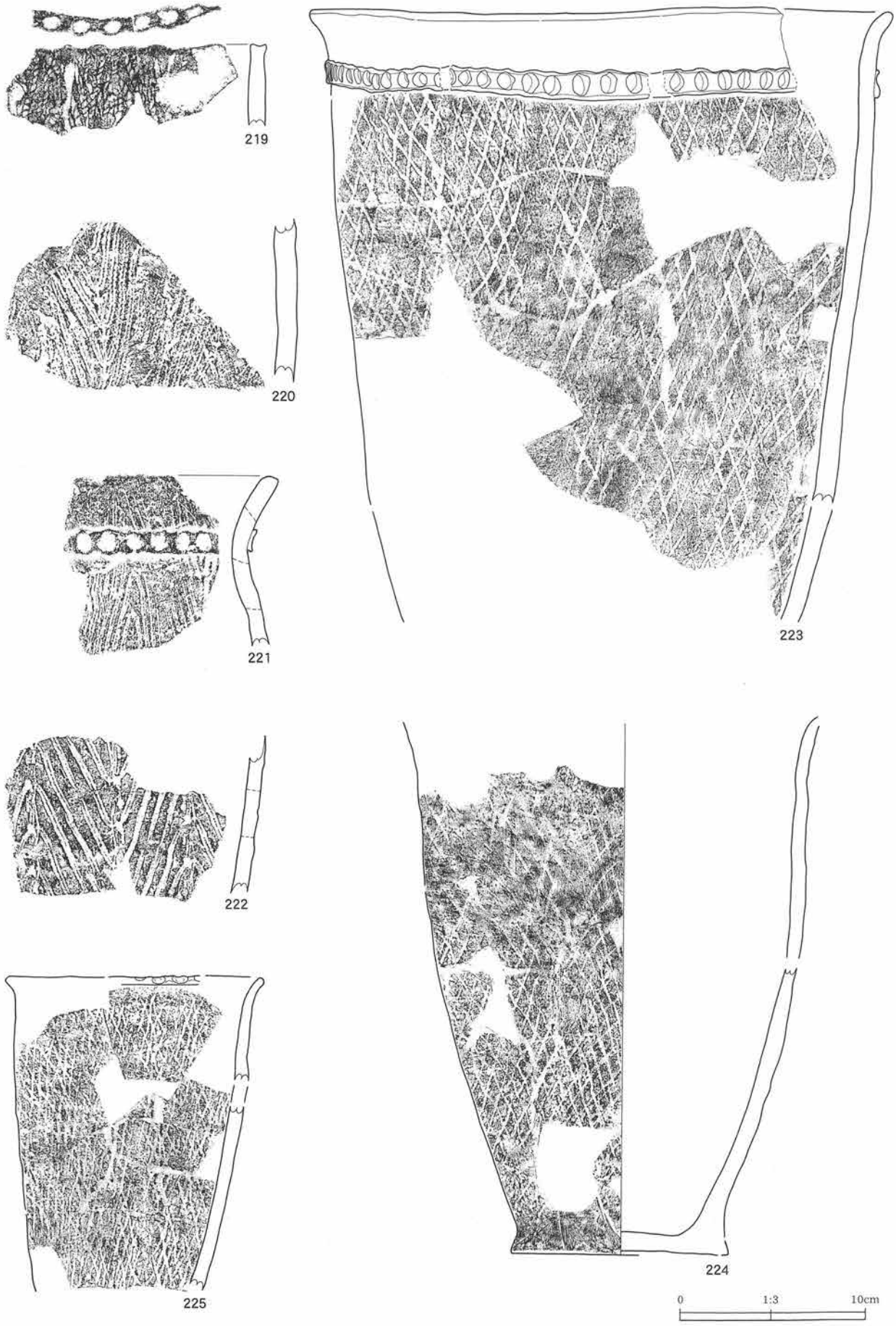
第88図　遺構内出土土器（15）



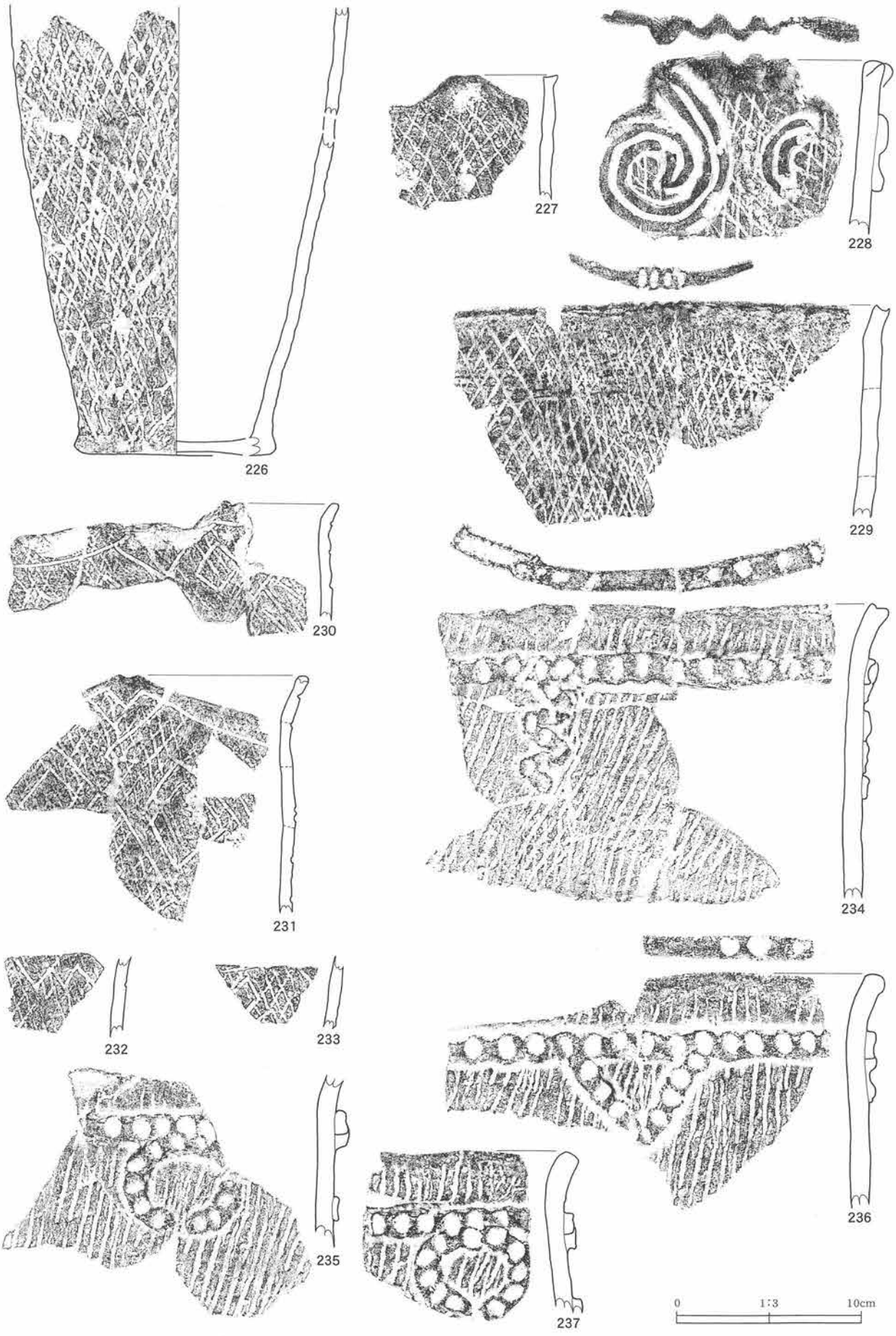
第89図　中央部捨て場出土土器（１）



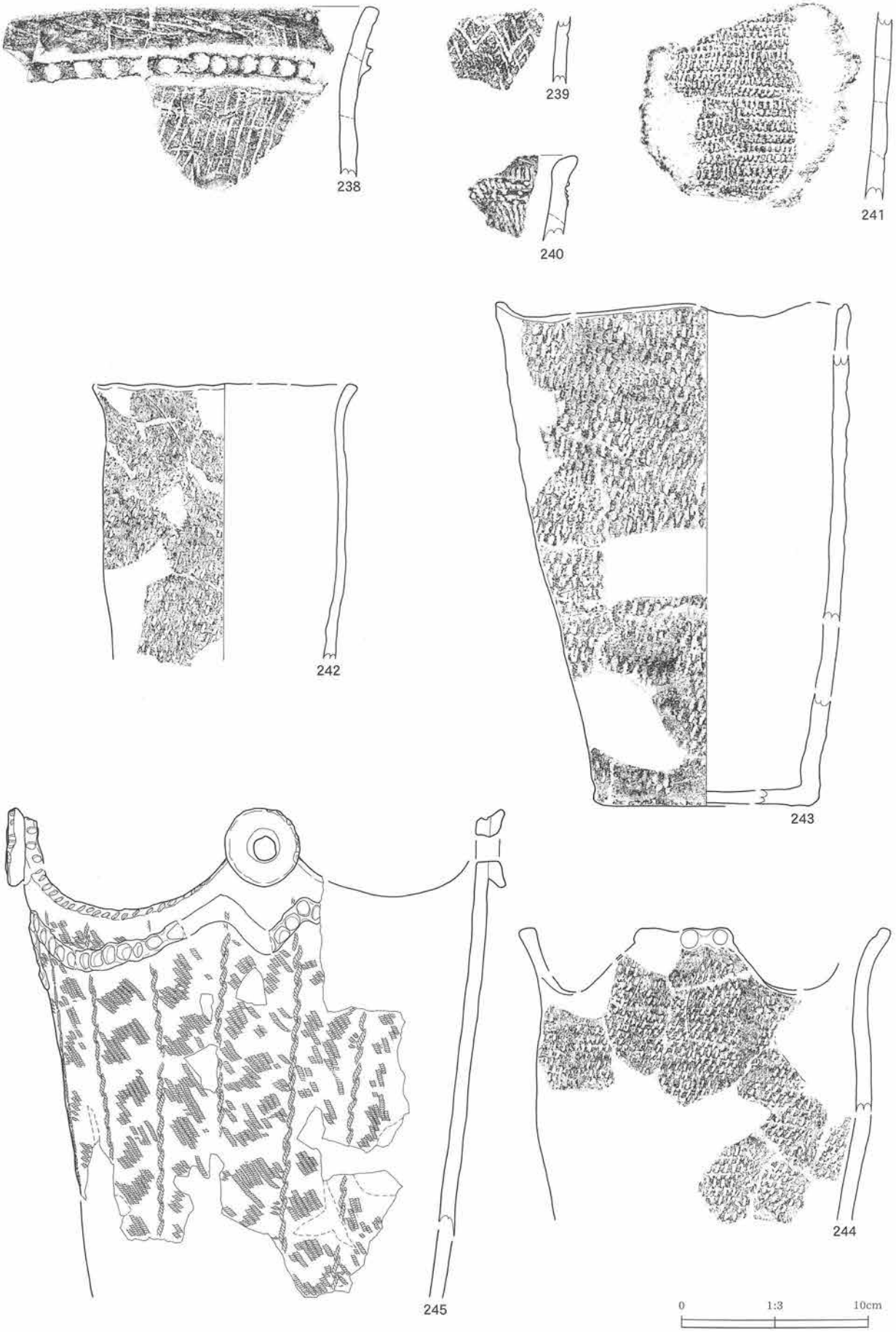
第90図　中央部捨て場出土土器（２）



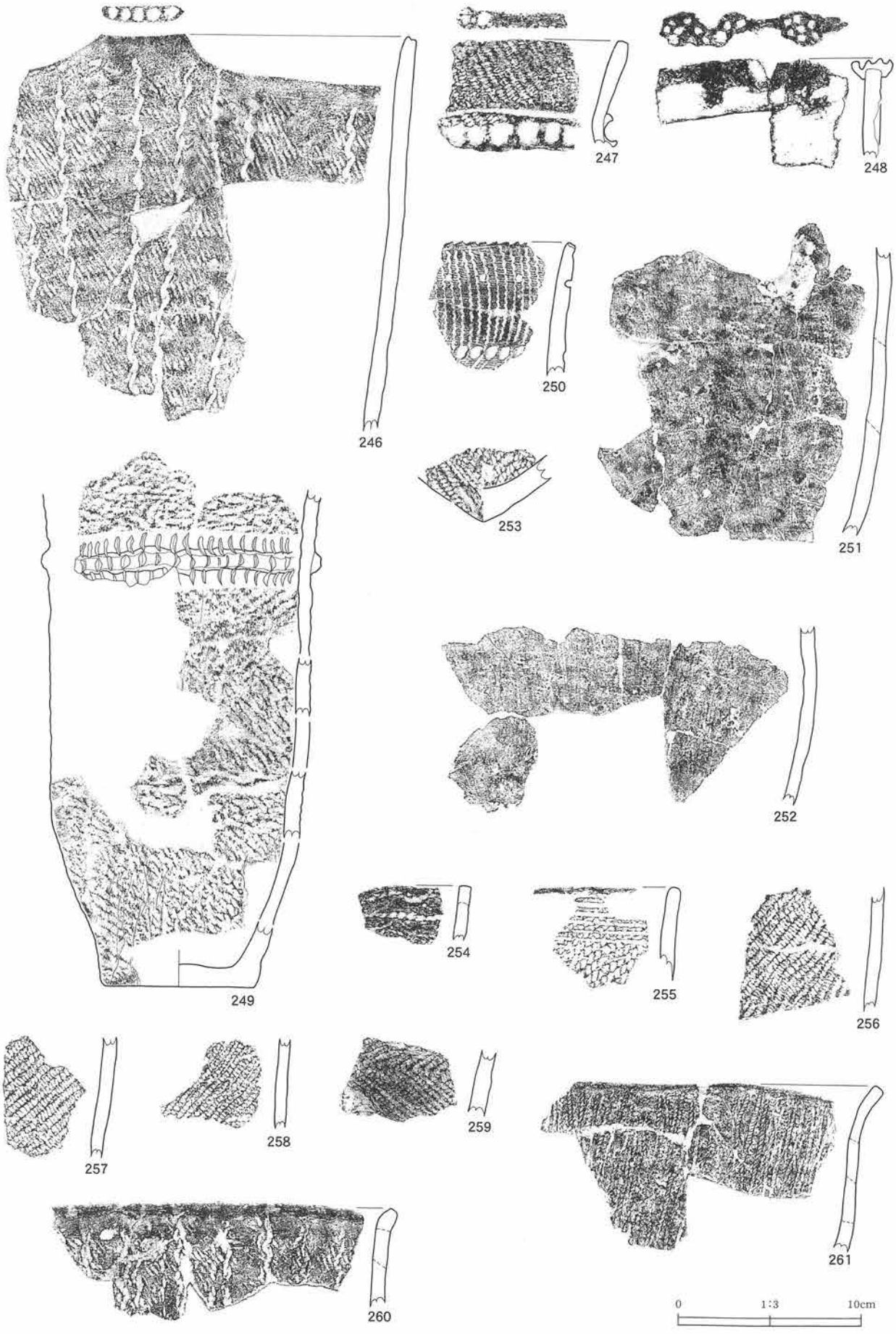
第91図　中央部捨て場出土土器（3）



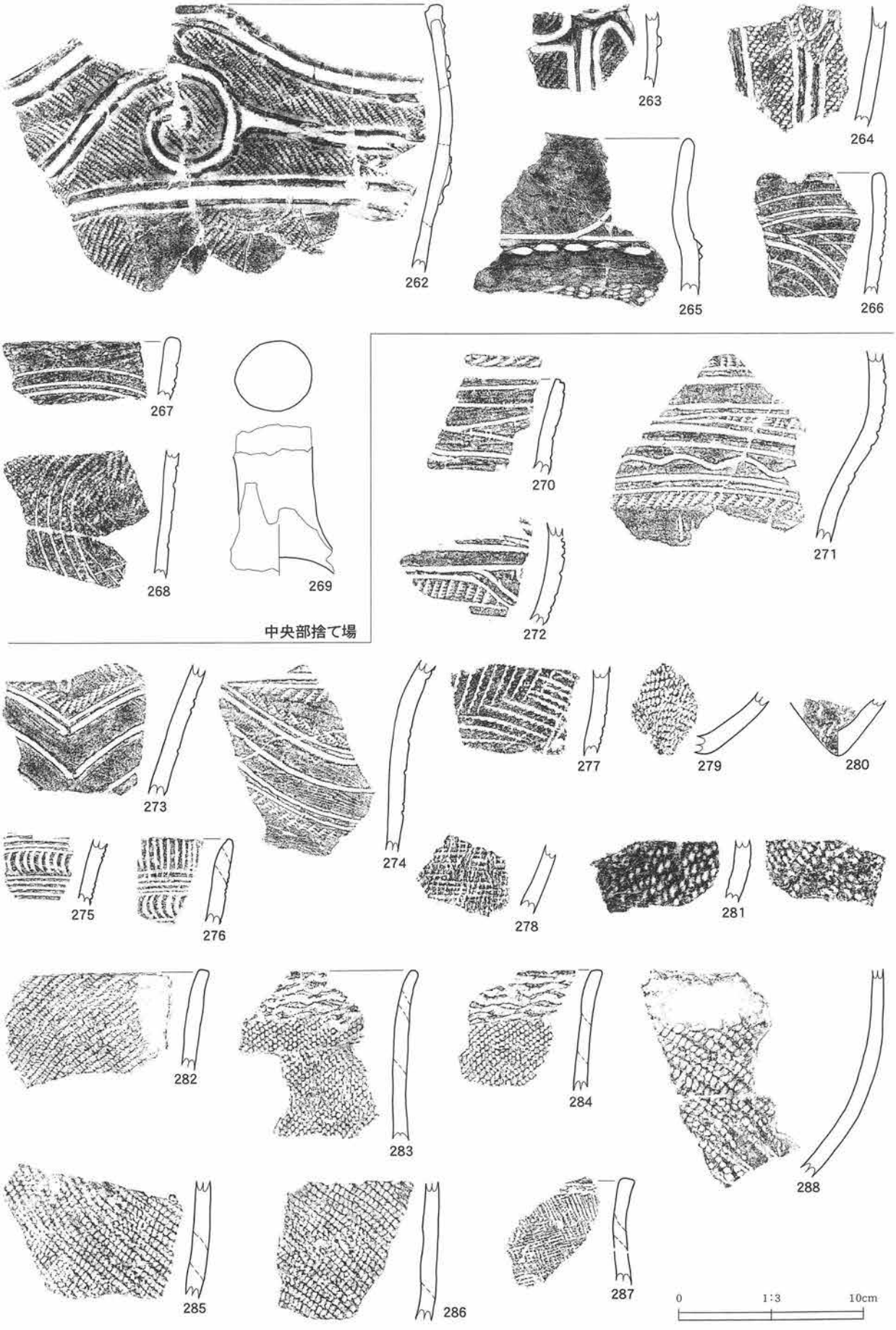
第92図　中央部捨て場出土土器（4）



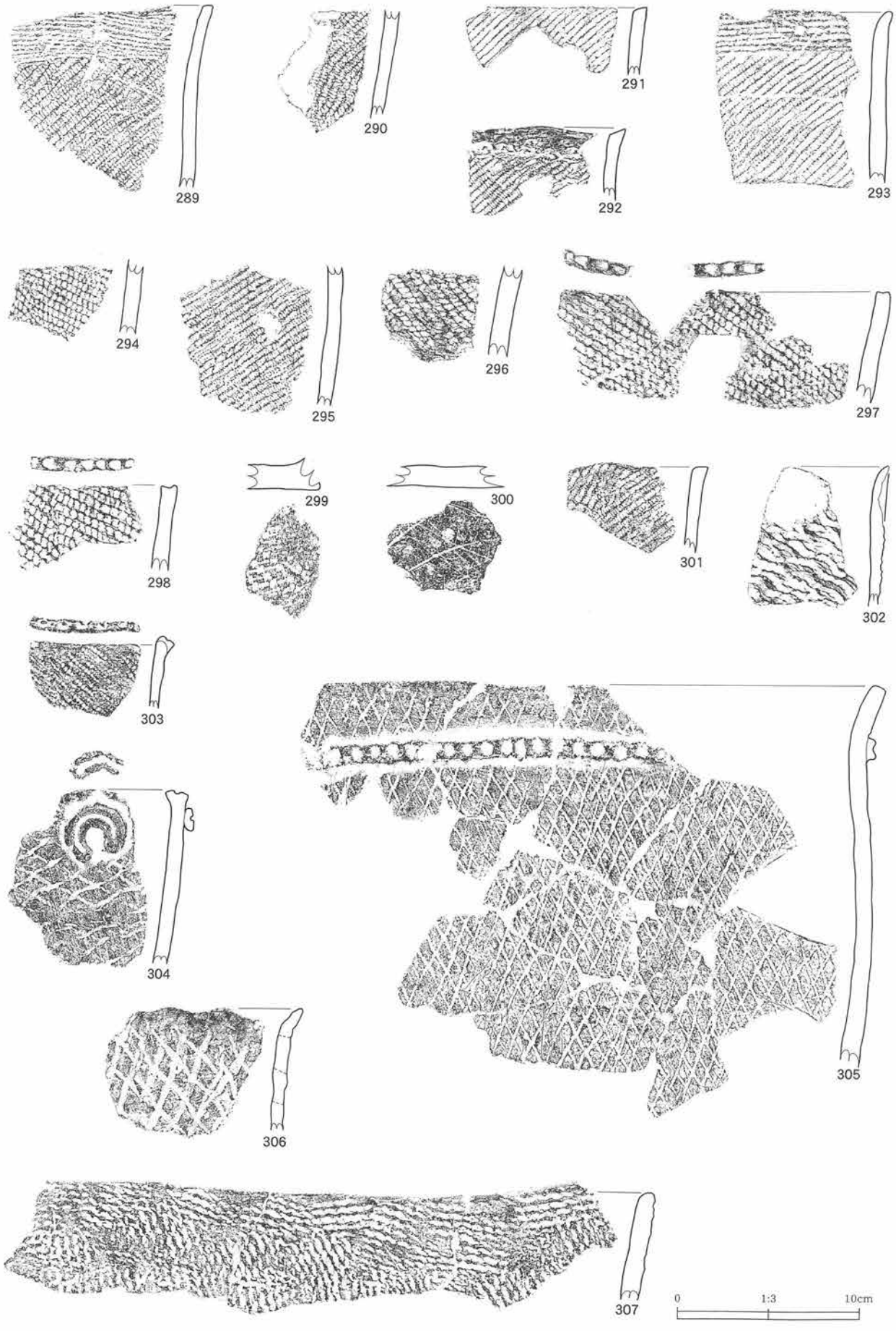
第93図　中央部捨て場出土土器（５）



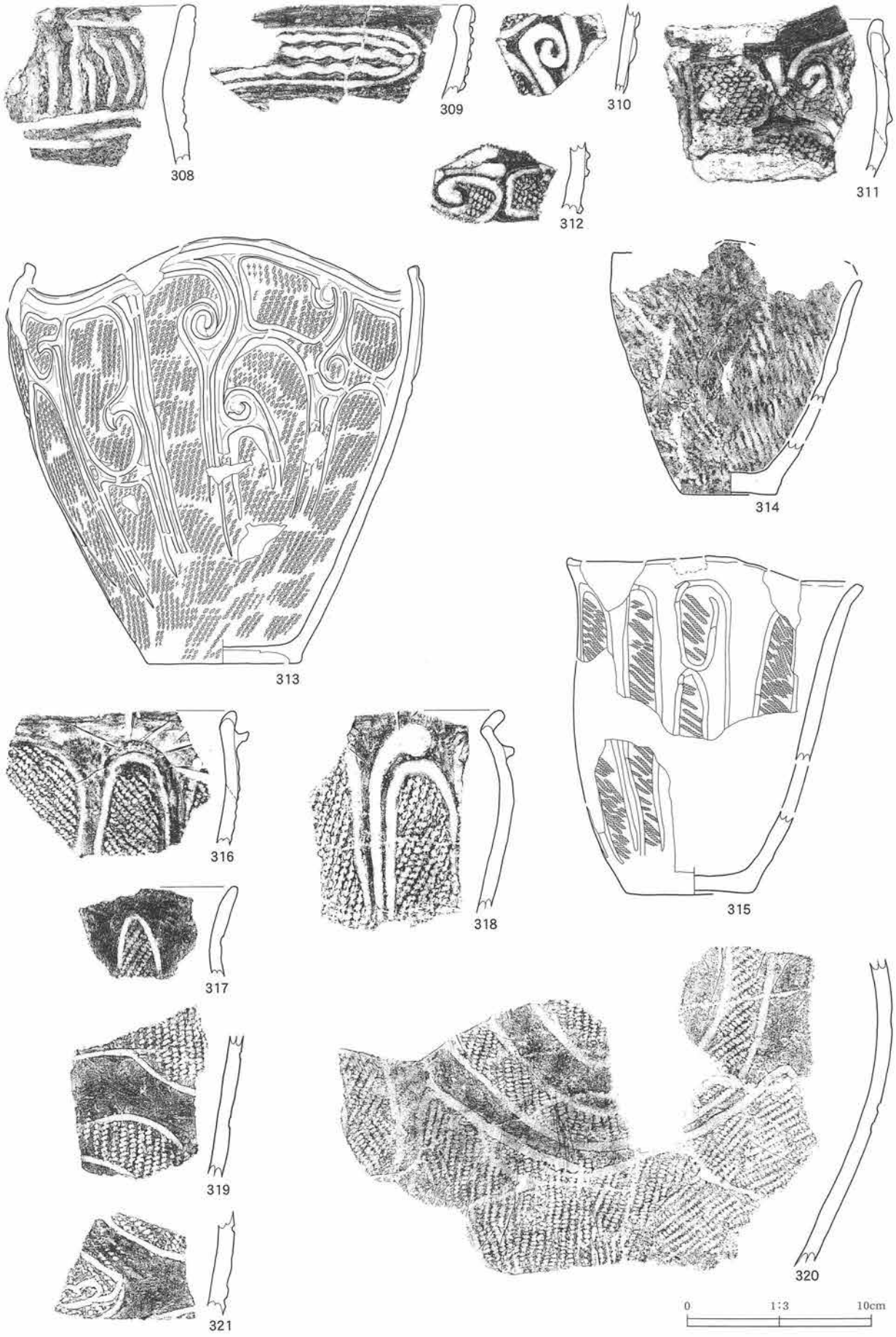
第94図　中央部捨て場出土土器（6）



第95図　中央部捨て場出土土器（７）・遺構外出土土器（１）

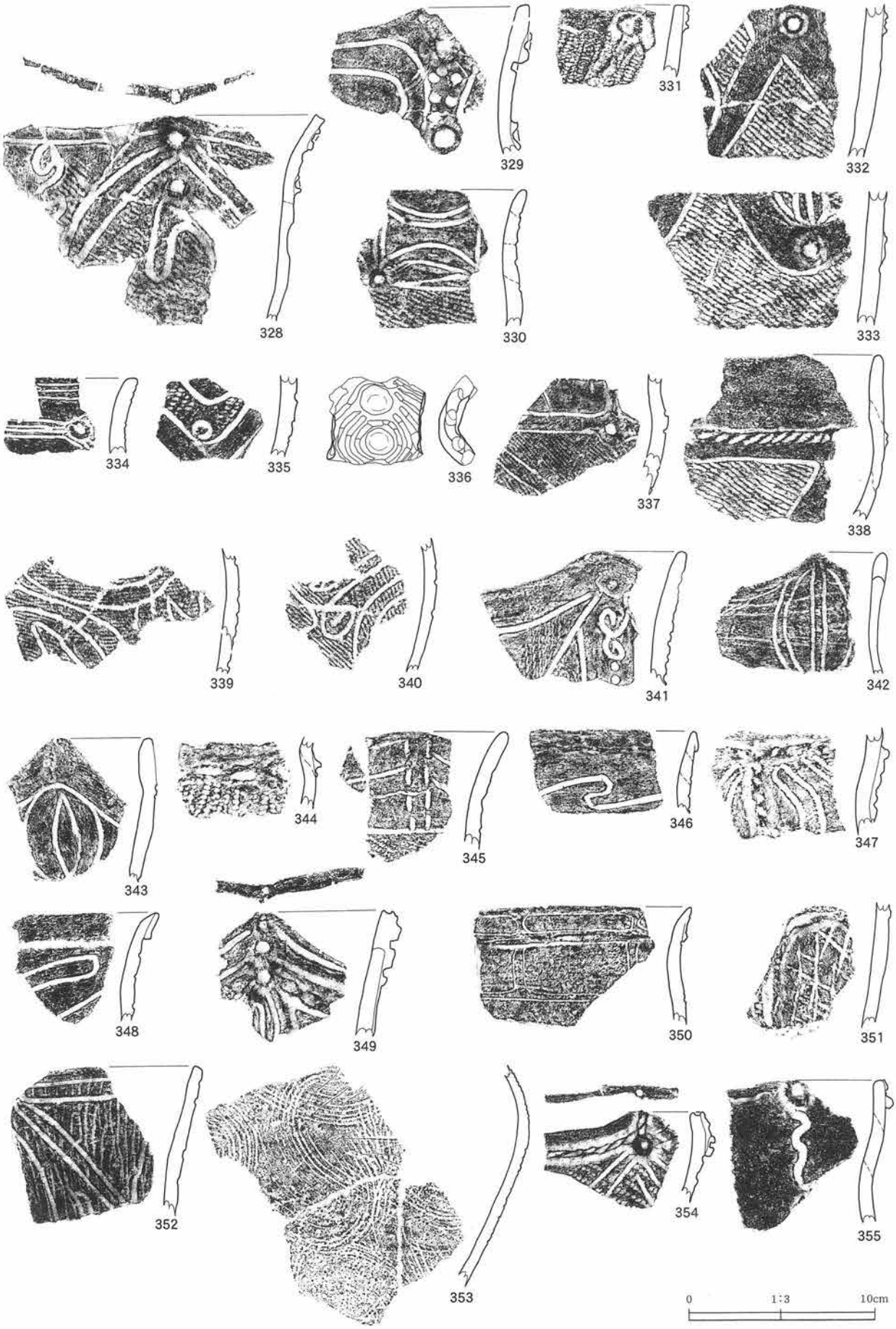


第96図　遺構外出土土器（２）

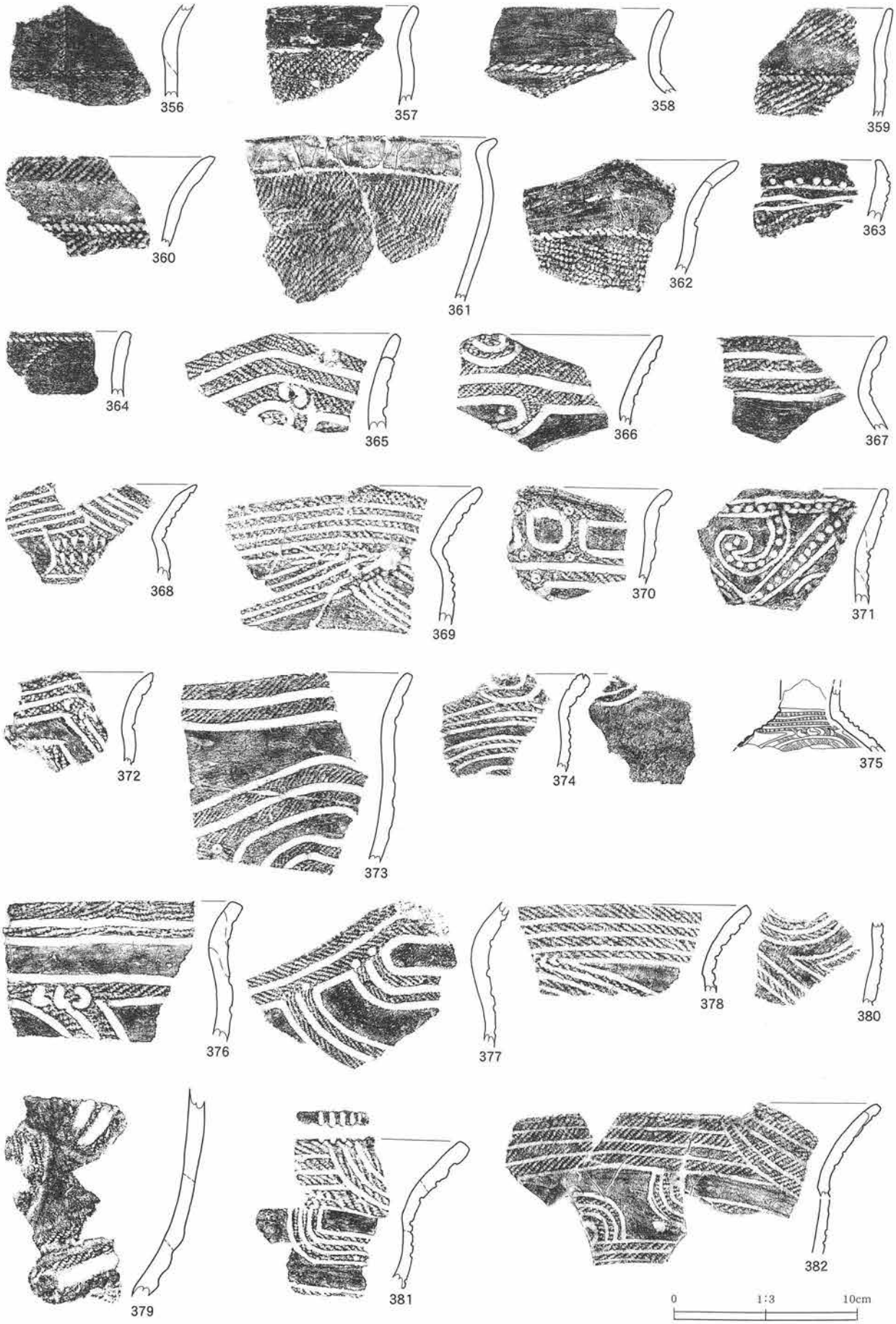


第97図　遺構外出土土器（３）

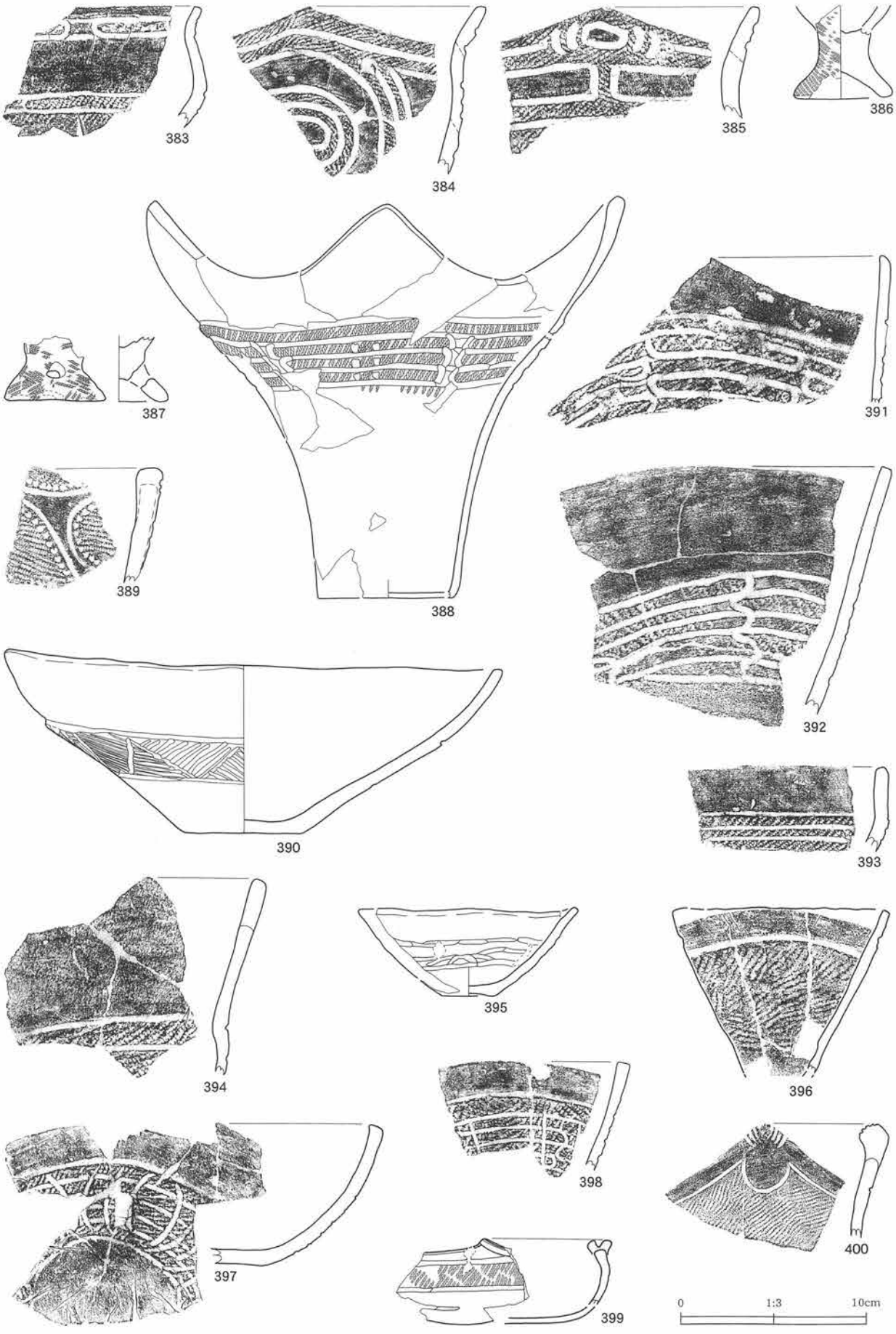
第98図　遺構外出土土器（４）



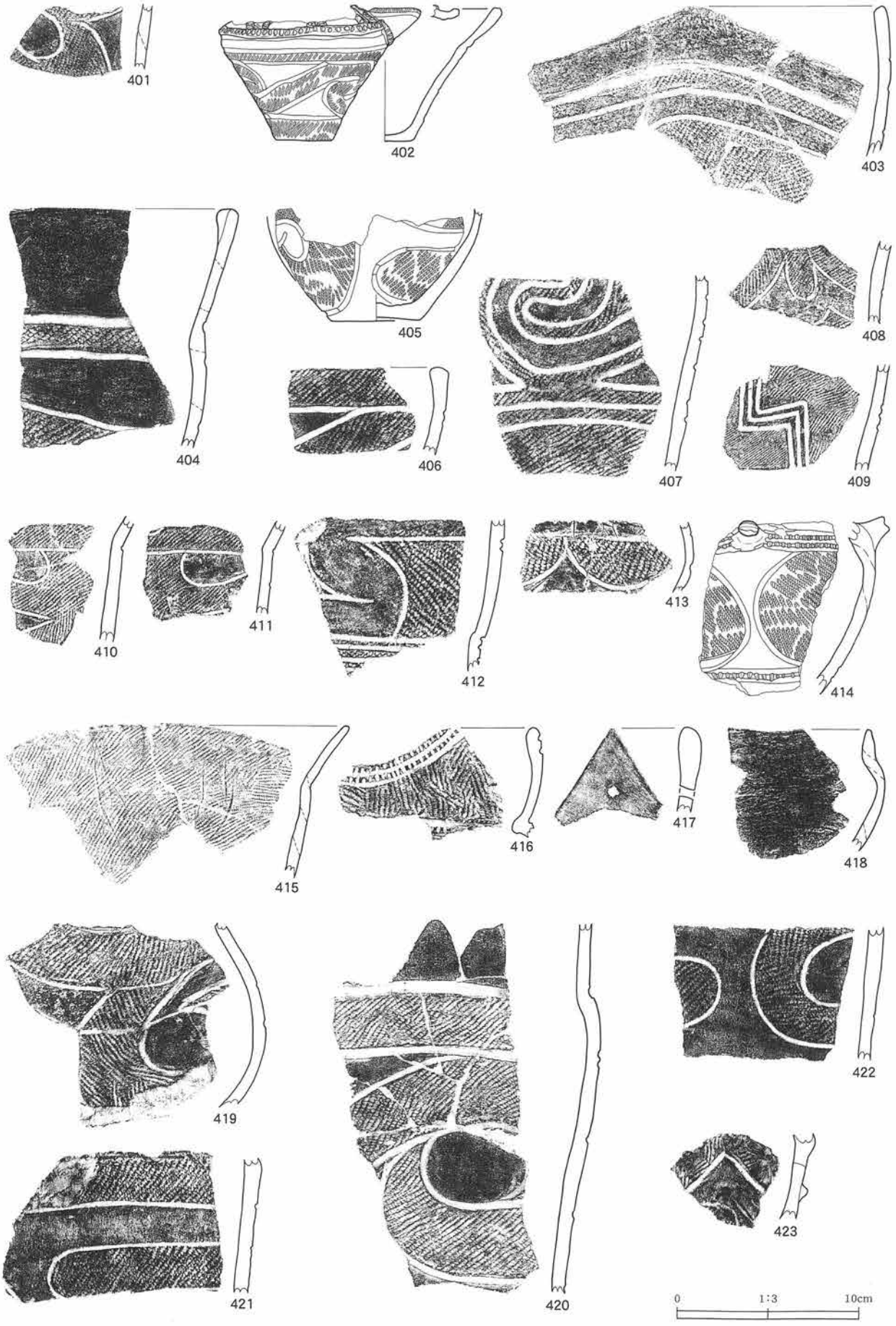
第99図　遺構外出土土器（5）



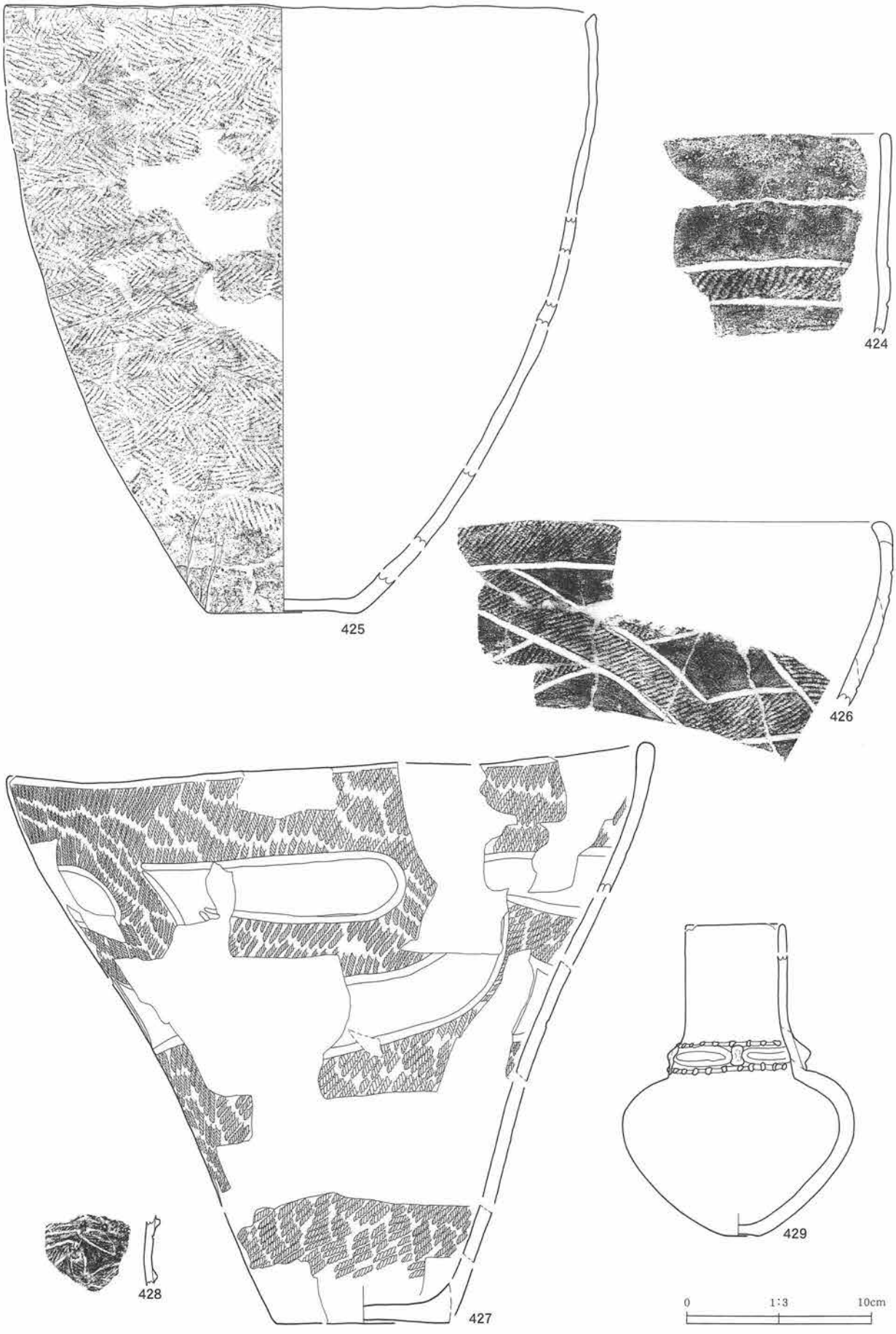
第100図　遺構外出土土器（6）



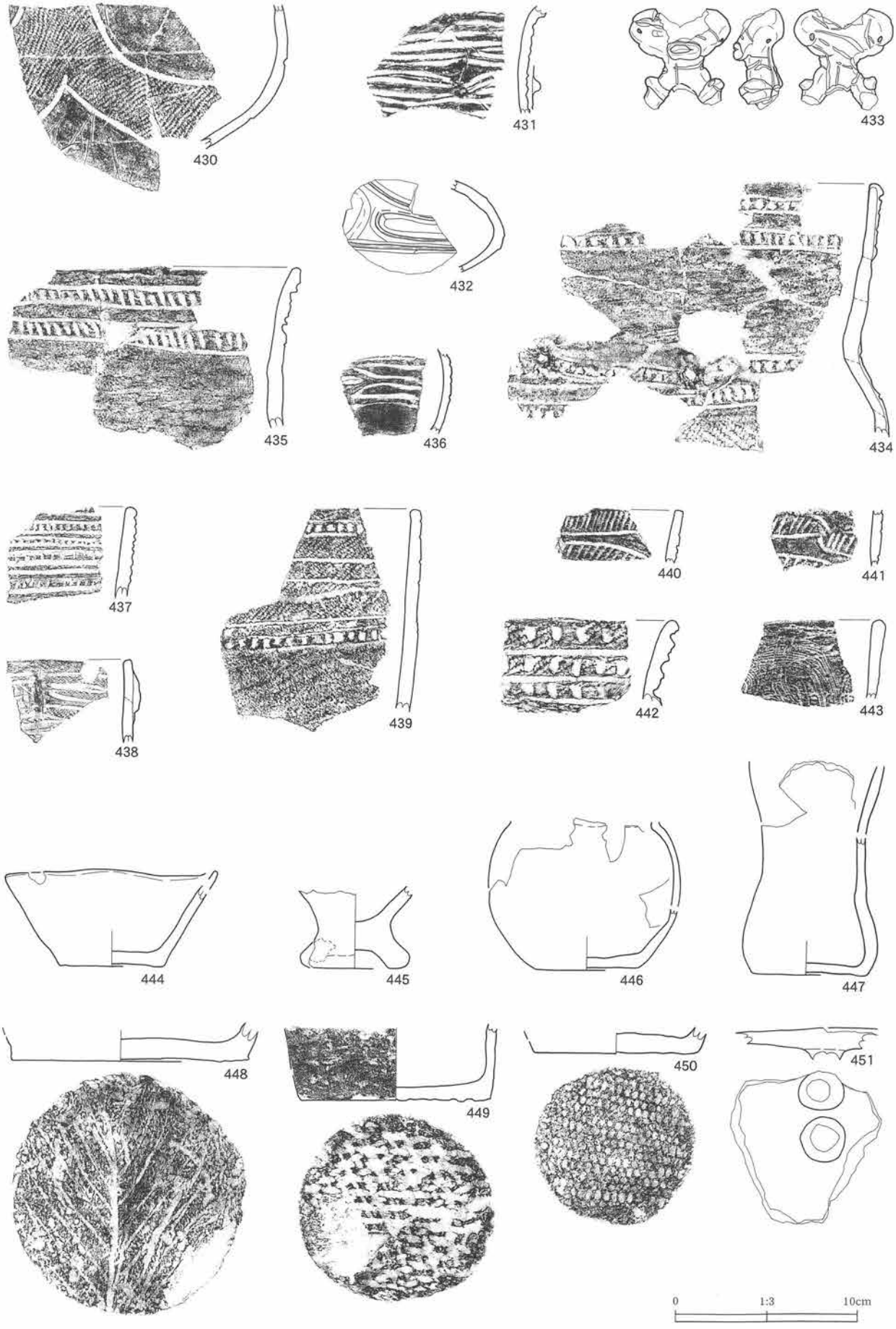
第101図　遺構外出土土器（7）



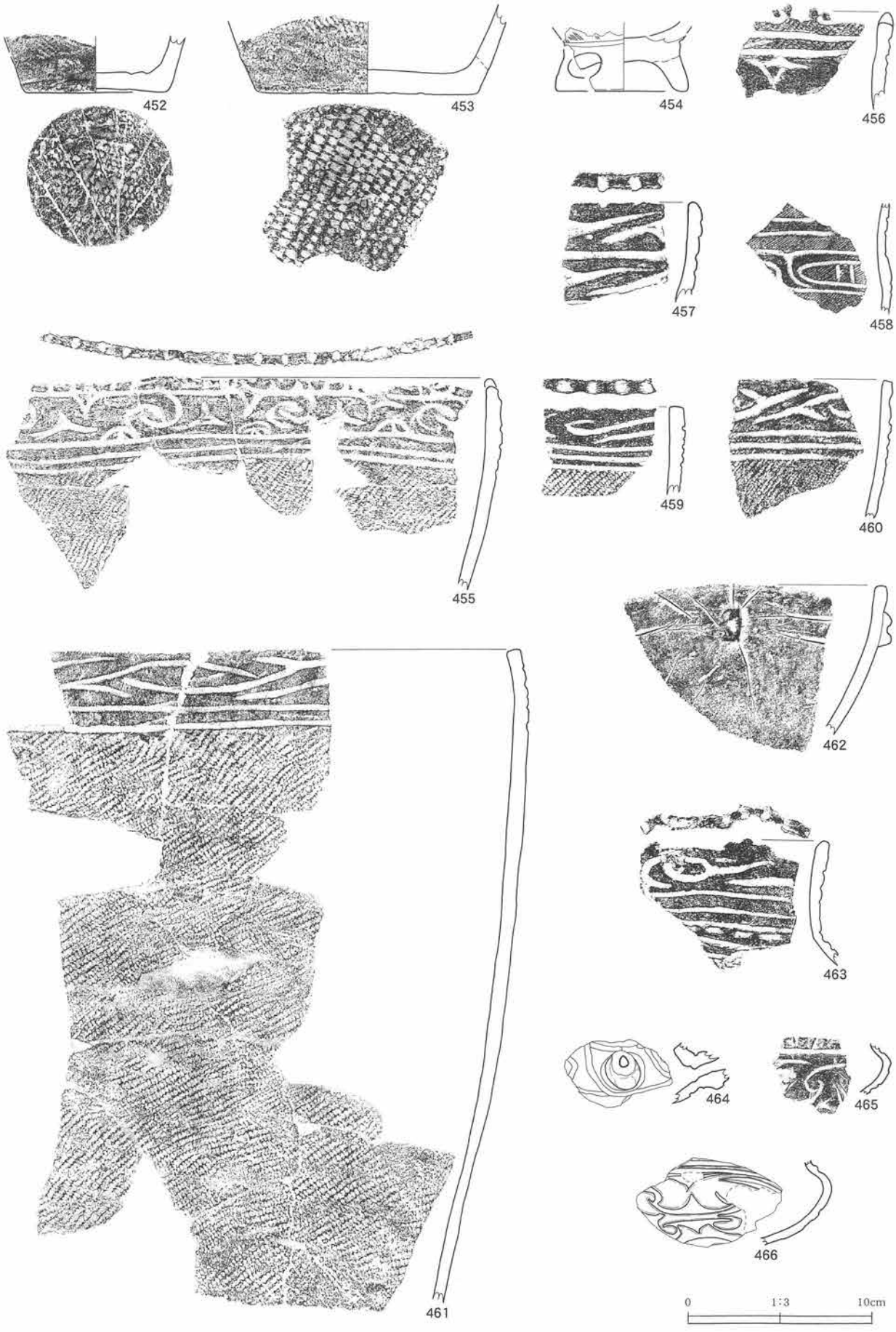
第102図　遺構外出土土器（８）



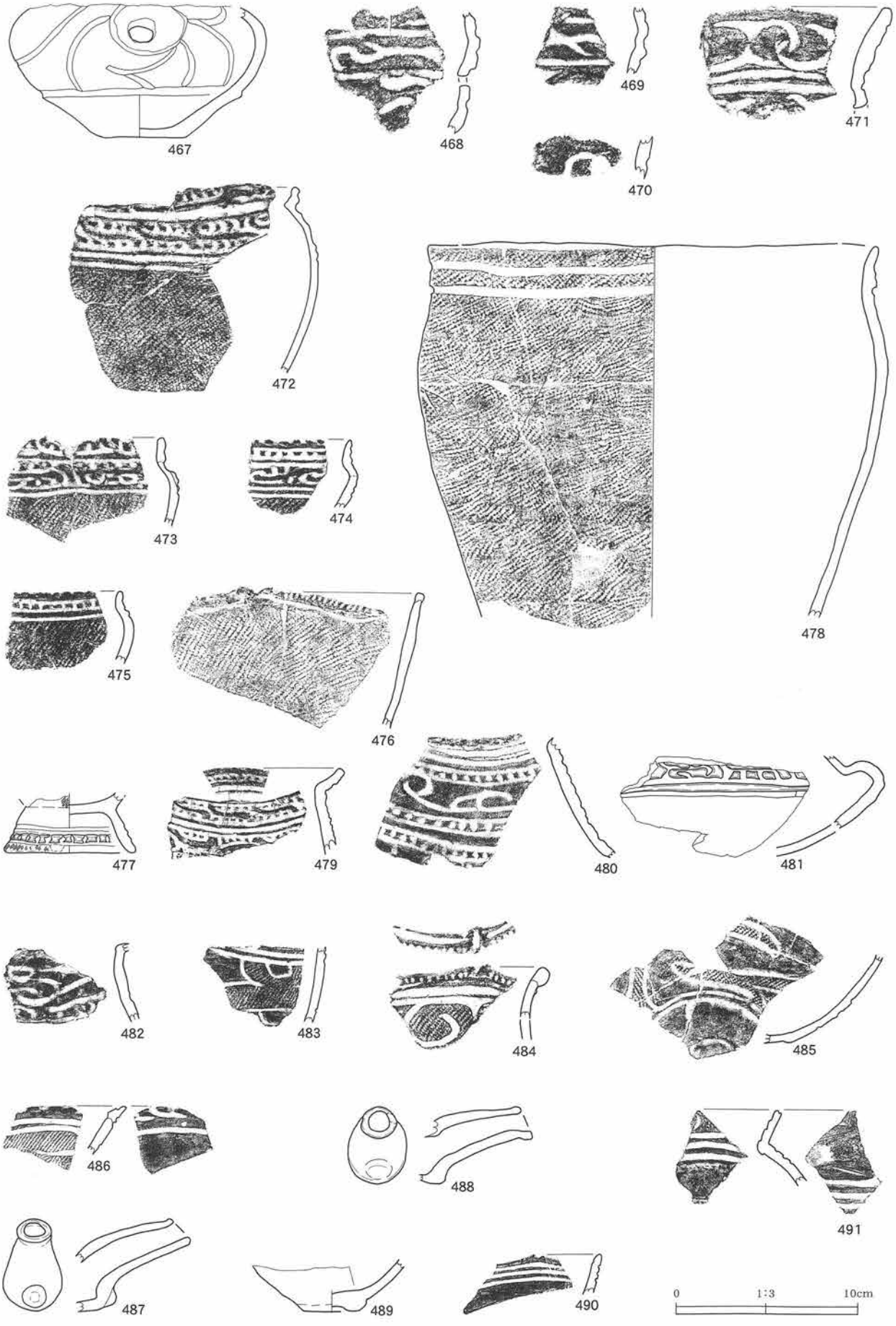
第103図　遺構外出土土器（9）



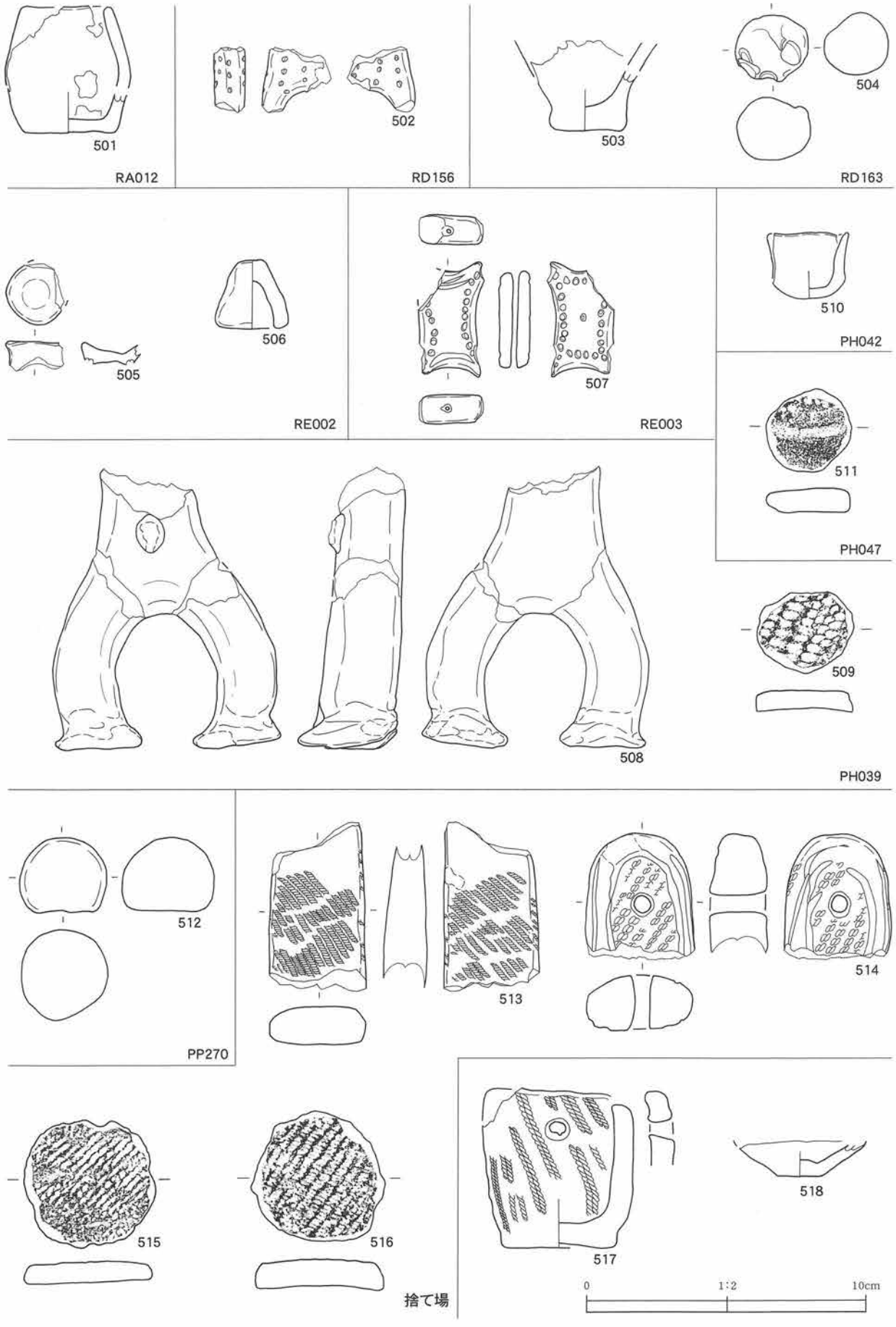
第104図　遺構外出土土器（10）



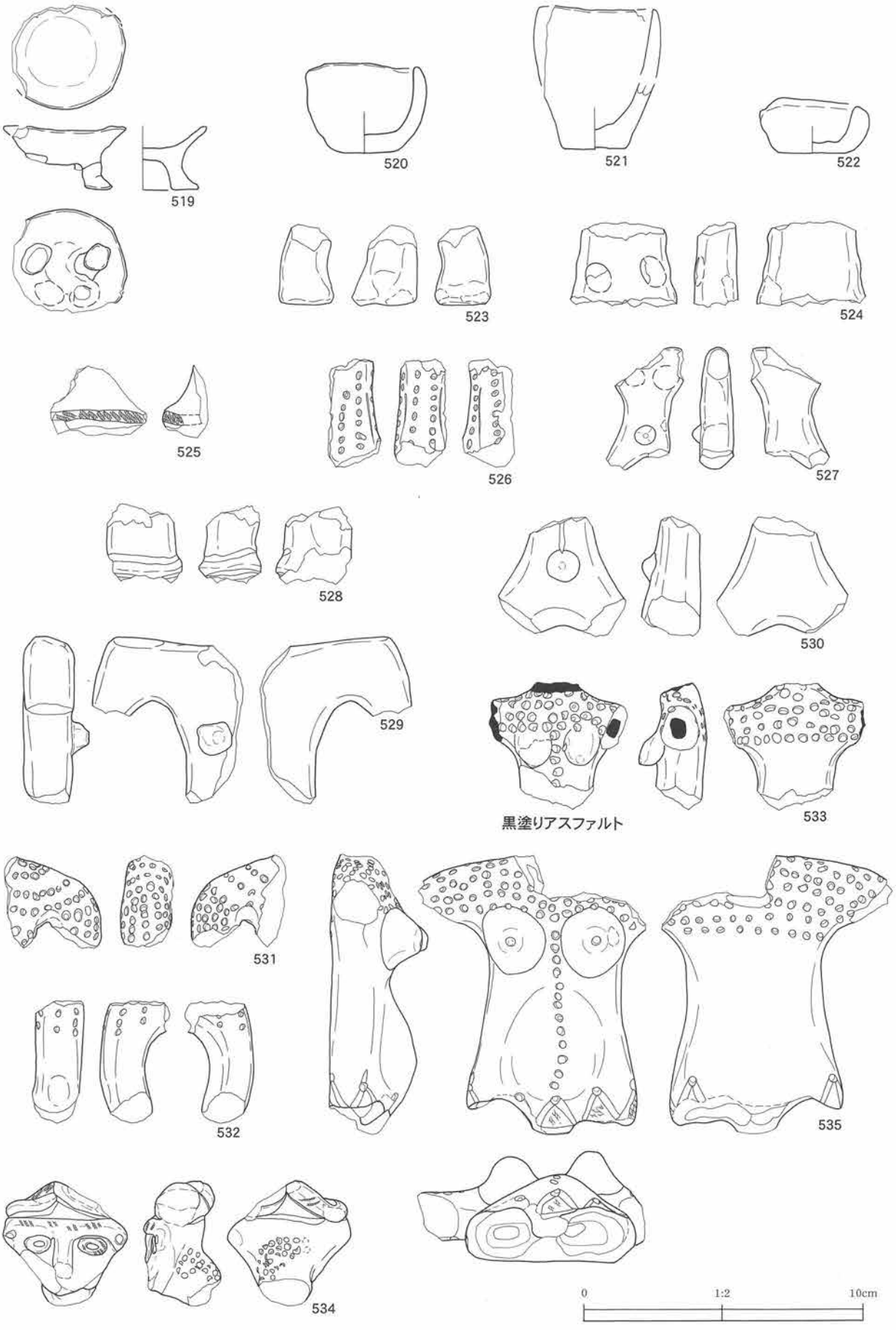
第105図　遺構外出土土器（11）



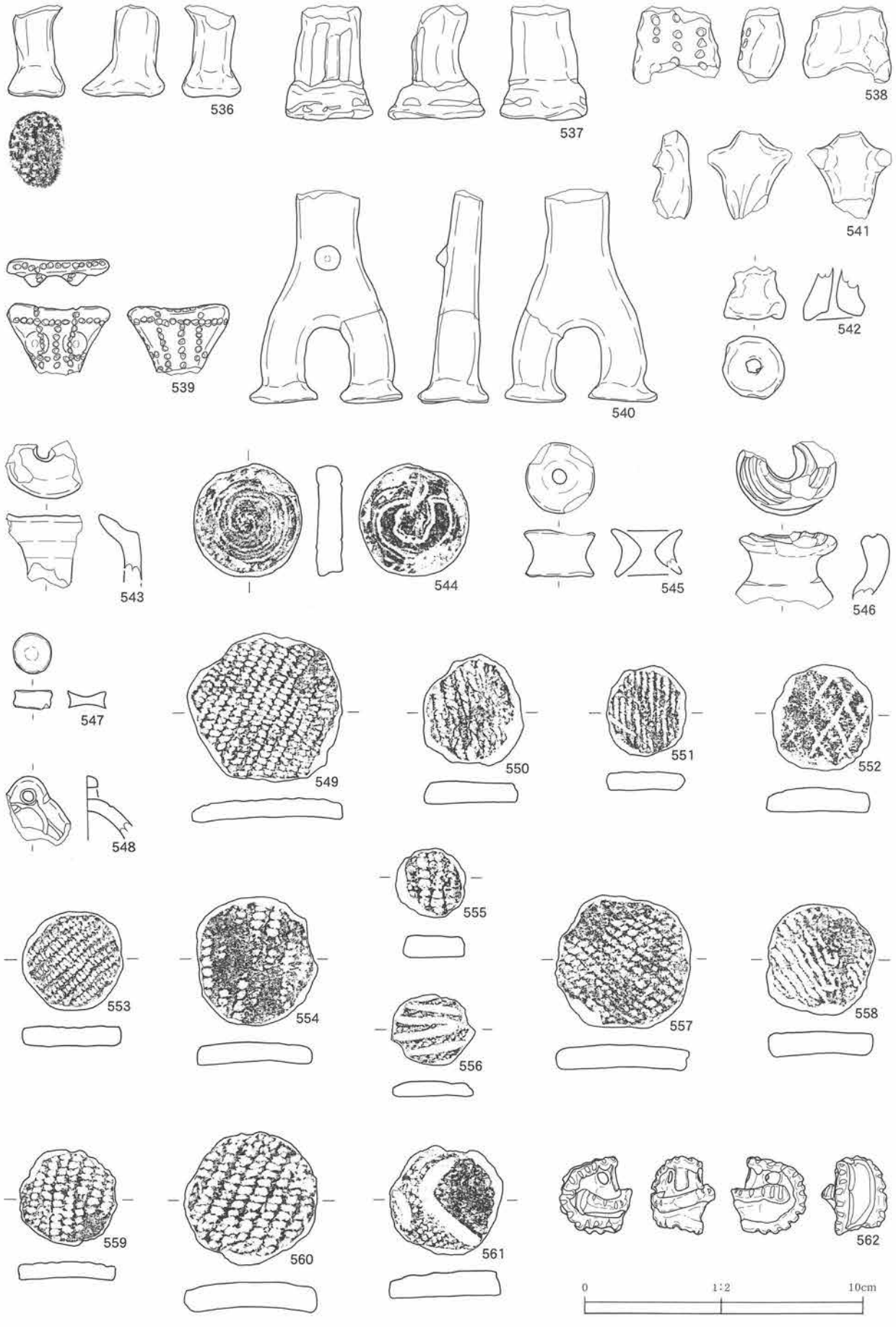
第106図　遺構外出土土器（12）


501
RA012
502
RD156
503
504
RD163
505
506
RE002
507
RE003
510
PH042
511
PH047
508
509
PH039
512
PP270
513
514
515
516
捨て場
517
518
0
1:2
10cm

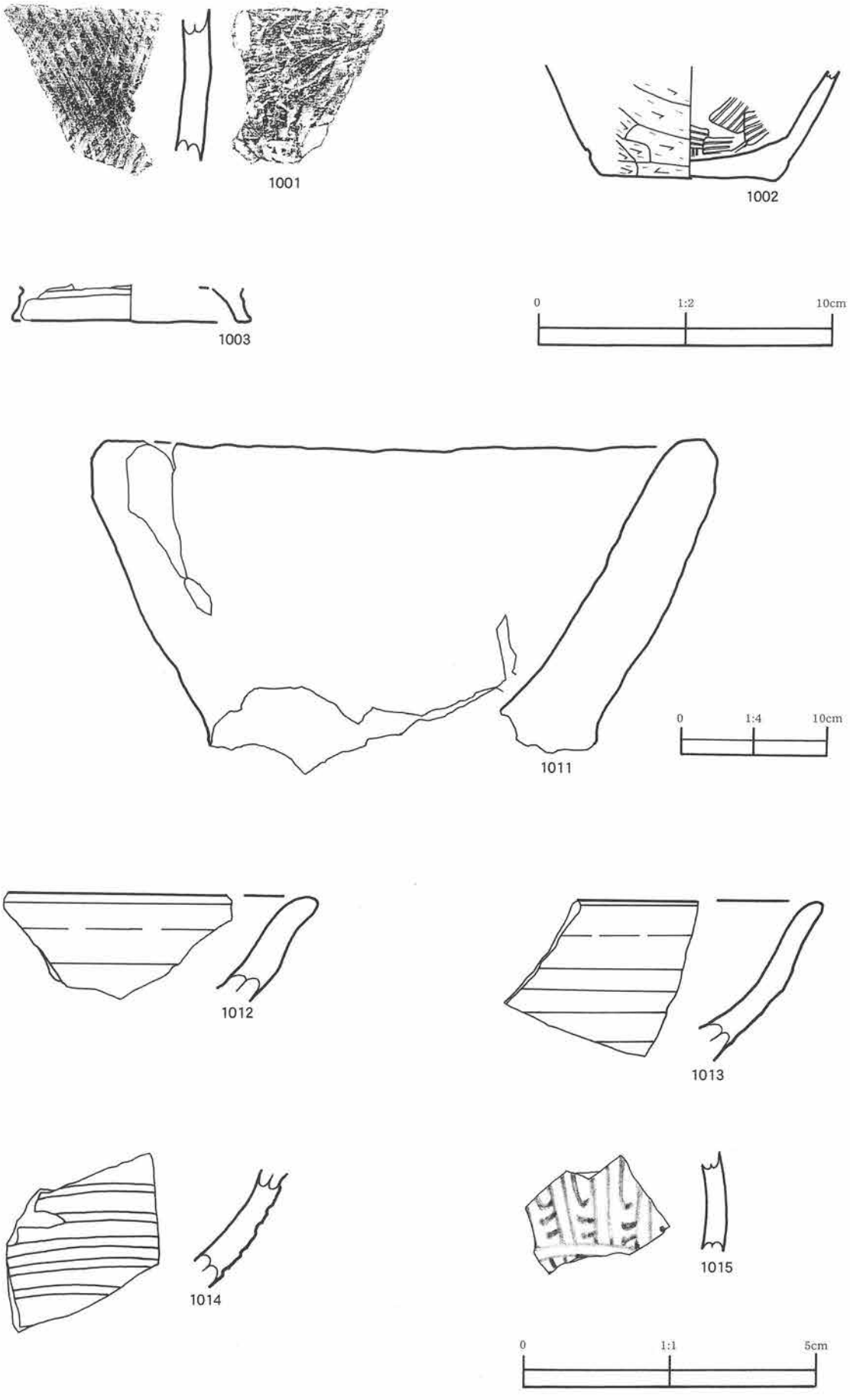
第107図　土製品（1）


519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
533
黒塗りアスファルト
531
532
535
534
0
1:2
10cm

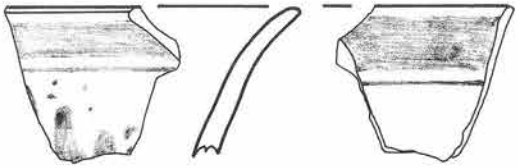
第108図　土製品（2）


536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562
0
1:2
10cm

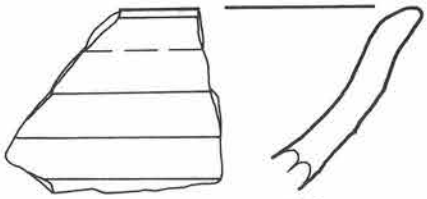
第109図　土製品（3）

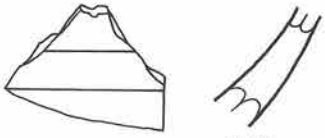


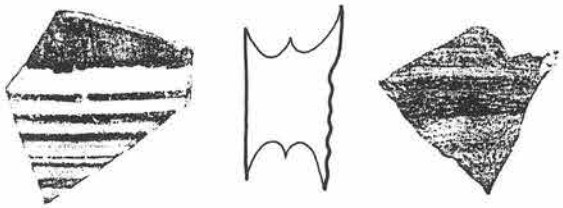
第110図　土師器・須恵器・陶磁器（1）

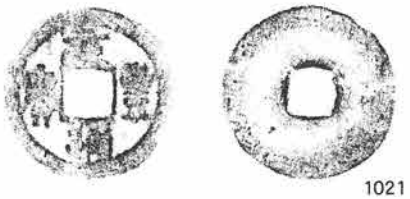

1016

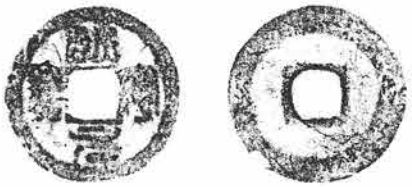
1017

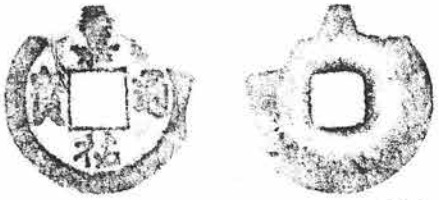

1018

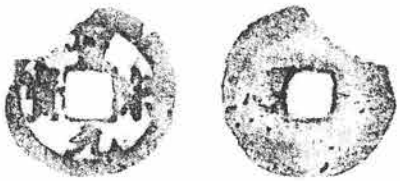

1019


1020

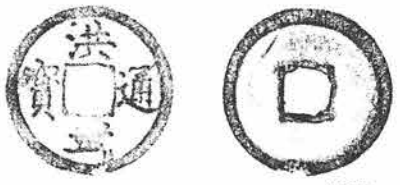

1021

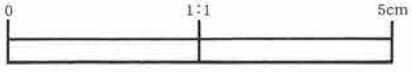

1022


1023

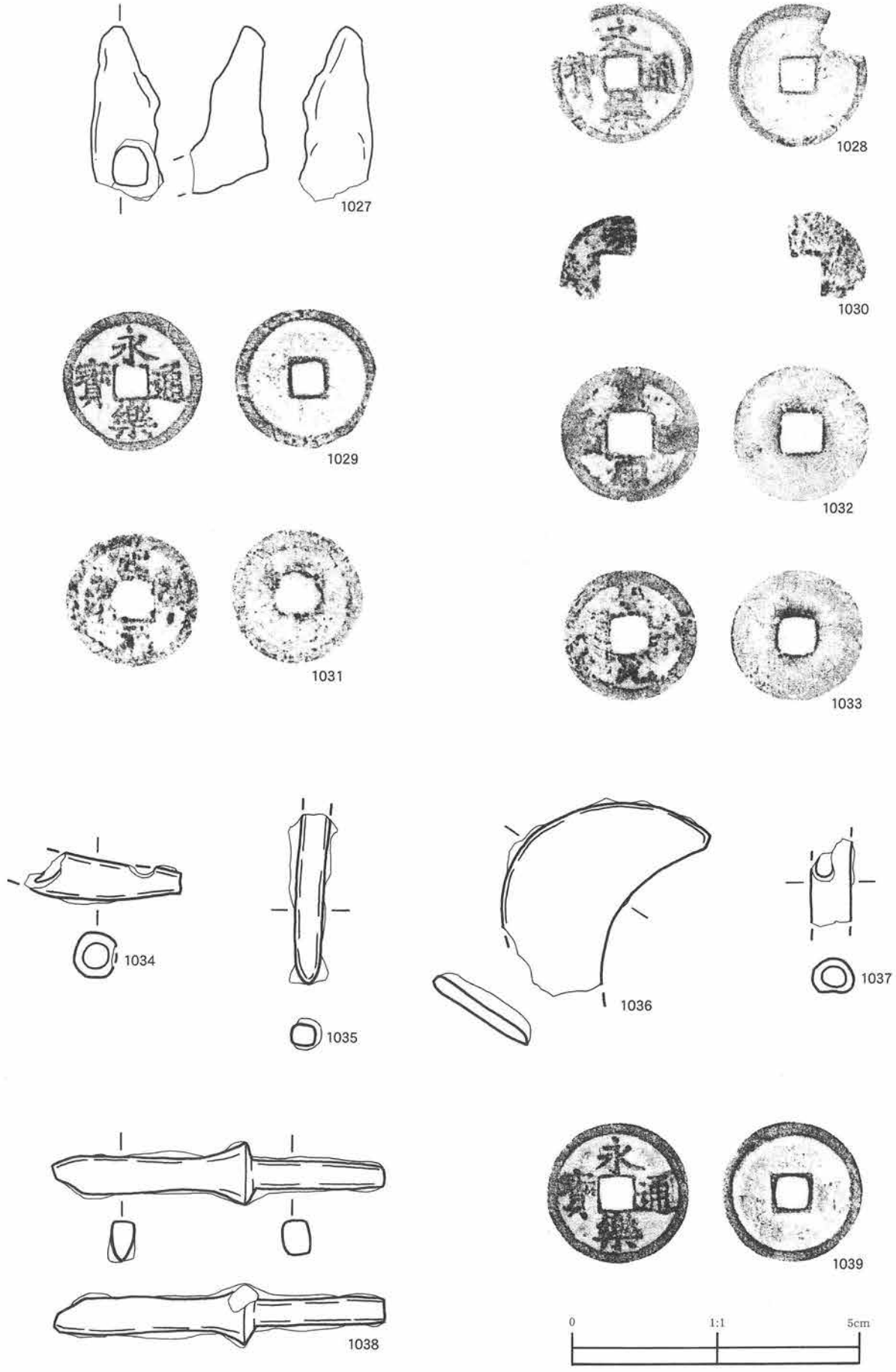

1024

1025

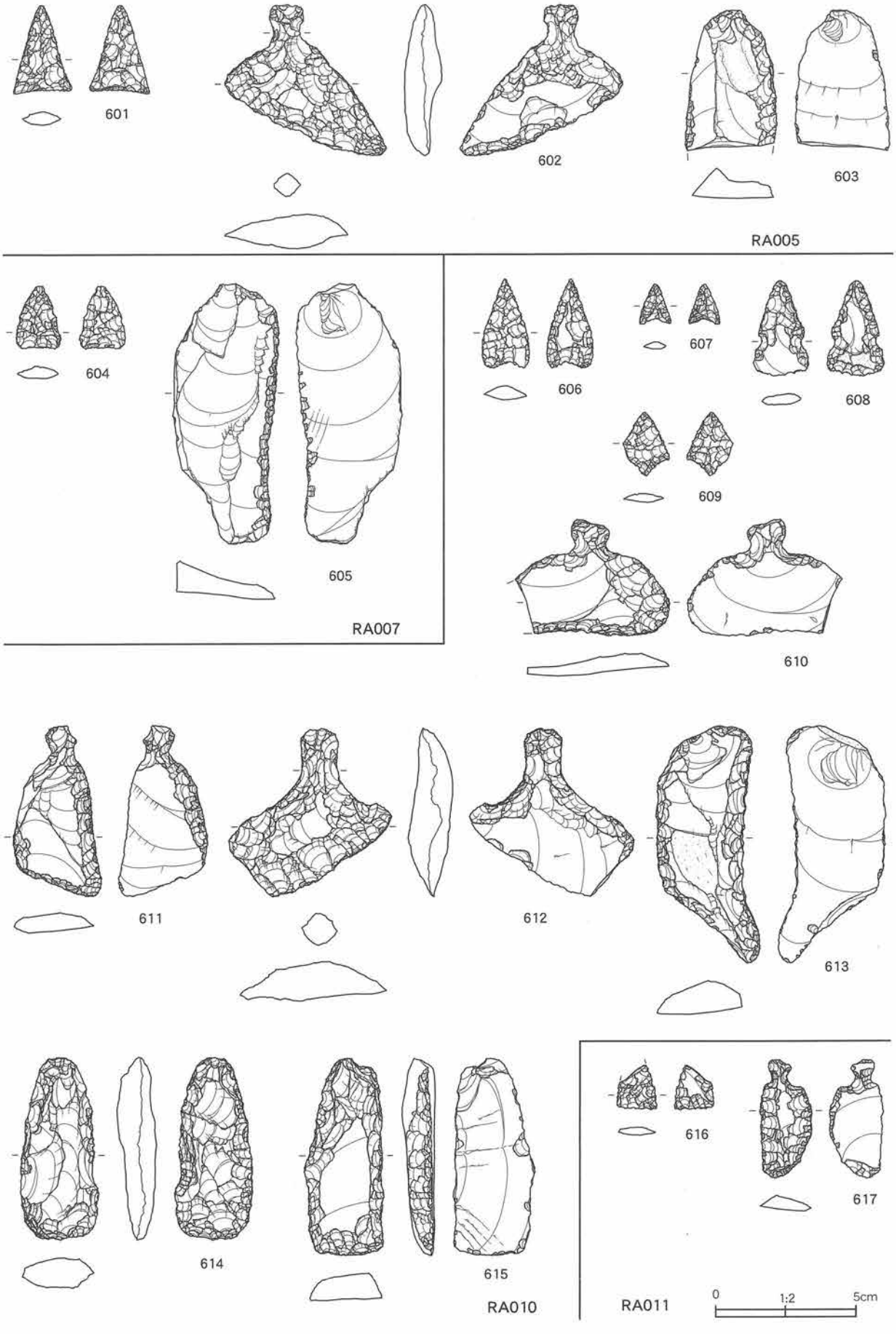

1026



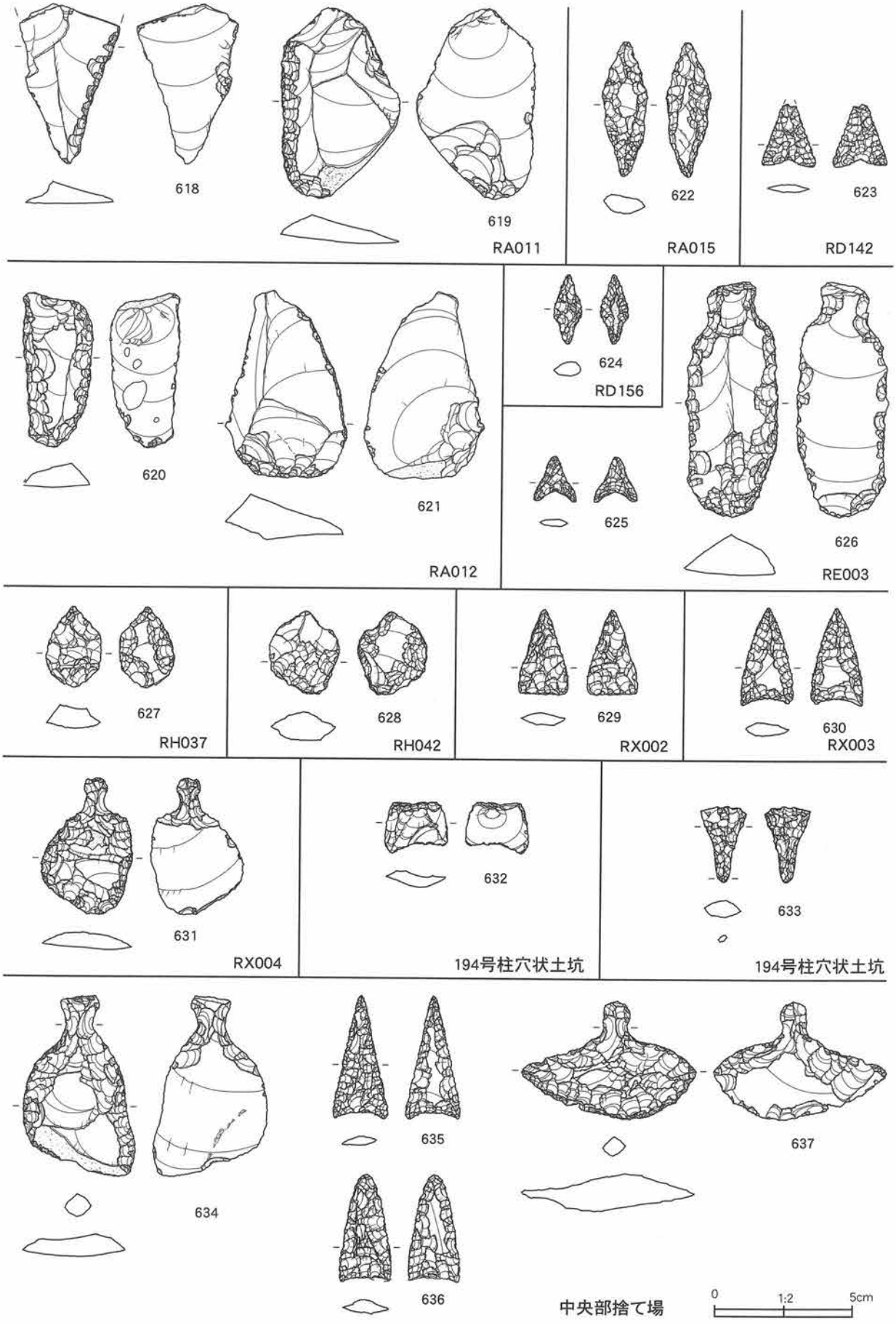
第111図　陶磁器（２）・金属製品（１）


1027
1028
1029
1030
1031
1032
1033
1034
1035
1036
1037
1038
1039
0
1:1
5cm

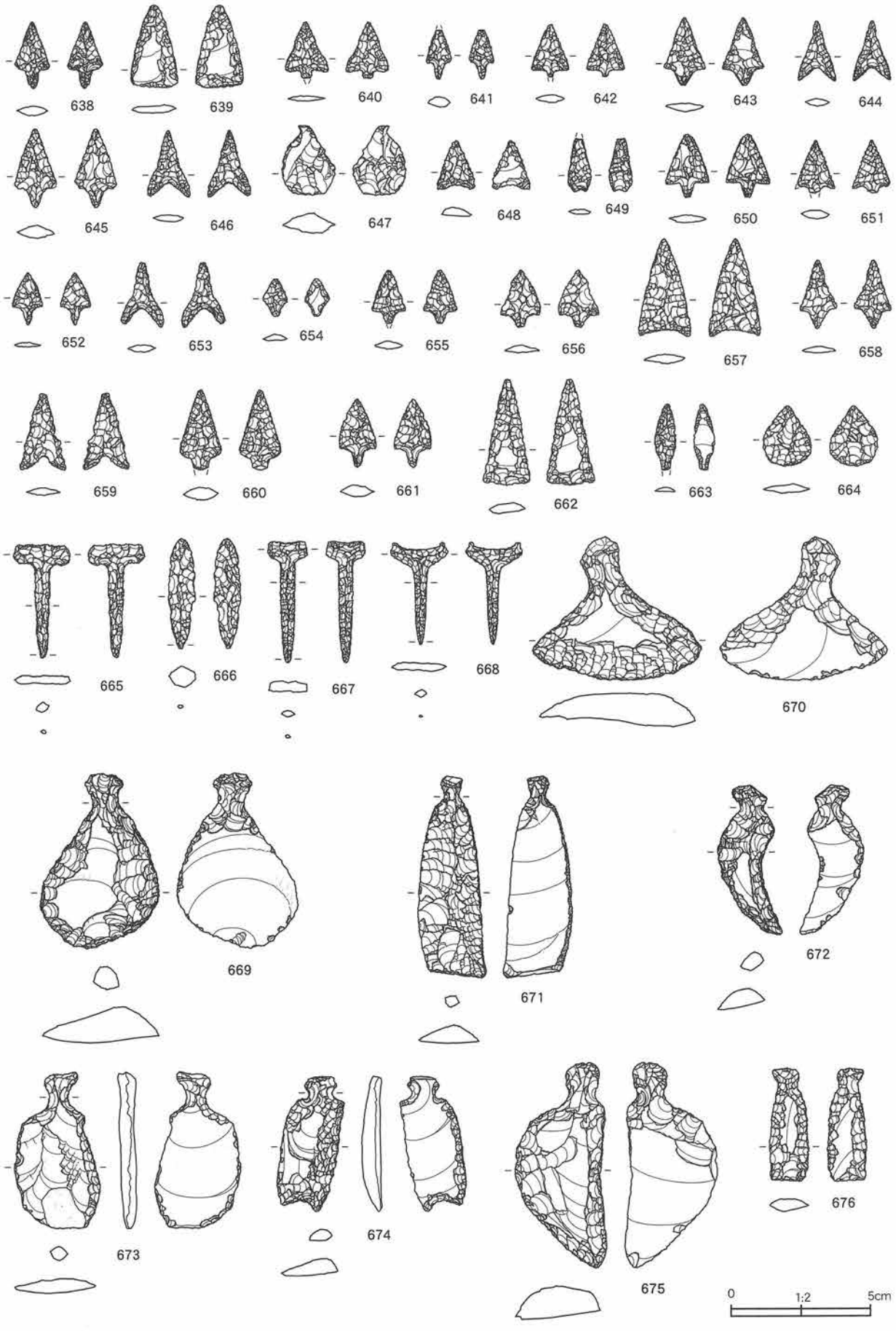
第112図　金属製品（２）



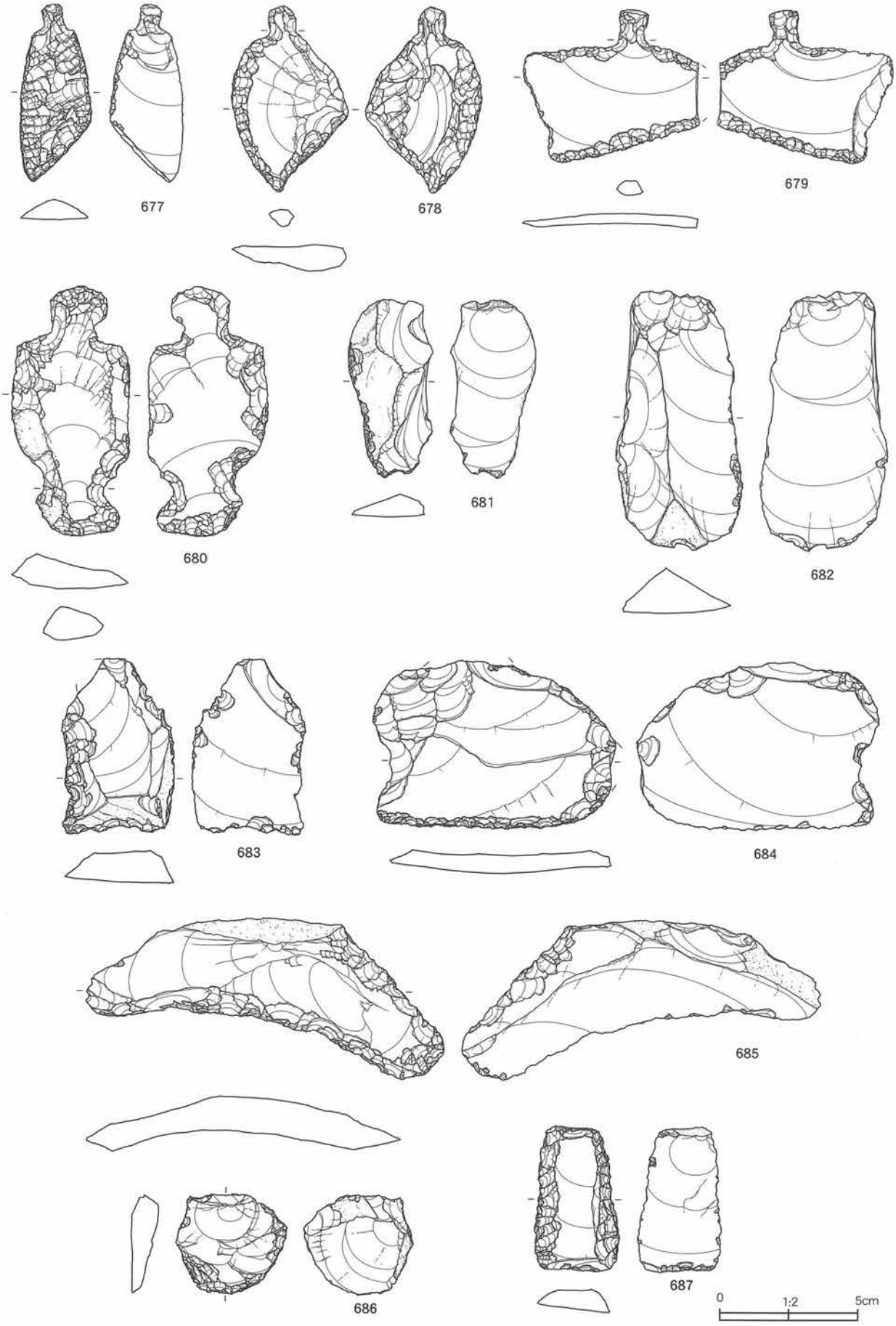
第113図　遺構内出土剥片石器（1）



第114図　遺構内出土剥片石器（2）・中央部捨て場剥片石器

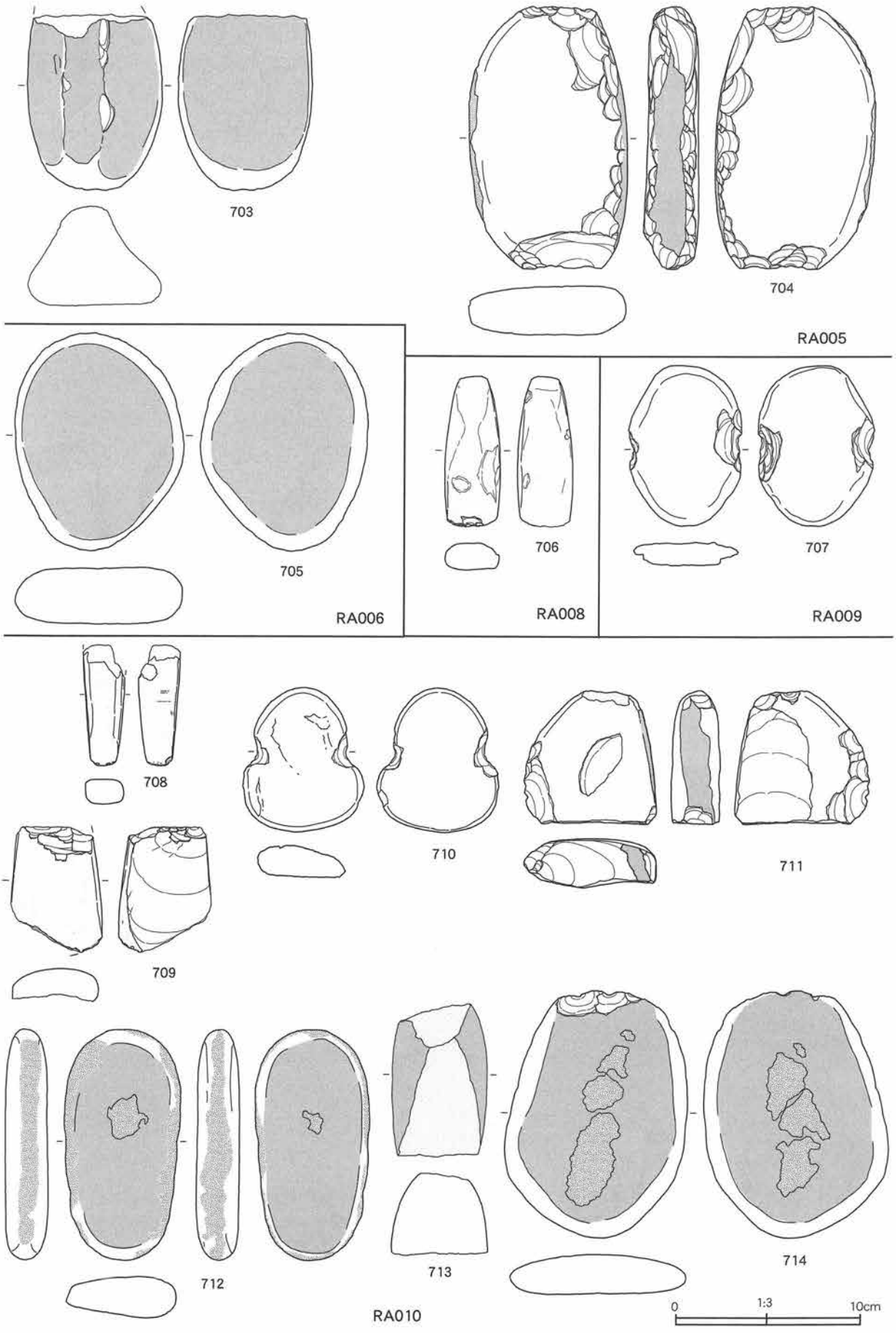


第115図　遺構外出土剥片石器（１）

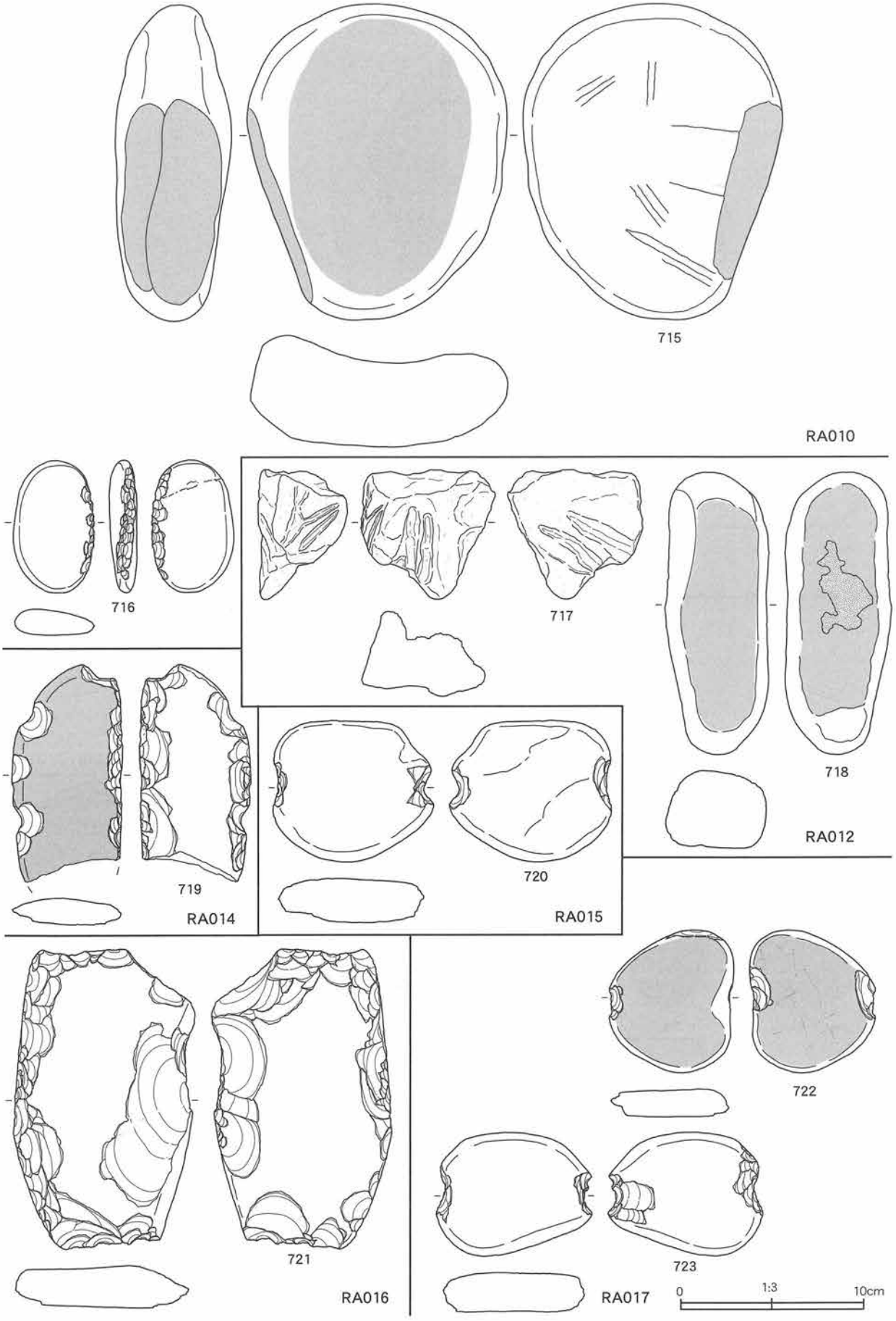


第116図　遺構外出土剥片石器（２）

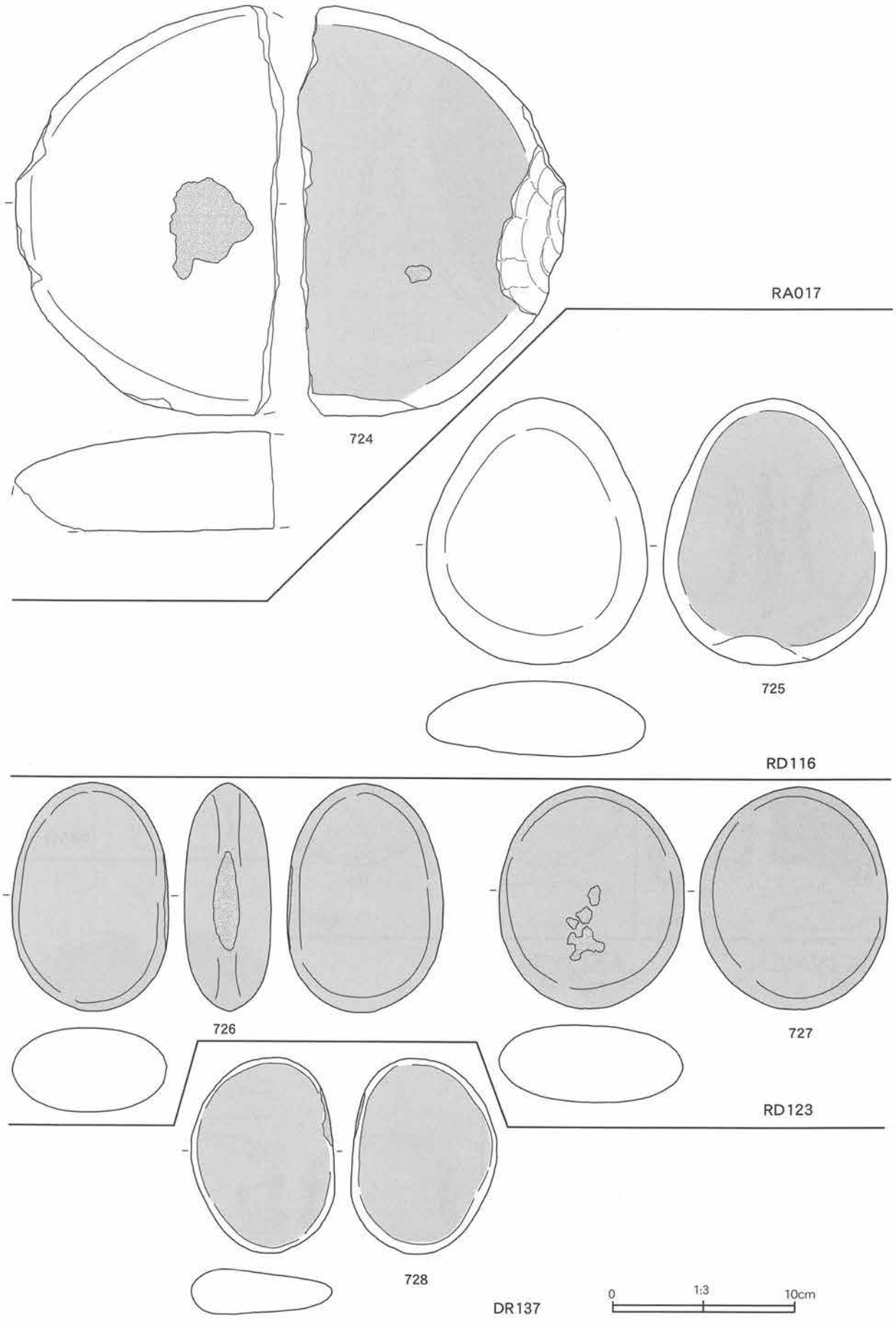
第117図　遺構外出土剥片石器（３）



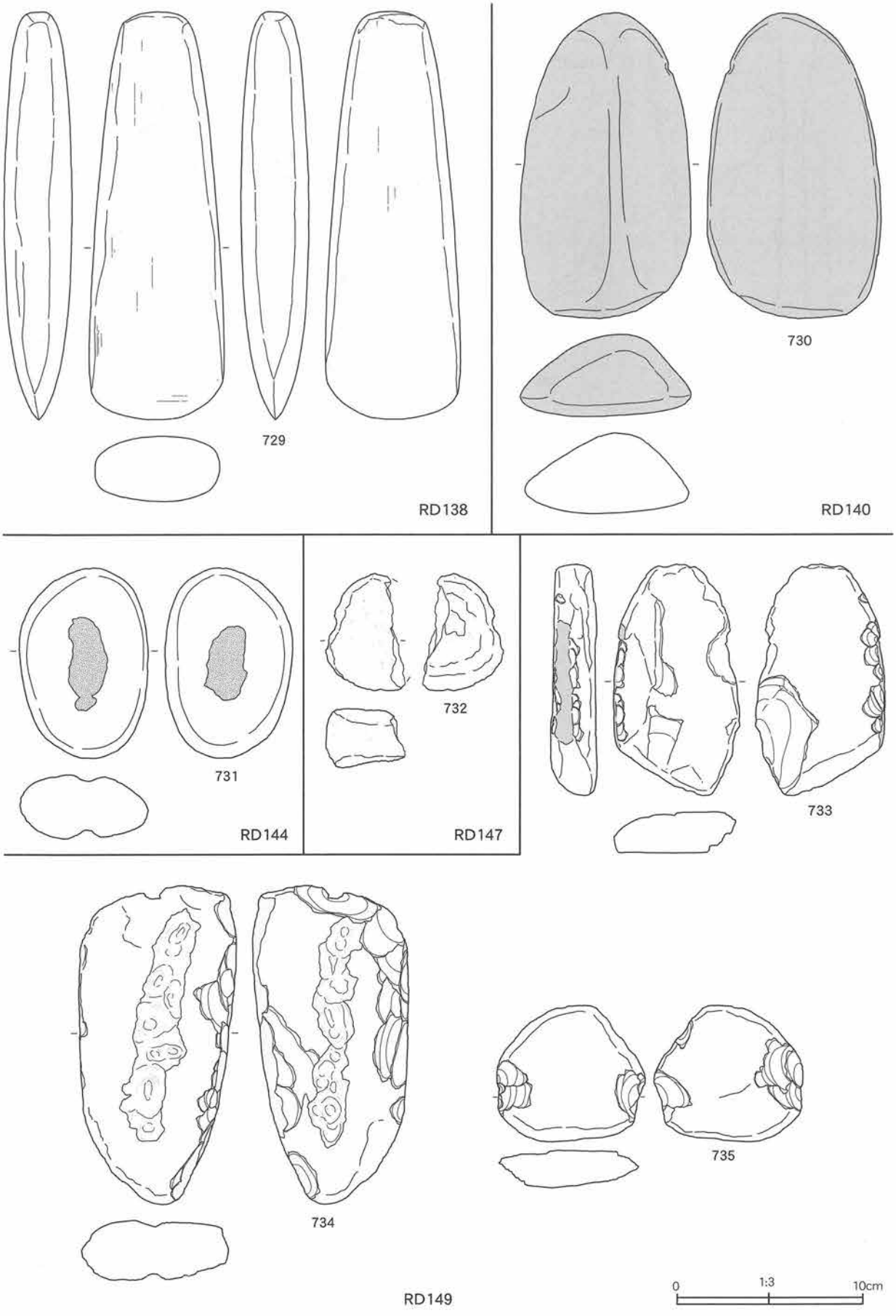
第118図　遺構内出土礫石器（1）



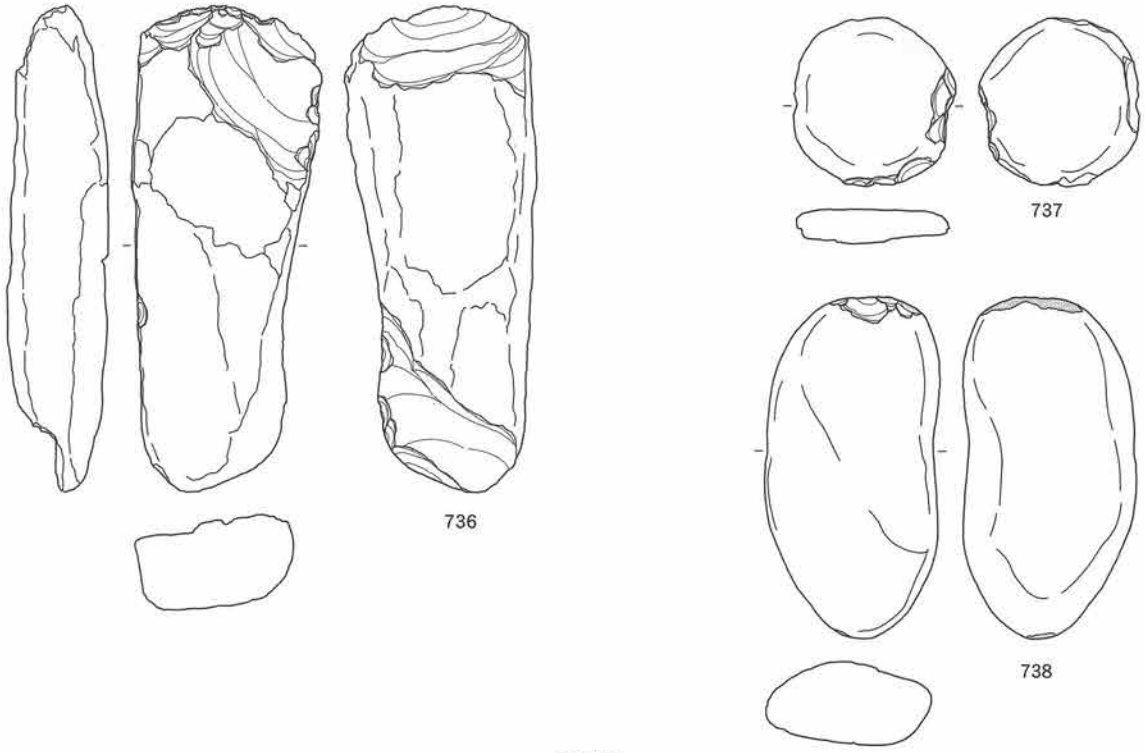
第119図　遺構内出土礫石器（２）

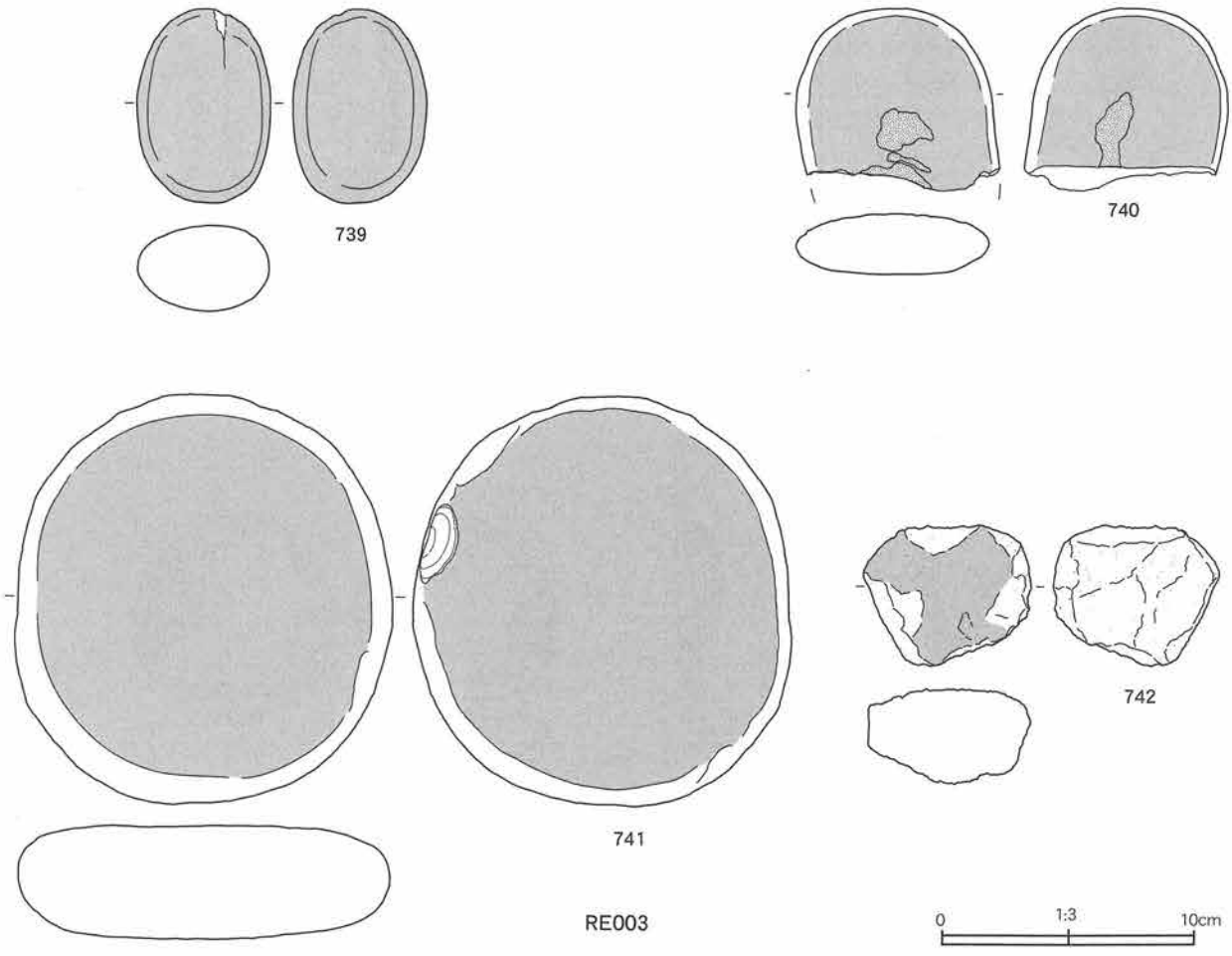


第120図　遺構内出土礫石器（3）

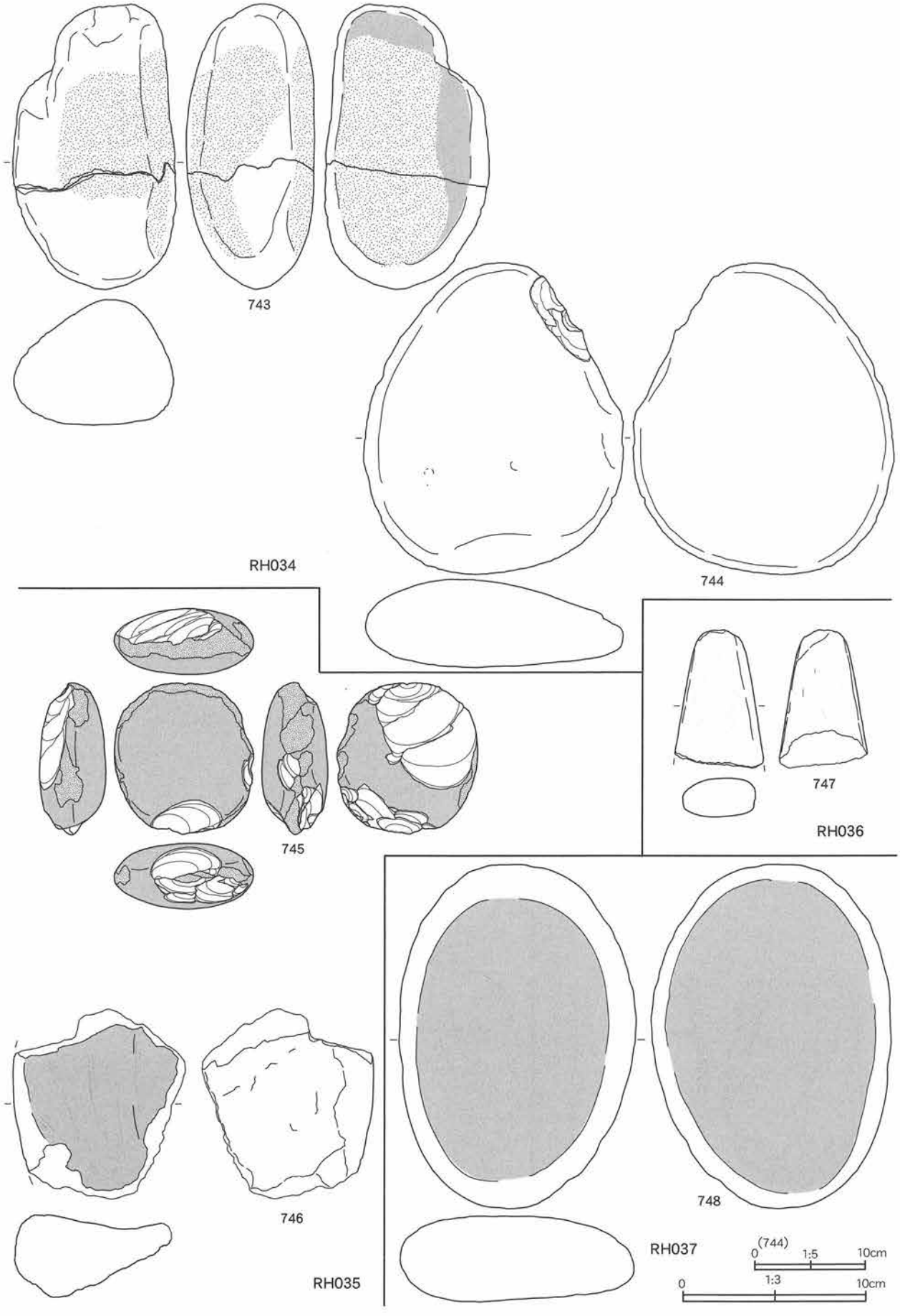


第121図　遺構内出土礫石器（４）

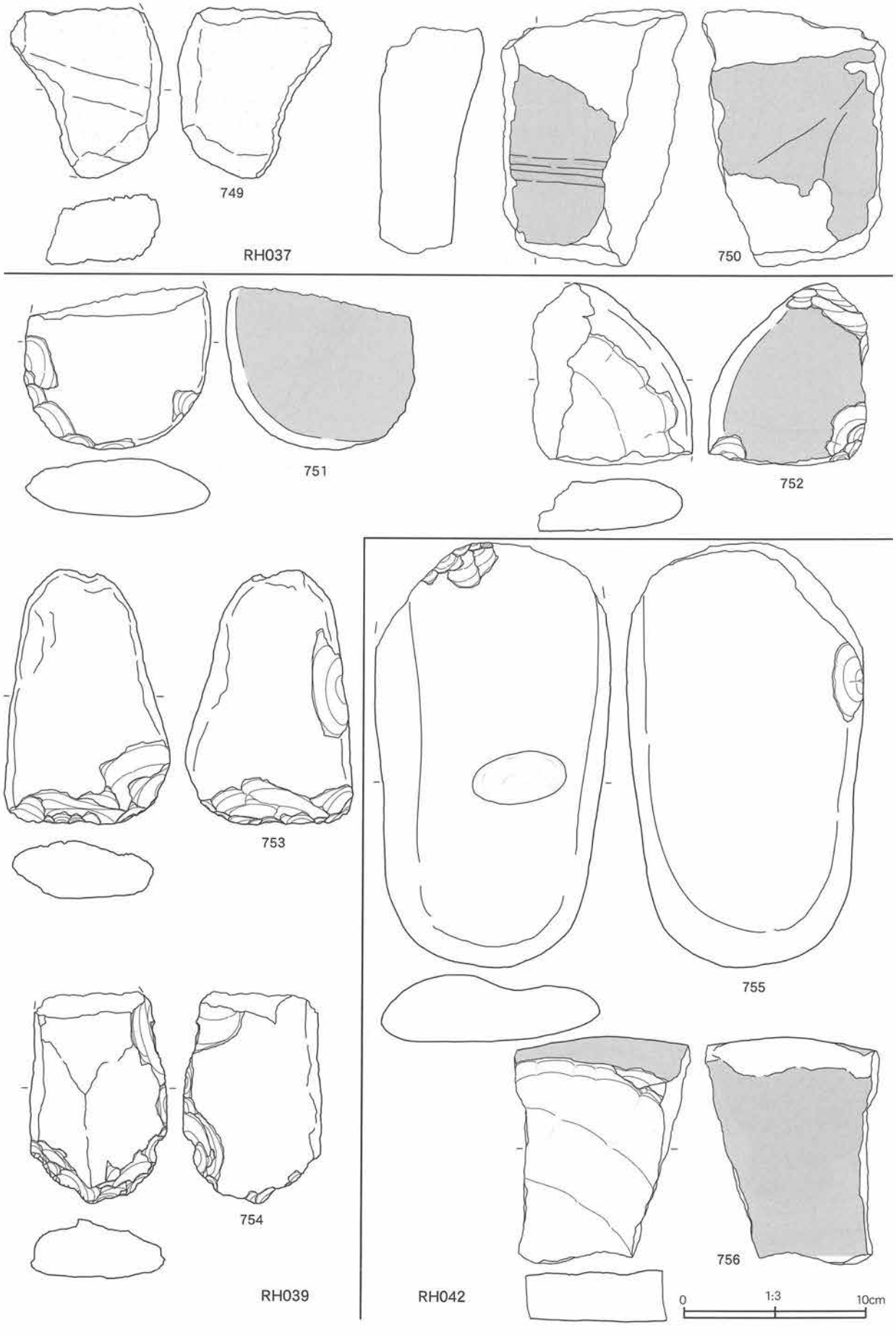




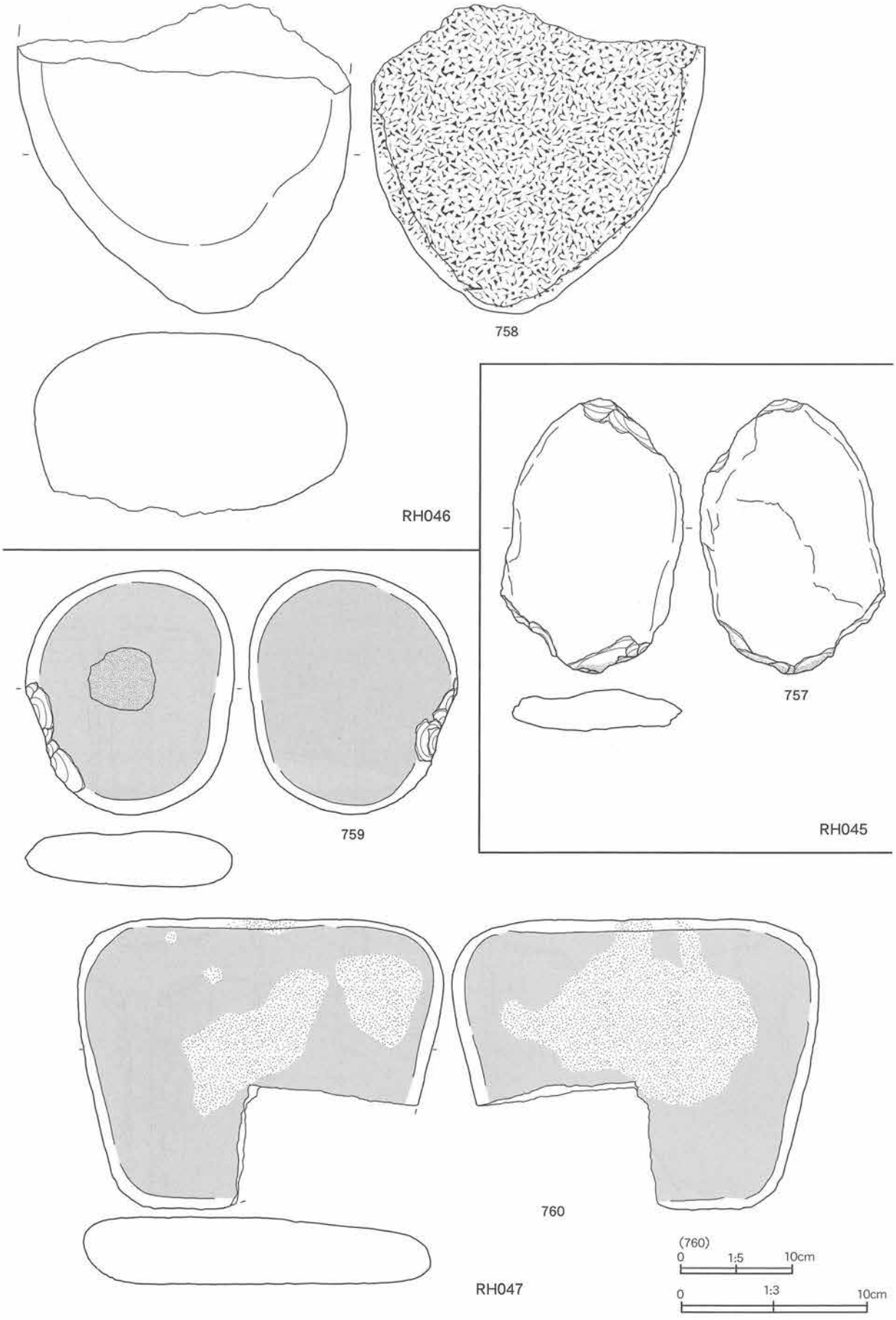
第122図　遺構内出土礫石器（５）



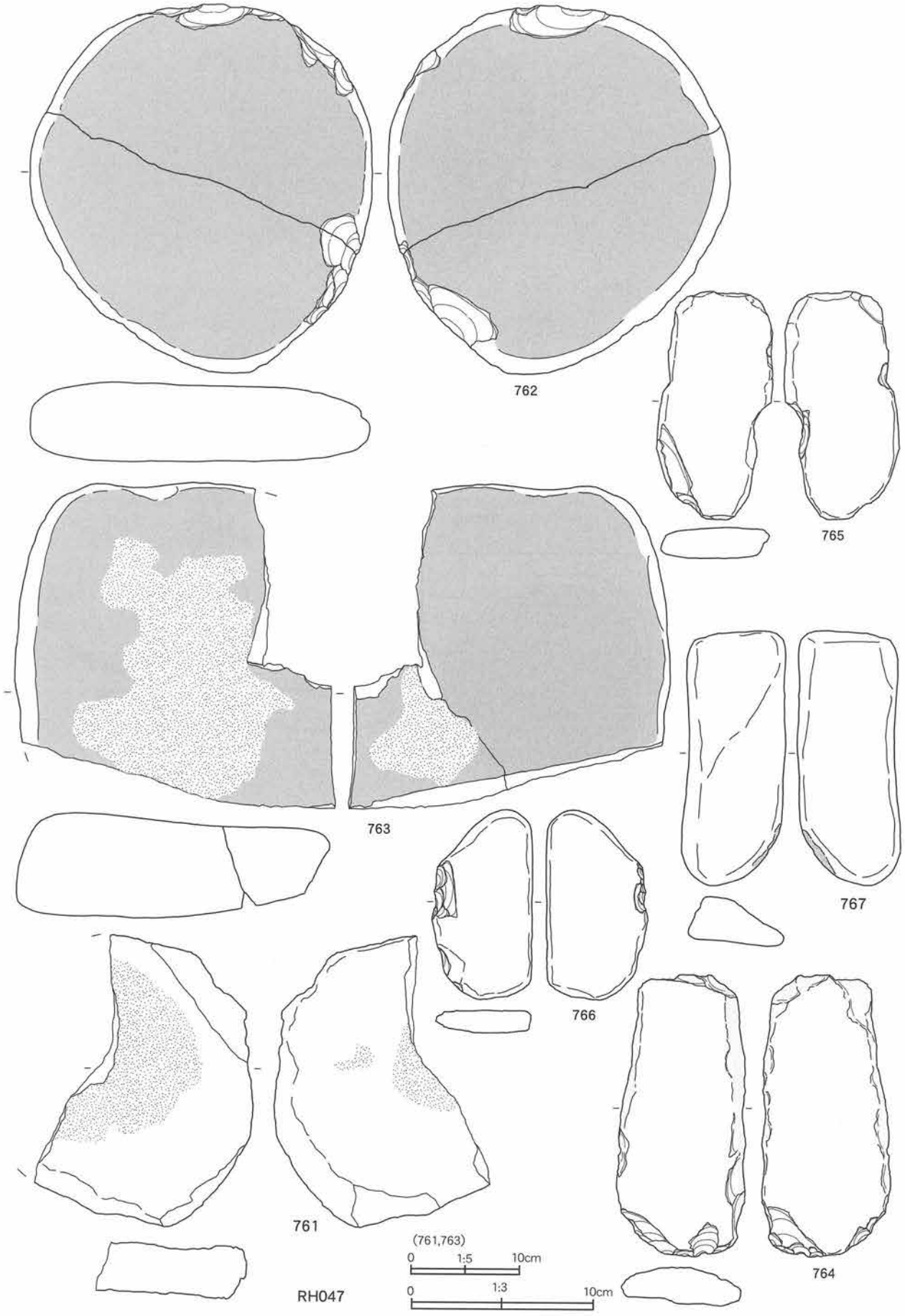
第123図　遺構内出土礫石器（6）



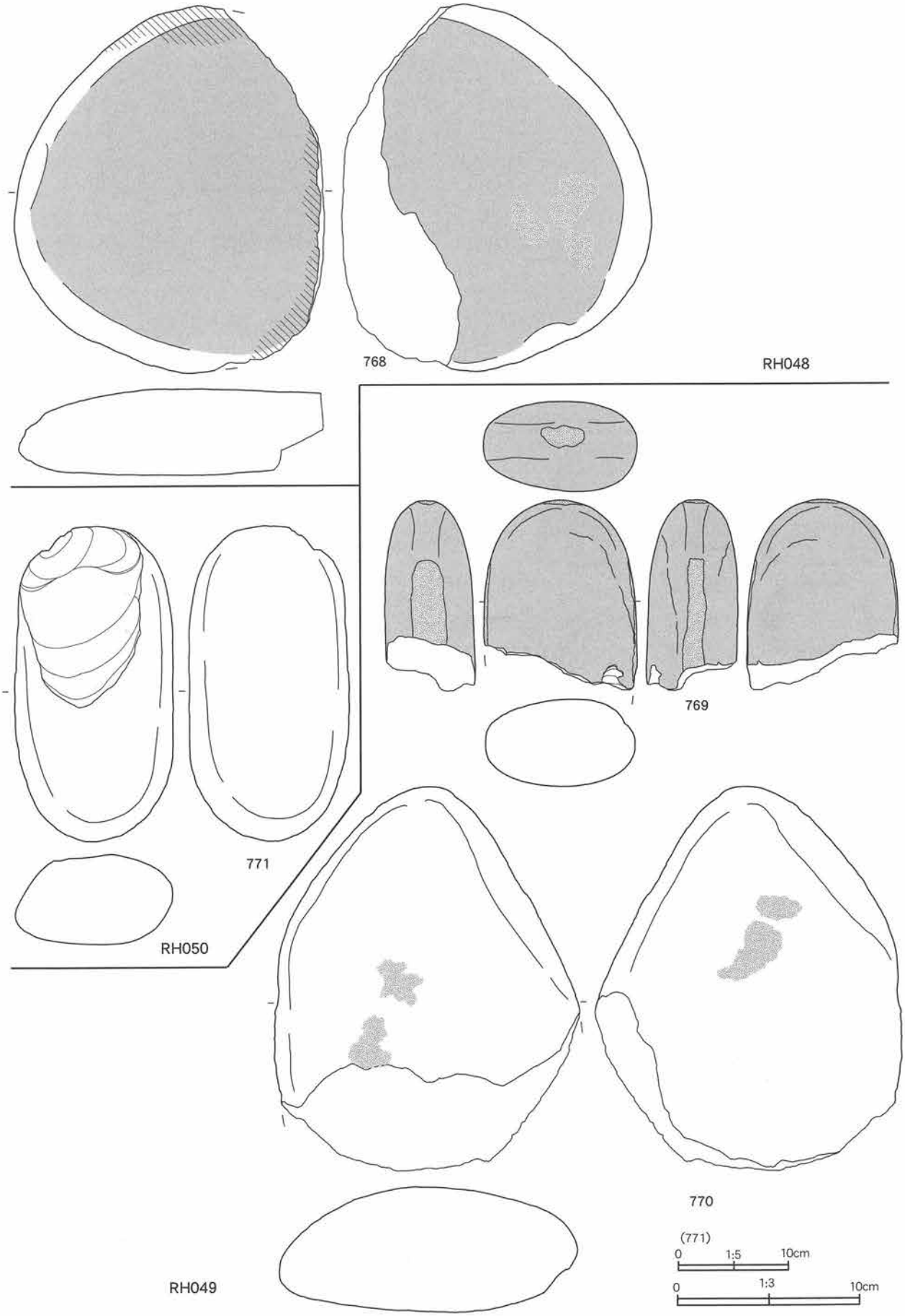
第124図　遺構内出土礫石器（７）



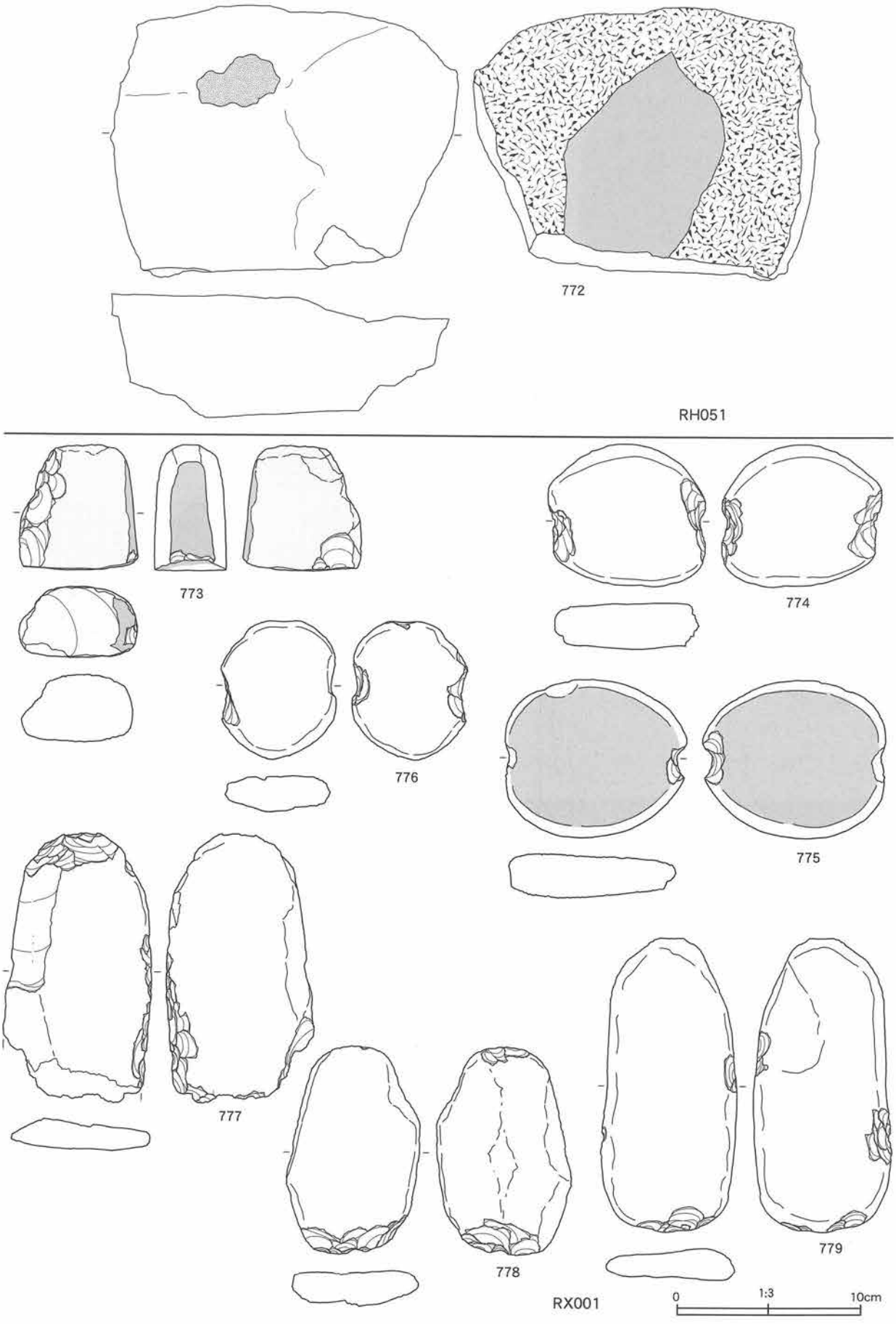
第125図　遺構内出土礫石器（8）



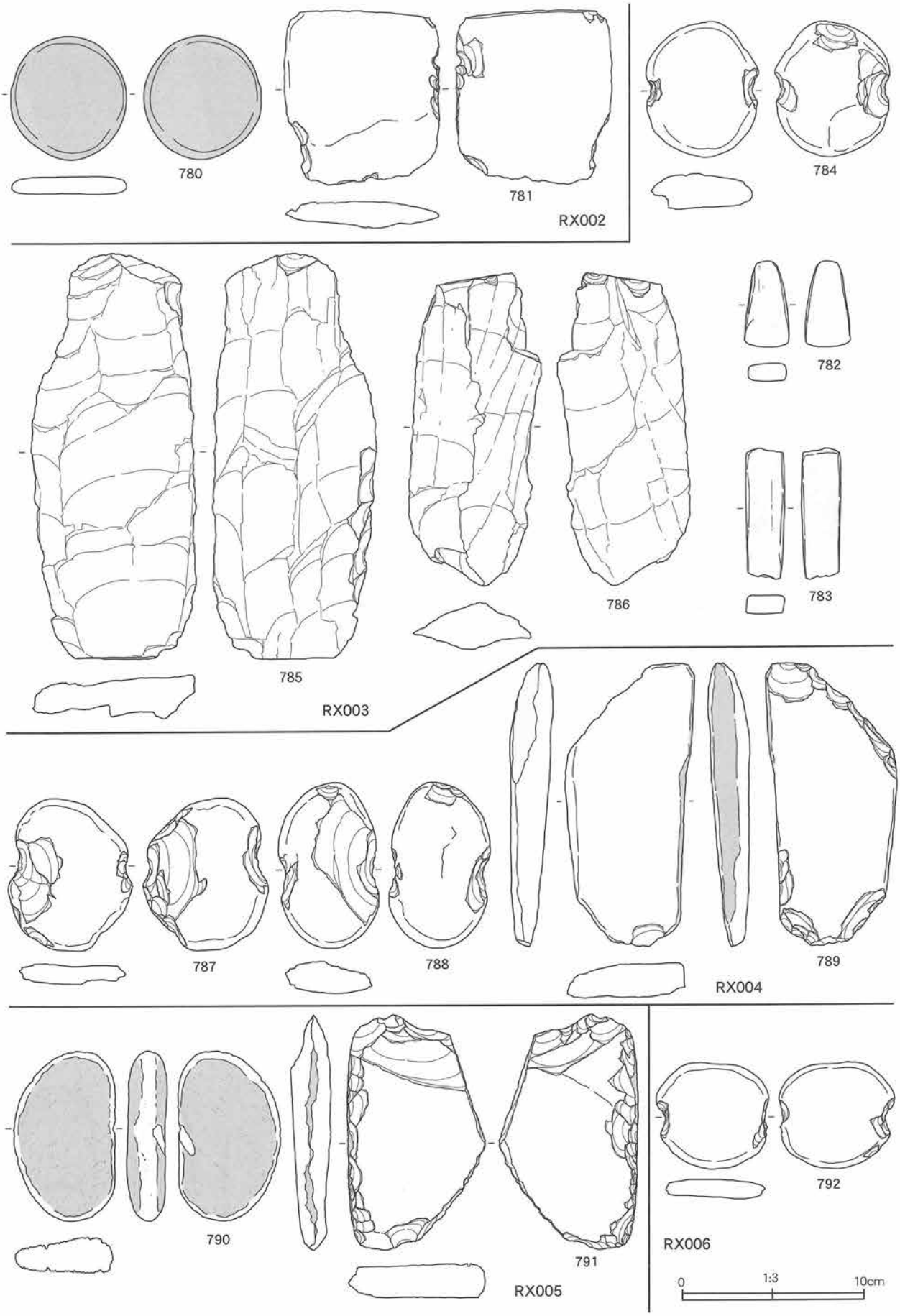
第126図　遺構内出土礫石器（９）



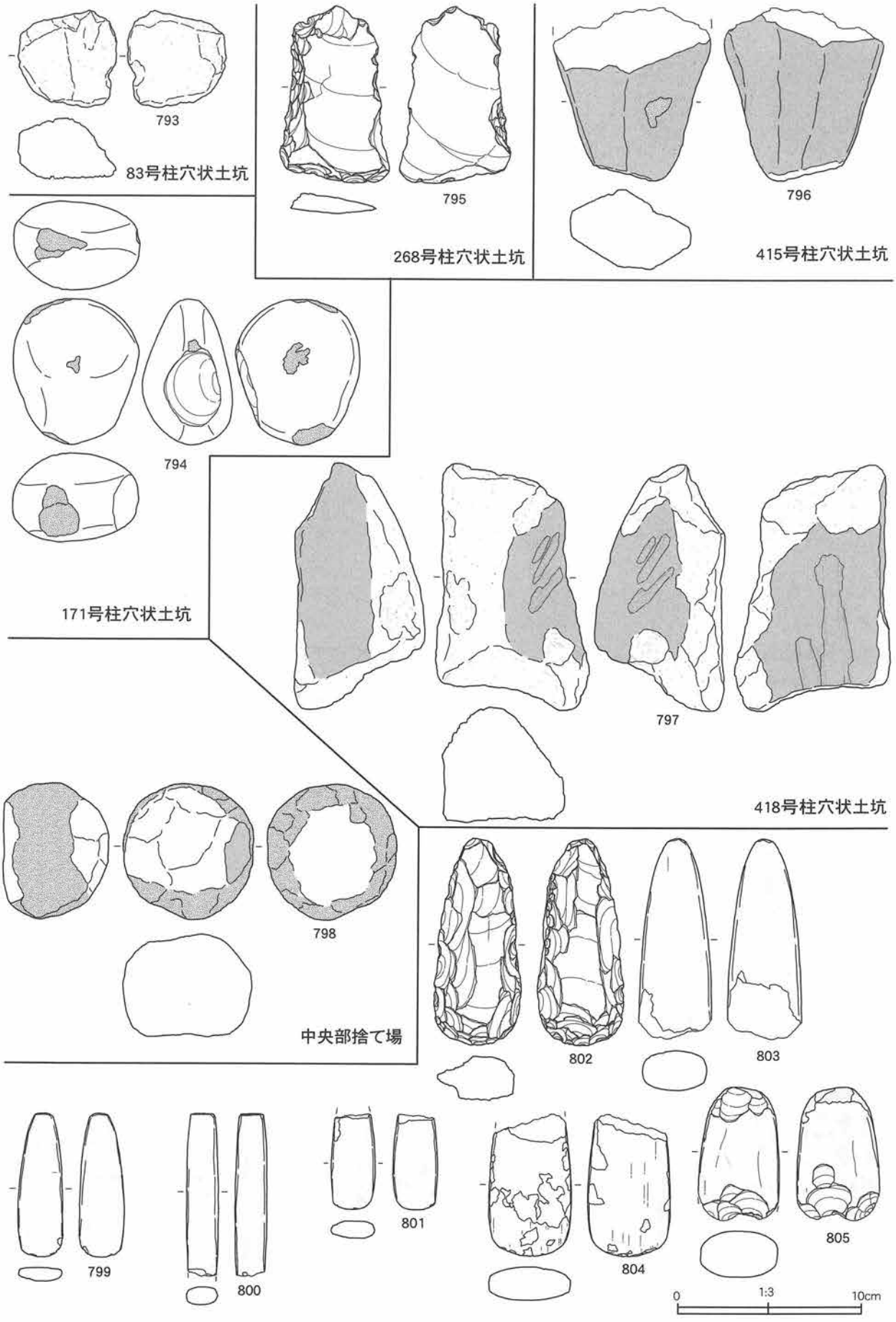
第127図　遺構内出土礫石器（10）



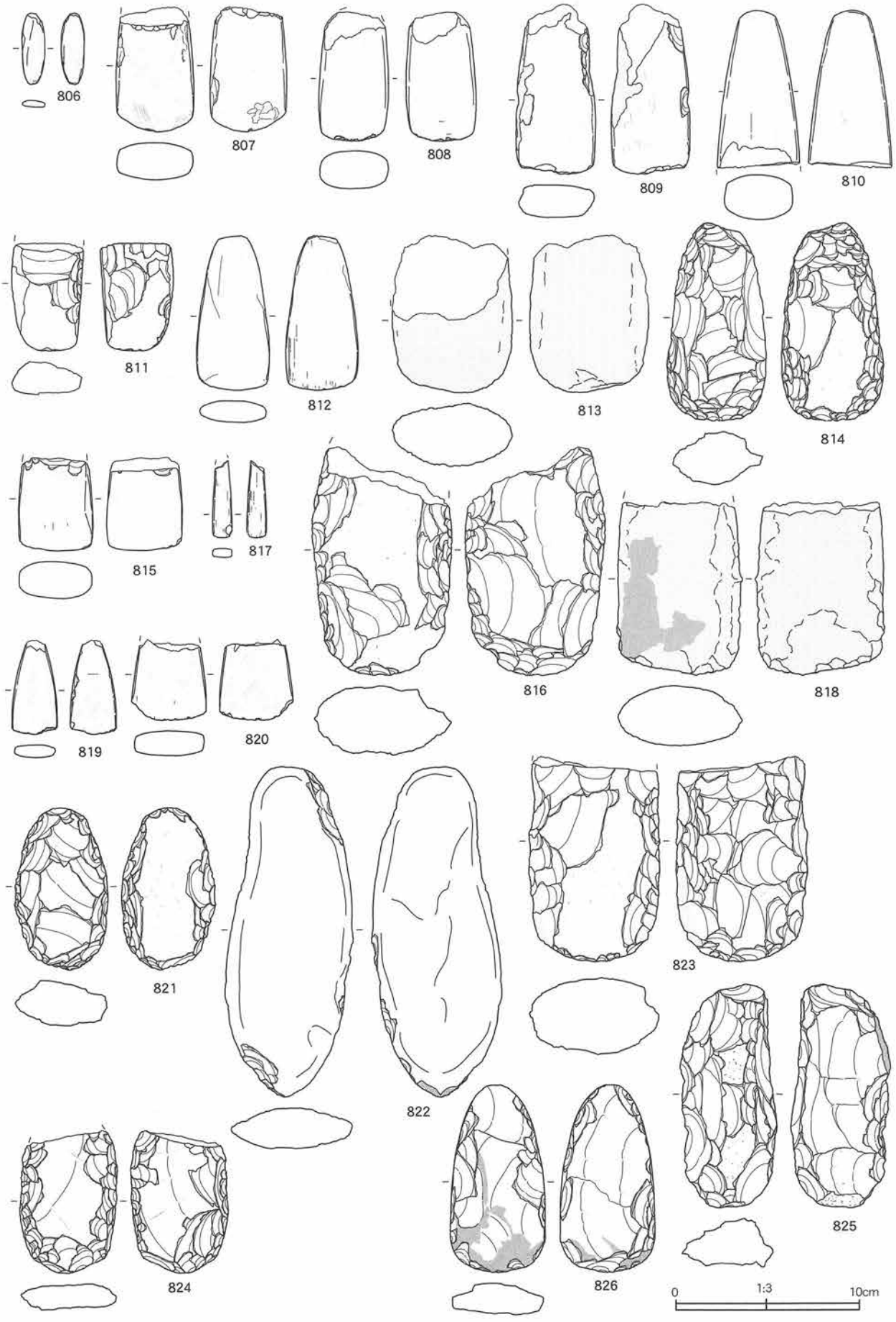
第128図　遺構内出土礫石器（11）



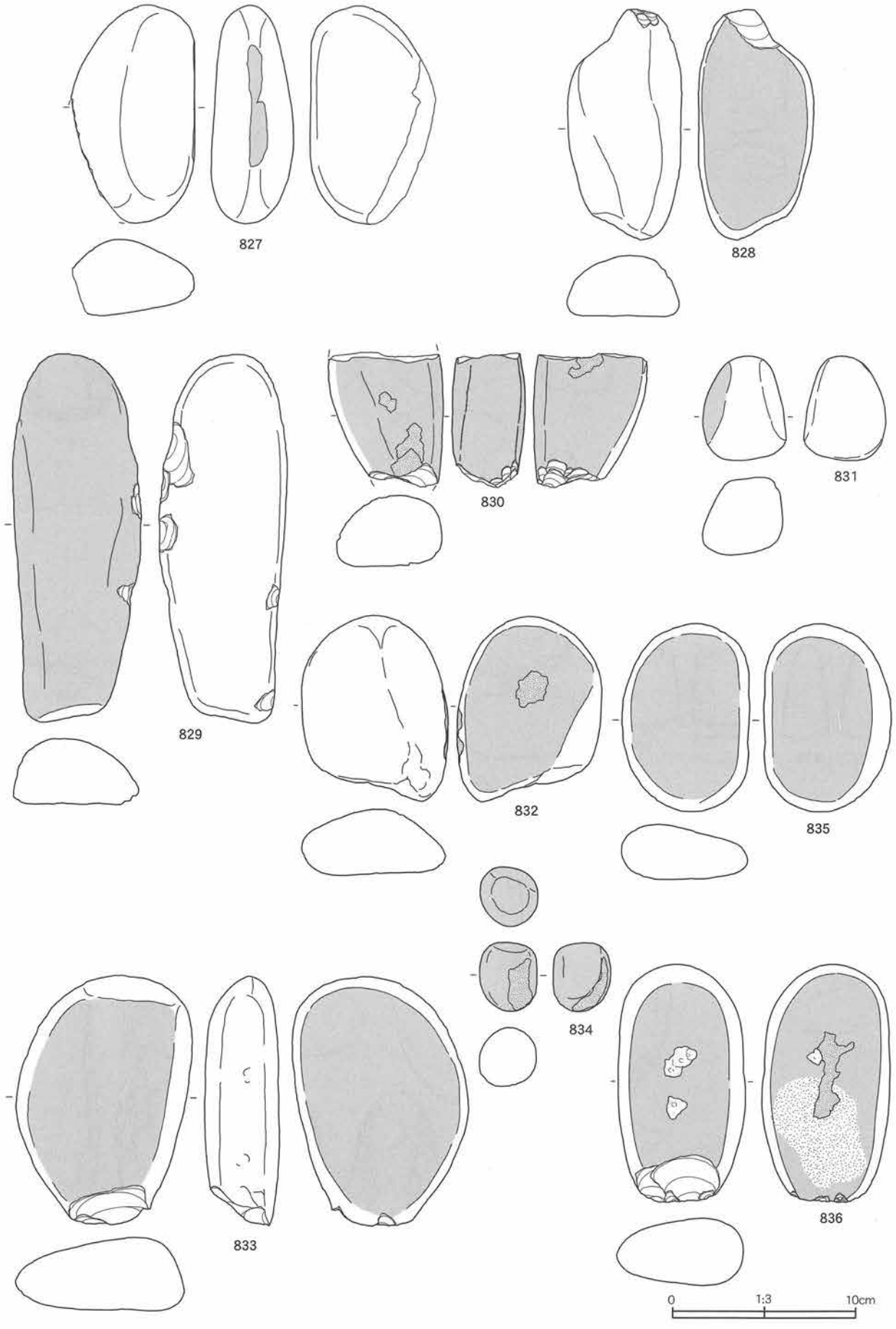
第129図　遺構内出土礫石器（12）



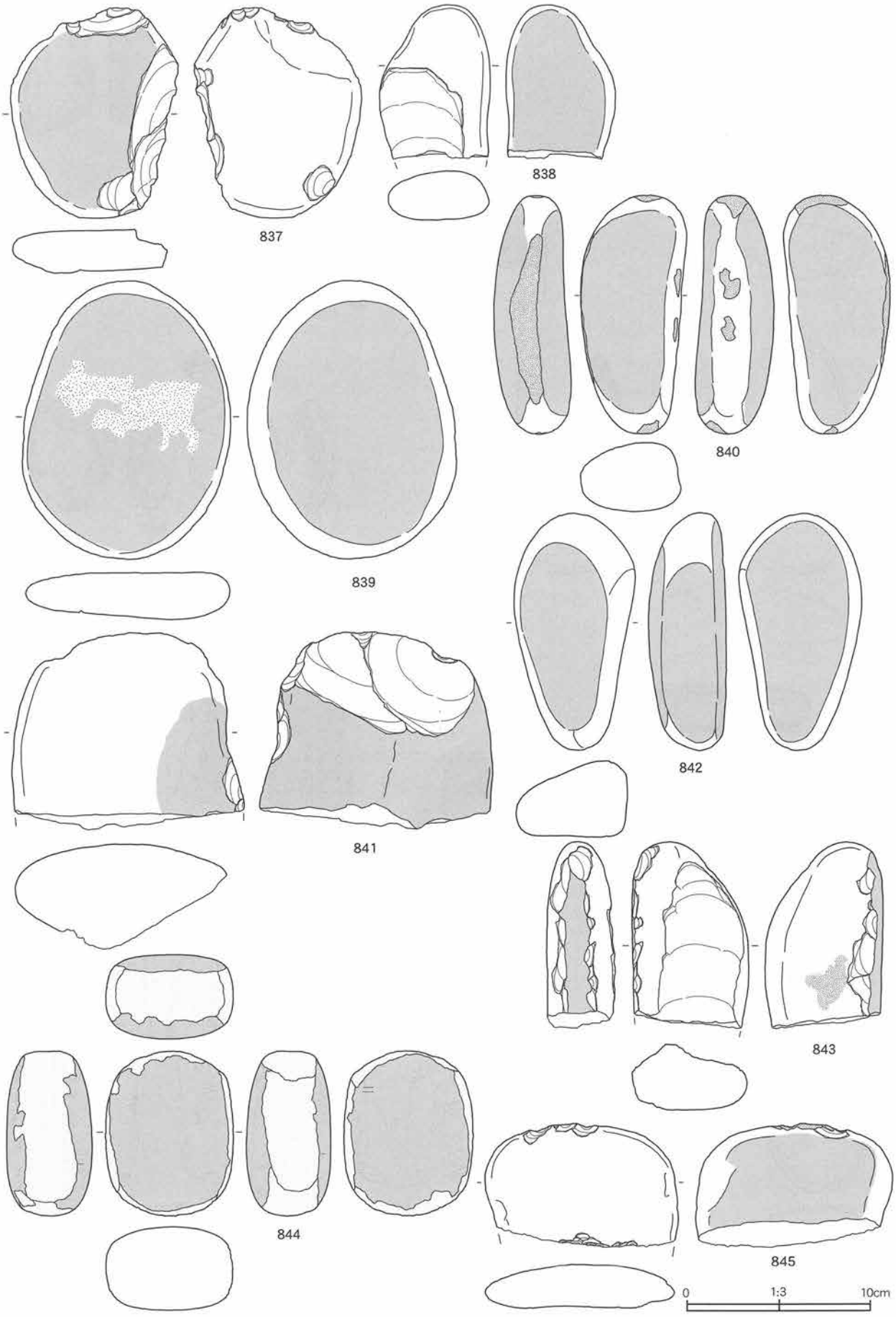
第130図　遺構内出土礫石器（13）・中央部捨て場出土礫石器・遺構外出土礫石器（1）



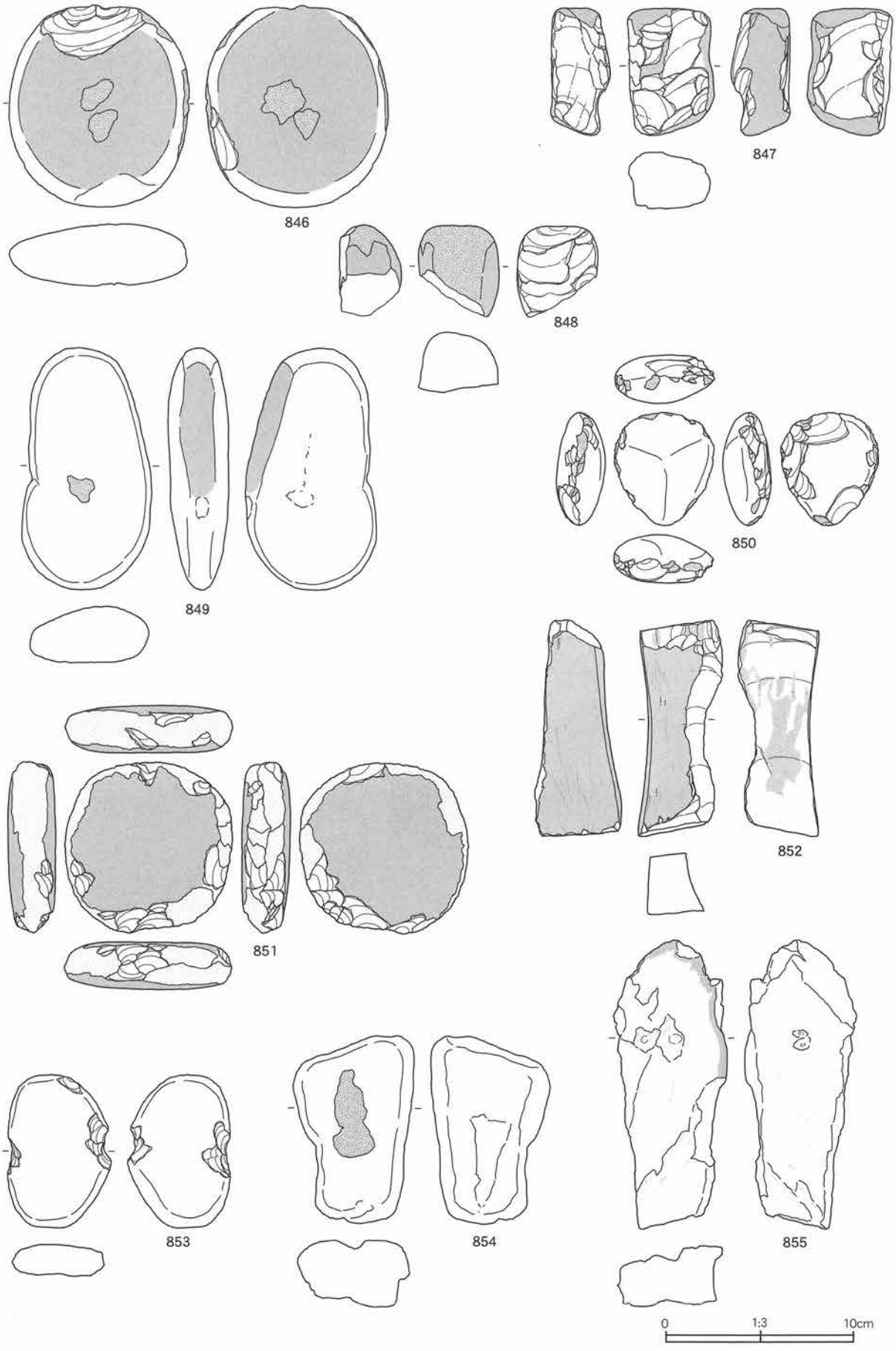
第131図　遺構外出土礫石器（2）



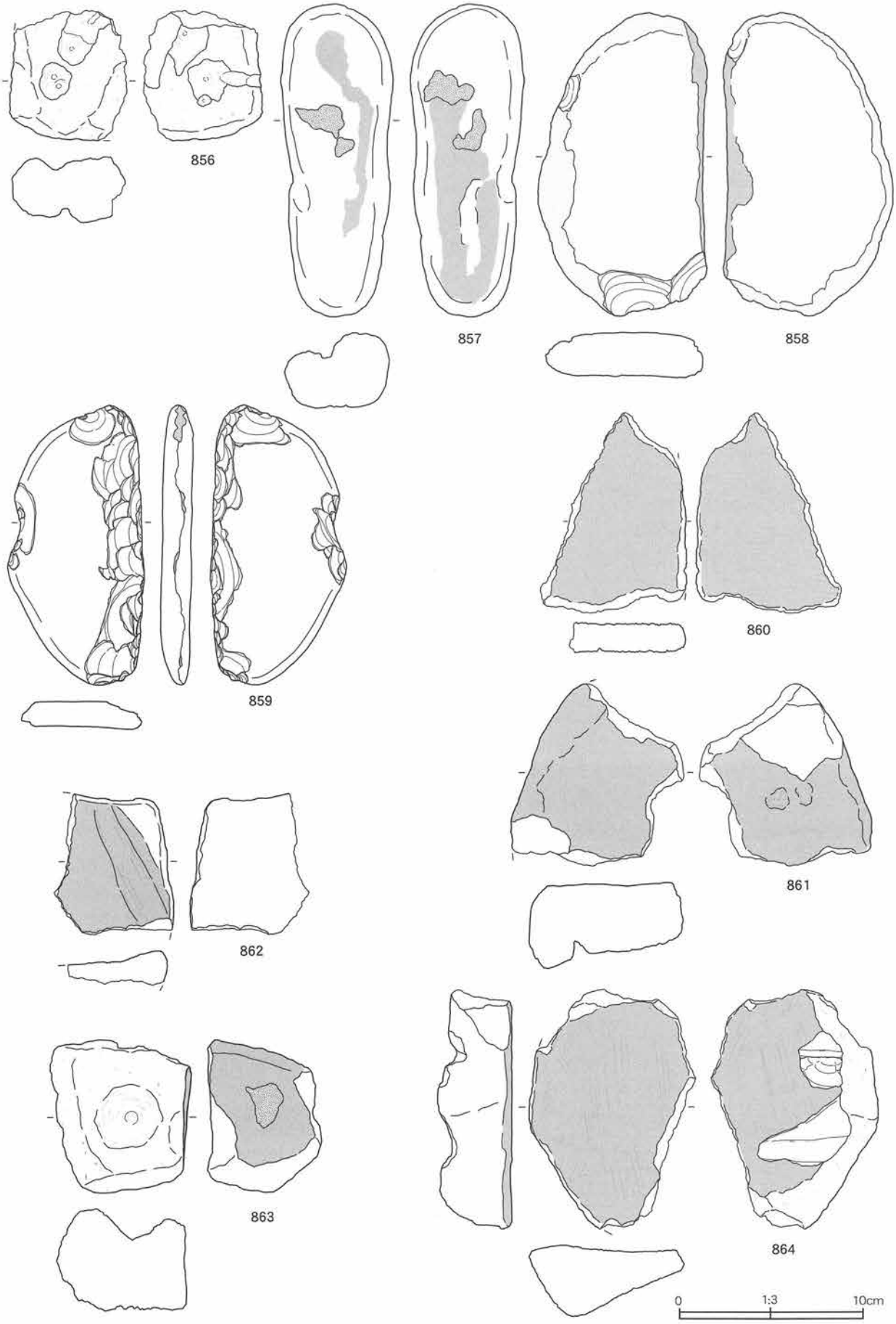
第132図　遺構外出土礫石器（３）



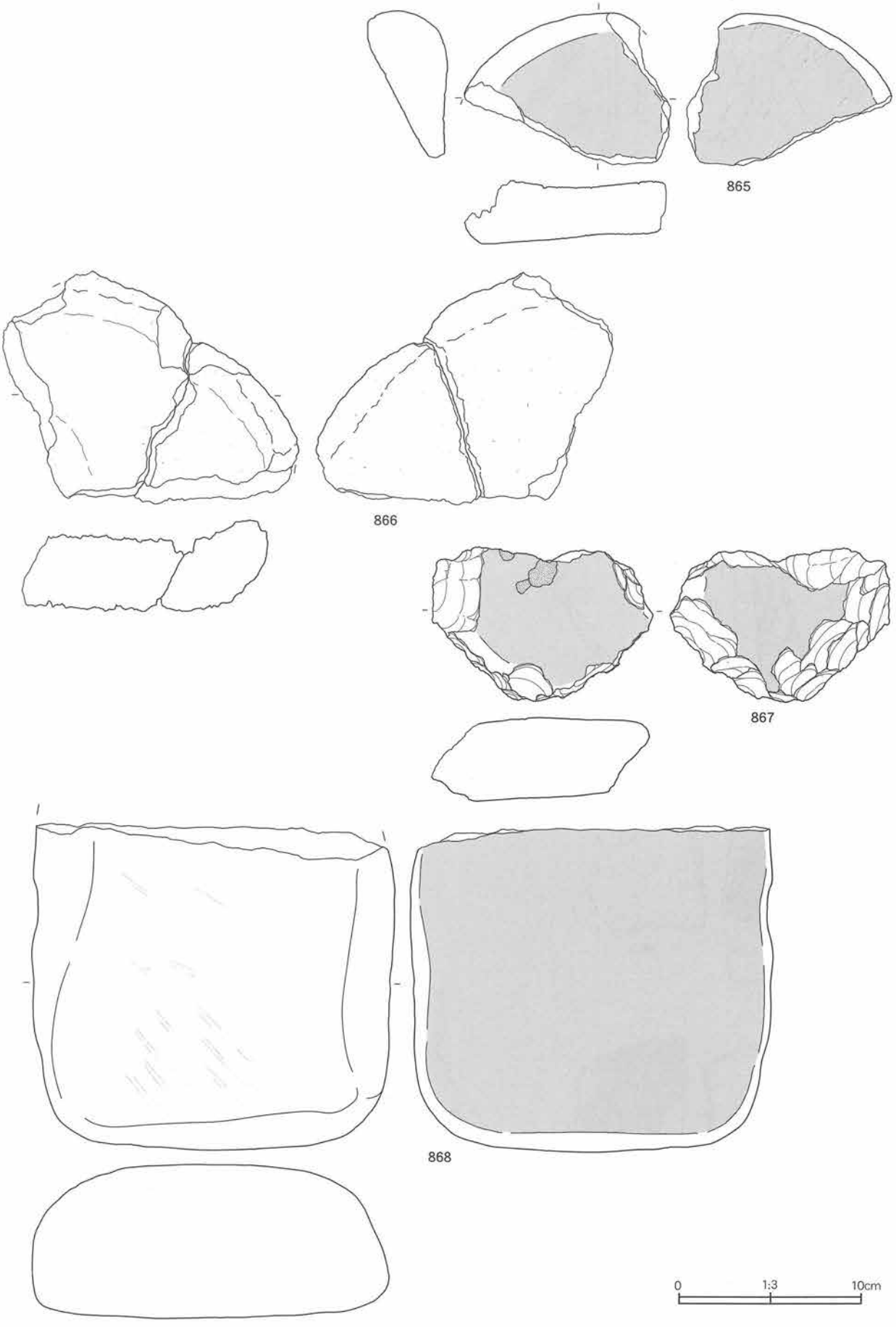
第133図　遺構外出土礫石器（４）



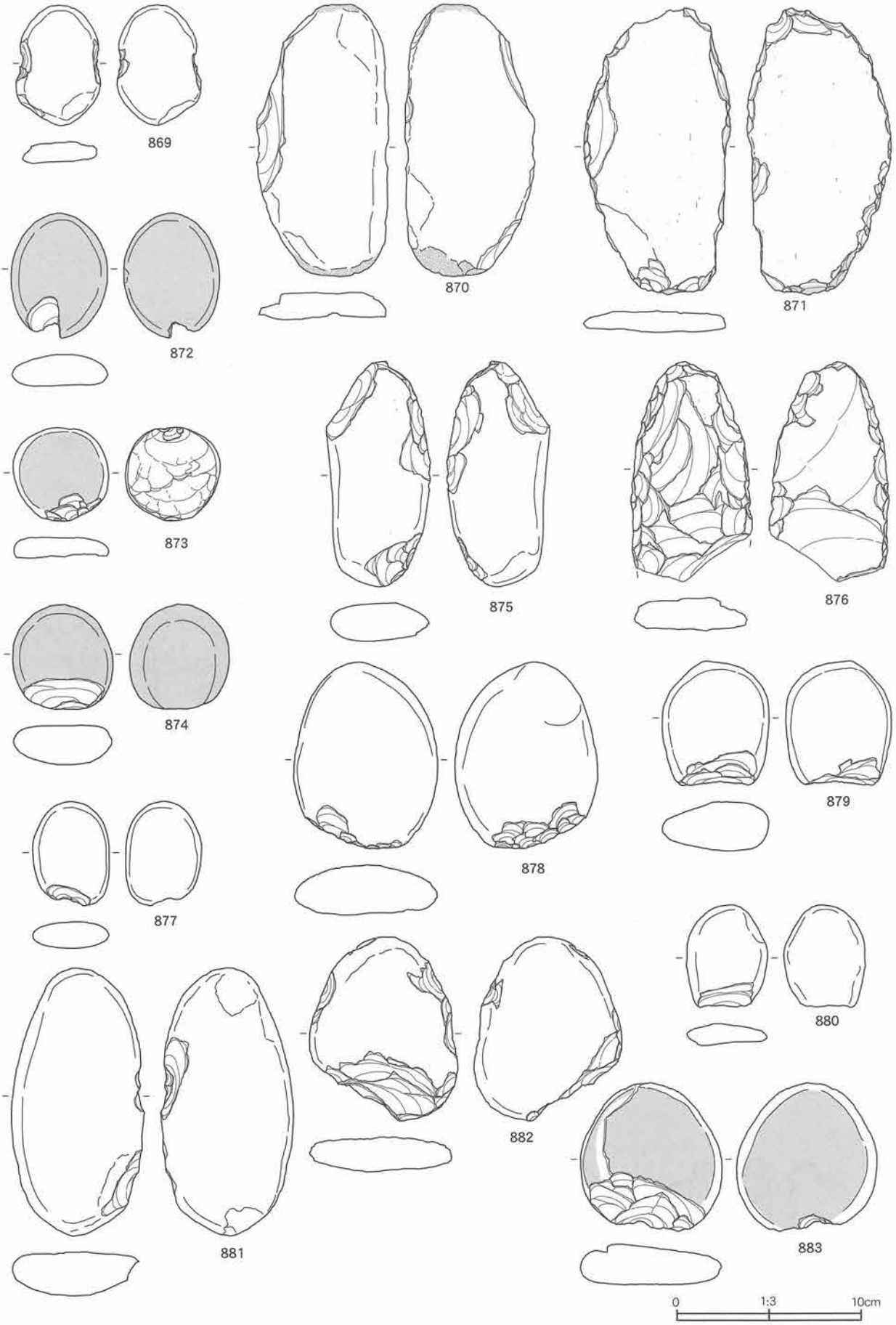
第134図　遺構外出土礫石器（５）



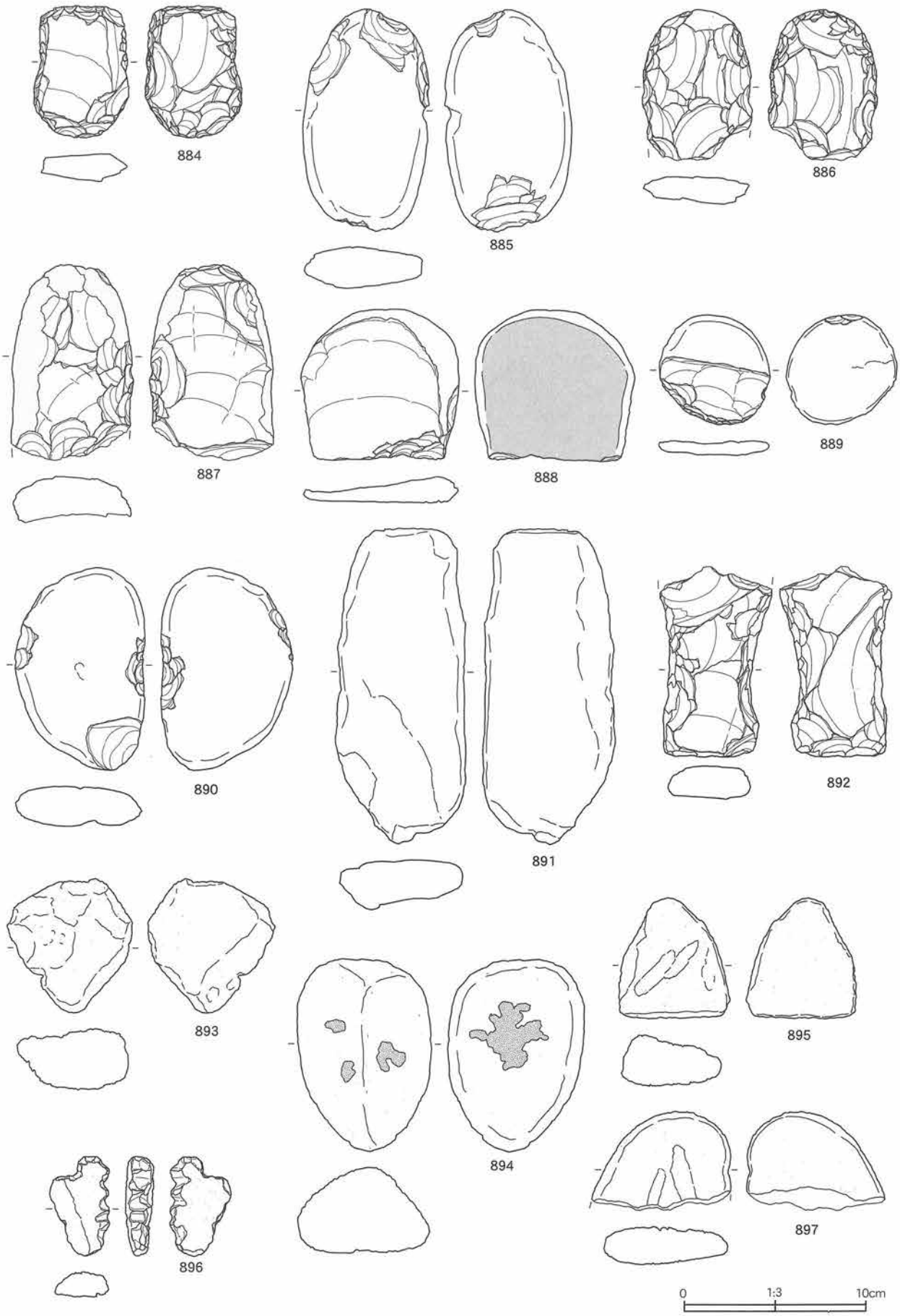
第135図　遺構外出土礫石器（6）



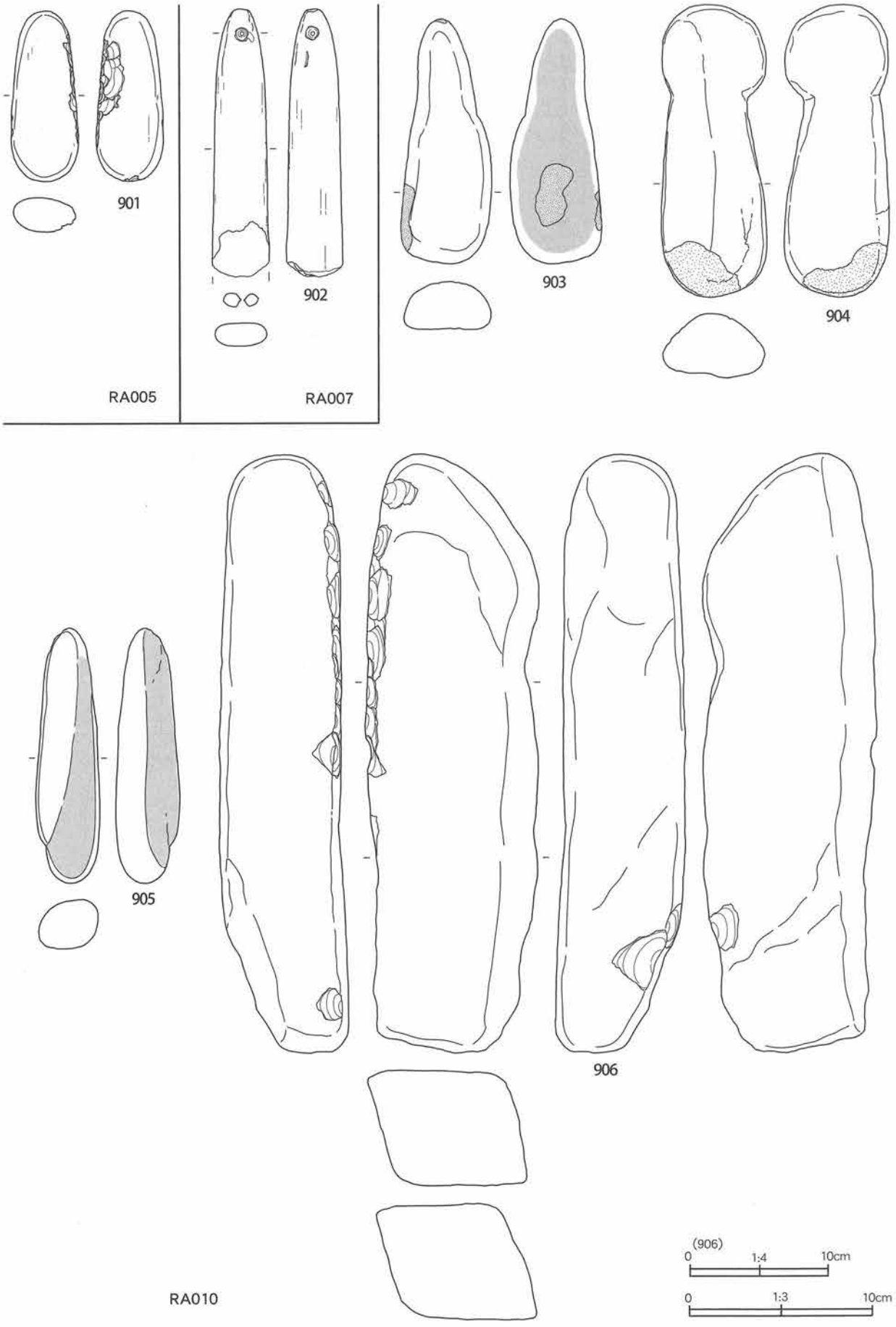
第136図　遺構外出土礫石器（７）



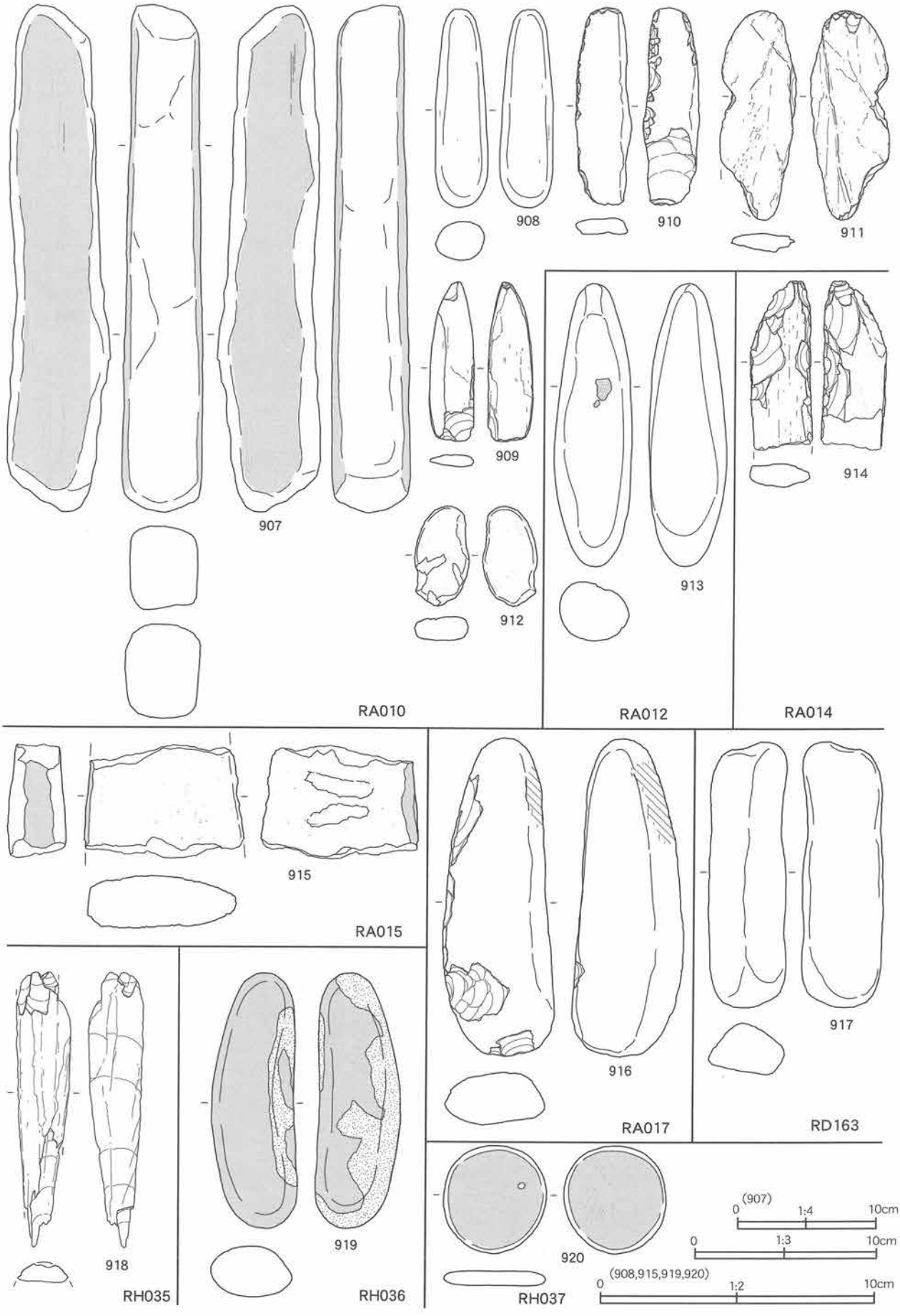
第137図　遺構外出土礫石器（８）



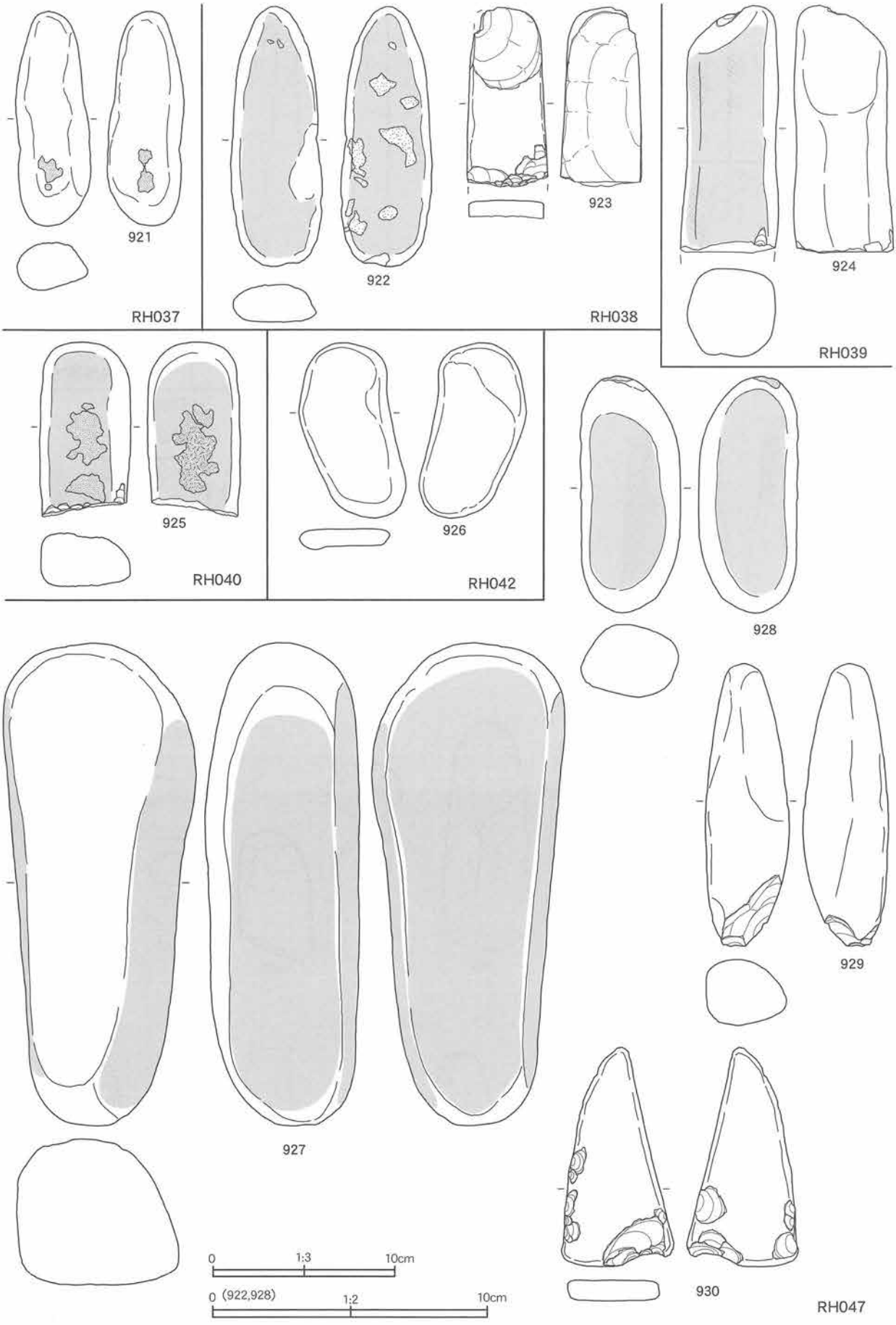
第138図　遺構外出土礫石器（９）



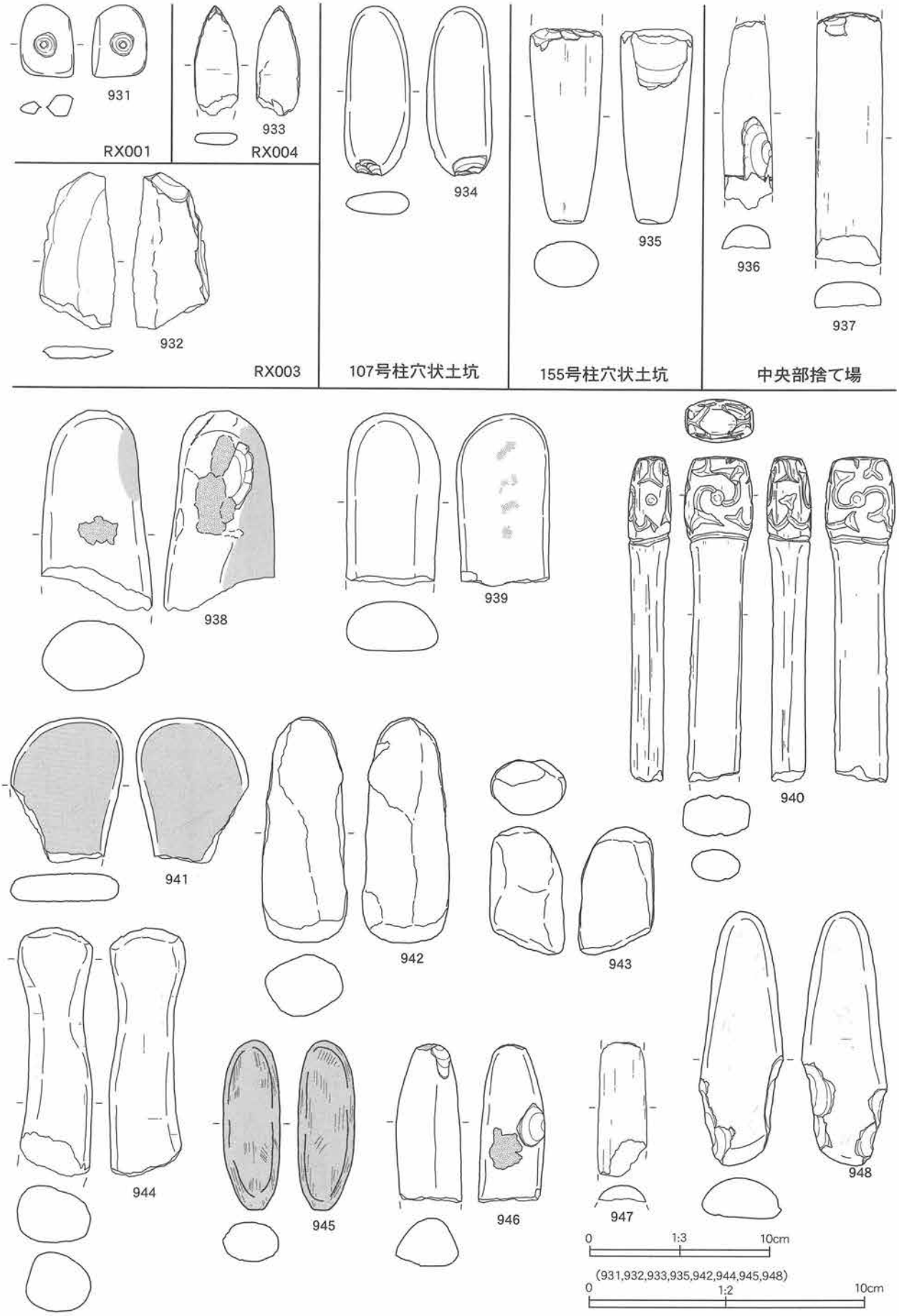
第139図　遺構内出土石製品（１）



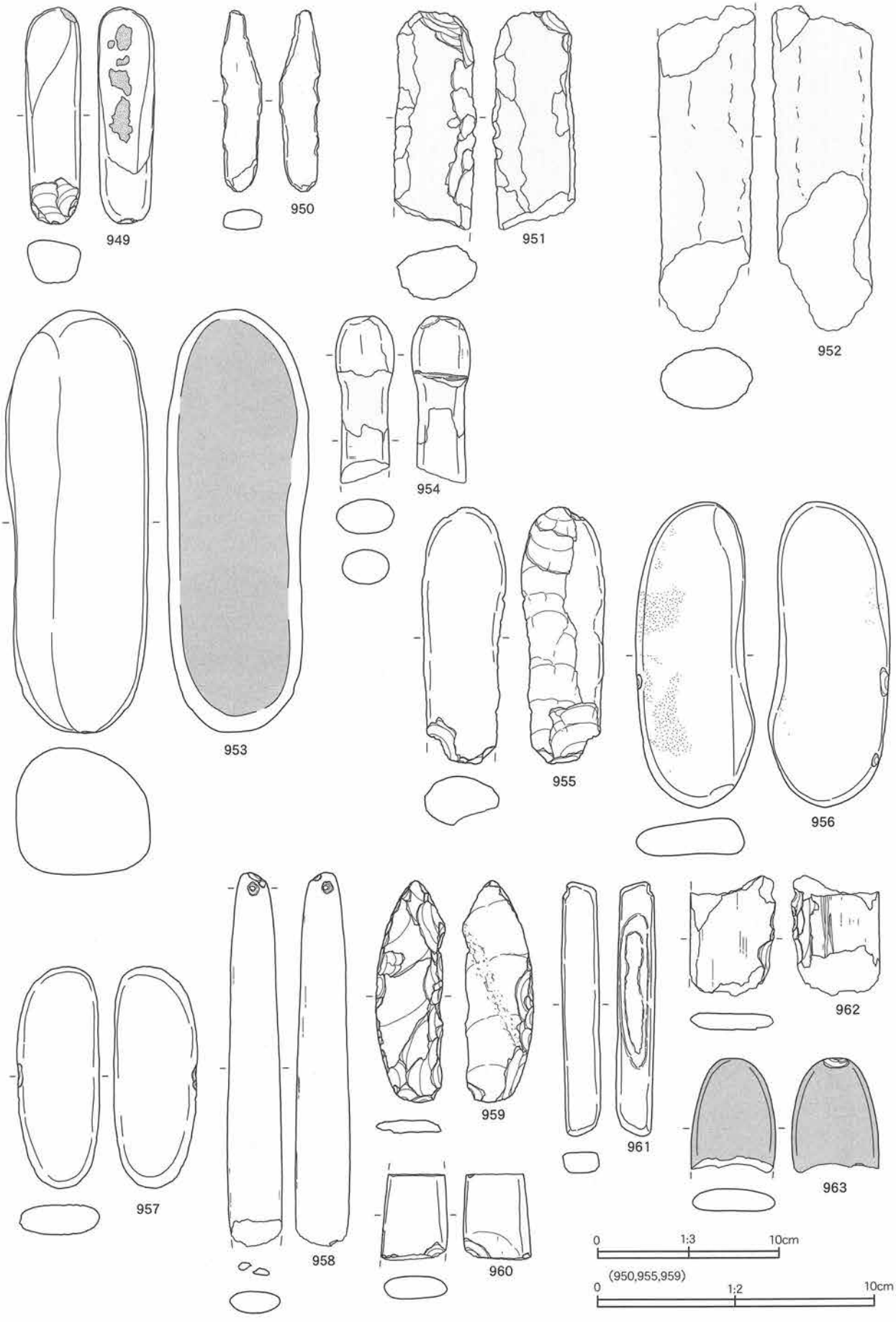
第140図　遺構内出土石製品（２）



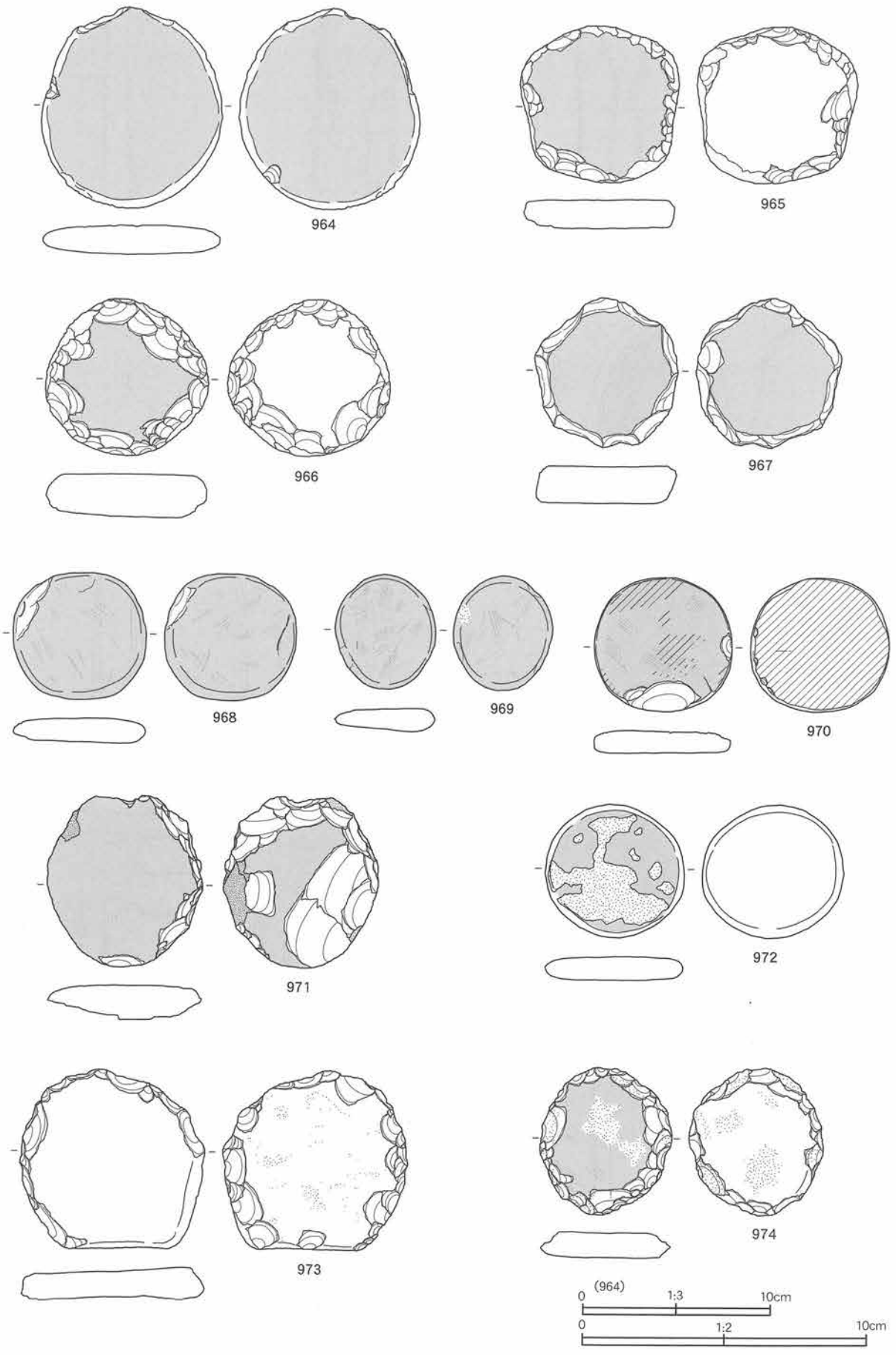
第141図　遺構内出土石製品（３）



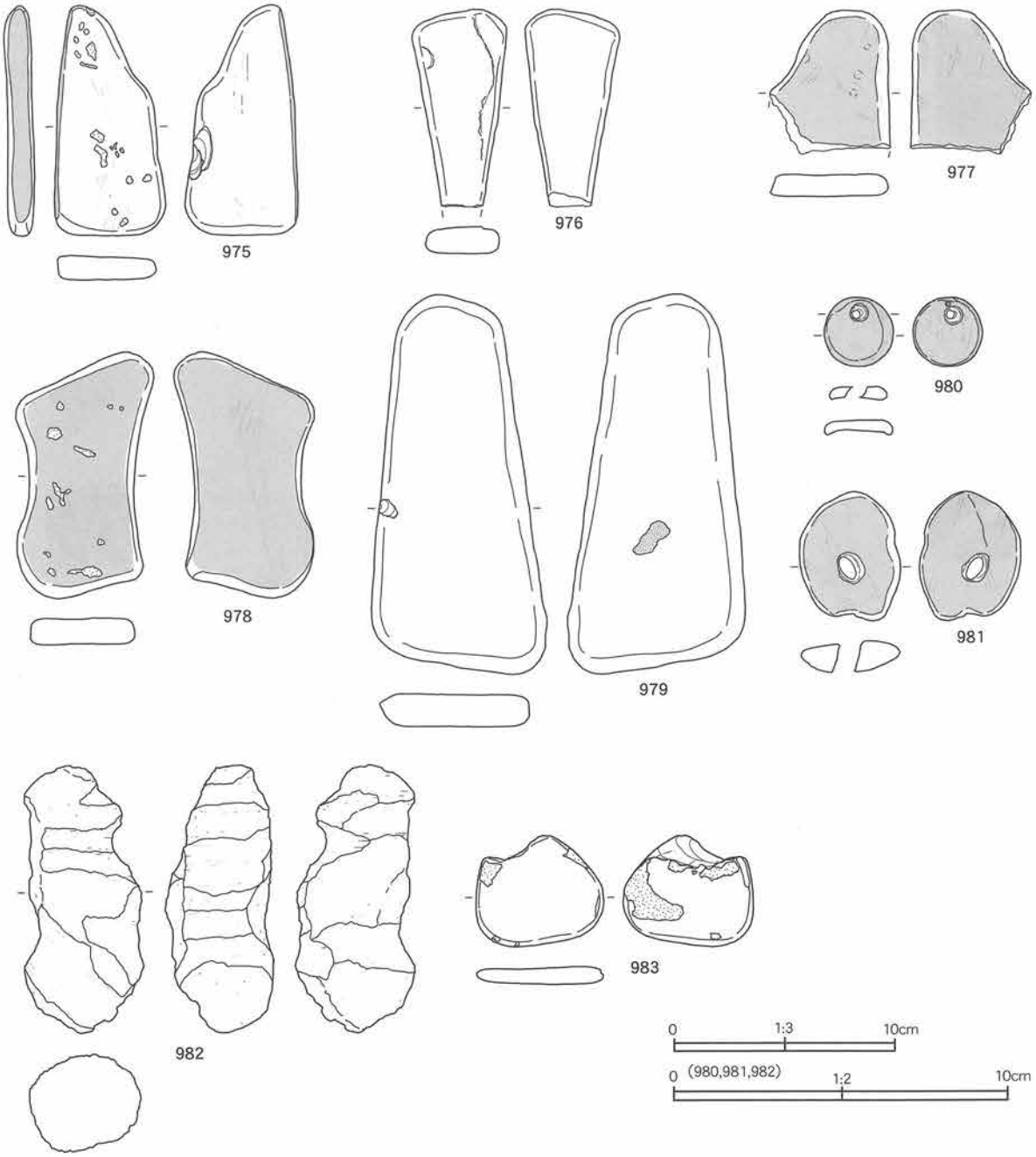
第142図　遺構内出土石製品（４）・中央部捨て場出土石製品・遺構外出土石製品（１）



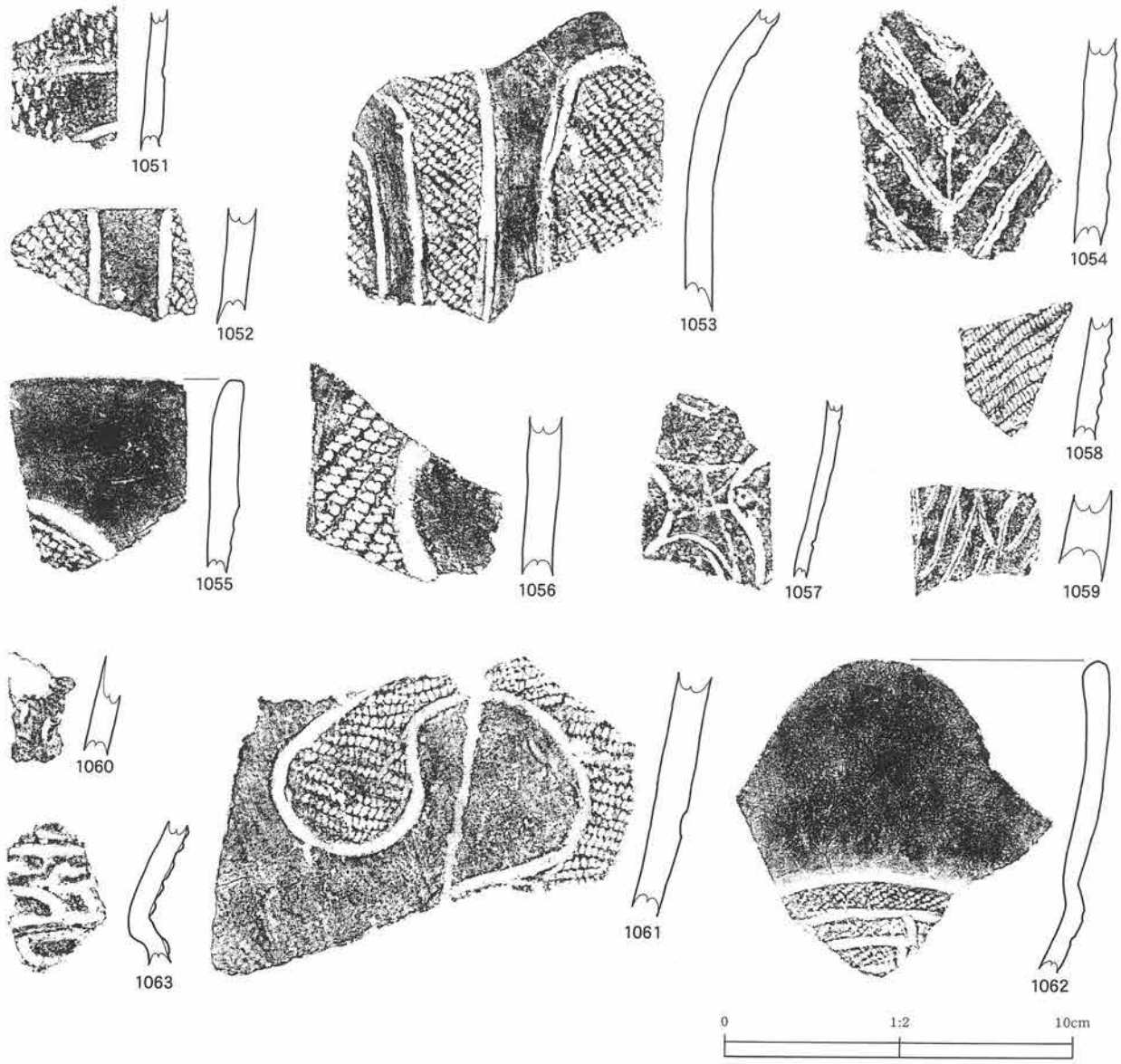
第143図　遺構外出土石製品（2）



第144図　遺構外出土石製品（３）



第145図　遺構外出土石製品（４）



第146図　胎土分析土器

第10表　縄文土器観察表

掲載番号	出土地点	層位	器種	部位	口縁形状	文様・原体・その他	内面	時期	型式	口径	底径	器高	備考
1	RA003	3b層	深鉢	3/4完形	波状口縁	口：押し引き状沈線による弧状のモチーフ，頸：押し引き状沈線による3条平行沈線，胴：胴上半～胴中位無文(約11cm)，胴下半：押し引き状沈線＋沈線による斜行主体の直線的モチーフ，胴下半～底部：胴下半～底部無文，底：尖底	口：横ミガキ，胴：縦・斜ミガキ	早期中葉	明神裏Ⅲ	28.1		37.9	文様帯は無文帯を含め4つに分割される
2	RA004　Q4	検出面	深鉢	口縁部	上面観楕円形状の突起	単軸絡条体第1A類		前期後葉	大木5				
3	RA005　Q1	黒褐色土（＊焼土上面）	深鉢	口～胴部上半	平縁	口：LR・RL結束羽状縄文縦→貼付隆線（隆線上に刺突文），胴：LR・RL結束羽状縄文縦	横ミガキ	前期前葉？	大木2？	(38.6)		(17.6)	
4	RA005　A－A'ベルト	西側焼土上面	深鉢	胴部		単軸絡条体第1A類		前期前葉？					
5	RA005　B－B'ベルト	2層	深鉢	胴部		単軸絡条体第5類	ナデ	前期前葉？					
6	RA005　B－B'ベルト	2層	深鉢	胴部		0段多条LR横		前期前葉					繊維中
7	RA005　土坑1	埋土中	深鉢	口縁部	平縁	LR斜	横ナデ	前期前葉					外面スス中，繊維少
8	RA005	床直	深鉢	口～胴部	平縁	単軸絡条体第5類		前期前葉？					内面スス少
9	RA005	埋土中	深鉢	口～胴部	平縁	口：無文（横ナデ），頸：横位貼付隆帯（隆帯指頭圧痕）胴：単軸絡条体第5類	横ナデ	前期前葉	大木2？				
10	RA006	埋土中	深鉢	1/2完形	平縁	口～胴：単軸絡条体第1A類，底：平底，ナデ		前期後葉		(19.5)	(10.3)	23.15	内面胴下半スス少
11	RA006	埋土中	深鉢	胴～底部		胴：単軸絡条体第1A類，底：平底，ナデ	横ナデ	前期後葉			10.8	(23.5)	内面底部付近スス多※C－1
12	RA006	埋土中	深鉢	口～胴部	波状口縁，台状突起（突起上に指頭圧痕文）	口～胴：単軸絡条体第1A類	横ナデ	前期後葉	大木5				
13	RA006	埋土中	深鉢	3/4完形	平縁	口～胴：単軸絡条体第1A類，底：平底		前期後葉		(15.1)	(8.2)	20.9	外面剥落多
14	RA006	埋土中	深鉢	2/3完形	平縁	口～胴：単軸絡条体第1A類，底：平底，指ナデ	ナデ	前期後葉		(22.1)	(12.2)	(33.9)	内面胴下半スス少
15	RA006	埋土中	深鉢	口～胴部	平縁	単軸絡条体第1A類	ナデ	前期後葉					木目文様の中央に結び目の圧痕。右下がりが1段，左下がりが0段か。
16	RA006	埋土中	深鉢	2/3完形	平縁	口～胴：単軸絡条体第5類，底：平底，ナデ	口：横ナデ，胴：縦ケズリ	前期後葉		20.8	11.6	32.4	
17	RA006	埋土中	深鉢	2/3完形	平縁	口～胴：単軸絡条体第5類，底：平底，ナデ	横ナデ	前期後葉		(21.2)	(10.4)	29.6	
18	RA006	埋土中	深鉢	口～胴部	平縁	口～胴：単軸絡条体第5類	横ナデ	前期後葉		21.3		(27.0)	
19	RA006	埋土中	深鉢	3/4完形	波状口縁，台状突起（4単位）	口～胴：単軸絡条体第5類，底：平底，ミガキ		前期後葉	大木5	15.3	(8.3)	18.1	突起は内外面から指頭でよじれるものと頂部に指頭圧痕をもつものの2種類あり
20	RA006	埋土中	深鉢	2/3完形	平縁，突起（1単位？）	口～胴：単軸絡条体第5類，底：平底		前期後葉		(15.6)	9.3	20.6	粗礫多
21	RA006	埋土中	深鉢	2/3完形	平縁	口～胴：単軸絡条体第5類，底：平底，網代痕→ナデ		前期後葉		(18.5)	9.85	25.8	内面胴下半スス少
22	RA006	埋土中	深鉢	3/4完形	平縁，台状突起(1単位)	口～胴：単軸絡条体第5類，底：平底		前期後葉	大木5	16.1	9.1	20.4	
23	RA006	埋土中	深鉢	口～底部	平縁	口～胴：単軸絡条体第5類，底：平底		前期後葉		(12.15)	7.8	14.5	外面口縁・内面胴下半スス少
24	RA006	埋土中	深鉢	2/3完形	平縁	口～胴：単軸絡条体第5類，底：平底，ミガキ	横ナデ	前期後葉		(17.3)	10.1	27.1	内面胴上半にスス少
25	RA006	埋土中	深鉢	口縁～底部	平縁，突起（台形状）	単軸絡条体第1類	口：横ケズリ，胴：縦ケズリ	前期後葉	大木5？				
26	RA006	埋土中	深鉢	口縁部	波状口縁	単軸絡条体第1類	縦ケズリ	前期後葉					原体要検討

掲載番号	出土地点	層位	器種	部位	口縁形状	文様・原体・その他	内面	時期	型式	口径	底径	器高	備考
27	RA006	埋土中	深鉢	口～胴部	平縁，刺突文（部分的）	口～胴：単軸絡条体第１A類	縦ケズリ	前期後葉		(22.7)		(27.4)	
28	RA006	埋土中	深鉢	3/4完形	平縁	口～胴：ＬＲ片末端縦，底：平底		前期後葉		(18.3)	(10.35)	22.45	
29	RA006	埋土中	深鉢	3/4完形	平縁	口：ＬＲ結節有縦，底：平底		前期後葉		17.5	8.35	20.75	胴下半スス少
30	RA007 北壁際	埋土中	深鉢	口縁部	平縁	原体不明→貼付隆線（隆線上に指頭圧痕文）	横ナデ	前期後葉					
31	RA007	埋土中	深鉢	胴部		単軸絡条体第１A類		前期後葉					
32	RA007	埋土中	深鉢	胴部		単軸絡条体第１A類	ナデ	前期後葉					
33	RA007 Q2	1層	深鉢	胴部		単軸絡条体第１A類	ナデ	前期前～後葉					外面スス中
34	RA007 Q3	埋土中	深鉢	胴部		単軸絡条体第５類	横ナデ	前期後葉					
35	RA007	埋土中	深鉢	胴部		０段多条ＬＲ横	ナデ	前期前葉					繊維多
36	RA008 焼土	1層	深鉢	胴部		単軸絡条体第１A類	横ナデ	前期後葉？					砂粒多
37	RA009	埋土下位	深鉢	胴部		ＬＲ縦	ナデ	中期後葉？	大木９？				
38	RA010 Q2	床面直上	小形鉢	完形	平縁	口～胴：ＬＲ縦→櫛引文，底：平底	横ナデ	中期末葉？		7.0	4.0	5.9	内外面黒色物質付着
39	RA010 Q1	埋土下位	深鉢	口～底部	波状口縁	口～胴：沈線区画→ＬＲ縦→磨消縄文→沈線引き直し底：平底，ミガキ	口：横ミガキ	中期後葉	大木９	(23.0)	9.2	(32.2)	胴部下半スス中
40	RA010 Q5	床面直上	深鉢	口縁部	小波状口縁	ＬＲ縦→沈線区画→磨消縄文	横ミガキ	中期後葉	大木９				
41	RA010 Q10	埋土下位	深鉢	胴部		付加条→沈線区画→磨消縄文	ミガキ	中期後葉	大木９				
42	RA010 Q2	1～2層	鉢	1/3完形	平縁	口～胴：沈線文→ＬＲ（充填縄文）→ミガキ，底：平底	ナデ	中期末葉	大木10	(15.6)	6.3	(10.8)	撚りの緩い縄文原体が使用されている
43	RA010 Q2	1～2層	深鉢	口縁部	平縁	沈線区画→ＬＲ（充填縄文）	横ミガキ	中期末葉	大木10				
44	RA010 Q3	1層	深鉢	胴～底部		胴：ＬＲ縦，胴下半：無文，底：平底，ミガキ		中期末葉	大木10	(28.2)	10.1	(22.5)	胎土粗
45	RA010 Q5	1層	深鉢	口～胴部	平縁	口：無文，頸：横位沈線，胴：ＬＲ縦	ミガキ	中期末葉？	大木10？	(17.2)		(13.6)	後期初頭？
46	RA010 Q3	1層	深鉢	口縁部	平縁	刺突列，異条異節	ミガキ	中期末葉？					原体要検討
47	RA010 Q1	埋土上位	深鉢	口縁部	平縁	ＬＲ縦→沈線区画→磨消縄文	横ミガキ	中期後葉	大木９				
48	RA010 Q5	埋土上位	深鉢	胴～底部		胴：ＬＲ縦→沈線区画→磨消縄文，底：平底	縦・斜ミガキ	中期後葉	大木９		11.0	(16.4)	
49	RA010 Q5	埋土上位	深鉢	口～胴部	平縁	口：無文，胴：ＲＬ縦	ミガキ，焼はじき多	中期末葉	大木10	(26.4)		(29.3)	
50	RA010 Q2	1～2層	深鉢	胴部		ＲＬＲ縦→隆沈線	横ミガキ	中期中葉	大木８ｂ新				
51	RA010 Q6	2層	深鉢	口縁部	波状口縁	口端にＬＲ？側圧、貼付隆線→刻み目	横ミガキ	中期中葉？	円筒上層ｃ～ｄ				
52	RA010 Q5	2層	ミニチュア	口～胴部	平縁	口：ＬＲ側圧，胴：ＬＲ横	横ミガキ	中期前葉	大木７ｂ？				２層炭化材層上付近で出土
53	RA010 Q2	1～2層	深鉢	口縁部	小波状，弁状突起	単軸絡条体第５類→貼付隆線	横ナデ	前期後葉					内面スス少
54	RA010	床面直上	深鉢	口縁部	平縁，刻み目	横位貼付隆線（隆線上に指頭圧痕文），単軸絡条体第１類→沈線文	横ナデ	前期後葉？					※大木５の中では古い段階か
55	RA010 Q8	埋土下位	深鉢	口縁部	小波状口縁	単軸絡条体第５類	横ナデ	前～中期					
56	RA010 Q10	埋土下位	深鉢	口縁部	平縁	単軸絡条体第１A類→横位貼付隆線（隆線上に指頭圧痕文）	横ナデ	前～中期					大木６～７ａ
57	RA010 Q10	埋土下位	深鉢	胴部		単軸絡条体第１A類	ナデ	前～中期					
58	RA010 西壁際	埋土中	深鉢	口縁部？		貝殻腹縁文→沈線文	貝殻条痕文	早期中葉	白浜～寺の沢				
59	RA011 炉	6層	深鉢	胴部		平行沈線文→ＲＬＲ縦	縦ミガキ	中期後～末葉	大木９～10				
60	RA011	床面下位	深鉢	胴部		単軸絡条体第５類		中期末葉？					二次焼成受ける

掲載番号	出土地点	層位	器種	部位	口縁形状	文様・原体・その他	内面	時期	型式	口径	底径	器高	備考
61	RA011　P P7	3a層	深鉢	口縁部	平縁	単軸絡条体第1類		中期末葉？					
62	RA011　P P7	埋土下位	深鉢	胴部		LR縦→沈線区画→ミガキ（磨消縄文）	横ミガキ	中期後葉？	大木9？				
63	RA011　土坑1	4層	深鉢	口縁部	平縁	RL横	ミガキ	前期前葉					繊維多
64	RA011　Q 6	1a層	深鉢	胴部		沈線区画→LR（充填縄文）	縦ケズリ	中期末葉	大木10				
65	RA011　Q 2	1層	深鉢	胴部		沈線区画→LR（充填縄文）→ミガキ	横ミガキ	中期末葉	大木10				
66	RA012　Q 1	床直（2層下位）	深鉢	胴部		沈線→RL縦，ミガキ	横ミガキ	中期末葉	大木10				
67	RA012　Q 1	床直（2層下位）	深鉢	胴部		RLR縦，沈線区画	横ミガキ	中期後葉	大木9				
68	RA012　Q 1	床直（2層下位）	深鉢	胴部		LR縦→沈線区画→磨消縄文	横ミガキ	中期後葉	大木9				
69	RA012　Q 1	床面（2層下位）	深鉢	口縁部	平縁	RL縦	横ナデ	中期末葉					
70	RA012　Q 3	2層下位	深鉢	胴部		沈線区画→単軸絡条体第1類	ミガキ，焼はじき少	中期末葉	大木10				外面スス多
71	RA012　Q 3	2層下位	深鉢	口縁部	平縁	沈線区画→単軸絡条体第1類→ミガキ	ミガキ	中期末葉	大木10				
72	RA012　Q 4	壁際土(2層下位)	深鉢	口縁部	平縁	RLR縦，口縁幅約1.5cm無文	横ミガキ	中期末葉	大木10				
73	RA012　Q 2	2層中位	深鉢	口縁部	平縁	RL縦	横ナデ	中期末葉？					
74	RA012　Q 2	2層	深鉢	胴部		単軸絡条体第1類→沈線区画→磨消縄文	ミガキ	中期末葉	大木10				外面スス少
75	RA012　Q 2	2層	深鉢	口縁部	平縁	口縁無文（幅約2.5cm），RLR縦	横ミガキ	中期末葉？					
76	RA012　B－B’ベルト	2層	深鉢	胴部		単軸絡条体第1類→沈線区画→磨消縄文	ミガキ	中期末葉	大木10				
77	RA012　Q 1	壁際土	深鉢	胴部		LR縦→沈線区画→磨消縄文	横ナデ	中期後葉	大木9				内面スス多※C－2
78	RA012　Q 2	1層下位	深鉢	胴部		RLR斜，沈線区画		中期後葉	大木9				
79	RA012　A－A’ベルト	1層	深鉢	胴部		単軸絡条体第5類	ミガキ	中期末葉？					胎土の様相からは中期後半と推定
80	RA012　A－A’ベルト	1層	深鉢	胴部		横位隆線→円形の貼付文（刺突文），LR縦，沈線	横ナデ	後期初頭？	門前？				
81	RA012　A－A’ベルト	1層	深鉢	口縁部	山形状	貼付隆線（起点に円形の刺突文）→側縁に沈線文	頂下に逆ノの字状の貼付	後期初頭	門前？				
82	RA012　A－A’ベルト	1層	深鉢	口縁部	山形状	貼付隆線（起点に円形の刺突文）→側縁に沈線文	頂下に縦位貼付文	後期初頭	門前？				
83	RA012　A－A’ベルト	1層	深鉢	胴部		沈線文，ボタン状貼付文		後期初頭？	門前？				
84	RA012　A－A’ベルト	1層	深鉢	口縁部	平縁，口唇部に刻み	刺突文（貝殻腹縁文？）→横位沈線		早期中葉	白浜				
85	RA012　B－B’ベルト	1層	深鉢	口～胴部上半	波状口縁	口:貼付隆線(起点に円形の刺突文),沈線文(クランク状),頸:横位貼付隆線(隆線上に刺突文),胴:L縦	横ミガキ	後期初頭					
86	RA012　A－A’ベルト	1層	深鉢	口縁部	平縁	単軸絡条体第5類	横ナデ	後期初頭？					
87	RA012　土坑	底面	深鉢	胴部		RL縦→沈線区画→磨消縄文	ミガキ	中期末葉	大木10				
88	RA012　Q 4	床下土坑埋土中	深鉢	胴部		LR縦→沈線区画→磨消縄文→沈線引き直し(部分的)	横ナデ	中期後葉	大木9				内面スス少
89	RA013　炉	炉内埋土（埋め戻し土）	深鉢	胴部		RL縦→沈線文→ミガキ（磨消縄文）		中期後葉	大木9				
90	RA013　炉	炉内埋土（埋め戻し土）	深鉢	胴部		RL縦→沈線文→ミガキ（磨消縄文）		中期後葉	大木9				内面スス多※C－3
91	RA013	埋土中	深鉢	口縁部	平縁	口縁無文（幅約3cm），RLR縦	横ナデ	中期末葉	大木10				外面二次焼成，RA012出土と遺構間接合，92と同一
92	RA013	埋土中	深鉢	口縁部		RLR縦	横ナデ	中期末葉	大木10				91と同一

掲載番号	出土地点	層位	器種	部位	口縁形状	文様・原体・その他	内面	時期	型式	口径	底径	器高	備考
93	RA014 Q3	2層上位	深鉢	胴部		RL縦・横	縦ケズリ	中期末葉？					
94	RA014 Q3	2層上位	深鉢	胴部		RL縦		中期末葉？					
95	RA014 Q3	2層上位	深鉢	口縁	平縁	単軸絡条体第1類	横ナデ	前期後葉？					
96	RA015	埋土中	深鉢	胴部		RLR縦	横ナデ	中期末葉？					
97	RA015	埋土中	深鉢	胴部		単軸絡条体第5類	横ナデ	後期？					
98	RA015	埋土中	深鉢	口縁部	波状口縁，頂部に指頭圧痕文	単軸絡条体第1類	横ナデ	前期後葉？					
99	RA015	埋土中	深鉢	口縁部	平縁，折り口縁	貼付隆線→隆線側縁にLR側圧	横ナデ	中期前葉	大木7b				
100	RA015	埋土中	深鉢	口縁部	平縁	沈線，刺突文	横ナデ	中期前葉？	大木7b？				大木7a？
101	RA017 炉	炉内埋設土器1	深鉢	胴部		RLR縦→沈線区画→磨消縄文	横ミガキ	中期末葉	大木10			(14.3)	外面胴下半・内面胴下半スス中
102	RA017 炉	炉内埋設土器2	深鉢	口縁部	平縁	口：RL縦→沈線区画→磨消縄文	横ミガキ	中期末葉	大木10	21.9		(17.4)	※C－4
103	RA017 炉	新炉Ⅱ室埋土	深鉢	胴部		LR縦		中期					
104	RA017 Q4	床面	深鉢	口縁部	平縁	LRL斜→沈線区画→磨消縄文→沈線引き直し	横ナデ	中期後葉	大木9				
105	RA017 Pit1	1層	深鉢	口縁部	平縁	ミガキ，黒色顔料塗布（漆？）	横ナデ	中期後～末葉	大木9～10				
106	RD116	1～2層	深鉢	胴下半～底部		胴：RL縦・斜，底：網代痕	横ケズリ	中期末葉？		(20.0)	9.4	10.6	
107	RD116	埋土中	深鉢	口～胴部上半	口唇欠損	口：無文（素面），頸：平行沈線，胴：LR縦	ナデ	後期前葉					
108	RD116	11層	深鉢	胴部		無文（素面），LR斜	横ナデ	後期前葉					
109	RD125	1層	深鉢	口縁部	平縁	LR？	横ミガキ	中期					
110	RD131	埋土中	深鉢	口～胴部	波状口縁	口：LR横→貼付隆線→2条のLR側圧，胴：LR横・斜	横ミガキ	中期前葉	大木7b	(15.3)		(14.8)	
111	RD131	埋土中	深鉢	胴下半～底部		LR横・斜，胴下半無文（磨消縄文），底：平底，ミガキ	横ミガキ	中期末葉？			11.2	(14.0)	
112	RD132	1層	深鉢	胴部		沈線区画→RLR→ミガキ		中期末葉？	大木10？				1層（南側の石の下）
113	RD136	埋土下位（2層）	深鉢	胴部		LR・RL非結束羽状縄文		前期初頭？					繊維多※上川名？
114	RD136	埋土中位（1層）	深鉢	胴部下半		無文（ミガキ）		前期初頭？					繊維？
115	RD137	埋土中	深鉢	口～胴部	平縁，台状突起	口～胴：単軸絡条体第1A類		前期後葉	大木5	19.75		(22.25)	
116	RD140	埋土上位	深鉢	胴部		沈線区画→LR（充填縄文）	ミガキ	中期末葉	大木10				
117	RD140	埋土中位	深鉢	胴部		平行沈線，LR横	ミガキ	晩期後葉	大洞A？				
118	RD143	埋土中	深鉢	胴部		沈線→LR縦→磨消縄文	横削り	中期後葉	大木9				
119	RD143	埋土中	深鉢	口縁部	平縁，小突起，口唇に沈線	口端に刻み目	横ミガキ	晩期後～末葉					
120	RD147	埋土中位	深鉢	胴部		LR縦→沈線区画→ミガキ（磨消縄文）	横ミガキ	中期後葉	大木9				
121	RD147	埋土下位	深鉢	口縁部	小波状口縁	L側圧，LR横	ミガキ	中期前～中葉					
122	RD148	1層	深鉢	胴部		LR縦→沈線→磨消縄文→沈線引き直し	ミガキ	中期後葉	大木9				
123	RD149	埋土中	深鉢	口縁部	平縁	沈線	横ナデ	中期中葉	大木8a				
124	RD150	2層	深鉢	口縁部	平縁	単軸絡条体第4類？	ナデ	中～後期					
125	RD151	2層	深鉢	胴部		単軸絡条体第5類		中期末葉？					
126	RD151	1層	深鉢	胴部		LRL？縦		中期末葉？					
127	RD156	埋土中	深鉢	2/3完形	中空把手4単位，副突起4単位	中空把手下：LR縦→沈線文→磨消縄文（変形Y字状のモチーフ），副突起下：連鎖状隆起線文＋ボタン状貼付文，LR縦→蛇行文	口：横ミガキ，胴：縦ミガキ	後期初頭	門前Ic～Ⅱ	32.4		(34.8)	

掲載番号	出土地点	層位	器種	部位	口縁形状	文様・原体・その他	内面	時期	型式	口径	底径	器高	備考
128	ＲＤ156	埋土中	鉢	口～胴部上半	平縁	口：羊歯状文，胴：ＬＲ横	横ナデ	晩期前葉	大洞ＢＣ				
129	ＲＤ156	埋土中	注口土器	胴部		羊歯状文，三叉文		晩期前葉	大洞ＢＣ				
130	ＲＤ156	埋土中	皿？	口縁部	Ｂ突起	ＬＲ横	ミガキ	晩期中葉？	大洞Ｃ１？				
131	ＲＤ158	埋土中	壺？	口縁部	口唇欠損	ＬＲ横→沈線文	ミガキ	後期前葉					
132	ＲＤ160	１層	台付き鉢？	台部		ＲＬＲ縦，隆沈線		中期後葉	大木９		4.95	(3.0)	
133	ＲＤ160	１層	深鉢	胴部		ＬＲ横→沈線区画→磨消縄文→沈線引き直し	横ミガキ	後期中葉？					
134	ＲＤ161	２層	深鉢	胴部		ＬＲ→沈線文	横ナデ	後期前葉					
135	ＲＤ161	埋土中	深鉢	胴部		ＲＬ横？→沈線文	横ナデ	後期前葉					
136	ＲＤ163	埋土中	深鉢	口縁部	波状口縁	Ｓ字状文	横ナデ	後期初頭？					
137	ＲＤ163	埋土中	深鉢	口～胴部	平縁，折り返し口縁	口：沈線文，胴：単軸絡条体第１類	横ミガキ	後期初頭～前葉					
138	ＲＤ163	埋土中	深鉢	口～胴部上半	小波状口縁	口：無文，頸：横位沈線，胴：単軸絡条体第５類	横ミガキ	後期初頭					
139	ＲＤ163	埋土中	深鉢	口縁部	平縁	単軸絡条体第５類	横ナデ	後期					
140	ＲＤ163	埋土中	深鉢	口縁部	微波状口縁，折り返し口縁	ＬＲ縦→沈線文	横ナデ	後期初頭～前葉					
141	ＲＤ163	埋土中	深鉢	口縁部	口唇欠損	ＲＬＲ縦→沈線文	横ミガキ	後期初頭～前葉					
142	ＲＤ163	埋土中	深鉢	口～胴部	波状口縁	口：ＲＬ縦→沈線文＋刺突文，胴：ＲＬ縦	横ミガキ	後期初頭					
143	ＲＨ033　下部土坑	埋土中	深鉢	胴部		ＬＲ	ミガキ	後期初頭？					
144	ＲＨ033　下部土坑	埋土中	深鉢	胴部		ＬＲ縦		後期初頭？					
145	ＲＨ034	２層	深鉢	胴部		ＲＬ縦	焼はじき	中期後葉？					
146	ＲＨ034	２層	深鉢	胴部		ＬＲ縦	横ナデ	中期末葉？					
147	ＲＨ034	検出面付近	鉢	口縁部	平縁，突起	羊歯状文，ＬＲ横	横ミガキ	晩期前葉	大洞ＢＣ				
148	ＲＨ035	Ⅳ層	深鉢	口～胴部	口唇欠損	口：Ｌ横→沈線文，胴：無文（ミガキ）	横ミガキ	後期中葉	十腰内２？				
149	ＲＨ035周辺	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁	無文	ミガキ	後期中葉？					
150	ＲＨ035	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁	ＬＲ横→磨消縄文→沈線文	横ミガキ	後期中葉					409と同一個体の可能性あり
151	ＲＨ036	Ⅳ層	深鉢	口縁部	波状口縁	ＲＬ横→沈線文	ナデ	後期前葉					
152	ＲＨ037	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁	無文，沈線文	ナデ	後期初頭					
153	ＲＨ037	Ⅳ層	深鉢	胴部		単軸絡条体第５類→沈線文	ナデ	後期初頭					
154	ＲＨ039	Ⅳ層	深鉢	口縁部	波状口縁	頂部から縦位貼付隆線→沈線文	横ミガキ	後期初頭					
155	ＲＨ039	Ⅳ層	深鉢	胴下半～底部		胴：ＲＬ縦，底：網代痕	ミガキ	後期初頭？					
156	ＲＨ042	Ⅳ層	壺	略完形	波状口縁	口～胴：沈線モチーフ→ＲＬ・ＬＲ（充填縄文）→沈線引き直し（部分的），底：やや上げ底，ＲＬ・ＬＲ	横ナデ	後期前葉		(5.4)	4.6	(9.15)	地文は２種類使用
157	ＲＨ042	Ⅳ層	不明	不明		ＬＲ	縦ケズリ	後期初頭？				(.8.8)	
158	ＲＨ048　下部土坑	埋土中	深鉢	胴部		単軸絡条体第１類	ナデ	後期？					
159	ＲＨ048　下部土坑	埋土中	深鉢	胴部		原体不明		後期？					
160	ＲＨ049　下部土坑	埋土中	深鉢	胴部		ＬＲ横→平行沈線	横ミガキ	後期中葉？					
161	ＲＨ050	集石下位	深鉢	口縁部	平縁	ＬＲ横	横ミガキ	後期中葉？					
162	ＲＰ006		深鉢	胴～底部		胴：ＬＲ縦，底：やや上げ底状		中期末葉？		(18.6)	(8.9)	(11.4)	

掲載番号	出土地点	層位	器種	部位	口縁形状	文様・原体・その他	内面	時期	型式	口径	底径	器高	備考
163	RP007	1層	浅鉢	1/2完形	平縁	口～胴：沈線文，底：平底，ミガキ	ミガキ，口縁裏側に沈線全周	弥生前期	青木畑？	16.0	7.3	6.1	
164	RP007	1層	高台付鉢	台部		平行沈線（3条）によるモチーフ	横ミガキ	弥生前期	青木畑？		(10.5)	(9.1)	外面赤色顔料塗付
165	RX001 Q4	3層	深鉢	胴～底部		胴：単軸絡条体第5類，底：平底，ミガキ		前期後葉			9.1	(21.9)	
166	RX001 Q1	埋土中位（2層）	深鉢	口～胴部上半	口唇欠損	口：LR横→沈線，頸：横位隆帯→縦位短沈線，胴：LR縦→沈線	横ミガキ	中期中葉	大木8a				
167	RX001 Q4	埋土下位（2層）	深鉢	口縁部	平縁	RLR縦→沈線文→磨消縄文	横ナデ	中期末葉	大木10				
168	RX001 Q4	埋土下位（2層）	深鉢	口縁部	平縁？	RLR縦→沈線文→磨消縄文	横ケズリ	中期後葉	大木9				
169	RX001 Q4	埋土下位（2層）	深鉢	口縁部	波状口縁	貼付隆線→LR側圧	横ミガキ	中期中葉	大木8a				
170	RX001 Q4	埋土下位（2層）	深鉢	口縁部	耳状突起	貼付隆線→LR側圧？	ミガキ	中期中葉	大木8a				
171	RX001	埋土下位	深鉢	胴部		撚引文	横ミガキ	後期？				(8.0)	
172	RX001 Q1	1層	深鉢	胴部		沈線区画→RL（充填縄文）	横ミガキ	中期末葉	大木10				内面スス中※C－5
173	RX001 Q3	1層	壺	頸～胴部		頸：LR横→沈線モチーフ→磨消縄文，胴上：LR斜→沈線モチーフ→磨消縄文，胴中～下：LR横→横位2条平行沈線	横ミガキ	後期前葉				(11.0)	
174	RX001 Q4	1層	鉢	口～胴部	平縁	口：羊歯状文，胴：LR横，胴下半ほど無文	横ミガキ	晩期前葉	大洞BC	(13.8)	(7.7)	(11.4)	外面スス少
175	RX001 Q1	1層	台付鉢	台部		沈線，ミガキ		晩期後葉？			8.1	(4.4)	
176	RX001	埋土上位	深鉢	口～胴部	平縁	口～胴：RLR縦→沈線区画→磨消縄文	横ミガキ	中期後葉	大木9	(18.0)		(14.0)	文様モチーフは長楕円形文と2個の楕円形文の繰り返し
177	RX001	埋土上位	深鉢	口縁部	波状口縁	LR側圧		中期前葉	大木7b				
178	RX001	埋土中	深鉢	口縁部	口唇欠損	貼付隆線→LR側圧	ミガキ	中期前葉	大木7b				
179	RX001 Q2	埋土中	深鉢	口縁部	波状口縁，弁上突起	突起下に円形の透かし，沈線	ミガキ	中期中葉	大木8a				
180	RX002 Q3	埋土中	深鉢	胴部		LR縦	0段多条LR横	前期前葉？					
181	RX002 Q1	埋土中	深鉢	口縁部	平縁	単軸絡条体第1A類	横ナデ	前期後葉					
182	RX002 Q3	埋土中	深鉢	口縁部	平縁，突起（頂部に刺突文）	斜位の集合沈線→横位平行沈線→沈線間に刺突列，※縦位貼付隆線の剥落痕あり	横ナデ	中期初頭	大木7a？				異系統？
183	RX002	埋土中	深鉢	胴部		LR縦→沈線区画→磨消縄文	横ナデ	中期後葉	大木9				
184	RX002 Q1	埋土中	深鉢	口縁部	波状口縁	波頂下に隆線による渦巻文，LR縦→貼付隆線→隆線の側縁ミガキ，補修孔1個	横ナデ	中期後葉	大木9				
185	RX002	埋土中	深鉢	口～胴部上半	平縁	口：無文（約6cm），胴：沈線区画→LR（充填縄文）→ミガキ	横ナデ	中期末葉	大木10				
186	RX002	埋土中	深鉢	口縁部	小波状口縁	沈線文，刺突文	横ミガキ	中期末葉？					内面スス中※C－6
187	RX002	埋土中	鉢	口～胴部	口唇欠損	口：LR横→三叉文，胴：胴上半にLR横→三叉文（部分的に磨消縄文），胴下半無文	横ミガキ	晩期初頭	大洞B			(7.5)	
188	RX003 Q4	埋土中	深鉢	口縁部	平縁	無文，横位貼付隆線（隆線上に刺突文）	ナデ	前期後～中期初頭					
189	RX003 Q4	埋土中	深鉢	胴部		LR縦→隆沈線によるモチーフ	横ミガキ	中期中葉	大木8b新				大木8b新段階，内面スス微
190	RX003 Q4	埋土中	深鉢	胴部		LR縦→沈線区画→磨消縄文→沈線引き直し	ナデ，焼はじき	中期後葉	大木9				内面スス少
191	RX003 Q5	埋土中	深鉢	口縁部	平縁	LR→沈線区画	横ミガキ	中期後葉	大木9				
192	RX003 Q4	埋土中	深鉢	口縁部	波状口縁	沈線文（逆U字状，早蕨状長楕円形？）→刺突文，LR縦→ミガキ	横ミガキ	中期後葉	大木9	18.4		(10.3)	

掲載番号	出土地点	層位	器種	部位	口縁形状	文様・原体・その他	内面	時期	型式	口径	底径	器高	備考
193	ＲＸ003　Ｑ1	埋土中	深鉢	口縁部	平縁	ＬＲ縦→沈線文→磨消縄文→沈線引き直し	横ミガキ	中期末葉	大木10				
194	ＲＸ003　Ｑ4	埋土中	深鉢	胴部		ＬＲ縦・斜	ミガキ，焼はじき	後期初頭					206と同一個体。接点なし。
195	ＲＸ004　東側	埋土中	深鉢	口～胴部	口唇欠損	口：単軸絡条体第１Ａ類頸：横位貼付隆線（隆線上に指頭圧痕文），胴：単軸絡条体第１Ａ類→貼付文	指ナデ	前期後葉	大木５				
196	ＲＸ004　西部	埋土中	深鉢	口縁部	平縁	横位平行沈線→沈線間に刺突列→斜位の集合沈線	ケズリ	中期初頭	大木７ａ				異系統？
197	ＲＸ004　西部	埋土中	深鉢	胴部		ＲＬ縦→沈線による弧状文	横ナデ	後期初頭					堂沢式並行
198	ＲＸ004　東側	埋土中	深鉢	口～胴部上半	波状口縁	口：ＲＬ横→沈線文→磨消縄文→沈線引き直し，頸：横位平行沈線，胴：ＲＬ横	横ミガキ	後期前葉	十腰内１				
199	ＲＸ004　西側	埋土中	深鉢	口縁部	小波状口縁	沈線区画→ＬＲ（充填縄文）→沈線引き直し	ミガキ	後期前葉	十腰内１				
200	ＲＸ005	埋土中	深鉢	胴部		０段多条ＬＲ横	ナデ	前期前葉？					繊維多
201	ＲＸ005	埋土中	深鉢	口～胴部上半	平縁	口：無文→横位貼付隆線（隆線上に刺突文），胴：多軸絡条体？側圧	横ナデ	前期後葉？	大木５？				胎土に小礫多，202と同一
202	ＲＸ005	埋土中	深鉢	胴部		多軸絡条体？側圧	横ナデ	前期後葉？	大木５？				201と同一
203	ＲＸ005	埋土中	深鉢	胴部		単軸絡条体第１Ａ類	縦ナデ	前期					207と同一
204	ＲＸ005	埋土中	深鉢	口～胴部	波状口縁，折り返し口縁	口：沈線文，刺突文，胴：ＬＲ縦・横	横ナデ，ミガキ	後期初頭		(37.4)		(25.6)	196と同一個体。接点なしだが，合体して示す。
205	ＲＸ007	埋土上位	深鉢	胴部		ＬＲ横		前期前葉					繊維中
206	ＲＸ007	埋土上位	深鉢	胴部		ＬＲ？	ナデ	前期前葉？					繊維少
207	ＲＸ007	埋土中	深鉢	胴部		単軸絡条体第１Ａ類	縦ナデ	前期					203と同一
208	12号柱穴状土坑	埋土中	深鉢	口縁部	平縁，刻み目	横位沈線（複数条，浅め）	横ナデ	晩期末葉？					
209	17号柱穴状土坑	埋土中	深鉢	口縁部	平縁	ＲＬＲ縦	横ナデ	中期末葉？					
210	123号柱穴状土坑	埋土中	深鉢	口縁部	平縁，口唇面取り	口端に刻み目，単軸絡条体第１Ａ類横		前期前葉～中葉	台座？				
211	159号柱穴状土坑	埋土中	深鉢	口～胴部上半	口唇欠損	口：無文，連鎖状隆起線文＋ボタン状貼付文，胴：単軸絡条体第５類	ナデ	後期初頭					
212	188号柱穴状土坑	埋土中	深鉢	口縁部	波状口縁，突起（上面観「の」字状）	連鎖状隆起線文，渦巻文	ナデ	後期初頭					
213	258号柱穴状土坑	埋土中	注口土器？	胴部		隆起線文	ケズリ	後期後葉	新地式？				
214	中央部捨て場	Ⅲ～Ⅳ層	大形深鉢	3/4完形	平縁	口：単軸絡条体第１Ａ類→横位貼付隆線（隆線上に指頭圧痕文）→貼付隆線による円文（隆線上に指頭圧痕文，施文単位は５？），胴：単軸絡条体第１Ａ類，底：平底基調（やや上げ底）	横・縦ナデ	前期後葉	大木５	38.8	20.9	71.8	
215	中央部捨て場	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	口～胴部	波状口縁	口～胴：単軸絡条体第１Ａ類	横ナデ	前期後葉	大木５	(26.0)		(25.2)	突起は台状とよじれたタイプの２種
216	中央部捨て場	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	口～胴部	波状口縁，台状突起（４単位？），頂部に指頭圧痕文	口～胴：単軸絡条体第１Ａ類	横ナデ	前期後葉		(22.5)		(26.4)	
217	中央部捨て場	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	胴部		単軸絡条体第１Ａ類	縦ケズリ	前期後葉			(14.0)	(28.5)	
218	中央部捨て場	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	口～胴部	平縁	口～胴：単軸絡条体第１Ａ類	横ナデ	前期後葉		(17.8)		(25.0)	
219	中央部捨て場	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁，口唇に指頭圧痕文	単軸絡条体第１Ａ類		前期後葉	大木５？				
220	中央部捨て場	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	胴部		単軸絡条体第１Ａ類	ナデ	前期後葉？					

掲載番号	出土地点	層位	器種	部位	口縁形状	文様・原体・その他	内面	時期	型式	口径	底径	器高	備考
221	中央部捨て場	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	口～胴部上半	平縁	口：単軸絡条体第１Ａ類，頸：横位貼付隆線（隆線上に指頭圧痕文），胴：単軸絡条体第１Ａ類	横ナデ	前期後葉？					
222	中央部捨て場	Ⅳ層	深鉢	胴部		単軸絡条体第１Ａ類		前期後葉					
223	中央部捨て場	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	口～胴部	平縁	口：無文（横ナデ），横位貼付隆線（隆線上に指頭圧痕文），胴：単軸絡条体第５類？	横ナデ	前期後葉		(31.4)		(33.7)	
224	中央部捨て場	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	1/2完形	不明	口～胴：単軸絡条体第５類，底：平底，ナデ		前期後葉			(12.0)	(29,0)	内面胴下半スス少
225	中央部捨て場	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	口～胴部	平縁，口唇に指頭圧痕文	口～胴：単軸絡条体第５類		前期後葉		(14.0)		(17.4)	
226	中央部捨て場	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	胴～底部		胴：単軸絡条体第５類，底：やや上げ底状？		前期後葉			(11.05)	24.55	胴下半スス少
227	中央部捨て場	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	口縁部	波状口縁（頂部に指頭圧痕文）	単軸絡条体第５類		前期後葉					
228	中央部捨て場	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	口縁部	台状突起	突起部に指頭圧痕文，単軸絡条体第５類→貼付隆線（隆線上に沈線）	横ナデ	前期後葉	大木５				
229	中央部捨て場	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁，刻み目	単軸絡条体第５類	横ナデ	前期後葉	大木５？				
230	中央部捨て場	Ⅳ層	深鉢	口縁部	波状口縁	単軸絡条体第５類→沈線文		前期後葉	大木５？				大木５の中では古い段階か若しくは大木４式
231	中央部捨て場	Ⅳ層	深鉢	口縁部	波状口縁	単軸絡条体第５類→沈線文		前期後葉	大木５？				大木５の古い段階か若しくは大木４式
232	中央部捨て場	Ⅳ層	深鉢	胴部		単軸絡条体第５類→鋸歯状文		前期後葉	大木５？				241と同一個体※大木５の中では古い段階か
233	中央部捨て場	Ⅳ層	深鉢	胴部		単軸絡条体第５類→鋸歯状文		前期後葉	大木５？				大木５の中では古い段階か若しくは大木４式
234	中央部捨て場	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	口～胴部	平縁，口唇に指頭圧痕文（部分的）	口～胴：単軸絡条体第１類→貼付隆線（隆線上に指頭圧痕文，横位隆線から接続して縦の波状文）	横ナデ	前期後葉	大木５				234～237・239同一個体。接点なし。
235	中央部捨て場	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	口～胴部	口唇欠損	口～胴：単軸絡条体第１類→貼付隆線（隆線上に指頭圧痕文，横位隆線から接続して円文）	横ナデ	前期後葉	大木５				234～237・239同一個体。接点なし。
236	中央部捨て場	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	口～胴部	平縁，口唇に指頭圧痕文（部分的）	口～胴：単軸絡条体第１類→貼付隆線（隆線上に指頭圧痕文，横位隆線から接続してＶ字状文）	横ナデ	前期後葉	大木５				234～237・239同一個体。接点なし。
237	中央部捨て場	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	口～胴部	平縁，口唇に指頭圧痕文（部分的）	口～胴：単軸絡条体第１類→貼付隆線（隆線上に指頭圧痕文，横位隆線から接続して円文）	横ナデ	前期後葉	大木５				234～237・239同一個体。接点なし。
238	中央部捨て場	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	口～胴部上半	平縁	口：単軸絡条体第１類，頸：横位貼付隆線（隆線上に指頭圧痕文），胴：単軸絡条体第１類	横ナデ	前期後葉					
239	中央部捨て場	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	胴部		単軸絡条体第５類→鋸歯状文		前期後葉	大木５？				234と同一固体※大木５の中では古い段階か
240	中央部捨て場	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁，面取り	単軸絡条体第１類→貼付隆線（隆線上に刺突列）		前期後葉？	大木５？				※大木５の中では古い段階か
241	中央部捨て場	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	胴部		多軸絡条体		前期後葉？					
242	中央部捨て場	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	口～胴部	平縁	単軸絡条体第１類？		前期後葉		(14.3)		(15.0)	粗礫多
243	中央部捨て場	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	1/2完形	波状口縁	口～胴：多軸絡条体，底：平底		前期後葉		(19.2)	12.2	27.3	内面口～胴スス少※Ｃ－７
244	中央部捨て場	Ⅲ層	深鉢	口～胴部	波状口縁	口～胴：多軸絡条体	ナデ	前期後葉	大木５	(20.0)		(16.0)	口縁内面にスス少
245	中央部捨て場	Ⅳ層	深鉢	口～胴部	波状口縁，口唇に刺突列，波頂部にドーナツ形の突起	口：貼付隆線による波状文（頂下がＶ字状，隆線上に指頭圧痕文），胴：ＬＲ結節付縦	ナデ	前期後葉	大木５	(27.1)		(26.6)	内外面スス少
246	中央部捨て場	Ⅳ層	深鉢	口～胴部	小波状口縁，台状突起（突起上に指頭圧痕文）	口～胴：Ｌ片末端縦		前期後葉	大木５				

掲載番号	出土地点	層位	器種	部位	口縁形状	文様・原体・その他	内面	時期	型式	口径	底径	器高	備考
247	中央部捨て場	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁	横位貼付隆線（隆線上に刺突文）→ＬＲ縦	横ナデ	前期後葉					
248	中央部捨て場	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	口縁部	突起（突起上に刺突文）	剥落	横ナデ	前期後葉	大木５				
249	中央部捨て場	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	口～底部	口唇欠損	口：結節回転文，頸：横位隆線→隆線上・隆線側縁に刻み目列，胴：ＬＲ・ＲＬ非結束羽状縄文縦，ＲＲＬ？縦→結節回転文（部分的），底：やや上げ底状		前期後葉	円筒下層ｂ		8.2	(29.15)	繊維中
250	中央部捨て場	Ⅲ層	深鉢	口縁部	平縁，刻み目	貝殻条痕文→貝殻腹縁文，刺突文	ミガキ	早期中葉	寺の沢				
251	中央部捨て場	Ⅴ層	深鉢	胴部		無文	貝殻条痕文（部分的）	早期中葉？					金雲母中。252と同一個体。
252	中央部捨て場	Ⅳ層	深鉢	胴部		無文	貝殻条痕文（部分的）	早期中葉？					金雲母中。251と同一個体。
253	中央部捨て場	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	底部		ＬＲ，尖底		前期初頭？					繊維多
254	中央部捨て場	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁	単軸絡条体第１類？	横ナデ	前期前葉	大木２ａ？				繊維中
255	中央部捨て場	Ⅳ～Ⅴ層	深鉢	口縁部	平縁	組状縄文？→単軸絡条体第１類側圧	横ナデ	前期前葉					繊維多
256	中央部捨て場	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	胴部		０段多条ＬＲ横		前期前葉？					繊維多
257	中央部捨て場	Ⅳ層	深鉢	胴部		０段多条ＬＲ横		前期前葉					繊維多
258	中央部捨て場	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	胴部		ＬＲ横		前期前葉？					繊維多
259	中央部捨て場	Ⅳ層	深鉢	胴部		ＬＲ・ＲＬ結束羽状縄文横	横ナデ	前期前葉					繊維多
260	中央部捨て場	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁	縦位綾繰文	横ナデ	前～中期					
261	中央部捨て場	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁	単軸絡条体第１類		前～中期					雲母多量混入
262	中央部捨て場	Ⅳ層	深鉢	口～胴部上半	波状口縁	口：ＲＬ横→貼付隆線（横位連結渦巻文），頸：横位２条貼付隆線，胴：ＲＬ縦	横ミガキ	中期中葉	大木８ａ新				
263	中央部捨て場	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	胴部		ＲＬＲ縦→隆沈線	ミガキ	中期中葉	大木８ｂ新				
264	中央部捨て場	Ⅳ層	深鉢	胴部		ＲＬＲ縦→隆沈線	ミガキ	中期中葉	大木８ｂ新				
265	中央部捨て場	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	口～胴部上半	平縁	口：沈線文，頸：横位貼付隆線（連鎖状），胴：ＲＬ斜	横ナデ	後期初頭					
266	中央部捨て場	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁	沈線による流水文	ミガキ	後期前葉？					267・268と同一個体
267	中央部捨て場	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁	沈線による流水文	ミガキ	後期前葉？					266・268と同一個体
268	中央部捨て場	Ⅳ層	深鉢	胴部	平縁	沈線による流水文	ミガキ	後期前葉？					266・267と同一個体
269	中央部捨て場	Ⅳ層	不明	脚部		無文		後～晩期				(8.3)	
270	５Ｘ11ｋ	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁，外削ぎ状，口唇に刻み目	沈線文	ミガキ	早期中葉	明神裏Ⅲ				271・272・273・274と同一個体
271	５Ｘ８ｉ	Ⅳ～Ⅴ層	深鉢	胴部		貝殻復縁文（連続多段状），沈線文	ミガキ	早期中葉	明神裏Ⅲ				270・272・273・274と同一個体
272	５Ｘ８ｉ	Ⅳ～Ⅴ層	深鉢	胴部		貝殻復縁文（連続多段状），沈線文	ミガキ	早期中葉	明神裏Ⅲ				270・271・273・274と同一個体
273	５Ｘ７ｋ	Ⅳ層	深鉢	胴部		貝殻復縁文（連続多段状），沈線文	ミガキ	早期中葉	明神裏Ⅲ				270・271・272・274と同一個体
274	５Ｘ７ｉ	Ⅴ層	深鉢	胴部		貝殻復縁文（連続多段状），沈線文	ミガキ	早期中葉	明神裏Ⅲ				270・271・272・273と同一個体
275	５Ｘ７ｊ	Ⅴ層	深鉢	胴部		平行沈線，貝殻腹縁文	ミガキ	早期中葉	物見台				
276	５Ｘ７ｊ～８ｊ	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁	平行沈線，貝殻腹縁文	ミガキ	早期中葉	物見台				
277	４Ｗ19ｇ	Ⅳ層	深鉢	胴部		貝殻腹縁文	ミガキ	早期中葉					
278	４Ｗ24ｈ	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	胴部		貝殻腹縁文		早期中葉？					
279	５Ｘ７ｊ	Ⅳ層	深鉢	底部		ＬＲ？，尖底（乳頭状）		早期					
280	５Ｘ９ｋ～９ｌ	Ⅳ層	深鉢	底部		底：ＬＲ横・斜，尖底（乳頭状）		前期初頭					

掲載番号	出土地点	層位	器種	部位	口縁形状	文様・原体・その他	内面	時期	型式	口径	底径	器高	備考
281	2 Y21 b	Ⅳ層	深鉢	胴部		ＬＲ斜	ＬＲ	前期初頭？					両面に縄文あり
282	5 X 4 i	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁	０段多条，ＬＲ横	ミガキ	前期前葉	大木１？				繊維多
283	5 X 6 f ～ 7 f	Ⅳ層	深鉢	口～胴部	不明	口縁：不整撚糸文，胴部：ＲＬ縦		前期前葉	大木２ａ？				繊維多，284と同一個体
284	5 X 7 h ～ 8 h	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁，口唇面取り	口縁：不整撚糸文，胴部：ＲＬ縦		前期前葉	大木２ａ？				繊維多量，283と同一個体
285	5 X 8 f ～ 8 g	Ⅳ層	深鉢	胴部		ＲＬＲ横	ミガキ	前期前葉					繊維多
286	5 X 7 g	Ⅳ層	深鉢	胴部		ＲＬ横	ミガキ	前期前葉					繊維多
287	5 X 7 h ～ 8 h	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁	単軸絡条体第４類？	ミガキ	前期前葉？					繊維多
288	5 X 9 h	Ⅳ層	深鉢	胴部		ＲＬＲ横		前期前葉					繊維多，大木１式の可能性
289	5 X13 k ～14 k	Ⅳ層	深鉢	口～胴部	小波状口縁	口：単軸絡条体第１類，胴：ＬＲ横		前期前葉？					繊維多
290	5 X 7 j ～ 8 j	Ⅳ層	深鉢	胴部		０段多条ＬＲ横		前期前葉					繊維多
291	5 X 6 j	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁，口唇面取り	ＬＲ横	ミガキ	前期前葉？					繊維多
292	5 X 8 h ～ 8 i	Ⅳ層	深鉢	口縁部	小波状，口唇面取り	ＬＲ横（結節あり）	横ミガキ	前期前葉？					繊維多
293	第６トレンチ	表土～35 cm	深鉢	口～胴部	平縁	口：単軸絡条体第１類横，胴：０段多条，ＬＲ横	横ナデ	前期前葉？					繊維多，※時期要検討
294	5 X 6 f ～ 7 f	Ⅳ層	深鉢	胴部		ＲＬＲ横		前期前葉？					繊維中
295	5 X13 k ～14 k	Ⅳ層	深鉢	胴部		ＬＲ横，指圧痕		前期前葉？					繊維中
296	5 X 7 h ～ 8 h	Ⅳ層	深鉢	胴部		ＬＲＬ縦	ナデ	前期前葉					繊維少
297	5 X 7 h	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁，口唇に刺突列	ＲＬＲ横	横ナデ	前期前葉					繊維少，298と同一個体
298	5 X 7 k	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁，口唇に刺突列	ＲＬＲ横	横ナデ	前期前葉					繊維少，297と同一個体
299	5 X 7 g	Ⅳ層	深鉢	底部		底：網代痕		前期前葉					
300	5 X 7 h ～ 8 h	Ⅳ層	深鉢	底部		底：木葉痕		前期前葉？					木葉痕
301	5 X 4 l ～ 5 l	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁，口唇面取り	ＬＲ横	横ナデ	前期前葉					
302	3 X14 x	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁	不整撚糸文		前期前葉	大木２ａ				繊維中
303	5 X 7 h	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁，口唇面取り，刺突文	ＬＲ縦	横ナデ	前期前葉～中葉	白座				
304	5 V 7 y 風倒木	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁？（花弁状）口唇部に沈線	口端に指頭圧痕文，単軸絡条体第５類→貼付文（貼付上に沈線文）	横ケズリ	前期後葉	大木５				
305	第９トレンチ	Ⅳ層	深鉢	口～胴部	平縁	口：単軸絡条体第5類，胴：横位隆線（隆線上に指頭圧痕文），単軸絡条体第5類	ケズリ，ナデ	前期後葉					
306	3 Y13 b	Ⅳ層	深鉢	口縁部	花弁状口縁	単軸絡条体第５類		前期後葉					
307	3 Y 1 a	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁	単軸絡条体第１類（ＬＲ）	ナデ	前期？					
308	第６トレンチ	Ⅳ層	深鉢	口～頸部	平縁	口：縦位貼付隆線，沈線文頸：横位平行沈線	横ミガキ	中期初頭	大木７ａ				
309	4 W23 h ～23 i	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁	クランク状文（区画内波状文）	横ミガキ	中期中葉	大木８ａ				
310	3 X12 u ～13 u	Ⅲ層	深鉢	胴部		隆沈線による渦巻文	ナデ	中期中葉	大木８ｂ				
311	2 Y13 j	Ⅳ層	深鉢	口縁部	小波状口縁	ＲＬＲ縦→隆沈線	横ミガキ	中期中葉	大木８ｂ				
312	2 Y16 k ～20 k	Ⅳ層	深鉢	胴部		ＲＬＲ横→隆沈線	ナデ	中期中葉	大木８ｂ				
313	2 Y11 k	Ⅳ層	深鉢	略完形	波状口縁	ＲＬＲ縦→隆沈線　底：剥落多	横ミガキ	中期中葉	大木８ｂ新	(21.1)	8.2	23.5	
314	5 X 6 l	Ⅳ層	深鉢	2/3完形	波状口縁	口～胴：Ｌ縦，底：平底，ミガキ	指ナデ	中期後葉	大木９	(13.5)	5.2	13.85	

掲載番号	出土地点	層位	器種	部位	口縁形状	文様・原体・その他	内面	時期	型式	口径	底径	器高	備考
315	2 Y12 v	Ⅳ層	深鉢	1/2完形	小波状口縁（4単位）	口～胴：0段多条ＬＲ縦→沈線区画→磨消縄文，底：平底，ミガキ	横ミガキ	中期後葉	大木9	15.0	6.9	18.5	
316	2 Y22 v	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁	ＬＲ縦→沈線区画→磨消縄文	横ナデ	中期後葉	大木9				
317	2 A12 a	Ⅳ層	深鉢	口縁部	波状口縁	ＲＬＲ縦→沈線区画	ミガキ	中期後葉	大木9				
318	2 Y11 v	Ⅳ層	深鉢	口縁部	小波状口縁	口端に渦巻文，ＲＬＲ縦→隆沈線	横ミガキ	中期後葉	大木9				内面スス多※Ｃ－9
319	5 X 7 h	Ⅳ層	深鉢	胴部		沈線区画→ＬＲＬ（充填縄文）	ミガキ，剥落中	中期末葉	大木10				
320	5 X 8 i	Ⅳ層下位	深鉢	胴部		沈線区画→ＬＲ（充填縄文）	ナデ	中期末葉	大木10				
321	第6トレンチ	Ⅲ層	深鉢	胴部		ＬＲ縦→沈線区画→磨消縄文→沈線引き直し		中期末葉？	大木10？				
322	5 X 5 g	Ⅳ層	深鉢	胴部		単軸絡条体第5類→磨消縄文→沈線		中期末葉？	大木10新				後期初頭の可能性もある
323	2 Y10 x	Ⅳ層	深鉢	口縁部	波状口縁	沈線文，刺突文	ミガキ	中期末葉	大木10新				
324	5 W 1 h	Ⅳ層	深鉢	口縁部	中空突起	貼付隆線，刺突文		中期末葉	大木10			(11.6)	大木10式新段階？
325	3 X13 a・14 x・9 t	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁	ＬＲ縦→沈線区画→ミガキ（磨消縄文）→沈線引き直し（部分的）		中期末葉	大木10				※後期初頭？
326	5 X13 j ～14 j	Ⅳ層	深鉢	3/4完形	小波状口縁	口：無文，波頂下に円形刺突文（縦位，胴部上半まで続く），胴：ＬＲ横・斜・縦→沈線文（倒卵文，Ｙ字状文，蛇行文）→磨消縄文→沈線引き直し？，底：欠損	口～胴上半：横ミガキ，胴中～下半：縦ミガキ	後期初頭	門前Ⅱ			(38.9)	波状口縁・文様の単位は5単位？
327	2 Y16 f	Ⅳ層	深鉢	口縁部	波状口縁，頂部に刺突文	ＲＬＲ縦→沈線区画→磨消縄文→文様の起点にボタン状貼付文	ナデ	後期初頭	門前Ｉｃ？				
328	2 Y18 g	Ⅳ層	深鉢	口縁部	波状口縁	Ｌ？縦→沈線文→磨消縄文→ボタン状貼付文，縦位蛇行文	ミガキ	後期初頭	門前Ｉｃ？				卵遠坂遺跡出土に類似
329	2 Y18 o	Ⅳ層	深鉢	口縁部	波状口縁	沈線文，刺突文，ボタン状貼付文	横ミガキ	後期初頭	門前Ｉｃ？				
330	2 Y24 a	風倒木	深鉢	口～胴部上半	平縁	口：沈線文（弧状文），ボタン状貼付文，胴：ＬＲ縦	横ナデ	後期初頭					
331	2 Y13 y	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁	ＲＬ縦，ボタン状貼付文＋隆線	横ナデ	後期初頭					
332	2 Y16 h	Ⅳ層	深鉢	胴部		Ｌ？縦→沈線文→磨消縄文→ボタン状貼付文	ミガキ	後期初頭					333・338と同一個体，門前Ｉｃ？
333	2 Y16 h	Ⅳ層	深鉢	胴部		Ｌ？縦→沈線文→磨消縄文→ボタン状貼付文	ミガキ	後期初頭					332・338と同一個体，門前Ｉｃ？
334	2 Y14 u	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁？	平行沈線（3条1単位），ボタン状貼付文	ナデ	後期初頭？					
335	2 Y15 k	Ⅳ層	深鉢	胴部		ＲＬ→沈線文→磨消縄文→沈線引き直し	横ミガキ	後期初頭？	宮戸Ｉｂ？				
336	2 Y18 m	Ⅳ層	深鉢	把手		円形の凹部，沈線文		後期初頭？				(4.9)	
337	2 Y20 e	Ⅳ層	深鉢	口縁部	口唇欠損	ＬＲ縦→沈線文	横ナデ	後期初頭？					
338	2 Y16 h	Ⅳ層	深鉢	口～胴部上半	波状口縁	口：無文，横位貼付隆線（隆線上に短沈線），胴：Ｌ？縦→沈線文→磨消縄文	ミガキ	後期初頭					332・333と同一個体 門前Ｉｃ？
339	2 Y19 e	Ⅳ層	壺？	胴部		ＬＲ縦→沈線文→磨消縄文（所々）		後期初頭					340と同一個体
340	2 Y19 e	Ⅳ層	壺？	胴部		ＬＲ縦→沈線文→磨消縄文（所々）		後期初頭					339と同一個体
341	2 Y15 u	Ⅳ層	深鉢	口縁部	波状口縁	単軸絡条体第1類→沈線文渦巻文，刺突文	横ナデ	後期初頭					卵遠坂遺跡出土に類似
342	2 Y20 f	Ⅳ層	深鉢	口縁部	波状口縁	平行沈線による弧状文		後期初頭					
343	2 Y23 a	風倒木	深鉢	口縁部	波状口縁	沈線文（倒卵状のモチーフ）	ミガキ	後期初頭					
344	第15トレンチ	水田床土	深鉢	胴部		連鎖状隆起線文，ＲＬ縦	横ミガキ	後期初頭					
345	2 Y11 v	Ⅳ層	深鉢	口～胴部上半	波状口縁	口：沈線文，縦位短沈線（2列），胴：ＬＲ縦	ナデ	後期初頭					
346	2 A17 b	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁，折り返し口縁	無文（素面），沈線文	ナデ	後期初頭					
347	第12トレンチ	水田土	深鉢	口縁部	口唇欠損	貼付隆線（隆線上に刺突文），沈線文		後期初頭					

掲載番号	出土地点	層位	器種	部位	口縁形状	文様・原体・その他	内面	時期	型式	口径	底径	器高	備考
348	2 Y13 y	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁，折り返し口縁	無文，沈線文	横ミガキ	後期初頭					
349	2 Y14 u	Ⅳ層	深鉢	口縁部	波状口縁	貼付隆線，刺突文	横ナデ	後期初頭					内外面黒色の付着物（アスファルト？）
350	2 Y14 w	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁，折り返し口縁	沈線，単軸絡条体第５類	ナデ	後期初頭					
351	第12トレンチ	Ⅳ層？	深鉢	胴部		単軸絡条体第５類→貼付隆線		後期初頭					
352	2 Y19 f	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁	単軸絡条体第１類→沈線文	横ナデ	後期初頭					
353	2 Y13 y	Ⅳ層	壺？	胴部		流水文	横ミガキ	後期初頭？					
354	3 Y14 a	Ⅲ層	深鉢	口縁部	波状口縁	ＬＲ縦→沈線文→貼付隆線→ボタン状貼付文	横ミガキ	後期初頭～前葉					
355	2 Y10 t	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁	沈線文（連続Ｓ字状文）→ボタン状貼付文	横ナデ	後期初頭～前葉					
356	2 Y10 t	Ⅳ層	深鉢	口～胴上半	口唇欠損	口：無文→ＬＲ側圧(縦位)，頸：ＬＲ側圧(横位)，胴：ＬＲ横	横ミガキ	後期初頭～前葉					
357	2 Y15 k	Ⅳ層	深鉢	口～胴部上半	平縁	口：無文，頸：ＬＲ側圧，胴：ＬＲ横	横ミガキ	後期初頭～前葉					
358	2 Y21 f	Ⅳ層	深鉢	口～頸部	平縁	口：無文（ミガキ），頸：ＲＬ側圧	横ミガキ	後期初頭～前葉					
359	2 Y21 h	Ⅳ層	深鉢	口～胴部上半	平縁	口：ＬＲ横，頸：ＬＲ側圧，胴：ＬＲ		後期初頭～前葉					
360	2 Y22 t	Ⅳ層	深鉢	口～胴部上半	平縁	口：ＬＲ横，無文，頸：ＬＲ側圧，胴：ＬＲ横	横ミガキ	後期初頭～前葉					
361	2 A11 a	Ⅰ層	深鉢	口～胴部	平縁	口：無文，頸：ＬＲ側圧，胴：ＬＲ横	横ミガキ	後期初頭～前葉					
362	2 Y11 y	Ⅳ層	深鉢	口～胴部上半	波状口縁	口：無文，頸：ＬＲ側圧，胴：ＬＲ斜	ミガキ	後期初頭～前葉					
363	2 Y15 k	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁？	円形刺突列，ＬＲ横，沈線文	横ミガキ	後期初頭～前葉					
364	2 Y16 k	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁	無文→ＬＲ側圧	ミガキ	後期初頭～前葉					
365	3 X12 t	Ⅳ層	深鉢	口縁部	波状口縁	ＲＬ横→沈線文・刺突文	横ミガキ	後期前葉	十腰内１				
366	3 X12 x	Ⅲ層	深鉢	口縁部	波状口縁	ＬＲ横→沈線文	横ミガキ	後期前葉	十腰内１				
367	2 Y16 i	Ⅳ層	壺	口縁部	平縁	ＬＲ横→沈線文	横ミガキ	後期前葉					
368	2 Y14 u	Ⅳ層	深鉢	口縁部	波状口縁	ＲＬ横→平行沈線，刺突文	横ミガキ	後期前葉					※新山権現社類似
369	2 Y13 v	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁，段状	ＲＬ横→平行沈線（４条１単位），補修孔	ナデ	後期前葉					※新山権現社類似
370	2 Y10 x	Ⅳ層	深鉢	口縁部	波状口縁	ＲＬ横→沈線文	ミガキ	後期前葉					内面スス多※Ｃ－８
371	2 Y13 u	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁	沈線モチーフ（沈線間に刺突文）	横ミガキ	後期前葉					
372	2 Y23 r	Ⅳ層	深鉢	口縁部	波状口縁	ＬＲ→沈線文→磨消縄文	横ナデ	後期前葉					
373	2 A11 a	Ⅰ層	深鉢	口縁部		ＬＲ横→磨消縄文→沈線文	横ミガキ	後期前葉					
374	2 A11 a	Ⅰ層	深鉢	口縁部	波状口縁，突起	ＲＬ横→磨消縄文→沈線文	ミガキ	後期前葉					内面スス中
375	2 Y10 y	Ⅰ層	壺？	頸～胴上半		頸：無文，胴：ＲＬ横→沈線文→磨消縄文→沈線引き直し（部分的）		後期前葉				(4.0)	胴部上半は意図的に切断されていると思われる。
376	2 Y14 u	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁	ＬＲ横→沈線文→磨消縄文	横ミガキ	後期前葉					
377	2 Y14 u	Ⅳ層	深鉢	口縁部	波状口縁	ＲＬ横→磨消縄文→沈線文	横ミガキ	後期前葉					外面スス少
378	2 Y 3 w	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁	ＬＲ縦→平行沈線→磨消縄文	横ナデ	後期前葉					
379	2 Y10 y	Ⅲ層	深鉢	胴部		ＬＲ横→磨消縄文，赤色顔料塗布	横ナデ	後期前葉？					
380	2 Y12 y	Ⅳ層	壺？	胴部		ＬＲ縦→磨消縄文→沈線文		後期前葉					
381	2 Y13 y	Ⅳ層	深鉢	口縁部	波状口縁，刻み目	ＬＲ縦→磨消縄文→沈線文	横ナデ	後期前葉					
382	2 Y13 y	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁，台状突起，口唇部にＬＲ	ＬＲ横→磨消縄文→沈線文	横ナデ	後期前葉					※新山権現社類似
383	2 Y 8 x	Ⅲ層	鉢	口縁部	平縁	ＬＲ横→磨消縄文→沈線文	ミガキ	後期前葉？					

掲載番号	出土地点	層位	器種	部位	口縁形状	文様・原体・その他	内面	時期	型式	口径	底径	器高	備考
384	2Y10y～11y	Ⅳ層	深鉢	口縁部	波状口縁	LR横→磨消縄文→沈線文	横ミガキ	後期前葉					
385	2Y14u	Ⅳ層	深鉢	口縁部	波状口縁	RL横→沈線文，磨消縄文	横ナデ	後期前葉					
386	2Y12y	Ⅳ層	台付土器	台部		LR		後期前葉？			(5.4)	(5.1)	打ち欠き痕あり
387	2Y13y	Ⅳ層	台付土器	台部		LR，穿孔部（3ヶ所）		後期前葉？			(5.6)	(3.6)	
388	2Y15u	Ⅳ層	深鉢	1/3完形	大波状口縁	口：無文（ミガキ），LR横→沈線文，胴：無文（ミガキ），底：平底，ケズリ	ミガキ	後期中葉		(25.8)	(7.3)	21.9	外面スス少
389	3Y3f	Ⅳ層	深鉢	口縁部	波状口縁	LR斜→刺突列→沈線文	ミガキ	後期中葉					
390	3X2y	Ⅳ層一括土器	浅鉢	略完形	平縁	口：無文，胴：沈線文（綾杉状），無文，底：平底	横ミガキ	後期中葉		(26.9)	6.45	10.2	
391	2Y18e	Ⅳ層	深鉢	口縁部	口唇欠損	口端無文，LR→沈線文	ミガキ	後期中葉					
392	2A14b	Ⅰ層	深鉢	口縁部	小波状口縁	無文，RL横→沈線文	横ミガキ	後期中葉					
393	2Y14w	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁	口端無文（約2.5cm），LR横→横位平行沈線	横ミガキ	後期中葉					
394	2Y13x	Ⅳ層	深鉢	口縁部	波状口縁	無文，LR横→沈線文	ミガキ	後期中葉					
395	2Y13u	Ⅲ層	鉢	1/2完形	平縁	口：無文，胴：沈線文，無文	横ナデ	後期中葉		(11.9)	(2.9)	(4.8)	
396	2Y14u	Ⅳ層	台付鉢？	口～胴部	平縁	口：無文，胴：LR横，胴下半：無文	横ミガキ	後期中葉					
397	2Y15w	Ⅳ層	浅鉢	1/3完形	平縁	口：無文，胴：LR横→沈線文	横ナデ	後期中葉					
398	2Y18x	Ⅳ層	壺？	口縁部	平縁	口端無文，RL横→沈線文	横ミガキ	後期中葉					
399	2Y15w	Ⅳ層	注口土器？	口～胴部	小波状口縁，突起	LR横→沈線文→ミガキ	ナデ	後期中葉					
400	3Y6q	Ⅳ層	深鉢	口縁部	波状口縁，突起	LR→沈線	横ミガキ	後期中葉					
401	2X13y・12y 試掘トレンチ	Ⅳ層	壺	胴部		沈線区画→LR（充填縄文）→ミガキ		後期中葉					
402	2A15b	Ⅰ層	注口土器	胴～底部		胴上半・下半沈線モチーフ→LR充填縄文→沈線引き直し，※S字状の帯縄文部分は磨消縄文	ナデ	後期中葉		10.9	3.0	(7.5)	
403	5X8h～8i	Ⅳ層	深鉢	口縁部	波状口縁	LR横→沈線→磨消縄文→沈線引き直し（部分的に）	横ナデ	後期中葉	十腰内3				
404	3X12v～13v	Ⅳ層上面	深鉢	口縁部	平縁	LR横→沈線文→磨消縄文	横ミガキ	後期中葉	十腰内3				
405	3X14s	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	胴～底部		胴：LR横→沈線区画→磨消縄文，底：やや上げ底		後期中葉			4.8	(6.3)	
406	2Y18d	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁	LR横→沈線区画→磨消縄文→沈線引き直し	横ミガキ	後期中葉					
407	2Y23a	風倒木	深鉢	口～胴部上半	口唇欠損	口：LR横→磨消縄文→沈線文，頸～胴：LR横→平行沈線	ナデ	後期中葉？					
408	2Y15u	Ⅳ層	深鉢	口縁部	波状口縁	LR横→磨消縄文→沈線文	横ミガキ	後期中葉					410・411と同一個体
409	2Y14u	Ⅳ層	深鉢	胴部		LR横→磨消縄文→沈線文	横ミガキ	後期中葉					150と同一個体の可能性あり
410	2Y14u	Ⅳ層	深鉢	胴部		LR横→磨消縄文→沈線文	横ミガキ	後期中葉					411・408と同一個体
411	2Y15u	Ⅳ層	深鉢	胴部		LR横→磨消縄文→沈線文	横ミガキ	後期中葉					410・408と同一個体
412	2Y15u	Ⅳ層	深鉢	胴部		RL→沈線→磨消縄文→沈線引き直し（部分的）	横ナデ	後期中葉					
413	2Y3w	Ⅳ層	壺？	胴部		LR横→沈線文→磨消縄文→沈線引き直し	ケズリ	後期中葉					
414	2A16d	Ⅳ層	注口土器？	胴部		貼瘤，刻み目，RL→磨消縄文？→沈線文	ケズリ	後期中葉					
415	3Y7m	Ⅳ層	深鉢	口～胴部上半	平縁，口唇にLR	LR横	横ミガキ	後期中葉					
416	2A17b	Ⅳ層	壺？	口縁部	波状口縁	口端に刻み目（2列），LR横・斜	ナデ，ケズリ	後期中葉					
417	2Y15w	Ⅳ層	深鉢	突起		無文，穿孔部	ミガキ	後期中～後葉					
418	2Y16i	Ⅳ層	壺	口～胴部	平縁？	口～胴：無文（ミガキ）	横ミガキ	後期中～後葉					
419	2A16d	Ⅳ層	壺	胴部		沈線区画→LR（充填縄文）→沈線引き直し→ミガキ		後期中～後葉					

掲載番号	出土地点	層位	器種	部位	口縁形状	文様・原体・その他	内面	時期	型式	口径	底径	器高	備考
420	3Y12w・13b・13d	Ⅳ層	深鉢	胴部		ＬＲ横→沈線区画→ミガキ（磨消縄文？）→沈線引き直し	横ミガキ	後期後葉	十腰内４				
421	2Y19j	Ⅳ層	深鉢	口縁部？	口唇欠損	ＬＲ横→沈線文→磨消縄文	横ナデ	後期後葉？					
422	2Y19k	Ⅳ層	深鉢	胴部		沈線→ＬＲ（充填縄文）	横ミガキ	後期後葉？					
423	2A12a	Ⅳ層	深鉢	口縁部	波状口縁	張瘤，Ｌ		後期後葉					
424	2A15b	Ⅰ層	深鉢	口縁部	平縁	無文，ＬＲ横→沈線区画→磨消縄文→沈線引き直し（部分的）		後期後葉					
425	3Y9h	Ⅳ層	深鉢	略完形	平縁	口～胴：ＲＬ・ＬＲ非結束羽状縄文　底：平底	横ミガキ	後期後葉？		31.8	8.1	33.1	
426	2A18d	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁	沈線区画→ＬＲ（充填縄文）→ミガキ	横ミガキ	後期後葉					
427	2A16c	Ⅳ層	深鉢	2/3完形	平縁	０段多条ＬＲ横→沈線モチーフ→磨消縄文	横ミガキ	後期後葉		(35.0)	(9.3)	37.5	
428	2Y23o	Ⅳ層	深鉢	口縁部	口唇欠損	沈線（入組文）→ＬＲ（充填縄文）→張瘤	横ミガキ	後期後葉	十腰内５併行				
429	2Y21r	Ⅳ層	壺	略完形	平縁	口：無文，頸：沈線，貼付隆線，刺突文，胴：無文，底：上げ底状		後期後葉		5.4	1.9	17.1	
430	2Y15v	Ⅳ層	壺	胴部		沈線文→ＬＲ（充填縄文）→沈線引き直し	横ミガキ	後期後葉					
431	2Y20r	Ⅳ層	壺	口縁部？		沈線文，張瘤		後期後葉					
432	2Y13y	Ⅳ層	注口土器	胴部		隆起線文		後期後葉	新地式？				
433	3X12s	Ⅳ層	人面付土器	突起部		眉と口は粘土紐貼付，目は刺突	細めの沈線によるモチーフ，耳裏刺突文	後期後葉？				(5.55)	
434	3Y13g	Ⅳ層	深鉢	口～胴部上半	平縁	口：刻み目列，頸：刻み目列＋張瘤（瘤上に刺突文），胴：ＲＬ	横ナデ	後期後～末葉					435と同一個体
435	3Y13g	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁	刻み目列	横ナデ	後期後～末葉					434と同一個体
436	3Y3p	Ⅳ層	深鉢	胴部		帯縄文，張瘤	ナデ	後期後～末葉					
437	5X9o～15h	Ⅰ層	深鉢	口縁部	平縁	横位沈線（２条１単位を複数条）→刺突文	横ナデ	後期末葉？					時期要検討
438	5X9m～10m	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁	ＬＲ縦→沈線→磨消縄文→ヒレ状の突起付加	横ミガキ	後期末葉？					時期要検討
439	2X13y・12y　試掘トレンチ	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁	ＬＲ横→沈線文→刺突文	横ナデ	後期末葉？					
440	2Y21r	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁	短沈線（刻み）→沈線文	横ナデ	後期末葉？					
441	2Y22t	Ⅳ層	深鉢	口縁部？	口唇欠損	沈線による入組文（区画内刻み目）		後期末葉？					
442	2Y14w	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁	ＬＲ横→平行沈線，刺突列	横ナデ	後期					
443	2Y18d	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁	沈線による流水文	ミガキ	後期					
444	2Y7s	Ⅳ層	浅鉢	略完形	平縁	口～胴：無文，底：平底	横ミガキ	後期		(11.6)	5.6	(5.4)	
445	2Y24d	Ⅳ層	台付鉢	脚部		無文		後期			8.0	(4.8)	
446	2Y10w	Ⅳ層	壺	胴～底部		胴：無文，底：やや上げ底状	横ナデ	後期		(7.6)	5.4	(8.4)	
447	2Y13x	Ⅳ層	壺？	胴～底部		胴：無文，底：平底，ミガキ	横ナデ	後期			6.4	(11.7)	
448	3X12y～14y	Ⅳ層	深鉢	底部		木葉痕		後期？					
449	3Y1x	Ⅳ層	深鉢	胴下半～底部		平底，網代痕		後期？					
450	2Y16f	Ⅳ層	深鉢	底部		底：網代痕		後期？					
451	2Y18j	Ⅳ層	器台？	底部		底：脚部欠損		後期？				(1.75)	
452	2A13a	Ⅴ層	深鉢	底部		網代痕→木葉痕		後期？					
453	2Y10y	Ⅳ層	深鉢	底部		網代痕		後期？					
454	2Y25y	Ⅳ層	台付鉢	台部		台部に透かし		後期？			(7.1)	(3.8)	
455	5W3d	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	口～胴部上半	平縁，B突起	口：三叉文，頸：横位３条平行沈線，胴：ＬＲ横	横ナデ	晩期初頭	大洞Ｂ				
456	3X10t	Ⅳ層	深鉢	口縁部	平縁，B突起	ＬＲ横→平行沈線，三叉文	横ミガキ	晩期初頭	大洞Ｂ				

掲載番号	出土地点	層位	器種	部位	口縁形状	文様・原体・その他	内面	時期	型式	口径	底径	器高	備考
457	3 x 13 i	Ⅰ層	深鉢	口縁部	平縁，刺突文	三叉文	横ミガキ	晩期初頭	大洞Ｂ				
458	3 X 14 x	Ⅳ層	深鉢	口～頸部	口唇欠損	ＬＲ横→沈線文→磨消縄文	横ミガキ	晩期初頭	大洞Ｂ				
459	3 Y 1 s	Ⅳ層	深鉢	口縁部	小波状口縁	沈線文，ＬＲ横	横ナデ	晩期初頭	大洞Ｂ				
460	2 Y 23 g	Ⅳ層	深鉢	口～胴部上半	平縁	口：三叉文，頸：平行沈線胴：ＬＲ横		晩期初頭	大洞Ｂ				
461	3 X 12 u～13 u	Ⅲ層	深鉢	口～胴部	平縁	口：三叉文，胴：ＬＲ横	口～胴上：横ミガキ，胴下：縦・斜ミガキ	晩期初頭	大洞Ｂ				
462	2 Y 23 d	Ⅳ層	鉢？	口縁部	平縁	突起，赤色顔料塗布？	横ナデ	晩期初頭？					
463	2 Y 23 x	Ⅳ層	壺？	口縁部	平縁，突起	三叉文	横ナデ	晩期初頭	大洞Ｂ				内外面スス多※Ｃ－10
464	3 Y 8 l	風倒木	注口土器	胴部		沈線文		晩期初頭	大洞Ｂ				
465	3 Y 12 w	Ⅳ層	注口土器	胴部		三叉文	ミガキ	晩期初頭	大洞Ｂ				
466	3 Y 13 b	Ⅳ層	注口土器	胴～底部		胴～底：三叉文		晩期初頭	大洞Ｂ				
467	2 Y 15 u	Ⅳ層	注口土器	胴～底部		胴：沈線文，底：平底	ケズリ	晩期初頭			4.5	7.45	内外面黒色の付着物（アスファルト？）
468	2 Y 23 d	Ⅳ層	不明	不明		三叉文，透かし		晩期初頭	大洞Ｂ				469・470・471と同一個体
469	2 Y 23 d	Ⅳ層	不明	不明		三叉文，赤色顔料塗布		晩期初頭	大洞Ｂ				468・470・471と同一個体
470	2 Y 23 d	Ⅳ層	不明	不明		透かし		晩期初頭	大洞Ｂ				468・469・471と同一個体
471	2 Y 23 d	Ⅳ層	不明	口縁部	平縁	三叉文，透かし，赤色顔料塗布	横ナデ	晩期初頭	大洞Ｂ				468・469・470と同一個体
472	2 A 17 d	Ⅳ層	深鉢	口～胴部	平縁，Ｂ突起	口：羊歯状文，頸：平行沈線，胴：ＬＲ横		晩期前葉	大洞ＢＣ				内外面スス中
473	3 Y 3 u～3 v	Ⅳ層	鉢	口～胴部上半	平縁，Ｂ突起	口：羊歯状文，胴：ＬＲ横	横ミガキ	晩期前葉	大洞ＢＣ				内外面スス多※Ｃ－11
474	2 Y 21 i	Ⅳ層	鉢？	口～胴部	平縁，Ｂ突起	口：羊歯状文，胴：三叉文	横ナデ	晩期前葉	大洞ＢＣ				
475	2 Y 24 j	Ⅳ層	鉢	口～胴部	平縁，刻み目	口：羊歯状文，胴：ＬＲ横		晩期前葉	大洞ＢＣ				内外面スス多※Ｃ－12
476	2 Y 25 t	Ⅳ層	鉢	口～胴部	小波状口縁，Ｂ突起，刻み目	口：沈線文，胴：ＬＲ横	ミガキ	晩期前葉					
477	2 Y 25 y	Ⅳ層	台付浅鉢？	台部		ＬＲ，羊歯状文		晩期前葉	大洞ＢＣ		7.4	(3.7)	
478	2 Y 11 y	Ⅳ層	深鉢	口～胴部	平縁	口：ＬＲ横→平行沈線，胴：ＬＲ横	口：横ミガキ，胴：ナデ	晩期前葉？		(24.4)		(20.5)	
479	3 Y 9 l	Ⅳ層	壺	口～胴部	平縁	羊歯状文	横ミガキ	晩期前葉	大洞ＢＣ				
480	3 Y 9 l	Ⅳ層	注口土器	口縁部	平縁	羊歯状文，三叉文	横ミガキ	晩期前葉	大洞ＢＣ				
481	2 Y 22 b	Ⅳ層	注口土器	胴部		胴部下半無文		晩期前葉	大洞ＢＣ				胴部上半の文様要検討
482	2 Y 22 b	Ⅳ層	注口土器	胴部		三叉文		晩期前葉	大洞ＢＣ				
483	2 Y 22 t	Ⅳ層	鉢？	不明		ＬＲ→磨消縄文→沈線文	ナデ	晩期中葉	大洞Ｃ１？				
484	2 Y 22 w	Ⅳ層	鉢？	口縁部	波状口縁，Ｂ突起	ＬＲ→沈線文	ミガキ	晩期中葉	大洞Ｃ１				
485	2 Y 24 e	Ⅳ層	浅鉢？	胴～底部		ＬＲ横→沈線モチーフ（雲形文）→磨消縄文	ミガキ	晩期中葉	大洞Ｃ２				
486	2 Y 22 p	Ⅳ層	皿？	口縁部	Ｂ突起	ＬＲ→沈線文	ミガキ，沈線	晩期中葉？	大洞Ｃ２？				
487	2 Y 19 j	Ⅳ層	注口土器	注口部		無文		晩期				(5.1)	
488	2 Y 11 y	Ⅳ層	注口土器	注口部		無文		晩期？					
489	2 Y 24 h	Ⅳ層	皿？	胴～底部		無文		晩期？			2.8	(2.6)	
490	4 W 24 e	Ⅳ層下位	深鉢	口縁部	波状口縁（頂部に刺突）	３条平行沈線	横ミガキ，口縁裏側に沈線	弥生前期					
491	5 V 7 y　風倒木	Ⅳ層	壺？	口縁部	平縁，口唇部に沈線	沈線文	横位３条平行沈線	弥生？					

掲載番号	出土地点	層位	器種	部位	口縁形状	文様・原体・その他	内面	時期	型式	口径	底径	器高	備考
1051	ＲＸ001　南北ベルト	埋土中	深鉢	胴部		単軸絡条体第１類		中期末葉	大木10				※胎土分析１
1052	ＲＸ002　Ｑ３	埋土中	深鉢	胴部		ＬＲ→沈線区画→磨消縄文	ナデ	中期後葉	大木９				※胎土分析２
1053	ＲＸ002　Ｑ１	埋土中	深鉢	胴部		ＬＲ→沈線区画→磨消縄文	横ナデ	中期後葉	大木９				※胎土分析３
1054	ＲＸ003　Ｑ３	埋土中	深鉢	胴部		単軸絡条体第１Ａ類		前期後葉					※胎土分析４
1055	ＲＸ003　Ｑ５	埋土中	深鉢	口縁部	平縁	ＬＲ→沈線区画	横ミガキ	中期後葉	大木９				※胎土分析５
1056	ＲＸ003　Ｑ４	埋土中	深鉢	胴部		沈線区画→ＲＬＲ（充填縄文）		中期末葉	大木10				※胎土分析６
1057	ＲＸ004	埋土中	深鉢	胴部		沈線による弧状文，起点に円形刺突文	横ナデ	後期初頭					※胎土分析７
1058	ＲＸ005	埋土中	深鉢	胴部		０段多条ＬＲ横	ナデ	前期前葉	大木１～２ａ				繊維多※胎土分析８
1059	ＲＡ007　Ｑ３	１層	深鉢	胴部		単軸絡条体第１Ａ類	ナデ	前期後葉					※胎土分析９
1060	ＲＡ008　Ｑ２	埋土中	深鉢	胴部		貝殻条痕文→刺突文		早期中葉？	物見台？				※胎土分析10
1061	５Ｘ６ｇ～６ｈ	Ⅳ層	深鉢	胴部		沈線区画→ＬＲ（充填縄文）	縦ミガキ	中期末葉	大木10				※胎土分析11
1062	第９トレンチ	Ⅳ層	深鉢	口縁部	台波状	口端無文，ＬＲ横→沈線文	ミガキ	後期中葉	十腰内２				※胎土分析12
1063	中央部捨て場	Ⅲ～Ⅳ層	壺？	口縁部	平縁，Ｂ突起	羊歯状文		晩期前葉	大洞ＢＣ				※胎土分析13

第11表　土製品観察表

掲載番号	出土地点	層位	器種	文様・特徴	長さ	幅	穿孔部	厚さ	重量	備考
					cm	cm	cm	cm	g	
501	ＲＡ012　Ｑ３	底面	ミニチュア土器	無文	口径(3.2)	底径3.3		器高4.65	27.56	
502	ＲＤ156	埋土中	土偶	腰～右足部	(2.3)	(2.35)		1.1	5.40	
503	ＲＥ002　Ｑ４	埋土中	耳飾り		2.15×2.1	2.1		(1.1)	3.48	
504	ＲＤ163	埋土中	ミニチュア土器			底径(2.75)		器高(3.7)	25.23	
505	ＲＤ163	埋土中	粘土塊	指頭痕複数あり	2.4	2.7		2.3	13.87	
506	ＲＥ002　Ｑ４	埋土中	鐸形土製品		2.55	2.6			10.69	
507	ＲＥ003　ＰＰ５	埋土	不明	刺突文、沈線	4.2	2.4	0.2	1.1	10.55	
508	ＲＨ039	下部土坑埋土	土偶	胴～足部	(10.3)	8.2		3.5	55.72	
509	ＲＨ039　下部土坑	埋土	円盤状土製品		2.95	3.5		0.8	8.54	
510	ＲＨ042	Ⅳ層	ミニチュア土器	無文	口径(2.9)	底径(1.0)		器高2.4	5.06	
511	ＲＨ047		円盤状土製品		3.15	3.1		0.9	9.36	
512	ＰＰ270	埋土中	粘土塊		2.8	3.15		3.3	27.00	
513	捨て場４Ｘ11ａ	Ⅳ層	斧状土製品	ＬＲ	(6.15)	3.4		1.6	35.14	265の大木８ａ式土器と共伴
514	捨て場４Ｘ12ａ～12ｄ	Ⅲ層	斧状土製品	ＲＬＲ、沈線、穿孔（上端0.9㎜、下端0.6㎜）	(4.5)	3.9		2.1	39.70	
515	捨て場４Ｗ９ｘ～９ｙ	Ⅲ～Ⅳ層	円盤状土製品		4.7	4.75		0.85	21.16	
516	捨て場４Ｘ12ａ～12ｄ	Ⅳ層	円盤状土製品		4.75	4.85		1.15	30.22	
517	第６トレンチ	Ⅲ層	ミニチュア土器	単軸絡条体第１類、補修孔あり	口径(5.2)	底径4.2		器高5.8	87.12	胎土中に繊維含まず、前期後葉？
518	２Ｙ15ｗ	Ⅳ層	ミニチュア土器	無文		底径1.6		器高(1.3)	12.42	
519	２Ｙ19ａ	Ⅳ層	ミニチュア土器	無文、四脚（※残存は一脚）	口径4.05×3.8			器高2.3	10.02	
520	３Ｙ５ｑ	Ⅳ層	ミニチュア土器	無文	口径4.1	底径2.1		器高3.3	32.64	
521	３Ｙ13ａ	Ⅳ層	ミニチュア土器		口径(4.2)	底径2.25		器高5.2	26.22	伴搬土器からは後期初頭の可能性あり
522	２Ａ14ｂ	Ⅰ層	ミニチュア土器	無文	口径3.9	底径2.4		器高2.0	16.83	
523	２Ｙ３ｖ	Ⅰ層	土偶	左？足部	(2.9)	(2.0)		2.3	11.92	
524	２Ｙ12ｕ	Ⅳ層	土偶	胴部	3.05	3.85		1.55	18.83	
525	２Ｙ13ｖ	Ⅳ層	土偶	足部	(2.55)	(3.4)		(1.6)	8.48	

掲載番号	出土地点	層位	器種	文様・特徴	長さ	幅	穿孔部	厚さ	重量	備考
					cm	cm	cm	cm	g	
526	2Y14w	Ⅳ層	土偶	刺突文、沈線	(3.95)	(1.85)		1.8	13.48	
527	2Y15g	Ⅳ層	土偶	胴部	(4.4)	(2.75)		1.5	12.59	
528	2Y15g	Ⅳ層	土偶	右足部、沈線	(2.85)	2.7		2.25	14.77	
529	2Y15u	Ⅳ層	土偶		6.05	5.45		2.35	47.95	
530	2Y15y	Ⅳ層	土偶	胴部	(4.3)	(4.6)		2.1	35.90	
531	2Y16h	Ⅳ層	土偶	左肩部	(3.3)	(3.5)		(1.95)	17.95	
532	2Y16u	Ⅳ層	土偶	右足部、刺突文	(4.4)	(2.5)		1.85	16.91	
533	2Y19f	Ⅳ層	土偶	胴部、乳房2個、円形の刺突文が表面と裏面の背中部分に施文される	(4.6)	(5.0)		2.4	36.22	
534	2Y21u	Ⅳ層	土偶		(4.5)	4.4		2.75	32.81	首が斜めに付く
535	2Y22b	風倒木	土偶	胴部、刺突文	(10.15)	(8.25)		3.5	180.83	
536	2Y24e	Ⅳ層	土偶	右足部、足裏に何らかの痕跡	(3.35)	2.1		2.9	14.09	
537	2Y24r	Ⅳ層	土偶	右足部	(4.25)	3.15		3.45	29.94	
538	3Y1f	Ⅳ層	土偶	胴部、刺突文	(2.8)	(3.15)		1.7	12.30	
539	3Y3e	Ⅳ層	土偶	胴部、乳房2個、円形の刺突文が表面・裏面・側面に施文される	(2.6)	3.7		1.05	5.81	
540	2A15g	Ⅳ層	土偶	胴～足部	(7.8)	5.5		2.55	36.85	
541	2Y15i	Ⅳ層	クマ型土製品	胴部	(3.2)	(3.0)		1.4	8.47	
542	5V4w	Ⅳ層下位	土製耳飾り		2.25×2.2	2.25	0.5	1.9(高さ)	6.95	
543	5W2f	Ⅲ～Ⅳ層	土製耳飾り		2.8		0.55	2.7(高さ)	7.39	
544	2Y16i	Ⅳ層	土製耳飾り		3.95	4.1		0.95	19.28	
545	2Y18f	Ⅳ層	土製耳飾り		2.6×2.55	2.55	0.6	1.7(高さ)	6.74	
546	2A12a	Ⅰ層	土製耳飾り	上面に沈線2条	3.55		1.0	2.8(高さ)	13.61	
547	2Y12u		土製耳飾り		1.5×1.4	1.4		0.7(高さ)	1.09	
548	2Y21t	Ⅳ層	鐸形土製品	沈線	(2.5)	(2.3)	0.4		5.32	
549	5X12i	Ⅳ層	円盤状土製品		5.4	5.65		0.85	25.29	
550	5X13j～14j	Ⅳ層	円盤状土製品		4.05	3.6		0.85	13.19	
551	2Y3x	Ⅳ層	円盤状土製品		3.35	2.9		0.7	8.95	
552	2Y9x	Ⅳ層	円盤状土製品		3.9	3.55		0.9	13.78	
553	2Y13v	Ⅳ層	円盤状土製品		3.65	3.65		0.8	11.54	
554	2Y14g	Ⅳ層	円盤状土製品		4.7	4.45		0.9	19.53	
555	2Y16h	Ⅳ層	円盤状土製品		2.6	2.5		0.85	5.15	
556	2Y16w	Ⅳ層	円盤状土製品		2.6	2.95		0.55	4.77	
557	2Y18f	Ⅳ層	円盤状土製品		4.85	4.9		1.0	28.11	
558	2A16c	Ⅳ層	円盤状土製品		4.05	3.8		0.95	16.12	
559	2A16d	Ⅳ層	円盤状土製品		3.5	3.6		0.7	8.84	
560	3Y13b	Ⅳ層	円盤状土製品		4.85	4.9		1.1	28.02	
561	3Y3u	Ⅳ層	円盤状土製品		4.05	4.05		1.0	17.03	
562	19号トレンチ	Ⅳ層	不明	刻み目	2.85	2.3	0.3	2.65	11.20	垂れ飾り？

第12表　剥片石器観察表

掲載番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	時代	長さ	幅	厚さ	備考	重量
							cm	cm	cm		
601	RA005	埋土中	石鏃	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	3.2	2.1	0.5		2.28
602	RA005	埋土中	石匙	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	5.4	5.7	1.25		23.85
603	RA005	覆土下位	スクレイパー	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	5.1	3.4	1.1		20.90
604	RA007　Q1	黒褐色土	石鏃	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	2.3	1.65	0.45		1.38
605	RA007　Q3	1層	スクレイパー	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀					36.85
606	RA010　Q2	床面直上	石鏃	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	3.25	1.7	0.55		2.26
607	RA010　Q6	埋土中位	石鏃	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	1.5	1.15	0.3		0.31
608	RA010　西壁際土	埋土中	石鏃	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	3.5	2.0	0.4		2.81
609	RA010　北壁際土	埋土中	石錐	メノウ	奥羽山脈	新生代新第三紀	2.3	1.65	0.35		0.52
610	RA010　北壁際土	埋土中	石匙	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	4.25	(6.1)	0.8		13.29

掲載番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	時代	長さ	幅	厚さ	備考	重量
							cm	cm	cm		
611	RA010　PP23	埋土中	石匙	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀					15.47
612	RA010　西壁際土	埋土中	石匙	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀					31.94
613	RA010　Q5	2層	スクレイパー	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	8.6	3.75	1.2		40.38
614	RA010　西壁際土	埋土中	石篦	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	6.65	2.8	1.1		28.21
615	RA010　西壁際土	埋土中	石篦	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	7.15	2.9	1.0		25.50
616	RA011　Q3	床直	石鏃	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	(1.6)	1.45	0.3		0.67
617	RA011　PP8	1層	石匙	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	4.3	1.9	0.6		4.21
618	RA011　炉	2層	スクレイパー	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	(5.8)	3.65	0.8		12.66
619	RA011　PP11	埋土中	スクレイパー	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀					31.92
620	RA012　炉	炉内1層	スクレイパー	凝灰岩	奥羽山脈	新生代新第三紀					8.31
621	RA012　PP1	埋土中	スクレイパー	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀					35.07
622	RA015	埋土中	尖頭器	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	4.9	1.65	0.7		5.03
623	RD142	埋土中位	石鏃	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	(2.3)	2.0	0.3		0.95
624	RD156	埋土中	石鏃	メノウ	奥羽山脈	新生代新第三紀	2.5	1.0	0.55		1.04
625	RE003　B－B'ベルト	2層	石鏃	珪質頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	1.65	1.5	0.3		0.39
626	RE003　A－A'ベルト	1層	スクレイパー	赤色頁岩	北上山地	中生代三畳～ジュラ紀	8.55	3.95	1.5		43.30
627	RH037	Ⅳ層	尖頭器	赤色頁岩	北上山地	中生代三畳～ジュラ紀	2.9	2.05	0.85		4.35
628	RH042	下位付近	スクレイパー	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	3.0	2.5	1.1		7.33
629	RX002　Q3	埋土中	石鏃	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	3.1	1.8	0.5		1.86
630	RX003　Q4	埋土中	石鏃	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	3.6	1.9	0.5		2.71
631	RX004	埋土中	石匙	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	5.0	3.4	0.7		9.95
632	PP194	埋土	ピエス・エスキーユ	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	1.8	2.3	0.65		2.03
633	PP286	埋土	石錐	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	2.75	1.65	0.6		2.04
634	中央部捨て場4W9v～9yベルト	1層	石匙	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	6.55	4.05	0.8		20.53
635	中央部捨て場4X12a～12dベルト	Ⅰ層	石鏃	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	4.45	2.0	0.35		2.34
636	中央部捨て場4W6x	Ⅲ～Ⅳ層	石鏃	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	3.9	1.9	0.55		2.80
637	中央部捨て場4W6x	Ⅲ～Ⅳ層	石匙	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	4.3	6.25	1.4		20.01
638	4W19h	Ⅲ～Ⅳ層	石鏃	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	2.4	1.3	0.35		0.65
639	4W25h	Ⅲ～Ⅳ層	石鏃	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	3.0	1.7	0.3		1.63
640	4W21h	Ⅲ～Ⅳ層	石鏃	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	(2.0)	1.55	0.2		0.48
641	2Y6u	Ⅳ層	石鏃	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	(1.75)	0.95	0.4		0.38
642	2Y8x	Ⅲ層	石鏃	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	(1.9)	1.4	0.3		0.48
643	2Y8x	Ⅲ層	石鏃	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	2.5	1.5	0.3		0.69
644	2Y9u	Ⅳ層下位	石鏃	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	2.2	1.4	0.3		0.41
645	2Y10t	Ⅳ層	石鏃	赤色頁岩	北上山地	中生代三畳～ジュラ紀	2.9	1.5	0.5		1.27
646	2Y10t	Ⅳ層	石鏃	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	2.45	1.5	0.3		0.52
648	2Y13x	Ⅳ層	石鏃	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	1.8	1.4	0.3		0.60
650	2Y15x	Ⅳ層	石鏃	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	2.3	1.6	0.3		0.71
652	2Y17u	Ⅳ層	石鏃	メノウ	奥羽山脈	新生代新第三紀	1.9	1.1	0.2		0.27
653	2Y18g	Ⅳ層	石鏃	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	2.35	1.6	0.25		0.45
654	2Y20j	Ⅳ層	石鏃	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	1.35	0.85	0.25		0.24
655	2Y22e	Ⅳ層	石鏃	メノウ	奥羽山脈	新生代新第三紀	(1.9)	1.2	0.3		0.51
656	2Y22e	Ⅳ層	石鏃	メノウ	奥羽山脈	新生代新第三紀	2.05	1.95	0.3		0.54
657	2Y21f	Ⅳ層	石鏃	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	3.55	1.85	0.35		1.62
658	2Y23g	Ⅳ層	石鏃	赤色頁岩	北上山地	中生代三畳～ジュラ紀	2.5	1.3	0.25		0.49
659	2Y24a	風倒木	石鏃	黒曜石	不明		2.8	1.65	0.3		0.81
660	3Y12b	Ⅳ層	石鏃	メノウ	奥羽山脈	新生代新第三紀	(2.9)	1.5	0.5		1.51
661	2A14a	Ⅳ層	石鏃	赤色頁岩	北上山地	中生代三畳～ジュラ紀	2.5	1.35	0.4		1.04
662	2A16c	Ⅳ層	石鏃	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	3.9	1.7	0.4		2.25
663	2A18c	Ⅳ層	石鏃	メノウ	奥羽山脈	新生代新第三紀	(2.4)	0.8	0.15		0.41
664	19号トレンチ	Ⅳ層	石鏃	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	2.2	1.75	0.4		1.04
665	2Y8x	Ⅲ層	石錐	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	4.15	2.1	0.35		1.53
666	2Y12j～13j	Ⅳ層	石錐	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	4.0	1.0	0.75		2.77

掲載番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	時代	長さ	幅	厚さ	備考	重量
							cm	cm	cm		
667	2 Y13v	Ⅳ層	石錐	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	4.4	1.4	0.4		1.27
668	2 Y13x	Ⅳ層	石錐	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	4.2	2.1	0.35		0.88
669	5 X 4 l～ 5 l	風倒木	石匙	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	6.4	4.35	1.3		28.19
670	5 X 6 l	Ⅳ層	石匙	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	5.2	6.1	1,2		25.20
671	5 X 8 i	Ⅳ層	石匙	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	7.3	2.5	0.65		11.53
672	5 X11i～11j	Ⅳ層	石匙	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	4.9	2.35	0.8		7.12
673	5 X11i～11j	Ⅳ層	石匙	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	5.7	3.1	0.6		9.93
674	調査区南西部	表採	石匙	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	4.9	2.4	0.7		6.83
675	4 W23h	Ⅲ～Ⅳ層	石匙	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	7.4	3.3	1.2		27.77
676	2 Y12u	Ⅳ層	石匙	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	4.1	1.45	0.5		3.08
677	2 Y12u	Ⅳ層	石匙	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	6.5	2.6	0.8		11.39
678	2 Y14u	Ⅳ層	石匙	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	6.75	4.25	1.0		22.81
679	2 Y14w	Ⅳ層	石匙	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	5.55	6.3	0.55	右端部欠損	15.76
680	2 A13a	Ⅰ層	石匙？	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	9.1	4.4	1.25		47.07
681	5 X 9 n	Ⅳ～Ⅴ層	スクレイパー	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀					18.57
682	5 X13k～14k	Ⅳ層	スクレイパー	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	9.5	4.6	1.65		65.15
683	4 W21f～21g	Ⅲ～Ⅳ層	スクレイパー	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀					34.33
684	4 W23h～23i	Ⅲ～Ⅳ層	スクレイパー	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	(6.1)	(8.7)	0.9		59.20
685	4 W24h	Ⅲ～Ⅳ層	スクレイパー	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	5.9	12.9	2.1		94.06
686	4 W24j	Ⅰ層	スクレイパー	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀					13.54
687	4 W25h	Ⅰ層	スクレイパー	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	5.3	3.05	0.85		16.88
688	2 Y11y	Ⅳ層	スクレイパー	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	3.05	6.5	1.05		12.23
689	2 Y13t	Ⅳ層	スクレイパー	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	5.9	3.3	1.5		16.39
690	2 Y14u	Ⅳ層	スクレイパー	メノウ	奥羽山脈	新生代新第三紀	(2.65)	0.95	0.45		1.19
691	2 Y15u	Ⅳ層	スクレイパー	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	5.3	3.8	1.0		23.85
692	2 Y16e	Ⅳ層	スクレイパー	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	6.25	3.5	0.65		16.19
693	2 Y16f	Ⅳ層	スクレイパー	赤色頁岩	北上山地	中生代三畳～ジュラ紀	3.05	2.35	0.85		7.20
694	2 Y19e	Ⅳ層	スクレイパー	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	4.25	4.5	0.9		14.21
695	2 Y20k	Ⅳ層	スクレイパー	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀					15.17
696	2 Y22b	Ⅳ層	スクレイパー	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	5.25	3.4	0.6		32.99
697	3 A 2 a	Ⅳ層	スクレイパー	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀					68.23
698	第12トレンチ	Ⅳ層	スクレイパー	珪質頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀					27.19
699	2 Y15h	Ⅳ層	異形石器	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀					49.32
700	2 Y16k	Ⅳ層	ピエス・エスキーユ	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	2.75	2.15	0.8		5.88
701	2 Y20h	Ⅳ層	Uフレ	黒曜石	不明		3.25	1.85	0.6		3.05
702	2 Y25b	Ⅳ層	多面体石器	頁岩	北上山地	古生代～中生代三畳～ジュラ紀	2.55	2.75	2.05		121.32

第13表　礫石器観察表

掲載番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	時代	長さ	幅	厚さ	重量	備考
							cm	cm	cm	g	
703	RA005　B－B'ベルト	2層（T層）	磨石	デイサイト	奥羽山脈	新生代新第三紀	(9.8)	7.3	5.5	570.74	
704	RA005	Ⅳ層	特殊磨石	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	14.5	8.65	2.7	624.19	
705	RA006	Ⅳ層	磨石	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	12.0	9.2	3.1	572.07	
706	RA008　Q2	埋土中	磨製石斧	蛇紋岩	北上山地（長野峠付近）	古生代オルドビス紀	8.3	3.0	1.5	65.23	
707	RA009　南壁	埋上	石錘	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	8.85	6.25	1.3	124.51	
708	RA010　PP23	埋土	磨製石斧	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	(6.6)	2.3	1.4	35.31	
709	RA010　Q3	1層	磨製石斧	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	(6.9)	5.0	1.8	87.53	
710	RA010　Q8	埋土下位	石錘	砂岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	8.0	6.7	1.8	97.73	
711	RA010　北壁際	埋土中	特殊磨石	デイサイト	奥羽山脈	新生代新第三紀	7.4	7.2	2.7	218.60	
712	RA010　Q3	埋土下位	磨石	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	12.7	6.3	2.3	304.48	磨製石斧未製品
713	RA010　Q2	Ⅰ～2層	磨石	花崗岩	北上山地	中生代白亜紀	8.4	5.2	4.6	314.23	
714	RA010　西壁際	埋土中位	磨石	デイサイト	奥羽山脈	新生代新第三紀	13.6	10.0	2.2	521.41	

掲載番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	時代	長さ	幅	厚さ	重量	備考
							cm	cm	cm	g	
715	RA010　南壁	埋土	石皿	安山岩	奥羽山脈	新生代第四紀	17.55	14.3	6.2	1167.88	
716	RA010　Q3	1～2層	礫器	安山岩	奥羽山脈	新生代第四紀	7.9	4.5	1.5	75.18	
717	RA012　B－B'ベルト	1層	砥石	安山岩	奥羽山脈	新生代第四紀	7.2	7.4	4.7	98.00	
718	RA012　Q4	2層	磨石	デイサイト	奥羽山脈	新生代新第三紀	15.7	5.8	4.35	643.64	
719	RA014　Q2	2層	礫器	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	(12.0)	6.1	1.5	154.89	
720	RA015	Ⅳ層	石錘	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	7.8	8.8	2.4	237.12	
721	RA016	風倒木	礫器	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	16.7	10.0	2.4	500.79	
722	RA017　Q3	黒褐色土	石錘	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	7.95	6.85	1.55	125.00	
723	RA017　Q4	1層上位	石錘	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	6.9	8.5	2.2	214.20	
724	RA017		台石	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	22.8	14.7	5.6	2883.76	
725	RD116	2層	磨石	デイサイト	奥羽山脈	新生代新第三紀	14.8	12.2	4.2	1049.30	
726	RD123	底面直上	磨石	花崗岩	北上山地	中生代白亜紀	12.7	8.6	4.7	898.46	
727	RD123	底面直上	磨石	花崗岩	北上山地	中生代白亜紀	12.4	10.3	5.3	884.75	
728	RD137	埋土中	磨石	閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	10.9	7.9	2.5	341.37	
729	RD138	下位	磨製石斧	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	22.5	7.25	3.65	930.96	
730	RD140	埋土中	磨石	デイサイト	奥羽山脈	新生代新第三紀	16.9	9.4	4.5	1001.63	
731	RD144	埋土	凹石？	デイサイト	奥羽山脈	新生代新第三紀	10.5	7.0	3.5	373.44	
732	RD147	埋土上位	軽石製	安山岩	奥羽山脈	新生代第四紀	10.2	(4.4)	3.3	54.91	
733	RD149	埋土中	特殊磨石	チャート	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	12.8	7.0	2.3	305.67	
734	RD149	埋土中	凹石	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	17.6	8.6	3.3	672.63	
735	RD149	埋土中	石錘	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	7.5	8.2	2.1	158.79	
736	RE002	埋土中	石斧	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	19.5	7.5	3.85	698.64	
737	RE002　Q4	床面	石錘	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	6.8	6.4	1.4	90.51	抉り周辺にペッキング
738	RE002　A－A'ベルト	床面	磨石	砂岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	13.7	6.9	3.4	554.32	
739	RE003　A－A'ベルト	1層	磨石	カンラン岩	北上山地(長野峠付近)	古生代オルドビス紀	7.8	5.4	3.5	203.78	
740	RE003　PP25	埋土中	磨石	蛇紋岩	北上山地(長野峠付近)	古生代オルドビス紀	(7.35)	8.15	2.45	230.58	
741	RE003　PP31	埋土中	磨石	デイサイト	奥羽山脈	新生代新第三紀	16.5	15.1	4.6	1829.17	
742	RE003　Q3	埋土中位	軽石製	安山岩	奥羽山脈	新生代第四紀	5.65	6.6	3.85	141.58	
743	RH034	石器　No1	磨石	蛇紋岩	北上山地(長野峠付近)	古生代オルドビス紀	16.0	9.05	7.0	1382.85	
744	RH034		台石	デイサイト	奥羽山脈	新生代新第三紀	28.8	23.7	8.2	7400.00	
745	RH035	Ⅳ層	敲石	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	8.5	7.8	3.6	299.99	
746	RH035		石皿	花崗岩	北上山地	中生代白亜紀	10.6	9.6	4.6	476.39	
747	RH036		磨製石斧	蛇紋岩	北上山地(長野峠付近)	古生代オルドビス紀	(7.75)	4.8	2.2	114.64	
748	RH037		磨石	デイサイト	奥羽山脈	新生代新第三紀	19.3	13.2	4.85	1919.71	
749	RH037	Ⅳ層	石皿	安山岩	奥羽山脈	新生代第四紀	(9.5)	(8.4)	3.9	182.37	
750	RH037		石皿	花崗岩	北上山地	中生代白亜紀	14.3	10.1	5.8	1158.67	
751	RH039	Ⅳ層	磨石	斑岩	北上山地	中生代白亜紀	(9.05)	10.3	3.25	419.56	
752	RH039		磨石	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	(10.1)	8.8	2.95	358.49	
753	RH039　下部土坑	埋土	礫器	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	14.1	9.2	3.2	550.30	
754	RH039		礫器	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	(11.75)	7.55	3.3	380.85	
755	RH042		台石	閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	(23.6)	13.0	3.75	2268.98	
756	RH042		台石	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	12.6	9.6	2.85	710.36	
757	RH045		礫器	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	15.1	10.05	2.35	478.16	
758	RH046		台石	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	(17.1)	18.2	10.1	4500.00	
759	RH047		磨石	閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	13.45	11.4	3.05	780.93	
760	RH047		台石	ひん岩	北上山地	中生代白亜紀	26.6	33.2	6.15	8600.00	
761	RH047		台石	角礫状チャート	北上山地	古生代後期	26.35	(20.0)	5.2	3645.00	
762	RH047		台石	デイサイト	奥羽山脈	新生代新第三紀	20.6	18.9	4.5	2701.00	
763	RH047		台石	デイサイト	奥羽山脈	新生代新第三紀	(29.9)	(29.2)	9.75	11604.00	

掲載番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	時代	長さ	幅	厚さ	重量	備考
							cm	cm	cm	g	
764	R H047		礫器	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	18.2	6.8	2.1	382.36	
765	R H047		礫器	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	12.75	6.45	1.75	224.48	
766	R H047		礫器	蛇紋岩	北上山地（長野峠付近）	古生代オルドビス紀	10.6	5.6	1.25	136.85	
767	R H047		礫器	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	14.2	5.7	2.8	415.06	
768	R H048		台石	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	20.5	(17.1)	4.8	2533.96	
769	R H049		磨石	花崗岩	北上山地	中生代白亜紀	(10.6)	8.45	4.9	621.82	
770	R H049		台石？	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	(21.3)	16.9	7.0	3610.00	
771	R H050		磨石	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	29.0	14.5	8.3	5000.00	
772	R H051	集石下位	台石？	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	15.1	19.0	6.8	2383.74	
773	R X001　Q 3	1層	磨製石斧	閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	6.95	6.5	3.75	275.73	未製品
774	R X001　南北ベルト	埋土中	石錘	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	7.8	8.65	2.5	274.20	
775	R X001　南北ベルト	埋土中	石錘	安山岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	8.7	9.9	2.4	278.30	
776	R X001	埋土中	石錘	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	7.7	6.4	2.0	127.38	
777	R X001　Q 1	1層	礫器	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	(14.95)	8.1	1.75	287.39	
778	R X001　Q 4	1層	礫器	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	11.5	7.35	2.0	214.21	
779	R X001	埋土中	礫器	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	16.2	7.5	1.8	358.07	
780	R X002	埋土中	磨石	ひん岩	北上山地	中生代白亜紀	6.85	6.4	1.05	78.71	
781	R X002	埋土中	礫器	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	9.7	8.6	1.5	179.00	
782	R X003　Q 3	埋土中	磨製石斧	蛇紋岩	北上山地（長野峠付近）	古生代オルドビス紀	4.75	2.4	1.0	20.73	
783	R X003　Q 3	埋土中	磨製石斧	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	7.3	2.1	1.05	32.90	
784	R X003　Q 3	埋土中	石錘	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	7.6	6.2	2.0	121.59	
785	R X003	埋土中	礫器	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	22.6	8.8	2.45	598.47	
786	R X003　Q 5	埋土中	礫器	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	17.4	7.3	2.6	315.41	
787	R X004	埋土中	石錘	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	8.45	6.8	1.15	108.61	
788	R X004	埋土中	石錘	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	9.2	5.6	1.8	123.66	
789	R X004	埋土中	磨石	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	16.15	7.1	1.9	322.58	
790	R X005	埋土中	磨石	砂岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	9.45	5.65	1.95	89.86	
791	R X005	埋土中	磨石	デイサイト	奥羽山脈	新生代新第三紀	13.1	7.6	1.9	305.85	
792	R X006		石錘	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	5.9	6.2	1.1	65.74	
793	P P083	アタリ	軽石製	安山岩	奥羽山脈	新生代第四紀	5.4	5.4	3.4	60.74	
794	P P171	埋土中	敲石	安山岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	8.1	6.9	5.0	418.15	
795	P P268	埋土中	礫器	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	9.75	5.8	1.05	77.36	
796	P P415	埋土	軽石製	安山岩	奥羽山脈	新生代第四紀	(9.7)	8.7	4.5	219.11	
797	P P418	埋土	軽石製	安山岩	奥羽山脈	新生代第四紀	13.7	8.5	6.45	388.60	
798	中央部捨て場 4 W 6 x	Ⅲ～Ⅳ層	敲石	はんれい岩	北上山地	中生代白亜紀	7.55	7.2	5.7	514.06	
799	4 W19 g	Ⅳ層	磨製石斧	蛇紋岩	北上山地（長野峠付近）	古生代オルドビス紀	8.0	2.5	0.8	26.00	
800	5 V 5 y	Ⅳ層　風倒木	磨製石斧	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	(9.05)	1.8	1.0	35.74	擦り切り技法
801	3 X12 x	Ⅲ層	磨製石斧	蛇紋岩	北上山地（長野峠付近）	古生代オルドビス紀	(5.3)	2.5	1.0	22,64	ミニチュア
802	3 Y13 y	Ⅳ層	磨製石斧	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	11.5	4.8	2.45	185.74	未製品
803	2 Y 5 w	Ⅰ層	磨製石斧	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	(11.2)	4.0	2.25	185.34	
804	2 Y13 x	Ⅳ層	磨製石斧	蛇紋岩	北上山地（長野峠付近）	古生代オルドビス紀	(7.9)	4.6	1.9	120.50	
805	2 Y13 y	Ⅳ層	磨製石斧	閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	7.45	4.5	2.6	137.74	
806	2 Y15 g	Ⅳ層	磨製石斧	蛇紋岩	北上山地（長野峠付近）	古生代オルドビス紀	4.0	1.3	0.4	3.35	
807	2 Y15 u	Ⅳ層	磨製石斧	蛇紋岩	北上山地（長野峠付近）	古生代オルドビス紀	(9.55)	4.3	2.1	112.37	
808	2 Y17 g	Ⅳ層	磨製石斧	蛇紋岩	北上山地（長野峠付近）	古生代オルドビス紀	(7.25)	3.9	2.15	97.29	
809	2 Y17 k	Ⅳ層	磨製石斧	蛇紋岩	北上山地（長野峠付近）	古生代オルドビス紀	(9.5)	4.4	1.8	133.80	
810	2 Y18 u	Ⅳ層	磨製石斧	閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	(8.65)	4.5	2.6	163.33	

掲載番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	時代	長さ	幅	厚さ	重量	備考
							cm	cm	cm	g	
811	2Y19s	Ⅳ層	磨製石斧	はんれい岩	北上山地	中生代白亜紀	(6.05)	4.0	1.85	64.12	
812	2Y20r	Ⅳ層	磨製石斧	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	8.7	4.1	1.2	66.33	
813	2Y21g	Ⅳ層	磨製石斧	はんれい岩	北上山地	中生代白亜紀	(8.8)	6.6	3.5	256.92	未製品
814	2Y23a	Ⅳ層　風倒木	磨製石斧	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	11.0	5.55	3.0	195.45	
815	2Y24c	Ⅳ層	磨製石斧	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	(5.2)	4.2	2.1	82.54	
816	3Y1s	Ⅳ層　風倒木	磨製石斧	蛇紋岩	北上山地（長野峠付近）	古生代オルドビス紀	(12.7)	7.75	3.85	401.37	
817	3Y4f	Ⅳ層	磨製石斧	滑石	北上山地	古生代オルドビス紀	(4.3)	1.0	0.5	4.56	
818	3Y7e	Ⅳ層	磨製石斧	蛇紋岩	北上山地（長野峠付近）	古生代オルドビス紀	(9.1)	7.0	3.35	421.68	未製品
819	2A13a	Ⅲ層	磨製石斧	滑石	北上山地	古生代オルドビス紀	(5.25)	2.5	0.7	14.76	
820	2A15c	Ⅴ層	磨製石斧	蛇紋岩	北上山地（長野峠付近）	古生代オルドビス紀	(4.5)	4.1	1.4	46.13	
821	2Y13y	Ⅳ層	石斧	珪長質凝灰岩	北上山地	古生代後期	12.05	5.2	2.55	135.91	
822	2Y14k	Ⅳ層	石斧	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	18.4	7.2	2.3	449.12	磨製石斧未製品
823	2Y16i	Ⅳ層	石斧	カンラン岩	北上山地（長野峠付近）	古生代オルドビス紀	(11.5)	7.3	4.3	574.81	
824	2Y19k	Ⅳ層	石斧	閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	(8.0)	5.4	1.5	112.73	
825	2A12a	Ⅳ層	石斧	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀				250.47	
826	2A13a	Ⅰ層	石斧	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	10.4	5.2	1.75	148.99	
827	5V7y	Ⅳ層　風倒木	特殊磨石	閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	12.1	6.8	4.25	493.06	
828	5V7y	Ⅳ層　風倒木	磨石	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	12.7	6.2	3.35	358.71	
829	5W2f	遺構埋土？	磨石	デイサイト	奥羽山脈	新生代新第三紀	20.4	7.1	3.7	665.86	
830	2Y2s	Ⅳ層	磨石	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	(7.45)	6.3	4.0	297.60	特殊磨石
831	2Y11y	Ⅳ層	磨石	デイサイト	奥羽山脈	新生代新第三紀	5.3	4.5	4.3	157.42	
832	2Y12t	Ⅳ層	磨石	デイサイト	奥羽山脈	新生代新第三紀	10.3	8.0	3.7	431.18	
833	2Y13i～14i	Ⅳ層	磨石	閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	13.8	9.7	4.0	876.81	
834	2Y13y	Ⅳ層	磨石	デイサイト	奥羽山脈	新生代新第三紀	3.8	3.2	3.3	54.27	
835	2Y16f	Ⅳ層	磨石	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	10.35	7.0	3.05	342.70	
836	2Y16k	Ⅳ層	磨石	閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	13.2	7.0	3.8	586.26	
837	2Y17t	Ⅳ層	磨石	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	11.2	9.3	1.9	357.21	
838	2Y17t	Ⅳ層	磨石	安山岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	(8.6)	6.1	2.8	229.04	
839	2Y18u	Ⅳ層	磨石	デイサイト	奥羽山脈	新生代新第三紀	15.5	11.5	2.65	823.92	
840	2Y19e	Ⅳ層	磨石	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	13.35	5.9	3.9	480.48	
841	2Y19s	Ⅳ層	磨石	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	(11.0)	12.9	5.9	941.75	
842	2Y22d	Ⅳ層	磨石	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	13.5	6.8	4.25	542.77	
843	2Y24r	Ⅳ層	磨石	デイサイト	奥羽山脈	新生代新第三紀	(10.4)	6.45	3.7	323.89	
844	2A16c	Ⅳ層	磨石	閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	9.15	7.1	4.6	577.00	
845	2A22a	Ⅳ層	磨石	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	(6.9)	10.7	2.45	275.82	
846	4W19h	Ⅳ層	敲石	砂岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	10.9	9.7	3.4	520.31	
847	2Y13i～14i	Ⅳ層	敲石	閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	6.9	4.6	3.1	168.93	
848	2Y13w	Ⅳ層	敲石	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	(4.9)	4.4	3.3	109.28	
849	2Y13y	Ⅳ層	敲石？	礫岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	13.1	7.0	3.1	397.38	
850	2Y21r	Ⅳ層	敲石	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	6.1	5.2	2.6	101.05	
851	2Y22t	Ⅳ層	敲石	蛇紋岩	北上山地（長野峠付近）	古生代オルドビス紀	9.2	9.0	2.5	384.95	
852	2Y17s	Ⅳ層	砥石	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	11.65	4.4	3.3	265.69	
853	4W21h	Ⅳ層	石錘	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	8.3	5.6	1.7	127.35	
854	2Y15l	Ⅳ層	凹石	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	11.5	6.45	3.1	333.33	
855	2Y15l	Ⅳ層	凹石	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	15.6	6.0	3.3	380.75	磨製石斧未製品？
856	2Y22t	Ⅳ層	凹石	砂岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	(7.2)	6.5	3.6	224.24	
857	2A13a	Ⅰ層	凹石	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	17.35	6.2	4.2	597.79	
858	2Y24j	Ⅳ層	半円状扁平打製石器	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	16.8	9.2	2.5	613.18	
859	5V7y	Ⅳ層　風倒木	抉入扁平磨製石器	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	15.5	7.4	1.55	246.52	

掲載番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	時代	長さ	幅	厚さ	重量	備考
							cm	cm	cm	g	
860	3 X10 t	Ⅳ層	石皿	安山岩	奥羽山脈	新生代第四紀	(11.0)	(7.9)	2.2	112.89	
861	3 Y13 a	Ⅳ層	石皿	安山岩	奥羽山脈	新生代第四紀	(10.1)	(9.4)	4.8	251.34	
862	2 Y 8 x	Ⅲ層	石皿	砂岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	(7.8)	(6.5)	1.9	102.58	
863	2 Y15 g	Ⅳ層	石皿？	安山岩	奥羽山脈	新生代第四紀	8.5	7.7	5.7	326.65	
864	2 Y15 u	Ⅳ層	石皿	安山岩	奥羽山脈	新生代第四紀	13.2	9.1	3.9	241.71	
865	2 Y16 f	Ⅳ層	石皿	安山岩	奥羽山脈	新生代第四紀	(8.4)	(11.2)	3.5	267.27	
866	3 Y 3 x	Ⅳ層	石皿	安山岩	奥羽山脈	新生代第四紀	12.9	16.3	5.1	498.94	
867	2 Y18 p	Ⅳ層	台石	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	8.5	12.1	4.7	662.87	
868	3 Y 9 h	Ⅳ層	台石	ひん岩	北上山地	中生代白亜紀	(18.05)	19.8	8.55	6000.00	
869	4 W22 h	Ⅳ層	礫器	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	6.6	4.6	1.2	61.10	
870	表採調査区西部		礫器	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	15.05	7.15	1.55	251.08	
871	2 Y 7 s	Ⅳ層	礫器	粘板岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	15.85	8.0	1.2	243.15	
872	2 Y13 u	Ⅳ層	礫器	砂岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	6.9	5.3	1.8	100.35	
873	2 Y13 v	Ⅳ層	礫器	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	5.15	5.25	1.2	46.32	
874	2 Y13 x	Ⅳ層	礫器	砂岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	5.8	5.5	2.2	105.14	
875	2 Y14 u	Ⅳ層	礫器	砂岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	12.45	5.7	2.15	230.06	
876	2 Y14 v	Ⅳ層	礫器	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	(12.1)	6.55	1.85	200.40	
877	2 Y14 x	Ⅳ層	礫器	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	5.75	4.2	1.5	53.93	
878	2 Y15 g	Ⅳ層	礫器	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	10.3	7.85	2.8	342.70	
879	2 Y15 u	Ⅳ層	礫器	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	6.9	5.8	2.75	163.11	
880	2 Y15 x	Ⅳ層	礫器	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	5.65	4.5	1.2	45.67	
881	2 Y16 f	Ⅳ層	礫器	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	14.8	7.3	2.5	416.28	
882	2 Y16 f	Ⅳ層	礫器	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	10.1	8.2	1.95	202.80	
883	2 Y17 k	Ⅳ層	礫器	砂岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	8.2	7.7	2.25	194.69	欠損品
884	2 Y17 u	Ⅳ層	礫器	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	7.3	5.3	1.55	93.88	
885	2 Y15 g	Ⅳ層	礫器	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	12.35	6.95	2.3	278.47	
886	2 Y22 k	Ⅳ層	礫器	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	(8.4)	6.05	1.5	118.41	
887	2 Y22 t	Ⅳ層	礫器	蛇紋岩	北上山地（長野峠付近）	古生代オルドビス紀	(10.9)	6.7	2.6	299.85	
888	2 Y23 h	Ⅳ層	礫器	礫岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	8.4	8.75	1.45	157.39	
889	2 Y24 i	Ⅳ層	礫器	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	6.1	6.1	0.8	47.86	
890	2 A21 c	Ⅳ層	礫器	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	11.25	7.2	2.2	279.73	
891	3 Y 9 h　風倒木		礫器	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	17.5	7.2	2.8	496.04	
892	3 X11 x	Ⅳ層	石斧	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	(10.6)	6.15	1.9	169.56	
893	2 Y16 y	Ⅳ層	軽石製	安山岩	奥羽山脈	新生代第四紀	7.5	6.9	3.4	109.20	
894	2 Y18 n	Ⅳ層	軽石製	安山岩	奥羽山脈	新生代第四紀	11.1	7.5	4.8	477.91	
895	2 Y20 k	Ⅳ層	軽石製	安山岩	奥羽山脈	新生代第四紀	6.75	6.15	2.85	89.19	
896	2 Y23 a	Ⅳ層	軽石製	安山岩	奥羽山脈	新生代第四紀	5.5	3.3	1.4	17.24	
897	2 Y24 y	Ⅳ層	軽石製	安山岩	奥羽山脈	新生代第四紀	5.5	7.7	2.1	57.31	

第14表　石製品観察表

掲載番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	時代	長さ	幅	厚さ	重量	備考
							cm	cm	cm	g	
901	RA005		石棒	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	9.45	3.7	1.9	113.51	
902	RA007	Ⅳ層	石刀	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	(14.8)	3.1	1.3	97.06	
903	RA010　Q 5	2層	石棒	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	13.1	5.0	2.2	285.97	
904	RA010　Q 3	埋土下位	石棒	デイサイト	奥羽山脈	新生代新第三紀	16.2	5.7	3.6	551.98	
905	RA010　西壁際土	埋土中	石棒	砂岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	14.1	3.6	2.75	215.04	
906	RA010　Q 7	埋土下位	石棒	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	43.6	12.6	8.5	8400.00	
907	RA010　Q 4	埋土中位	石棒	蛇紋岩	北上山地（長野峠付近？）	古生代オルドビス紀	37.6	6.1	6.9	3500.00	
908	RA010　北西コーナー	埋土中	石棒	砂岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	7.4	2.0	1.5	33.23	
909	RA010　Q 6	埋土中位	石剣	粘板岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	8.95	2.5	0.7	20.26	
910	RA010　西壁際土	埋土中	石剣	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	11.1	3.1	0.9	42.71	

掲載番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	時代	長さ	幅	厚さ	重量	備考
							cm	cm	cm	g	
911	RA010　Q2	1～2層	石刀	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	11.8	4.4	1.1	62.63	
912	RA010　西壁際土	埋土中	不明	凝灰岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	5.6	3.0	1.35	12.80	
913	RA012　Q4	2層	石棒	砂岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	15.9	4.4	3.3	375.14	
914	RA014	Ⅳ層　風倒木	石刀	粘板岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	(11.3)	3.4	1.35	66.78	
915	RA015	Ⅳ層	軽石石製品	安山岩	奥羽山脈	新生代第四紀	(4.2)	5.8	2.0	42.41	
916	RA017	埋土中	石刀	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	17.8	6.2	3.0	457.83	
917	RD163	埋土中	石棒	デイサイト	奥羽山脈	新生代新第三紀	14.9	4.3	2.9	318.37	
918	RH035		石棒	粘板岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	15.4	3.0	1.0	58.87	
919	RH036		石棒	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	11.3	3.2	1.9	81.05	
920	RH037		円盤状石製品	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	4.0	3.8	0.6	13.60	
921	RH037		石棒	砂岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	11.9	4.2	2.7	194.03	
922	RH038		石棒	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	9.5	3.3	1.4	75.10	
923	RH038	Ⅳ層	石刀	粘板岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	(10.0)	4.5	1.1	67.82	
924	RH039		石棒	デイサイト	奥羽山脈	新生代新第三紀	(13.7)	5.4	4.9	536.96	
925	RH040		石棒	デイサイト	奥羽山脈	新生代新第三紀	(9.7)	5.0	3.0	267.18	
926	RH042		板状石製品	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	11.3	5.9	1.15	92.48	
927	RH047		石棒	デイサイト	奥羽山脈	新生代新第三紀	26.65	10.6	8.05	3550.00	
928	RH047		石棒	デイサイト	奥羽山脈	新生代新第三紀	8.7	3.65	2.7	138.11	
929	RH047		石棒	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	15.6	4.7	3.7	352.71	
930	RH047		板状石製品	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	12.1	6.1	1.2	120.94	
931	RX001	埋土下位	有孔石製品	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	2.7	2.0	0.8	4.50	
932	RX003　Q6	埋土中（風倒木）	石刀	粘板岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	5.8	2.8	0.45	9.79	
933	RX004	埋土中	石刀	粘板岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	(4.05)	1.6	0.45	3.80	
934	PP107	埋土中	石刀	砂岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	9.5	3.6	1.3	70.29	
935	PP155		石棒	砂岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	(7.2)	2.7	1.7	53.81	
936	中央部捨て場4W11x～11y	Ⅲ～Ⅳ層	石棒	粘板岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	(10.05)	2.75	1.3	59.02	
937	中央部捨て場4W11x～11y	Ⅲ～Ⅳ層	石棒	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	(14.2)	3.6	3.65	138.44	
938	4W23h～23i	Ⅲ～Ⅳ層	石棒	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	(11.2)	6.15	3.9	413.45	
939	5V7y	Ⅳ層　風倒木	石棒	砂岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	(9.7)	5.2	2.8	231.20	
940	3Y13d	Ⅳ層下位	石棒	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	(18.2)	3.8	2.4	211.96	
941	2Y13x	Ⅳ層	石棒	安山岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	(8.1)	6.2	1.6	144.52	
942	2Y13y	Ⅳ層	石棒	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	8.4	3.2	2.9	95.23	
943	2Y15g	Ⅳ層	石棒	砂岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	7.2	4.2	3.1	115.91	
944	2Y15i	Ⅳ層	石棒	粘板岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	(9.2)	2.7	2.2	93.74	
945	2Y15x	Ⅳ層	石棒	砂岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	6.3	2.15	1.5	33.54	
946	2Y19k	Ⅳ層	石棒	はんれい岩	北上山地	中生代白亜紀	(8.9)	3.7	2.7	133.20	
947	2Y19k	Ⅳ層下位	石棒	粘板岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	7.5	2.8	0.9	24.86	
948	2Y19s	Ⅳ層	石棒	はんれい岩	北上山地	中生代白亜紀	9.4	3.05	1.5	66.91	
949	2Y21f	Ⅳ層	石棒	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	12.1	3.1	2.4	153.05	
950	2Y23j	Ⅳ層	石棒	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	6.7	1.5	0.8	12.22	
951	3Y8r	Ⅳ層	石棒	粘板岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	(12.2)	4.6	3.0	261.13	
952	3Y9e	Ⅳ層	石棒	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	(18.1)	5.4	3.4	467.97	
953	2A13a	Ⅳ層	石棒	デイサイト	奥羽山脈	新生代新第三紀	23.5	8.9	7.4	2285.23	
954	2A16d	Ⅳ層	石棒	砂岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	(9.3)	3.3	2.0	96.67	
955	2A18d	Ⅳ層	石棒	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	(9.4)	3.1	1.8	70.70	
956	2Y18i	Ⅳ層	石剣	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	17.0	6.7	2.1	329.55	
957	5X9l～9h	Ⅲ層	石刀	デイサイト	奥羽山脈	新生代新第三紀	12.3	4.6	1.7	159.66	
958	5X8j	Ⅳ層中位	石刀	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	(20.8)	3.1	1.2	117.72	
959	5X10i	Ⅳ層	石刀	粘板岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	8.15	2.6	0.5	12.62	
960	2Y13v	Ⅳ層	石刀	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	(4.8)	3.7	1.3	37.88	
961	2Y21h	Ⅳ層	石刀	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	14.1	2.2	1.2	74.17	
962	2Y22s	Ⅳ層	石刀	粘板岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	(6.7)	4.8	1.0	42.81	
963	2A18d	Ⅳ層	石刀	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	(6.4)	4.7	1.3	49.21	
964	5X8j	Ⅴ層	円盤状石製品	安山岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	10.9	9.6	1.6	211.57	

掲載番号	出土地点	層位	器種	石質	産地	時代	長さ	幅	厚さ	重量	備考
							cm	cm	cm	g	
965	3X11y	Ⅳ層	円盤状石製品	砂岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	5.6	5.6	1.1	64.04	
966	3X12x	Ⅲ層	円盤状石製品	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	5.1	5.7	1.6	71.24	
967	2Y16f	Ⅳ層	円盤状石製品	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	5.4	5.1	1.4	57.76	
968	2Y16y	Ⅳ層	円盤状石製品	頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	4.65	4.7	0.9	34.76	
969	2Y16y	Ⅳ層	円盤状石製品	砂岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	4.1	3.5	0.9	19.71	
970	2Y17h	Ⅳ層	円盤状石製品	砂岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	4.75	4.9	0.8	39.89	
971	2Y19o	Ⅳ層	円盤状石製品	輝緑凝灰岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	6.1	5.5	1.2	58.30	
972	2Y21h	Ⅳ層	円盤状石製品	砂岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	4.8	5.0	0.9	30.06	
973	3Y4j	Ⅳ層	円盤状石製品	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	6.4	6.55	1.2	70.63	
974	2A18d	Ⅳ層	円盤状石製品	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	5.2	4.7	1.0	32.25	
975	2Y15g	Ⅳ層	板状石製品	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	10.6	5.1	1.1	105.36	
976	2Y23a	風倒木	板状石製品	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	(9.1)	4.3	1.2	74.06	
977	2Y23j	Ⅳ層	板状石製品	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	(6.6)	(5.5)	1.1	64.99	
978	2Y23j	Ⅳ層	板状石製品	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	11.3	6.3	1.2	172.35	
979	3Y4w	Ⅳ層	板状石製品	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	17.4	8.0	1.5	358.18	
980	2Y14u	Ⅳ層	有孔石製品	赤色頁岩	北上山地	古生代～中生代ジュラ紀	2.1	2.1	0.5	3.28	
981	3Y2i	Ⅳ層	有孔石製品	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	3.9	3.05	1.0	13.16	
982	2Y8r	Ⅳ層下位	不明	安山岩	奥羽山脈	新生代第四紀	8.1	3.6	2.9	49.31	
983	2Y24h	Ⅳ層	不明	デイサイト	奥羽山脈	新生代新第三紀	5.1	5.8	0.9	33.95	

第15表　土師器・須恵器観察表

掲載番号	出土地点	層位	器種	部位	時期	内面	備考
1001	2A20e	Ⅳ層	須恵器甕	胴部	平安9世紀代		
1002	3X14r	Ⅳ層	土師器甕	胴下半～底部	平安	ハケメ	底径は復元値で6.0cm
1003	2Y21x	Ⅳ層	土師器高坏	底部	平安		底径は復元値で8.2cm

第16表　陶磁器観察表

掲載番号	出土地点	層位	器種	産地	時代	備考
1011	RH047	集石を構成する	石鉢	不明	中世	4片が接合
1012	198号柱穴状土坑	埋土中	皿	瀬戸・美濃	17世紀前半登Ⅰ	1650年よりは古い
1013	281号柱穴状土坑	埋土	皿	瀬戸・美濃	17世紀前半登Ⅰ	1650年よりは古い
1014	5X5k	Ⅳ層	腰さびの碗	大堀相馬	18世紀代	
1015	2X24n	Ⅳ層	碗	肥前	18世紀代	梵字文様
1016	2Y13y	Ⅳ層	小鉢	不明	19世紀？	
1017	2Y18k	Ⅳ層	碗	不明	19世紀？	
1018	2Y20q	柱穴検出面	皿	瀬戸・美濃	17世紀前半登Ⅰ	1650年よりは古い
1019	2A14b	Ⅳ層	碗	不明	不明	
1020	2A17d	Ⅳ層	すり鉢	不明	中世？	

第17表　金属製品観察表

掲載番号	出土地点	層位	種別	器種	長径(cm)	短径(cm)	穿孔部(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
1021	RD133	埋土中位	銅製	元豊通寶	2.30	2.30	0.65		1.34	「げんぽうつうほう」北宋銭1078年
1022	RD133	埋土中位	銅製	熙寧元寶	2.35	2.35	0.70		2.35	「きねいげんぽう」北宋銭1068年
1023	RD162	埋土下位	銅製	嘉祐通寶	2.45	2.50	0.75		1.58	「かゆうつうほう」北宋銭1056年
1024	RD162	埋土下位	銅製	聖宋元寶	2.35	2.35	0.70		2.08	「せいそうげんぽう」北宋銭1101年
1025	RD162	埋土下位	銅製	元豊通寶	2.35	2.45	0.70		1.10	「げんぽうつうほう」北宋銭1078年
1026	RE003　Q4	埋土下位	銅製	洪武通寶	2.25	2.20	0.65		2.39	「こうぶつうほう」明1368年
1027	115号柱穴状土坑	埋土中	鉄製	不明	3.10	1.35			5.12	棒状
1028	281号柱穴状土坑	埋土	銅製	永樂通寶	2.55	2.50	0.65		1.87	「えいらくつうほう」明1408年
1029	5W4e	撹乱	銅製	永樂通寶	2.45	2.45	0.65		2.72	「えいらくつうほう」明1408年
1030	5X9o～15h	Ⅰ層	銅製	古銭？	0.75	0.80			1.46	小破片
1031	2Y10r	中近世面	銅製	古銭	2.40	2.40	0.70		1.43	

掲載番号	出土地点	層位	種別	器種	長径(cm)	短径(cm)	穿孔部(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
1032	2Y10r	中近世面	銅製	古銭	2.45	2.45	0.70		2.20	
1033	2Y10r	中近世面	銅製	古銭	2.35	2.40	0.70		1.86	
1034	2Y16e	Ⅰ層	鉄製	不明	2.75	0.85			0.93	煙管？
1035	2A12a	Ⅰ層	鉄製	不明	3.00	0.80		0.50	1.86	釘？
1036	2A14b	Ⅳ層	鉄製	不明	3.50	3.65		0.50	6.16	半円状
1037	2A14b	Ⅳ層	鉄製	不明					0.42	貫通孔あり
1038	3X9t	Ⅲ～Ⅳ層	鉄製	刀子	5.80	1.15			8.16	
1039	3X12y	Ⅳ層	銅製	永樂通寶	2.50	2.50	0.60		3.74	

第18表　年代測定試料観察表

サンプル名	土器掲載番号	仮No	出土地点	旧遺構名	層位	器種	部位	時期	型式	yrBP	備考
C1	11	138	RA006	12号住	埋土中	深鉢	胴～底部	前期後葉		4977±42	内面底部付近スス
C2	77	94	RA012　Q1	2号住　Q1	壁際土	深鉢	胴部	中期後葉	大木9	4375±35	内面スス
C3	90	540	RA013　炉	14号住　炉	炉内埋土（埋め戻し土）	深鉢	胴部	中期後葉	大木9	4102±38	内面スス
旧C4	101	379	RA017　炉	1号住　炉	炉内埋設土器1	深鉢	胴部	中期末葉	大木10		内面胴下半スス、炭素不足により測定不可能
C4	102	380	RA017　炉	1号住　炉	炉内埋設土器2	深鉢	口縁部	中期末葉	大木10	3973±36	内面スス
C5	172	171	RX001　Q1	1号土取り穴　Q1	1層	深鉢	胴部	中期末葉	大木10	4142±39	内面スス
C6	186	209	RX002	2号土取り穴	埋土中	深鉢		中期末葉	大木10	4584±42	内面スス
C7	243	389	中央部捨て場	4W8xグリッド	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	1／2完形	前期後葉		4888±40	内面口～胴スス
C8	370	1012	2Y10xグリッド	2Y10xグリッド	Ⅳ層	深鉢	口縁部	後期前葉		3761±37	内面スス
C9	318	974	2Y11vグリッド	2Y11vグリッド	Ⅳ層	深鉢	口縁部	中期後葉	大木9	4407±39	内面スス
C10	463	1015	2Y23xグリッド	2Y23xグリッド	Ⅳ層	壺？	口縁部	晩期初頭	大洞B	2989±39	内面スス
C11	475	819	2Y24jグリッド	2Y24jグリッド	Ⅳ層	鉢	口～胴部	晩期前葉	大洞BC	2948±37	内面スス
C12	473	606	3Y3u～3vグリッド	3Y3u～3vグリッド	Ⅳ層	鉢	口～胴部上半	晩期前葉	大洞BC	2972±37	内面スス
C13	なし		RA010　Q1	6号住　Q1	床面直上	炭化材		中期末葉		4103±36	
C14	なし		RA010　Q2	6号住　Q2	床面直上	炭化材		中期末葉		4145±34	

Ⅵ　自然科学分析

1　川目Ａ遺跡第６次調査出土琥珀の自然科学分析・・・（財）元興寺文化財研究所

2　川目Ａ遺跡第６次調査出土火山灰分析鑑定・・・（株）火山灰考古学研究所

3　放射性炭素年代測定結果・・・（株）加速器分析研究所

4　川目Ａ遺跡出土黒曜石の成分分析・・・（株）パリノ・サーヴェイ

5　川目Ａ遺跡第６次調査区出土縄文土器および粘土の胎土分析・・・（株）パリノ・サーヴェイ

6　分析に関する調査担当者の所見（コメント）

1　川目Ａ遺跡第６次調査出土琥珀の自然科学分析

（財）元興寺文化財研究所

1　資　　料

琥珀は盛岡市の東部、北上川の支流である簗川と国道106号線に沿う細長い集落で、簗川左岸の河岸段丘に位置する川目Ａ遺跡の竪穴住居跡や土坑から出土した。そのうちの１点は中期末葉大木10式期と特定できる。他の２点は縄文時代の遺構であるが時期が特定できない。詳細を表１に示す。琥珀は３点ともばらばらの状態で遺物を詳細に観察した結果、かなり劣化が激しいことが実見できた。

表１．分析試料の特徴

No.	出土地点	旧出土地点名	備考
琥珀１	RA009	15号住	縄文時代の竪穴住居出土
琥珀２	RA010	６号住　Ｑ４	縄文時代中期末葉竪穴住居跡出土
琥珀３	RD146	43号土坑	縄文時代の土坑出土

2　目　　的

川目Ａ遺跡出土琥珀玉破片が、琥珀であるかどうかの確認と、得られた結果を標準資料のデータと比較することにより産地同定を行う。

3　使用機器および原理

測定はフーリエ変換型赤外分光光度計（以後ＦＴ－ＩＲとする）（SENSIR TECNOLOGIES）を使用した。ＦＴ－ＩＲによる分析は、試料に赤外線を照射し、その結果得られる分子の構造に応じた固有の周波数の吸収を解析し、化合物の種類を同定することができる。主に有機物の構造を解析する手段として用いられることが多く、琥珀を形成する樹脂の種類すなわち植物の種類によって分子構造が異なると考えられるため産地によってスペクトルに差が生じ、それを利用して産地同定に応用されてきた[1)2)3)]。また、同時に熱分析（以後ＤＴＡ・ＴＧＡとする）による比較も行った。装置は㈱島津製作所製　ＤＴＧ－60を使用した。ＤＴＡ・ＴＧＡ分析は試料に熱を加え、得られる質量変化から蒸発・気化温度、酸化・熱分解などの化学変化を知ることができる熱重量測定（ＴＧＡ）と、試料の融解などの状態の変化や化学反応の温度を知ることができる示差熱分析（ＤＴＡ）があり、これらから試料の熱に対する挙動を調べることができる。熱分析とＦＴ－ＩＲ分析による分析結果と併用することでさらに精度の高い分析が行なえる。

4　分析方法および条件

分析試料は、遺物の比較的劣化していない破片から採取した。採取した試料はＦＴ－ＩＲによる分析を行なった。分析はそのままの状態の試料を分解能４㎝－１、反射測定で行なった。さらに同じ試

料を用いて熱分析を実施した。分析は１～２mgの試料を白金セルに入れ、毎分100ｍｌの空気を流しながら毎分５℃上昇させた。

5　結果および考察

ＦＴ－ＩＲによる分析は劣化していない部分の赤外吸収スペクトルが得られればその産地同定は可能である。しかし、劣化が激しいと、全体的にピークはブロードになり特徴的な吸収が消失し、新たに異なった位置にピークが表れることがある。そのためできるだけ堅くてより健全な部分を選んでＦＴ－ＩＲによる分析を行った。しかし、今回の分析試料はいずれも劣化が激しく、特徴的なピークがブロードになり産地同定を実施することが困難な状況であった。

まず、3500～2800、1710、1500～800　cm－１付近の吸収から、３点ともそのスペクトルの位置・強度が類似しており、琥珀であることが確認できた（図１－１～１－３）。次に、1800～800cm－１付近の吸収位置および強度を基に、産地の判明している標準となる琥珀から得られたスペクトルと比較し、産地同定を試みた（図２－１～３）。その結果、1100～950cm－１の吸収位置および強度が久慈市産およびいわき市産に比較的近い吸収位置と強度を示した（図２－１、２－２）。しかし、劣化が激しいため断定はできなかった。なお、この２産地は琥珀の生成年代がほぼ同じであり、由来する植物も同じである可能性が高いため、そのスペクトルは非常に近似したものになる。そのため、現時点ではこの２産地に関しては区別することができない。

琥珀の産地は国内でも、少量産出地も含めると10ヶ所以上もある。また国外でも各地で産出する。そのなかで、主産地についてのＦＴ－ＩＲ分析はすでに報告されている[1)2)3)]。しかし、出土琥珀は劣化状態が様々でそれによって吸収位置や強度が変化することがある。そのため、劣化が進行したものはそのスペクトルが変化し産地同定が不可能になる場合がある。今回の試料は1700および1100～950　cm－１付近の吸収強度が強く劣化が進んでいることがわかった。そのため、標準琥珀との比較から久慈市およびいわき市の可能性が高いと思われたが断定することはできなかった。縄文時代出土琥珀は劣化の進行しているものが多く赤外吸収スペクトルのみでは同定が難しいものも多い。そこで、熱分析による比較を行った（図３）。その結果№１と№２はほぼ同じ結果が得られたが№３は強度とピーク位置が少し異なった。この結果は産地が異なるためかあるいは劣化の状態が異なるためかはこの結果からでは判断できなかった。さらに標準試料（図４）と比較した結果、出土資料はいわき市および久慈市産琥珀と比較的類似した結果が得られた。

以上、久慈市およびいわき市の可能性が高いという分析結果は地理的な考察も含めると、その可能性は高くなると考える。今後、さらに同時代の出土資料や標準試料を収集し、それらを比較することで、さらに同定の精度を上げることが必要であると考える。

参考文献

1）室賀照子、赤外吸収スペクトルによる琥珀の産地分析、考古学と自然科学、第９号、59、(1976)
2）植田直見、銚子産琥珀の赤外分光分析、こはく、第４号、15（2002）
3）植田直見、いわき地方産琥珀の科学分析、こはく、第５号、13（2004）

（文責：植田直見）

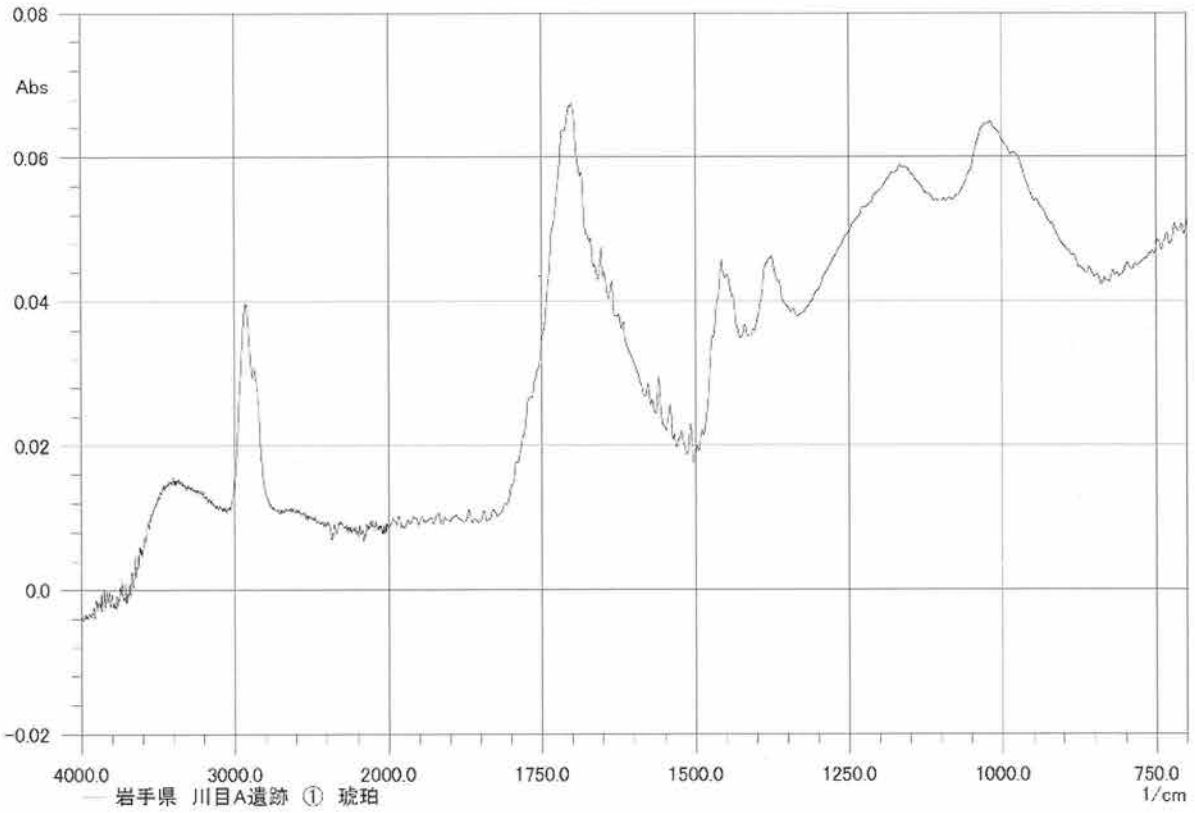


図１－１．川目Ａ遺跡出土琥珀（No.１）の赤外吸収スペクトル

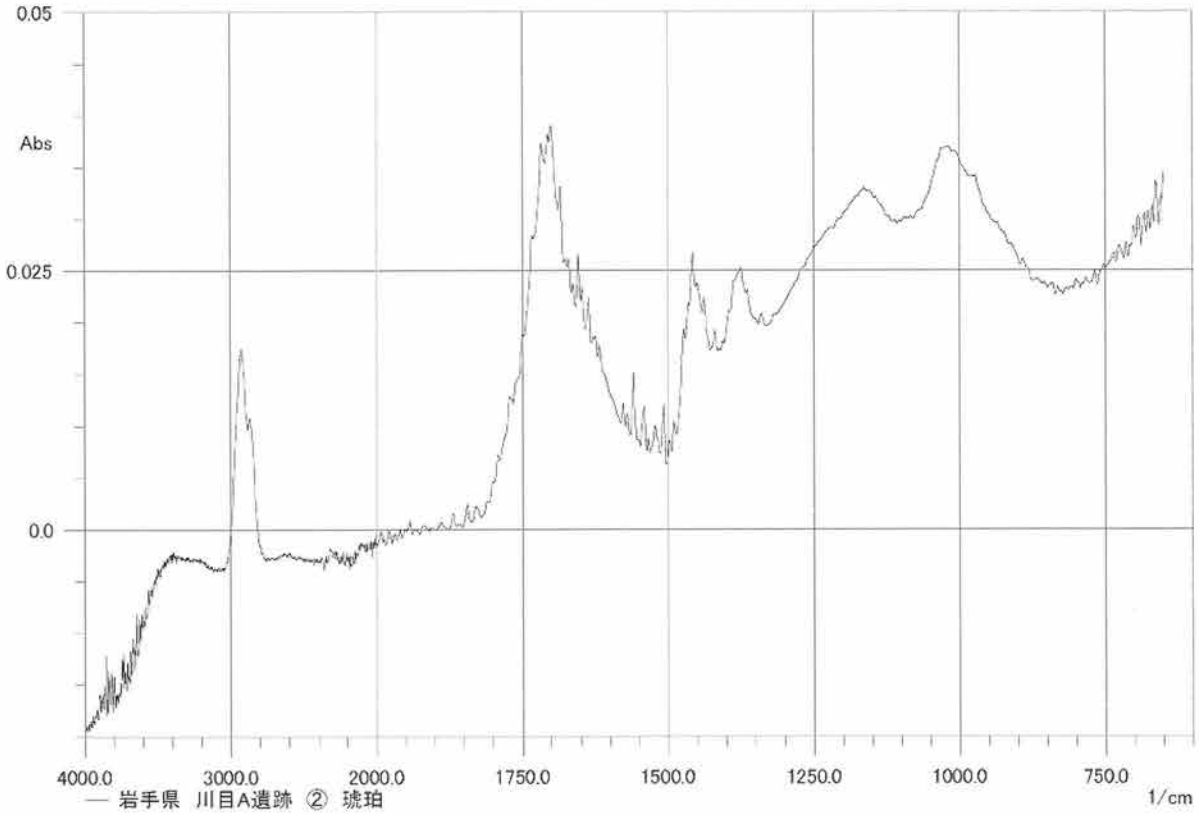


図１－２．川目Ａ遺跡出土琥珀（No.２）の赤外吸収スペクトル

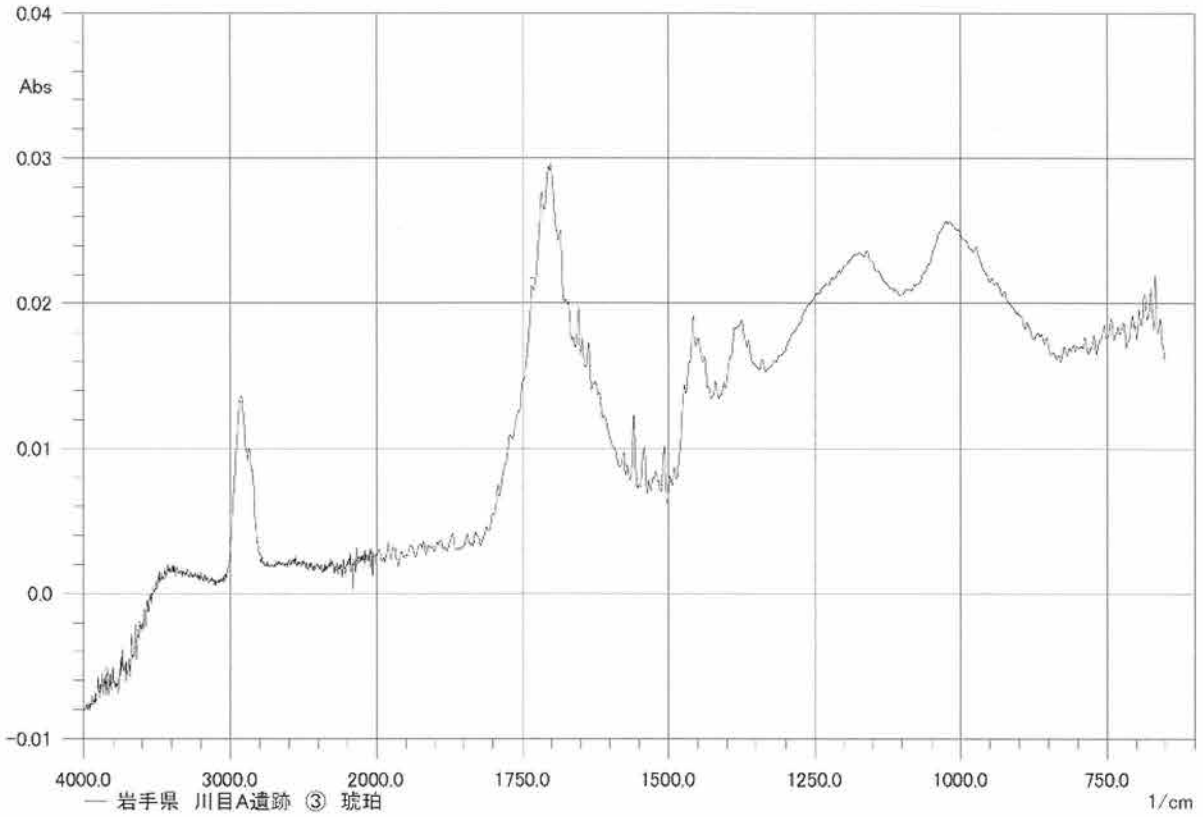


図１－３．川目Ａ遺跡出土琥珀（No.３）の赤外吸収スペクトル

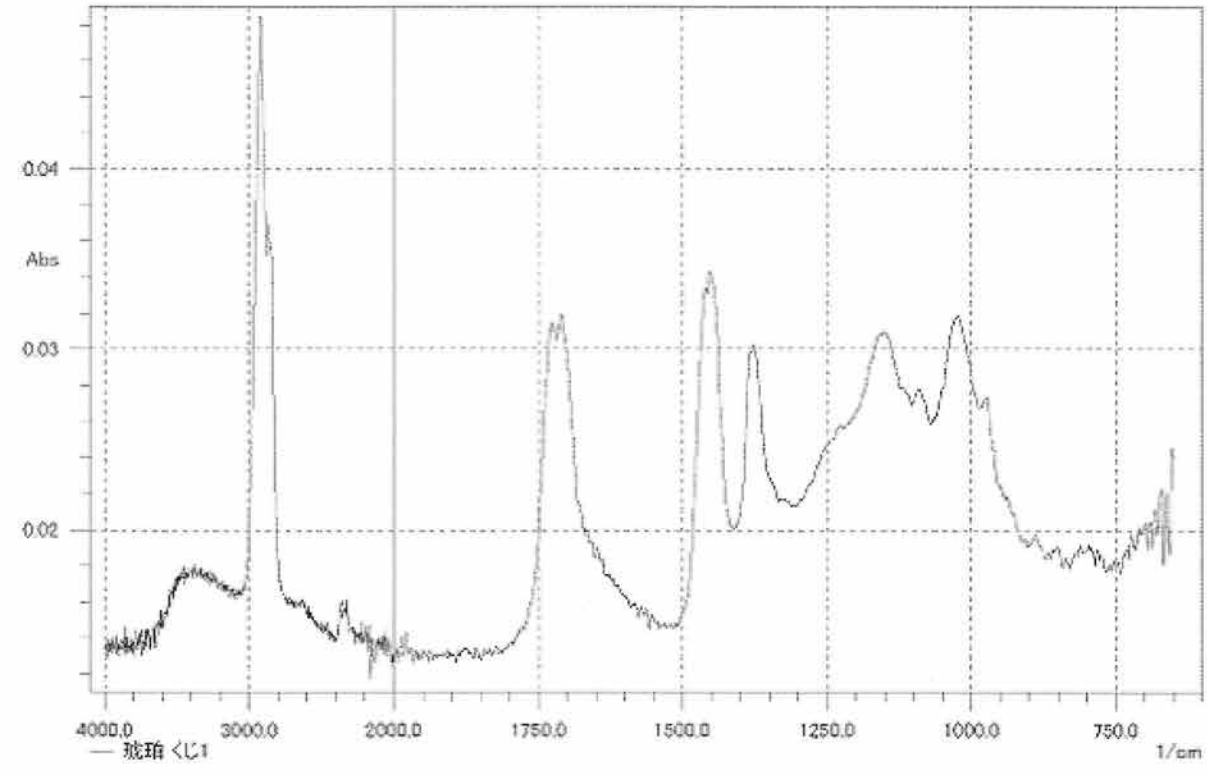


図２－１．日本の主産地から産出した琥珀の赤外吸収スペクトル（久慈市）

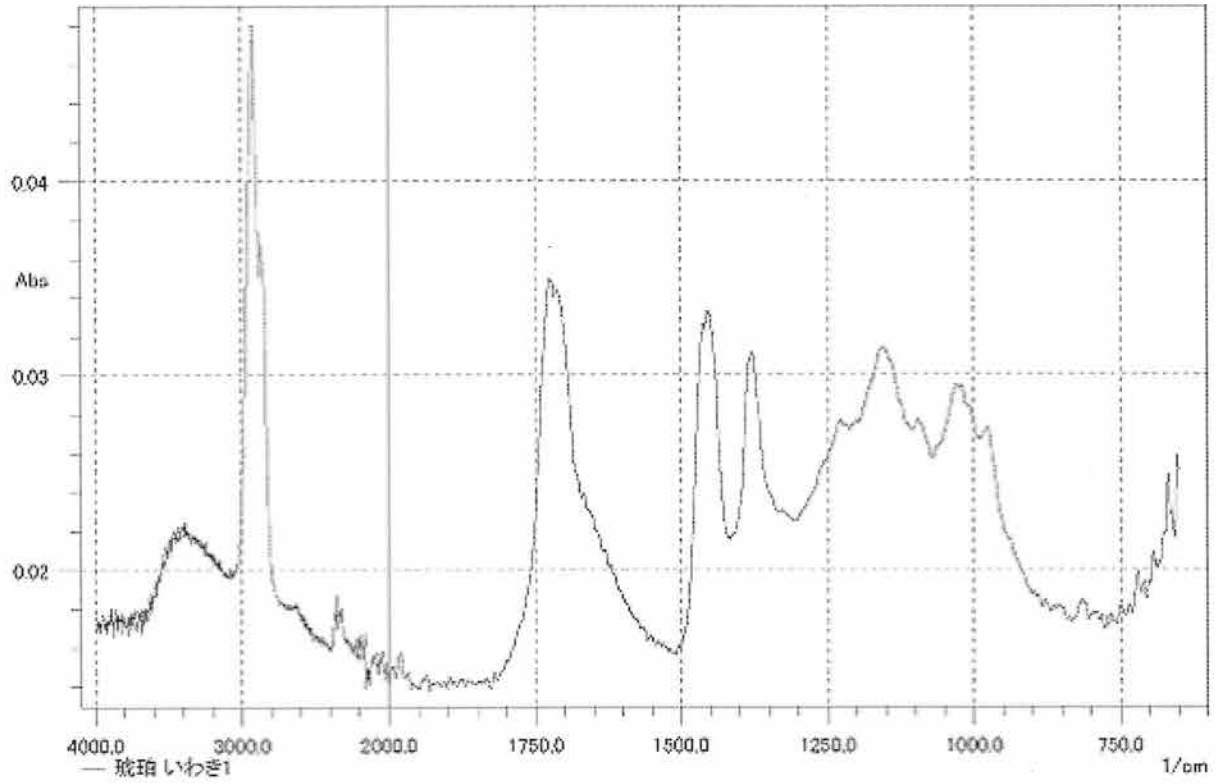


図２－２．日本の主産地から産出した琥珀の赤外吸収スペクトル（いわき市）

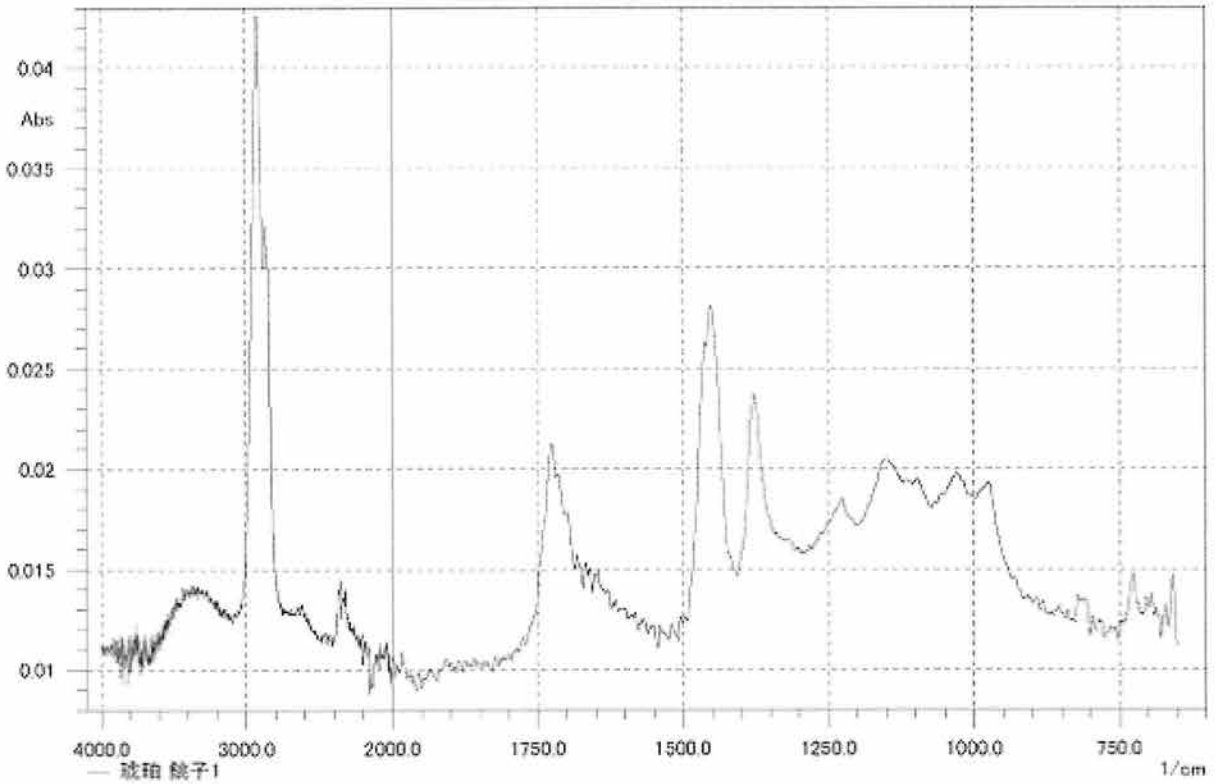


図２－３．日本の主産地から産出した琥珀の赤外吸収スペクトル（銚子市）

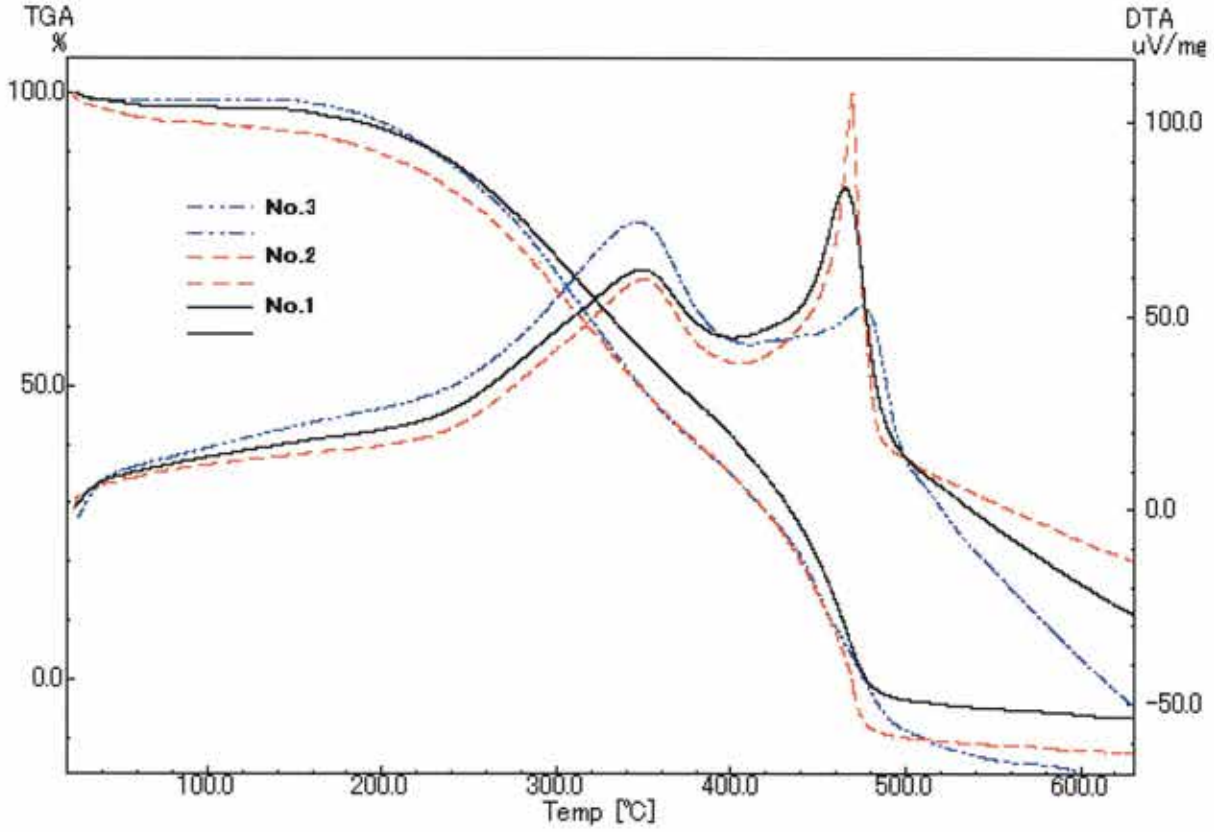


図３．川目Ａ遺跡出土琥珀の熱分析

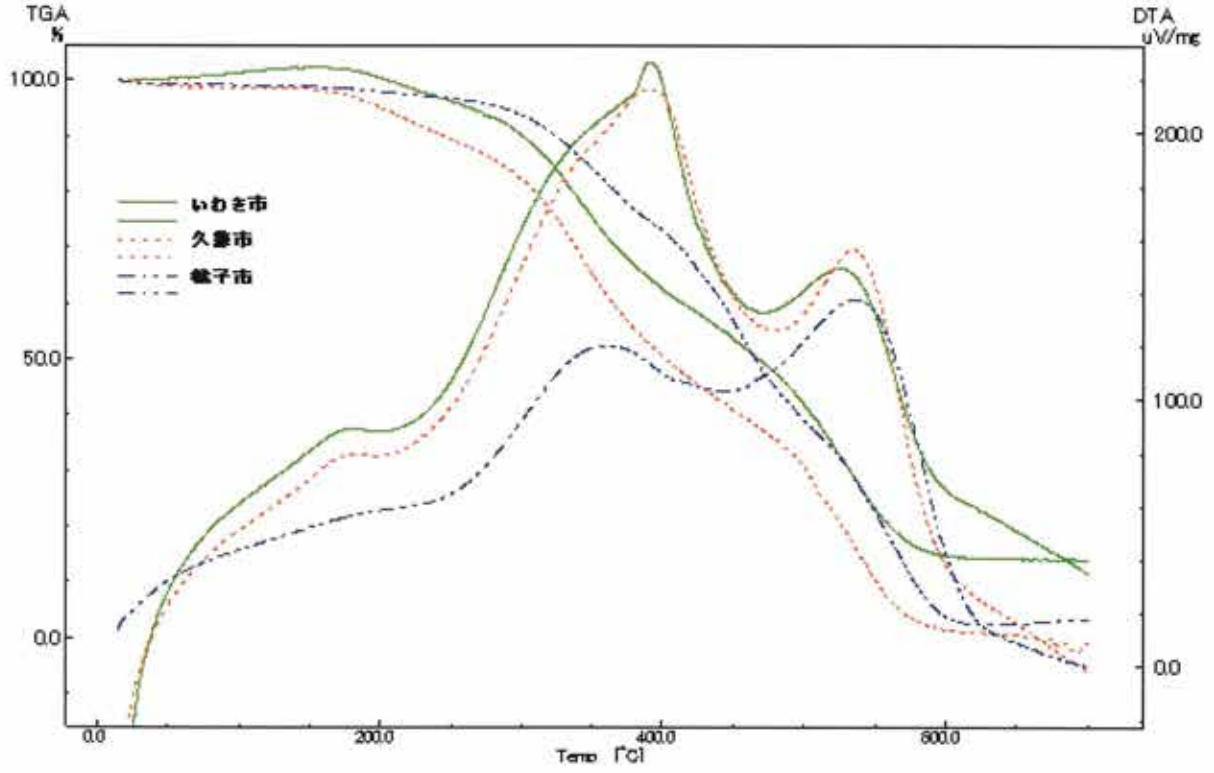


図４．日本の主産地から産出した琥珀の熱分析

2　川目Ａ遺跡第６次調査出土火山灰分析鑑定

株式会社　　火山灰考古学研究所

１　は　じ　め　に

岩手県盛岡市周辺には、近辺に位置する岩手、秋田駒ヶ岳、十和田のほか、洞爺、阿蘇、姶良など北海道や九州など遠方の火山に由来するテフラ（火山さいせつぶつ砕屑物，いわゆる火山灰）が数多く認められる。テフラの中には、すでに噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、発掘調査の際にテフラの可能性が高い土層が認められた盛岡市川目Ａ遺跡においても、発掘調査担当者により採取された５試料（表１）を対象に、テフラ組成分析と鉱物の屈折率測定を実施して、指標テフラとの同定を行った。

２　テフラ組成分析

（１）分析方法

５試料について、テフラ検出分析によりテフラ粒子の定性的な特徴を明らかにしたあと、火山ガラス比分析と重鉱物組成分析を合わせたテフラ組成分析により火山ガラスの色調形態別比率や重鉱物組成上の特徴を把握した。分析の手順は次のとおりである。

１）砂分が多い試料４と試料５についてはそれぞれ７ｇと10ｇ、それ以外の試料については15ｇずつ秤量。
２）超音波洗浄により泥分を除去。
３）80℃で恒温乾燥。
４）実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察（テフラ検出分析）。
５）分析篩により１／４～１／８㎜および１／８～１／16㎜の粒子を篩別。
６）偏光顕微鏡下で１／４～１／８㎜サイズ250粒子を観察し、火山ガラスの色調・形態別比率を求める（火山ガラス比分析）。ここで対象とした火山ガラスは、半透明～透明のものである。
７）偏光顕微鏡下で１／４～１／８㎜サイズの重鉱物250粒子を観察し、重鉱物組成を明らかにする（重鉱物組成分析。透過光下で黒色で光沢をもつ不透明鉱物を、ここでは磁鉄鉱と総称する。

（２）分析結果

テフラ検出分析、火山ガラス比分析、重鉱物組成分析の結果を、それぞれ表２～表４に示す。さらに、火山ガラス比分析および重鉱物組成分析の結果については、ダイヤグラムにして図１に示す。以下に各試料の特徴を記載する。

火山灰１：非火山性の亜円礫や亜角礫を多く含む（最大径9.3㎜）。また、細粒のスコリア質火山ガラスを少量含むほか、ごくわずかに透明～半透明の火山ガラスも含んでいる。スコリア質火山ガラスの

色調は、暗灰色、灰色、赤色である。透明～半透明の火山ガラスは、１／４～１／８㎜サイズで2.8％含まれている。それらは、分厚い中間型、スポンジ状に発泡した軽石型、繊維束状に発泡した軽石型（各0.8％）、透明のバブル型（0.4％）である。重鉱物としては、斜方輝石（53.6％）、単斜輝石（20.8％）、磁鉄鉱（20.0％）のほか、カンラン石（1.2％）が認められる。

火山灰２：非火山性の亜角礫（最大径11.7㎜）が比較的多く含まれる。また、細粒のスコリア質火山ガラスが比較的多いほか、ごくわずかに透明～半透明の火山ガラスも含まれている。スコリア質火山ガラスの色調は、黒灰色、暗灰色、灰色、赤色である。透明～半透明の火山ガラスは、１／４～１／８㎜サイズで2.0％含まれている。それらは、スポンジ状に発泡した軽石型（1.6％）や、繊維束状に発泡した軽石型（0.4％）である。重鉱物としては、斜方輝石（54.4％）、単斜輝石（26.4％）、磁鉄鉱（14.8％）のほか、カンラン石（1.2％）が認められる。

火山灰３：非火山性の亜角礫や角礫が多く含まれている（最大径14.7㎜）。また、細粒のスコリア質火山ガラスが比較的多く含まれているほか、ごくわずかに透明～半透明の火山ガラスも含んでいる。スコリア質火山ガラスの色調は、黒灰色、暗灰色、灰色、赤色である。透明～半透明の火山ガラスは１／４～１／８㎜サイズで1.2％含まれている。それらは、スポンジ状に発泡した軽石型（1.2％）である。重鉱物としては、斜方輝石（50.8％）、単斜輝石（24.8％）、磁鉄鉱（17.6％）のほかに、カンラン石（2.0％）が認められる。

火山灰４：非火山性の角礫や亜角礫が少し含まれている（最大径3.6㎜）。細粒のスコリア質火山ガラスが比較的多いほか、透明～半透明の火山ガラスも少量含まれている。スコリア質火山ガラスの色調は、暗灰色や黒灰色である。透明～半透明の火山ガラスは、１／４～１／８㎜サイズで11.2％含まれている。それらは、スポンジ状に発泡した軽石型（5.2％）、繊維束状に発泡した軽石型（4.4％）、透明のバブル型（1.2％）、中間型（0.4％）である。重鉱物としては、斜方輝石（50.4％）、単斜輝石（30.4％）、磁鉄鉱（16.0％）が認められる。

火山灰５：本試料では、非火山性の礫や細粒のスコリア質火山ガラスは認められない。その一方で、火山ガラスの比率が高い傾向にある（27.2％）。含まれる火山ガラスは、スポンジ状に発泡した軽石型（14.8％）、繊維束状に発泡した軽石型（9.6％）、中間型（1.6％）、透明のバブル型（1.2％）である。重鉱物としては、斜方輝石（56.0％）、磁鉄鉱（22.4％）、単斜輝石（20.0％）が多く、またごくわずかに黒雲母も認められる（0.4％）。

3　屈折率測定

（1）測定方法

５試料に含まれる１／４㎜より大きい粒子について、実体顕微鏡下で試料ごとに斜方輝石を手選した後、粉砕し、温度変化型屈折率測定装置（京都フィッション・トラック社製ＲＩＭＳ2000）により、屈折率（γ）の測定を行った。

（２）測　定　結　果

測定結果を表５に示す。火山灰１に含まれる含まれる斜方輝石（23粒子）の屈折率（γ）は、1.703－1.710である。火山灰２に含まれる含まれる斜方輝石（22粒子）の屈折率（γ）は、1.701－1.709である。火山灰３に含まれる含まれる斜方輝石（43粒子）の屈折率（γ）は、1.701－1.707である。火山灰４に含まれる含まれる斜方輝石（40粒子）の屈折率（γ）は、1.700－1.706である。火山灰５に含まれる含まれる斜方輝石（50粒子）の屈折率（γ）は、1.700－1.707である。

４　考　　察

今回採取された試料の顔つき、また実体鏡下で礫の特徴や量、さらに通常では一次テフラ層の中で共存することが非常にまれなスコリアと透明なバブル型ガラスの共存などをみる限り、試料１から試料４にかけては土壌化を受けており、一次堆積のテフラ層から採取されてはいないようである。また、試料５についても、火山ガラスの純度は比較的高いものの、若干土壌化を受けているように思える。火山灰編年学ではテフラの一次堆積層を利用することが基本ではあるが、土壌化を受けていることも多いことから、ここでは含まれるテフラの起源についての考察を進めていく。なお、一次堆積層の認定には、野外での観察が必要なことから、分析者による現地での土層やテフラの堆積状況の確認が望まれる。

火山灰１に含まれるテフラ粒子のうち、スコリア質火山灰については、岩相および斜方輝石の屈折率から岩手火山に由来すると考えられる。また、火山ガラスや斜方輝石の少なくとも一部については、火山ガラスの色調や形態、さらに斜方輝石の屈折率も考慮すると、約5,500年前[*1]に十和田火山から噴出した十和田中掫テフラ（Ｔｏ－Ｃｕ，大池ほか，1966，早川，1983ｂ，福田，1986，町田・新井，1992）に由来すると思われる。Ｔｏ－Ｃｕに層位が近い岩手火山起源のテフラとしては、Ｔｏ－Ｃｕのすぐ上位におもに橙褐色のスコリアからなる巣子スコリアが岩手火山中腹にあるらしく、橙褐色スコリアの斜方輝石の屈折率（γ）も1.706－1.708で（古澤，2003）、今回得られたｒａｎｇｅに入る。

火山灰２や火山灰３に比較的多く含まれるスコリア質火山灰については、岩相から岩手火山に由来すると考えられる。発掘調査時には、縄文時代早期後半から前期初頭に岩手火山から噴出したらしい堀切火山灰の可能性が考えられたようである。しかしながら、今回得られた斜方輝石の屈折率は、堀切火山灰に相当するらしい「堀切軽石（古澤，2003）」のそれ（γ：1.711－1.717）とは異なる。また、少量ずつ含まれている軽石型火山ガラスの起源については不明な点が多い。一部については、斜方輝石の屈折率から約1.2～1.3万年前[*1]に十和田火山から噴出した十和田八戸テフラ（Ｔｏ－Ｈ，早川，1983ａ，Hayakawa，1985，町田・新井，1992）に由来するのかも知れない。ただし、本地域においてＴｏ－Ｈに特徴的な角閃石は認められなかった。

試料４に比較的多く含まれるスコリア質火山灰についても、岩相から岩手火山に由来すると考えられる。また、半透明～透明の火山ガラスの多くについては、その形態から十和田火山起源のように思われる。試料がかなり下位（Ⅶ層上面）から採取されていること、角閃石が認められないことから、発掘調査担当者により起源として可能性が上げられている約3.2万年前以前に十和田火山から噴出した十和田大不動テフラ（中川ほか，1972，町田・新井，1992，2003など）の可能性も考えられよう。ただし、火山ガラスの形態組成がこれから述べる火山灰５に多く含まれているＴｏ－Ｃｕのそれと非常によく似ており、斜方輝石の中に屈折率が低いものが含まれていることも合わせると、試料４が何

らかの攪乱を受けたＴｏ－Ｃｕである可能性を十分に示唆しているようにみえる。また、斜方輝石の屈折率も、巣子スコリアの値（古澤，2004）と重なる。

試料５に多く含まれる火山ガラスなどテフラ粒子は、火山ガラスの色調や形態、比較的低い斜方輝石が含まれていること、さらに915年に十和田火山から噴出した十和田ａテフラ（Ｔｏ－ａ，大池，1972，町田ほか，1981）に多く含まれている中間型ガラスの比率も高くないことなどから、Ｔｏ－Ｃｕに由来する可能性が高いと考えられよう。

岩手火山起源のテフラについても近年特徴記載が行われるようになってきたことから、今後は火山ガラスの屈折率測定なども合わせて実施して、テフラの同定精度をさらに向上させると良い。

５　ま　と　め

盛岡市川目Ａ遺跡において採取された５試料を対象に、テフラ組成分析と屈折率測定を行った。その結果、十和田中掫テフラ（Ｔｏ－Ｃｕ，約5,500年前*1）のほか、岩手火山に由来するテフラ粒子を検出することができた。

＊１　放射性炭素（14Ｃ）年代．Ｔｏ－ＨおよびＴｏ－Ｃｕの暦年較正年代については，順に約1.5万年前と約6,000年前と考えられている（町田・新井，2003）．

参考文献

福田友之　1986　考古学からみた「中掫軽石」の降下年代．弘前大学考古学研究，３，ｐ．４－15.

古澤　明　2003　洞爺火山灰降下以降の岩手単山のテフラの識別．地質学雑誌，109，ｐ．１－19.

早川由紀夫　1983ａ　火山豆石として降下堆積した十和田火山八戸火山灰．火山，28，ｐ．25－40.

早川由紀夫　1983ｂ　十和田火山中掫テフラ層の分布，粒度組成，年代．火山，第２集，28，ｐ．263－273.

Hayakawa, Y.　1985　Pyroclastic geology of Towada volcano. Bull. Earthq. Res. Inst. Univ. Tokyo,　60，ｐ．507－592.

町田　洋・新井房夫　1992　火山灰アトラス．東京大学出版会，276ｐ．

町田　洋・新井房夫　2003　新編火山灰アトラス．東京大学出版会，336ｐ．

中川久夫・中馬教充・石田琢二・松山　力・七崎　修・生出慶司・大池昭二・高橋　一　1972　十和　田火山発達史概要．岩井淳一教授記念論文集，ｐ．７－17.

大池昭二　1972　十和田火山東麓における完新世テフラの編年．第四紀研究，11，ｐ．232－233.

大池昭二・中川久夫・七崎　修・松山　力・米倉伸之　1966　馬淵川中・下流沿岸の段丘と火山灰．第四紀研究，５，ｐ．29－35.

表１　テフラ分析分析試料表

分析試料名	採取地点	採取層位
火山灰１	5X5ｊグリッド	Ⅳａ層
火山灰２	RA003	２層
火山灰３	RA003	３層
火山灰４	Ⅶ層上面	Ⅶ層上面
火山灰５	Ⅳ層	Ⅳ層

表２　テフラ検出分析結果

試料	軽石・スコリア			火山ガラス（スコリアを含む）			礫	
	量	色調	最大径	量	形態	色調	量	最大径
火山灰１	－	－	－	＋	sc	暗灰,灰,赤	＋＋＋	9.3
火山灰２	－	－	－	＋＋	sc	黒灰,暗灰,灰,赤	＋＋	11.7
火山灰３	－	－	－	＋＋	sc>pm	黒灰,暗灰,白,灰,赤	＋＋	14.7
火山灰４	－	－	－	＋＋	sc,pm	暗灰,黒灰,白	＋	3.6
火山灰５	－	－	－	＋＋＋	pm	白	－	－

＋＋＋＋：とくに多い，＋＋＋：多い，＋＋：中程度，＋：少ない，－：認められない．bw：バブル型，pm：軽石型，sc：スコリア型．最大径の単位は，mm．

表３　火山ガラス比分析結果

試料	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	その他	合計
火山灰１	1	0	0	2	2	2	243	250
火山灰２	0	0	0	0	4	1	245	250
火山灰３	0	0	0	0	3	0	247	250
火山灰４	3	0	0	1	13	11	222	250
火山灰５	3	0	0	4	37	24	182	250

数字は粒子数．bw：バブル型，md：中間型，pm：軽石型，cl：透明，pb：淡褐色，br：褐色，sp：スポンジ状，fb：繊維束状．

表４　重鉱物組成分析結果

試料	ol	opx	cpx	am	bi	mt	その他	合計
火山灰１	3	134	52	0	0	50	11	250
火山灰２	3	136	66	0	0	37	8	250
火山灰３	5	127	62	0	0	44	12	250
火山灰４	0	126	76	0	0	40	8	250
火山灰５	0	140	50	0	1	56	3	250

数字は粒子数．ol：カンラン石，opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石，am：角閃石，bi：黒雲母，mt：磁鉄鉱．

表５　斜方輝石の屈折率測定

試料	斜方輝石の屈折率（γ）	測定粒子数
火山灰１	1.703-1.710	23
火山灰２	1.701-1.709	22
火山灰３	1.701-1.707	43
火山灰４	1.700-1.706	40
火山灰５	1.700-1.707	50

屈折率の測定は，温度変化型屈折率測定装置（RIMS2000）による．

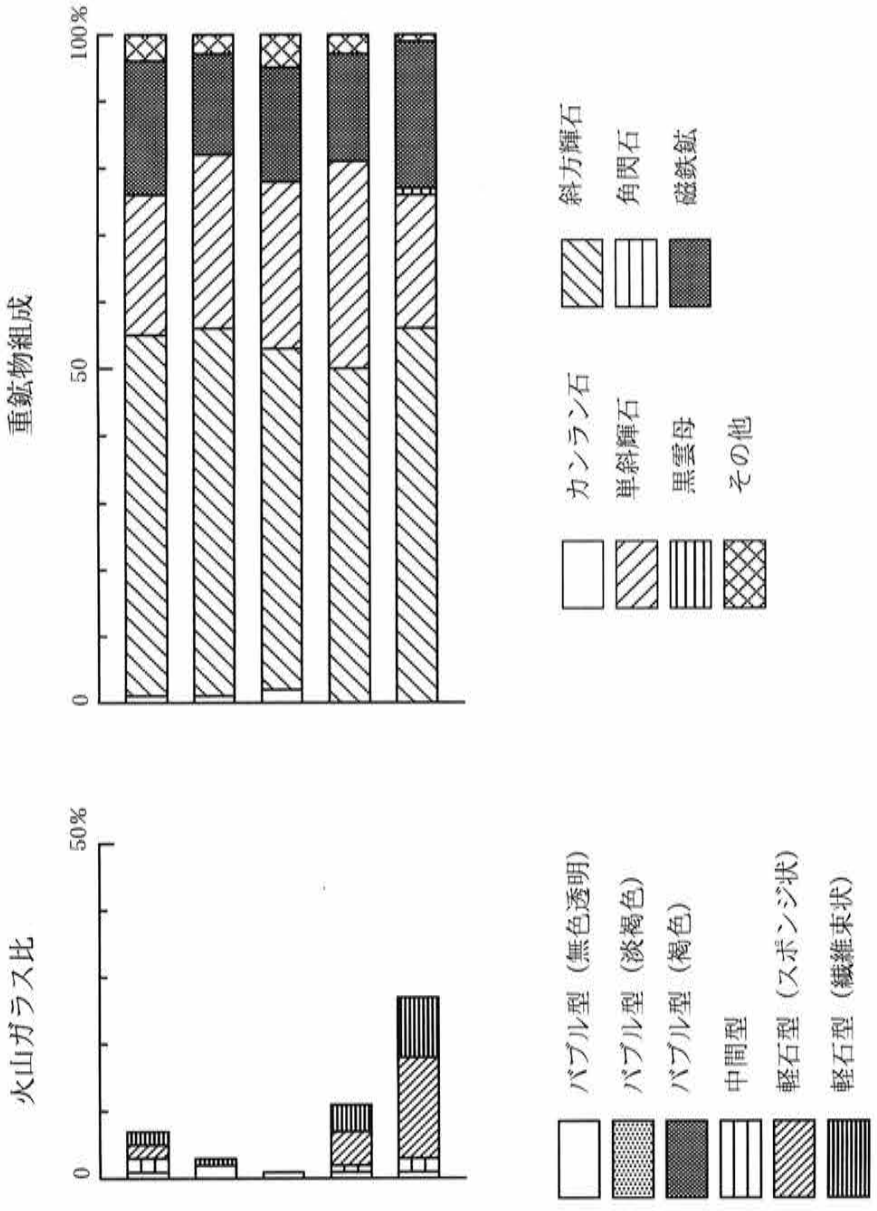


図１　川目Ａ遺跡テフラ試料のテフラ組成ダイヤグラム

3　放射性炭素年代測定結果（ＡＭＳ測定）

（株）加速器分析研究所

（1）測定対象試料

川目Ａ遺跡は、岩手県盛岡市川目地区に所在する。簗川左岸の河岸段丘上に位置する（標高177～205m）。測定対象試料は、ＲＡ006から出土した土器内面付着炭化物（Ｃ１　№11：ＩＡＡＡ－72765）、ＲＡ012のＱ１から出土した土器内面付着炭化物（Ｃ２　№77：ＩＡＡＡ－72766）、ＲＡ013の炉から出土した土器内面付着炭化物（Ｃ３　№90：ＩＡＡＡ－72767）、ＲＡ017の炉から出土した土器内面付着炭化物（Ｃ４　№102：ＩＡＡＡ－72768）、ＲＸ001のＱ１から出土した土器内面付着炭化物（Ｃ５　№172：ＩＡＡＡ－72769）、ＲＸ002から出土した土器内面付着炭化物（Ｃ６　№186：ＩＡＡＡ－72770）、中央部捨て場から出土した土器内面付着炭化物（Ｃ７　№243：ＩＡＡＡ－72771）、２Ｙ10ｘグリッドのⅣ層から出土した土器内面付着炭化物（Ｃ８　№370：ＩＡＡＡ－72772）、２Ｙ11ｖグリッドのⅣ層から出土した土器内面付着炭化物（Ｃ９　№318：ＩＡＡＡ－72773）、２Ｙ23ｘグリッドのⅣ層から出土した土器内面付着炭化物（Ｃ10　№463：ＩＡＡＡ－72774）、２Ｙ24ｊグリッドのⅣ層から出土した土器内面付着炭化物（Ｃ11　№475：ＩＡＡＡ－72775）、３Ｙ３ｕ～３ｖグリッドのⅣ層から出土した土器内面付着炭化物（Ｃ12　№473：ＩＡＡＡ－72776）、ＲＡ010のＱ１から出土した炭化材（Ｃ13：ＩＡＡＡ－72777）、ＲＡ010のＱ２から出土した炭化材（Ｃ14：ＩＡＡＡ－72778）、合計14点である。

（2）化学処理工程

１）メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。

２）ＡＡＡ（Acid Alkali Acid）処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では１Ｎの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001～１Ｎの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では１Ｎの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。

３）試料を酸化銅１ｇと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で２時間加熱する。

４）液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（ＣＯ２）を精製する。

５）精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。

６）グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

（3）測　定　方　法

測定機器は、３ＭＶタンデム加速器をベースとした14Ｃ－ＡＭＳ専用装置（ＮＥＣ　Pelletron ９ＳＤＨ－２）を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局（ＮＩＳＴ）から提供されたシュウ酸（ＨＯｘⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により13Ｃ／12Ｃの測定も同時に行う。

（4）算　出　方　法

１）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。

２）14Ｃ年代（Libby Age：ｙｒＢＰ）は、過去の大気中14Ｃ濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（０ｙｒＢＰ）として遡る年代である。この値は、δ13Ｃによって補正された値である。

３）付記した誤差は、複数回の測定値についてχ２検定が行われ、測定値が１つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値、みなせない場合には標準誤差から求めた値が用いられる。

４）δ13Ｃの値は、通常は質量分析計を用いて測定されるが、ＡＭＳ測定の場合に同時に測定されるδ13Ｃの値を用いることもある。δ13Ｃ補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した。

$$\delta^{14}C = [(^{14}A_S - ^{14}A_R) / ^{14}A_R] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}C = [(^{13}A_S - ^{13}A_{PDB}) / ^{13}A_{PDB}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、　$^{14}A_S$：試料炭素の^{14}Ｃ濃度：$(^{14}C/^{12}C)_S$または$(^{14}C/^{13}C)_S$

$^{14}A_R$：標準現代炭素の^{14}Ｃ濃度：$(^{14}C/^{12}C)_R$または$(^{14}C/^{13}C)_R$

δ13Ｃ　は、質量分析計を用いて試料炭素の^{13}Ｃ濃度（$^{13}A_S = {}^{13}C/{}^{12}C$）を測定し、ＰＤＢ（白亜紀のベレムナイト類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に^{13}Ｃ／^{12}Ｃを測定し、標準試料の測定値との比較から算出したδ13Ｃを用いることもある。この場合には表中に（加速器）と注記する。

５）Δ^{14}Ｃは、試料炭素が$\delta^{13}C = -25.0$（‰）であるとしたときの^{14}Ｃ濃度（$^{14}A_N$）に換算した上で計算した値である。

（１）式の^{14}Ｃ濃度を、δ^{13}Ｃの測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}A_N = {}^{14}A_S \times (0.975/(1+\delta^{13}C/1000))^2$$（$^{14}A_S$として^{14}Ｃ／^{12}Ｃを使用するとき）

または

$$= {}^{14}A_S \times (0.975/(1+\delta^{13}C/1000))$$（$^{14}A_S$として^{14}Ｃ／^{13}Ｃを使用するとき）

$$\Delta^{14}C = [(^{14}A_N - ^{14}A_R) / ^{14}A_R] \times 1000 \text{（‰）}$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしないδ^{14}Ｃに相当するＢＰ年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

６）ｐＭＣ（percent Modern Carbon）は、現代炭素に対する試料炭素の^{14}Ｃ濃度の割合を示す表記であり、Δ^{14}Ｃとの関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}C = (pMC/100 - 1) \times 1000 \text{（‰）}$$

$pMC = \Delta^{14}C / 10 + 100$（%）

国際的な取り決めにより、この$\Delta^{14}C$あるいはpMCにより、^{14}C年代が次のように計算される。

$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}C / 1000) + 1]$

$= -8033 \times \ln (pMC / 100)$

7）^{14}C年代値と誤差は，1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

8）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代の計算では、IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い、OxCalv3.10較正プログラム（Bronk Ransey1995　Bronk Ransey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger2001）を使用した。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差（1σ=68.2%）あるいは2標準偏差（2σ=95.4%）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない^{14}C年代値である。

（5）測　定　結　果

^{14}C年代は、RA006から出土した土器内面付着炭化物（C1：IAAA－72765）が4980±40yrBP、RA012のQ1から出土した土器内面付着炭化物（C2：IAAA－72766）が4380±40yrBP、RA013の炉から出土した土器内面付着炭化物（C3：IAAA－72767）が4100±40yrBP、RA017の炉から出土した土器内面付着炭化物（C4：IAAA－72768）が3970±40yrBP、RX001のQ1から出土した土器内面付着炭化物（C5：IAAA－72769）が4140±40yrBP、RX002から出土した土器内面付着炭化物（C6：IAAA－72770）が4580±40yrBP、中央部捨て場から出土した土器内面付着炭化物（C7：IAAA－72771）が4890±40yrBP、2Y10xグリッドのⅣ層から出土した土器内面付着炭化物（C8：IAAA－72772）が3760±40yrBP、2Y11vグリッドのⅣ層から出土した土器内面付着炭化物（C9：IAAA－72773）が4410±40yrBP、2Y23xグリッドのⅣ層から出土した土器内面付着炭化物（C10：IAAA－72774）が2990±40yrBP、2Y24jグリッドのⅣ層から出土した土器内面付着炭化物（C11：IAAA－72775）が2950±40yrBP、3Y3u～3vグリッドのⅣ層から出土した土器内面付着炭化物（C12：IAAA－72776）が2970±40yrBP、RA010のQ1から出土した炭化材（C13：IAAA－72777）が4100±40yrBP、RA010のQ2から出土した炭化材（C14：IAAA－72778）が4150±30yrBPである。

暦年較正年代（1σ）は、C1が3800～3695BC（68.2%）、C2が3025～2920BC（68.2%）、C3が2850～2810BC（15.8%）・2750～2720BC（4.6%）・2700～2570BC（47.9%）、C4が2570～2520BC（36.9%）・2500～2460BC（31.3%）、C5が2870～2830BC（13.8%）・2820～2800BC（5.7%）・2780～2630BC（48.7%）、C6が3500～3460BC（15.9%）・3380～3330BC（30.9%）・3220～3180BC（11.3%）・3160～3120BC（10.2%）、C7が3700～3640BC（68.2%）、C8が2280～2250BC（10.7%）・2230～2220BC（1.7%）・2210～2130BC（50.6%）・2080～2060BC（5.2%）、C9が3100～3000BC（42.4%）・2990～2930BC（25.8%）、C10が1300～1190BC（55.3%）・1180～1130BC（12.9%）、C11が1260～1110BC（68.2%）、C12が1270～1120BC（68.2%）、C13が2850～2810BC（16.0%）・2740～2720BC（3.9%）・2700～2570BC（48.3%）、C14が2870～2830BC（14.1%）・2820～2800BC（5.5%）・2780～2660BC（44.6%）・2650～2630BC（3.9%）である。

測定結果は考古学的な調査所見とも整合性が高く、化学処理および測定内容にも問題が無いことから、妥当な年代と考えられる。

参考文献

Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion : Reporting of 14C data, Radiocarbon 19, 355－363

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy : the OxCal Program, Radiocarbon 37(2), 425－430

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon 43(2A), 355－363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43(2A), 381－389

Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0－26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029－1058

ＩＡＡ

IAA Code No.	試　　料	ＢＰ年代および炭素の同位体比
ＩＡＡＡ－72765	試料採取場所　：岩手県盛岡市川目地区	Libby Age (yrBP)　：　4,980 ± 40
	川目Ａ遺跡	δ^{15}C (‰)、(加速器)　＝　−29.79 ± 0.53
	試料形態　：炭化物	Δ^{14}C (‰)　＝　−461.8 ± 2.8
	試料名（番号）：Ｃ１No11	pMC (%)　＝　53.82 ± 0.28
	（参考）　δ13C　の補正無し	δ^{14}C (‰)　＝　−467.1 ± 2.7
		pMC (%)　＝　53.29 ± 0.27
＃2162－１		Age (yrBP)　：　5,060 ± 40
ＩＡＡＡ－72766	試料採取場所　：岩手県盛岡市川目地区	Libby Age (yrBP)　：　4,380 ± 40
	川目Ａ遺跡	δ^{13}C (‰)、(加速器)　＝　−20.47 ± 0.83
	試料形態　：炭化物	Δ^{14}C (‰)　＝　−420.0 ± 2.6
	試料名（番号）：Ｃ２No77	pMC (%)　＝　58.00 ± 0.26
	（参考）　δ13Cの補正無し	δ^{14}C (‰)　＝　−414.6 ± 2.4
		pMC (%)　＝　58.54 ± 0.24
＃2162－２		Age (yrBP)　：　4,300 ± 30
ＩＡＡＡ－72767	試料採取場所：岩手県盛岡市川目地区	Libby Age (yrBP)　：　4,100 ± 40
	川目Ａ遺跡	δ^{13}C (‰)、(加速器)　＝　−24.10 ± 0.90
	試料形態　：炭化物	Δ^{14}C (‰)　＝　−399.9 ± 2.9
	試料名（番号）：Ｃ３No90	pMC (%)　＝　60.01 ± 0.29
	（参考）　δ13Cの補正無し	δ^{14}C (‰)　＝　−398.8 ± 2.7
		pMC (%)　＝　60.12 ± 0.27
＃2162－３		Age (yrBP)　：　4,090 ± 40
ＩＡＡＡ－72768	試料採取場所　：岩手県盛岡市川目地区	Libby Age (yrBP)　：　3,970 ± 40
	川目Ａ遺跡	δ^{13}C (‰)、(加速器)　＝　−19.79 ± 0.64
	試料形態　：炭化物	Δ^{14}C (‰)　＝　−390.2 ± 2.7
	試料名（番号）：Ｃ４No102	pMC (%)　＝　60.98 ± 0.27
	（参考）　δ13Cの補正無し	δ^{14}C (‰)　＝　−383.7 ± 2.6
		pMC (%)　＝　61.63 ± 0.26
＃2162－４代替		Age (yrBP)　：　3,890 ± 40
ＩＡＡＡ－72769	試料採取場所　：岩手県盛岡市川目地区	Libby Age (yrBP)　：　4,140 ± 40
	川目Ａ遺跡	δ^{13}C (‰)、(加速器)　＝　−29.08 ± 0.73
	試料形態　：炭化物	Δ^{14}C (‰)　＝　−402.9 ± 2.9
	試料名（番号）：Ｃ５No172	pMC (%)　＝　59.71 ± 0.29
	（参考）　δ13Cの補正無し	δ^{14}C (‰)　＝　−407.9 ± 2.7
		pMC (%)　＝　59.21 ± 0.27
＃2162－５		Age (yrBP)　：　4,210 ± 40

3　放射性炭素年代測定結果

ＩＡＡ

IAA Code No.	試　　料	ＢＰ年代および炭素の同位体比			
ＩＡＡＡ－72770	試料採取場所　：岩手県盛岡市川目地区	Libby Age(yrBP)	：	4,580 ±	40
	川目Ａ遺跡	δ13C（‰）、（加速器）	＝	−20.58 ±	0.83
	試料形態　：炭化物	Δ14C（‰）	＝	−434.9 ±	3.0
	試料名（番号）：Ｃ６　№186	ｐＭＣ（％）	＝	56.51 ±	0.30
	（参考）　δ13C　の補正無し	δ14C（‰）	＝	−429.7 ±	2.9
		ｐＭＣ（％）	＝	57.03 ±	0.29
＃2162－６		Age(yrBP)	：	4,510 ±	40
ＩＡＡＡ－72771	試料採取場所　：岩手県盛岡市川目地区	Libby Age(yrBP)	：	4,890 ±	40
	川目Ａ遺跡	δ13C（‰）、（加速器）	＝	−26.05 ±	0.67
	試料形態　：炭化物	Δ14C（‰）	＝	−455.9 ±	2.7
	試料名（番号）：Ｃ７　№243	ｐＭＣ（％）	＝	54.41 ±	0.27
	（参考）　δ13C　の補正無し	δ14C（‰）	＝	−457.1 ±	2.6
		ｐＭＣ（％）	＝	54.29 ±	0.26
＃2162－７		Age (yrBP)	：	4,910 ±	40
ＩＡＡＡ－72772	試料採取場所　：岩手県盛岡市川目地区	Libby Age(yrBP)	：	3,760 ±	40
	川目Ａ遺跡	δ13C（‰）、（加速器）	＝	−22.89 ±	0.60
	試料形態　：炭化物	Δ14C（‰）	＝	−373.9 ±	2.9
	試料名（番号）：Ｃ８　№370	ｐＭＣ（％）	＝	62.61 ±	0.29
	（参考）　δ13C　の補正無し	δ14C（‰）	＝	−371.2 ±	2.8
		ｐＭＣ（％）	＝	62.88 ±	0.28
＃2162－８		Age (yrBP)	：	3,730 ±	40
ＩＡＡＡ－72773	試料採取場所　：岩手県盛岡市川目地区	Libby Age(yrBP)	：	4,410 ±	40
	川目Ａ遺跡	δ13C（‰）、（加速器）	＝	−19.60 ±	0.76
	試料形態　：炭化物	Δ14C（‰）	＝	−422.3 ±	2.9
	試料名（番号）：Ｃ９　№318	ｐＭＣ（％）	＝	57.77 ±	0.29
	（参考）　δ13C　の補正無し	δ14C（‰）	＝	−415.8 ±	2.7
		ｐＭＣ（％）	＝	58.42 ±	0.27
＃2162－９		Age (yrBP)	：	4,320 ±	40
ＩＡＡＡ－72774	試料採取場所　：岩手県盛岡市川目地区	Libby Age(yrBP)	：	2,990 ±	40
	川目Ａ遺跡	δ13C（‰）、（加速器）	＝	−26.02 ±	0.73
	試料形態　：炭化物	Δ14C（‰）	＝	−310.7 ±	3.4
	試料名（番号）：Ｃ10　№463	ｐＭＣ（％）	＝	68.93 ±	0.34
	（参考）　δ13C　の補正無し	δ14C（‰）	＝	−312.2 ±	3.2
		ｐＭＣ（％）	＝	68.78 ±	0.32
＃2162－10		Age (yrBP)	：	3,010 ±	40

ＩＡＡ

IAA Code No.	試　　料	ＢＰ年代および炭素の同位体比			
ＩＡＡＡ－72775	試料採取場所　：岩手県盛岡市川目地区	Libby Age(yrBP)	：	2,950	± 40
	川目Ａ遺跡	δ13Ｃ（‰）、（加速器）	＝	−31.01	± 0.85
	試料形態　：炭化物	Δ14Ｃ（‰）	＝	−307.2	± 3.3
	試料名（番号）：Ｃ11　No475	ｐＭＣ（％）	＝	69.28	± 0.33
		δ14Ｃ（‰）	＝	−315.7	± 3.0
	（参考）　δ13Ｃ　の補正無し	ｐＭＣ（％）	＝	68.43	± 0.30
＃2162－11		Age (yrBP)	：	3,050	± 40
ＩＡＡＡ－72776	試料採取場所　：岩手県盛岡市川目地区	Libby Age(yrBP)	：	2,970	± 40
	川目Ａ遺跡	δ13Ｃ（‰）、（加速器）	＝	−27.31	± 0.69
	試料形態　：炭化物	Δ14Ｃ（‰）	＝	−309.3	± 3.3
	試料名（番号）：Ｃ12　No473	ｐＭＣ（％）	＝	69.07	± 0.33
		δ14Ｃ（‰）	＝	−312.5	± 3.1
	（参考）　δ13Ｃ　の補正無し	ｐＭＣ（％）	＝	68.75	± 0.31
＃2162－12		Age (yrBP)	：	3,010	± 40
ＩＡＡＡ－72777	試料採取場所　：岩手県盛岡市川目地区	Libby Age(yrBP)	：	4,100	± 40
	川目Ａ遺跡	δ13Ｃ（‰）、（加速器）	＝	−24.44	± 0.69
	試料形態　：炭化物	Δ14Ｃ（‰）	＝	−400.0	± 2.8
	試料名（番号）：Ｃ13	ｐＭＣ（％）	＝	60.00	± 0.28
		δ14Ｃ（‰）	＝	−399.3	± 2.6
	（参考）　δ13Ｃ　の補正無し	ｐＭＣ（％）	＝	60.07	± 0.26
＃2162－13		Age (yrBP)	：	4,090	± 40
ＩＡＡＡ－72778	試料採取場所　：岩手県盛岡市川目地区	Libby Age(yrBP)	：	4,150	± 30
	川目Ａ遺跡	δ13Ｃ（‰）、（加速器）	＝	−24.27	± 0.82
	試料形態　：炭化物	Δ14Ｃ（‰）	＝	−403.1	± 2.5
	試料名（番号）：Ｃ14	ｐＭＣ（％）	＝	59.69	± 0.25
		δ14Ｃ（‰）	＝	−402.2	± 2.3
	（参考）　δ13Ｃ　の補正無し	ｐＭＣ（％）	＝	59.78	± 0.23
＃2162－14		Age (yrBP)	：	4,130	± 30

参考

ＩＡＡＡ－72768に関しましては，代替試料を処理し測定した結果になります．

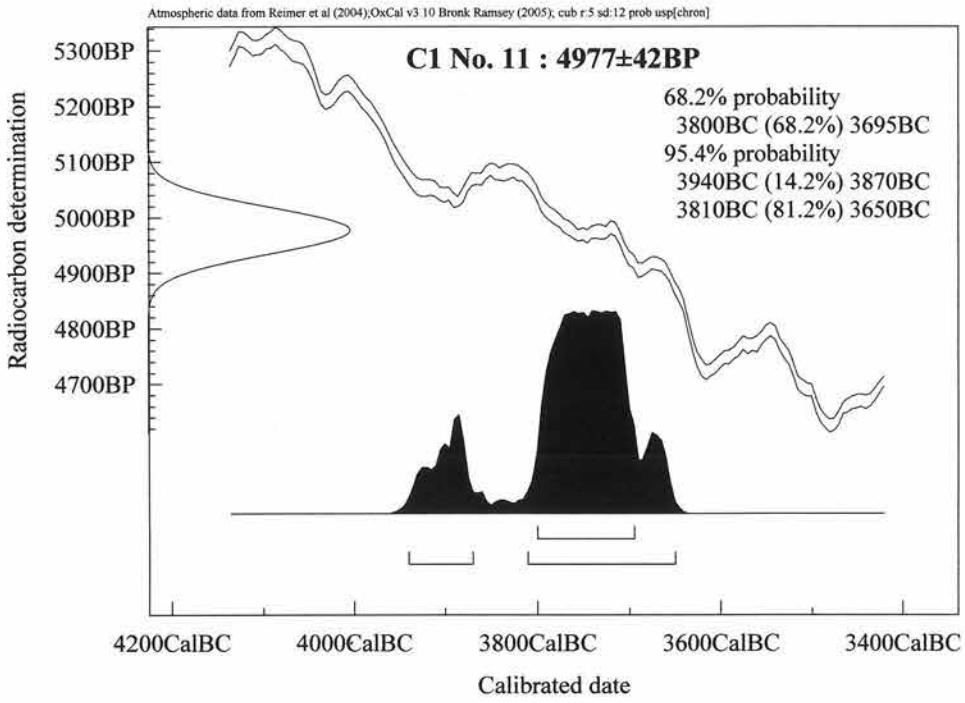
参考資料：暦年較正用年代

ＩＡＡ

IAA Code No.	試料番号	Libby Age(yrBP)
IAAA－72765	C 1 No 11	4977 ± 42
IAAA－72766	C 2 No 77	4375 ± 35
IAAA－72767	C 3 No 90	4102 ± 38
IAAA－72768	C 4 No 102	3973 ± 36
IAAA－72769	C 5 No 172	4142 ± 39
IAAA－72770	C 6 No 186	4584 ± 42
IAAA－72771	C 7 No 243	4888 ± 40
IAAA－72772	C 8 No 370	3761 ± 37
IAAA－72773	C 9 No 318	4407 ± 39
IAAA－72774	C10 No 463	2989 ± 39
IAAA－72775	C11 No 475	2948 ± 37
IAAA－72776	C12 No 473	2972 ± 37
IAAA－72777	C13	4103 ± 36
IAAA－72778	C14	4145 ± 34

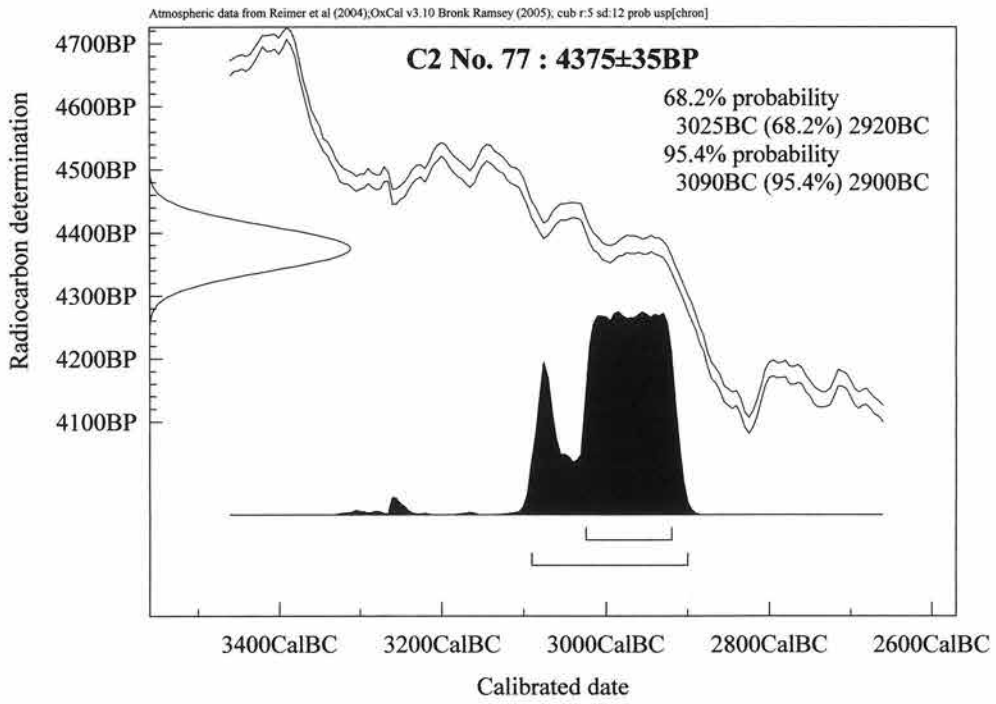
ここに記載するLibby Age（年代値）と誤差は下１桁を丸めない値です。

【参考値：暦年較正　Radiocarbon determination】



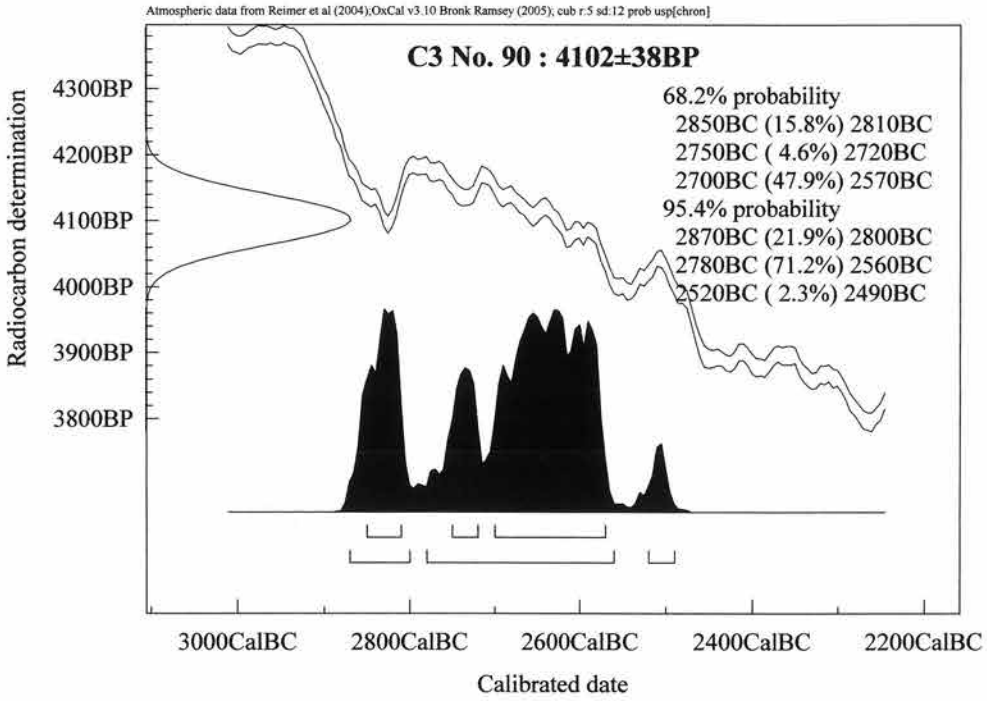
使用プログラム・OxCal　v3.10

【参考値：暦年較正　Radiocarbon determination】



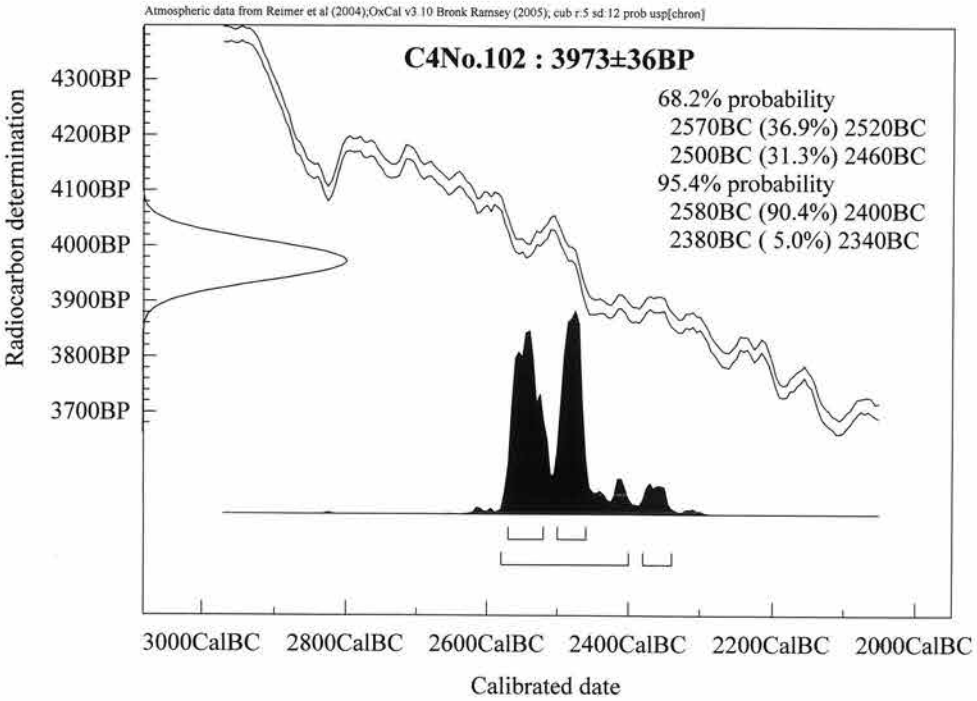
使用プログラム・OxCal　v3.10

【参考値：暦年較正　Radiocarbon determination】



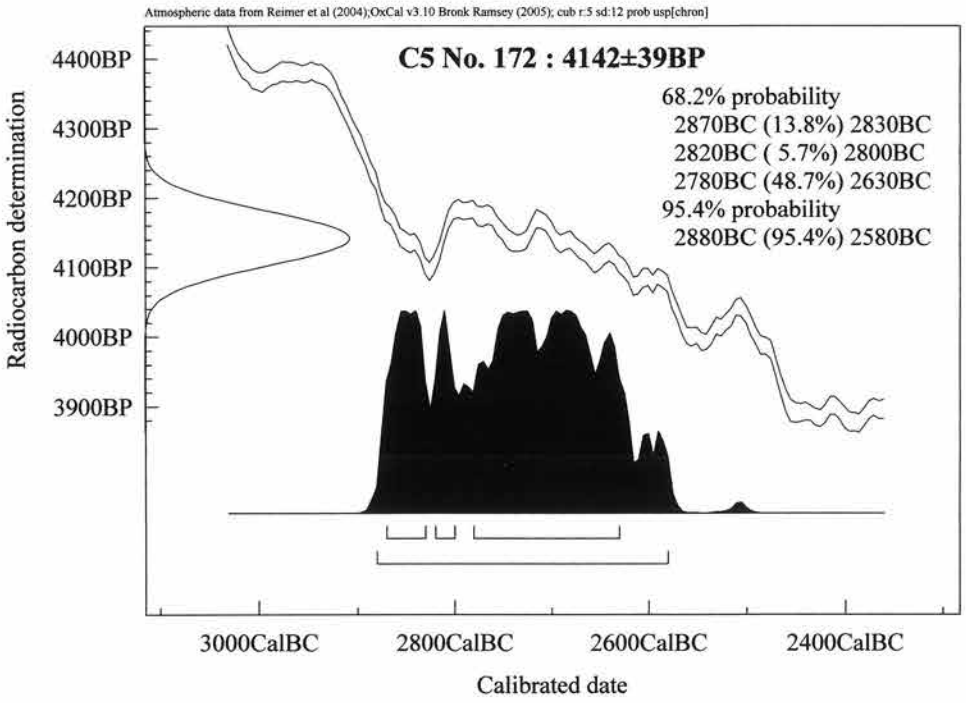
使用プログラム・OxCal　v3.10

【参考値：暦年補正　Radiocarbon determination】



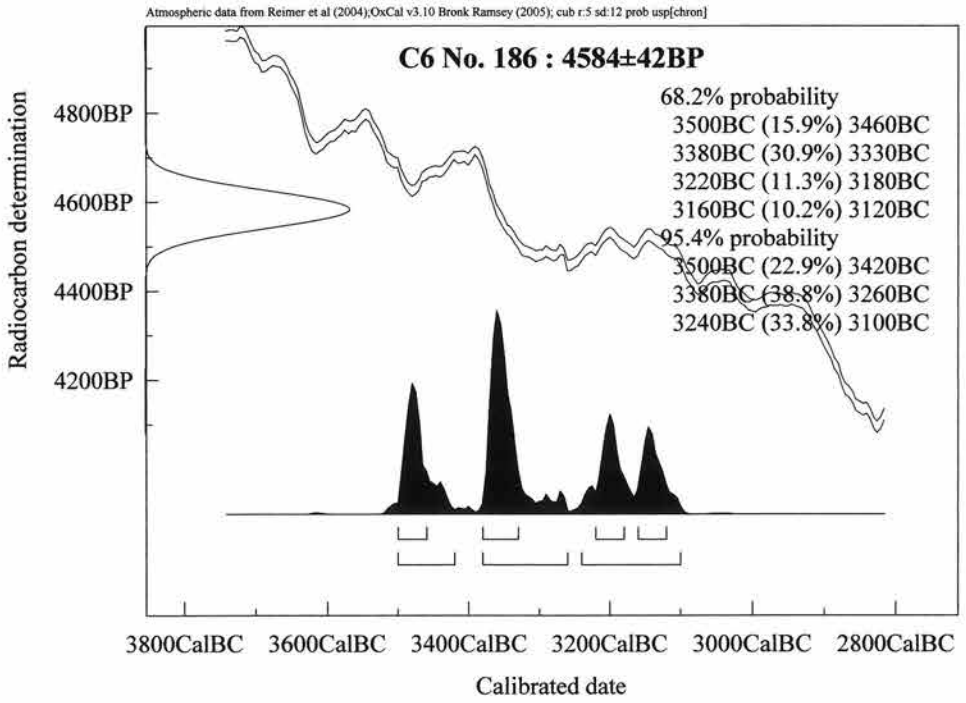
使用プログラム・OxCal　v3.10

【参考値：暦年較正　Radiocarbon determination】



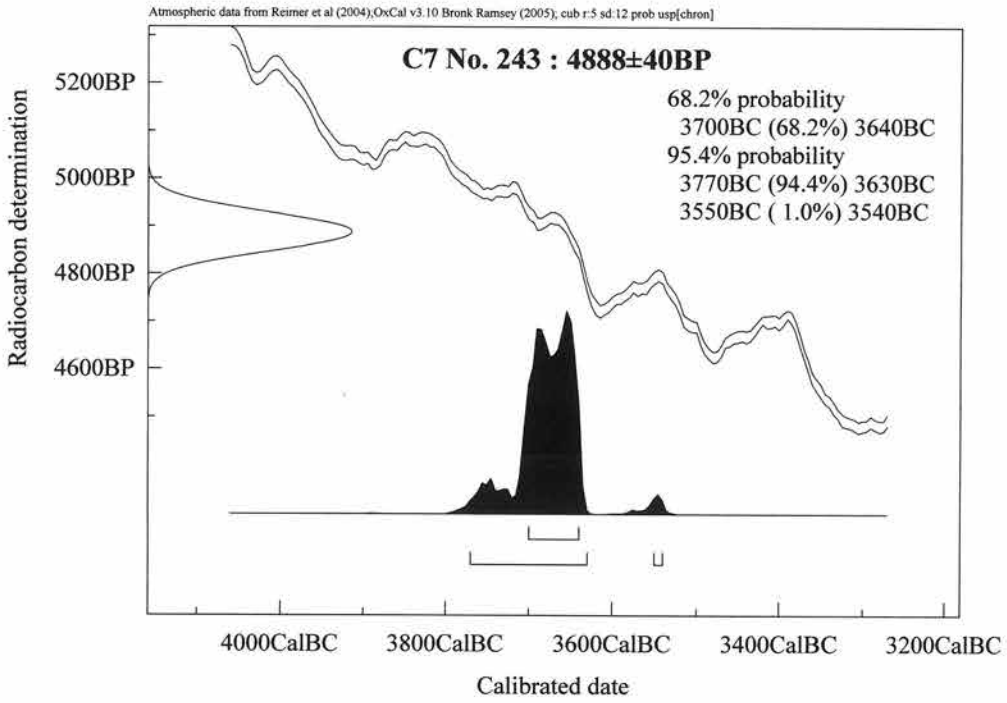
使用プログラム・OxCal　v3.10

【参考値：暦年較正　Radiocarbon determination】



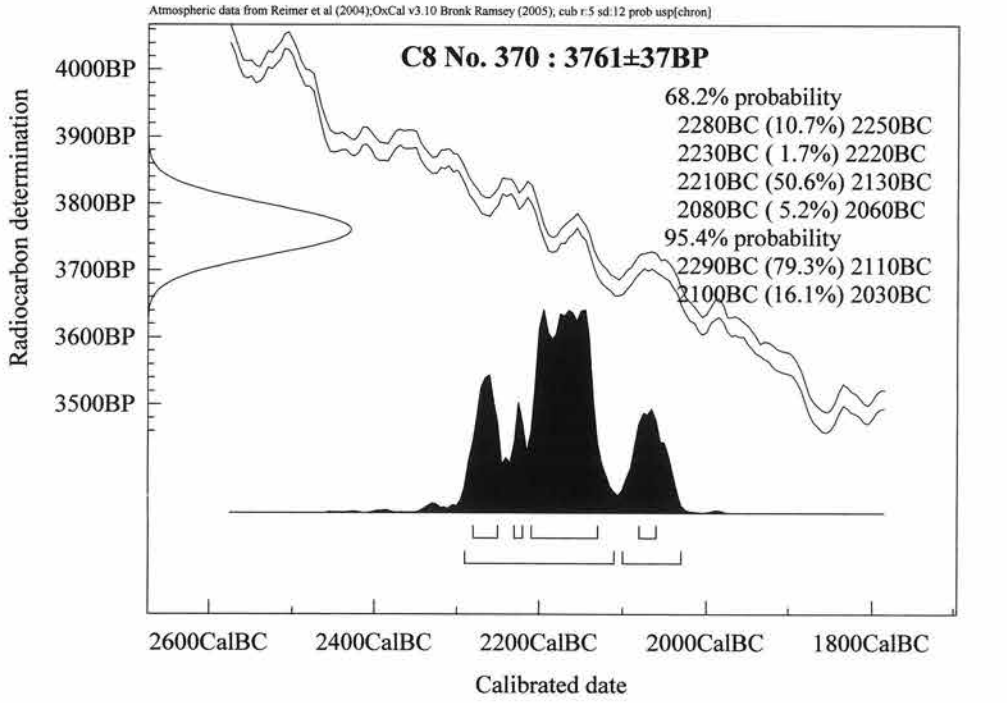
使用プログラム・OxCal　v3.10

【参考値：暦年較正　Radiocarbon determination】



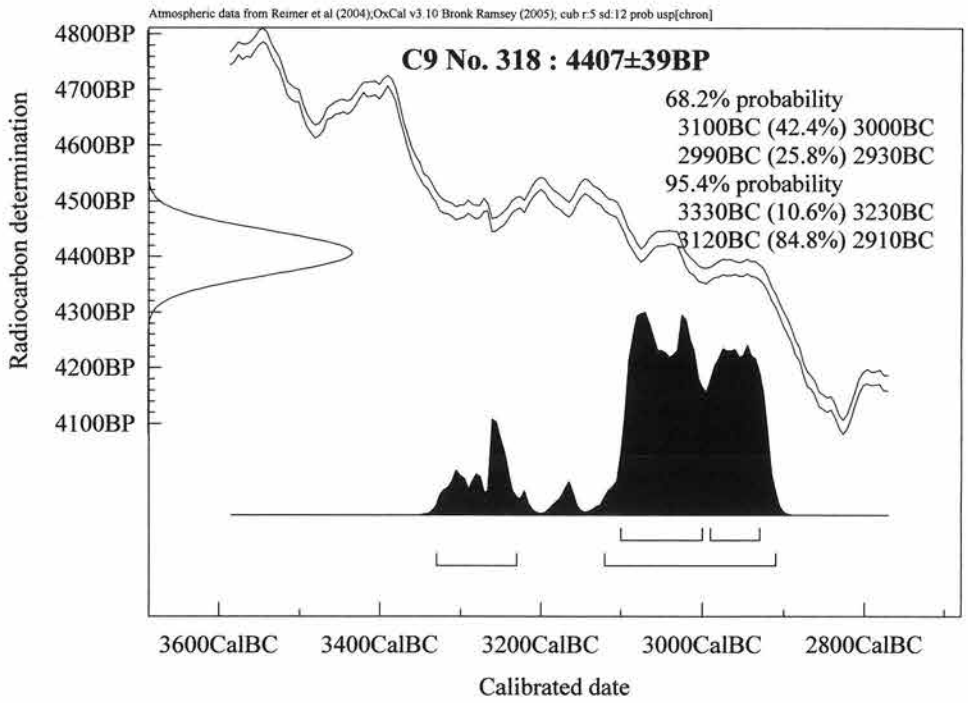
使用プログラム・OxCal　v3.10

【参考値：暦年較正　Radiocarbon determination】



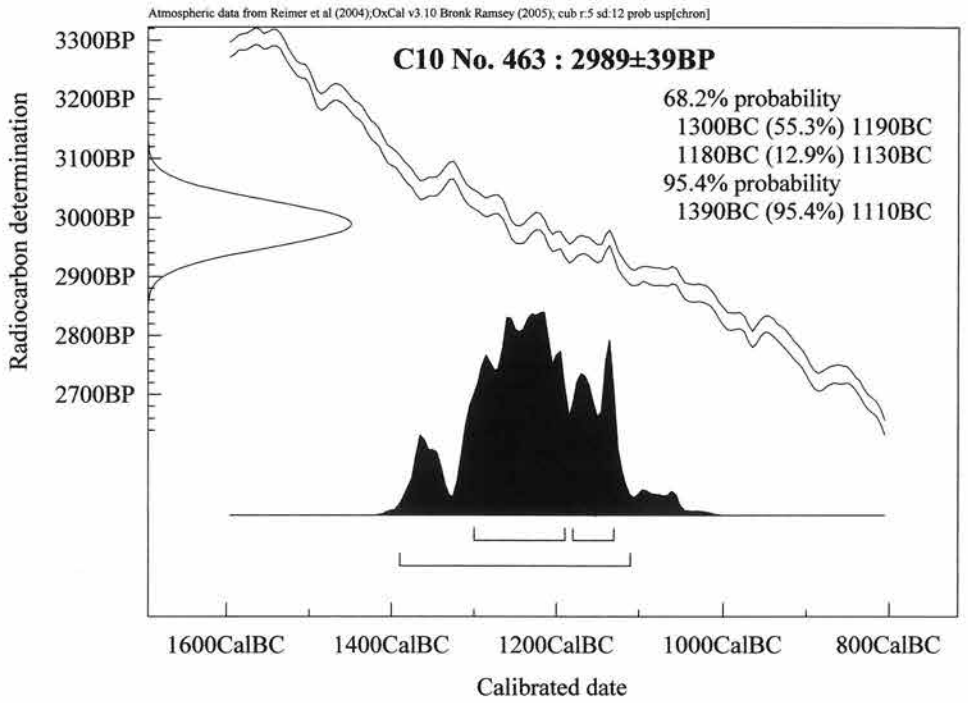
使用プログラム・OxCal　v3.10

【参考値：暦年較正　Radiocarbon determination】



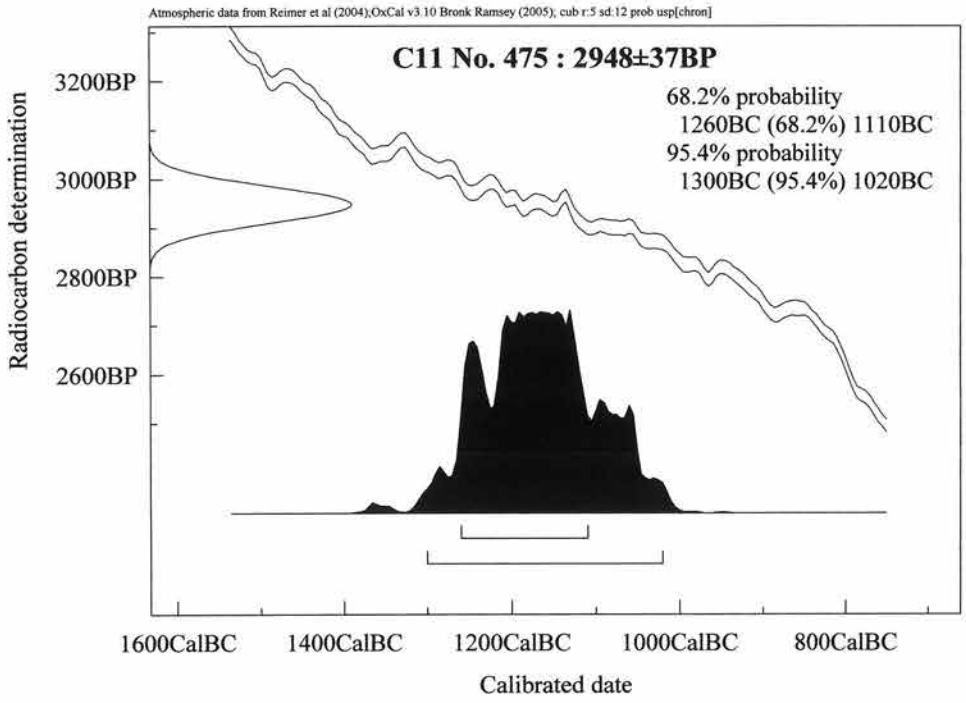
使用プログラム・OxCal　v3.10

【参考値：暦年較正　Radiocarbon determination】



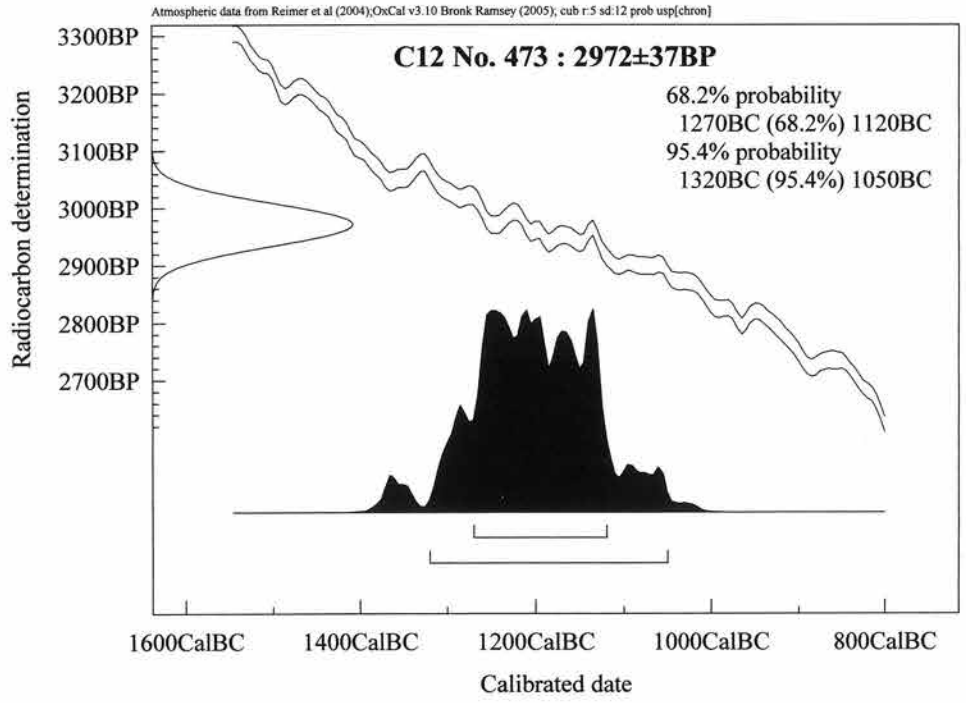
使用プログラム・OxCal　v3.10

【参考値：暦年較正　Radiocarbon determination】



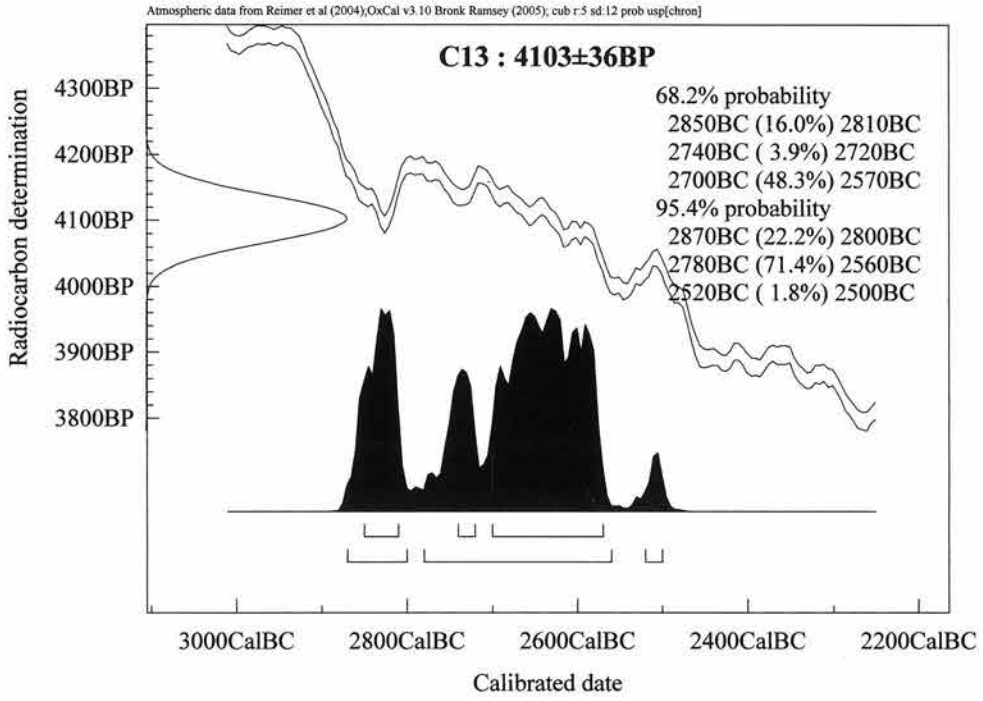
使用プログラム・OxCal　v3.10

【参考値：暦年較正　Radiocarbon determination】



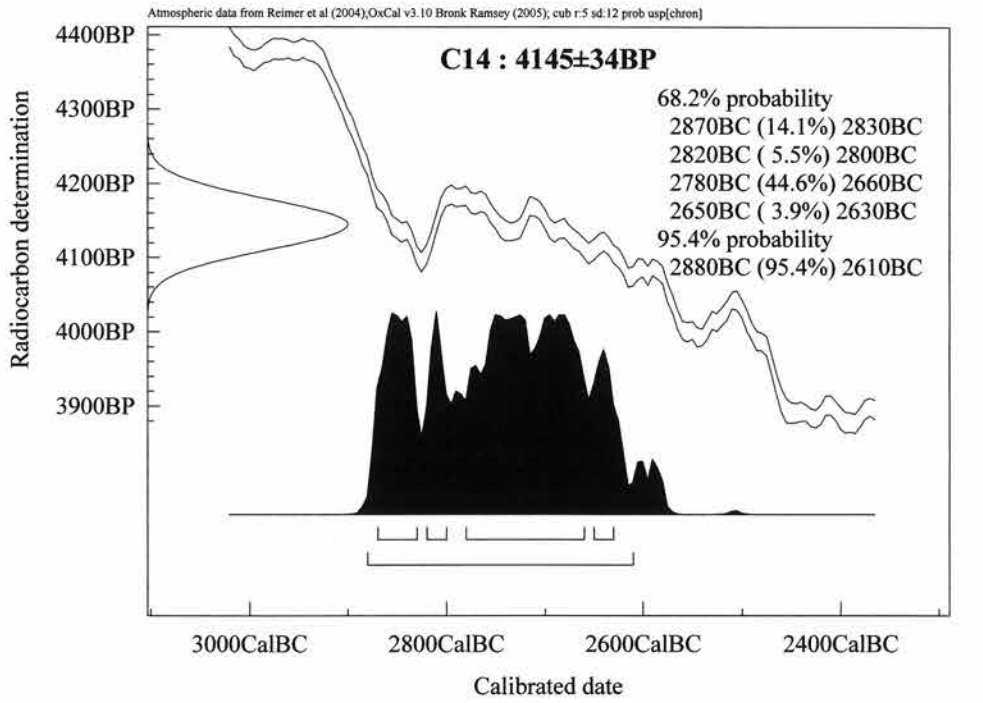
使用プログラム・OxCal　v3.10

【参考値：暦年較正　Radiocarbon determination】



使用プログラム・OxCal　v3.10

【参考値：暦年較正　Radiocarbon determination】



使用プログラム・OxCal　v3.10

4　川目Ａ遺跡出土黒曜石の成分分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1　は　じ　め　に

岩手県盛岡市川目地区に所在する川目Ａ遺跡は、北上山地の山間を流れる北上川支流の簗川左岸に形成された狭小な段丘上に立地する。これまでの発掘調査では、縄文時代早期中葉～晩期および古代～近世にわたる遺構・遺物が確認されている。今回は、供伴する土器から縄文時代とされる黒曜石製石器を対象として成分分析を行い、その産地に関する資料を作成する。

2　試　　料

試料は、川目Ａ遺跡より出土した黒曜石製石器３点である。いずれの試料も、最大径20㎜ほどの不定形な剥片であり、黒曜石１、黒曜石２、黒曜石３という試料名が付されている。

黒曜石１は、縄文時代前期後葉大木５式期を中心とする集落域から出土した試料であるが、供伴した土器は縄文時代早期中葉～晩期前葉まで多岐にわたるため、詳細な時期は特定できないとされている。黒曜石２および黒曜石３は、縄文時代中期後葉～晩期前葉の遺物包含層が広範囲で認められている地点から出土しており、供伴する土器から縄文時代後期初頭～前葉の時期が推定されている。

各試料の出土位置および層位は、分析結果を呈示した表１に併記する。

3　分　析　方　法

本分析では遺物保存の観点から、非破壊分析を前提とする。したがって、調査はセイコーインスツルメンツ製エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（ＳＥＡ2120Ｌ）を用いた非破壊分析法により、半定量的に化学組成を求める。

１）処理手順

試料は超音波洗浄を行い、表面に付着した土壌を落とした後、以下の条件で測定を実施する。得られた蛍光Ｘ線スペクトルからファンダメンタルパラメーター法（ＦＰ法）に基づいたノンスタンダードによる定量演算を実施し、化学組成を算出する。

測定条件

測定装置	SEA2120L	
管球ターゲット元素	Rh	
対象元素	Na～Ca	Sc～U
励起電圧（kV）	15	50
管電流（μA）	自動設定	自動設定
測定時間（秒）	300	300
コリメータ	φ10.0㎜	
フィルター	なし	

マイラー	OFF
雰囲気	真空

2）ＦｅとＲｂによる黒曜石産地判別

黒曜石は、流紋岩～デイサイトに相当するガラス岩である。流紋岩～デイサイトの成因は多様であるが、その反面出発物質としてのマグマの生成過程および分化過程で化学組成の挙動が異なることが期待される。大沢ら（1991）の黒曜石の化学組成を岩系別に見ると、Ｒｂ（ルビジウム）、Ｌａ（ランタン）、Ｃｅ（セリウム）、Ｅｕ（ユウロピウム）、Ｔｈ（トリウム）、Ｓｃ（スカジウム）の変動が著しく、地域的な特性を示す微量成分元素として注目される。

そこで黒曜石の岩系に基づいた化学成分の変化を背景に、産地判定の指標成分としてコンパティブル元素であるＦｅとインコンパティブル元素であるＲｂを選択し、産地ごとの２成分の領域を図示した黒曜石の産地判定図（図１）を作成する。本判定図は、当社保有の原産地黒曜石110試料のほか、これまでに当社で調査を実施した遺跡出土黒曜石（産地未確定も含む）など計500試料以上の黒曜石を基に、破壊調査により得られた化学組成を用いて作成した。作成した判定図は縦軸にＲｂ（ｐｐｍ）、横軸にＦｅ（％）をとると指数関数的な分布を示し、産地間の分離が良好であることから、分析精度が十分に高ければ産地の識別は可能であると考えられる（五十嵐ほか，2001）。なお、この図はＦｅ（％）とＲｂ（ｐｐｍ）の値を採用しているため、酸化物の分析結果をそれぞれ換算して用いている（表１中の参考値）。

４　結　　果

分析結果を表１に示す。また産地判別図を図１、２に示す。図上における各産地の領域は、北海道および東北地方の産地領域を濃く示し、関東・中部地方の産地領域を薄く示してある。今回の３試料は、Ｆｅ－Ｒｂ判別図（図１）およびその補完法であるＳｒ－Ｚｒ判別図（図２）においても、本遺跡周辺の東北、北海道さらに新潟地域や関東地方も含めて、当社保有の原産地試料の領域には該当しない。

小田（2001）は、東北地方の黒曜石の産地として、脇本と月山以外にも青森県の深浦、岩手県の雫石、宮城県の湯倉などの産地をあげており、また東北地方南部から続く地域として、新潟県の板山のほかに佐渡島にも黒曜石の産地があることを紹介している。したがって、今回の試料がプロットされた周辺の領域には、新潟県大白川、栃木県高原山、長野県麦草峠などの原産地データ領域も近接しているが、上述した東北地方各原産地の領域が今後位置づけられる可能性もあり、現時点では具体的な産地について議論することは難しい。今後は東北地方の各原産地試料を当社データベースに付加し、これら原産地の可能性についても改めて検証したい。

参考文献

五十嵐俊雄・斉藤紀行・中根秀二　2001　Ｆｅ－Ｒｂ法による黒曜石の産地推定．PALYNO，№４，16－25.

二宮　修治・綱干　守・藁科　実・友廣　秀尚・大沢　眞澄　1991　微量成分元素存在量による原産地黒曜石の識別・分類と遺跡出土黒曜石石器の原産地推定への適用，黒曜石の化学　遺跡出土黒曜石石器の原産地推定の基礎として．平成２年度科学研究費補助金（一般研究Ｂ）研究成果報告書，69ｐ．

小田　静夫　　2001　　黒曜石石器の研究動向．PALYNO，№４，３－15.

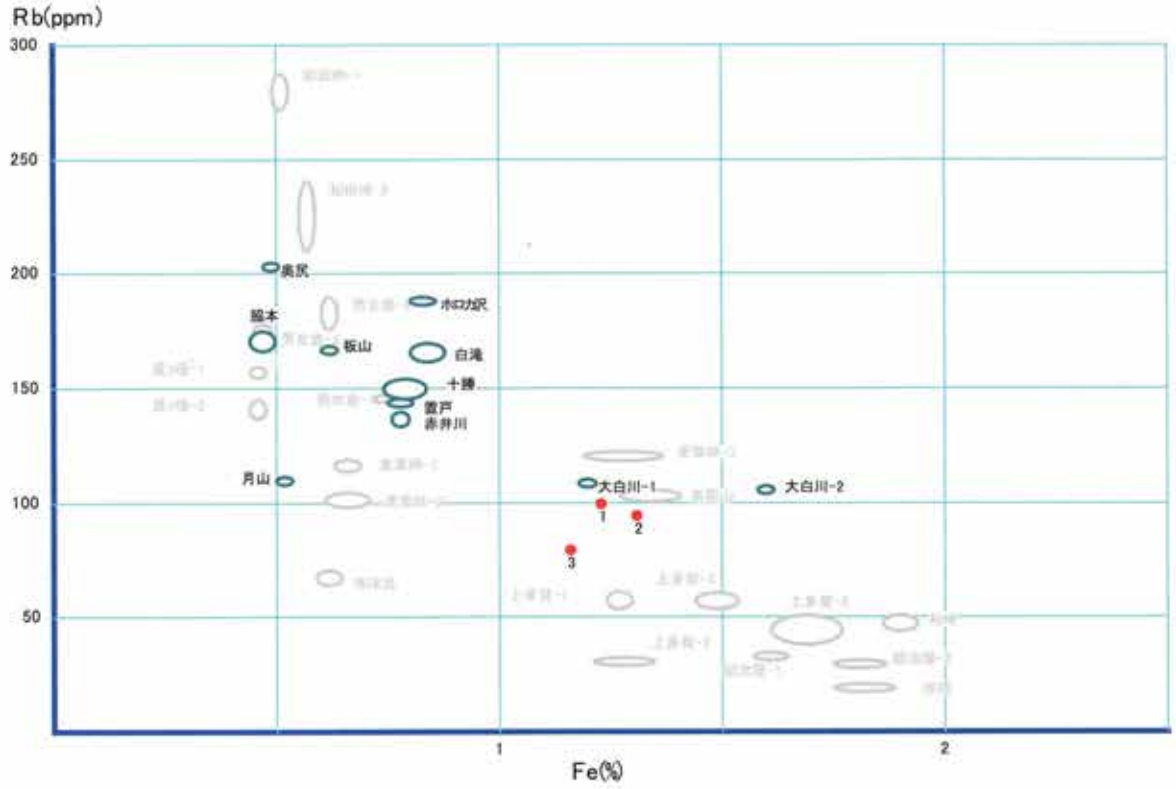


図１．Ｆｅ－Ｒｂ判別図

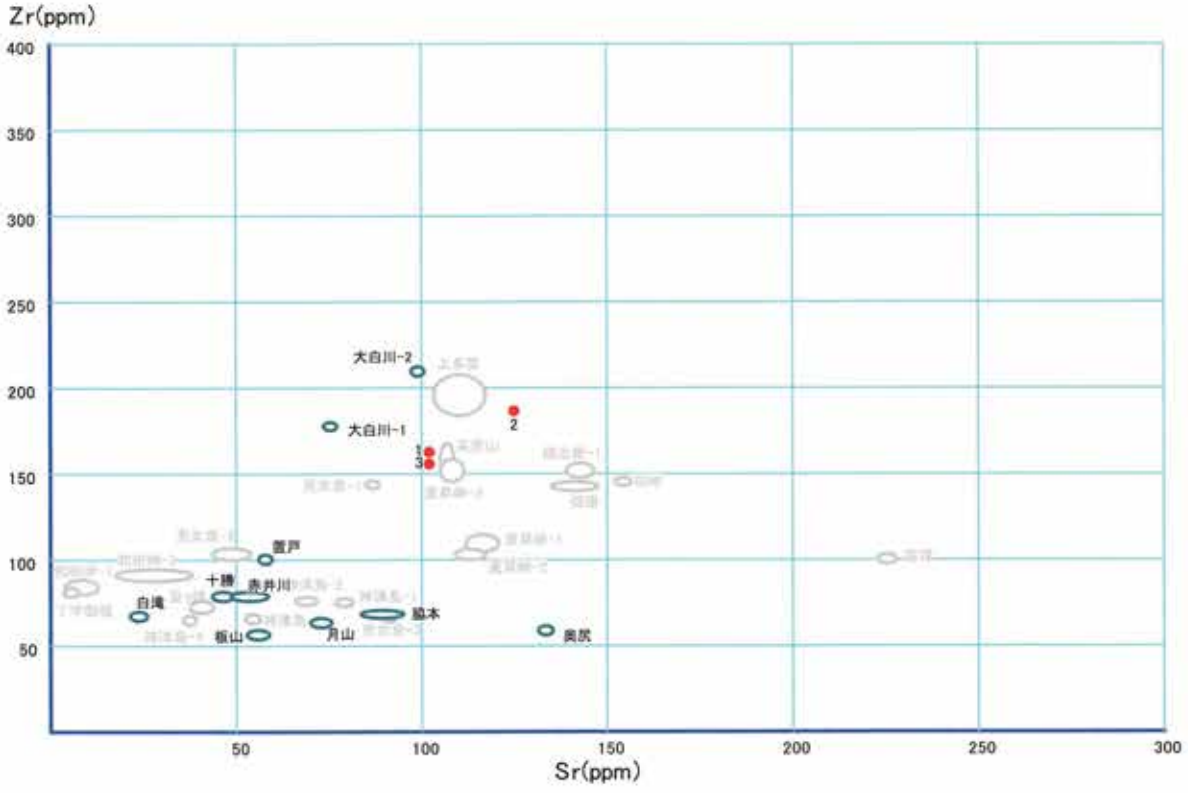


図２．Ｓｒ－Ｚｒ判別図

表１．黒曜石元素分析結果

測定試料		SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	MnO	MgO	CaO	Na_2O	K_2O	Rb	Sr	Zr	Ba	推定原産地	Fe	Rb
試料名	出土位置・層位	%	%	%	%	%	%	%	%	%	ppm	ppm	ppm	ppm		%	ppm
黒曜石１	５Ｘ15ｊ　Ⅳ層	75.62	0.19	15.63	1.76	0.09	0.43	0.79	2.85	2.57	99	102	162	365	産地判定外	1.23	99
黒曜石２	２Ｙ15ｗ　Ⅳ層	74.60	0.17	15.26	1.87	0.10	0.71	0.84	3.57	2.80	94	125	186	438	産地判定外	1.31	94
黒曜石３	２Ｙ24ｖ　Ⅳ層	74.83	0.18	15.26	1.66	0.09	0.60	0.86	3.69	2.78	79	102	155	228	産地判定外	1.16	79

5　川目Ａ遺跡第６次調査区出土縄文土器および粘土の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岩手県盛岡市川目Ａ遺跡は、北上山地中部の西縁付近を流れる簗川の左岸に形成された河岸段丘上に立地する。簗川は、盛岡市街地南方で北上川に合流する。今回発掘調査が行われた第６次調査区は、標高177～178ｍの段丘上（発掘調査では低位面とされている）と標高182～188ｍの山地斜面（同高位面）とに区分されている。低位面からは縄文時代後期～晩期の遺物包含層や集石遺構が検出され、高位面からは縄文時代早期中頃（物見台式期）、前期後半（大木５式期）、中期後半（大木９～10式期）の３時期にわたる集落跡が検出されている。また、高位面の中期後半とされた集落跡内には、「土取り穴」と考えられている土坑が７基検出されており、土坑の底や壁に認められた粘土は、集落跡から出土した土器の材料となった可能性もあると考えられている。

今回の分析調査では、上述した土取り穴の粘土と調査区より出土した各時期の縄文土器の関係について、両者の特性を岩石学的手法で把握するとともに、相互に比較することによりそれらの関係について検討する。

１　試　　料

試料は、川目Ａ遺跡第６次調査区より出土した早期から晩期までの縄文土器片13点と同調査区で検出された土取り穴の壁面より採取された粘土試料５点の合計18点である。

縄文土器試料には、土器№１～13までの試料名が付されている。これらのうち土器№１～８までは、土取穴から出土した試料であり、中期後半の大木９式および10式が５点、前期の大木１～２ａ式、大木５式？、および後期の型式不明土器がそれぞれ１点ずつという内訳である。発掘調査所見では、土取り穴の時期は中期後半とされ、上述した同時期の土器は帰属時期を反映している可能性が高いとされている。土器№９、10はいずれも竪穴住居跡より出土した試料であるが、土器№９は大木５式期の住居跡から出土しており、土器№10は前期とされる住居跡から出土しているものの、土器自体は早期中葉の物見台式と考えられている。土器№11、12は大木５式期の集落上において遺構外として取り上げられたものであり、土器№13は捨て場から出土した試料である。以上述べた各土器試料の出土遺構・出土地点、層位、時期、型式は、一覧にして表１に示す。

土取り穴の壁面より採取された粘土試料は、胎土１～胎土５までの試料名が付されている。土取り穴とされた土坑の平面形は不定形をなし、底は凹凸が顕著であり、深さは比較的浅い（１ｍ以下）。壁面に認められた粘土層は、調査区の基本層序においてⅦ層とされ、上部のⅦ－１層、中部のⅦ－２層、下部のⅦ－３層に分層されている。Ⅶ－１層は黄褐色を呈する粘土質シルト、Ⅶ－２層は明黄褐～黄褐色を呈する粘土、Ⅶ－３層は砂礫を含む粘土とされている。発掘調査所見では、Ⅶ－２層が採掘の対象となった粘土層の可能性があるとしている。試料は、土取り穴のＲＸ001およびＲＸ003の各箇所および各層位から採取されている。採取層位の内訳は、Ⅶ－１層とⅦ－３層が１点ずつ、Ⅶ－２層が３点である。各試料の採取位置および層位を一覧にして表１に示す。

2　分　析　方　法

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法とがある。前者は粉砕による重鉱物分析や薄片作製などが主に用いられており、後者では蛍光X線分析が最もよく用いられている方法である。今回の試料のように比較的粗粒の砂粒を含み、低温焼成と考えられる縄文土器の分析では、前者の方が胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点がある。さらに前者の方法の中でも薄片観察は、胎土中における砂粒の量はもちろんのこと、その粒径組成や砂を構成する鉱物、岩石片および微化石の種類なども捉えることが可能であり、得られる情報は多い。したがって、ここでは薄片観察法による胎土分析を行う。以下に手順を述べる。

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断（粘土試料は樹脂で固化した後に切断）、正確に0.03㎜の厚さに研磨して作製した。薄片は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用いて観察し、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

データの呈示は、松田ほか（1999）が示した仕様に従う。砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5㎜間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の３次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

3　結　　果

（1）胎土の分類

観察結果を表２、図１～３に示す。各試料で計数された鉱物片および岩石片の種類構成をみると、互いに類似した種類構成を示す試料がある一方で、明らかに異なる組成を示す試料も認められる。なお、粘土試料５点はいずれもほぼ同様の組成を示す。また、砕屑物・基質・孔隙の割合では、土器試料のほとんどは砕屑物の割合が30％以上を示し、粘土試料のそれは20～30％である。さらに、各試料の粒径組成をみると、シルト径と中粒砂径の２つのピークを持つ双峰性のヒストグラムを示す試料と中粒砂にモードのある試料とにほぼ２分された。

以上述べた鉱物・岩石組成と砕屑物の量比および粒径組成の状況を整理して、ここでは以下に示すような分類を設定した。

ａ）鉱物・岩石組成

・Ａ類

鉱物片は石英とカリ長石および斜長石の長石類を主体とするが、それら以外では角閃石と緑廉石が比較的多い。岩石片は、チャート・頁岩・砂岩からなる堆積岩類、凝灰岩、花崗岩類、粘板岩、緑色岩などが比較的多い。

・Ｂ類

鉱物片は石英とカリ長石および斜長石の長石類を主体とするが、それら以外では角閃石、緑廉石および黒雲母などが比較的多い。岩石片は、堆積岩類・凝灰岩および花崗岩類が比較的多い。

・Ｃ類

鉱物片は石英とカリ長石および斜長石の長石類を主体とするが、それら以外では緑簾石が比較的多く、岩石片は頁岩と凝灰岩が多い。

・Ｄ類

鉱物片は石英とカリ長石および斜長石の長石類を主体とするが、それら以外では両輝石と緑簾石が比較的多く、岩石片は安山岩が多い。

・Ｅ類

鉱物片は石英とカリ長石および斜長石の長石類を主体とするが、それら以外では両輝石と角閃石および緑簾石が比較的多い。岩石片は堆積岩類、凝灰岩および安山岩が少量含まれ、火山ガラスが比較的多い。

ｂ）砕屑物の量比

Ⅰ類：20％以上30％未満

Ⅱ類：30％以上

ｃ）粒径組成

ａ類：粗粒シルトまたは中粒シルトと中粒砂の２段階の粒径にピークのある双峰性を示す。

ｂ類：極細粒砂にモードがある。

ｃ類：　中粒砂にモードがある。

上記分類基準に従って各試料の胎土を分類した結果を、表１に併記する。土器試料の鉱物片・岩石片の種類構成ではＡ類が最も多く、13点中６点を占め、次いでＢ類が４点あり、Ｃ、Ｄ、Ｅの各類がいずれも１点ずつである。粘土試料は、５点ともにＡ類である。

土器試料の砕屑物の量比では、Ⅰ類は土器№３、10、11の３点しかなく、他の10点はⅡ類である。一方、粘土試料は５点ともにⅠ類に分類された。

土器試料の粒径組成では、ａ類が最も多く、13点中７点を占め、次いでｃ類が４点であり、ｂ類が２点ある。粘土試料の粒径組成では、５点中４点がｃ類であるが、Ⅶ－２層３点の中の１点である胎土２のみａ類を示した。

（２）時期・型式別にみた胎土分析結果

上述した分類結果を時期・型式順に並べ替えて、表３に示す。この表からは、以下の傾向が看取される。

１）早期

試料は土器№10の１点のみであるが、鉱物・岩石組成では他の時期の試料には認められないＥ類であり、砕屑物の割合は、土器試料の中では少数のⅠ類、さらに粒径組成においても今回の試料では２点しか認められなかったｂ類である。

２）前期

前期の試料は、前期前葉の大木１～２ａ式の土器№８と前期後葉の大木５式？とされた土器№４、９の計３点である。これらのうち、土器№８と土器№４とも、鉱物・岩石組成はＡ類、砕屑物の割合はⅡ類、粒径組成はａ類である。土器№９は、同型式の土器№４とは異なる鉱物・岩石組成および粒径組成であるＤ類とｃ類を示す。なお、土器№８と土器№４は型式が異なるが、ともに土取り穴出土であるのに対して、土器№９は竪穴住居跡出土という違いがある。

３）中期

中期後葉の大木９式３点と中期末葉の大木10式３点からなる。鉱物・岩石組成は、中期全体で見ればＢ類が３点、Ａ類が２点となり、土器試料全体では最も多かったＡ類より、Ｂ類の方が多いという特徴がある。型式別にみると、大木９式はＡ、Ｂ、Ｃの３種類に分かれ、大木10式はＢ類が２点、Ａ類が１点という分類である。砕屑物の割合では、大木９式と大木10式にそれぞれ１点ずつⅠ類が認められ、他の４点はⅡ類である。粒径組成では、大木９式の３点はいずれもａ類であるが、大木10式は、ａ、ｂ、ｃの３種類に分かれる。

４）後期

鉱物・岩石組成では、後期前葉の土器No.７はＢ類、後期中葉の土器No12はＡ類に分類された。砕屑物の割合は、２点ともにⅡ類であるが、粒径組成では、後期前葉の土器No.７がａ類、後期中葉の土器No12がｃ類に分かれた。

５）晩期

試料は、晩期前葉大洞ＢＣ式とされた土器No13の１点である。鉱物・岩石組成はＡ類、砕屑物の割合はⅡ類、粒径組成はｃ類に分類された。

４　考　　察

（１）土取り穴壁面の粘土と土器胎土との関連性について

縄文土器の材料となるいわゆる粘土には、粒径区分でいう粘土にシルトや砂が混在していることが普通である。一方、土器胎土中のシルトや砂は、土器の製作過程において材料となったいわゆる粘土に砕屑物が加えられたり、取り除かれたりという工程を経たものである。したがって、材料となった粘土中の砕屑物の特徴が、必ずしもそのまま土器胎土中の砕屑物の特徴とはならない。それでもなおかつ、粘土中の砕屑物の特徴と土器胎土中の砕屑物の特徴とが類似する場合には、その粘土が土器の材料として使用された可能性があると言って良い。

今回の分析結果では、土取り穴壁面採取粘土試料の砕屑物の鉱物・岩石組成は全てＡ類であったが、土器試料の胎土にもＡ類を示すものが多かった。さらに、ａ類とｃ類の２種類認められた粘土試料中の砕屑物の粒径組成は、ともに土器胎土中の砕屑物の粒径組成と類似した。これらのことから、土取り穴壁面採取の粘土試料は、土器の材料として使用された可能性が高いと考えることができる。だだし、粘土試料の砕屑物の割合が、土器胎土のそれに比べてやや低いことが認められたことから、採取された粘土に調整が加えられたことが示唆される。

（２）土器の地域性について

土器胎土中の砕屑物における鉱物片および岩石片の種類構成は、胎土の材料となった砂や粘土などの堆積物が採取された場所の地質学的背景を反映している。今回の分析結果では、自然堆積物である粘土試料が示した鉱物・岩石組成が、本遺跡における地質学的背景を反映した鉱物・岩石組成に相当する。その地質学的背景は、簗川流域に分布する北上山地北部を構成する地質である。吉田ほか（1984）、日本の地質「東北地方」編集委員会（1989）や岩手県土木技術振興協会・日本工営株式会社編（1991）などにより、簗川流域の地質を概観すると、本遺跡周辺は中・古生代の堆積岩類および火山岩類からなる早池峰構造体の西縁部に相当し、川目層および砂子沢層と呼ばれる地質の分布域にある。これらの地質を構成している岩石は、主に頁岩、砂岩、チャートの堆積岩類と粘板岩および塩基性の火山岩（多くは緑色岩）、凝灰岩とされている。さらに、簗川流域には中生代白亜紀に貫入した花崗

岩類の分布もあり、その周縁にはホルンフェルスが生成している。分析結果で示したＡ類の組成は、このような地質学的背景を反映している。したがって、Ａ類の土器試料は、前述したように土取り穴壁面採取粘土を材料とした可能性もあるが、簗川流域に分布する別の遺跡で製作された可能性もあると言える。今後、簗川流域における縄文土器の動向を検討する場合には、鉱物・岩石組成は類似したものになることが予想されるため、砕屑物の割合や粒径組成が重要な指標になると考えられる。

Ａ類以外の組成は、粘板岩および緑色岩をほとんど含まないことから簗川流域の地質学的背景とは異質、すなわち簗川流域外からの搬入品である可能性がある。各分類の胎土から推定される地質学的背景としては、Ｂ類は堆積岩類と花崗岩類、Ｃ類は堆積岩類と凝灰岩、Ｄ類とＥ類は堆積岩類と安山岩がそれぞれ主たる分布をしているような地域である。北上山地の地質は多様であり、これらの岩石はいずれも特に限定された分布域を示すことはないため、現時点では、Ｂ類以下の地域性を具体的に推定することはできない。ただし、今後の発掘調査事例の進展により、川目Ａ遺跡と関連するような地域が想定された場合に、その地域の地質学的背景を確認することにより、今回のＢ類以下の地域性に相当するか否かを判断することはできると考える。こうした事例の蓄積とともに、周辺地域の縄文土器の分析事例も蓄積し、比較することができれば、胎土各分類の具体的な地域性の検討が可能になると期待される。

引用文献

岩手県土木技術振興協会・日本工営株式会社編　1991　岩手県地質図（10万分の１）ⅢⅣ．岩手県土木部監修．

松田順一郎・三輪若葉・別所秀高　1999　瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－．日本文化財科学会第16回大会発表要旨集，120－121．

日本の地質「東北地方」編集委員会　1989　日本の地質２　東北地方．共立出版，338ｐ．

吉田　尚・大沢　穠・片田正人・須田芳郎　1984　20万分の１地質図幅「盛岡」，地質調査所

表１．試料一覧および胎土分類結果

土器No or No	仮No	出土遺構・地点	層位	時期	型式	胎土分類									
						鉱物・岩石					砂量		粒径組成		
						A	B	C	D	E	Ⅰ	Ⅱ	a	b	c
1	169	ＲＸ001（１号土取り穴）	埋土中	中期末葉	大木10式	■						■	■		
2	217	ＲＸ002（２号土取り穴）Ｑ３	埋土中	中期後葉	大木９式		■					■	■		
3	215	ＲＸ002（２号土取り穴）Ｑ１	埋土中	中期後葉	大木９式			■			■		■		
4	222	ＲＸ003（３号土取り穴）Ｑ３	埋土中	前期後葉	大木５式？	■						■	■		
5	231	ＲＸ003（３号土取り穴）Ｑ５	埋土中	中期後葉	大木９式	■						■	■		
6	225	ＲＸ003（３号土取り穴）Ｑ４	埋土中	中期末葉	大木10式		■					■		■	
7	238	ＲＸ004（４号土取り穴）東側	埋土中	後期前葉	不明		■					■	■		
8	242	ＲＸ005（５号土取り穴）	埋土中	前期前葉	大木１～２ａ式	■						■	■		
9	188	ＲＡ007（７号住）Ｑ３	埋土１層	前期後葉	大木５式？				■			■			■
10	376	ＲＡ008（16号住）Ｑ２	埋土中	早期中葉？	物見台式？					■	■			■	
11	9	５Ｘ６ｇ～５Ｘ６ｈグリッド	Ⅳ層	中期末葉	大木10式		■				■				■
12	261	第９トレンチ	Ⅳ層	後期中葉	不明	■						■			■
13	285	中央部捨て場（４ｗ６ｘグリッド）	Ⅲ～Ⅳ層	晩期前葉	大洞ＢＣ式	■						■			■
胎土１	－	ＲＸ001東壁	Ⅶ－１層	－	－	■					■				■
胎土２	－	ＲＸ001東壁	Ⅶ－２層	－	－	■					■		■		
胎土３	－	ＲＸ001中央部	Ⅶ－２層	－	－	■					■				■
胎土４	－	ＲＸ003	Ⅶ－２層	－	－	■					■				■
胎土５	－	ＲＸ001東壁	Ⅶ－３層	－	－	■					■				■

＜胎土分類＞

１）鉱物・岩石

Ａ：鉱物片は石英・長石類以外では角閃石と緑簾石が比較的多く、岩石片は堆積岩類・凝灰岩、花崗岩類、粘板岩、緑色岩などが比較的多い。

Ｂ：鉱物片は石英・長石類以外では角閃石、緑簾石および黒雲母などが比較的多く、岩石片は堆積岩類・凝灰岩および花崗岩類が比較的多い。

Ｃ：鉱物片は石英・長石類以外では緑簾石が比較的多く、岩石片は頁岩と凝灰岩が多い。

Ｄ：鉱物片は石英・長石類以外では両輝石と緑簾石が比較的多く、岩石片は安山岩が多い。

Ｅ：鉱物片は石英・長石類以外では両輝石と角閃石および緑簾石が比較的多く、岩石片は堆積岩類、凝灰岩および安山岩が少量、火山ガラスが比較的多い。

２）砂量

Ⅰ：砕屑物・基質・孔隙の割合において砕屑物の割合が20～30％

Ⅱ：砕屑物・基質・孔隙の割合において砕屑物の割合が30％以上

３）粒径組成

ａ：シルトと中粒砂の２段階の粒径にピークのある双峰性を示す。

ｂ：極細粒砂にモードがある。

ｃ：中粒砂にモードがある。

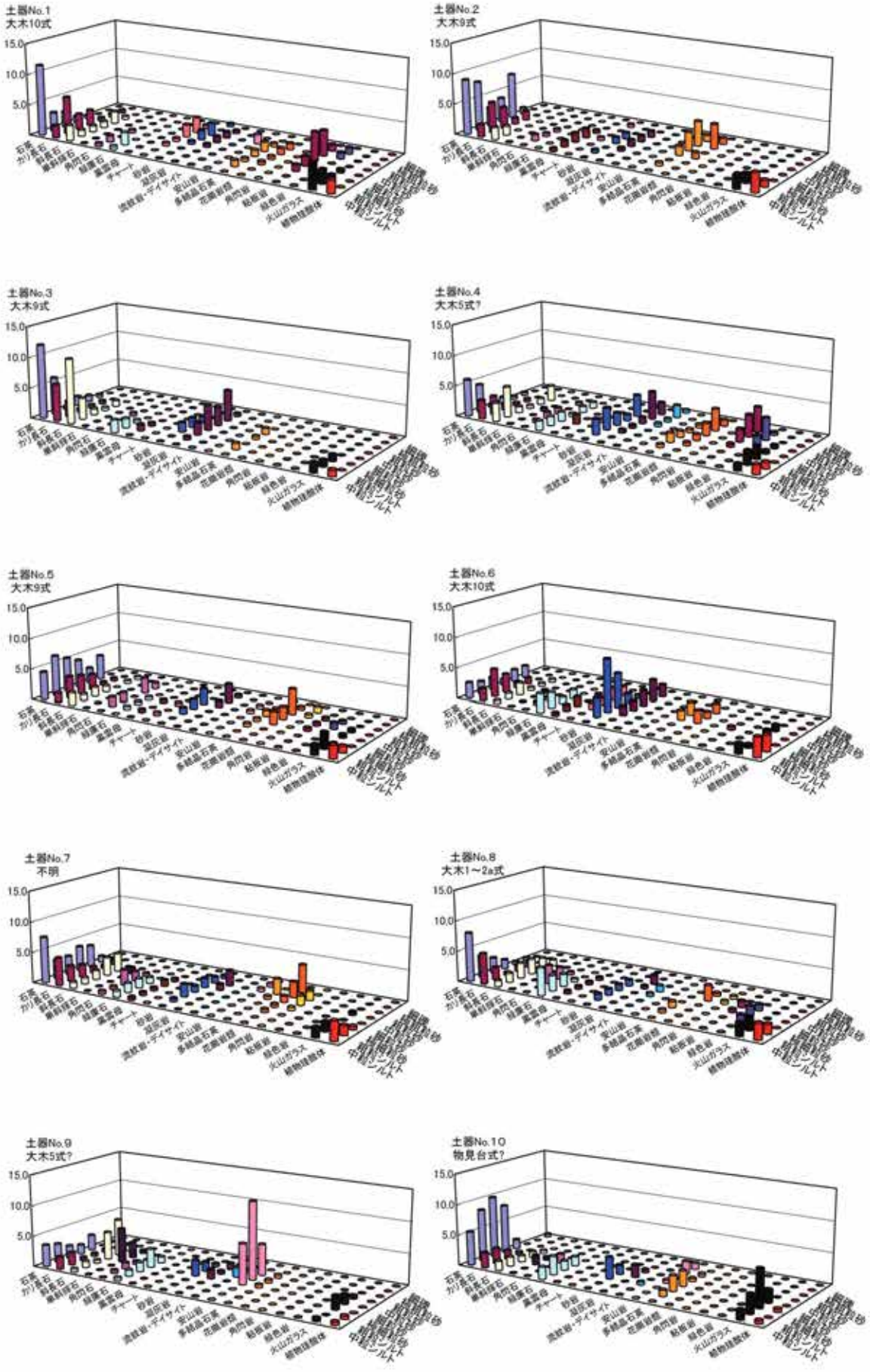


図1　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（1）

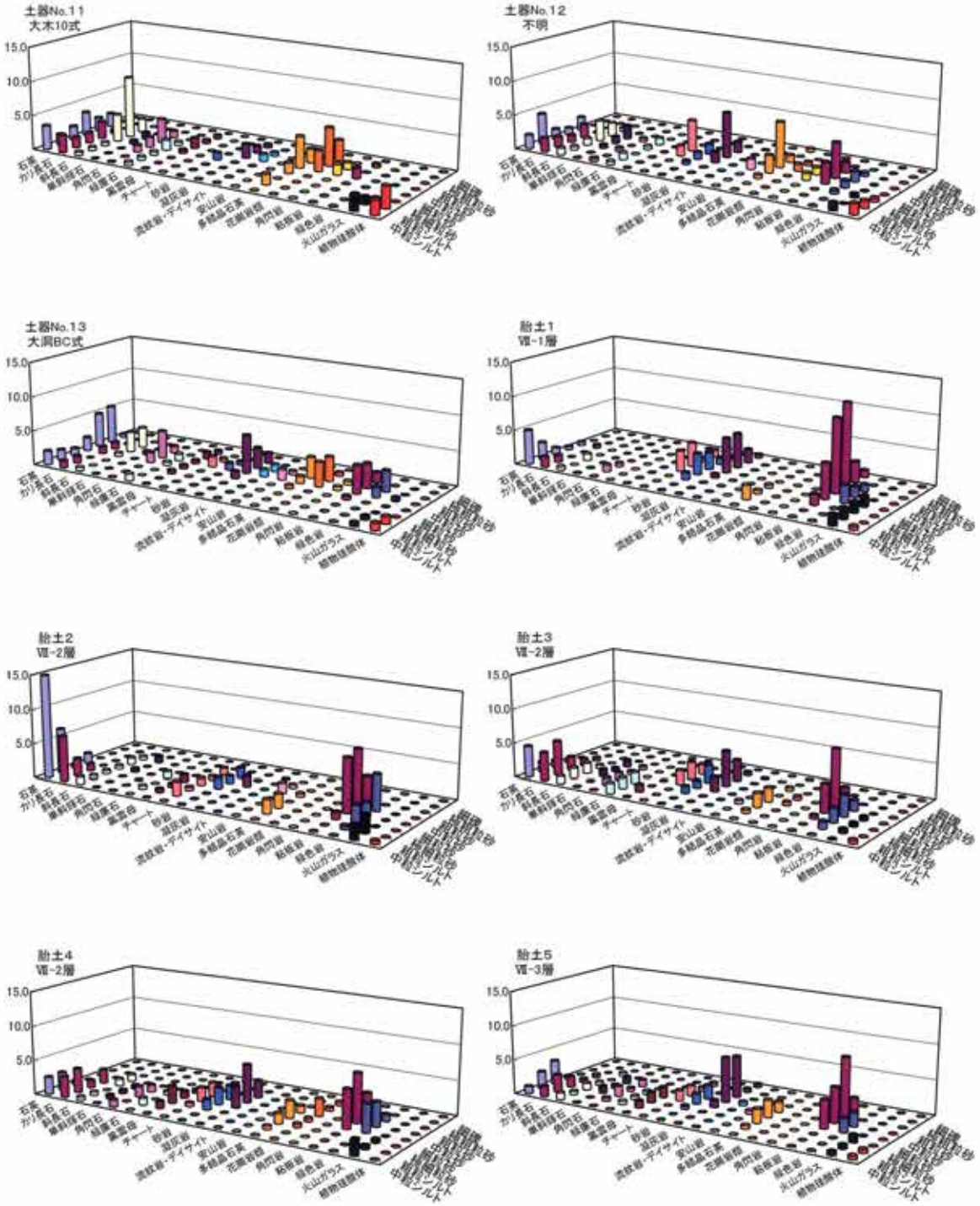


図１　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（２）

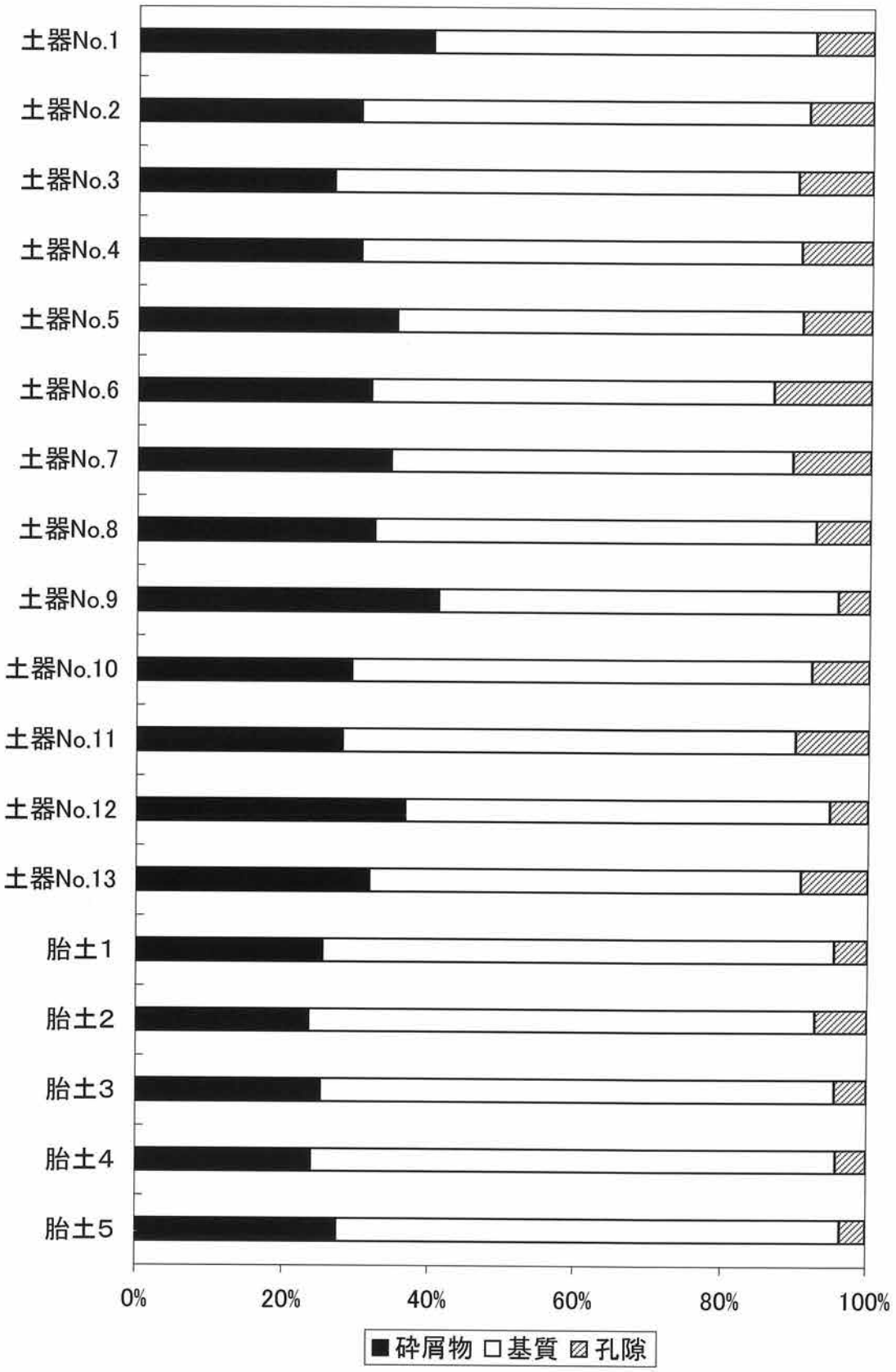


図２　砕宵物・期質・孔隙の割合

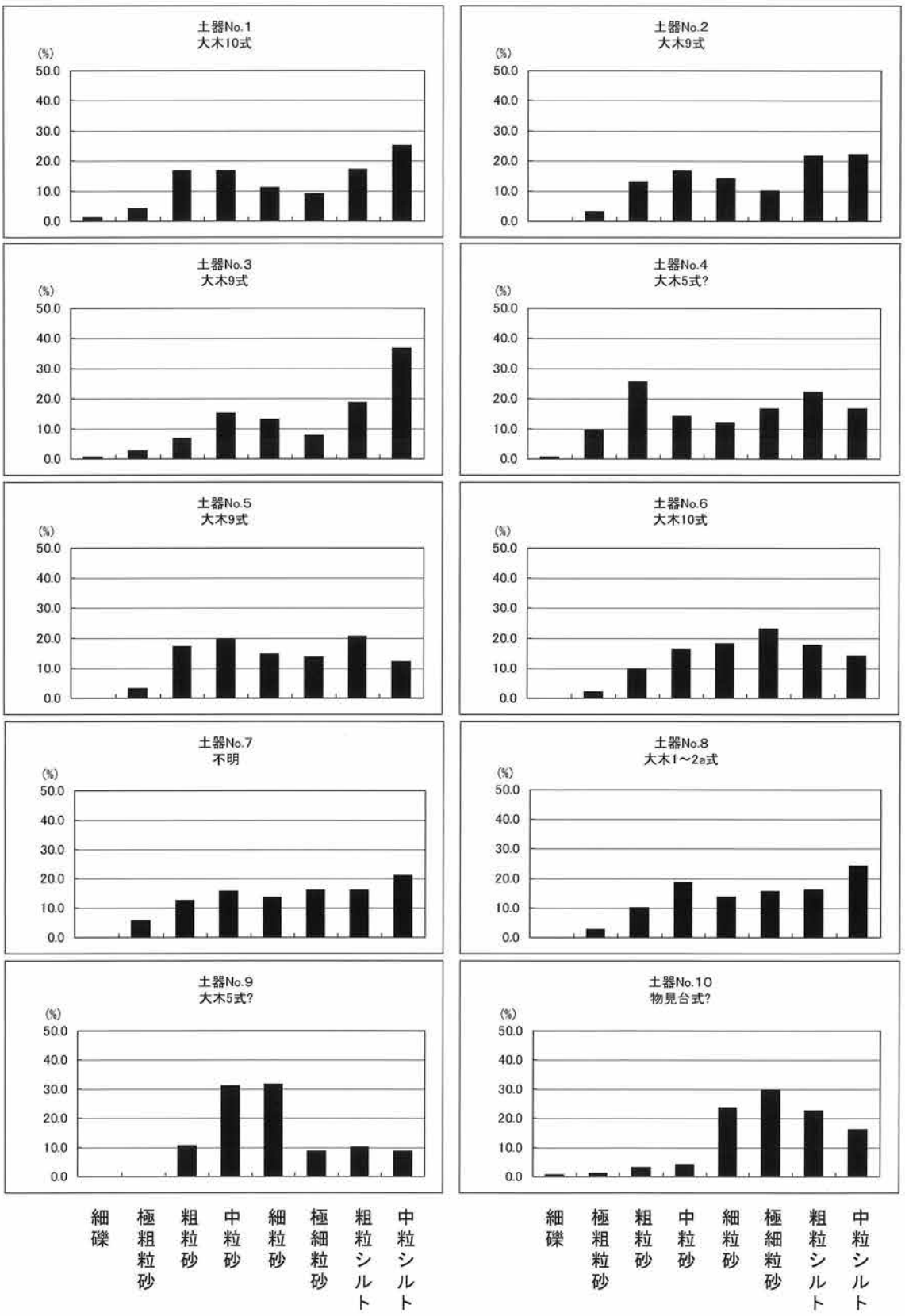


図３　胎土中の砂の粒径組織（１）

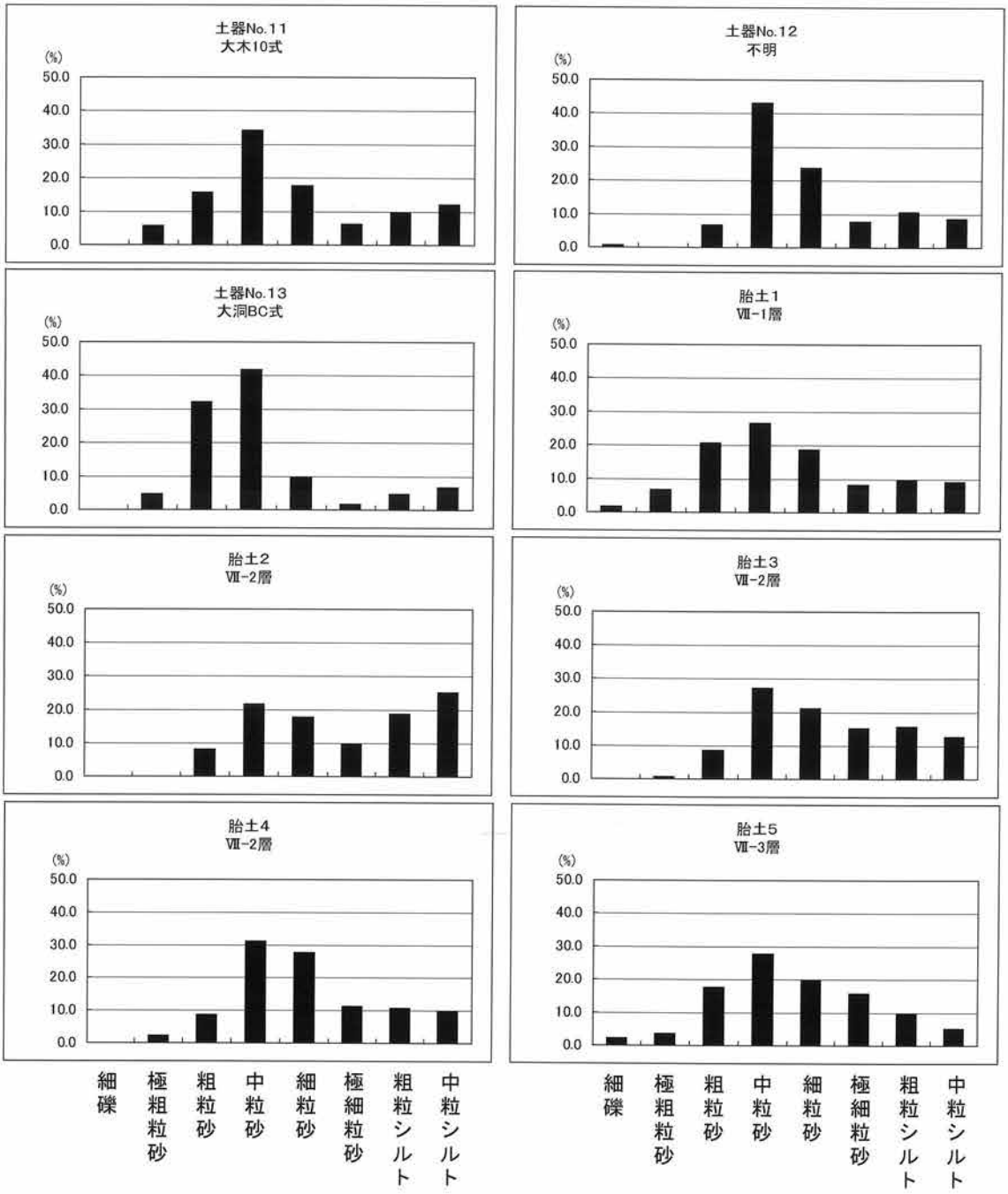


図3　胎土中の砂の粒径組織（2）

表２　薄片観察結果（その１）

土器No.または№	砂粒区分	砂粒の種類構成																																		合計
		鉱物片													岩石片																		その他			
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	緑廉石	白雲母	黒雲母	ジルコン	電気石	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	ガラス質安山岩	安山岩	玄武岩	多結晶石英	花崗岩類	角閃岩	結晶片岩	雲母片岩	粘板岩	緑色岩	ホルンフェルス	変質岩・交代岩	炭化物	火山ガラス	植物珪酸体				
1	細礫														1	1																				2
	極粗粒砂		1											1			1				1						2	2								8
	粗粒砂		1	1										5	1	4	2		3	3		1	2				8	2								33
	中粒砂	1	1	4	1								2	4		3	2					3	2				9		1							33
	細粒砂	2	5	2	1		1							1		1	1					2	1				3		1			1				22
	極細粒砂	5	5	2										1								1	1				2					1				18
	粗粒シルト	6	12	2			2	4					1									2							1			4				34
	中粒シルト	23	4	5			1	1					4																			8	4			50
	基質																																			260
	孔隙																																			40
2	細礫																																			0
	極粗粒砂													1	1							2	2													6
	粗粒砂	2													6		2					8	8													26
	中粒砂	15	3							1			1		3	2	2					6														33
	細粒砂	8	2				1			3				1	4	2	2					3	2													28
	極細粒砂	6	7				1			3			2				1																			20
	粗粒シルト	16	10	3			2			2			2		1	1						1										3	2			43
	中粒シルト	18	4	4					1	1			6																			4	6			44
	基質																																			405
	孔隙																																			58
3	細礫														1																					1
	極粗粒砂														4		1																			5
	粗粒砂	1													2		10																			13
	中粒砂	2	1	2					1						11	2	6					2						2	1							30
	細粒砂	3	1	1			1								8	3	8					1														26
	極細粒砂	1	1	2				1		1						3	4															2				15
	粗粒シルト	12	5	7				3		2			3				1					2										2				37
	中粒シルト	24	12	21				4					7																			3	2			73
	基質																																			475
	孔隙																																			77
4	細礫																	1																		1
	極粗粒砂																4	4					2				8	1								19
	粗粒砂	1		5			1	2		1					1	7	9	1				1	7				7	7	1							51
	中粒砂	1	1	2				2	1						2	2	2	1				1	4				4	3	1			1				28
	細粒砂	2	1	1	1	1	2	1						1	3	4	1					2	2				1					1				24
	極細粒砂	1	2	2			2	3	2	3					2	7	1					3	1									4				33
	粗粒シルト	9	6	10	1		1	3	1				1			5						1										4	2			44
	中粒シルト	12	6	6				3					1																			2	3			
	基質																																			396
	孔隙																																			64
5	細礫																																			0
	極粗粒砂			1											1		1						1	2												6
	粗粒砂	8	1	1			2								2		6			1		1	8	1			1	1	1							34
	中粒砂	5	1		1		5								2	5	2			1		2	4				1	2	7			1				39
	細粒砂	9	5	2				1		1				1		3						1	4				1					1				29
	極細粒砂	11	6	3			3	1								2						1														27
	粗粒シルト	13	7	2			3	1	3	1		2	1	1																		5	2			41
	中粒シルト	9	3	4									1																			3	4			24
	基質																																			314
	孔隙																																			54

表2　薄片観察結果（その2）

土器No.または試料No.	砂粒区分	砂粒の種類構成																																		合計
		鉱物片													岩石片																		その他			
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	緑簾石	白雲母	黒雲母	ジルコン	電気石	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	ガラス質安山岩	安山岩	玄武岩	多結晶石英	花崗岩類	角閃岩	結晶片岩	雲母片岩	粘板岩	緑色岩	ホルンフェルス	変質岩・交代岩	炭化物	火山ガラス	植物珪酸体	
6	細礫																																			0
	極粗粒砂															4																				4
	粗粒砂	4		1									3		1	7						3														19
	中粒砂	4	2	1					2	1			4	1	3	5					4	2							1		2					32
	細粒砂	2	2	1		1		3	1				2		11	3					3	4				1					2					36
	極細粒砂	4	6	4			1	2	1	3			2	1	17	3														1	1					46
	粗粒シルト	4	9	2			1	5		2					6																1	5				35
	中粒シルト	5	4	1				6		1			2																		3	6				28
	基質																																			346
	孔隙																																			84
7	細礫																																			0
	極粗粒砂														1				1			9														11
	粗粒砂	2	2												2	5			1		5	5	3													25
	中粒砂	7	1	6		2	1		1	1					3	2					1	2	3								1					31
	細粒砂	8	2	6			3	2		2					2							1	1													27
	極細粒砂	6	4	3			5	3	2	1			1		4							1									1	1				32
	粗粒シルト	6	5	2			1	3	3	1			4		1																3	3				32
	中粒シルト	15	9	2			1	2		1			3																		3	6				42
	基質																																			318
	孔隙																																			62
8	細礫																																			0
	極粗粒砂													5																						5
	粗粒砂	1		2	1									11		3						1	1													20
	中粒砂	1	2	4			1		1	1			1	10	2	1	2					5	1		1	2	2									37
	細粒砂	3	2	5			4	1		1			1	3	2		1										1	3								27
	極細粒砂	5	1	5			6	4	1	1			1	1	2						2							2								31
	粗粒シルト	7	4	3				5		1			2		2						1										4	3				32
	中粒シルト	16	10	2				9					2																		4	5				48
	基質																																			373
	孔隙																																			46
9	細礫																																			0
	極粗粒砂																																			0
	粗粒砂			2		1								3	1	2	1		10		1															21
	中粒砂	5	1	12	2	5		2							3	1	3		25		1							1			1					62
	細粒砂	3	1	9	6	11	1	6	1						5	3			13		1										3					63
	極細粒砂	4	1	1	1		2	3			1																				4					17
	粗粒シルト	6	4	2			1	2			4																					1				20
	中粒シルト	7	4	1	1			1			1																				1	1				17
	基質																																			266
	孔隙																																			21
10	細礫	1																																		1
	極粗粒砂																		2																	2
	粗粒砂																		4	1	1															6
	中粒砂	3		1										1		1					1						1									8
	細粒砂	16	1	2	3	1	3	3						1	3	4			1		5										4					47
	極細粒砂	20	3	2		3		3	1				1			7		1			5										12	1				59
	粗粒シルト	17	5	3	1			6	1				4								2										6					45
	中粒シルト	11	5	3				4	2				3																		3	1				32
	基質																																			430
	孔隙																																			54

表２　薄片観察結果（その３）

土器Noまたは№	砂粒区分	砂粒の種類構成																																	合計
		鉱物片													岩石片																		その他			
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	緑廉石	白雲母	黒雲母	ジルコン	電気石	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	ガラス質安山岩	安山岩	玄武岩	多結晶石英	花崗岩類	角閃岩	結晶片岩	雲母片岩	粘板岩	緑色岩	ホルンフェルス	変質岩・交代岩	炭化物	火山ガラス	植物珪酸体		
11	細礫																																		0
	極粗粒砂									1					1		1						6		1		1								11
	粗粒砂	4		4			2			1							2	1				4	11	2											31
	中粒砂	4	1	18	1	2	7	1	1	3			2		1		4	2				9	6	3			3								68
	細粒砂	7	5	8		1	3	3		1			2			2						3													35
	極細粒砂	4	3	1			2	1							1																				12
	粗粒シルト	3	3	1				1														3									2	6			19
	中粒シルト	7	5	1				1					2																		4	4			24
	基質																																		442
	孔隙																																		72
12	細礫																				1														1
	極粗粒砂																																		0
	粗粒砂			1													3				2	1		1	1	3	1							13
	中粒砂	4		4	1	4	1	2	3					9	6	3	13				13	2	2	1	1	10	3		4					86
	細粒砂	2	4	6		2		1					1	3	3	2	3			3	5		2		1	6	2			1				47
	極細粒砂	3	2	2		1	1		1							1					1						1				1	1		15
	粗粒シルト	9	3	1				2	3				1																			2		21
	中粒シルト	4	4	2			1	1																							2	3		17
	基質																																		317
	孔隙																																		29
13	細礫																																		0
	極粗粒砂	1								1							3						1				3								9
	粗粒砂	11		6			2		1	2				1	2	1	6	2		1		6	7	1	1		7	6	1					64
	中粒砂	10	2	6	1	1	8	2		1			3	3	3	2	11	2		3		2	7	1	1		8	3	1	1		1			83
	細粒砂	4	2	1			3	1	2	1			1				2					1					1								19
	極細粒砂	2								1																									3
	粗粒シルト	3	2										1																			1	2		9
	中粒シルト	4	2	1				2					1																			1	2		13
	基質																																		371
	孔隙																																		58
貼土1	細礫																1									2									3
	極粗粒砂													2		1	4									6									13
	粗粒砂													1	2	2	10									24	2								41
	中粒砂	1	1											7	3	5	10									21	3	2							53
	細粒砂	1												6	3	6	1					1				10	5	1			3				37
	極細粒砂	2		2			1		1						1	2						1				3					3				16
	粗粒シルト	5	2		1		2						2									4									3				19
	中粒シルト	10	3	1																											3	1			18
	基質																																		551
	孔隙																																		36
貼土2	細礫																																		0
	極粗粒砂																																		0
	粗粒砂			1		2								2		3				1						7									16
	中粒砂			2	4									1	1	2	3			3		1				16	10								43
	細粒砂	3		1		1		2		2			1	2		3										15	4	1							35
	極細粒砂	1	2	1	1				1	1				1								4				2	5								19
	粗粒シルト	13	5	1				1	1	1			1	4								4					1				5				37
	中粒シルト	30	13	2																											4	1			50
	基質																																		588
	孔隙																																		61

表２　薄片観察結果（その４）

土器No.または№	砂粒区分		砂粒の種類構成																																		合計
			鉱物片													岩石片																		その他				
			石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	緑簾石	白雲母	黒雲母	ジルコン	電気石	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	ガラス質安山岩	安山岩	玄武岩	多結晶石英	花崗岩類	角閃岩	結晶片岩	雲母片岩	粘板岩	緑色岩	ホルンフェルス	変質岩・交代岩	炭化物	火山ガラス	植物珪酸体		
胎土3	砂	細礫																																			0
		極粗粒砂															1																				1
		粗粒砂												3	1		6					1					4		2							17
		中粒砂		1			2	1						5	8	5	10						1				16	3	2							54
		細粒砂	1	2	1		1	1						4	5	2	4					4	1				8	6	1			1				42
		極細粒砂	2	4	3		2	2	3					1			2				1		4					1	4				1				30
		粗粒シルト	3	10	3			2	3	1	2			3									1						2				1				31
		中粒シルト	9	8	2				3	1				1																				1			25
	基質																																				558
	孔隙																																				35
胎土4	砂	細礫																																			0
		極粗粒砂												1									1			1			1								4
		粗粒砂													1		5						1			1	7	2								17
		中粒砂			2	1					1			4	6	4	11					2	5			1	14	7	4							62
		細粒砂		4	2	2	1	2	1		2			4		5	6					5	1				11	8	1							55
		極細粒砂	1	2			1	3			5			1	1		3					3	1									1				22
		粗粒シルト	5	7	1	1	1		2		2											1										1				21
		中粒シルト	5	6	1			2		1																							4				19
	基質																																				603
	孔隙																																				35
胎土5	砂	細礫													1		1												2								4
		極粗粒砂												1	1		1										4									7
		粗粒砂			1									1	4		12										17									35
		中粒砂		1			2	2						3	6	4	13	1				3					10	4	6							55
		細粒砂	1	1	1		1	1	1		3			3		3	2				1	5					8	4	4							39
		極細粒砂	7	3	2		2	3	1	1	3					1						4							2			2				31
		粗粒シルト	5	5	1			1	1		2			1								1										1	1			19
		中粒シルト	2	3	2									1																		1	1			10
	基質																																				502
	孔隙																																				26

表３．胎土分類結果（時期順）

土器NoorNo	仮No	出土遺構・地点	層位	時期	型式	胎土分類									
						鉱物・岩石					砂量		粒径組成		
						A	B	C	D	E	Ⅰ	Ⅱ	a	b	c
10	376	ＲＡ008（16号住）Ｑ２	埋土中	早期中葉？	物見台式？					■	■			■	
8	242	ＲＸ005（５号土取り穴）	埋土中	前期前葉	大木１～２ａ式	■						■	■		
4	222	ＲＸ003（３号土取り穴）Ｑ３	埋土中	前期後葉	大木５式？	■						■	■		
9	188	ＲＡ007（７号住）Ｑ３	埋土１層	前期後葉	大木５式？				■			■			■
2	217	ＲＸ002（２号土取り穴）Ｑ３	埋土中	中期後葉	大木９式		■					■	■		
3	215	ＲＸ002（２号土取り穴）Ｑ１	埋土中	中期後葉	大木９式			■			■				
5	231	ＲＸ003（３号土取り穴）Ｑ５	埋土中	中期後葉	大木９式	■						■	■		
1	169	ＲＸ001（１号土取り穴）	埋土中	中期末葉	大木10式	■						■	■		
6	225	ＲＸ003（３号土取り穴）Ｑ４	埋土中	中期末葉	大木10式		■					■		■	
11	9	５Ｘ６ｇ～５Ｘ６ｈグリッド	Ⅳ層	中期末葉	大木10式		■				■				■
7	238	ＲＸ004（４号土取り穴）東側	埋土中	後期前葉	不明		■					■	■		
12	261	第９トレンチ	Ⅳ層	後期中葉	不明	■						■			■
13	285	中央部捨て場（４ｗ６ｘグリッド）	Ⅲ～Ⅳ層	晩期前葉	大洞ＢＣ式	■						■			■
胎土１	－	ＲＸ001東壁	Ⅶ－１層	－	－	■					■				■
胎土２	－	ＲＸ001東壁	Ⅶ－２層	－	－	■					■		■		
胎土３	－	ＲＸ001中央部	Ⅶ－２層	－	－	■					■				■
胎土４	－	ＲＸ003	Ⅶ－２層	－	－	■					■				■
胎土５	－	ＲＸ001東壁	Ⅶ－３層	－	－	■					■				■

＜胎土分類＞

１）鉱物・岩石

Ａ：鉱物片は石英・長石類以外では角閃石と緑廉石が比較的多く、岩石片は堆積岩類・凝灰岩、花崗岩類、粘板岩、緑色岩などが比較的多い。

Ｂ：鉱物片は石英・長石類以外では角閃石、緑廉石および黒雲母などが比較的多く、岩石片は堆積岩類・凝灰岩および花崗岩類が比較的多い。

Ｃ：鉱物片は石英・長石類以外では緑廉石が比較的多く、岩石片は頁岩と凝灰岩が多い。

Ｄ：鉱物片は石英・長石類以外では両輝石と緑廉石が比較的多く、岩石片は安山岩が多い。

Ｅ：鉱物片は石英・長石類以外では両輝石と角閃石および緑廉石が比較的多く、岩石片は堆積岩類、凝灰岩および安山岩が少量、火山ガラスが比較的多い。

２）砂量

Ⅰ：砕屑物・基質・孔隙の割合において砕屑物の割合が20～30％

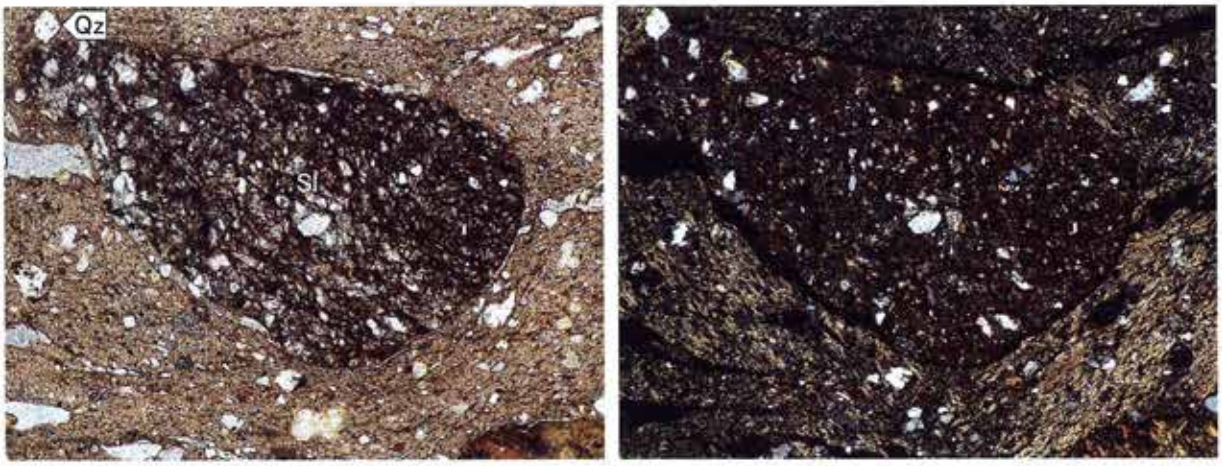
Ⅱ：砕屑物・基質・孔隙の割合において砕屑物の割合が30％以上

３）粒径組成

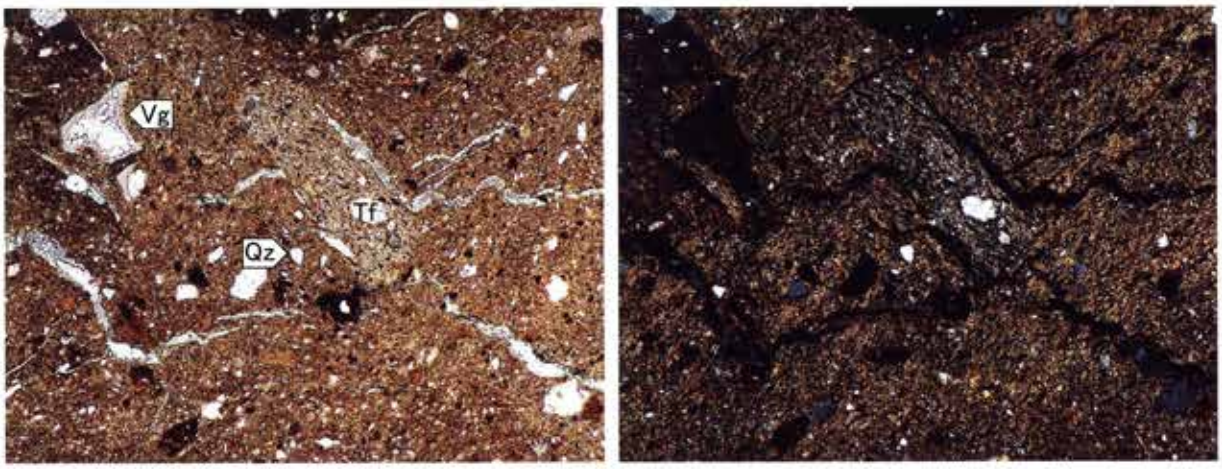
ａ：シルトと中粒砂の２段階の粒径にピークのある双峰性を示す。

ｂ：極細粒砂にモードがある。

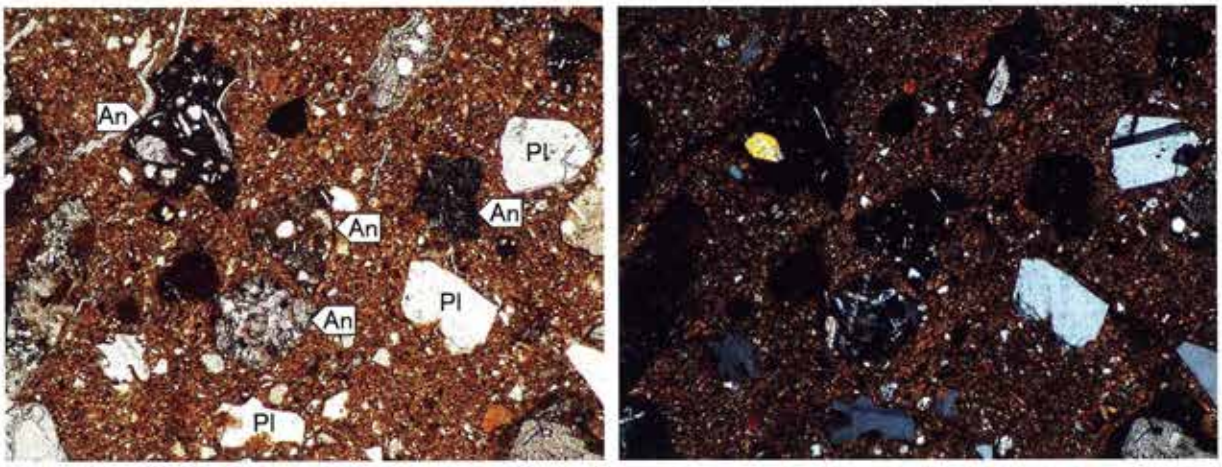
ｃ：中粒砂にモードがある。



1.土器No.1(RX001埋土中　中期末葉　大木10式)



2.土器No.3(RX002Q3埋土中　中期後葉　大木9式)

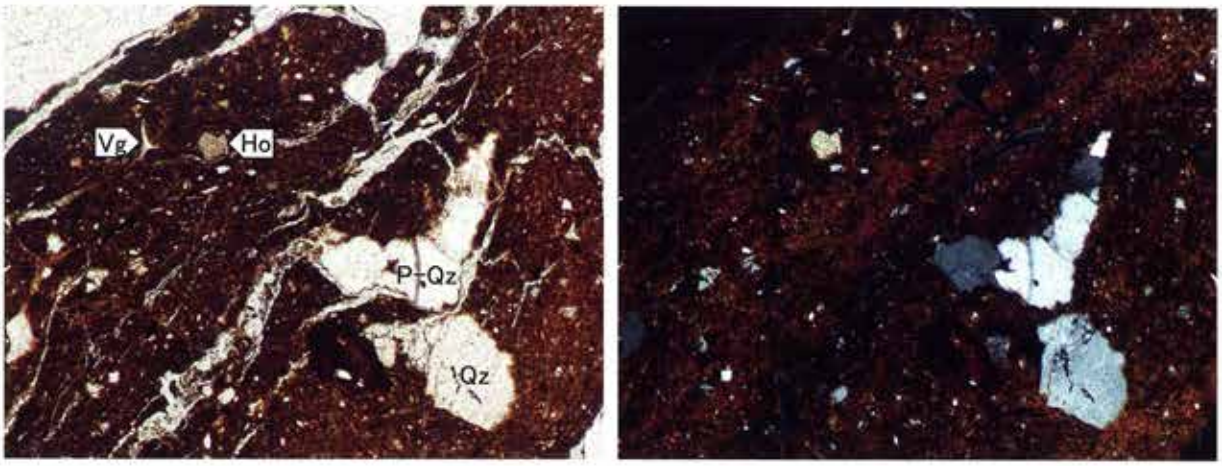


3.土器No.9(RA007Q3　埋土1層　前期後葉　大木5式?)

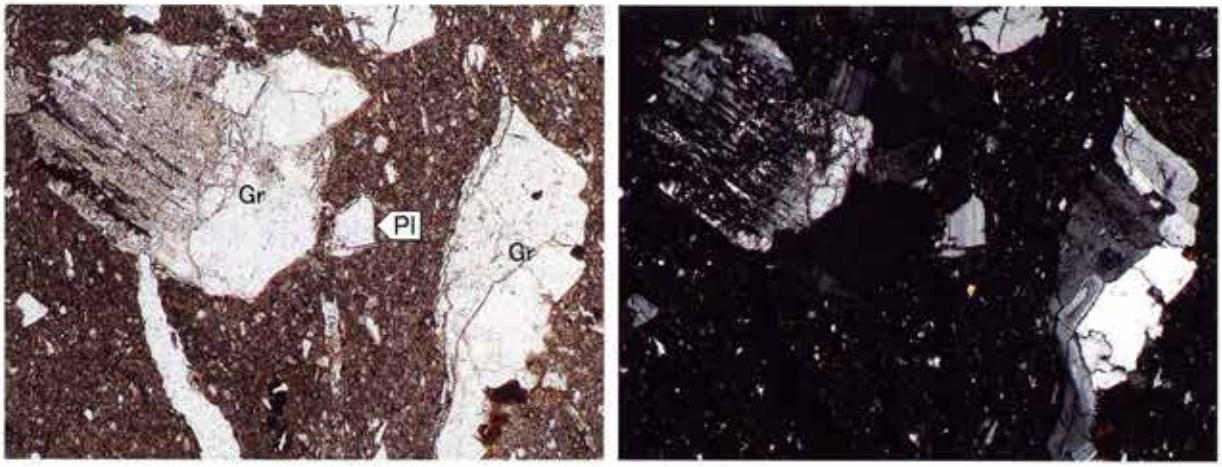
Qz:石英. Pl:斜長石. Tf:凝灰岩. An:安山岩. Vg:火山ガラス. Sl:粘板岩.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

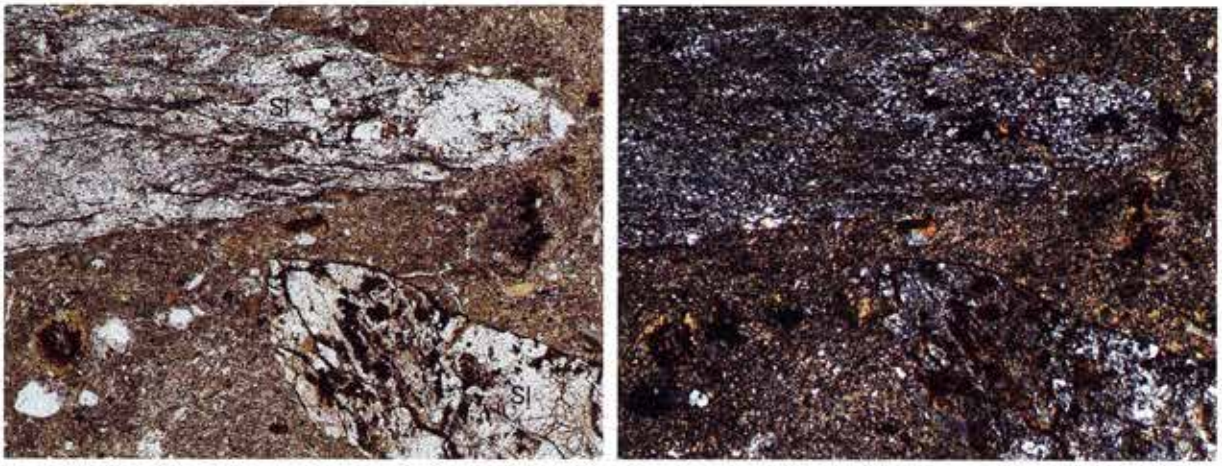
図版1　胎土薄片（1）



4.土器No.10(RA008Q2　埋土中　早期中葉?　物見台式?)



5.土器No.11(5X6g～5X6hグリッド　Ⅳ層　中期末葉　大木10式)



6.胎土1(RX001東壁　Ⅶ-1層)

Qz:石英. Pl:斜長石. Ho:角閃石. P-Qz:多結晶石英. Gr:花崗岩.
Vg:火山ガラス. Sl:粘板岩.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

図版1　胎土薄片（2）

6　分析に関する調査担当者の所見（コメント）

星　雅之

今回の調査では、琥珀分析、火山灰分析、年代測定、黒曜石原産地同定、胎土分析、炭化材樹種同定、石器・石製品の石材鑑定について、それぞれ分析を委託した。ここでは、先に試料の出土地・層位などの概要を記述し、それらの鑑定結果から導かれた内容や、発掘調査から得られた内容とのその整合性などの観点から、調査担当者として若干の所見を付記する。

（1）琥　珀　分　析

今回の調査では、ＲＡ009、ＲＡ010、ＲＤ146の３遺構から琥珀の砕片が出土した。これらの遺構については、何れも縄文時代中期である。琥珀分析の結果、久慈市産およびいわき市産の琥珀の可能性が示唆された。ただし、今回の資料は何れも劣化が激しく、産地の違いを見極めるには至らなかった。

（2）火 山 灰 分 析

分析を委託した試料は、野外調査時の肉眼観察で、何らかのテフラと推定されたものである。サンプル名は火山灰１～５と呼称した。その中で、火山灰１～４は高位面で、火山灰５は低位面で検出されたものである。調査時の所見としては、火山灰１はＴｏ－Ｃｕ、火山灰２・３は掘切テフラ、火山灰４はＴｏ－Ｃｕ、火山灰５はＴｏ－Ｏｆ？に、それぞれ推定された。なお、Ｔｏ－ａは未確認にあることも付記しておきたい。

火山灰１は、基本層序Ⅳ層中に混在していた資料で、火山灰２・３とした試料より上位層で検出した。野外調査時は層位・性状からＴｏ－Ｃｕと推定した。分析からも、十和田中掫テフラ（Ｔｏ－Ｃｕ）に由来すると思われる旨の結果を得られた。また、Ｔｏ－Ｃｕに層位が近い岩手火山起源のテフラとしては、Ｔｏ－Ｃｕのすぐ上位において、おもに橙褐色のスコリアからなる巣子スコリアが岩手火山中腹にあるらしく、橙褐色スコリアの斜方輝石の屈折率（γ）も1.706－1.708で（古澤，2003）、今回得られたrangeに入る、との興味深い情報も得られた。火山灰２・３は、縄文早期中葉の竪穴住居跡であるＲＡ003の埋土上～中位に混在していたオレンジ色のパミス様である。野外調査時の所見としては、縄文時代早期末葉～前期初頭の降下とされる堀切テフラの可能性が示唆された。分析の結果、現状のテフラデータとの比較からは堀切テフラの特定には至らなかった。火山灰４は、黄褐色粘土層（※本調査における地山）上面で局所的に見られた浅黄橙色の堆積物で、肉眼観察ではＴｏ－Ｃｕと類似する。ただし、層位的には更新世テフラの可能性が高く、Ｔｏ－ＯｆやＴｏ－Ｈが想定された。分析からは、Ｔｏ－Ｏｆの可能性も考えられるが、火山ガラスの形態組成がＴｏ－Ｃｕのそれと非常によく似ており、何らかの攪乱を受けたＴｏ－Ｃｕである可能性も示唆された。火山灰５は、黄褐～浅黄橙色を呈するもので、Ⅳ層最下位にみられることから年代的にはＴｏ－Ｃｕと合致する。分析からは、「Ｔｏ－Ｃｕに由来する可能性が高いと考えられよう」との結果が得られた。

今回のテフラ分析の結果からは、本地域にも確実にＴｏ－Ｃｕが存在することが明らかとなった。対して、堀切テフラについては、残念ながらその存在を裏付けることができなかった。

（3）年　代　測　定

土器の内面付着煤と焼失住居から出土した炭化材を試料とし、Ｃ１～Ｃ14と命名した14点について

年代測定を委託した。年代測定試料は、①前期後葉、②中期後葉、③中期末葉、④後期前葉、⑤晩期初頭、⑥晩期前葉の６時期に大別される。上記した時期毎にＣ14年代の結果について概観し、所見を加えたい。

①前期後葉：Ｃ１・Ｃ７が該当する。２点ともに大木５式と推定される土器で、これらの内面付着煤を試料とした。Ｃ１（掲載番号11※以後本項では掲載番号という文言を省略する）の土器は、ＲＡ006竪穴住居跡から出土したもので、4,980±40ｙｒＢＰの測定結果である。Ｃ７（243）の土器は、調査区中央部捨て場から出土したもので、4,890±40ｙｒＢＰの測定値を得られた。今回の測定値は、周知されている該期年代と比較して、若干古い結果を示しているようにも思われる。

②中期後葉：Ｃ２・Ｃ３・Ｃ９の３点が該当する。３点ともに大木９式土器の内面付着煤を試料とした。Ｃ２（77）の土器が4,380±40ｙｒＢＰ、Ｃ３（90）の土器が4,100±40ｙｒＢＰ、Ｃ９（318）の土器が4,410±40ｙｒＢＰの測定値を得られた。Ｃ２・Ｃ９はほぼ同じ年代値を示した。対して、Ｃ３が若干新しい年代値を示したが、この数値自体は次の中期末葉の測定結果に近似する。

③中期末葉：Ｃ４・Ｃ５・Ｃ６・Ｃ13・Ｃ14が該当する。Ｃ４・Ｃ５・Ｃ６が大木10式土器の内面付着煤を、Ｃ13・Ｃ14が焼失住居から出土した炭化材試料である。Ｃ４（102）の土器が3,970±40ｙｒＢＰ、Ｃ５（172）の土器が4,140±40ｙｒＢＰ、Ｃ６（186）の土器が4,580±40ｙｒＢＰ、Ｃ13が4,100±40ｙｒＢＰ、Ｃ14が4,150±30ｙｒＢＰの測定値を得られた。Ｃ４が新しく、Ｃ６が古い年代値を示した。それ以外は4,150～4100　ｙｒＢＰにまとまりが窺える。

④後期前葉：Ｃ８が該当する。Ｃ８（370）の土器が3,760±40ｙｒＢＰの測定値を得られた。後期前葉は１点の測定であるが、中期末葉の測定結果と比較すると整合するように思われる。

⑤晩期初頭：Ｃ10が該当する。Ｃ10（463）の土器が、2,990±40ｙｒＢＰの測定値を得られた。

⑥晩期前葉：Ｃ11・Ｃ12が該当する。Ｃ11（475）の土器が2,990±40ｙｒＢＰ、Ｃ12（473）の土器が2,950±40ｙｒＢＰの測定値を得られた。晩期初頭と近似した測定結果であるが、Ｃ10とＣ12を比較すると概ね50年間の開きが看取できようか。

今回の年代測定値をみると、概ね土器編年と整合することが指摘できる。特に、前期後葉、中期後葉、後期前葉については、該期年代を探る上で興味深い結果を得られたと評価できよう。

（４）黒曜石原産地同定

今回の調査では黒曜石製の石器（tool）11点とチップ・フレークが少量出土した。出土した黒曜石の中で、分析対象としたのは黒曜石１～３とした３点の薄片（フレーク）である。

黒曜石１とした試料は、調査区南西部の５Ｘ15ｊグリッドⅣ層から出土した。この地点は、縄文時代前期後葉大木５式期を中心とする集落域である。ただし、共伴した出土土器は縄文時代早期中葉～晩期前葉まで多岐にわたるため、詳細な時期は特定できない。黒曜石２とした試料は調査区東部の２Ｙ15ｗグリッドⅣ層から、黒曜石３とした資料は調査区東部の２Ｙ24ｖグリッドⅣ層から出土した。この２点の出土地点は、出土層位であるⅣ層から中期後葉～後期中葉の土器が顕著に出土しており、今回分析を実施しなかった黒曜石製石器11点の内10点が同様に調査区東部Ⅳ層から出土している。追記すると、石器11点は、実測図化の外部委託の関係で、残念ながら今回の分析から除外している。

分析の結果、３点共に産地判定外となった。分析を行ったパリノ・サーヴェイ株式会社によれば、貴社が保有している東北地方の原産地試料である脇本と月山の領域に該当しないことが判明しており、青森県の深浦、岩手県の雫石、宮城県の湯倉などの産地試料に位置づけられる可能性を残す。何れ、今回の分析結果からは、具体的な産地について議論することは難しく、今後への検証課題と思われる。

（5）胎　土　分　析

今回の調査で検出された土取り穴について、土器の材料となる粘土を採取した粘土採掘坑の可能性を探る目的で、胎土分析を実施した。分析の対象とした試料は、ＲＸ001土取り穴の壁や底から採取した粘土サンプル（胎土１～５と呼称した）と、各時期の土器片（胎土分析土器１～13）である。今回の調査において土取り穴は、高位面に立地する調査区西部からのみ検出された。この調査区西部は、縄文時代中期末葉（大木10式期）を主体とする竪穴住居跡が複数確認され、当該期の集落域と捉えられる。土取り穴が検出されたこの調査区西部は、水田造成に伴い削平を受け、所々基盤礫層や砂礫層が露出する部分もある。ただし、全面に亘り一律とは言えないものの、良好な粘土層が採掘される可能性が高い場にあることは指摘できよう。なお、調査区西部と同様に高位面にある調査区南西部からは、土取り穴は未検出にある。調査所見としては、調査区西部と比較して基盤層自体も微妙に相違するように思われた。調査区西部は、同じ高位面の中にあっても、良好な粘土層が存在する貴重な場にあると考えられる。

①土器試料：土器試料は、縄文時代（以後本項では縄文時代を省略する）早期～晩期の土器で、サンプル名は土器１～13と呼称している（第146図・写真図版96図に掲載している）。試料の抽出に際しては、当初不掲載予定であった土器破片の中で、土器型式を判断する文様が比較的明瞭なものを採用した。早期中葉は、土器10（※掲載番号1060）を試料とした。胎土の様相から早期中葉の物見台式期と推定される。前期前葉は、土器８（1058）を試料とした。なお、本試料は、０段多条の原体を用い、胎土中に繊維の混入が顕著に認められるもので大木２式若しくは大木１式と推定した。前期後葉は、土器４（1054）と土器９（1059）を試料とした。なお、土器４・５ともに単軸絡条体第１Ａ類を施文する土器で、繊維の混入がないことから、前期後葉大木５式期と推定したものである。中期後葉は、土器２（1052）・土器３（1053）・土器５（1055）を試料とした。３点ともに大木９式と判断される。中期末葉は、土器１（1051）・土器６（1056）・土器11（1061）を試料とした。３点ともに大木10式と判断される。後期前葉は、土器７（1057）を試料とした。弧状気味の沈線文様がモチーフされる土器で、後期前葉若しくは後期初頭と判断される。後期中葉は、土器12（1062）を試料とした。大ぶりの波状口縁を持つ特徴などから、該期と判断される。東北北部では十腰内２式に類似する。晩期前葉は、土器13（1063）を試料とした。羊歯状文を持つ特徴から、大洞ＢＣ式と判断される。

②粘土試料：土取り穴の壁や底を構成する地山（基本層序Ⅶ層）は、深度によって若干の差異が看取されたので、現場時にサンプリングする際は土取り穴の壁面において、上位から下位にかけて、Ⅶ層－１（地山１）、Ⅶ層－２（地山２）、Ⅶ層－３（地山３）、と仮称して採取した。下記にこれらの説明を補足する。

Ⅶ層－１は、地山粘土層の中では最上位にのる土層で、土取り穴の検出面上から10～20cmの層厚でみられる。土質は、黄褐色粘土質シルト（粘土と土の中間的な様相）で、粘性はやや弱い。観察所見としては、良好な粘土層とは思われない。今回の分析試料では胎土１が該当する。

Ⅶ層－２は、Ⅶ層－１とⅦ層－３の中間にみられる粘土層で、10～30cmの層厚でみられる。土質は、明黄褐～黄褐色粘土で、粘性は強く、硬く締まる。観察所見としては、Ⅶ層－１とした粘土層よりやや黄色味が強い良好な粘土層である。このⅦ層－２とした土層が、最も‘粘土らしい粘土’であり、採掘の対象となった粘土層ではないかと考えられる。今回の分析試料では胎土２・３・４が該当する。

Ⅶ層－３は、Ⅶ層－２の下位にみられる砂礫を含む粘土層である。土取り穴の検出面から50～60cm下位でみられる。本層をさらに掘り下げると、砂礫層が表れる。土取り穴の底面や深い土坑の底面は、

このⅦ層－３や砂礫層となることが多く、粘土は採取できない。今回の分析試料では胎土５が該当する。

③分析結果に対する所見：土器試料（土器１～13）については、前期後葉、中期後葉、中期末葉は同じ土器型式の中にあっても、異なる組成を示したものがある。また、時期・土器型式は違っても同じ組成を示すものも存在することが合わせて明らかとなった。分析の考察で述べられているように、「Ａ類以外の組成が簗川流域の地質学的背景とは異質、すなわち簗川流域外からの搬入品である可能性がある。」ことは興味深い内容である。粘土試料（胎土１～５）は、「土取り穴壁面採取の粘土試料は、土器の材料として使用された可能性が高いと考えることができる。だだし、粘土試料の砕屑物の割合が、土器胎土のそれに比べてやや低いことが認められたことから、採取された粘土に調整が加えられたことが示唆される。」旨の考察結果を得られている。このことから、本遺跡で検出された土取り穴は、土器製作を意図した粘土採掘坑であった可能性は十分に考えられよう。ただし、胎土１～５としたものは何れも同様の組成を示したことから、Ⅶ層－１、Ⅶ層－２、Ⅶ層－３の層位的な違いについては、胎土分析からは看取できなかった。従って、野外調査時に考えたⅦ層－２が土器製作に用いられた粘土であることは明らかにできなかったと言える。しかしながら、若干の公明として分析表にある薄片観察結果を見る限り、砂粒区分で細礫とされた粒の大きい岩片がⅦ層－１とⅦ層－２には無く、Ⅶ層－３には含まれる違いが看取されたことが挙げられよう。

（６）炭化材樹種同定

今回の調査で出土した炭化材の中で、肉眼で判別可能と思われた遺存が良いもの21点を岩手県木炭協会に鑑定をお願いした。その結果、21点中10点の種類が特定できた。その10点の炭化材は焼失家屋と判断したＲＡ010の床面直上を中心に出土したもので、柱など当時の建築部材と考えられる。今回判明した材は、クリ、ナラ、ケヤキの３種類で、最も多かったのはクリである。

（７）石器・石製品の石材鑑定

石器・石製品の石材鑑定は、花崗岩研究会により実施された。剥片石器は６種類、礫石器は17種類、石製品は11種類の石材が用いられていることがわかった。剥片石器では、頁岩が全体の約80％を占める。また、奥羽山脈産のメノウが一定量看取されたことも特記事項として挙げておく。礫石器は、頁岩、輝緑凝灰岩、安山岩、蛇紋岩、デイサイト、花崗閃緑岩の順に多い結果を示し、併せて非常に多くの石材が用いられていることが分かった。特記事項として、①安山岩とデイサイトは全て奥羽山脈産であること、②磨石には非常に多くの石材が用いられていること、③蛇紋岩を用いているのは全て磨製石斧であることの３点を挙げておきたい。石製品は、頁岩、砂岩、輝緑凝灰岩、粘板岩、デイサイトの順に多い結果を示す。礫石器と比較した場合、砂岩と粘板岩が多く、蛇紋岩が少ない相違点が指摘できようか。

小結として、最も多く用いられている頁岩をみると、剥片石器と礫石器は北上山地産で古生代～中生代ジュラ紀の素材が、石製品では奥羽山脈産で新生代新第三紀の素材が多いと言う興味深い結果を示す。また、礫石器の中で最も多い磨石をみると、多種にわたる石材が用いられている。このことは、器種や用途の違いで、用いられる石器素材が微妙に異なることが指摘できようか。また、奥羽山脈産の石材の存在からは、素材の入手経路や当時の交易の在り方を検討する上でも、貴重な資料を提供すると考えられる。

Ⅶ　総　　括

今回の調査では、竪穴住居跡15棟、掘立柱建物跡４棟、土坑60基、竪穴建物跡２棟、炉跡・焼土10基、集石・立石18基、埋設土器２基、土取り穴７箇所、柱穴状土坑404基、捨て場１箇所を検出した。

遺物は、縄文土器大コンテナ92箱分、弥生土器４点、土製品168点、石器45箱分（中コンテナ）、石製品19箱分（中コンテナ）、土師器３点、須恵器１点、陶磁器12点、琥珀３点、鉄製品６点、古銭12枚などが出土している。ここでは、調査成果の総括として、１調査区毎の概要、２遺構、３遺物、４全体のまとめを行う。

１　調査区毎の概要

今回の調査では、調査区を南西部、西部、中央部、東部の４つに区分したが、簗川との比高３～４ｍの低位面（調査区東部と調査区中央部の一部）と、比高10ｍ以上の高位面（調査区南西部と調査区西部）、比高４～30ｍの山麓斜面地（調査区中央部の大部分）に大別される。今回の調査成果の一つとして、低位面においては縄文時代後期・晩期、中・近世が、高位面においては縄文時代早期～中期の遺構・遺物が顕著に発見され、時期により主たる空間占地が異なる様相が窺えた。ここでは、調査区毎にその概要を記述する。

［調査区南西部］：南東から北西方向に高度を減じる丘陵状の地形（※次に述べる調査区西部とともに、本報告書中では各所で高位面と呼んできた）にあり、標高184～186ｍを測る。西側に、豊富な水量が南から北に向かって流れる沢がある。この沢を挟んで西側に調査区西部が対峙する位置関係にある。竪穴住居跡は、縄文時代早期中葉１棟、前期前葉１棟、前期後葉３棟を検出した。その他に土坑、焼土遺構がある。現況は棚田であるが、調査の結果、調査地の中央付近において南東から北西方向に下る旧沢が発見され、また水田造成に伴い大規模に盛り土されていることが判明した。縄文時代前期前葉の竪穴住居跡は、この旧沢の底に相当する窪地内に構築されている。対して、縄文時代前期後葉の竪穴住居跡は、旧沢の底部分を避け、旧沢の東側肩部に相当する微高地部分に構築されている。調査区南西部からは、縄文時代前期後葉を主体に早期中葉～晩期前葉まで多岐に亘る遺物が出土した。

［調査区西部］：北東側に張り出す高位な段丘面にあり、調査地外南側に北～北東向きの山麓斜面地、東側に豊富な水量が流れる沢が位置する。標高は185～190ｍである。縄文時代中期末葉を中心とした集落域で、竪穴住居跡は北西側の段丘縁に向かって密度を増す傾向が看取できる。該期の土坑は、一部竪穴住居跡の占地に入り込むような位置に集中する。ただし、居住域の中心である可能性が高い北西側調査地外の実態が掴めないことから、居住域と土坑域（貯蔵域？）の関係は推測の域を出ない。特記事項として粘土採掘坑と考えられる土取り穴の検出が挙げられるが、この土取り穴はＲＡ011など一部の竪穴住居跡と占地が重なるものの、その中心は居住域からみて南東側に占地する。土取り穴は、基本層序Ⅶ－２層とした土層を採掘目的とした粘土採掘坑と捉えられるが、Ⅶ－２層自体は調査区西部においてほぼ全域に分布する。従って、居住域の中心より外側の空間が選ばれていると考えられる。中期末葉以外の時期の遺構としては、土坑類の中に縄文時代中期中葉と推定されるものや、縄文時代後期の立石遺構、弥生時代前期の埋設土器遺構などが検出された。遺物は、縄文時代中期後葉～末葉を中心に前期初頭～晩期末葉、及び弥生時代前期や古銭（北宋銭）が出土している。遺物の出土地は、遺構内出土が多い。

［調査区中央部］：ほぼ北向きの山麓斜面地～山裾の平坦地（※調査区東部とともに、本報告書中では各所で低位面と呼んできた）にあり、標高178～205mを測る。標高180m前後の緩斜面地部分より縄文時代前期後葉を主体とする捨て場と、山裾の平坦地で縄文時代の可能性は高いものの時期特定ができない土坑と柱穴状土坑を確認した。遺物は、縄文時代早期中葉～晩期前葉まで出土している。早期中葉と前期後葉は、上記した捨て場から出土している。後期や晩期は、山裾の低位面から主に出土している。特記事項として、柄に三叉文が印刻された晩期の石棒出土が挙げられる。
［調査区東部］：平坦地にあり、現況は全面が水田であった。標高は177～179mを測り、本報告書では各所で低位面と呼んできた。第５次調査区と隣接する。また、岩手大学草間俊一教授による第１～３次調査地点は調査区東部から東～北東約20～30mに、盛岡市教育員会による第４次調査地は北東約30～40mの地点にある。中・近世と考えられる竪穴建物や掘立柱建物跡などの遺構を主体に、縄文時代後期の集石などを確認した。遺物は、縄文時代中期～晩期まで出土しているが、後期初頭～中葉が圧倒的に多い。また今回の調査全体的でみた調査区毎の遺物量は、調査区東部が圧倒的に多い。なお、縄文時代中期中葉～末葉については、土器は一定量得られているが、遺構は認められない。また、縄文時代前期前葉、古代、中・近世は、微量の出土であった。

2　遺　　構

ここでは、時代毎に検出された遺構をまとめてみる。なお、古代は土師器２点、須恵器１点が調査区東部で出土したが、検出遺構はない。

（1）縄　文　時　代

縄文時代の遺構は、竪穴住居跡、土坑、炉跡・焼土、集石・立石、埋設土器、土取り穴、捨て場がある。
［竪穴住居跡（ＲＡ）］：今回検出された竪穴住居跡は15棟である。時期の内訳は、早期中葉１棟、前期前葉１棟、前期後葉３棟、中期後葉～末葉１棟、中期末葉６棟、時期不明３棟である。なお、今回の調査で後期や晩期に該当する竪穴住居跡は検出されていない。また、これら縄文時代の竪穴住居跡は、何れも標高185m以上の高位面から検出されており、標高177～178mの低位面からは土器や石器の遺物量に反して竪穴住居跡は未検出にある。

早期中葉は、ＲＡ003と命名したもので、調査区南西部より検出した。平面形は隅丸長方形、規模は長軸約5.3m、短軸約3.1mと推定されるが、遺構の遺存状態は悪く、明確ではない。埋土中には堀切テフラと推定されるオレンジパミスが含まれる。特記事項として、掲載番号１の明神裏Ⅲ式土器が出土している。

前期前葉は、ＲＡ005と命名したもので、調査区南西部から検出した。この竪穴住居跡の検出地点は、沢状地形の底に相当する。平面形が卵形、長軸6.8m、短軸4.8mである。この竪穴住居跡は、建て替えが行われており（縮小と捉えた）、それに伴い床面の嵩上げが認められる。床面～床面下にかけて浅黄橙色テフラ（Ｔｏ－Ｏｆか）が認められる。

前期後葉は、ＲＡ004・006・007の３棟で、何れも調査区南西部の東側より検出した。これら３棟は南東－北西方向に並ぶように分布するが、これより西側は沢状の地形を呈することから、微高地を選び竪穴住居跡が構築されていると推定される。平面形は隅丸長方形を基調とする。３棟の長軸方向には規則性が看取できない。規模的には、10mを超える大形住居などは認められない。何れの竪穴住

居跡からも炉は認められない。特記事項としてＲＡ007の床面は有段を呈する。

中期は、末葉がＲＡ010・011・012・014・015・017の６棟と、後葉～末葉と時期幅を広く捉えたＲＡ013の１棟で、合わせて７棟である。全て調査区西部より検出している。この調査区西部は、北西側に張り出す台地状の地形で、状況からは台地の縁に向かって密度を増すことが窺える。平面形は多角形基調で、規模は3.9～７ｍまで様々である。炉を検出した５棟は何れも複式炉を持ち、炉の位置は竪穴中央からみて斜面上方側になる南～南東以外に設けられている。特記事項として、ＲＡ010・017は、炉の作り替えが行われているが、炉の長軸方向が大幅に変更されている。また、ＲＡ010は焼失家屋と捉えられ、多量の炭化材と混在する焼土塊や粘土ブロックなどの様相から土屋根の可能性がある。また、この竪穴住居跡は、南壁が棚状を呈する構造を持つことと、琥珀が出土したことを付記しておきたい。

時期不明は、ＲＡ008・009・015の３棟で、何れも調査区西部で検出している。ＲＡ008は前期後葉、ＲＡ009・015は中期の可能性がある。

［土坑（ＲＤ）］：縄文時代と考えられる土坑は58基である。規模や断面形などの在り方から分類すると、以下のＡ類～Ｆ類の６つに分類される。なお、中・近世と捉えられるＲＤ132・133・162は分類対象から除外した。

Ａ類は、底面から開口部にかけて外傾して立ち上がるものである。Ａ類の用途としては貯蔵穴の可能性が考えられようか。Ａ類は、断面形の違いで更にＡ類－１・Ａ類－２・Ａ類－３の３つに細分した。

Ａ類－１は、深度が深いもので断面形が深鉢状を呈する。ＲＤ107・126・127・128の４基が該当する。その中で、ＲＤ126・127・128は、調査区西部の近接した地点から検出されている。これらは、平面形はほぼ円形で、規模が直径76～114㎝、深さ44～84㎝で突出して大形のものは認められない。帰属時期については、何れも特定できないが、概ね中期若しくは後期と推定される。

Ａ類－２は、断面形が鉢状を呈するもので、ＲＤ109・136・138・155・158の５基が該当する。平面形は円形と楕円形があり、規模は長軸長96～184㎝、深さは30～58㎝である。Ａ－１類と比較して平面的な規模は大形で、深さはやや浅いものが多い。特記事項として、ＲＤ138の底面付近より磨製石斧の完形品（729）が出土している。帰属時期については、何れも特定できないが、概ね中期若しくは後期と推定される。

Ａ類－３は、深度が浅い断面形浅鉢状を呈するものである。ただし、土坑上部が削平されているものが多く、本来はＡ類－１若しくはＡ類－２であった可能性を有する。ＲＤ103・104・110・111・116・129・130・154・159・161の10基が該当する。平面形は円形・楕円形・不整円形があり、規模は長軸長86～236㎝、深さは18～70㎝である。Ａ－１類としたものと比較して平面的な規模は大形で、深さはやや浅いものが多い。その内、ＲＤ110・111は、調査区南西部で検出された底面に副穴を持つものである。土坑上部が削平を受けて深度が浅いことから本類に含めたが、本来はフラスコピットであった可能性もある。この２基の時期は前期前葉と推定される。その他は、中期と推定される。

Ｂ類は、開口部より底部の規模が大きくオーバーハングするもので、断面形からいわゆるフラスコピットと呼ばれるものを一括する。ＲＤ119～123の５基が該当する。平面形は円形・楕円形・不整円形があり、規模は長軸長82～154㎝、深さは54～72㎝である。５基すべて調査区西部から検出している。詳細な時期は特定できないものが多いものの、概ね中期後半と推定される。

Ｃ類は、規模や断面形の在り方などから判断して、本来柱穴である可能性が高い土坑を一括する。ＲＤ105・106・108・114・117・131の６基が該当する。それらは、調査区西部・南西部の高位面より

検出した。平面形は楕円形を主体とし、規模は長軸長36～116cm、深さは18～42cmである。ＲＤ108などにみられる浅い掘り込み（スロープ状）は、柱の設置若しくは抜き取り時に伴う痕跡と推定される。

Ｄ類は、長楕円形の平面形態と、埋土が人為堆積であることから判断して、墓壙の可能性が考えられるものを本類とした。ＲＤ112・113・115・118・124・125・135・145・160の９基が該当する。平面形は上記のとおり長楕円形を主体に楕円形・不整形などがあり、規模は長軸長92～224cm、短軸長64～148cm、深さは10～56cmである。何れの土坑からも副葬品と推定される遺物は出土していない。また、突出して深いものはない。時期については、詳細を特定できないものがほとんどであるが、概ね中期～後期と考えられる。

Ｅ類は、底面の凹凸の状況や埋土の様相から、粘土採掘を意図した小規模な土取り穴の可能性が示唆されるものを本類とした。ＲＤ134・137・139～144・146～153の16基あり、何れも調査区西部のＲＸ001土取り穴周辺から検出しており、併せてＲＸ001と重複関係にあるものが多い。それらの埋土は人為堆積層を中心とし、一部の土坑は上部のみ自然堆積層のものがある。平面形は不整楕円形を主体とし、規模は長軸長128～284cm、深さは22～74cmである。時期は、ＲＸ001と同時期か若しくは新しい可能性が窺えるものがほとんどであるが、詳細を特定できない。中期後半が主体と推定しておきたい。留意点として、中期後半以外と思われるものを挙げておくと、ＲＤ137から前期後葉、ＲＤ140から晩期の土器が出土している。

Ｆ類は、底面の凹凸の状況と不整形な平面形のものを一括した。遺物などが一定量出土していることから、土坑として遺構登録した経緯があるものの、人為的に掘削されたものか明確には判断ができず、風倒木痕など自然現象による可能性も考えられる。ＲＤ156・157・163の３基が該当する。何れも調査区東部で検出された。ＲＤ156は縄文時代後期初頭～晩期中葉の、ＲＤ163からは縄文時代後期初頭～前葉の土器が出土している。ＲＤ157は、埋土上部にＴｏ－Ｃｕが混入することから前期中葉より古いと考えられる。

参考までにここで風倒木痕について若干記述すると、検出作業段階で黒色土がドーナツ状を呈し、中心付近に地山土がみられる明らかに風倒木痕と判断されるものは遺構として登録していない。風倒木痕の確認状況を記述すると、調査区西部で２ヵ所、調査区南西部で２ヵ所、調査区中央部は５ヵ所以上、調査区東部は10ヵ所以上存在した。特に調査区東部の中央から南側に多く、それらは半裁し遺物の出土が確認されたものについては完掘を行った。調査区東部の風倒木根の時期について、縄文時代後期前半と判断されるものが多い様相である。推定の域は出ない内容であるが、本遺跡は、後期前半に大規模な台風などによる自然災害的な現象に遭遇した可能性も考えられようか。

［炉跡・焼土（ＲＦ）］：10基検出した。何れも現地性である。

調査区南西部で検出したＲＦ001～005は、前期後葉の可能性があり、併せてＲＦ001～003・005は廃屋上から検出されている点で共通する。調査区西部で検出したＲＦ006は、焼土の周辺に炉石の抜き取り痕が認められることから、本来は中期に帰属する竪穴住居に伴う石囲炉であったと推定される。ＲＦ007はＲＡ009と近接した位置から検出されたが、時期・性格は不明にある。ＲＦ008は調査区中央部で検出した。検出面や焼土の様相から現代の可能性もある。ＲＦ010は中・近世の可能性が高いと判断される。

［集石・立石（ＲＨ）］：17基検出した。

調査区西部ではＲＨ033・034の２基検出された。ＲＨ033と命名した立石遺構と、下部土坑内に礫が集められているＲＨ034の集石遺構は、人為による何らかの遺構と捉えられる。ＲＨ033が後期初頭、ＲＨ034は中期末葉と推定される。

調査区東部では15基検出した。下部に土坑を伴うＲＨ039・040の２基は、意図的に礫を集めた集石遺構と捉えられる。対して、その他13基はⅣ層中において土器片など共に自然礫・礫石器などの廃棄ブロック的に検出された。これら13基は、人為により意図的に集められた集石遺構とするには、礫の検出面や底面が同様の標高値になく、降水に関係し遺物包含層の土砂流出などに伴う疑似現象にも思われる。多くの配石遺構を検出した第５次調査地は畑地で、これらと地続きである調査区東部は全面に亘り水田造成が行われている。このことは、調査区東部は水田造成時に破壊を受け、遺構の遺存状態が不良にある可能性が考えられる。これらのことを鑑みて、判断に苦慮した集石遺構の認知については、拳大以上の礫が複数以上集まるものを集石遺構として登録し図化することとした。これらの帰属時期は、後期初頭や後期前葉と推定されるものがほとんどである。土坑Ｆ類の項で取り上げた風倒木痕の主たる時期と前後する関係にあることが推定される。

［埋設土器（ＲＰ）］：調査区西部よりＲＰ006の１基を検出した。ＲＤ124の埋土中に構築されていたもので、埋設されていた土器は胴部中位より上が欠落し（※切断されている可能性あり）、胴部下半～底部が正立の状態であった。埋設土器周辺には、炉石の抜き取り痕と推定される暗褐色シルトのシミが認められる。推定の域は出ない内容となるが、既に破壊され消失した竪穴住居跡に伴う石囲炉内に埋設されていた土器ではないかと考えられる。土器の時期は、中期末葉と推定される。

［土取り穴（ＲＸ）］：調査区西部より７か所検出した。土取り穴は、平面形は土坑の集合体的にランダムに掘られている様相で加えて底面の凹凸が激しい特徴が、該期の土坑との相違点と思われる。規模は、最大で９ｍ、最小で2.8m、深さ40～60㎝である。また、土坑の項でも上記したとおり、ＲＸ001の周辺において土坑として登録した中にも小規模な土取り穴（※土坑Ｅ類に分類したもの）と推定されるものが16基ある。従って、本遺跡における土取り穴の占地は、大きくは２ヵ所と捉えられ、１ヵ所はＲＸ001周辺、他方はＲＸ002～007の地点である。土取り穴の埋土は、全般的な傾向として埋土上位は黒色シルトの自然堆積層による場合が多く、埋土中～下位は黄褐色粘土と黒色シルトが複雑に混じった人為堆積層が多い。土取り穴からは、中期後葉～末葉を主体に、前期前葉・前期後葉・中期初頭～後期初頭・晩期前葉などの土器が出土している。傾向としては、自然堆積層部分からは多岐に亘る土器が出土し、人為堆積層中からは中期後葉～末葉が多い。よって、自然堆積層中には、土取り穴の廃絶時期とは異時期のものも含まれていると考えられる。上記の内容に遺構の重複関係を加味すると、土取り穴の帰属時期は、概ね中期後半（後葉～末葉）を主体とすることが推定される。今回検出された土取り穴は、基本層序Ⅶ層－２と命名した良好な粘土層の採掘を意図とした粘土採掘坑と判断される。そして、胎土分析の結果を踏まえると、採取された粘土は土器製作用の可能性が高い。

［捨て場］：調査区中央部の北西端に位置する。南東から北西方向に下る山際の斜面地に、前期後葉を主体とする捨て場が形成されていた。この捨て場範囲を本報告では「調査区中央部捨て場」と命名した。遺物を包含する土層は、Ⅲ層、Ⅳ層、Ⅴ層である。Ⅲ層は薄く、またⅣ層と明確に分層できなかった部分もあり、その場合はⅢ～Ⅳ層として取り上げた。このⅢ～Ⅳ層からは、前期後葉を中心に前期～晩期まで出土している。最も多くの遺物が出土したのがⅣ層で、前期後葉を主体とする。Ⅴ層は、遺物量は微量であるものの、早期中葉が出土している。このⅤ層には所々に堀切テフラと推定されるオレンジパミスを含む。本捨て場の位置は、前期後葉の竪穴住居跡が３棟検出された調査区南西部に比較的近距離の関係にある。また、本捨て場出土土器と調査区南西部で最も多くの土器が出土したＲＡ006出土土器を比較した限りでは、同様の土器群である。従って、本捨て場は、調査区南西部で検出された竪穴住居跡と同時期に使用されていた空間と考えられる。

（2）弥　生　時　代

弥生時代の遺構は、埋設土器遺構が１基検出された。

［埋設土器（ＲＰ）］：調査区西部よりＲＰ007の１基を検出した。直径35㎝程の円形の土坑中に、２個体分の土器片が埋められていた。１点は浅鉢、他方は台付鉢と推定される。土器の埋め方は正立などでなく、また土器自体も完形土器ではない。埋設土器として遺構登録した経緯があるものの、本来的には土器埋納遺構的な性格の遺構と判断される。時期は前期に相当しよう。

（3）中　・　近　世

中世と近世は、遺構からの遺物が乏しく、時期決定の根拠が弱いことから、両者を区分せず一括して記載することとする。

［掘立柱建物跡（ＲＢ）］：調査区東部の北側付近で４棟検出された。ＲＢ001～003は一連の変遷過程にある建物と推定され、古い方からＲＢ003→ＲＢ002→ＲＢ001の順に建て替えが行われている。その中で、ＲＢ001は、８軒３間の建物で、庇もしくは下屋が４面若しくは３面に持つ構造と考えられる。帰属時期について、ＲＢ001～003は、ＲＥ002・003の竪穴建物跡を切る関係にあり、また掘立柱建物跡を構成する柱穴の中には、近世前半の陶磁器が出土しているものがある。これらの内容から近世前半と推定される。

［土坑（ＲＤ）］：ＲＤ133と162は、北宋銭が出土し、また掘立柱建物跡や竪穴建物と時期が重複する可能性が考えられることから、中・近世と捉えられる。その内、ＲＤ162は長方形を呈する平面形態から推定して、墓壙の可能性が高い。また。132は出土遺物がなく、時期不明としたが、遺構の平面形態がＲＤ162と類似し、埋土の様相が縄文時代とは考え難いことなどから、中・近世の墓壙の可能性が考えられる。

［竪穴建物跡（ＲＥ）］：竪穴建物跡は、調査区東部の低位面より２棟検出された。平面的な規模は、両者とも長軸4.5m前後、短軸４ｍ前後と近似した大きさにある。この２棟は重複関係にあり、北側に位置するＲＥ003がＲＥ002を切り構築されている。また、このＲＥ002・ＲＥ003は、ＲＢ001～003掘立柱建物跡に切られる関係にある。また、ＲＥ003からは北宋銭が出土している。上記の内容を相対的に踏まえると、中世若しくは近世前半の可能性がある。

［集石（ＲＨ）］：調査区東部よりＲＨ047の１基検出した。Ⅳ層中において、直径約2.5ｍの馬蹄形気味の範囲に、自然礫や石鉢の破片・磨石・礫器などが寄せ集められている様相であった。状況から廃棄を目的とし人為的に集められたものと判断される。時期は、石鉢の出土などから判断すると、中・近世と考えられる。

3　遺　　物

今回の調査では約150箱分の遺物が出土した。内訳は、縄文土器92箱分（大コンテナ）、弥生土器４点、土製品168点、石器45箱分（中コンテナ）、石製品19箱分（中コンテナ）、古代の土器５点、石鉢１点、陶磁器類11点、古銭13枚、鉄製品６点、琥珀3.75ｇである。

（1）縄文土器・弥生土器

縄文土器は、早期中葉～晩期末葉まで出土した。全体的な傾向としては、調査区南西部は前期後葉

を主体とし、調査区西部は中期が主体、調査区中央部・東部は後期・晩期を主体とする。弥生土器は、調査区西部からのみ出土した。ここでは時期毎に概要を述べる。

［縄文土器早期］：早期は白浜・小舟渡平式、寺の沢式、明神裏Ⅲ式、物見台式などに相当する土器群が出土している。掲載番号１の略完形土器は、ＲＡ003の埋土中から出土したもので、明神裏Ⅲ式と考えられる。底部が砲弾状に尖底で、口縁形状がキャリパー状の器形を呈する。口縁部は波状口縁である。文様帯は、大きく捉えれば、①口縁部文様帯、②頸～胴部上位無文帯、③胴部中～下位文様帯、④胴部下位～底部無文帯の４つに分かれる。文様は、沈線、押し引き沈線により幾何学文様や山形状、横位平行沈線などにより構成される。そして、沈線や押し引き沈線の側縁に貝殻腹縁圧痕文の施文がみられる。この１の土器を見る限り、物見台式と類似性が高いように思われる。本地域の該期土器群は、東北地方北部と南部の、両者の諸要素を併せ持つものがあるように思われる。

出土地について、今回の調査では標高180ｍ以下の低位面で早期の土器は出土していない。また、中葉以外の時期の土器は出土を確認していない。早期中葉の類例として、本遺跡から東に約5.5㎞に位置し同じ簗川流域にある宇曽沢遺跡（溜・北村：2008）から物見台式が、米内川と中津川の合流点付近に位置する薬師社脇遺跡（神原：2008）から該期土器が出土している。

［縄文土器前期］：前期は初頭～後葉まで出土し、初頭は上川名２式、前葉は大木１～２ａ式、後葉は大木５式にそれぞれ相当すると考えられる。初頭と前葉は胎土中に繊維が混入するが、後葉には認められない。出土量的には、後葉大木５式と捉えられるものが圧倒的に多く、それらはＲＡ006と調査区中央部捨て場からまとまって出土している。今回の調査で主体的に出土している大木５式と捉えた後葉の土器群は、地文のみを施文するものが多く、粘土紐の貼り付けや沈線などによる文様を持つものは少ない。メルクマールとなる文様を持つものが少ないことに関係して、「大木５式」と言う名称を付け難い土器群ともいえよう。ただ、口縁部に台形状を呈する突起を持つものが一定量含まれることや、胎土中に繊維を含まない特徴などから該期と捉えた。地文の種類は、単軸絡条体第１Ａ類と単軸絡条体第５類を施文するものが圧倒的に多く、単軸絡条体第１類とＬＲに結節付き（原体の片末端処理と思われる）が極少数含まれ、結節の付かない単節や複節のものは確認されていない。時期について、興野義一氏は大木５式を細分し、新しい段階として大木５ｂ式を提唱しているが（興野：1970）、それを参照すると245のように環状突起を持つものは大木５式の中でも古い段階に位置付けられる可能性がある。また、大木５式に共伴して円筒下層ｂ式と判断されるものが１点（249）出土している。これらのことから、私見を述べると、大木５式と捉えた土器群は、仙台湾を中心とするものとは類似性が弱いように思われ、地域色の強いものが主体的に存在する可能性がある。また、円筒式との並行関係としては、大木５式の中心時期は円筒下層ｃ式に並行すると推定されるが（松田：2004）、上記のとおり本遺跡では円筒下層ｂ式が共伴気味に出土している状況にあることが指摘される。そして、今回の調査全体から後続の前期末葉大木６式が全く出土していない。以上の内容から、本遺跡の大木５式はより古い段階（大木５ａ式期）に位置付けられる可能性もある。何れ、地域性や時期の新旧については、考察の余地があると考えている。

［縄文土器中期］：中期は初頭～末葉まで出土している。量的には中期後葉～末葉大木９～10式が多く、初頭～中葉は少ない。初頭大木７ａ式は、口縁部に斜位方向に集合沈線、頸部に横位の平行沈線→沈線間に刺突列が施文される特徴的なものが出土している。前葉大木７ｂ式は、口縁部にＬＲ側圧が顕著に施される。中葉は、大木８ａ式は古い段階が主体で新しい段階はほとんどなく、対して大木８ｂ式は新しい段階が主体である。従って、大木８ａ式の新しい段階～大木８ｂ式の古い段階は、本遺跡において断絶気味の様相が窺える。なお、大木８ｂ式の地文の種類は、ＲＬＲが圧倒的に多く、

次いでＬＲである。このことは本遺跡の該期土器群の縄文原体は、０段の段階が左撚りを基本とすることが窺える。また、複節の割合が他の時期と比較して格段に高いことも特徴として指摘できよう。後葉大木９式は、地文→沈線区画→磨り消し縄文の手法を取るものが多い。末葉大木10式は、磨消縄文と充填縄文の２つの手法によるアルファベッド文が施文されるものが多い。ＲＡ012出土をみる限り、単軸絡条体第１類を施文するものは、充填縄文のものより、磨消縄文のものと共伴して出土している様相が窺える。地文は、ＬＲ、ＲＬ、ＬＲＬ、ＲＬＲ、単軸絡条体第１類がみられる。特徴として、磨消縄文のものは、ほとんどが縦回転である。なお、本遺跡出土の大木９式に単軸絡条体自体を伴う資料がなく、この内容を鑑みると時期差を窺う上で単軸絡条体の出現と消滅は考察の余地があるものと思われる。なお、磨消縄文と充填縄文の手法の相違については、時期の新旧には関連性が低いと思われた。補足として、器面に貼り付け隆線や鰭状突起などを持つものが認められない。このことは、本遺跡の大木10式は、より古段階と推定される資料が多いと判断できようか。

［縄文土器後期］：後期は初頭～末葉まで出土している。量的には初頭～中葉が多く、後葉や末葉は少ない。遺構内出土は少なく、大部分が調査区東部Ⅳ層を中心とする遺構外出土である。初頭の略完形の良好資料として、127・326が挙げられる。127は、０段多条ＬＲ横回転の後に磨消縄文によるＹ字状文、沈線による蛇行文、連鎖状隆起線文などが施される。326は、ＬＲ横回転の後に、磨消縄文による倒卵文や沈線による縦位の蛇行文、円文などが施される。これらの土器は、滝沢村卵遠坂遺跡出土土器に類似する（石川：1979）。該期の土器群を熊谷常正氏の門前式編年に比定させた場合（熊谷：1986）、本遺跡資料は門前Ｉｃ式や門前Ⅱ式に併行すると思われるものが多い。また、近年鈴木克彦氏が提示した湯舟沢Ａ式にも該当する資料でもあるが、鈴木氏がそれに後続するとしている馬立式相当は筆者の判断からは抽出できなかった（鈴木：2000）。地域的な要因であろうか。量的に主体を占める初頭と前葉は、両者何れに位置付けるものか明確には判断ができなかったものもある。それらは、観察表の時期の項には後期初頭～前葉と時期幅を広く捉え記載した。具体的には、ＲＤ163出土の136～142と遺構外出土の355～364などである。また、初頭～前葉と推定されるものの中で、137～139のように単軸絡条体を施文するものや、356～364のような縄文原体の側面圧痕を施文するものなどの時期的な位置付けには課題が残る。前葉は、縄文原体による横回転を施文後、平行沈線や刺突文が施されるものを基調とする。十腰内１式などに類似する資料と捉えられる。371～385は磨消縄文が施される資料で、前葉と捉えた場合、より中葉に近い段階の可能性もある。これらは、地文→磨消縄文→沈線の施文順のものと、地文→沈線→磨消縄文の施文順のものの、２種類あり前者が多い。中葉は、出土量的には多いものの、完形・略完形にならない破片資料が大部分である。地文が羽状縄文のものや、充填縄文手法のもはみられない。所見を述べるならば、本遺跡出土土器は、十腰内２・３式と文様モチーフは類似性が高いと思われるものの、純然たる十腰内２・３式と呼べるものなのか、検討の余地があろう。後葉や末葉は量的に微量の状況にある。

［縄文土器晩期］：初頭～末葉まで出土している。量的には初頭～前葉大洞Ｂ～ＢＣ式が圧倒的に多く、中葉大洞Ｃ１式は少量、大洞Ｃ２式以降は極端に減少する。また、今回の調査では、確実な晩期に帰属する遺構は認知していない。主体を占める初頭～前葉は、調査地全体的に出土しているが、調査区東部から多い。また、晩期末葉？は調査区西部からのみ出土している。

［弥生土器］：前葉と推定されるものが４点出土している。出土地は、何れも調査区西部で、ＲＰ007埋設土器遺構と、遺構外から出土している。

（2）土　製　品

168点出土した。内訳は、ミニチュア土器21点、土偶27点、動物形土製品（クマ形土製品）１点、土製耳飾７点、鐸形土製品２点、円盤状土製品104点、斧状土製品２点、粘土隗２点、不明土製品２点である。概ね縄文時代後期が帰属時期と推定されるものが多い。

今回の調査で最も多かったのが円盤状土製品である。規模的観点からは、重量にばらつきがある。また、遺構出土は少なく、時期の特定に苦慮するものが多い。

土偶をみると、全て欠損品で、圧倒的に縄文時代後期のものが多く、晩期と推定されるのは525の１点である。特殊性の高いもとして、539の首無し土偶と推定されるものや、535の首・足と胴部の接着部がソケット状を呈するものが挙げられる。

513・514の斧状土製品は、縄文時代前期後葉の土器が多量に出土した調査区中央部捨て場から出土した。ただし、帰属時期としては、過去の出土事例から縄文時代中期後葉の可能性がある。

（3）石　　器

石器は総数で45箱分（中コンテナ）、1,892点出土した。内訳は石鏃182点、尖頭器15点、石錐13点、石篦４点、石匙43点、スクレイパー320点、Ｕフレ46点、ピエス・エスキーユ６点、多面体石器１点、コア30点、磨製石斧145点、半円状扁平打製石器１点、抉入扁平磨製石器１点、磨石396点、特殊磨石５点、敲石53点、凹石15点、砥石５点、石皿31点、台石45点、石錘63点、礫器417点、軽石49点である。剥片石器と礫石器の割合をみると、礫石器が石器全体の65％を占める。器種別では、礫器、磨石、スクレイパー、石鏃、磨製石斧の順に多い。

今回の調査で一定量の出土を得たものの中で、平面形態の違いから分類を試みた器種として、石鏃、石錐、石匙、スクレイパー、磨製石斧がある。ここではそれらについて取り上げ、特記事項を記載することとする。

石鏃は、基部形態の違いからＡ～Ｇ群に分群した。最も顕著なのがＦ群とした基部に明瞭な茎部を有するものである。石錐は、全体の形状の違いでＡ～Ｃ群に分群した。棒状の長い刃部を持ち一端に整形されたつまみ部を有するＢ群としたものが主体的である。石匙は、摘みの付き方で縦形をＡ群、横形をＢ群、斜形をＣ群の３つに分群し、身部の平面形の違いでさらに分類を行った。Ａ群２類とした縦形の中で一側縁が直線的、他方が弧状を呈するものが多い。スクレイパーは、素材に用いられている剥片の形状でＡ～Ｂ群を、主要な刃部として機能する部位の面数の違いで１～３類を、刃部加工の方法によってａ～ｃ種を設定した。今回の調査では、両側縁がほぼ平行する縦長の剥片を素材とし、１側縁に刃部が形成され、片面にのみ刃部加工を施されたＡ群１類ａ種が最も多い。磨製石斧は、撥形をＡⅠ群、小型撥形をＡⅡ群、短冊形をＢⅠ群、小型短冊形をＢⅡ群、未成品をＣ群１～３類、再加工途中と思われるものをＤ群として分群した。今回の調査ではＡⅠとした撥形が多い。また、未成品については、Ｃ群１類とした製作の初期である剥離調整段階で放棄されたと捉えられるものが多い。特記事項として、858の半円状扁平打製石器と、859の抉入扁平磨製石器がそれぞれ１点出土している。

（4）石　製　品

249点出土した。内訳は石棒102点、石刀類68点、石剣17点、円盤状石製品31点、有孔石製品３点、板状石製品16点、不明石製品10点、軽石製石製品２点である。帰属時期は、縄文時代後期若しくは晩期と推定されるものが多い。ただし、調査区南西部で出土した№902の石刀は縄文時代前期の可能性

が高い。

（5）そ　の　他

その他の遺物として、古代の土器、石鉢、陶器・陶磁器、金属製品、琥珀について一括して記述する。

［古代の土器］：調査区東部の遺構外より、土師器片３点と須恵器片１点が出土した。今回の調査では古代の遺構を認知していない。10世紀代と推定される。

［石鉢］：1011の１点出土した。調査区東部の北側から検出したＲＨ047集石を構成していた４つの破片が接合したものである。近接遺構との関係から、中・近世と推定される。

［陶器・陶磁器］：11点出土し、その内近代より古いと捉えられる９点を掲載した。産地・年代が推定できるものには、17世紀前半登Ⅰ瀬戸・美濃産、18世紀の大堀相馬産、18世紀の肥前産がある。

［金属製品］：今回の調査では、古銭と鉄製品に大別される。

古銭は13枚出土した。識別できたものは、北宋銭と明銭に分かれる。北宋銭としては、嘉祐通寶（1056年）、熙寧元寶（1068年）、元豊通寶（1078年）の３種類が確認された。また、明銭は、洪武通寶（1368年）、永樂通寶（1408年）の２種類が出土している。出土遺構や共伴した陶磁器などの年代から、中世～近世に帰属する可能性が高い。

鉄製品は６点出土した。1038の刀子以外は種類を特定できない。本遺跡における流通・帰属年代も、推定の域を出ないものがほとんどであるが、中世～近世前半と考えられる。

［琥珀］：今回の調査では３地点より、3.75ｇの琥珀砕片が出土した。出土遺構の帰属時期から縄文時代中期期末葉を中心に本遺跡に流通されていたと考えられる。垂飾品や玉類などの加工されたものは無い。また、個々の遺構からの出土状況は、土器や石器と共に廃棄された様相で特殊性は窺えない。

4　全体のまとめ

今回実施した川目Ａ遺跡第６次調査の結果、縄文時代早期中葉から近世に亘る遺構・遺物が発見され、長期に亘り生業が営まれた遺跡であることが明らかとなった。

縄文時代の遺構の空間占地については、標高的に高い部分（高位面）に縄文時代早期・前期・中期の集落跡が発見され、低い部分（低位面）からは竪穴住居跡などは検出されなかったが縄文時代後期・晩期の遺物が多く出土した。また、高位面においては、沢を挟んで東側には縄文時代早期中葉・前期前葉・前期後葉が、沢の西側には縄文時代中期末葉を中心とする集落跡が存在したことが明らかとなり、時期により当時の活動の場が若干相違する様相で捉えられよう。具体的には縄文時代早期中葉～中期末葉は高位面に、縄文時代後期初頭～晩期中葉は低位面主体である。特記事項として、縄文時代中期末葉を中心とする集落域からは、県内で検出事例が希少な粘土採掘坑（※本報告では土取り穴と呼んでいる遺構）の発見が挙げられる。

次に、縄文時代の遺物について、早期中葉明神裏Ⅲ式土器が本報告でⅤ層とした堀切テフラと推定されるパミスを含む土層から出土したことや、前期後葉大木５式と捉えられる土器群がまとまりのある状況で出土したことが特記事項として挙げられよう。特に前期後葉の土器群は、本県中央部における該期土器の組成の様相を検討する上で、良好資料を提供すると考えられる。

縄文時代以外では、弥生時代の埋設土器遺構（土器埋納遺構）や中世～近世と推定される掘立柱建物跡、竪穴建物跡、墓壙の検出を挙げておきたい。掘立柱建物跡については、ＲＢ001に代表される

20m×10m程の大規模な建物跡の存在が明らかとなった。また、古銭が13枚出土し、宋銭が３種類、明銭が２種類特定できた。川目地区の中・近世史の解明に一石を投じる資料と考えられる。

今回の調査における課題の一つとして、第５次調査地と隣接する調査区東部における配石群の広がりやその存在が、明確には掴めなかったことを挙げておきたい。特に、第５次調査地で検出されている配石群の西端域は、本次調査区が鍵を握ると想定されていたが、調査区東部は水田造成に伴い破壊を受け、遺構の遺存状態が不良にあり、今回の調査では詳細を明らかにできなかったと言える。調査区東部からは集石遺構として報告したものが15基ある。それらについて概要を述べれば、全般に石の配列に規則性が看取できず、個々の石は設置に際して掘り方を認められない状況で、遺物包含層であるⅣ層中に置かれたような状況であった。また、下部土坑を持つものを幾つか検出したが、副葬品と考えられる遺物は皆無にある。遺構の位置からＲＨ036～046は、本来第５次調査地から続く配石遺構の一部であった可能性は考えられるものの、積極的には推挙できない。遺物の観点からは、縄文時代後期初頭～中葉の土器が多量に出土したにも関わらず、本次調査では完形資料がほとんど得られず、また層位的にも細分できる状況にない。調査者の観察眼にも起因することであるが、確立されているとは言い難い本地域の該期土器編年に寄与できなかったことを残念に思う。川目Ａ遺跡第５次調査は、平成20年度も継続して行われる予定であり、今後の調査成果に期待するものである。

＜Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅶ参考・引用文献＞

［論文・研究会発表資料など］

安達尊伸・中村　直　2007　「門前式の周辺」『岩手県における縄文文化の諸様相』　2007岩手考古学会第38回研究大会発表資料

生出慶司・中川久夫・蟹沢聰史　『東北地方－日本の地質２－』　日本の地質東北地方編集委員会

永広昌之・鈴木紀毅　2003　「早池峰構造帯とは何か－早池峰構造帯の再定義と根田茂帯の提唱－」　構造地質第47号

川向聖子　2007　「沿岸の複式炉の一事例　－新道貝塚の発掘調査報告」『岩手県における縄文文化の諸様相』　2007岩手考古学会第38回研究大会発表資料

菊池強一ほか　1981　「北上山地東部に分布する縄文前期火山灰について」『東北地理33－１』

興野義一　1969　「大木式土器理解のために（Ⅴ）」『考古学ジャーナル』32　ニューサイエンス社

興野義一　1970　「大木５ｂ式土器の提唱－宮城県長者原遺跡出土資料によるー」『古代文化』22－４

興野義一　1996　「山内清男先生供与の大木式土器写真セットについて」『画龍点睛』

草間俊一　1978　「先史期」『盛岡市史』第１巻復刻版　盛岡市

熊谷常正　1986　「門前式の検討」『岩手県立博物館研究報告』第４号

鈴木克彦　2000　「岩手、秋田県北部の後期初葉土器編年－湯舟沢Ａ式の設定と提唱－」『岩手考古学』第12号　岩手考古学会

津島知弘　1996　「川目Ｃ遺跡」『第16回岩手考古学会研究大会』発表資料

永井久美男　1996　『日本出土銭総覧』兵庫県埋蔵銭調査会

西川博孝　1989　「「物見台」と「吹切沢」－東北・北海道南部における貝殻紋系統土器末葉の編年『先史考古学研究』第２号　阿佐ヶ谷先史学研究会

早川由紀夫　1983　「十和田中掫テフラの分布」『火山第２集』

福田友之　1986　「考古学からみた「中掫浮石」の降下年代」『弘前大学考古学研究』３号

星　雅之　2007　「十和田中掫テフラの考古学年代について－課題などを中心にしてー」『岩手県における縄文文化の諸様相』　2007岩手考古学会第38回研究大会発表資料

松田光太郎　2004　「東北地方北部における縄文時代前期から中期への移行の様相」『神奈川考古』第40号　神奈川考古同人会

松田光太郎　2008　「神奈川県における製作地推定のための胎土分析の基礎研究－相模川・境川上流域の縄文土器を中心に－」『かながわの考古学』研究紀要13　財団法人かながわ考古学財団

盛岡市教育員会　2000　『川目Ａ遺跡第４次』現地説明会資料

矢部倉吉　2004　『古銭と紙幣』改訂新版　金園社
山本孝司　2002　「粘土採掘と土器製作－多摩ニュータウン遺跡の事例より－」『土器から探る縄文社会』2002年度研究集会資料　山梨県考古学協会

［岩手県市町村報告書など］
石川長喜ほか　1979　『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ（卯遠坂遺跡）』　岩手県文化財調査報告書第31集　岩手県教育委員会
川向聖子　2008　『新道貝塚発掘調査報告書－平成18年度第３次発掘調査－』山田町埋蔵文化財調査報告書第12集　山田町教育委員会
神原雄一郎　2008　『薬師社脇遺跡発掘調査報告書』　盛岡市遺跡の学び館
草間俊一　1954　「岩手県川目遺跡調査概報」『岩手大学学芸学部研究年報』第７巻
草間俊一　1955　「岩手県川目遺跡調査報告（第二報）」『岩手大学学芸学部研究年報』第９巻
高田和徳・中村明央・久保田太一・久保田滋子　2004　『御所野遺跡Ⅱ』　一戸町文化財調査報告書第48集　一戸町教育委員会
高橋亜貴子・桐生正一　1989　『高柳遺跡・室小路Ⅱ遺跡－諸葛川筋中小河川改修事業関連発掘調査報告書－』　滝沢村教育委員会岩手県盛岡土木事務所
土井宣夫　2000　『岩手山の地質－火山灰が語る噴火史－』滝沢村文化財報告書第32集　滝沢村教育委員会
長谷川真・江口邦泰　2008　『牛ヶ沢遺跡・大付遺跡第11次調査－宮古市文化財調査報告書－』　宮古市埋蔵文化財調査報告書72　岩手県宮古市教育委員会
室野秀文　1995　『大葛遺跡発掘調査報告書』　盛岡市教育委員会
室野秀文ほか　2007　『上村屋敷遺跡発掘調査報告書』　盛岡市遺跡の学び館

［岩手県以外の都道府県報告書など］
金三津道子・町田尚美　2004　『黒河尺目遺跡・黒河中老田遺跡発掘調査報告書』　富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第25集　財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
斎藤進・松崎元樹・五十嵐彰・原川雄二・山本孝司・長佐古真也・及川良彦　2000　『多摩ニュータウン遺跡』No247・248遺跡　東京都埋蔵文化財センター調査報告第80集　東京都埋蔵文化財センター
関根達人・奈良佳子　2001　「芦ノ口遺跡第４次調査」　『東北大学埋蔵文化財調査年報』14　東北大学埋蔵文化財調査研究センター

［財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター報告書など］
佐々木嘉直・佐々木清文　1986　『手代森遺跡発掘調査報告書』　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第108集
佐々木清文　1987　『和光６区遺跡発掘調査報告書』　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第114集
佐藤淳一・中村絵美　2006　『大清水上遺跡発掘調査報告書』　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第475集
高瀬克範　2004　『和野Ⅰ遺跡発掘調査報告書』　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第452集
溜浩二郎・北村忠昭　2008　『戸仲遺跡第１次・宇曽沢遺跡第２次発掘調査報告書』　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第519集
千葉孝雄　1995　『上八木田Ⅰ遺跡発掘調査報告書』　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第227集
星　雅之　2008　『力持遺跡発掘調査報告書』　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第510集
本沢慎輔・松野恒夫　1982　『御所野ダム建設関連遺跡発掘調査報告書　雫石町塩ヶ森Ⅰ・Ⅱ遺跡』　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第31集
丸山浩治　2004　『宝性寺跡発掘調査報告書』　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第441集
村上　拓　2002　『清水遺跡発掘調査報告書』　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第382集
八木勝枝ほか　2006　『川目Ａ遺跡第５次調査』現地説明会資料　（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

写　真　図　版

遺跡遠景（直上※上が南）

遺跡遠景（直上※上が東）

写真図版１　遺跡遠景

調査区南西部全景（直上※上が南）

調査区西部全景（直上※上が北）

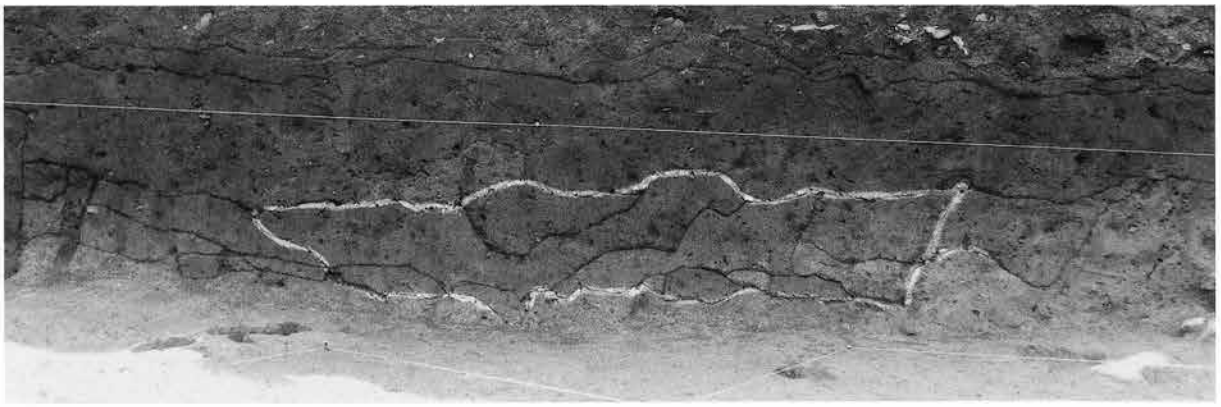
写真図版２　調査区全景（１）

調査区中央部・東部全景（直上※上が南）

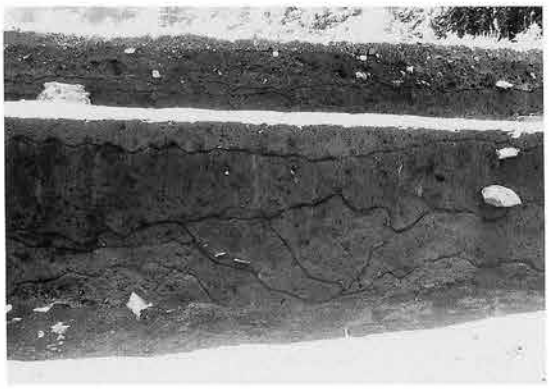
調査区中央部・東部全景（直上※上が東）

写真図版３　調査区全景（２）

平面（北から）



断面（北から）



断面（北から）

平面（北から）

写真図版４　ＲＡ003竪穴住居跡

平面（北から）

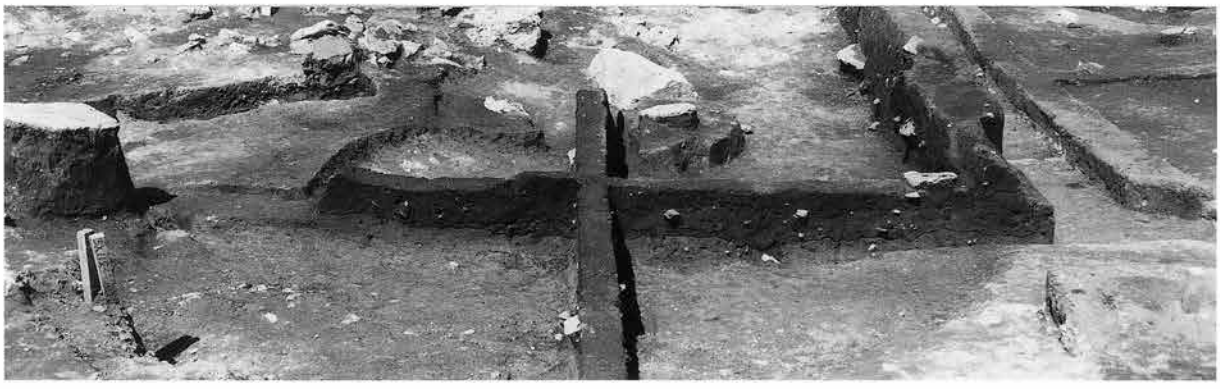
断面（北西から）

断面（北東から）

写真図版５　ＲＡ004竪穴住居跡

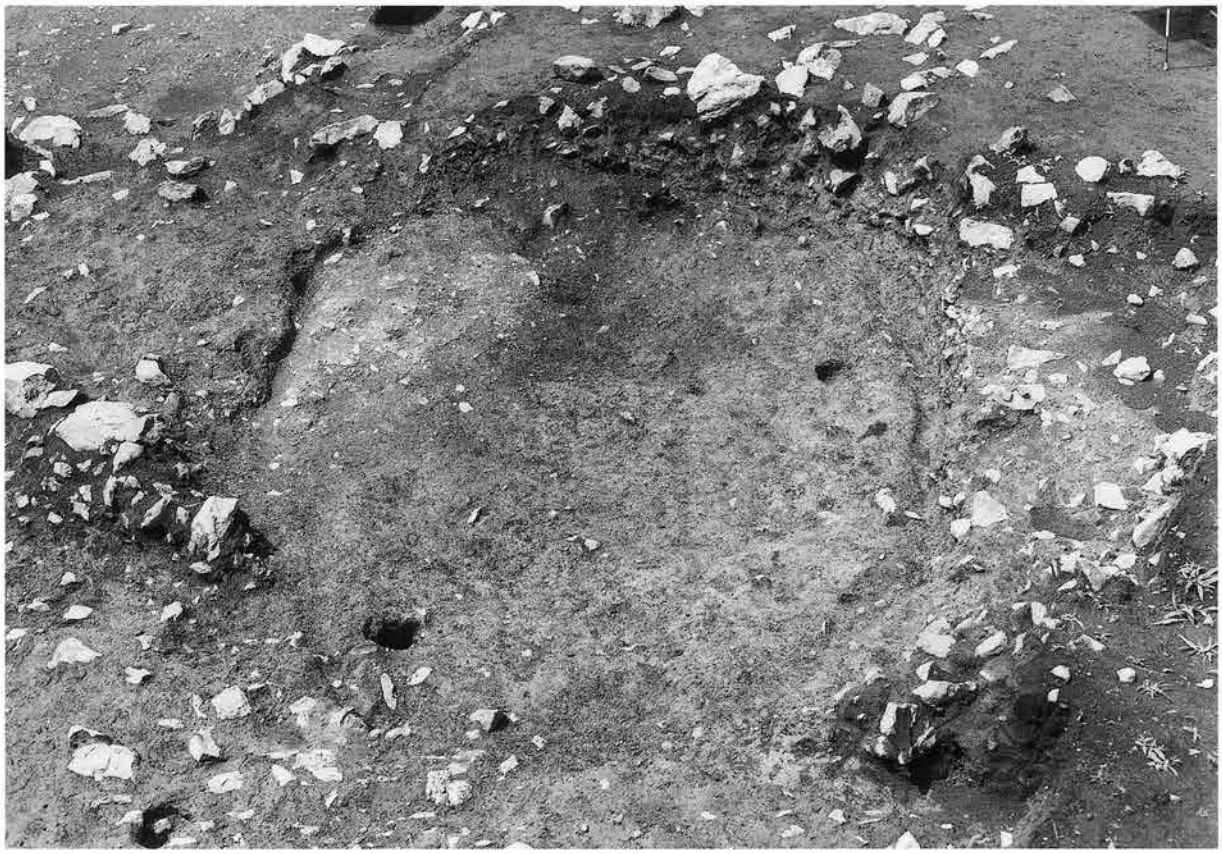
平面（南東から）

断面（南から）



断面（東から）

写真図版６　ＲＡ005竪穴住居跡

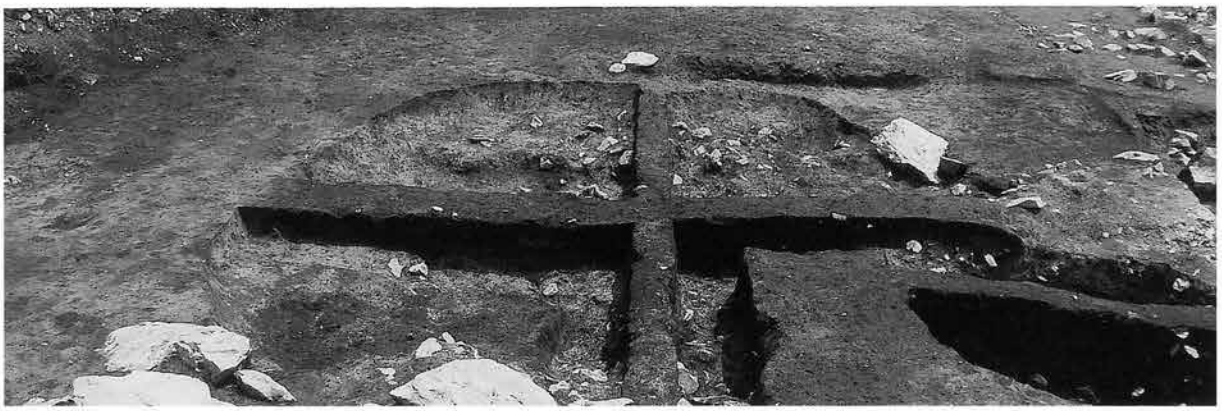


平面（南東から）

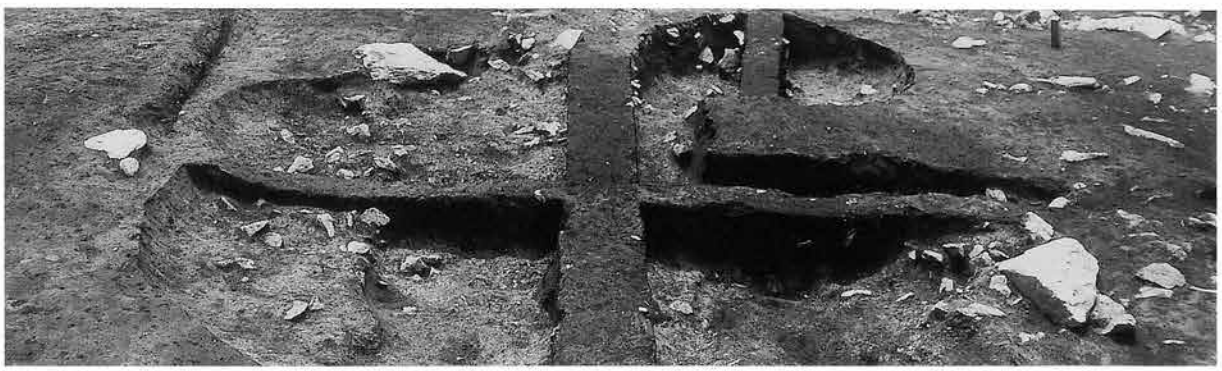
遺物出土状況（南東から）

写真図版７　ＲＡ006竪穴住居跡

平面（西から）

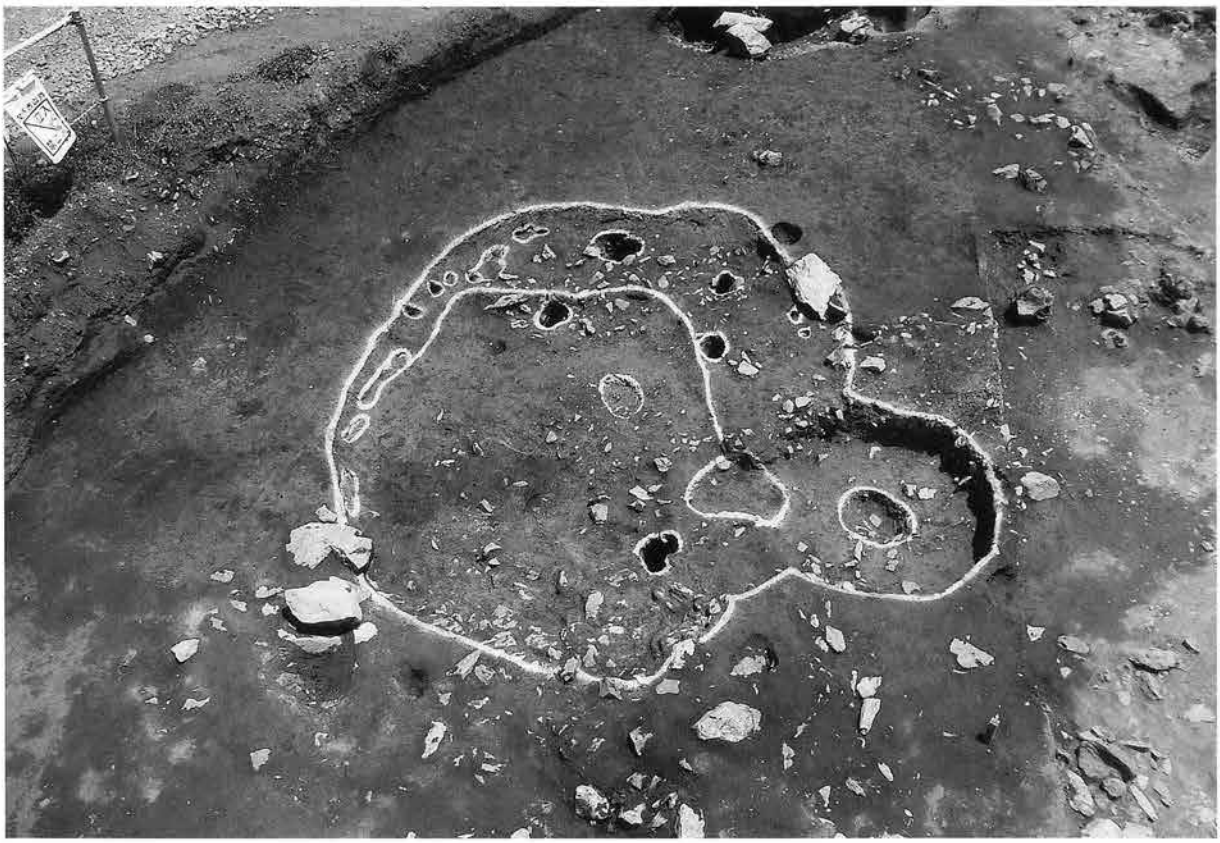


断面（西から）



断面（北から）

写真図版８　ＲＡ007竪穴住居跡（１）



平面（西から）

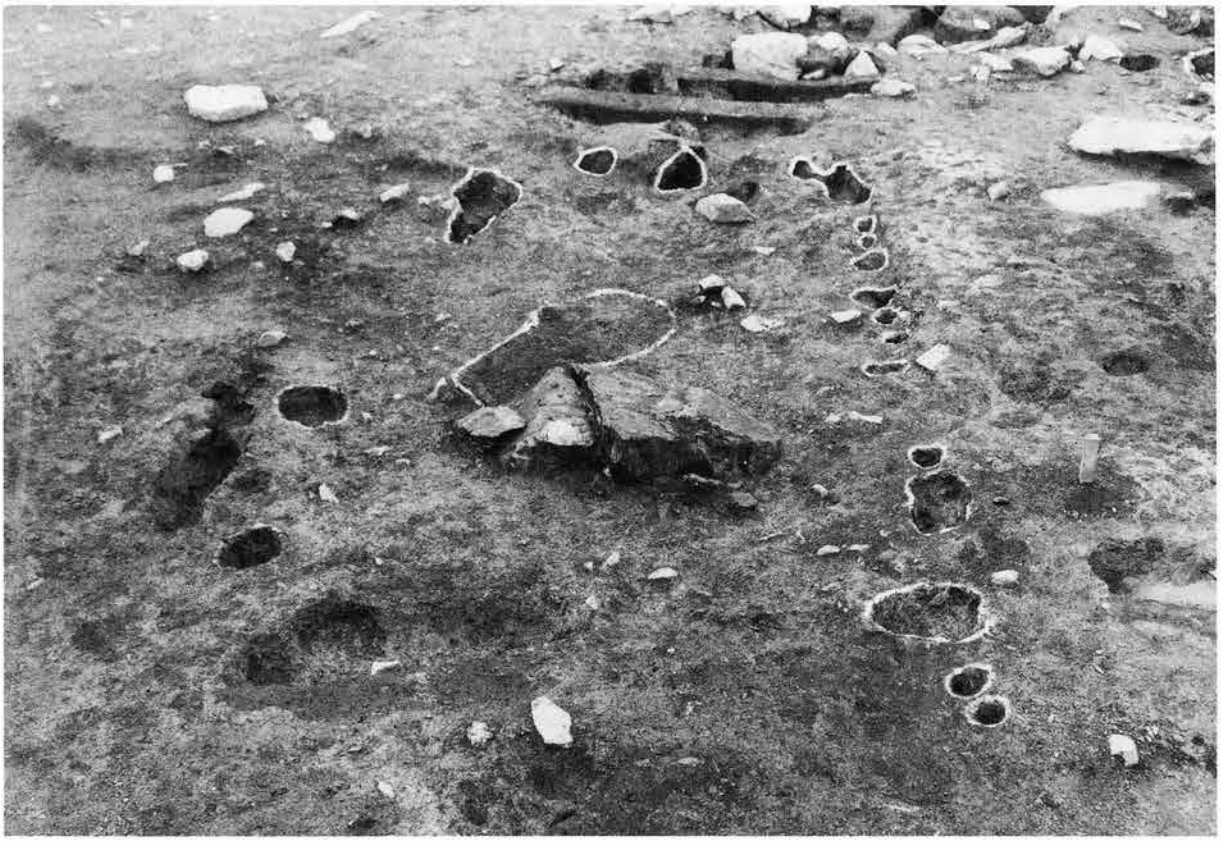
ＰＰ１　断面（南から）

ＰＰ２　断面（西から）

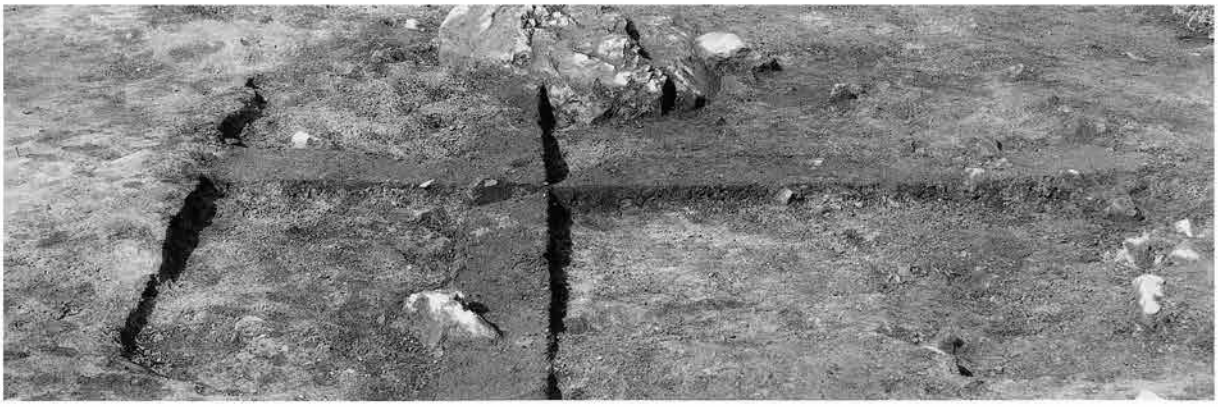
ＰＰ３　断面（西から）

ＰＰ４　断面（西から）

写真図版９　ＲＡ007竪穴住居跡（２）



平面（北から）



断面（東から）

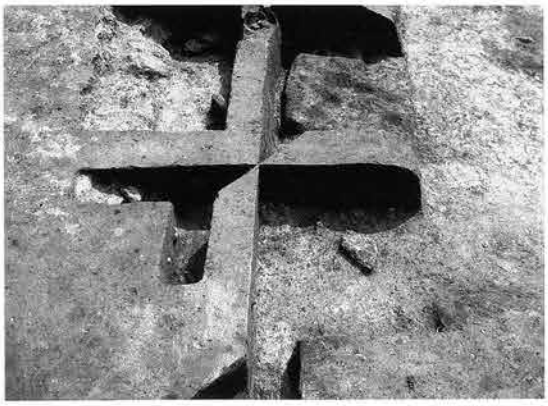
炉　断面（北東から）

炉　完掘（北東から）

写真図版10　ＲＡ008竪穴住居跡

平面（西から）

断面（北西から）



断面（北東から）

焼土1（東から）

焼土2（南から）

写真図版11　ＲＡ009竪穴住居跡

平面（南西から）

平面（北西から）

写真図版12　ＲＡ010竪穴住居跡（１）

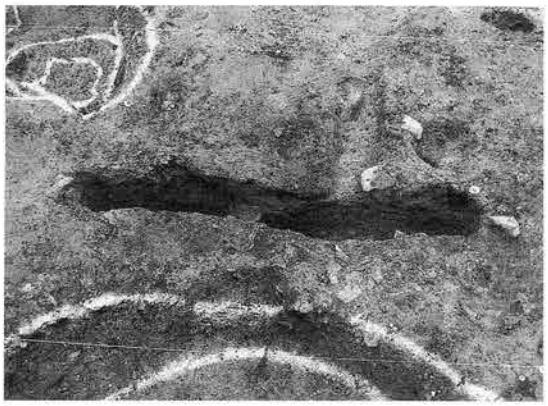
炉1　平面（南西から）

炉1　断面（南東から）

炉2　平面（北西から）

炉2　断面（南西から）

炉2　掘り方（北西から）



焼土1　断面（南から）

遺物・炭化材出土状況（南西から）

土器出土状況（南西から）

写真図版13　ＲＡ010竪穴住居跡（２）

遺物・炭化材出土状況（西から）

断面（南東から）

断面（北西から）

断面（北東から）

写真図版14　ＲＡ010竪穴住居跡（３）

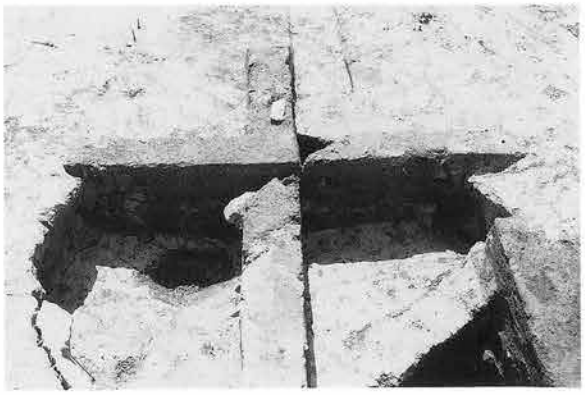
平面（北西から）

断面（南東から）

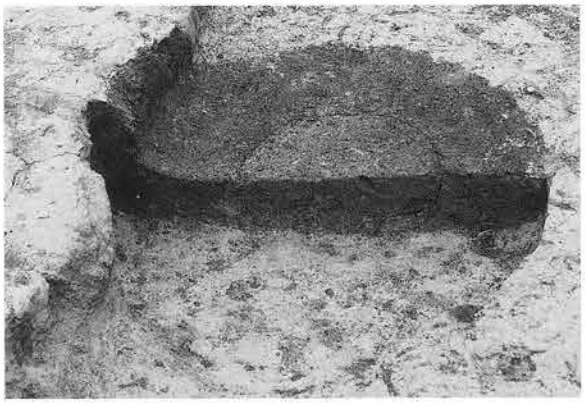
断面（南西から）

写真図版15　ＲＡ011竪穴住居跡（１）

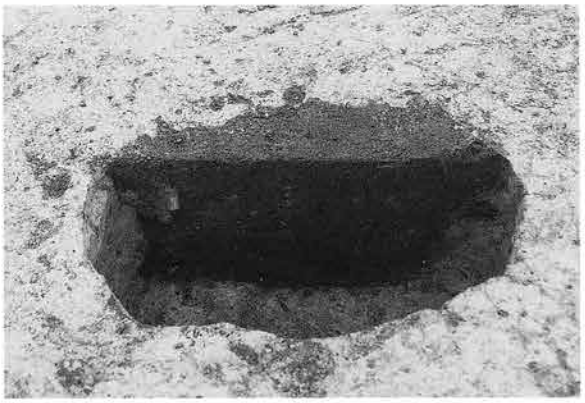
炉断面（南西から）



炉断面（北西から）



ＰＰ１断面（南西から）

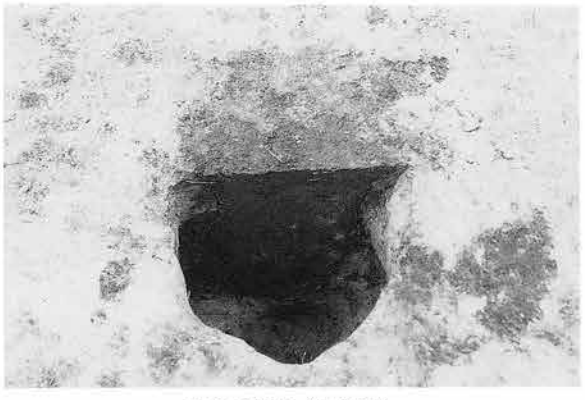


ＰＰ４断面（南西から）

ＰＰ７粘土塊出土状況（北西から）

ＰＰ13礫出土状況（北東から）

ＰＰ９断面（南西から）



ＰＰ11断面（西から）

写真図版16　ＲＡ011竪穴住居跡（２）

平面（南東から）

断面（南西から）

土坑1・2　断面（南から）

炉　断面（東から）

炉　断面（南から）

写真図版17　ＲＡ012竪穴住居跡

平面（北東から）

断面（北から）

炉　断面（南東から）

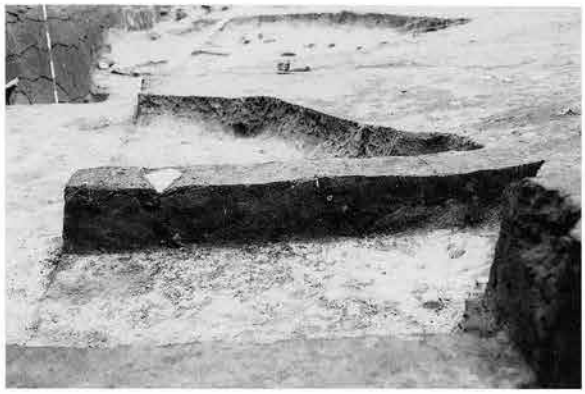
炉　断面（北東から）

写真図版18　ＲＡ013竪穴住居跡

R A014・R A015・R A016（北東から）

R A014断面（北東から）

R A014断面（南西から）

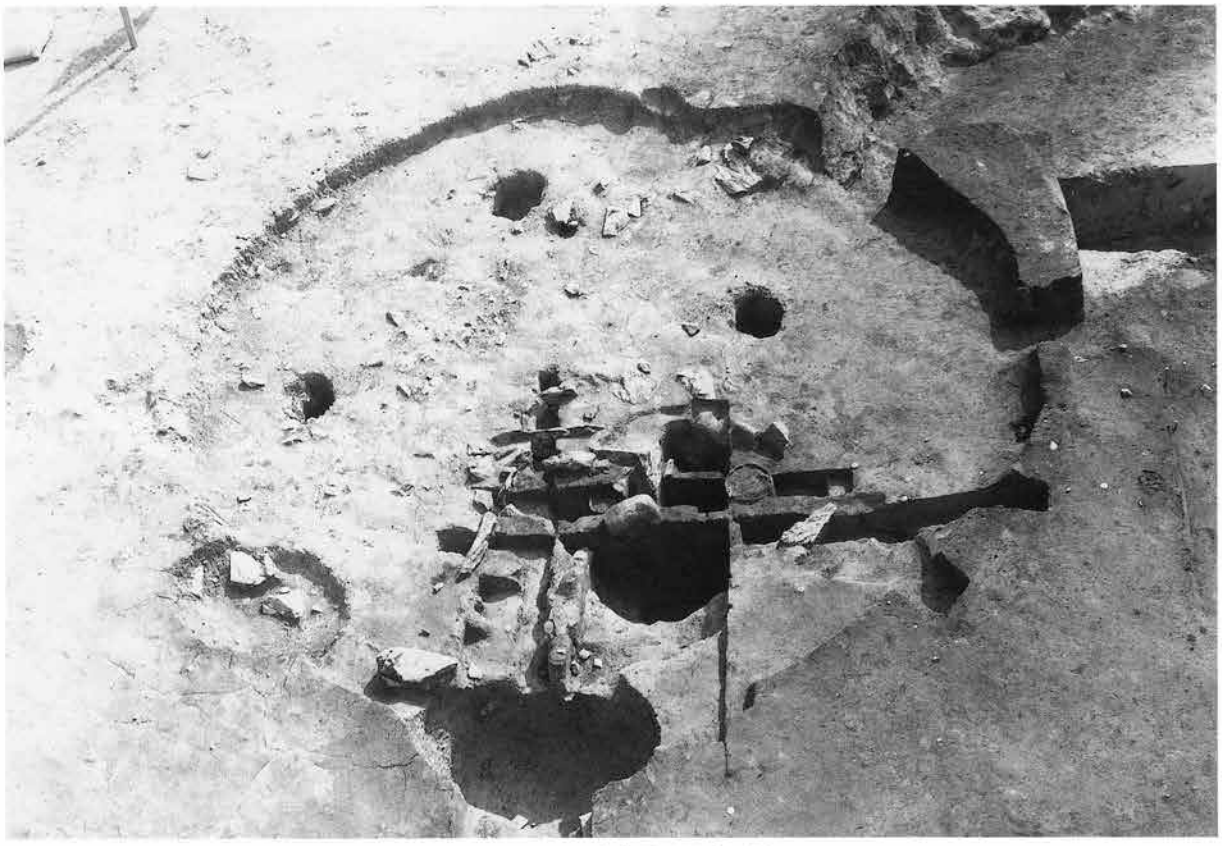


R A014断面（南西から）

R A015・R A016断面（南西から）

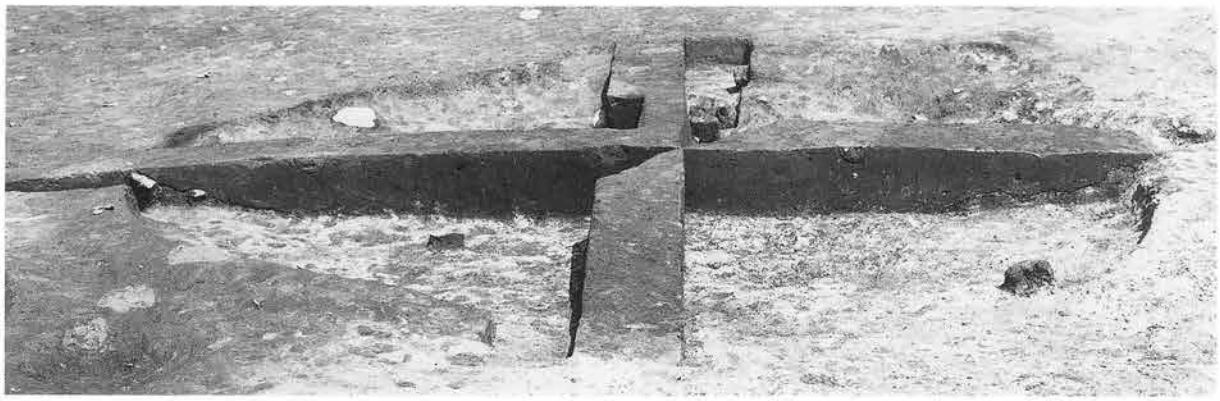
写真図版19　R A014・015・016竪穴住居跡

ＲＡ017　Ⅰ期全景（北東から）

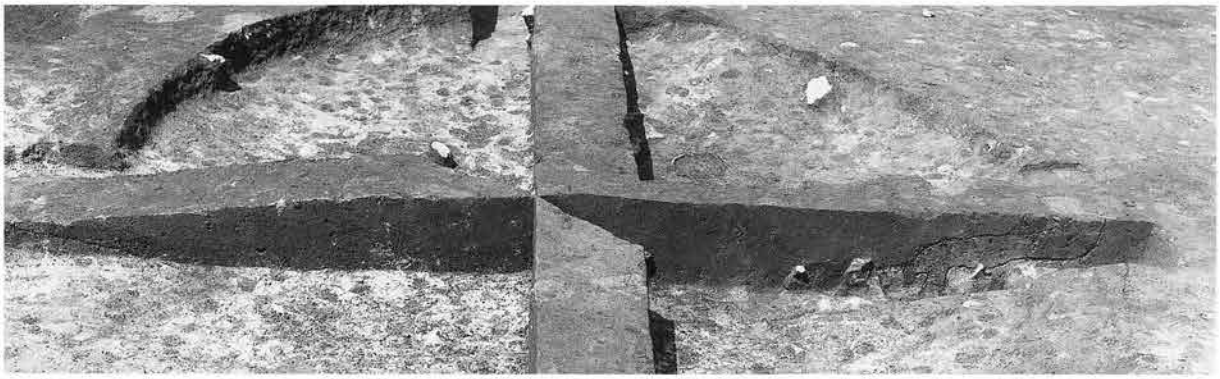


ＲＡ017　Ⅰ～Ⅲ期全景（北東から）

写真図版20　ＲＡ017竪穴住居跡（１）



断面（南西から）



断面（南東から）

炉Ⅰ期　平面（北東から）

炉Ⅰ～Ⅲ期　断面（北東から）

写真図版21　ＲＡ017竪穴住居跡（２）

炉Ⅰ期　断面（南東から）

炉Ⅰ期　断面（南東から）

炉Ⅲ期　断面（南東から）

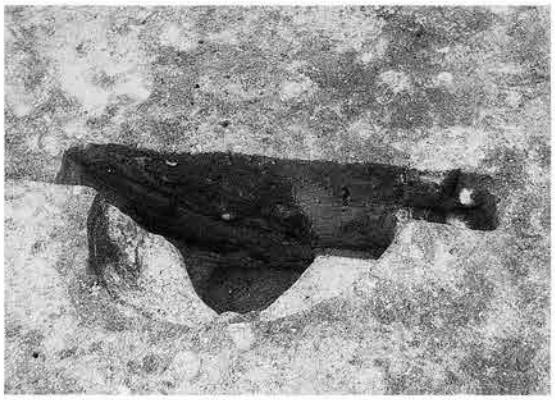
炉Ⅰ～Ⅱ期　断面（北東から）

炉Ⅰ～Ⅱ期　平面（南東から）

炉Ⅰ～Ⅲ期　掘り方（北東から）

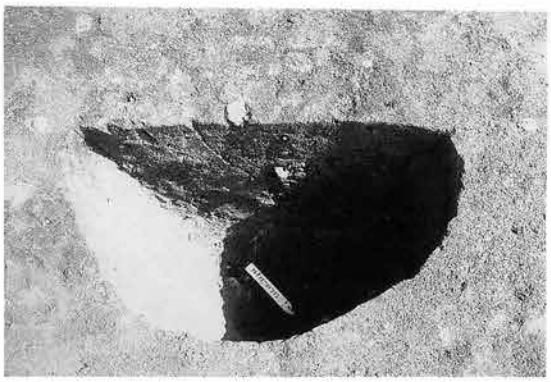
写真図版22　ＲＡ017竪穴住居跡（３）

ＲＢ001・ＲＢ002・ＲＢ003　平面（北西から）



ＲＢ001　83号柱穴状土坑　断面（西から）

ＲＢ001　85号柱穴状土坑　断面（北東から）

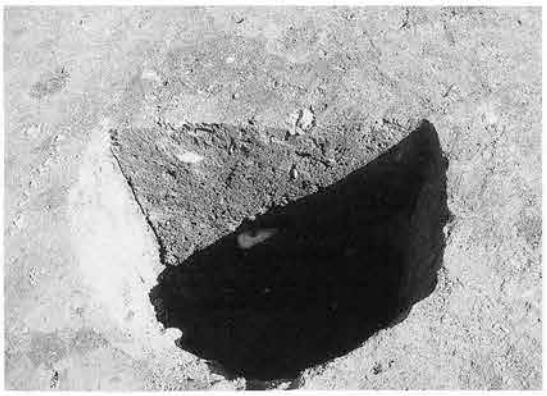


ＲＢ001　96号柱穴状土坑　断面（東から）

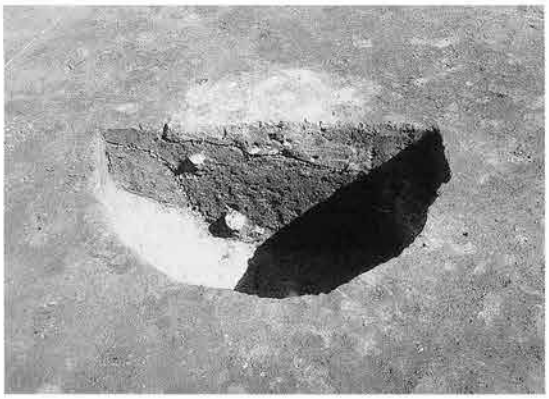
ＲＢ001　97号柱穴状土坑　断面（東から）

写真図版23　ＲＢ001・002・003掘立柱建物跡

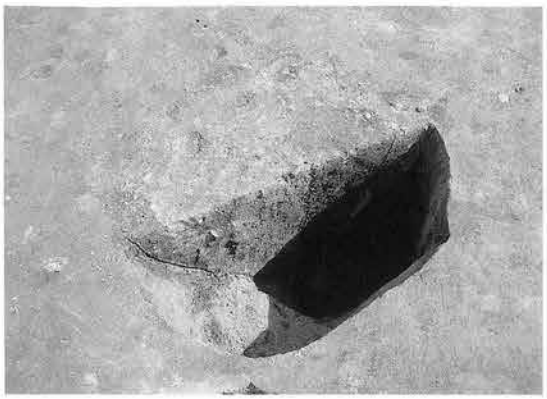
ＲＢ001　103号柱穴状土坑　断面（北東から）



ＲＢ001　110号柱穴状土坑　断面（南東から）



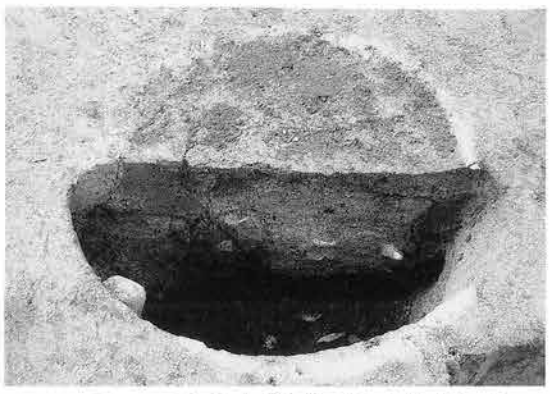
ＲＢ001　113号柱穴状土坑　断面（南東から）



ＲＢ001　115号柱穴状土坑　断面（北東から）

ＲＢ001　128号柱穴状土坑　断面（北東から）

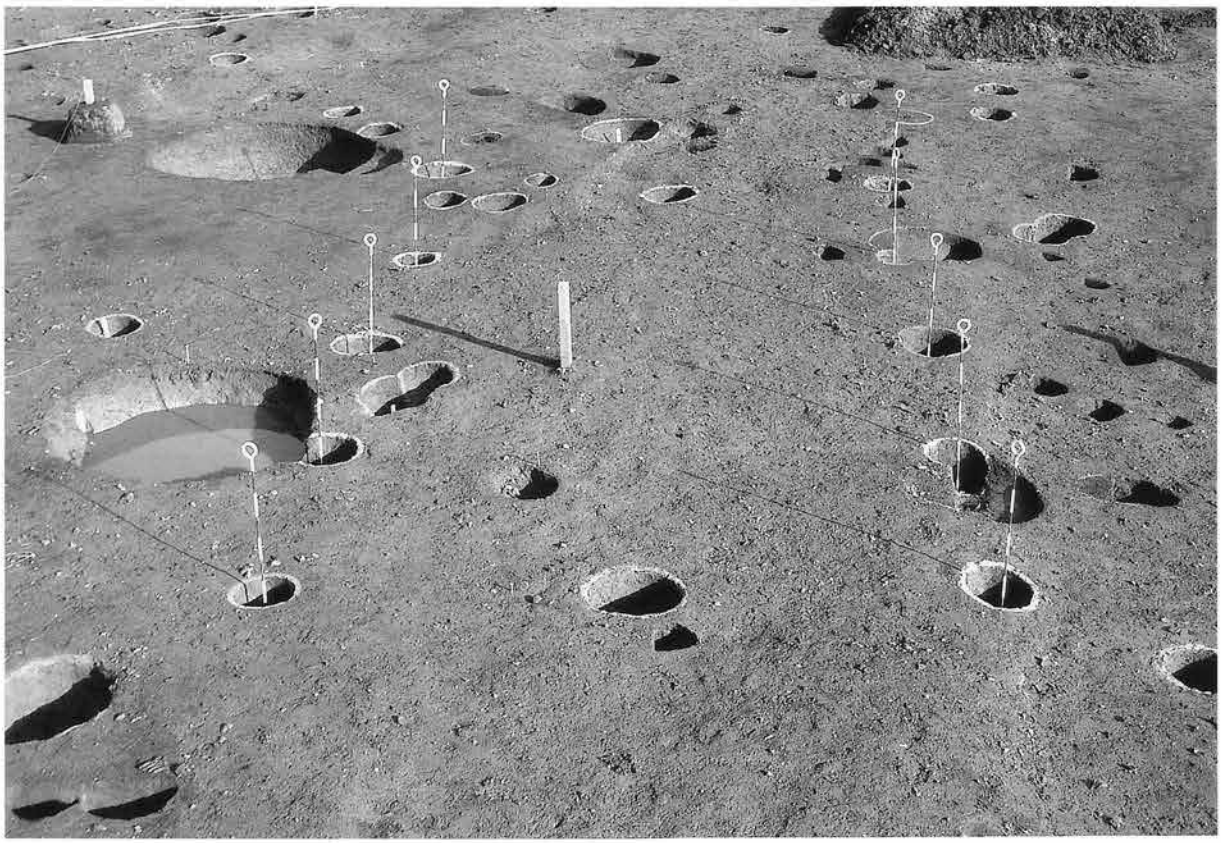
ＲＢ001　168号柱穴状土坑　断面（南東から）



ＲＢ001　169号柱穴状土坑　断面（南東から）

ＲＢ001　171号柱穴状土坑　断面（南から）

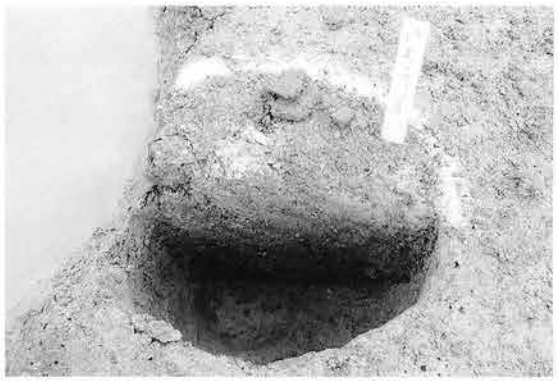
写真図版24　ＲＢ001掘立柱建物跡



平面（西から）

R B004　432号柱穴状土坑（南から）

R B004　440号柱穴状土坑（南から）



R B004　445号柱穴状土坑（西から）

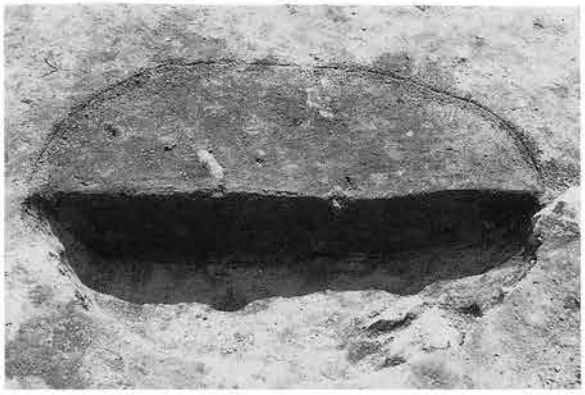
R B004　457号柱穴状土坑（西から）

写真図版25　R B004掘立柱建物跡

ＲＤ103　平面（北から）

ＲＤ103　断面（西から）

ＲＤ104　平面（北東から）



ＲＤ104　断面（北西から）

ＲＤ105　平面（北から）

ＲＤ105　断面（西から）

ＲＤ106　平面（南西から）

ＲＤ106　断面（南西から）

写真図版26　ＲＤ103～106土坑

R D 107　平面（南から）

R D 107　断面（西から）

R D 108　平面（北から）

R D 108　断面（北西から）

R D 109　平面（北西から）

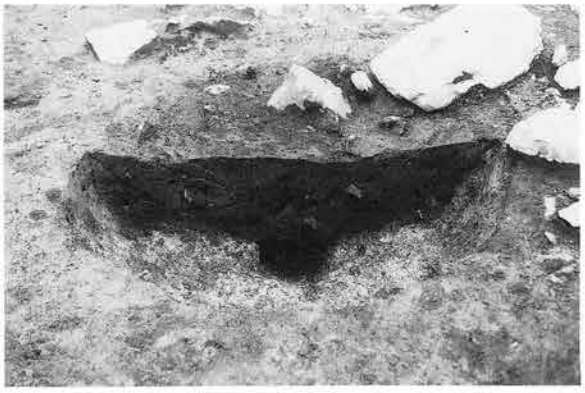
R D 109　断面（北西から）

R D 110　平面（西から）

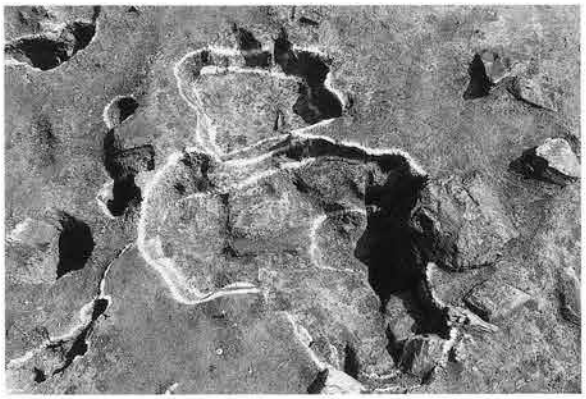
R D 110　断面（西から）

写真図版27　R D 107～110土坑

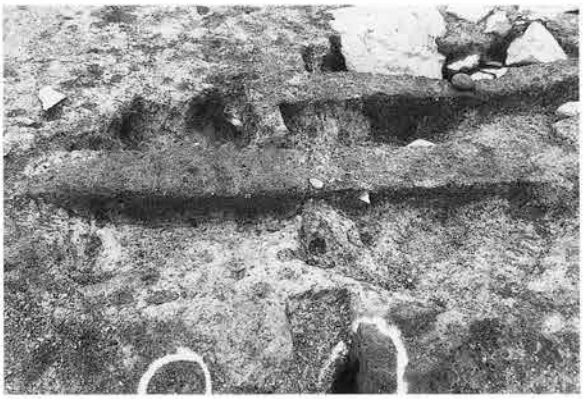
RD111　平面（西から）



RD111　断面（北西から）



RD112・113・114　平面（西から）

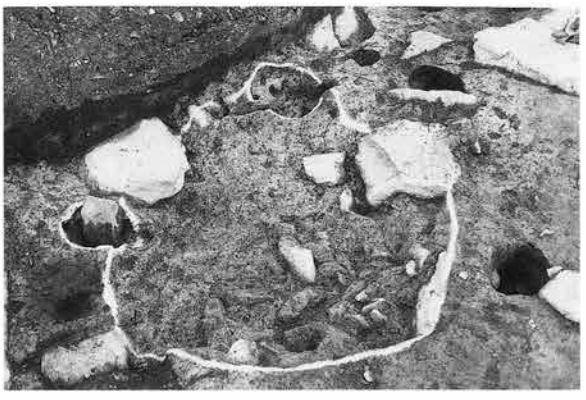


RD112・113　断面（北から）

RD113・114　断面（北から）

RD115　平面（南西から）

RD115　断面（北西から）

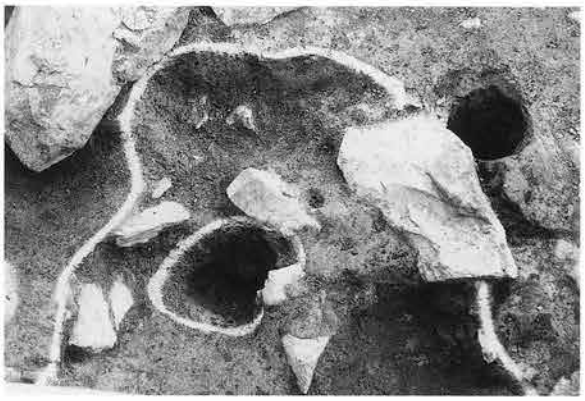


RD116　平面（南から）

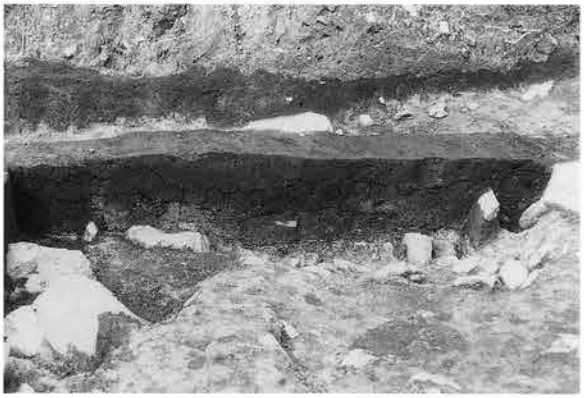
写真図版28　RD111～116土坑

ＲＤ116　断面（南東から）

ＲＤ116　遺物出土状況（南から）

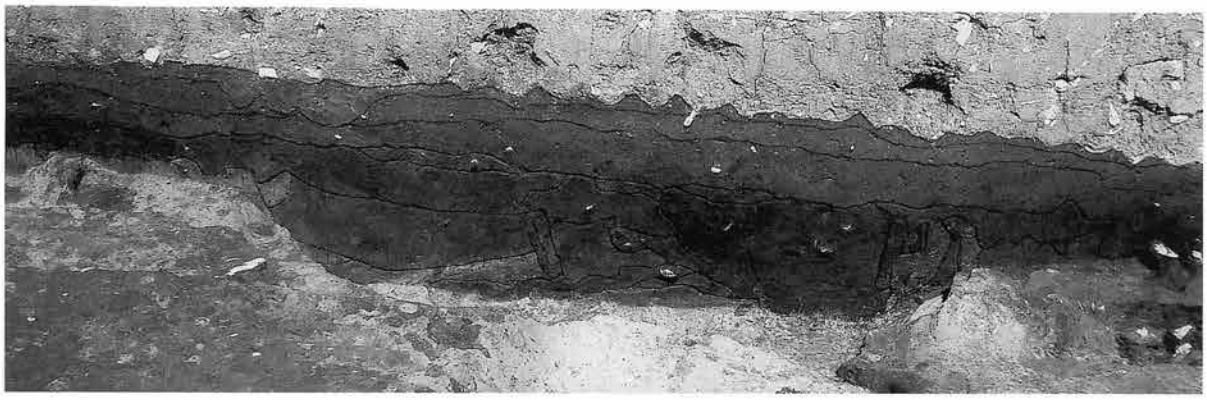


ＲＤ118　平面（北西から）



ＲＤ118　断面（南東から）

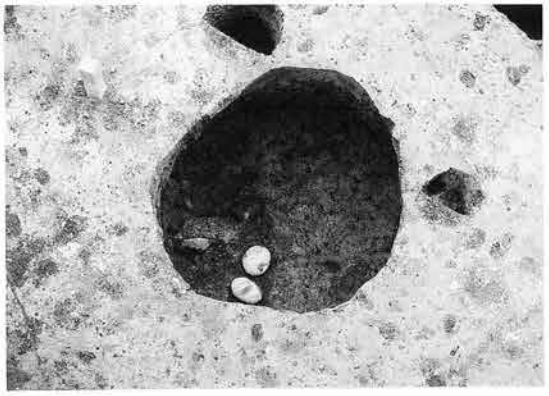
ＲＤ119～122　断面（南東から）



ＲＤ119～122　平面（南東から）

写真図版29　ＲＤ116・118～122土坑

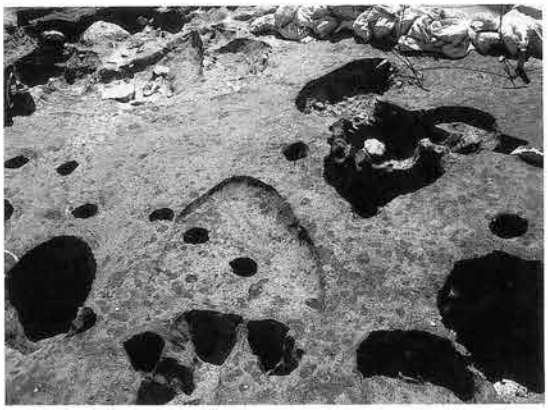
R D 123　断面（南東から）



R D 123　遺物出土状況（北西から）

R D 124　断面（南東から）

R D 124　平面（北西から）



R D 125　平面（北西から）

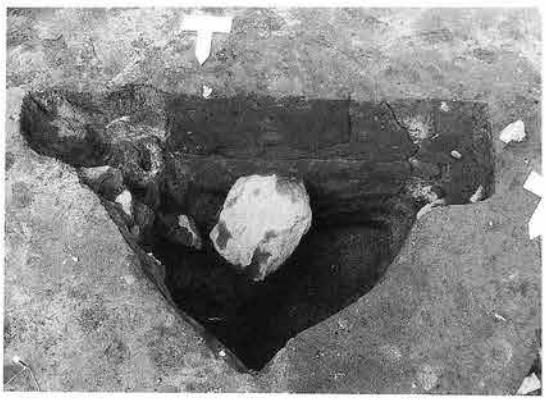
R D 125　断面（南西から）

R D 126　平面（南東から）

R D 126　断面（南東から）

写真図版30　R D 123～126土坑

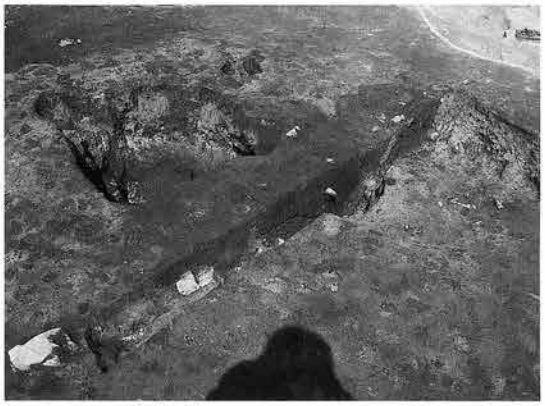
R D 127　平面（北から）



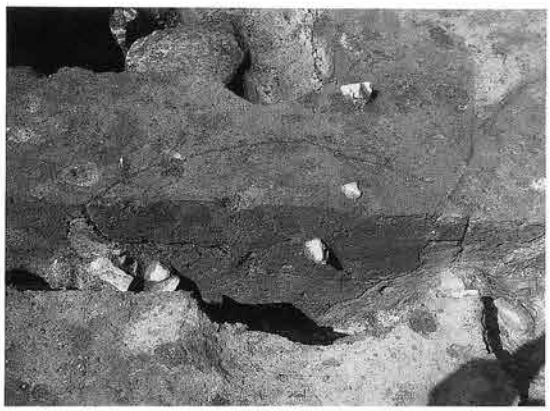
R D 127　断面（南西から）

R D 127　礫出土状況（南から）

R D 127～130　平面（北西から）

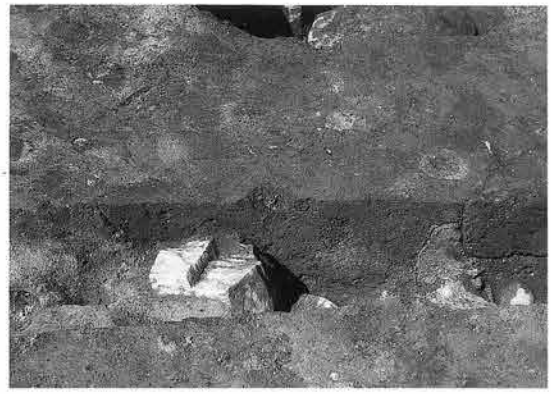


R D 128～130　断面（西から）



R D 128　断面（南から）

R D 129　断面（南から）



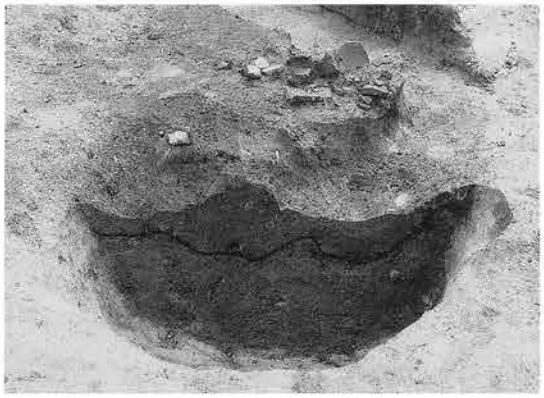
R D 130　断面（南から）

写真図版31　R D 127～130土坑

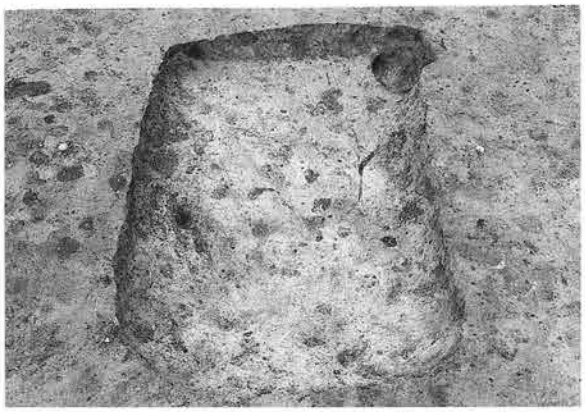
RD117　平面（北西から）

RD117　断面（南西から）

RD131　平面（南東から）



RD131　断面（北東から）



RD132　平面（南から）

RD132　断面（南から）

RD133　平面（北東から）

RD133　断面（北東から）

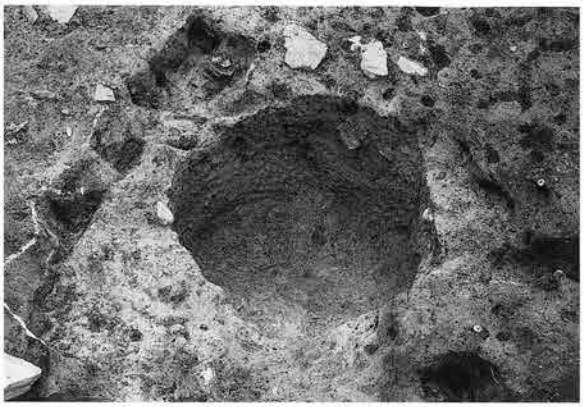
写真図版32　RD117・131～133土坑

ＲＤ134　平面（北西から）

ＲＤ134　断面（北西から）

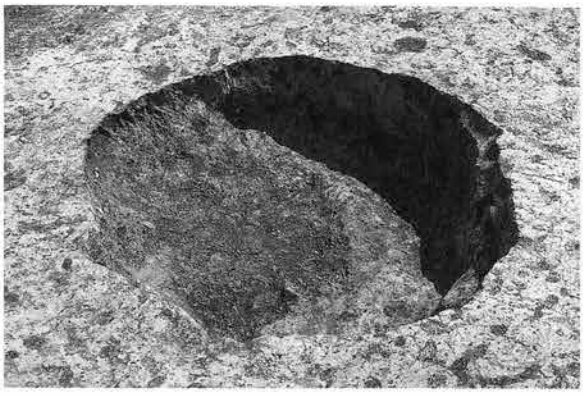
ＲＤ135　平面（南西から）

ＲＤ135　断面（南東から）

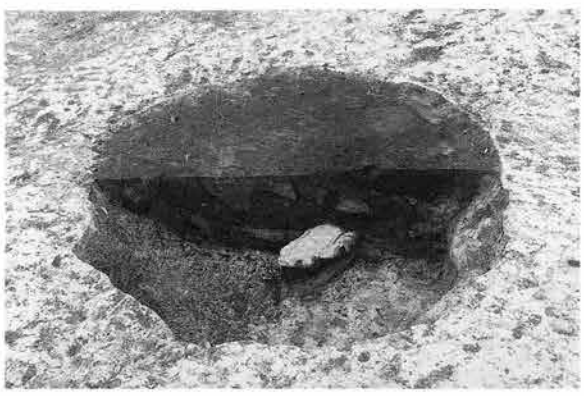


ＲＤ136　平面（北東から）

ＲＤ136　断面（北東から）



ＲＤ137　平面（南西から）



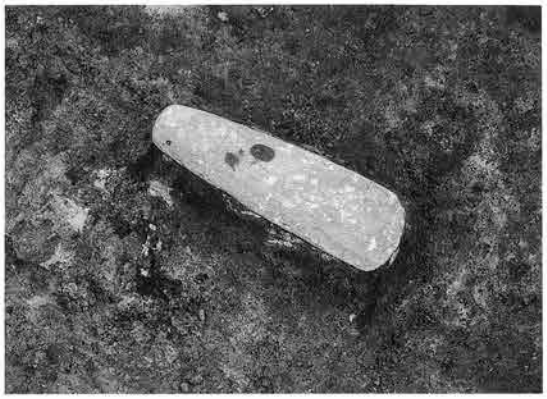
ＲＤ137　断面（南西から）

写真図版33　ＲＤ134～137土坑

ＲＤ138　平面（南から）

ＲＤ138　断面（南東から）

ＲＤ138　磨製石斧出土状況（南から）



ＲＤ138　磨製石斧出土状況アップ（南から）

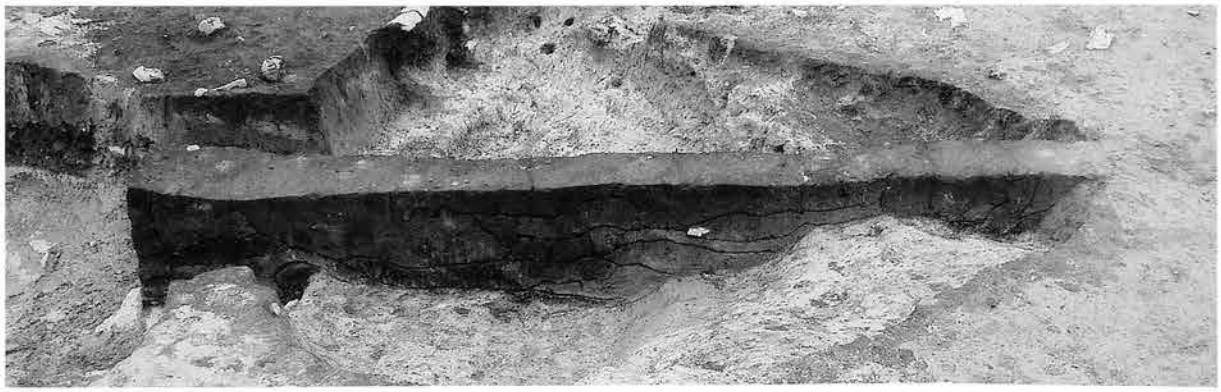
ＲＤ139　平面（南から）

ＲＤ139　断面（北東から）

ＲＤ140～ＲＤ143　平面（北西から）

ＲＤ140・141　平面（北西から）

写真図版34　ＲＤ138～143土坑



ＲＤ141～ＲＤ143　断面（北西から）

ＲＤ144～153　平面（北西から）

ＲＤ144　断面（西から）

ＲＤ146　断面（南東から）

写真図版35　ＲＤ141～153土坑

R D 146　断面（南西から）

R D 146　琥珀出土状況（北から）

R D 144・148・150　断面（西から）

R D 148　断面（西から）

R D 151　断面（北西から）

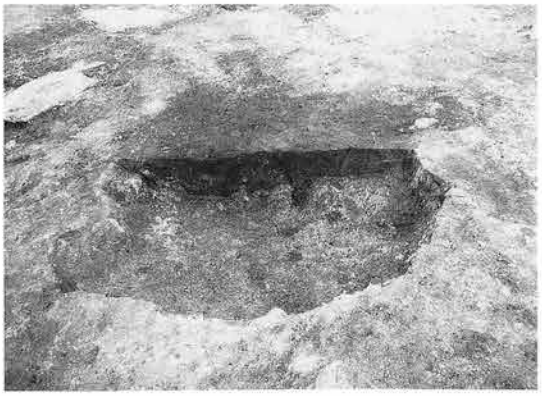
R D 150　断面（南から）

R D 150　断面（西から）

R D 151　断面（西から）

写真図版36　R D 144・146・148・150・151土坑

R D 154　平面（西から）



R D 154　断面（西から）

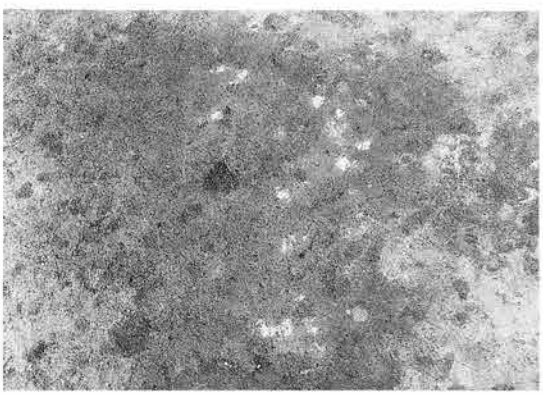
R D 155　平面（南東から）

R D 155　断面（南西から）

R D 156　平面（南西から）

R D 156　断面（南西から）

R D 157　平面（南東から）

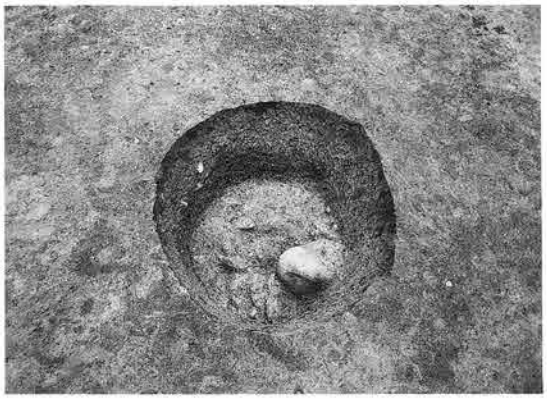


R D 157　検出状況（南東から）

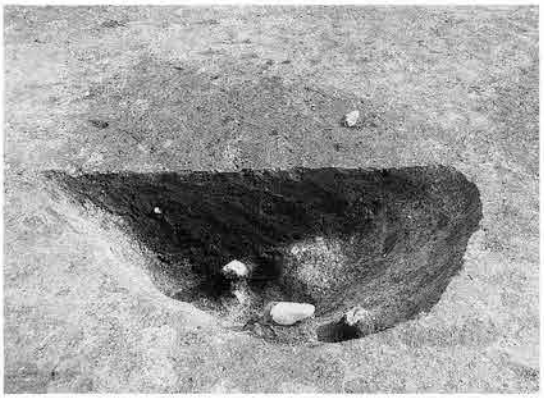
写真図版37　R D 154～157土坑

R D 157　断面（南西から）

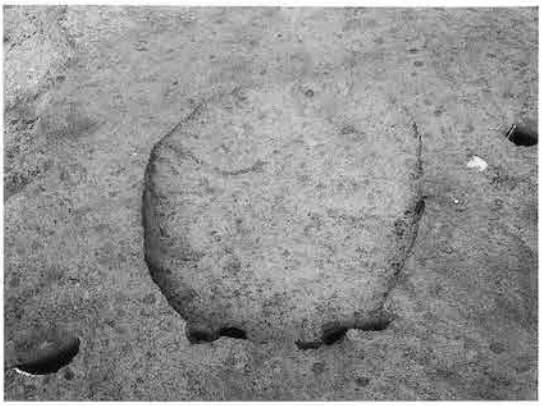
R D 157　断面（南東から）



R D 158　平面（南西から）

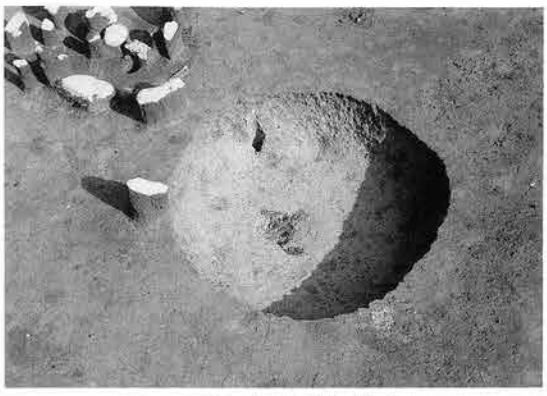


R D 158　断面（南西から）



R D 159　平面（南西から）

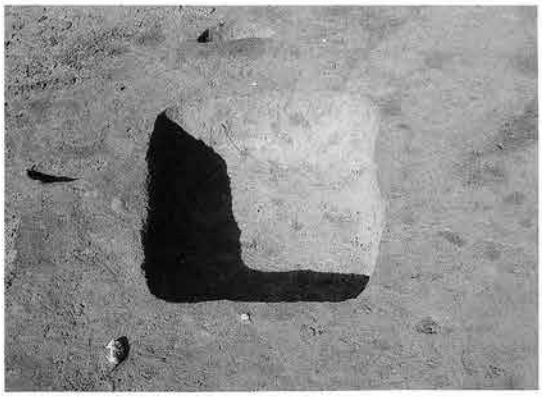
R D 159　断面（南西から）



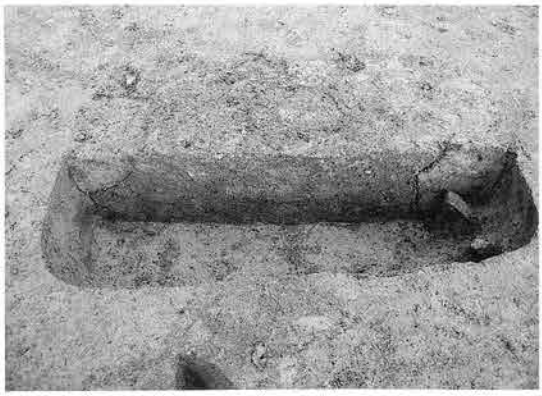
R D 161　平面（南西から）

R D 161　断面（南西から）

写真図版38　RD157～159・161土坑



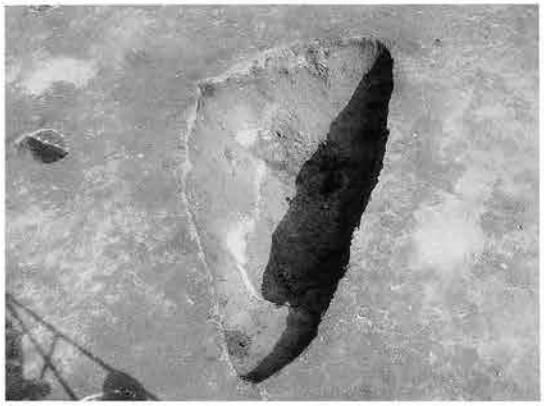
ＲＤ162　平面（南東から）



ＲＤ162　断面（北東から）

ＲＤ162　遺物出土状況（北東から）

ＲＤ162　遺物出土状況アップ（北東から）



ＲＤ163　平面（南西から）

ＲＤ163　断面（南西から）

ＲＤ163　遺物出土状況（北東から）

ＲＤ163　遺物出土状況アップ（北東から）

写真図版39　ＲＤ162・163土坑

平面（南西から）

断面（南東から）

断面（南西から）

写真図版40　ＲＥ002竪穴建物跡（１）

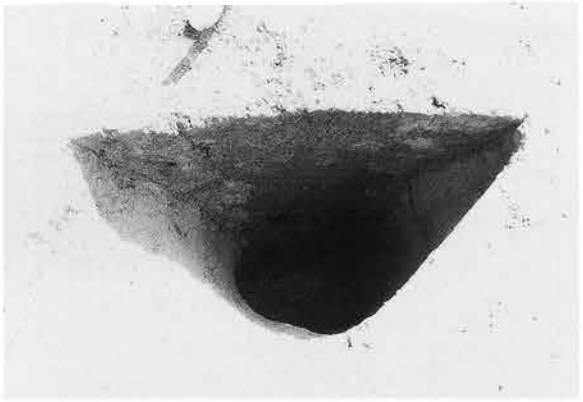
作業風景（西から）

断面（北西から）

ＰＰ２　断面（南東から）

ＰＰ７　断面（東から）

ＰＰ13　断面（北西から）



ＰＰ18　断面（北西から）

ＰＰ15　断面（南西から）

作業風景（北から）

写真図版41　ＲＥ002竪穴建物跡（２）

平面（南西から）

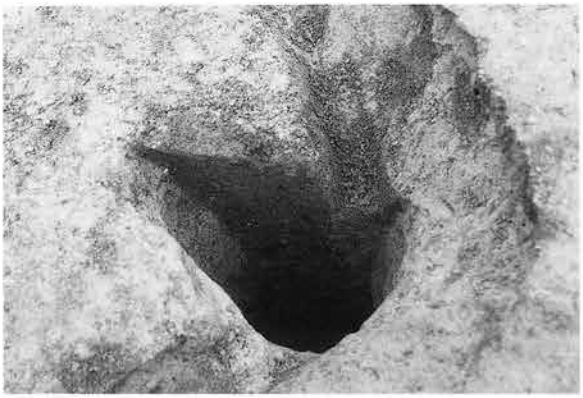
断面（南西から）

断面（南東から）

写真図版42　ＲＥ003竪穴建物跡（１）

洪武通寶出土状況（東から）

ＰＰ25　断面（東から）



ＰＰ15　断面（南から）

ＰＰ11　断面（南西から）

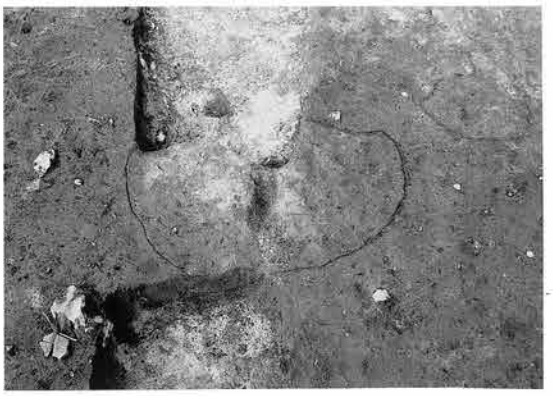
ＰＰ12　断面（南東から）

ＰＰ34　断面（北東から）

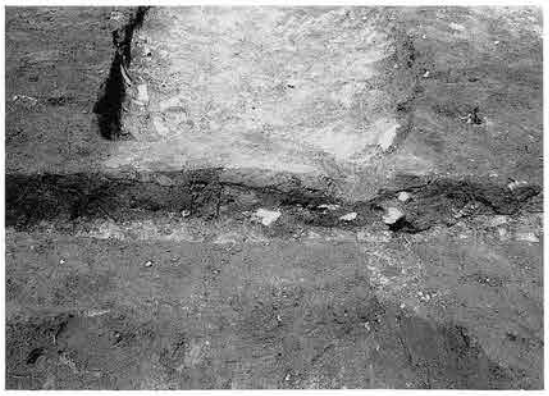
ＰＰ３・４　断面（南から）

255号・258号柱穴状土坑・ＰＰ16　断面（南西から）

写真図版43　ＲＥ003竪穴建物跡（２）



ＲＦ001　平面（南から）



ＲＦ001　断面（南西から）

ＲＦ002　平面（南西から）

ＲＦ002　断面（南西から）

ＲＦ003　平面（南西から）

ＲＦ003　断面（南西から）

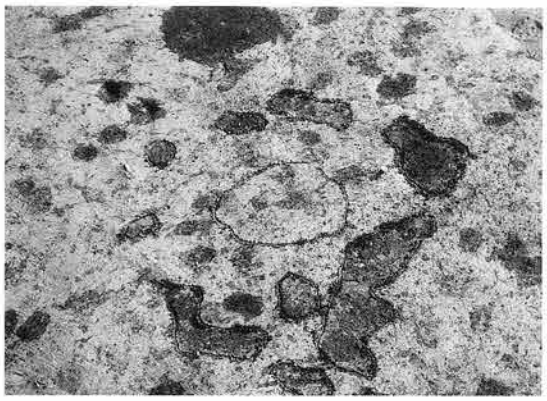
ＲＦ004　平面（北から）

ＲＦ004　断面（北から）

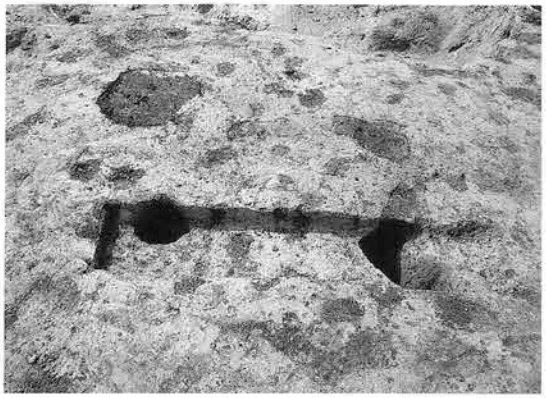
写真図版44　ＲＦ001～004焼土

R F 005　平面（北西から）

R F 005　断面（南から）

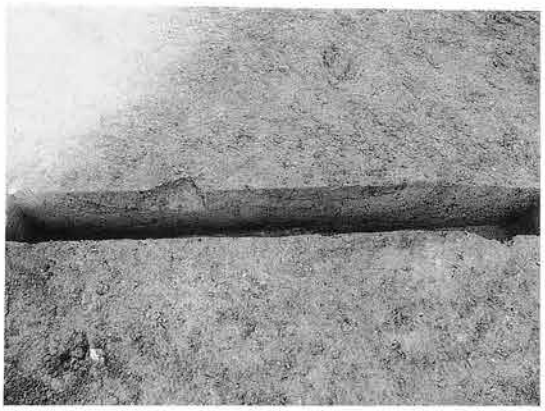


R F 006　平面（南から）



R F 006　断面（北東から）

R F 007　断面（北から）



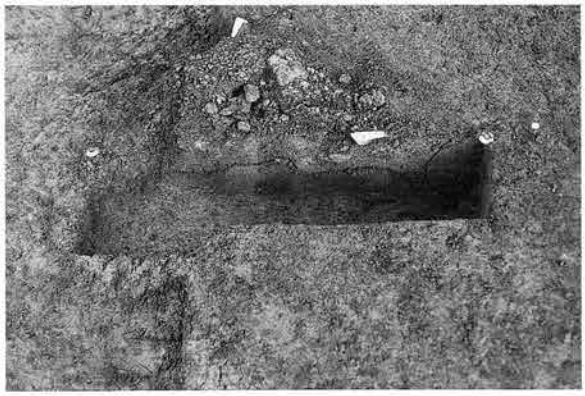
R F 009　断面（南西から）

R F 008　平面（東から）

R F 008　断面（南東から）

写真図版45　R F 005～009炉跡・焼土

R F010　平面（南西から）



R F010　断面（西から）

R H033　平面（南から）

R H033　断面（南東から）

R H033　下部土坑平面（南東から）

R H034　断面（南西から）

R H034　検出状況（南から）

R H034　下部土坑平面（南から）

写真図版46　R F010 焼土・R H033・034立石・集石

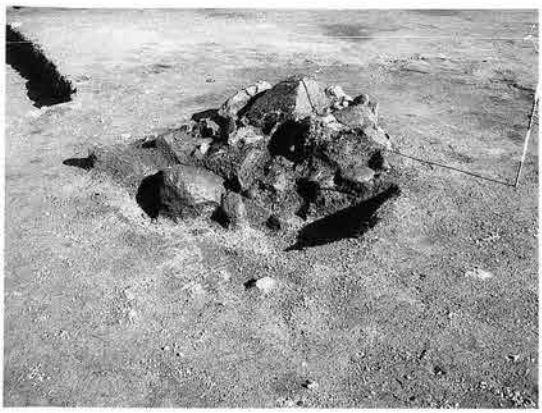
R H035　検出状況（西から）

R H036　検出状況（西から）

R H037　検出状況（西から）

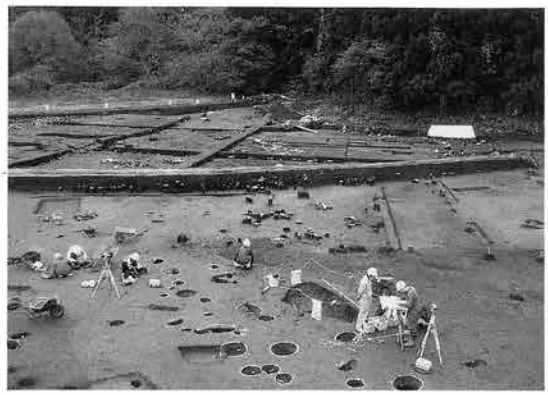
R H038　検出状況（南西から）

R H039　検出状況（南西から）



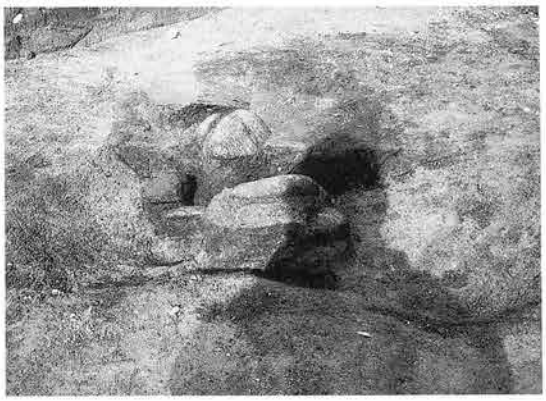
R H039　断面（南西から）

R H039　下部土坑平面（南西から）



調査区東部　調査風景（南西から）

写真図版47　R H035～039集石



R H040　断面（南西から）

R H041～046　検出状況（南から）

R H041～042　検出状況（南西から）

R H043　検出状況（西から）

R H044　検出状況（西から）

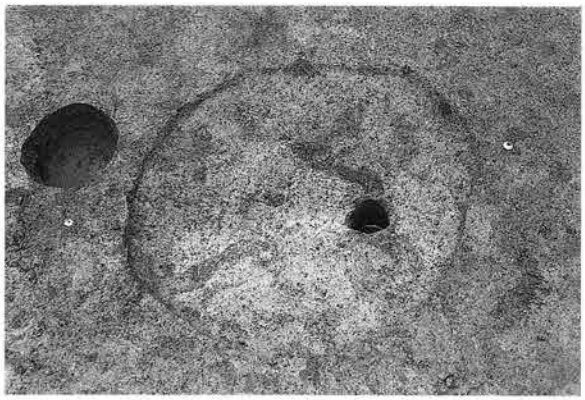
R H045　検出状況（西から）

写真図版48　R H040～046集石

R H047　検出状況（南西から）

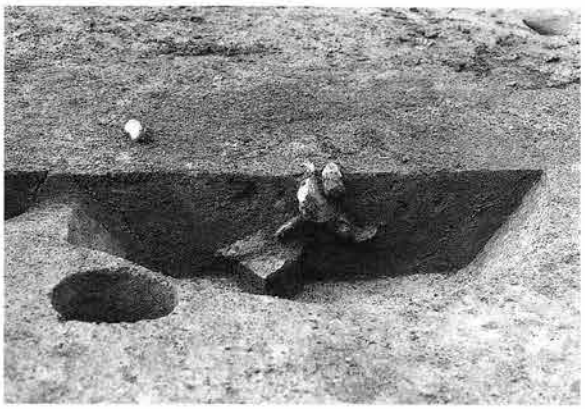
R H048　検出状況（西から）

R H048　下部土坑断面（南西から）



R H048　下部土坑平面（西から）

R H049　検出状況（南東から）



R H049　下部土坑断面（南東から）

R H049　下部土坑平面（南東から）

R H050・051　検出状況（西から）

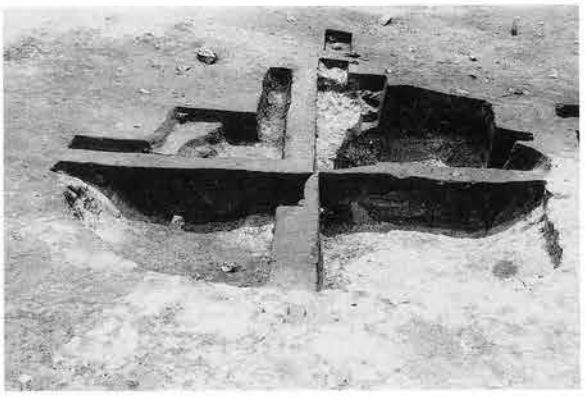
写真図版49　R H047～051集石

R X001　平面（北東から）

R X001　断面（北西から）

R X001　断面（北西から）

R X001　断面（南西から）



R X001　断面（北西から）

写真図版50　R X001土取り穴

R X002～007　平面（北から）

R X002　断面（南西から）

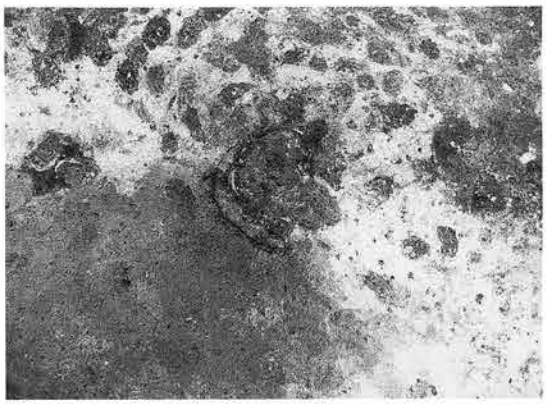
写真図版51　R X002～007土取り穴

R X003　断面（南西から）

R X002　断面（南東から）

R X004　断面（西から）

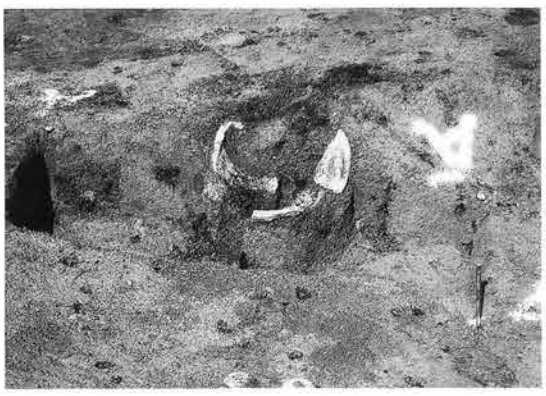
R X005　断面（西から）



R P006　検出状況（北東から）

R P006　断面（北東から）

R P007　検出状況（南西から）



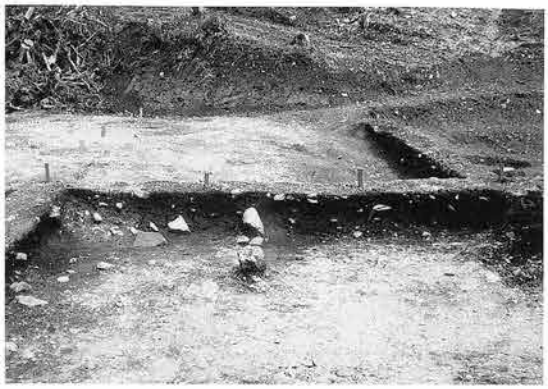
R P007　断面（南西から）

写真図版52　R X002～007土取り穴・R P006・007埋設土器

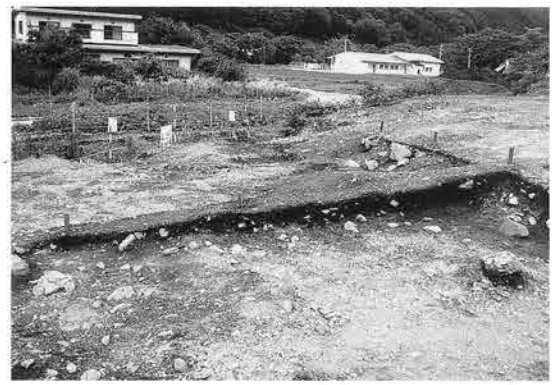
捨て場　遠景（南西から）

捨て場　全景（南から）

捨て場　断面（南から）



捨て場　断面（西から）

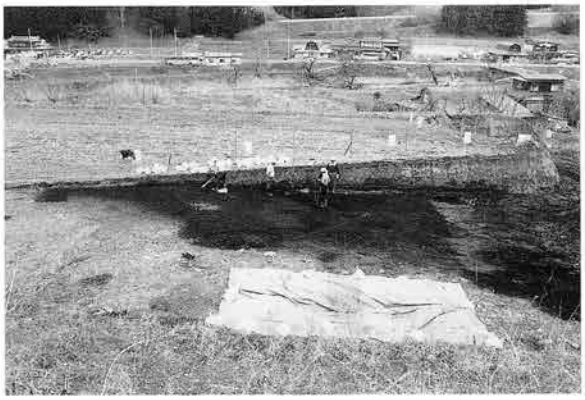


捨て場　断面（南から）

写真図版53　捨て場

基本土層（南東から）

試掘トレンチ掘削作業（南から）



検出作業（南から）

第４トレンチ（南東から）

土取り穴調査風景（東から）

竪穴住居跡調査風景（東から）

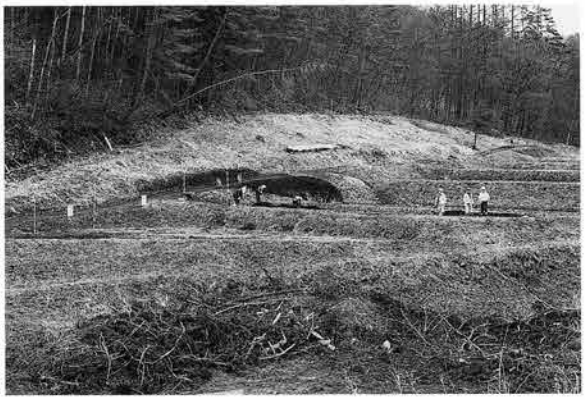
土取り穴調査風景（北西から）

ＲＡ011調査風景（北西から）

写真図版54　調査区西部調査風景

調査終了時（北から）

第８トレンチ　断面（北西から）



調査前風景（北西から）

第７・８・９トレンチ（西から）

作業風景（北西から）

作業風景（北北西から）

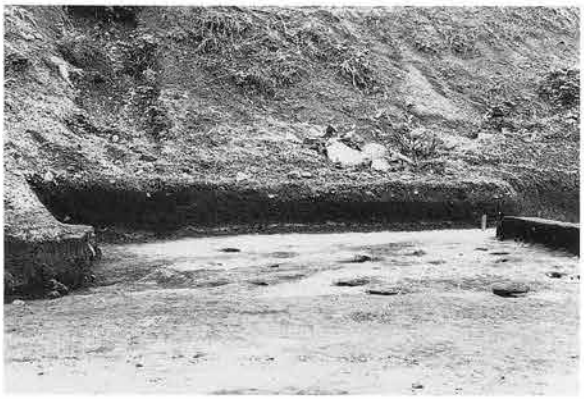
竪穴住居跡調査風景（西から）

竪穴住居跡調査風景（南東から）

写真図版55　調査区南西部調査風景

第29トレンチ（西から）

３Ｙ11ａ～14ａ土層断面（西から）



３Ｙ15ｅ～15ａ土層断面※最下位にＴｏ－Ｃｕ層（北から）

３Ｙ15ｅ～15ａ土層断面アップ※最下位にＴｏ－Ｃｕ層(北から)

第11～14トレンチ（南西から）

調査区中央部柱穴状土坑群（西から）

作業風景（西から）

作業風景（北西から）

写真図版56　調査区中央部調査風景

南西部調査開始当初　（北東から）

東部表土除去後全景※Ⅳ層下位段階（南から）

東部東端作業風景（西から）

東部南端作業風景（北西から）

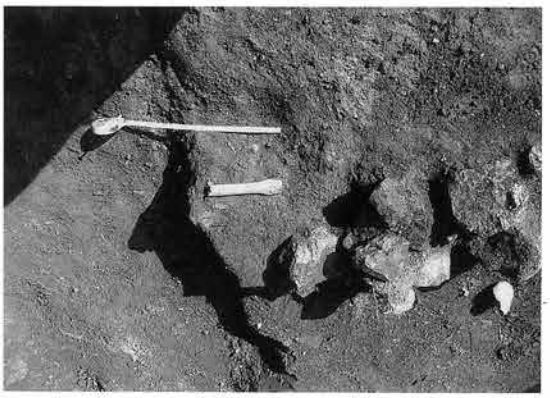
東部RE002調査風景（北東から）

東部北端作業風景（南西から）

東部中央作業風景（西から）

東部ＲＢ001・002・003全景（西から）

写真図版57　調査区南西部・東部調査風景



中央部石棒出土状況※掲載番号940（南から）

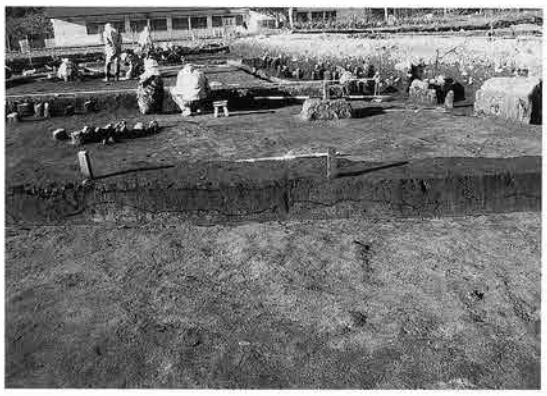
中央部石棒出土状況アップ※掲載番号940（南から）

中央部土器出土状況※掲載番号433（北西から）

中央部土器出土状況アップ※掲載番号433（北西から）

２Ｙ13ｕ～２Ａ13ａ土層ベルト（南から）

２Ｙ16ｕ～２Ａ16ｃ土層ベルト（南から）



２Ｙ18ｕ～２Ａ18ｄ土層ベルト（南から）

東部東端※第５次調査区境（南から）

写真図版58　調査区中央部・東部調査風景

現地説明会

現地説明会

紫波町立彦部小学校体験学習

紫波町立彦部小学校体験学習

親子発掘体験

親子発掘体験

盛岡市立川目小学校遺跡見学

盛岡市立川目小学校遺跡見学

写真図版59　教育普及活動

1

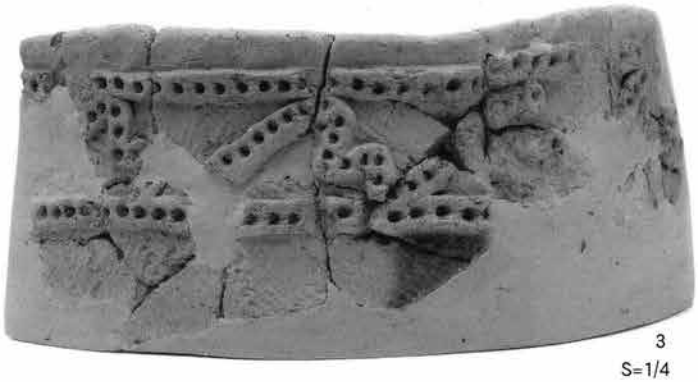
RA003

2

RA004

7

8


3

S=1/4

9

RA005

4

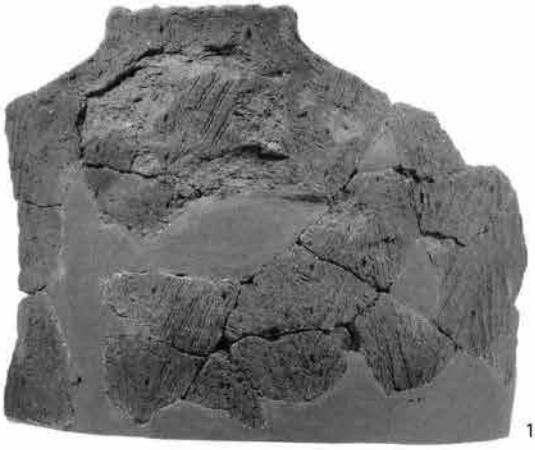
5

6

写真図版60　遺構内出土土器（１）

10

11


12

14

13

15

写真図版61　遺構内出土土器（２）

16

17

18

19

写真図版62　遺構内出土土器（３）

20

21

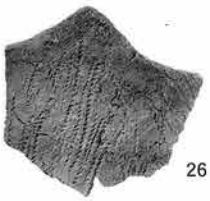
22

24

23

写真図版63　遺構内出土土器（４）

25


26

27

28

29

RA006

30

31

32

33

34

35

RA007

36

RA008

37

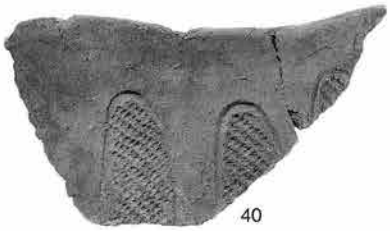
RA009

写真図版64　遺構内出土土器（5）

38

41

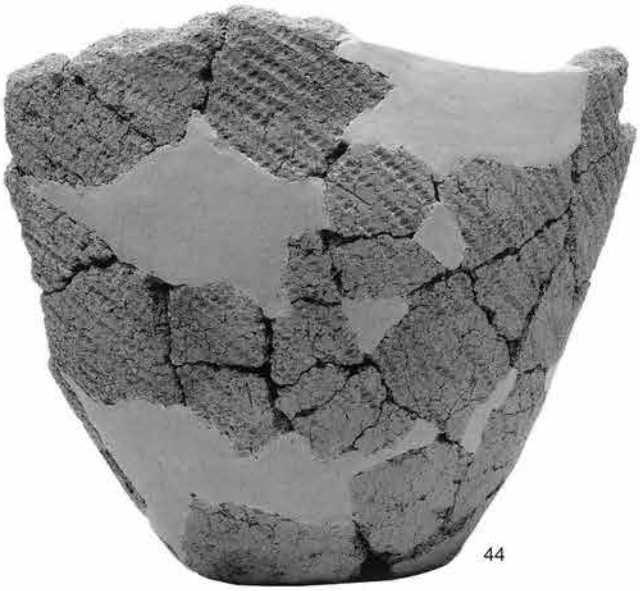
39


40

42

43

45


44

46

47

写真図版65　遺構内出土土器（６）

48

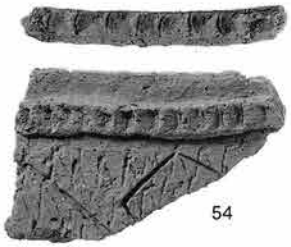
50

51

52

53

49


54

55

56

57

58

RA010

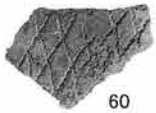
59

61

62

64

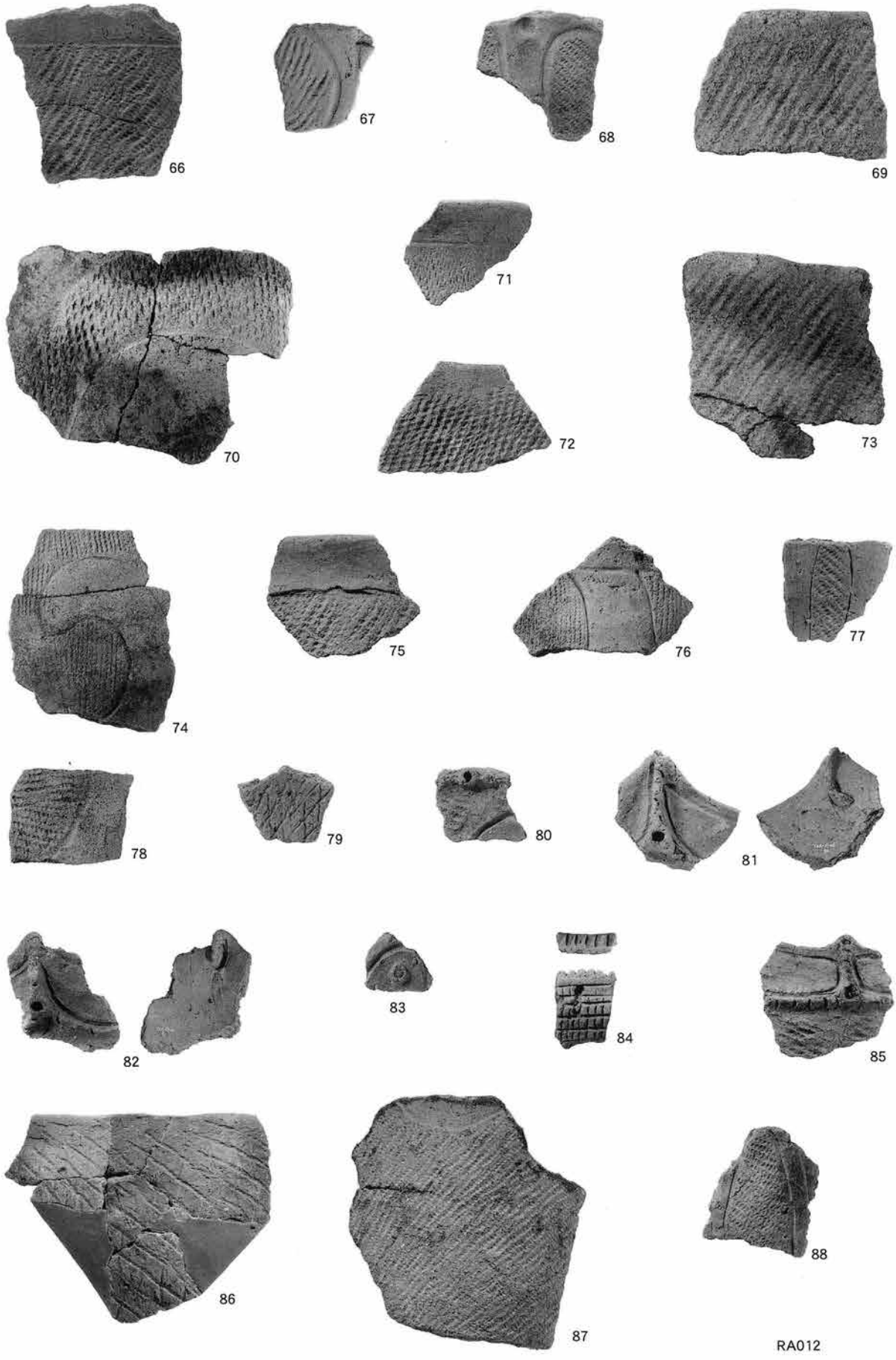
65


60

63

RA011

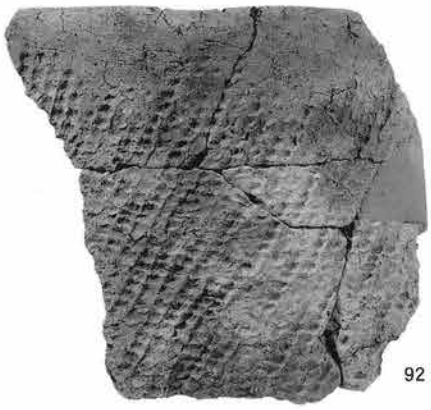
写真図版66　遺構内出土土器（７）



写真図版67　遺構内出土土器（８）

89

90


92

RA013

91

93

94

95

RA014

96

97

99

100

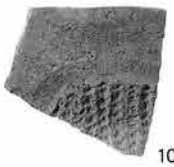
98

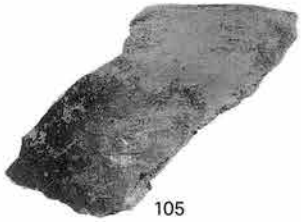
101

RA015

102

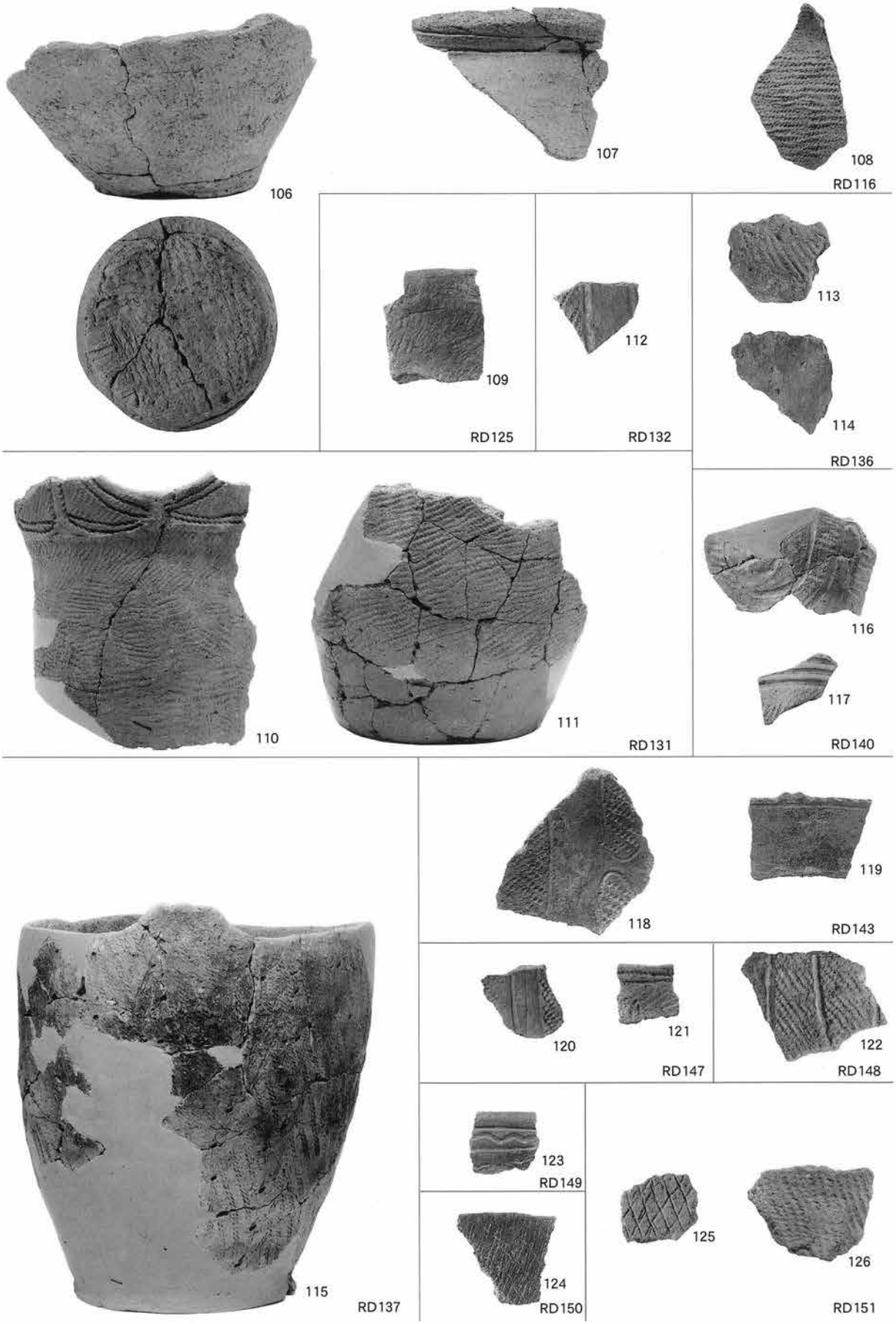
103


104

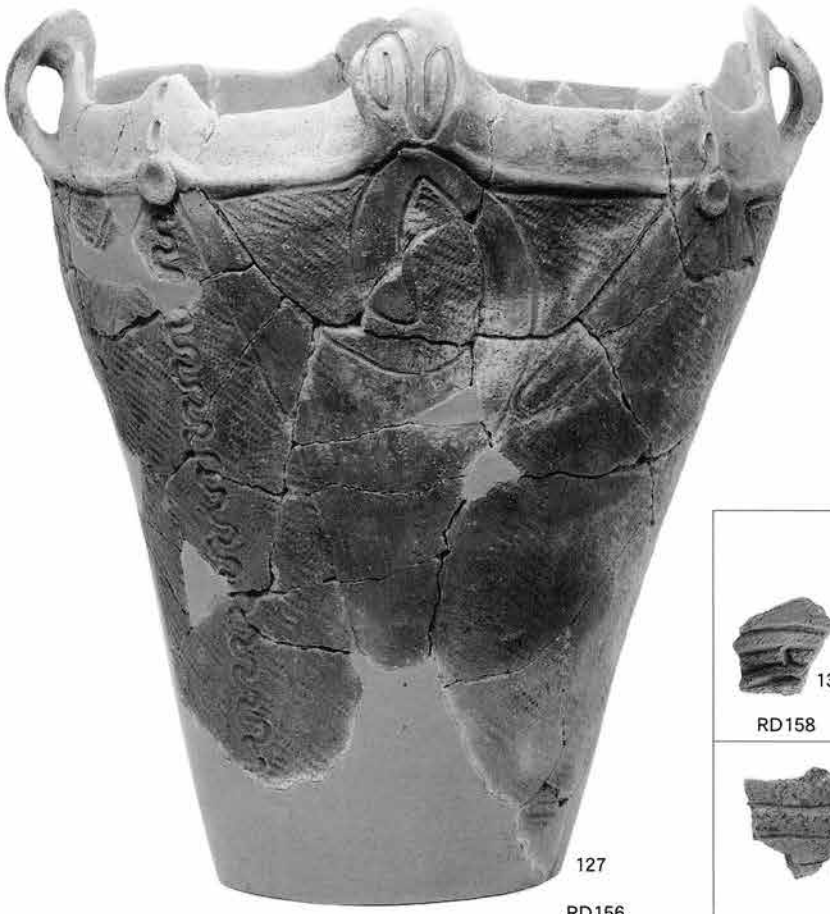

105

RA017

写真図版68　遺構内出土土器（９）



写真図版69　遺構内出土土器（10）


127
RD156

128

129

130

131
RD158

132
RD160

133

134

135
RD161

136

138

137

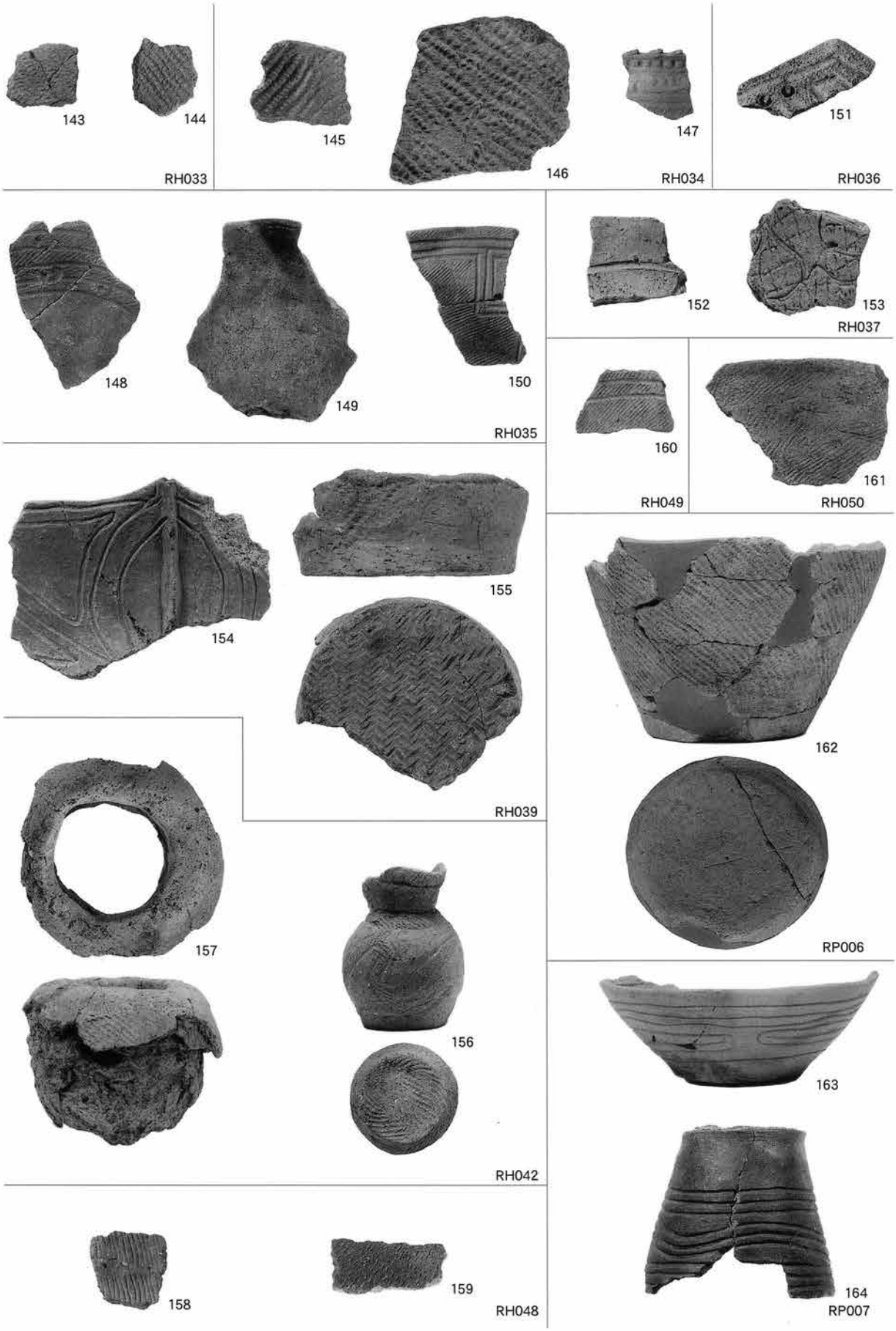
139

142
RD163

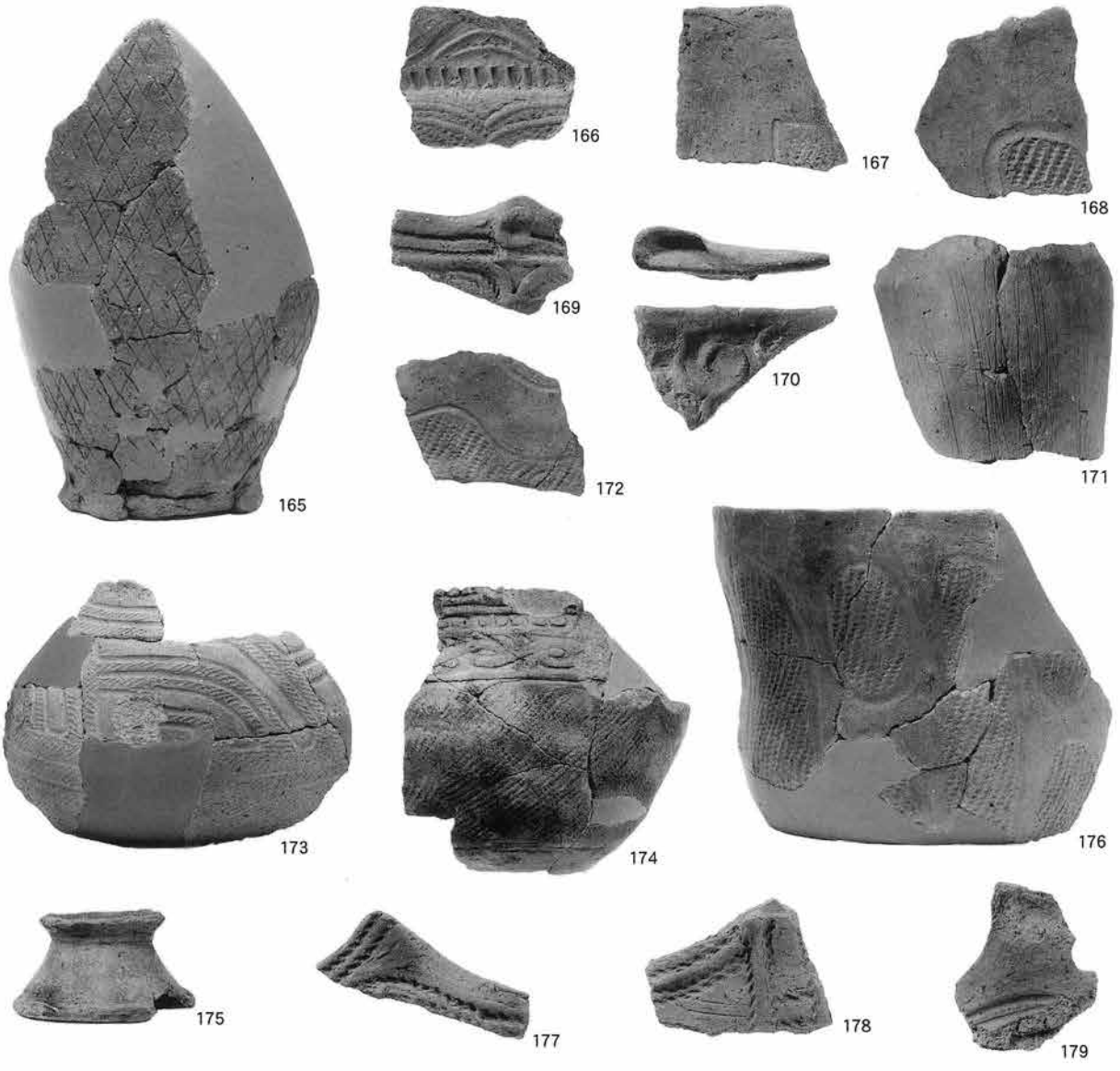
140

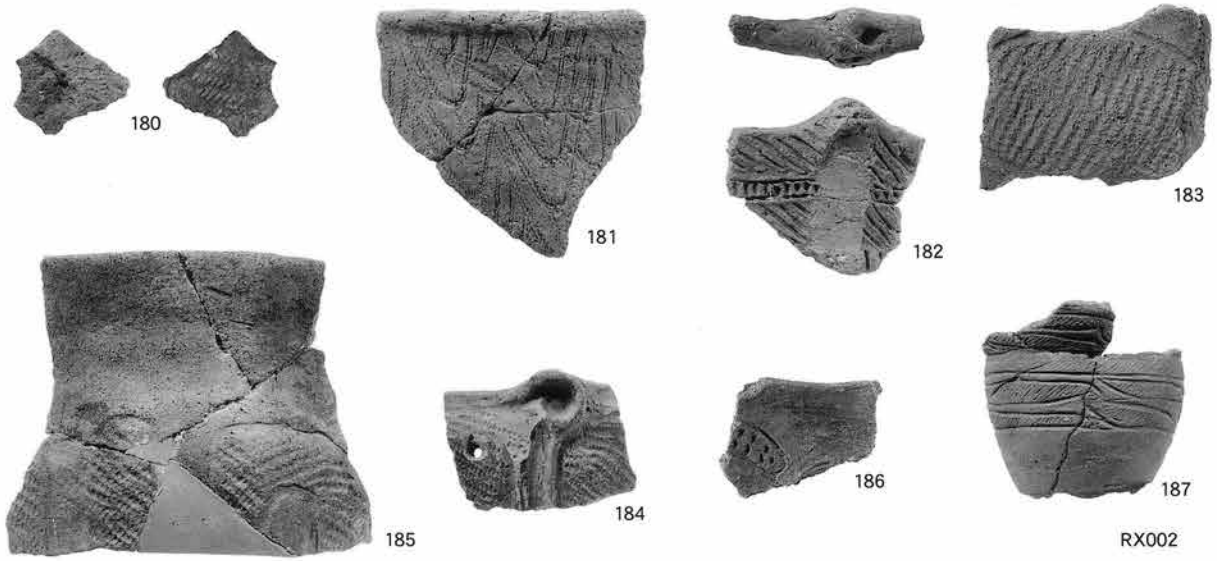
141

写真図版70　遺構内出土土器（11）

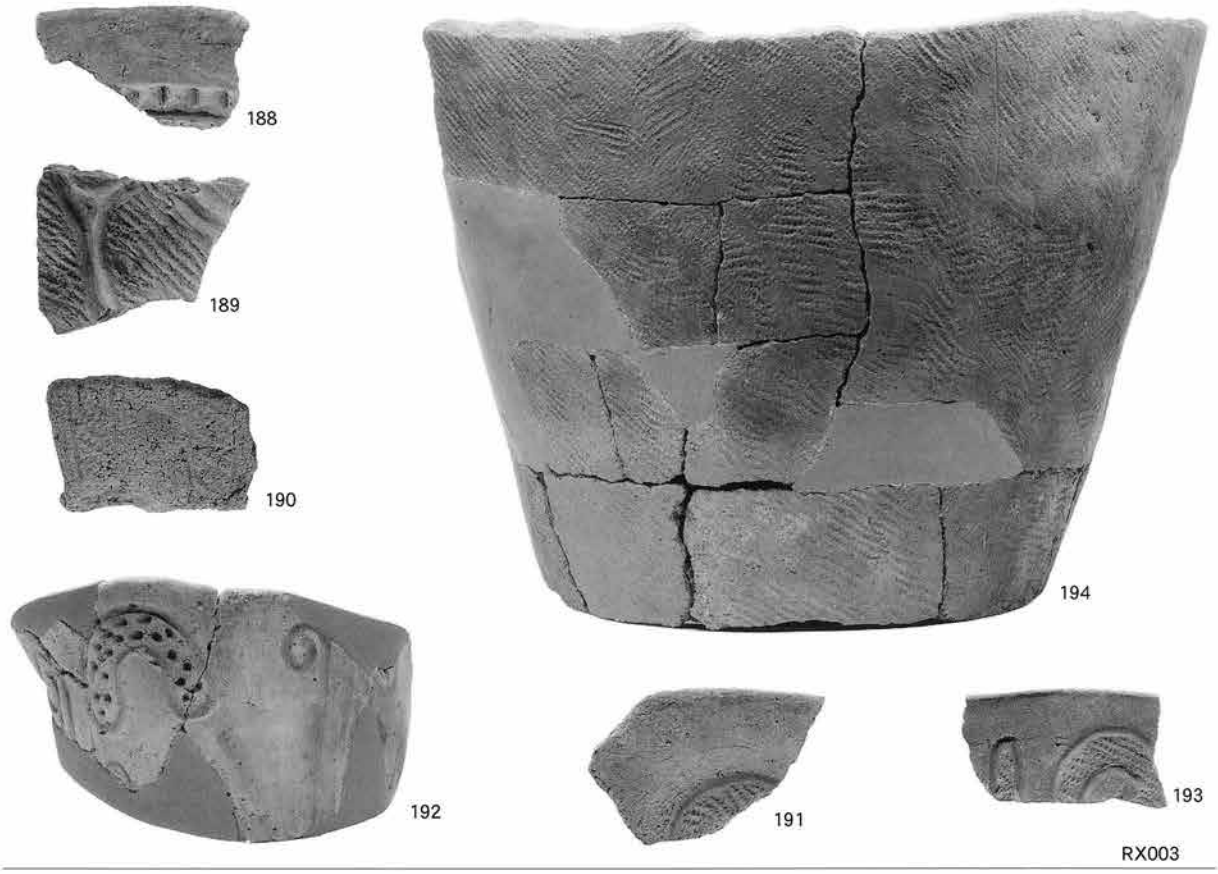


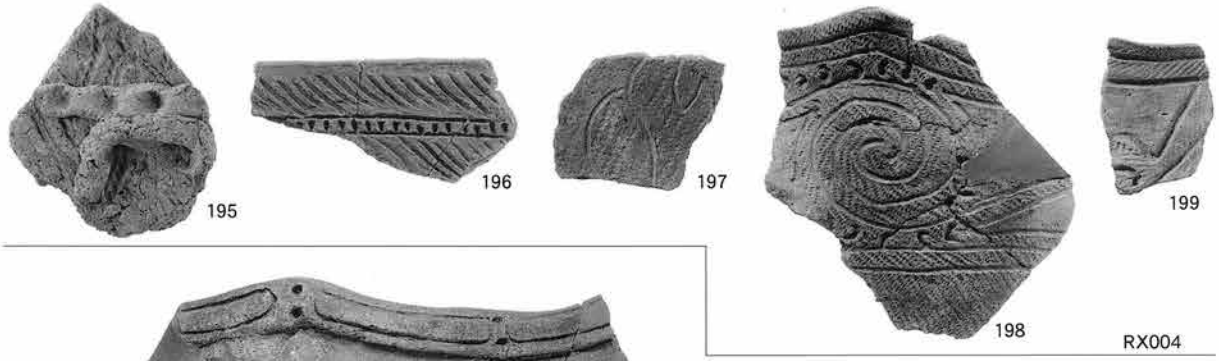
写真図版71　遺構内出土土器（12）

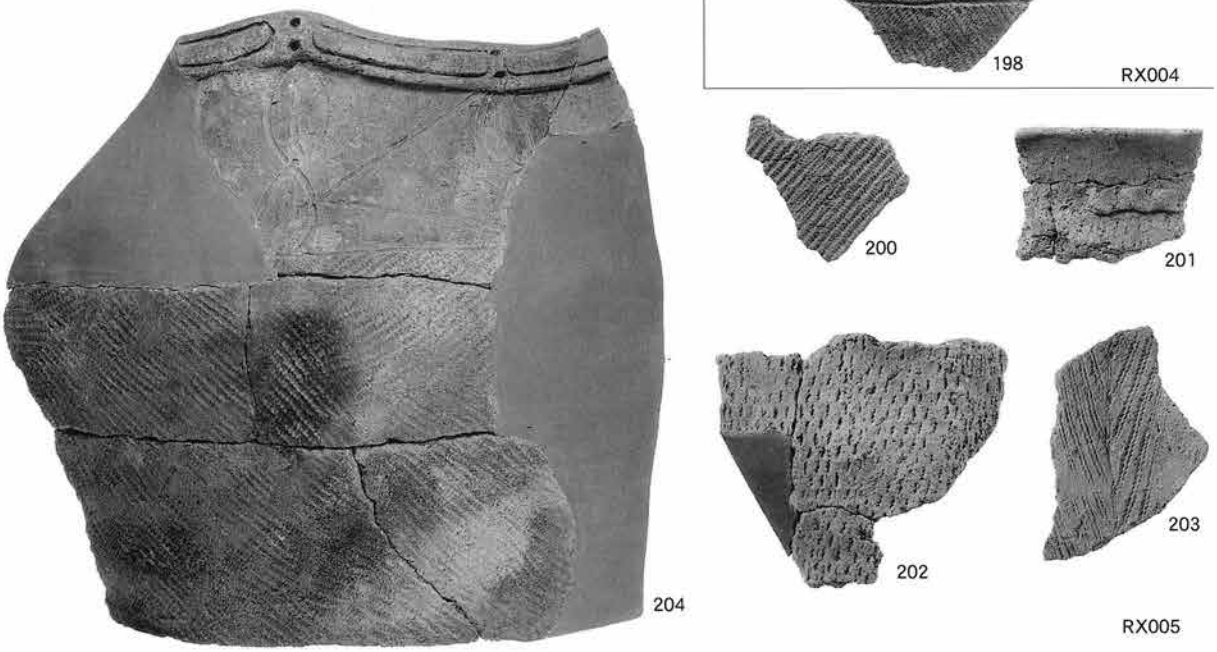




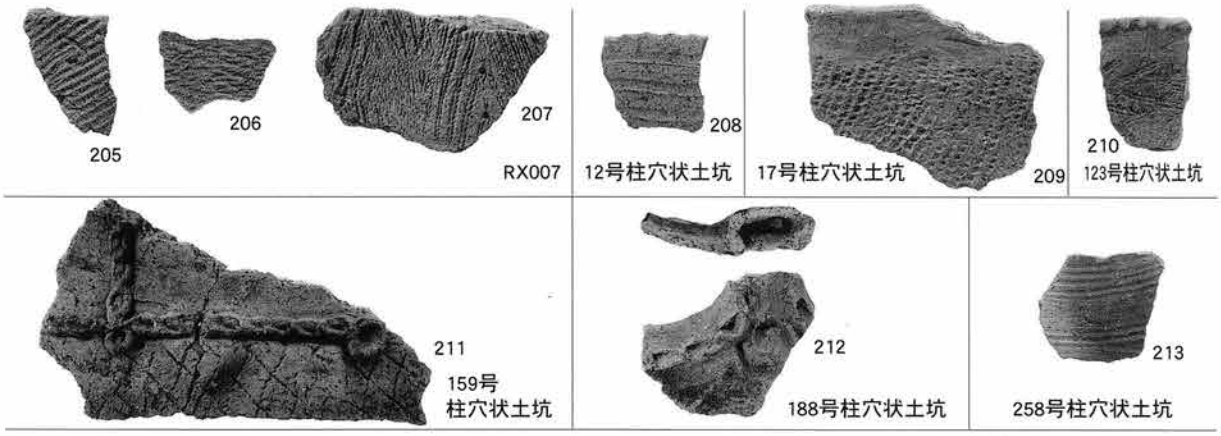
写真図版72　遺構内出土土器（13）







写真図版73　遺構内出土土器（14）



写真図版74　遺構内出土土器（15）・中央部捨て場出土土器（１）

215

217

216

218

写真図版75　中央部捨て場出土土器（２）

219

220

221

222

225

223

224

写真図版76　中央部捨て場出土土器（３）

226

227

228

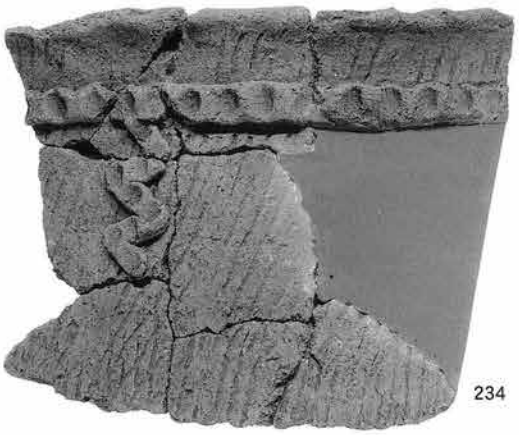
229

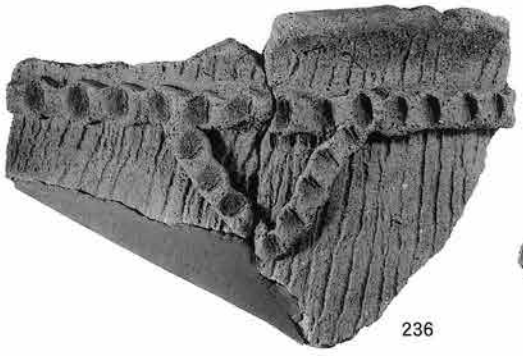
230

231

232

233


234


236

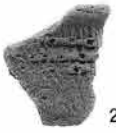
235

237

写真図版77　中央部捨て場出土土器（４）

238

239

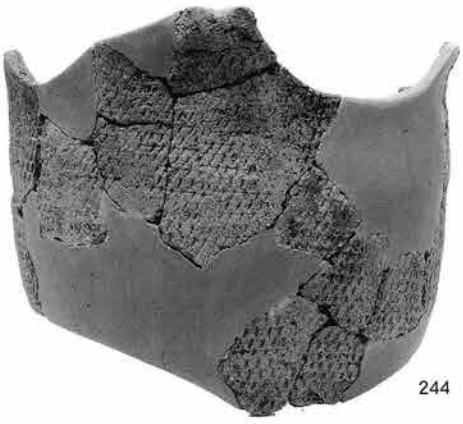

240

241

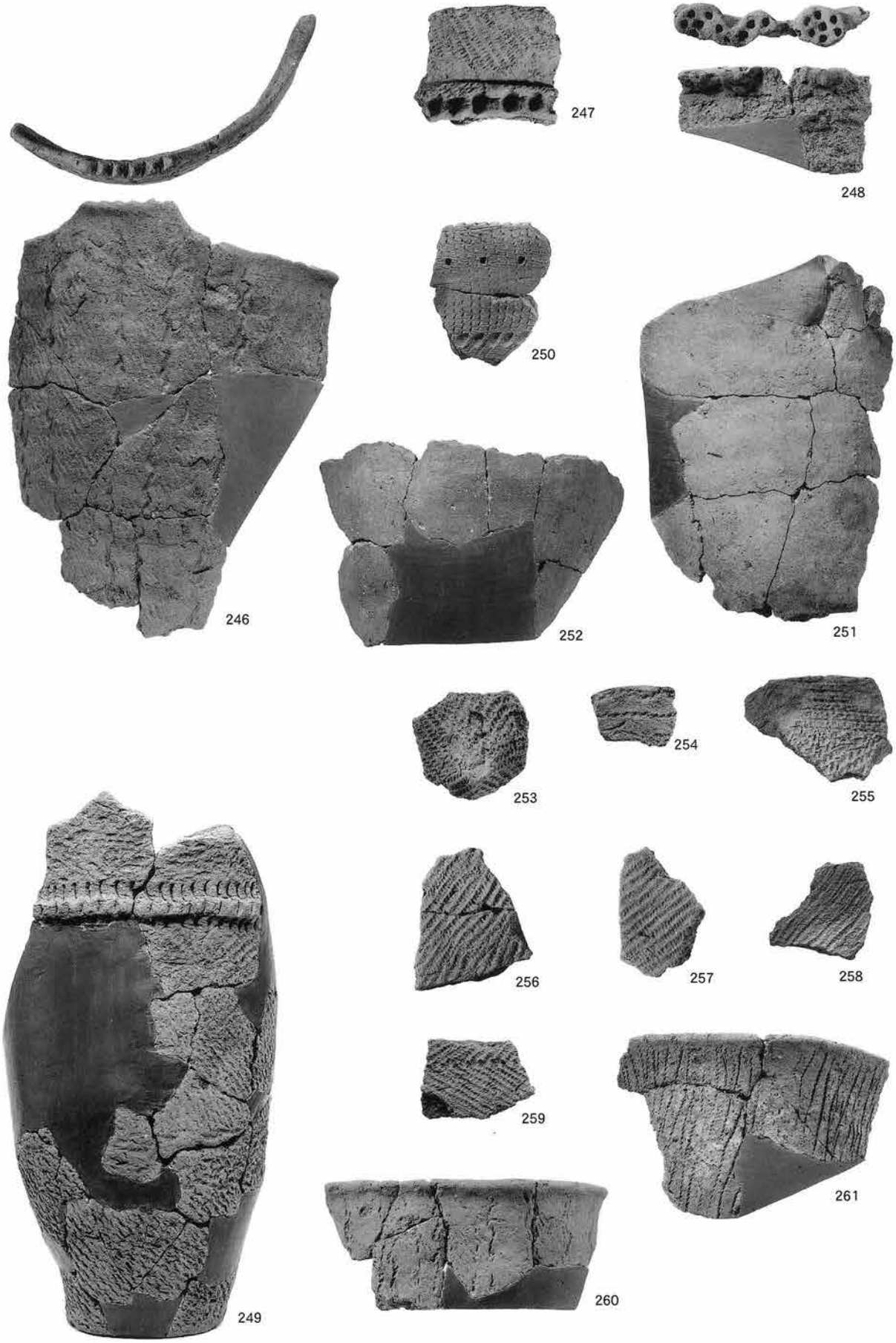
242

243

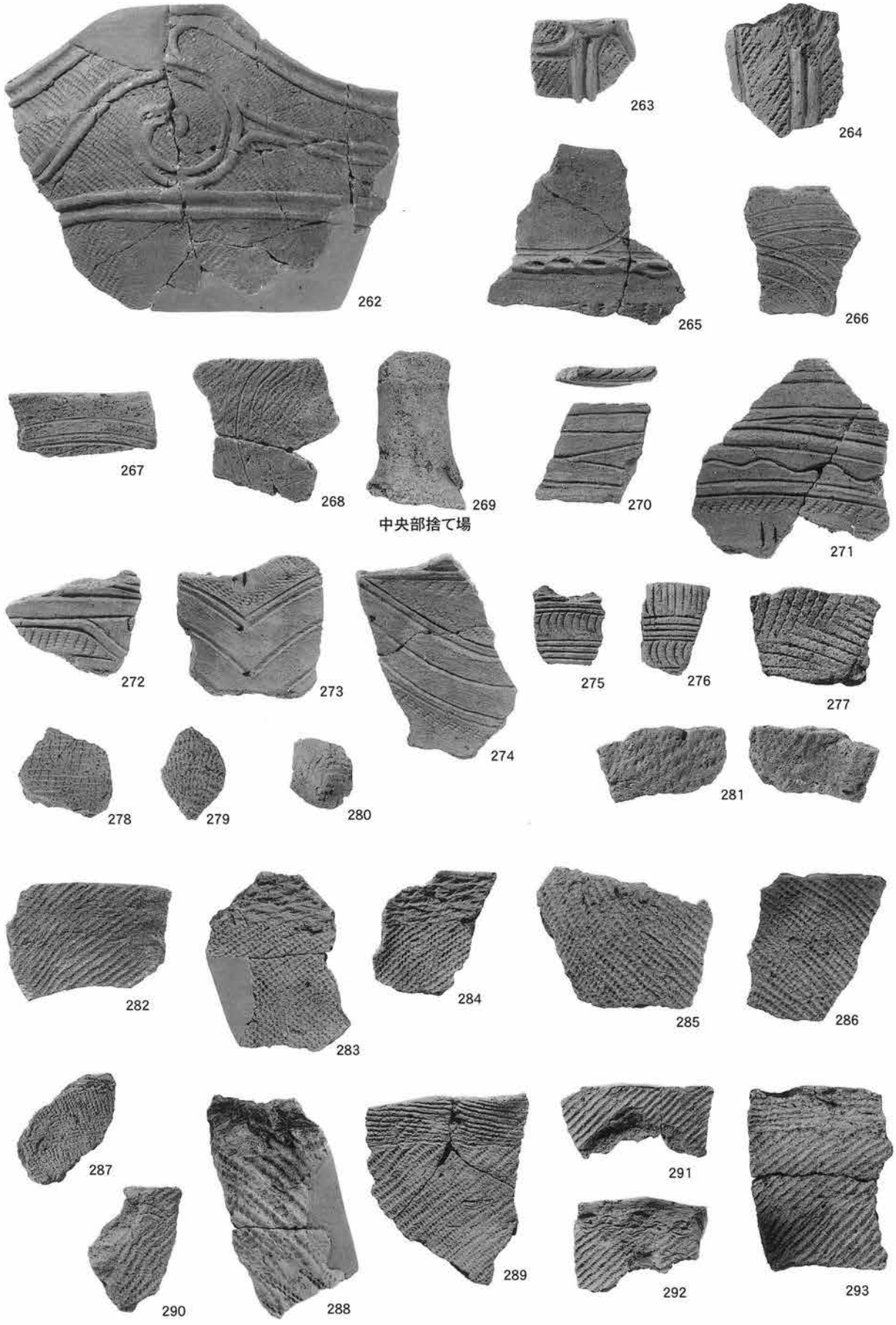
245


244

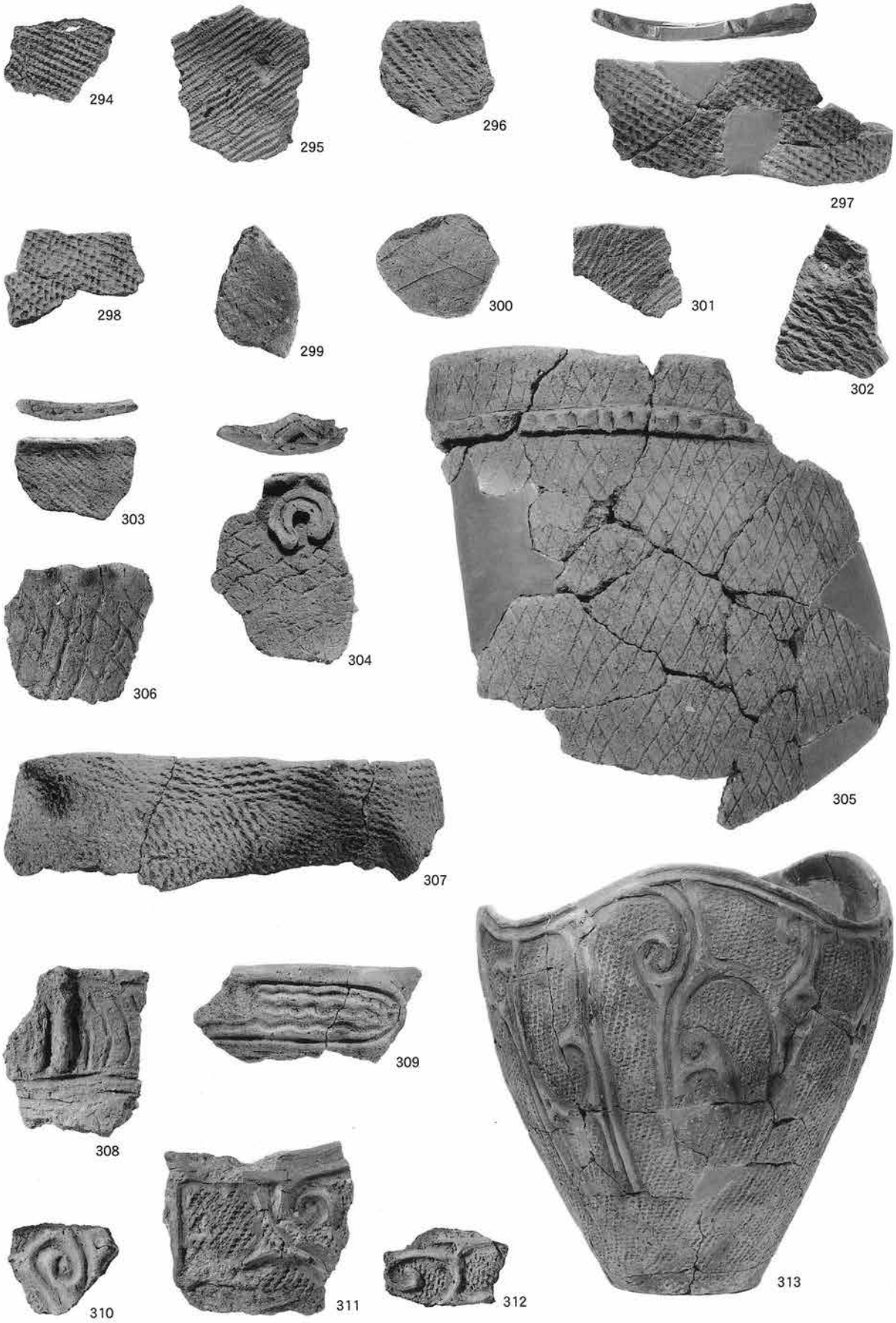
写真図版78　中央部捨て場出土土器（５）



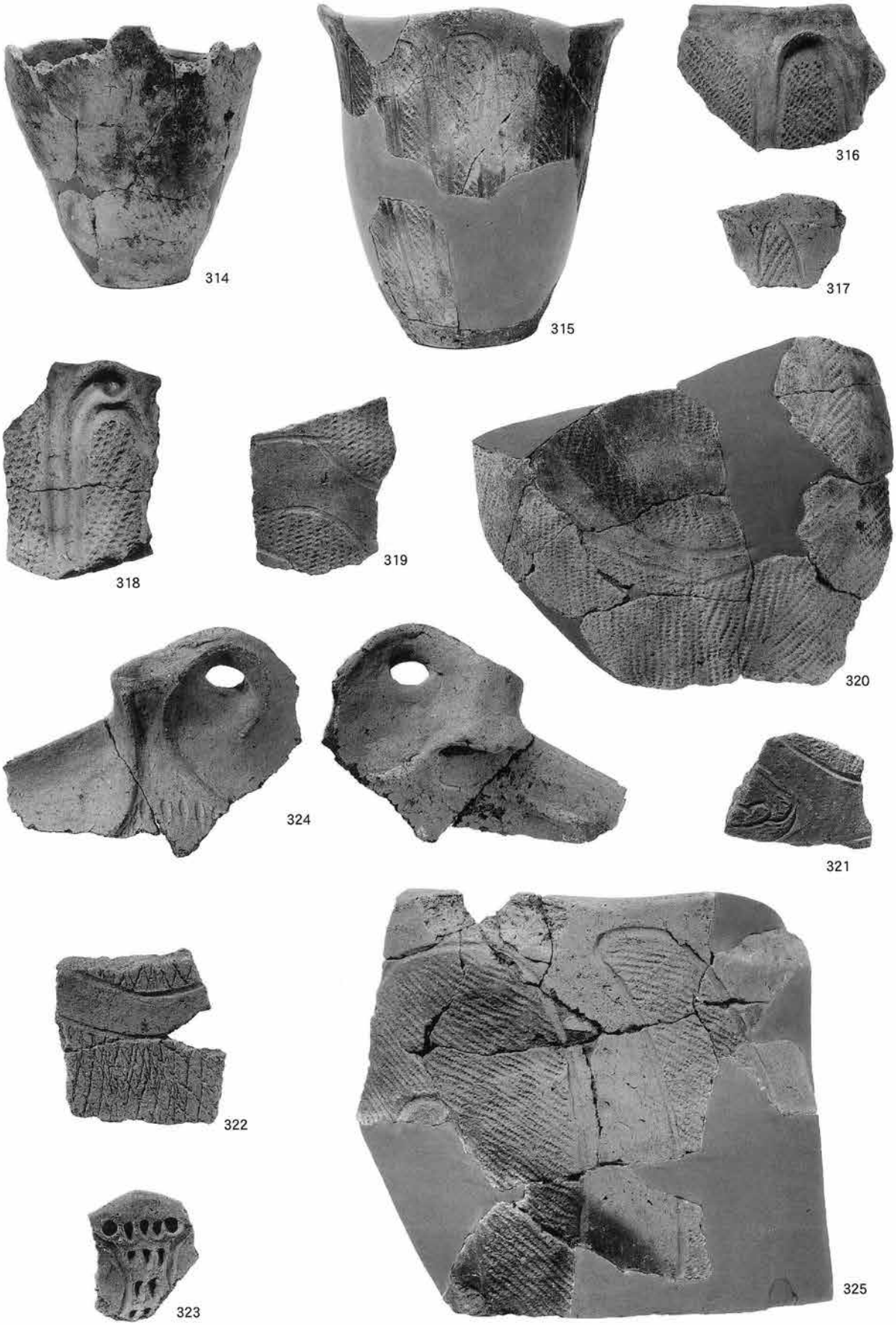
写真図版79　中央部捨て場出土土器（６）



写真図版80　中央部捨て場出土土器（７）・遺構外出土土器（１）



写真図版81　遺構外出土土器（2）



写真図版82　遺構外出土土器（３）

326

327

328

329

330

331

332

333

334

335

336

337

338

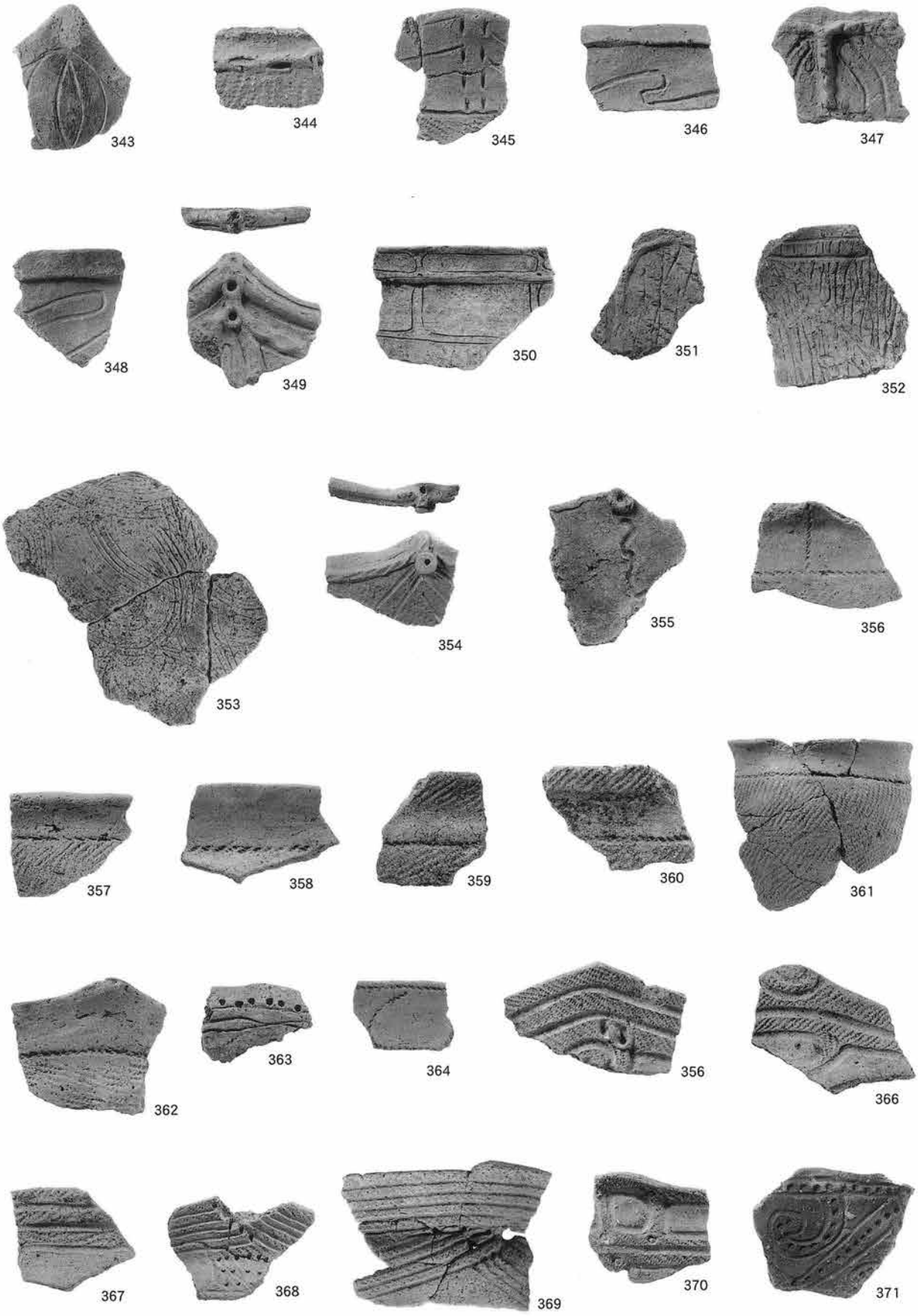
339

340

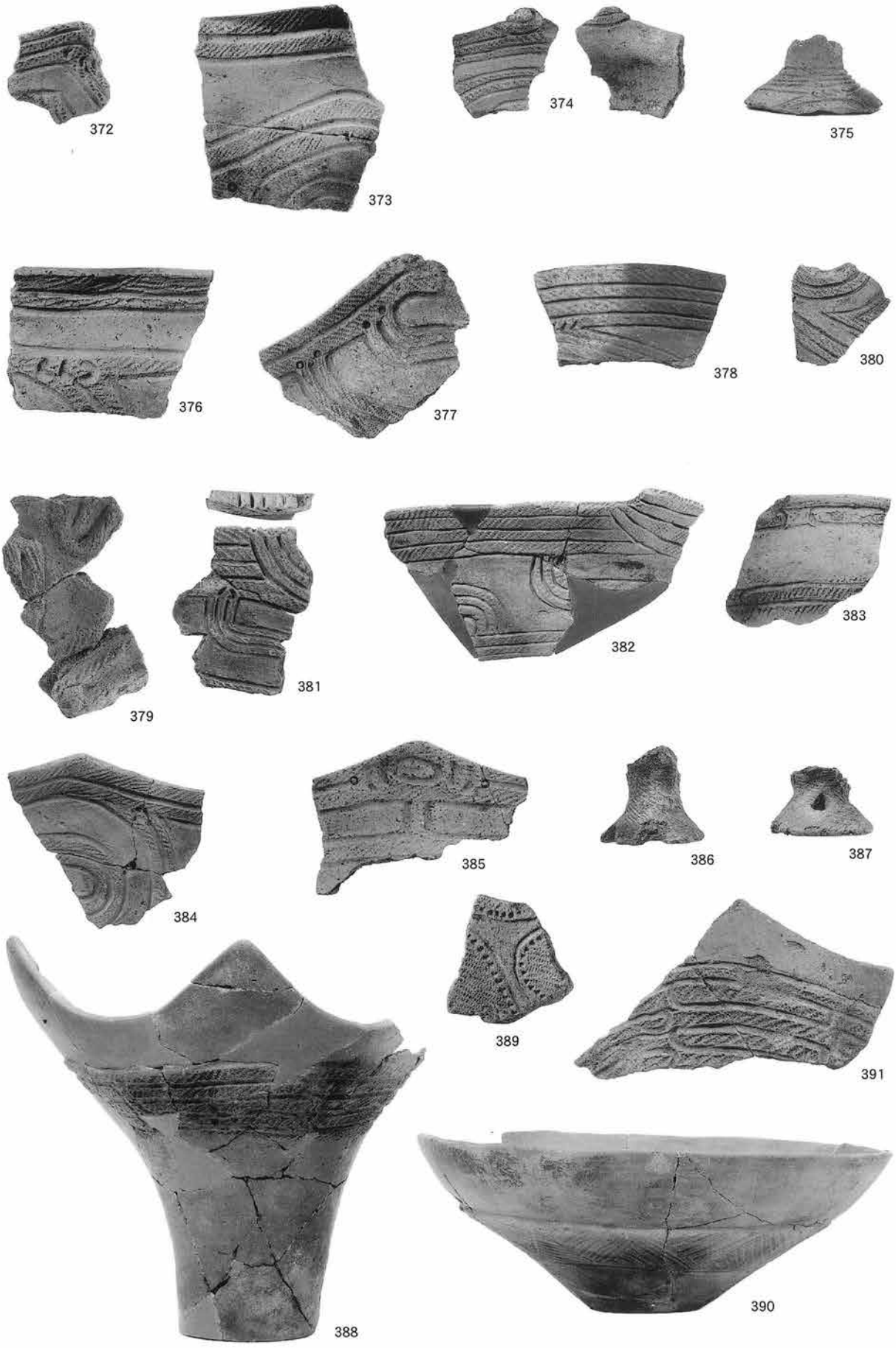
341

342

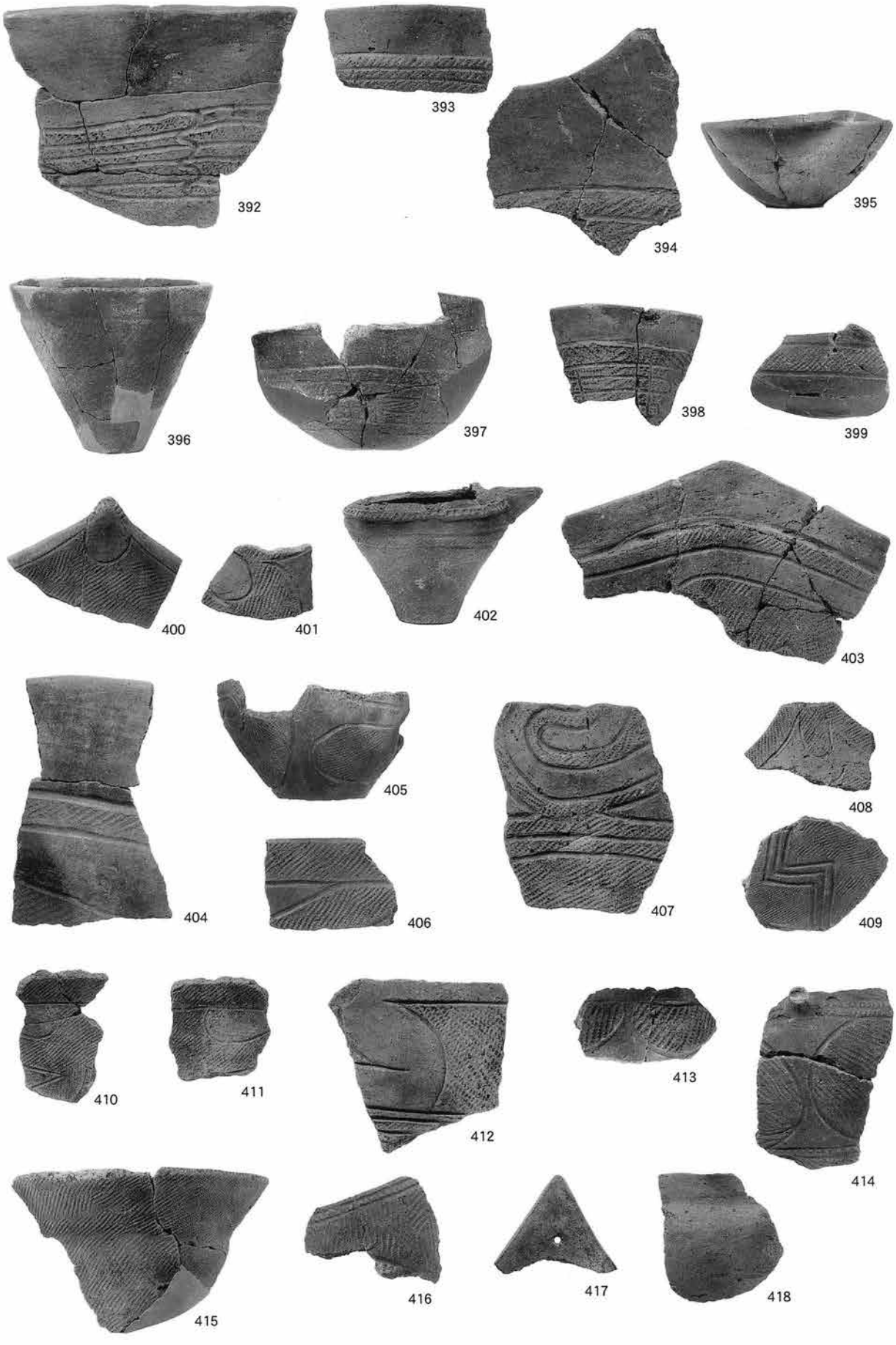
写真図版83　遺構外出土土器（４）



写真図版84　遺構外出土土器（5）



写真図版85　遺構外出土土器（6）



写真図版86　遺構外出土土器（7）

419

420

421

422

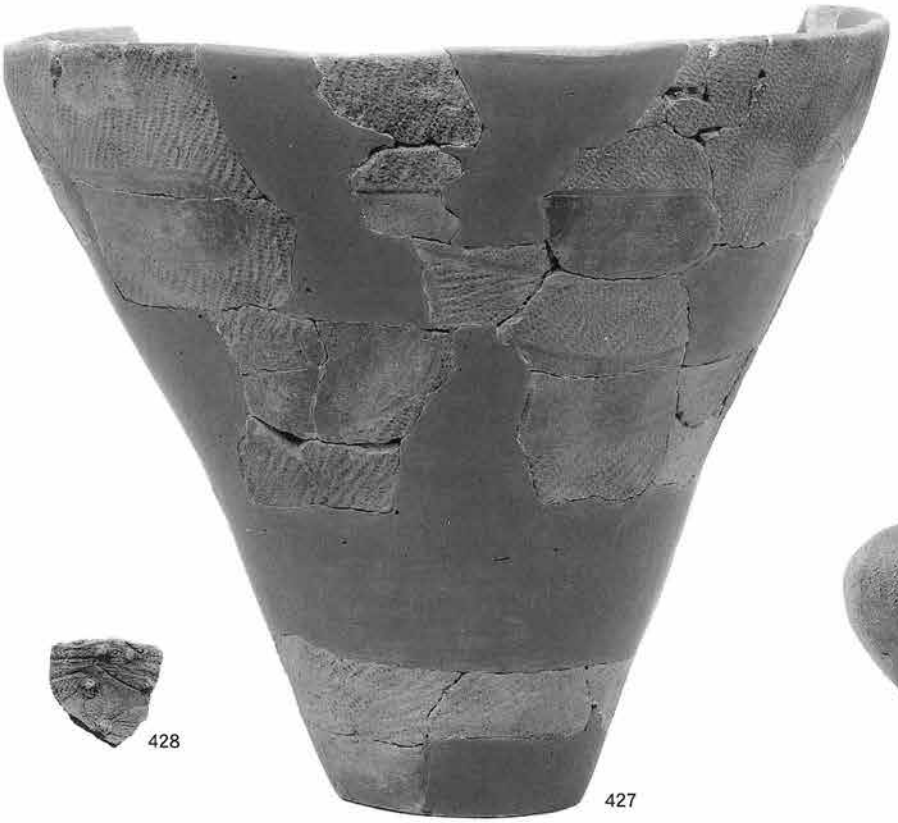
423

425

424

426

写真図版87　遺構外出土土器（８）


427

428

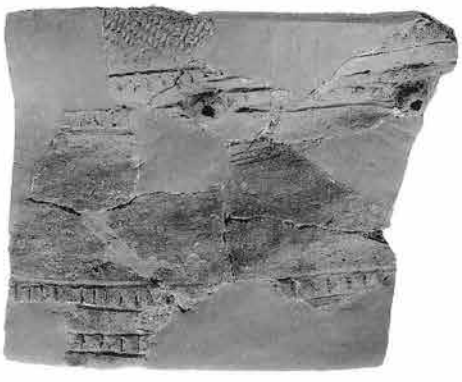
429

430

431

432

433


434

435

436

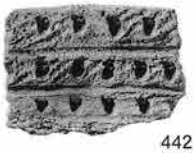
437

438

439

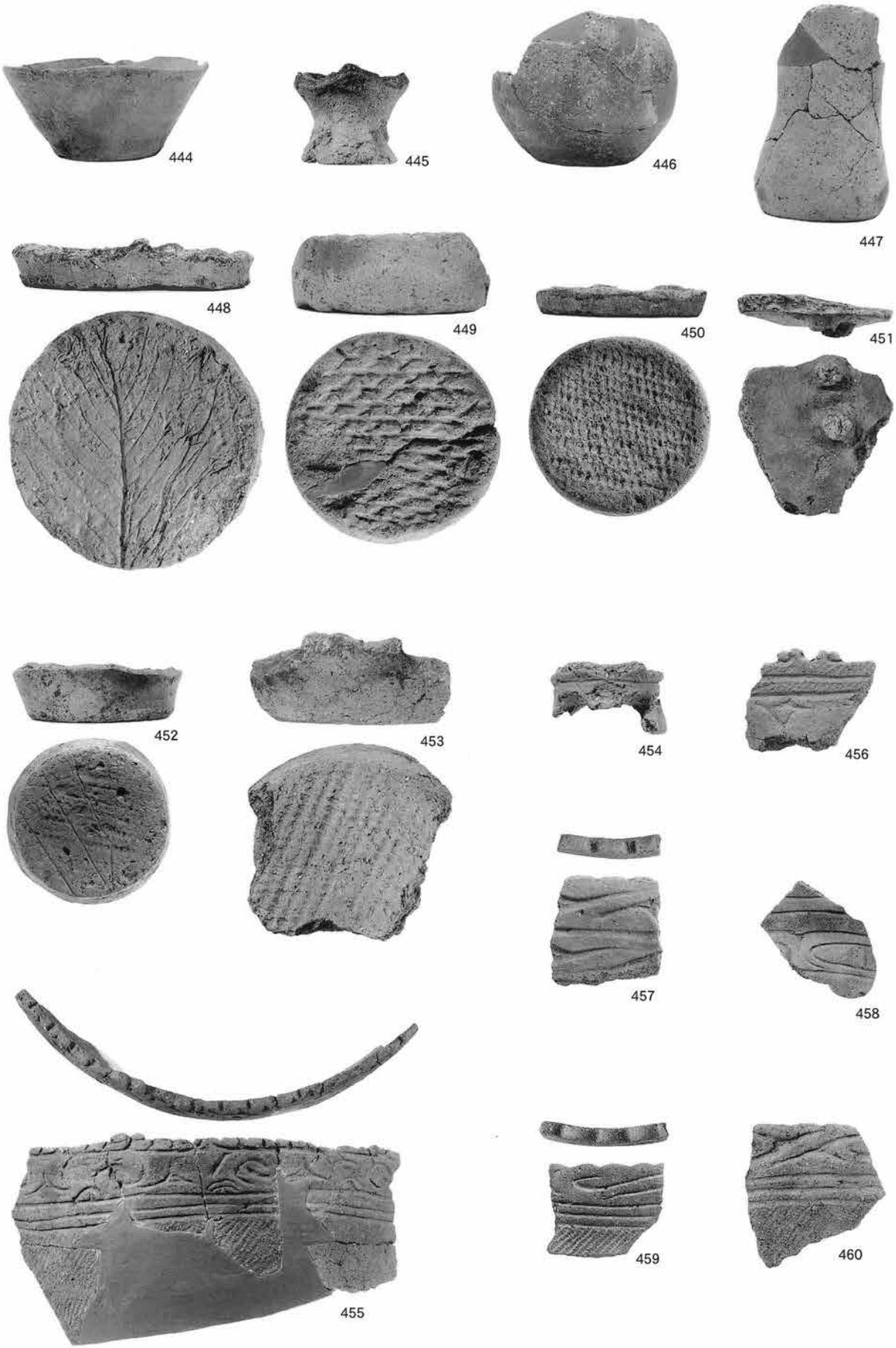
440

441


442

443

写真図版88　遺構外出土土器（９）



写真図版89　遺構外出土土器（10）

461

462

463

464

465

466

467

468

469

470

471

472

473

474

475

476

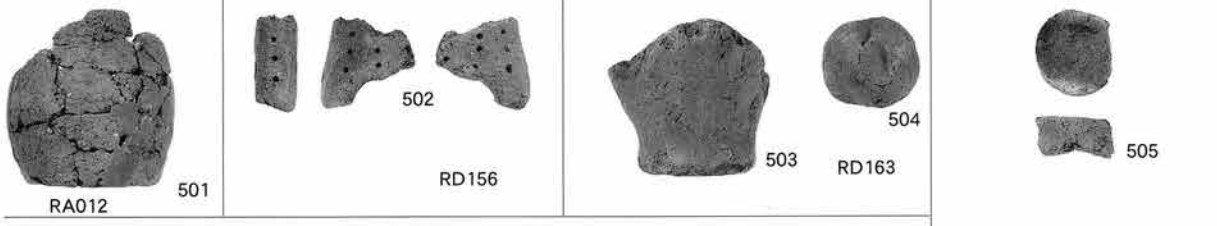
477

478

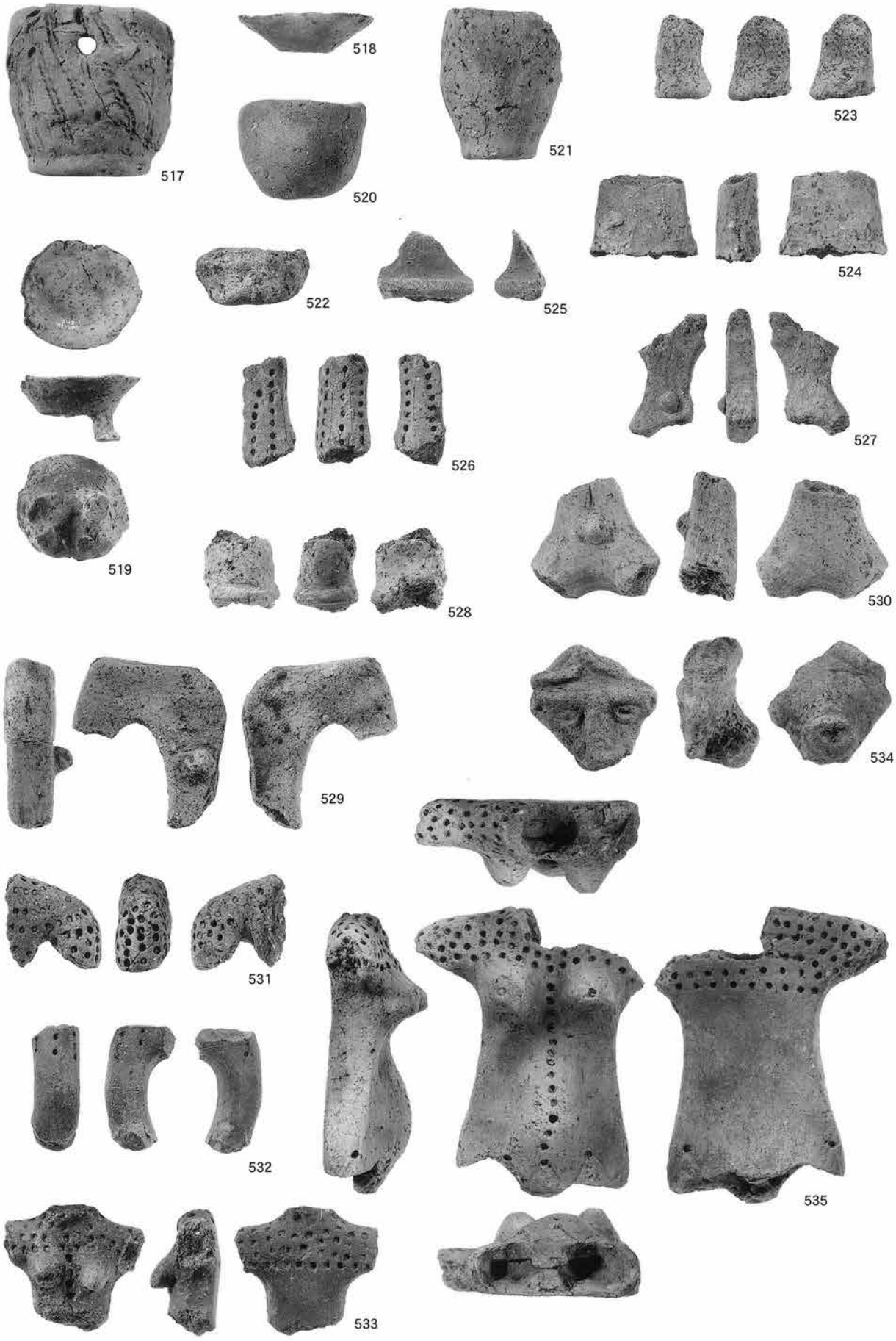
479

480

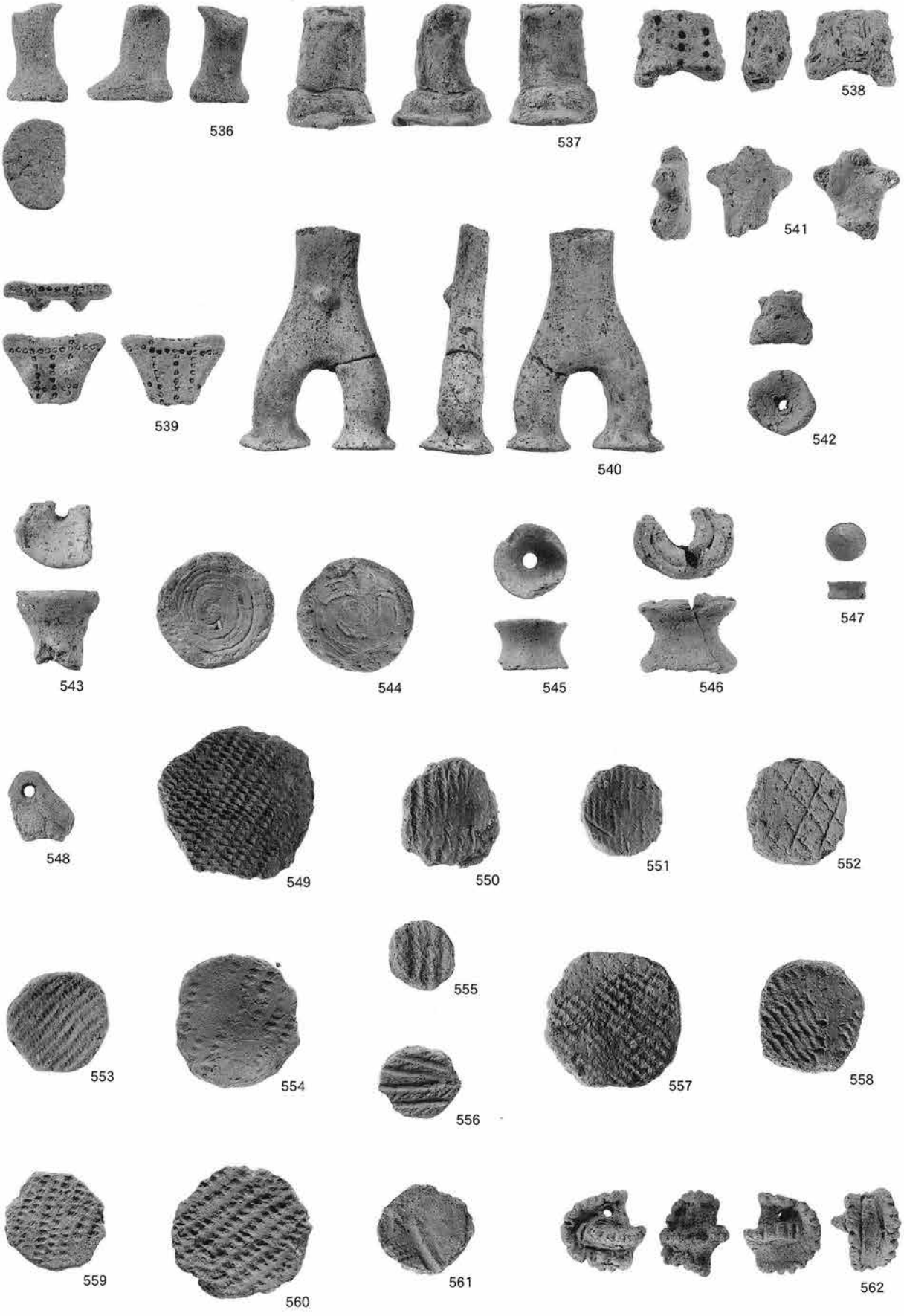
写真図版90　遺構外出土土器（11）



写真図版91　遺構外出土土器（12）・土製品（1）


517
518
520
521
523
524
522
525
527
526
519
528
530
529
534
531
532
535
533

写真図版92　土製品（2）

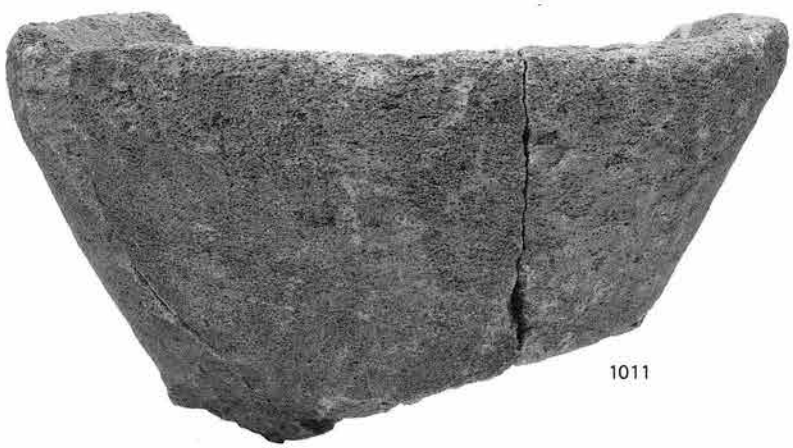

536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562

写真図版93　土製品（3）

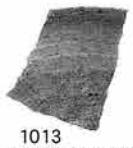
1001

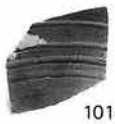
1002

1003


1011

1012
198号柱穴状土坑


1013
281号柱穴状土坑


1014

1015

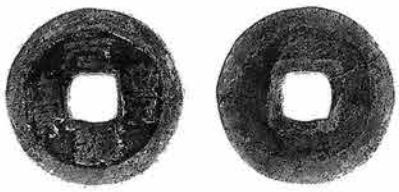
1016

1017

1018

1019

1020


1021

1022

1023

1024

1025

1026

写真図版94　土師器・須恵器・陶磁器・金属製品（1）

1027

1028

1029

1030

1031

1032

1033

1034

1035

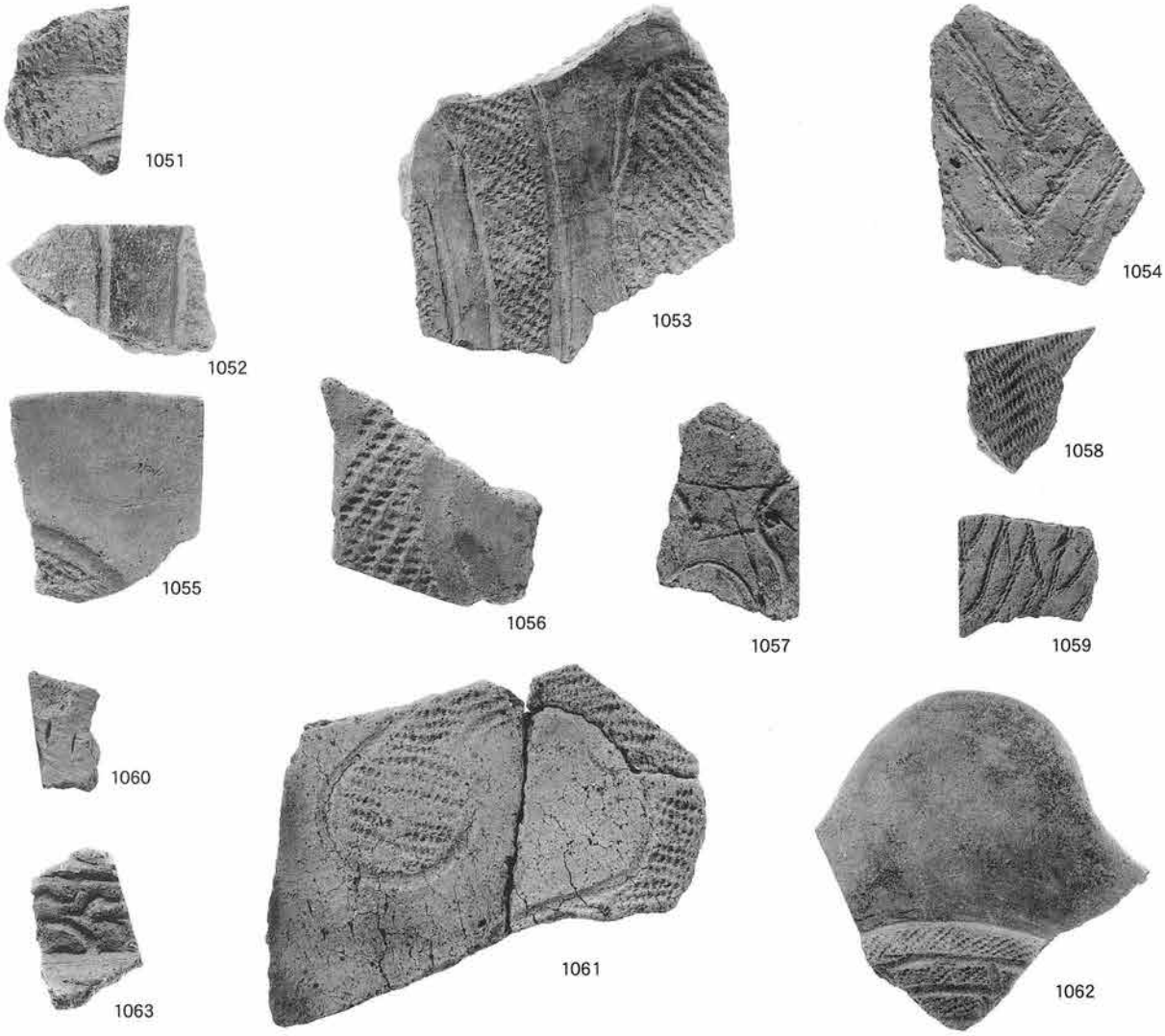
1036

1037

1038

1039

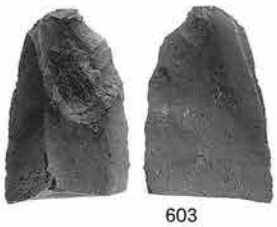
写真図版95　金属製品（２）



写真図版96　胎土分析土器

601

602



603

RA005

604

605

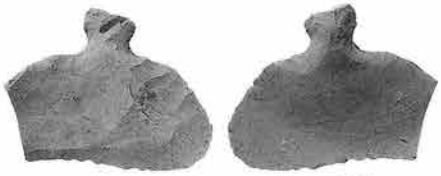
RA007

606

607

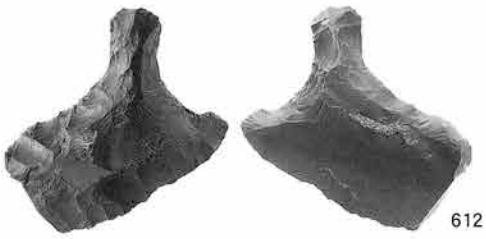
608

609



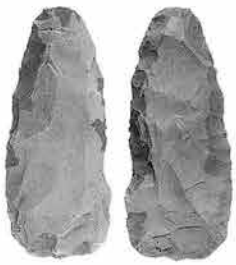
610

611



612

613



614

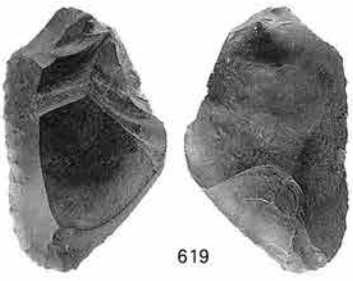
615

RA010

616

617

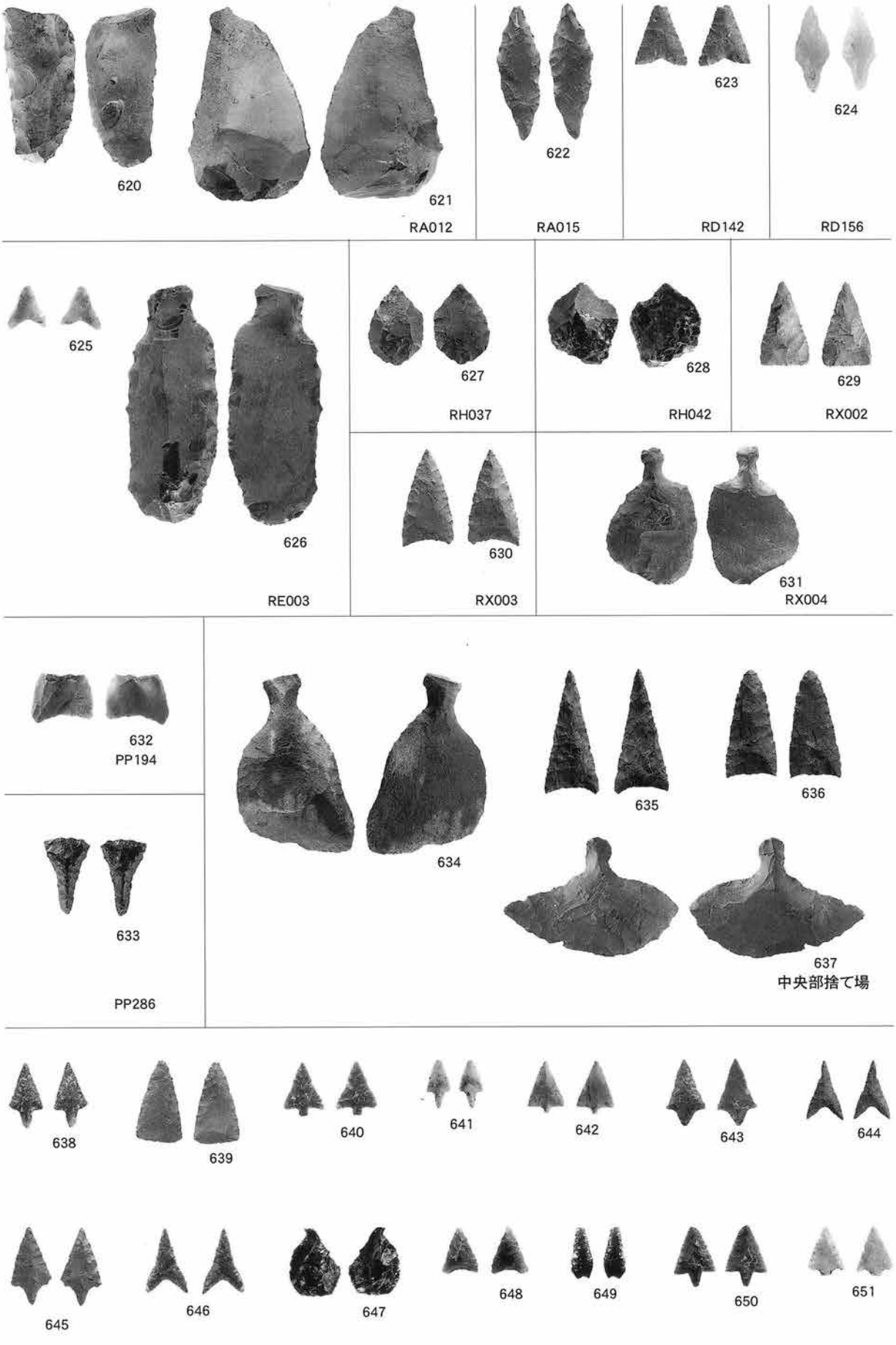
618



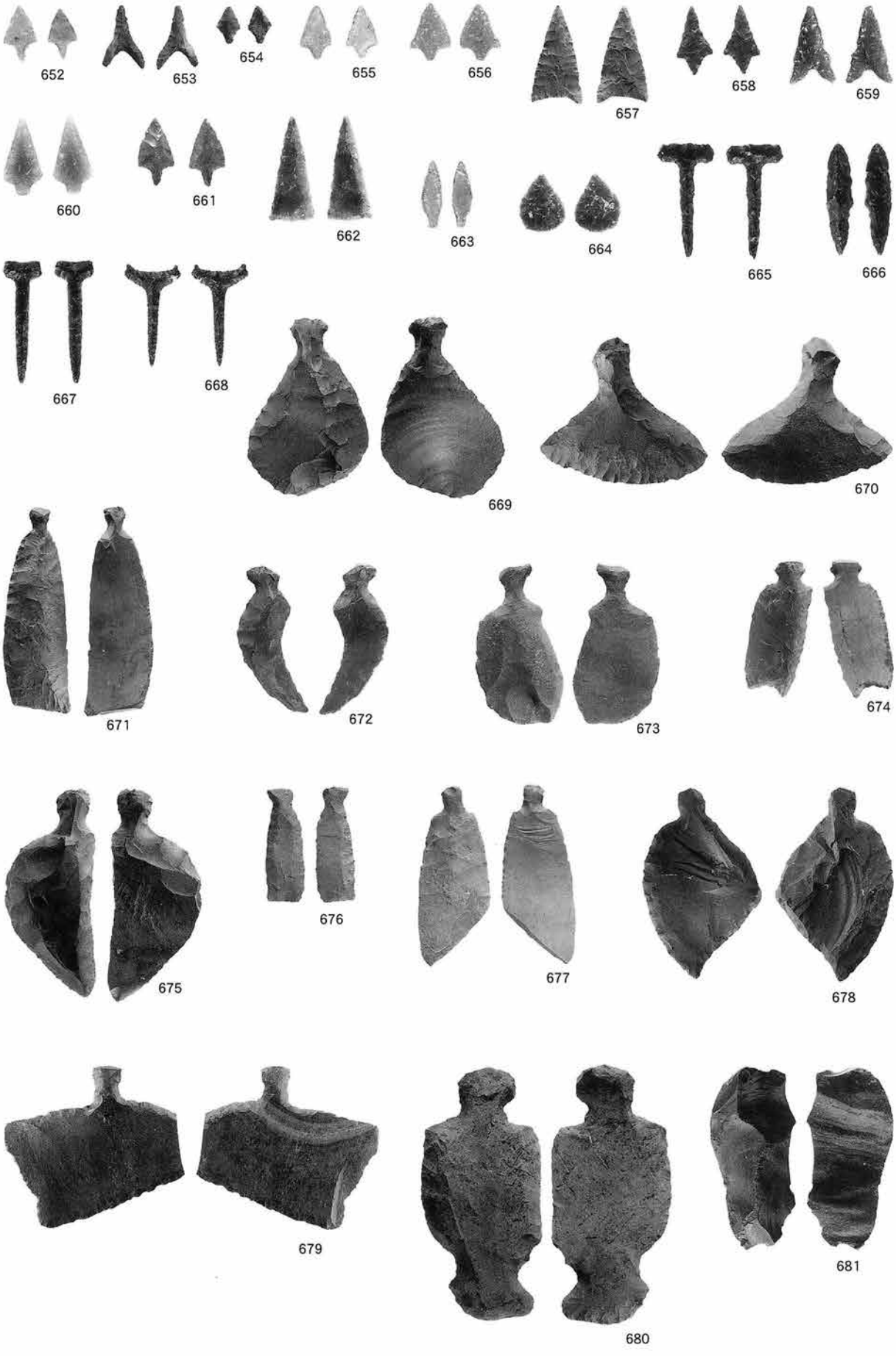
619

RA011

写真図版97　遺構内出土剥片石器（１）

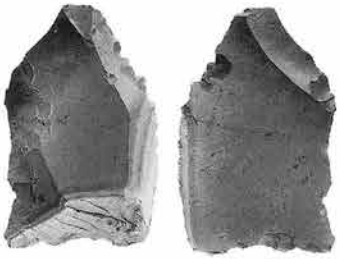


写真図版98　遺構内出土剥片石器（２）・遺構外出土剥片石器（１）

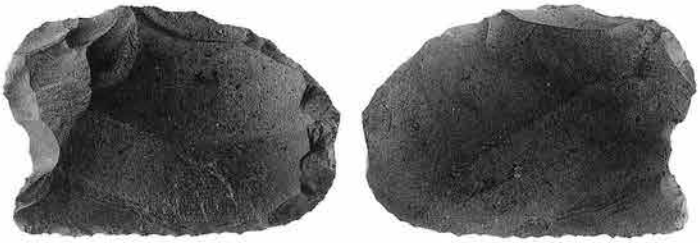


写真図版99　遺構外出土剥片石器（2）

682



683



684

685

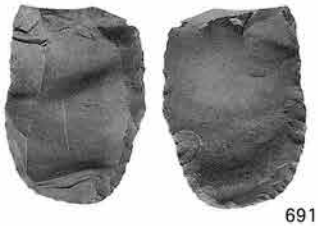
686

687

688

689

690



691

692

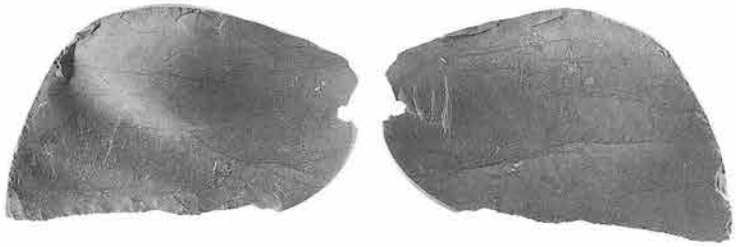
693

694

695

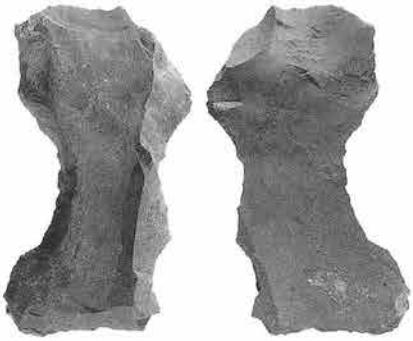
写真図版100　遺構外出土剥片石器（３）

696



697

698



699

700

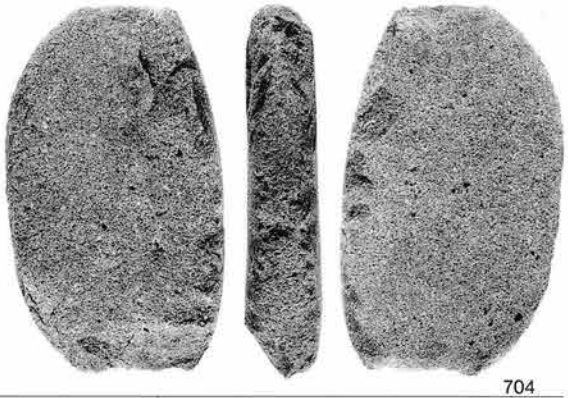
701

702

写真図版101　遺構外出土剥片石器（４）

703

RA005



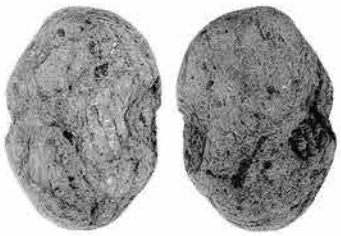
704

705

RA006

706

RA008



707

RA009

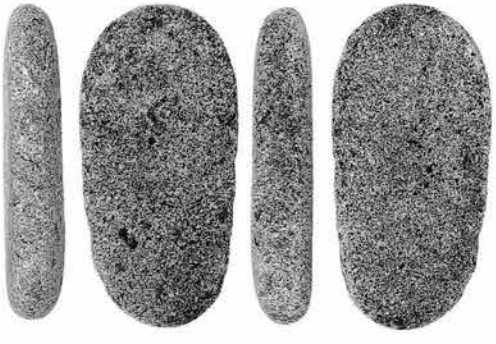
708

709

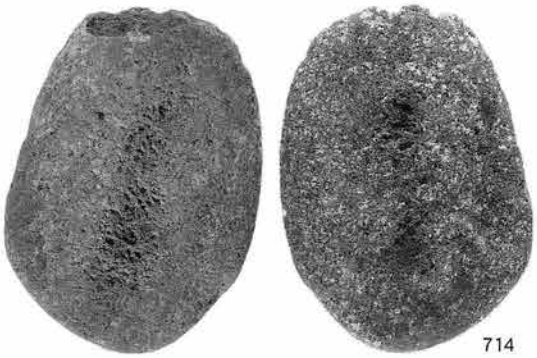
710

711

713

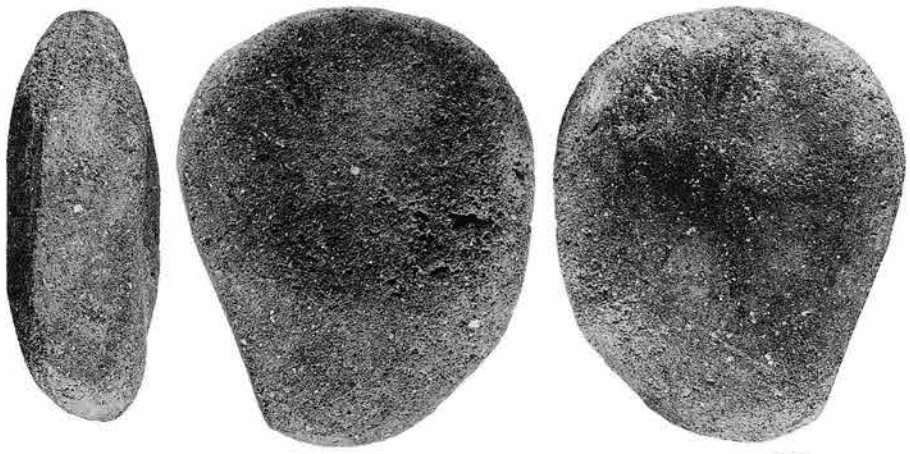


712



714

写真図版102　遺構内出土礫石器（１）



715

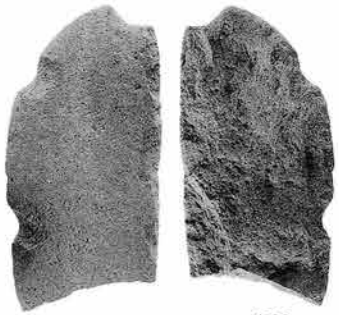
716

RA010

717

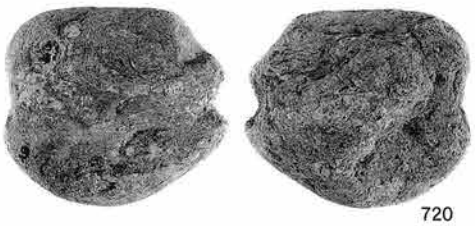
718

RA012



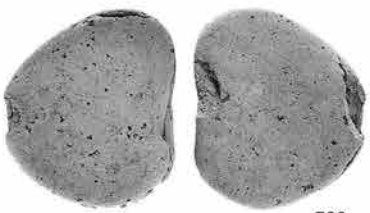
719

RA014

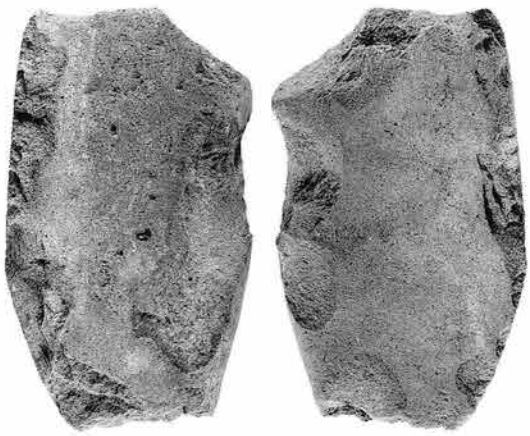


720

RA015



722



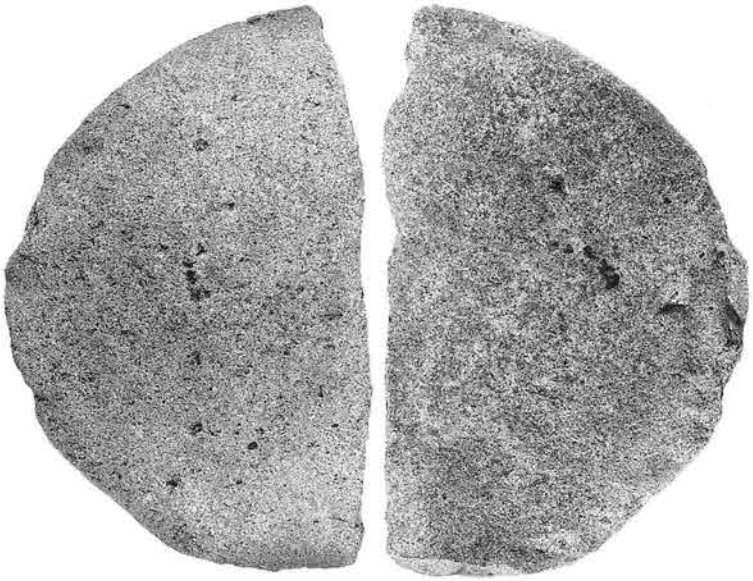
721

RA016

723

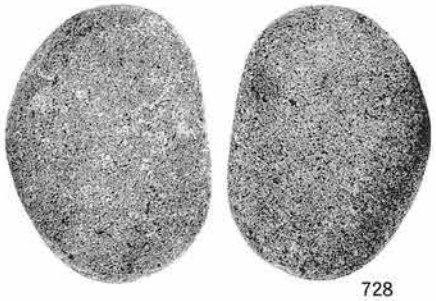
RA017

写真図版103　遺構内出土礫石器（２）



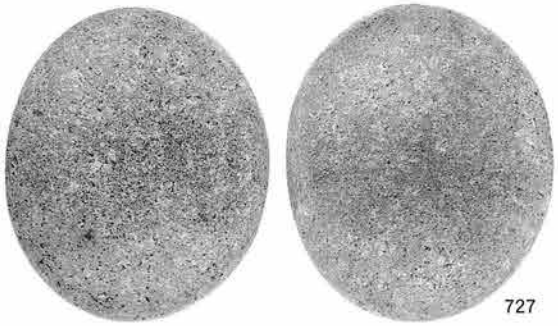
724 RA017

725 RD116



728 RD137

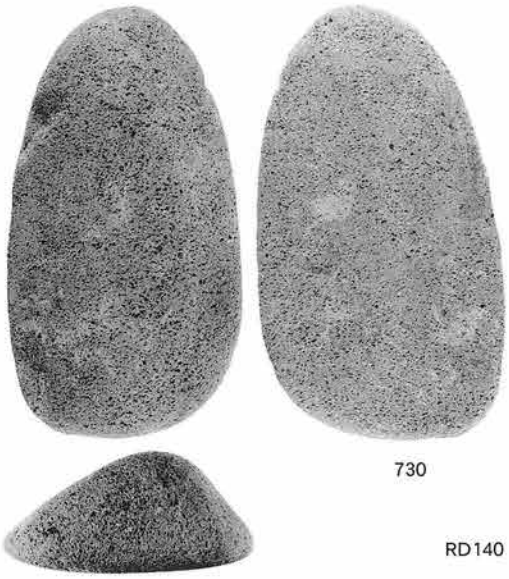
726

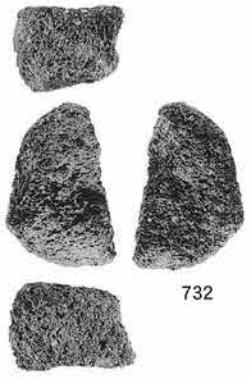


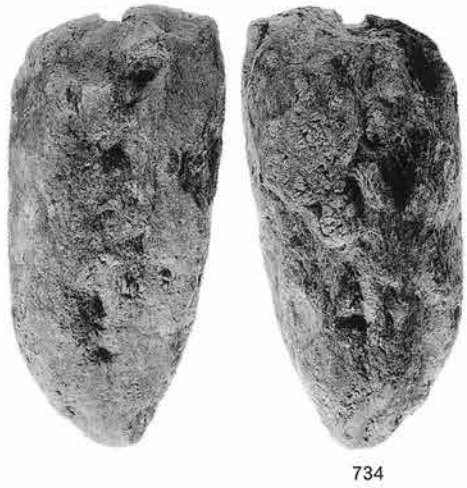
727 RD123

729 RD138

写真図版104　遺構内出土礫石器（3）

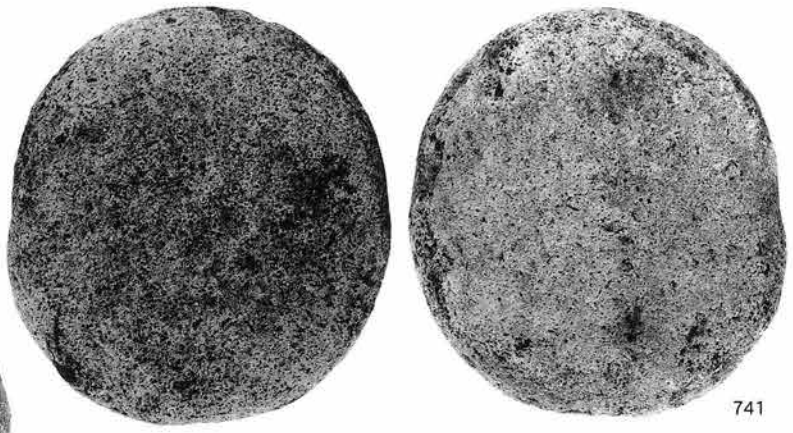






写真図版105　遺構内出土礫石器（４）

739



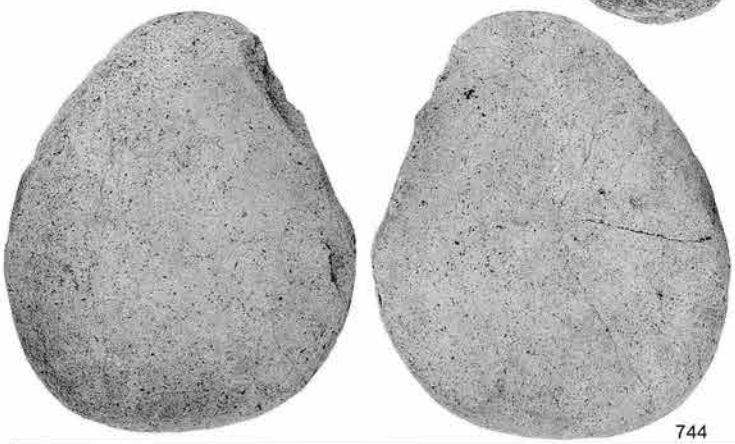
741

740

742

RE003

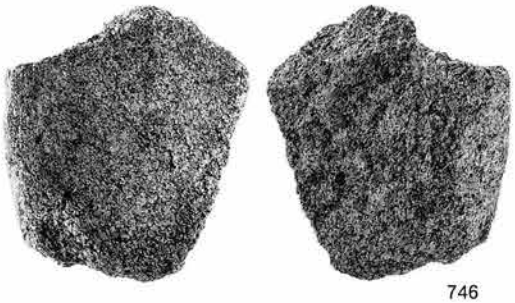
743



744

RH034

745



746

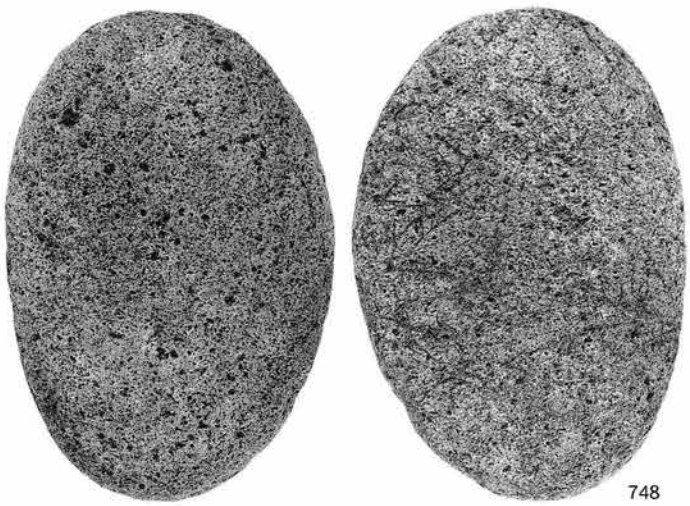
RH035

744≒1/5

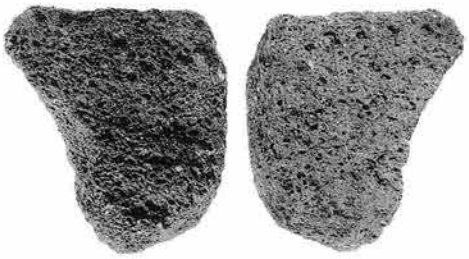
写真図版106　遺構内出土礫石器（５）

747

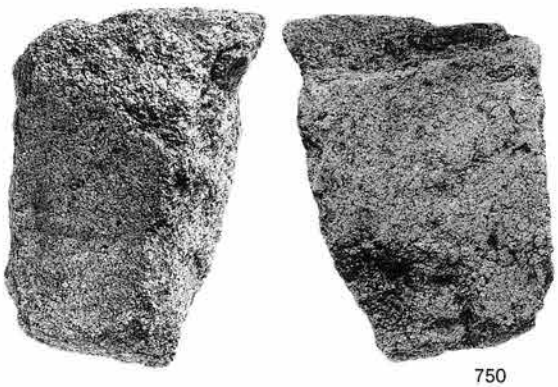
RH036



748



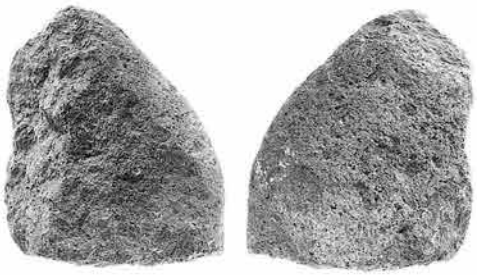
749



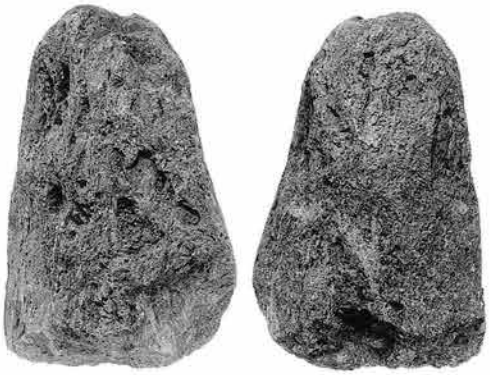
750

RH037

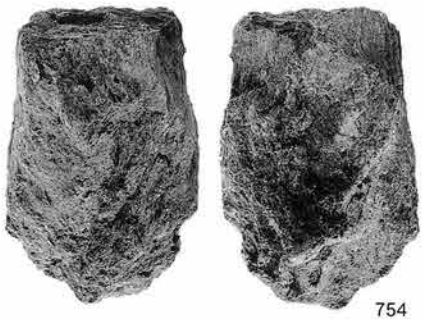
751



752



753



754

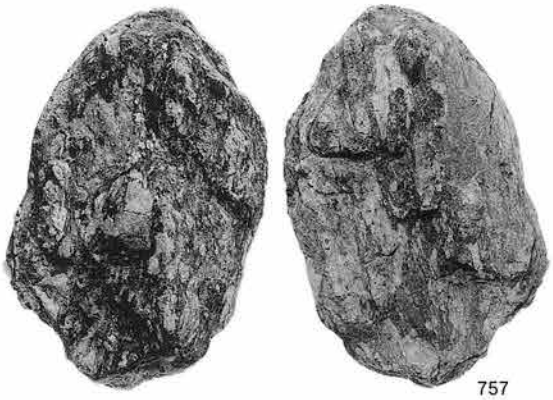
RH039

写真図版107　遺構内出土礫石器（６）

755

756

RH042



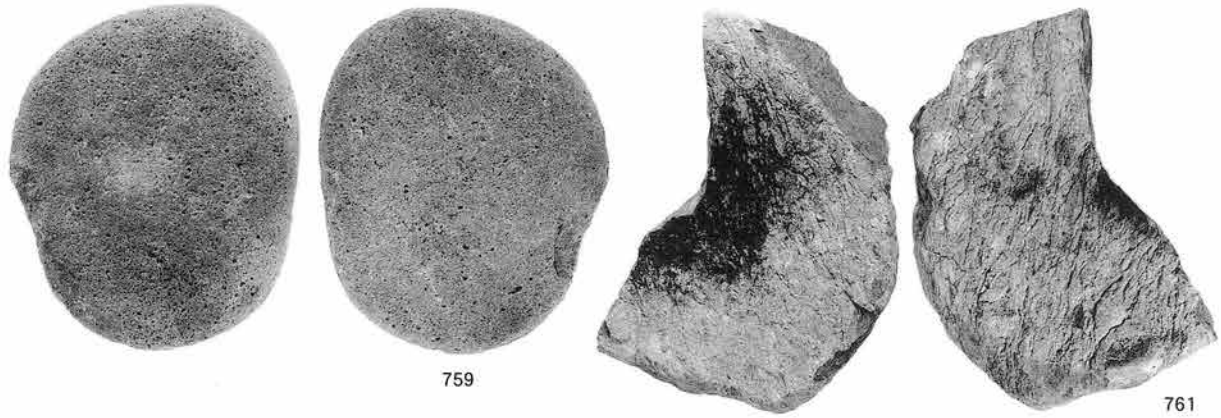
757

RH045

758

RH046

写真図版108　遺構内出土礫石器（７）


759

761

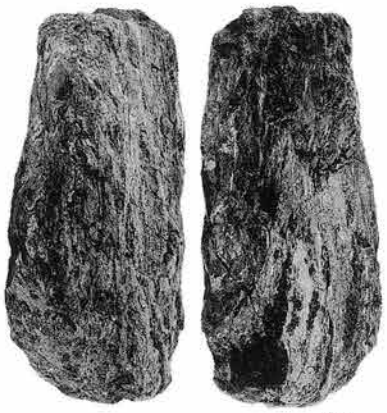
760

762

763

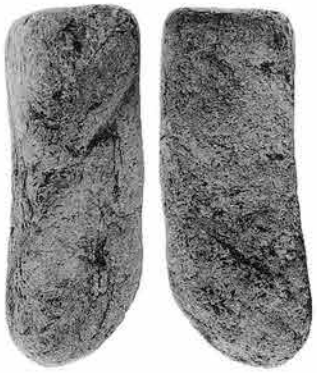
760,761,763≒1/2

写真図版109　遺構内出土礫石器（８）



764

765



767

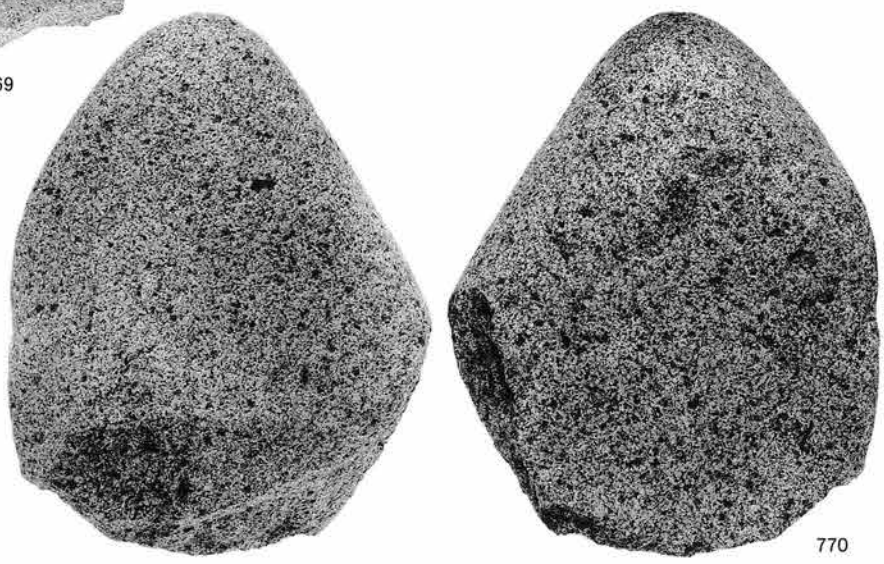
RH047

766

768

RH048

769



770

RH049

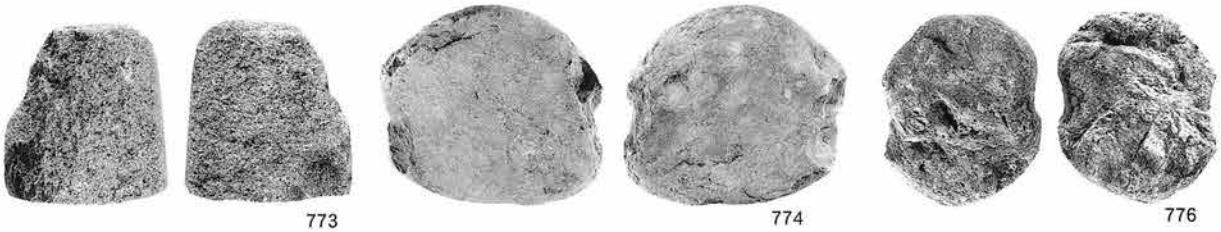
写真図版110　遺構内出土礫石器（9）

771

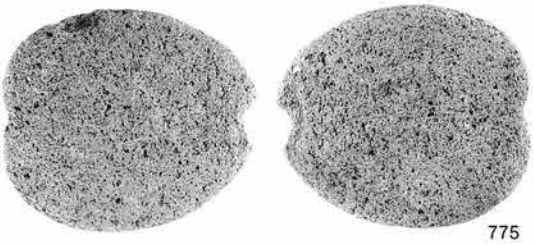
RH050

772

RH051



773 774 776



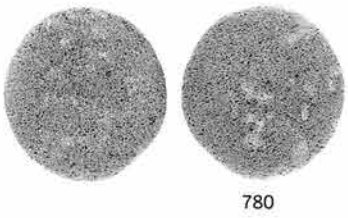
775

777 778 779

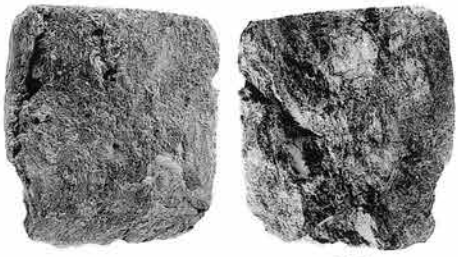
RX001

771≒1/5

写真図版111　遺構内出土礫石器（10）



780

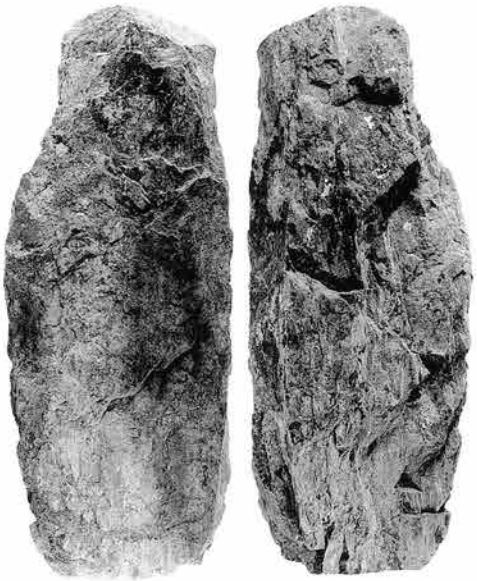


781

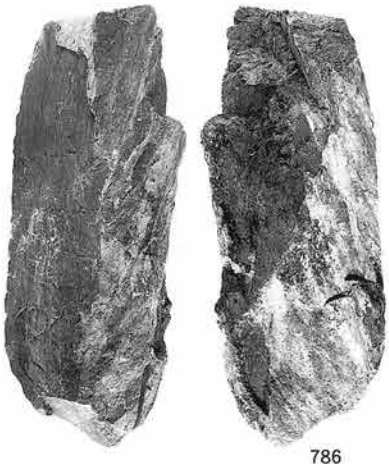
RX002

782

783



785



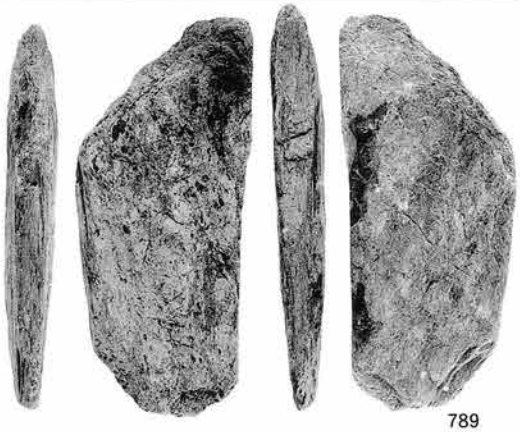
786

784

RX003

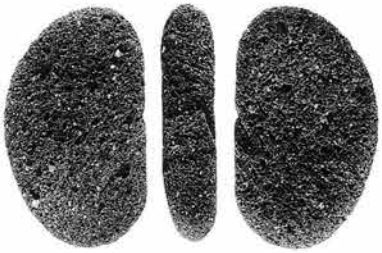
787

788



789

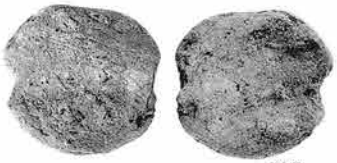
RX004



790

791

RX005



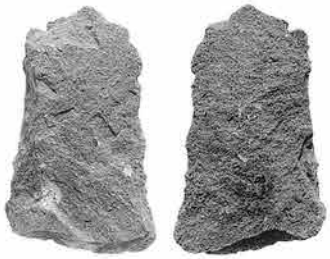
792

RX006

写真図版112　遺構内出土礫石器（11）

793

PP083

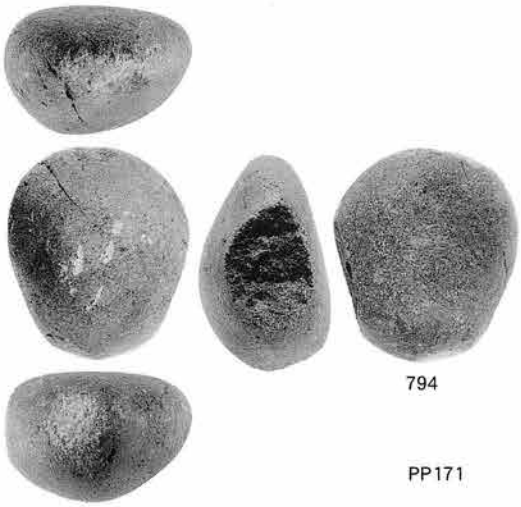


795

PP268

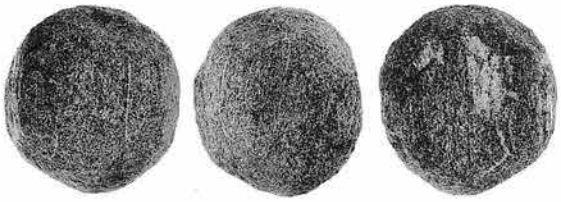
796

PP415



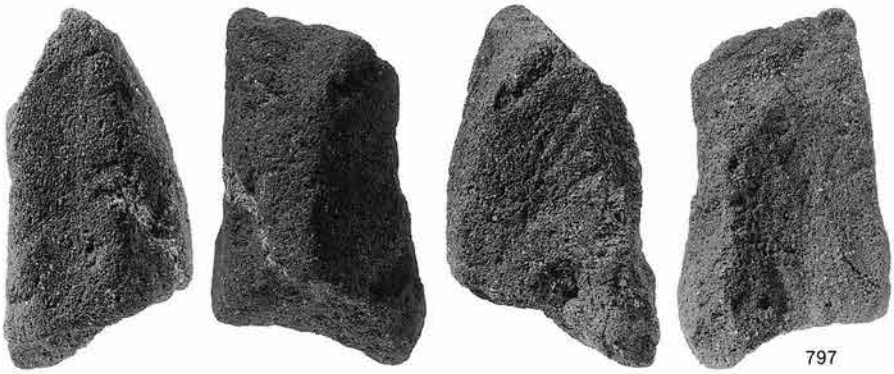
794

PP171



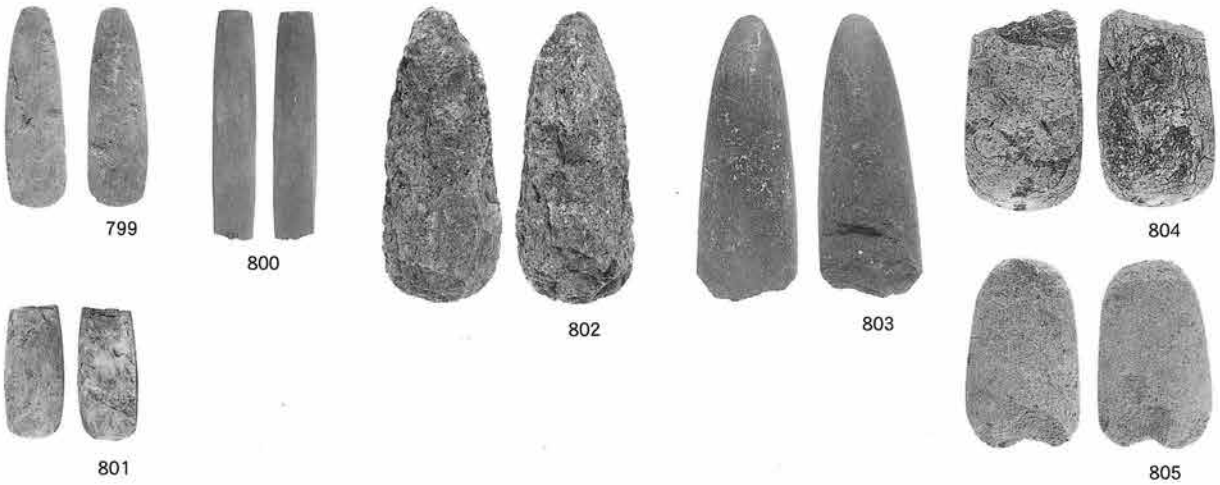
798

中央部捨て場



797

PP418



799

800

802

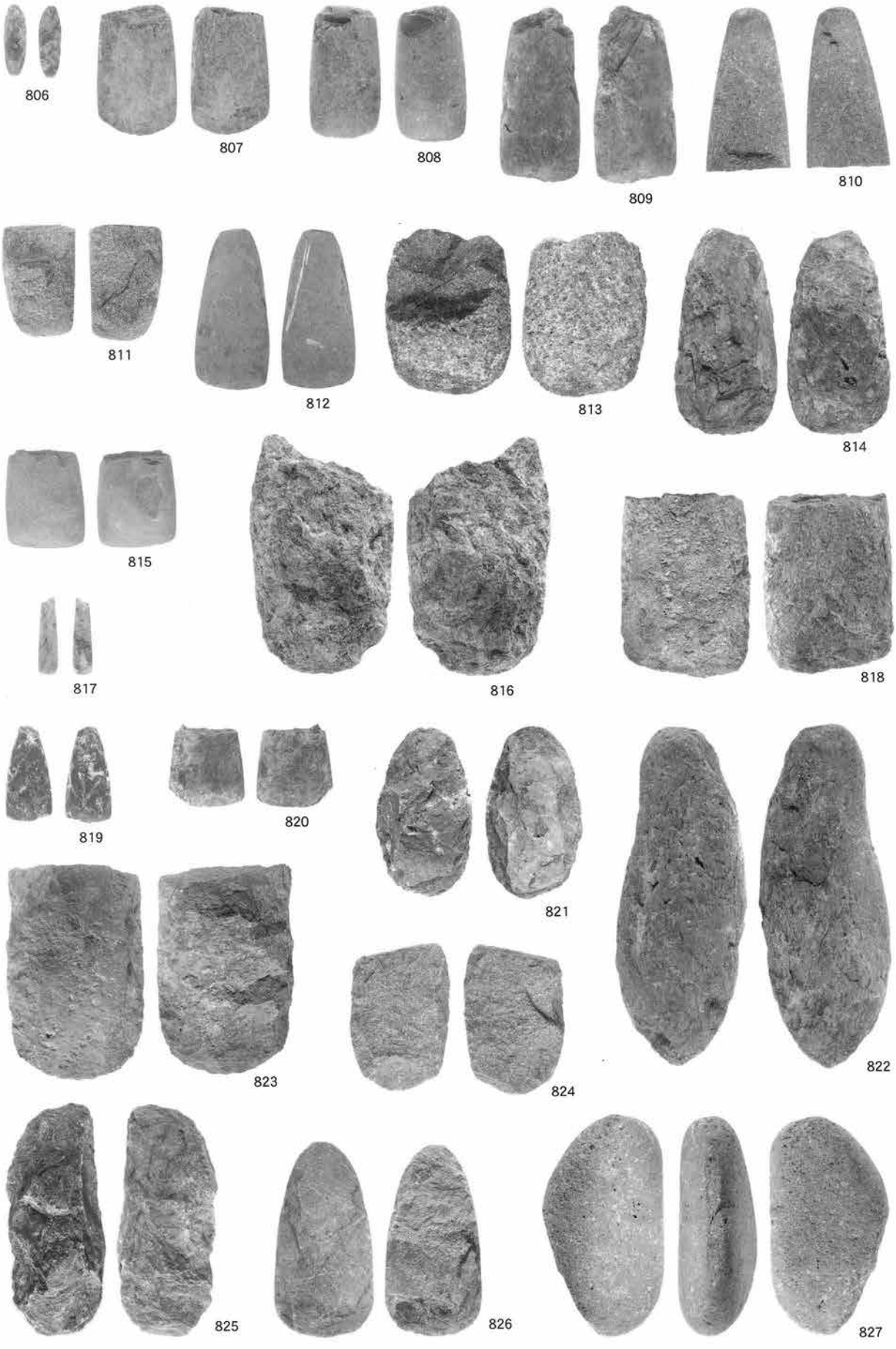
803

804

801

805

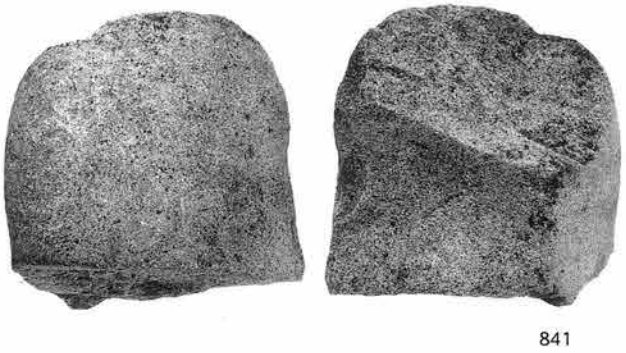
写真図版113　遺構内出土礫石器（12）・中央部捨て場出土礫石器・遺構外出土礫石器（１）



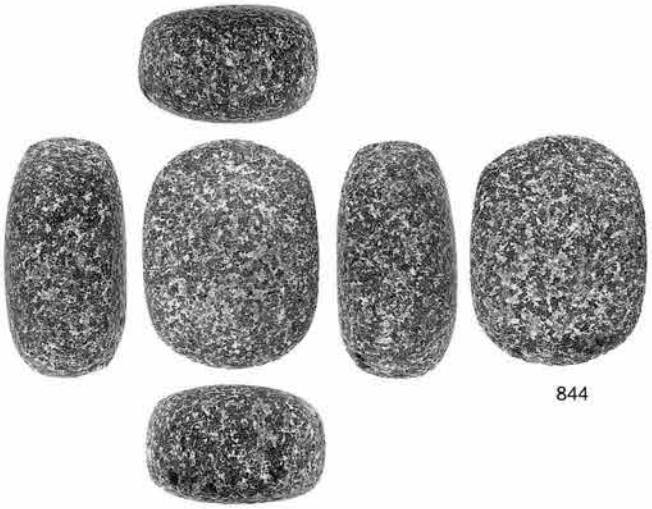
写真図版114　遺構外出土礫石器（２）

写真図版115　遺構外出土礫石器（３）

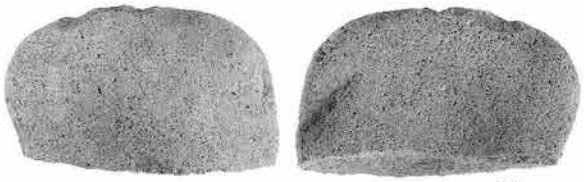
840


841

842


844

843

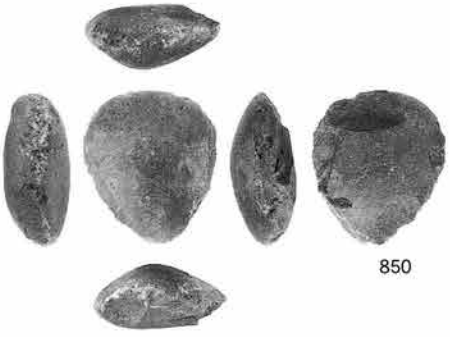

845

846

847

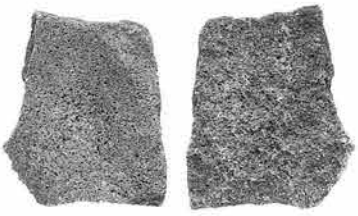
848

849

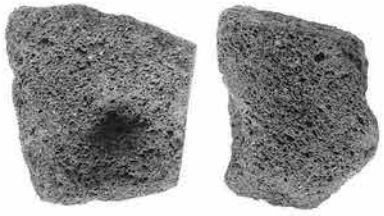

850

写真図版116　遺構外出土礫石器（４）

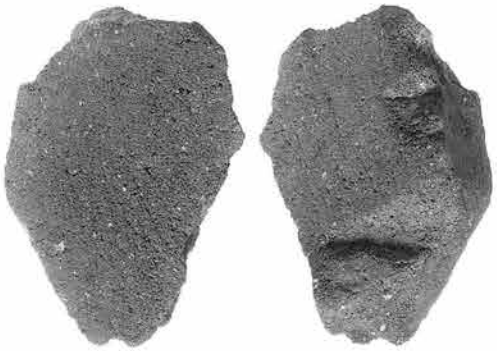
写真図版117　遺構外出土礫石器（５）



862

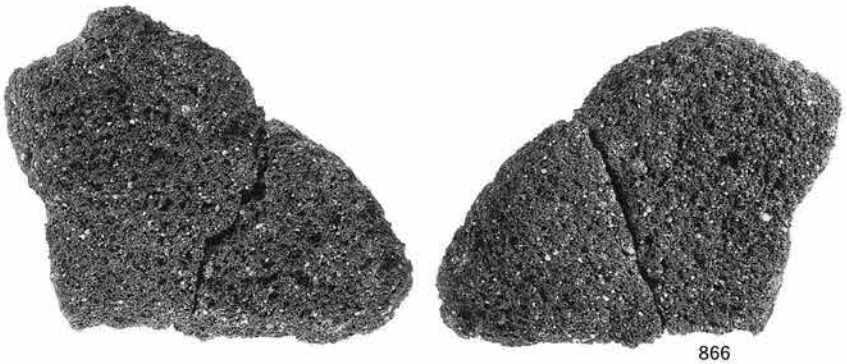


863

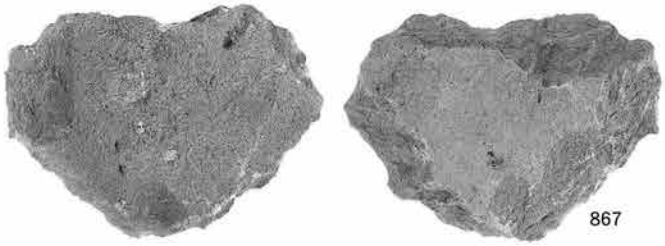


864

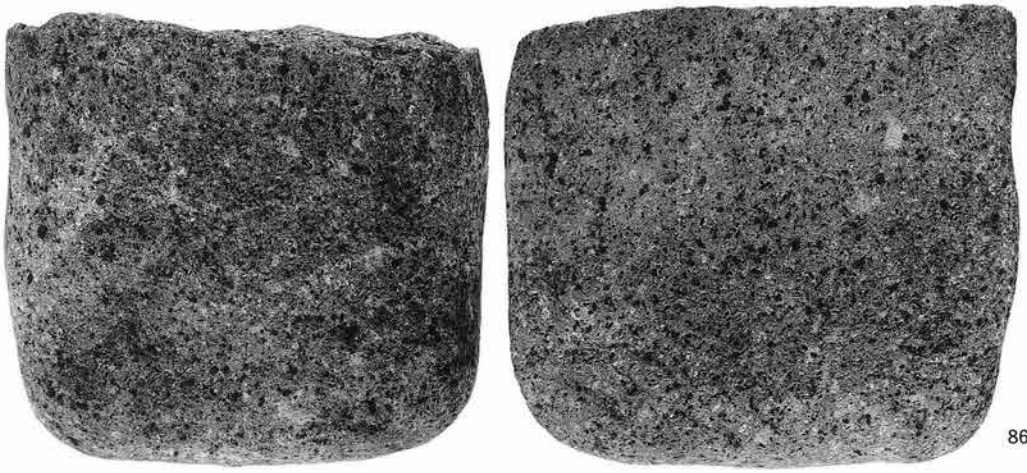
865



866



867

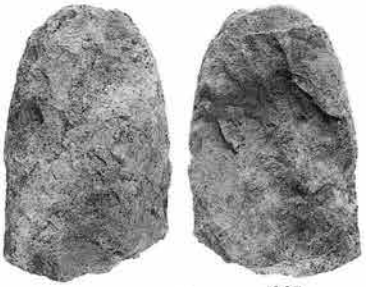


868

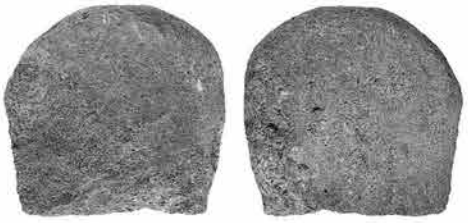
写真図版118　遺構外出土礫石器（６）

写真図版119　遺構外出土礫石器（７）

886

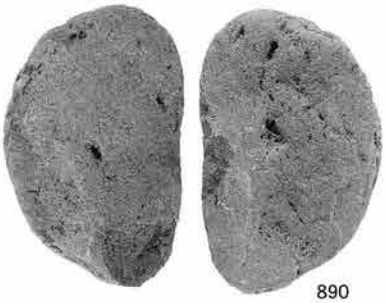


887

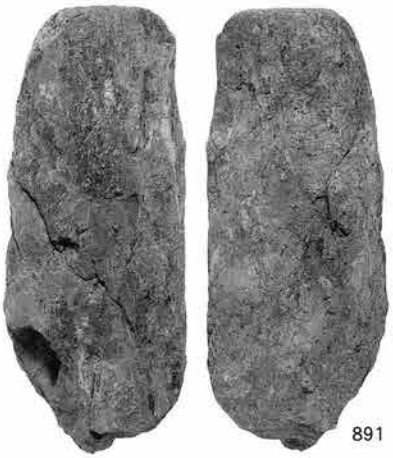


888

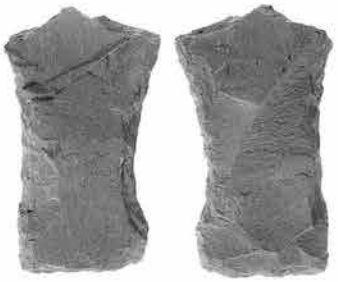
889



890

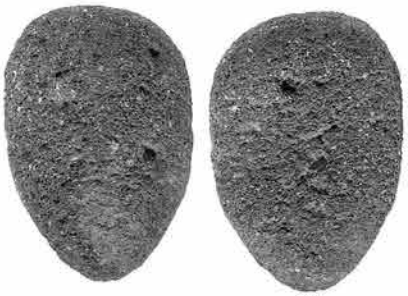


891



892

893



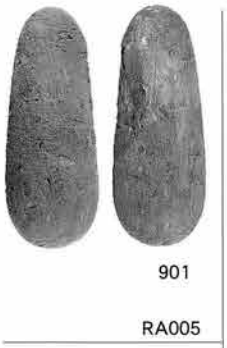
894

895

896

897

写真図版120　遺構外出土礫石器（８）

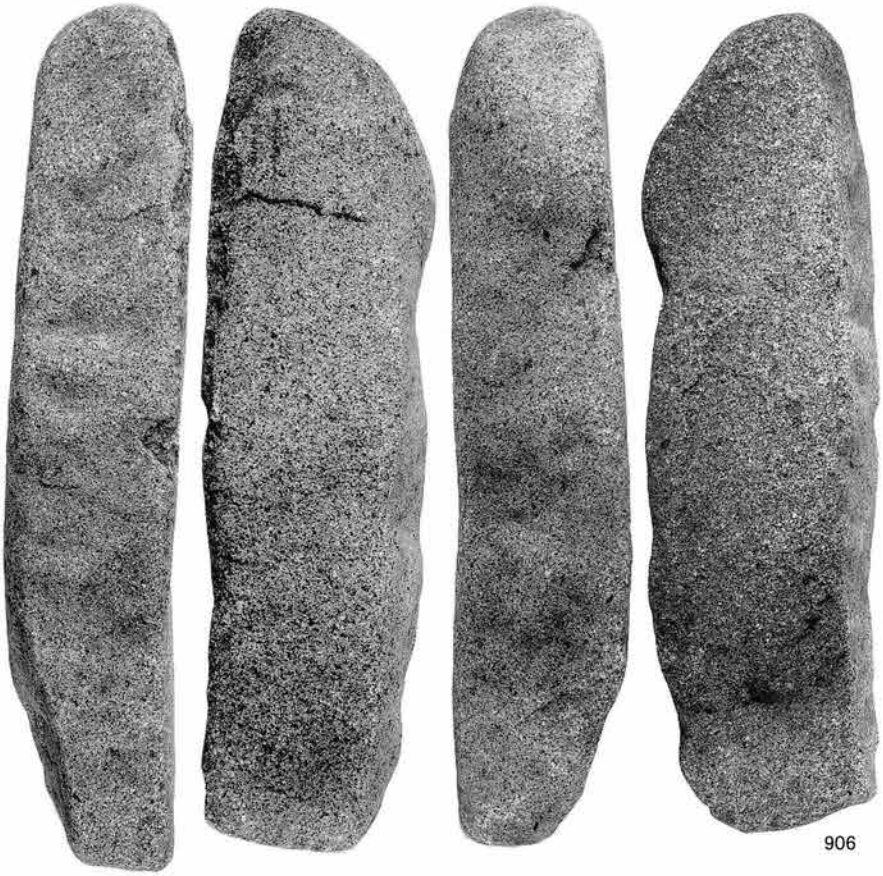


901

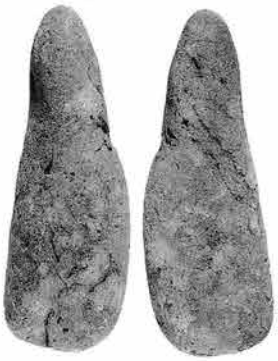
RA005

602

RA007



906



903

905

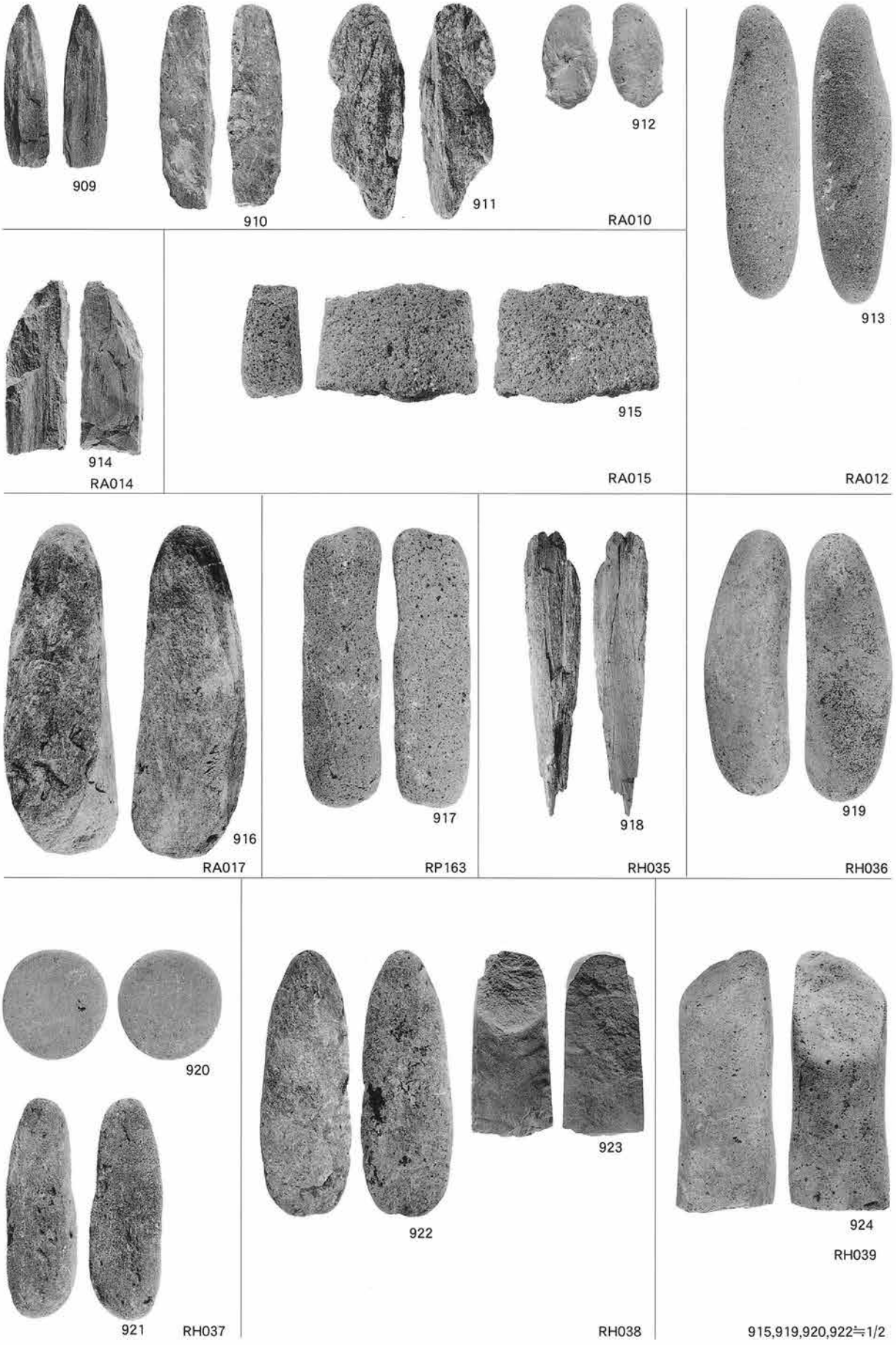
907

904

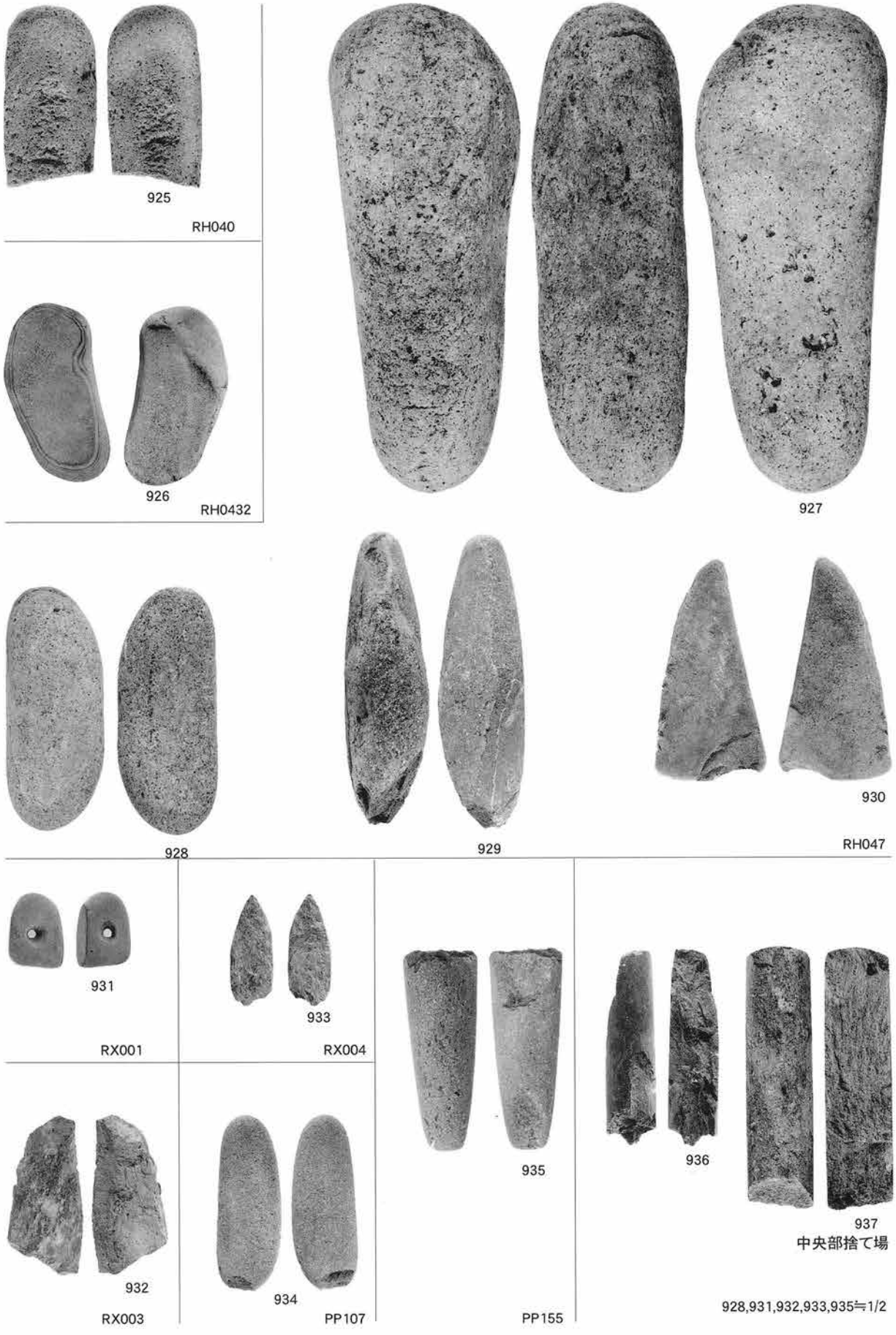
908

906,907≒1/4　908≒1/2

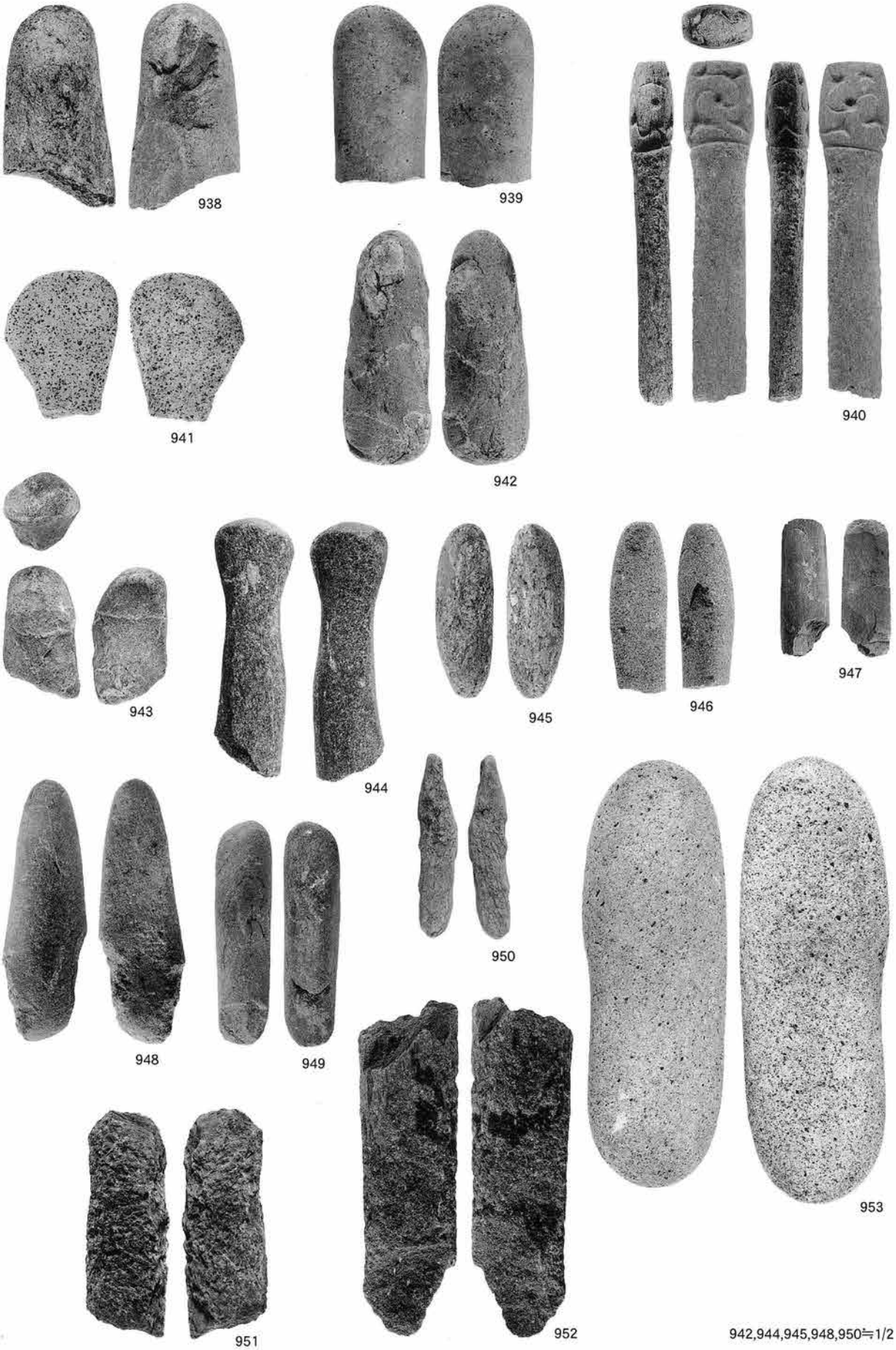
写真図版121　遺構内出土石製品（1）



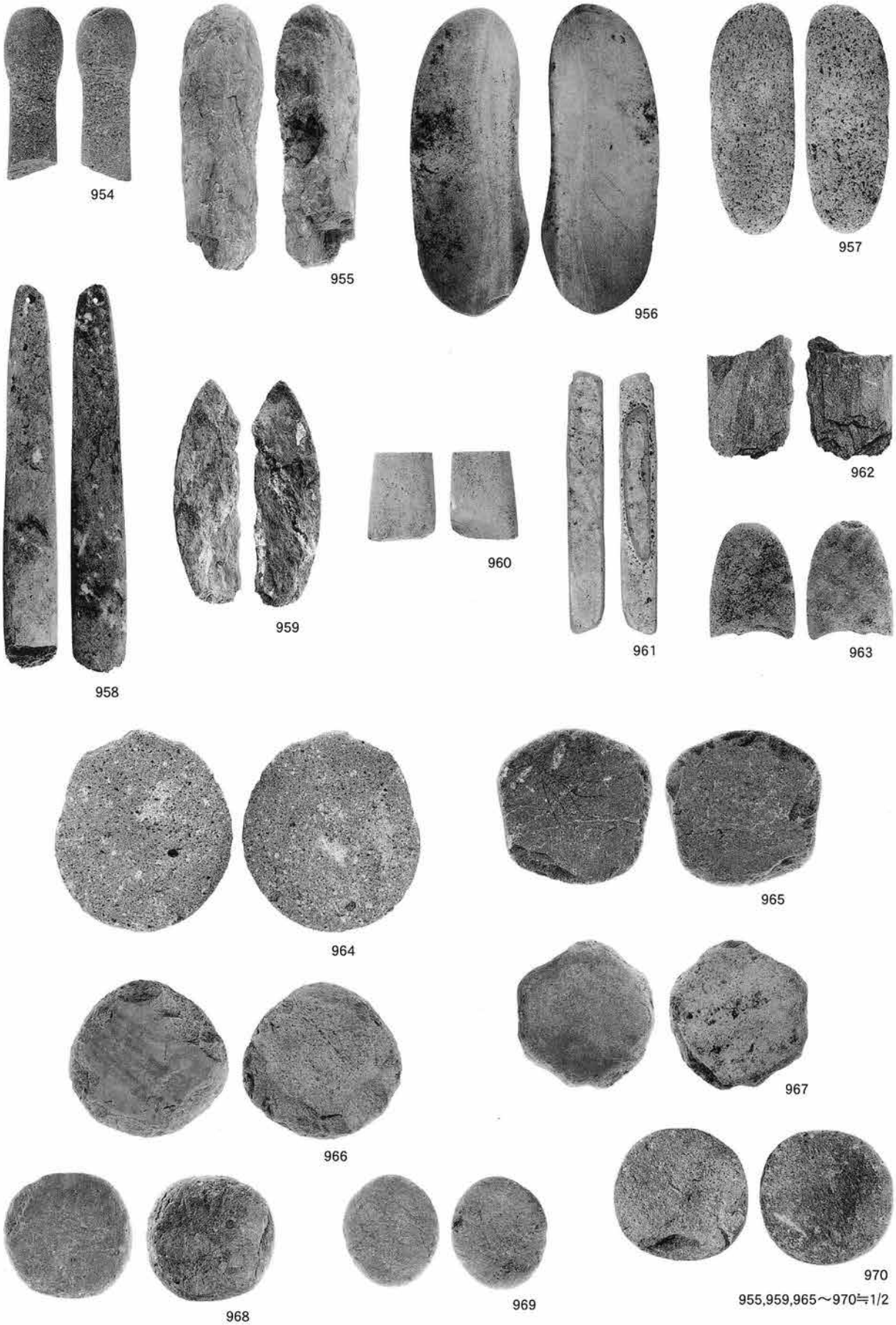
写真図版122　遺構内出土石製品（２）



写真図版123　遺構内出土石製品（3）・中央部捨て場出土石製品

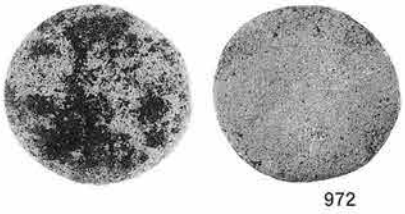


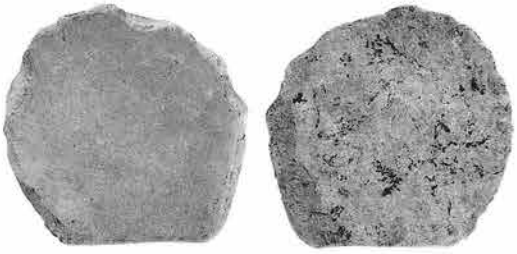
写真図版124　遺構外出土石製品（1）



写真図版125　遺構外出土石製品（２）

971


972


973

974

975

976

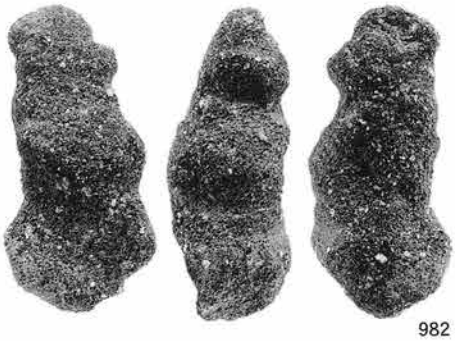
977

978

979

980

981


982

983

971～974,980,981,982≒1/2

写真図版126　遺構外出土石製品（3）

報告書抄録

ふりがな	かわめえーいせきだいろくじはっくつちょうさほうこくしょ
書名	川目A遺跡第6次発掘調査報告書
副書名	一般国道106号都南川目道路事業関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第525集
編著者名	星　雅之・菅野紀子
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　TEL（019）638－9001
発行年月日	2009年2月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
川目A遺跡 第6次	盛岡市川目第5地割51ほか	03201	YKA-07-06	39度 40分 10秒	141度 13分 00秒	2007.04.10 ～ 2007.11.29	11,472m²	一般国道106号都南川目道路建設に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
川目A遺跡 第6次	集落	縄文時代 弥生時代 古代 中世 近世	竪穴住居跡　15棟 掘立柱建物跡4棟 土坑　61基 竪穴建物跡　2棟 炉跡・焼土　10基 集石・立石　19基 埋設土器　2基 土取り穴　7箇所 柱穴状土坑　402個 捨て場　1箇所	縄文・弥生土器大コンテナ92箱 土師器3点 須恵器1点 陶磁器10点 石器中コンテナ61箱 石製品19箱 琥珀3点 鉄製品6点 古銭13枚	縄文時代早期・前・中期の集落跡、縄文時代前期後葉の捨て場、縄文時代の粘土採掘を意図した土取り穴の検出、中近世の掘立柱建物跡、竪穴建物跡

要約	遺跡は、北上川の支流、簗川左岸の河岸段丘上に立地する。6次調査区では、調査区西部・南西部・中央部・東部に区分して調査を行った。西部では、縄文時代中期末葉を中心とした集落遺跡であることが確認され、特記事項として、粘土採掘を意図した土取り穴の検出が挙げられる。南西部では、縄文時代早～前期の集落跡を確認し、中央部では縄文時代前期後葉の捨て場1箇所を確認した。東部では、中・近世と考えられる竪穴建物跡や掘立柱建物跡、縄文時代後期の集石などを確認した。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第525集

川目A遺跡第6次発掘調査報告書

一般国道106号都南川目道路事業関連遺跡発掘調査

印　刷　平成21年2月23日

発　行　平成21年2月27日

編　集　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話（019）638－9001

発　行　国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
〒020-0066　岩手県盛岡市上田四丁目2－2
電話（019）624－3131
㈶岩手県文化振興事業団
〒020-0023　岩手県盛岡市内丸13番1号
電話（019）654－2235

印　刷　永代印刷株式会社
〒020-0811　岩手県盛岡市川目町23番10号
電話（019）623-0111

©（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2009